

京都府遺跡調査報告書

第 23 冊

瓦谷古墳群

1 9 9 7

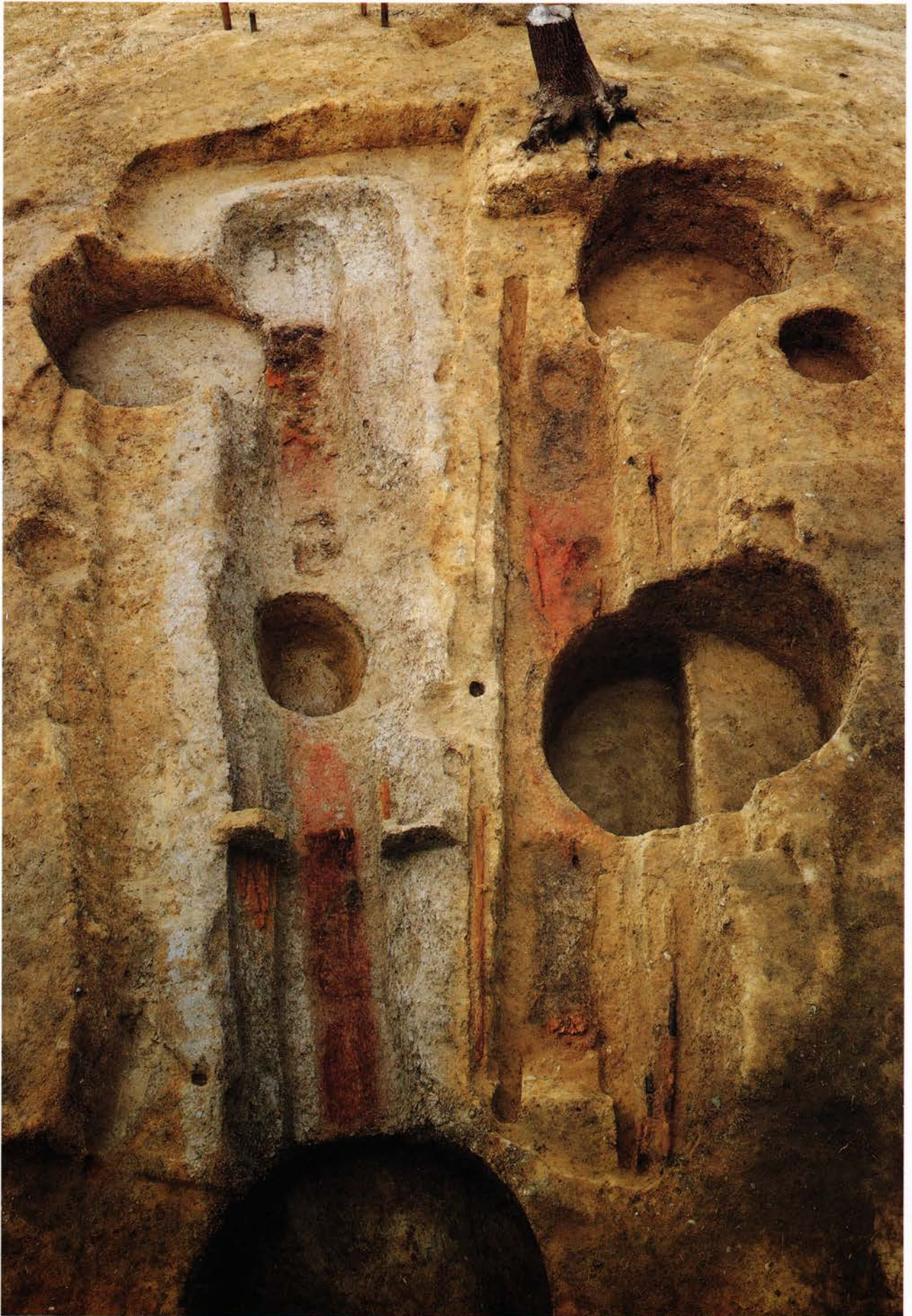
財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター



(1)調査地全景(南東から)



(2)調査地全景(上が西)



1号墳 主体部全景(南から)



(1) 1号墳 主体部全景(西から)



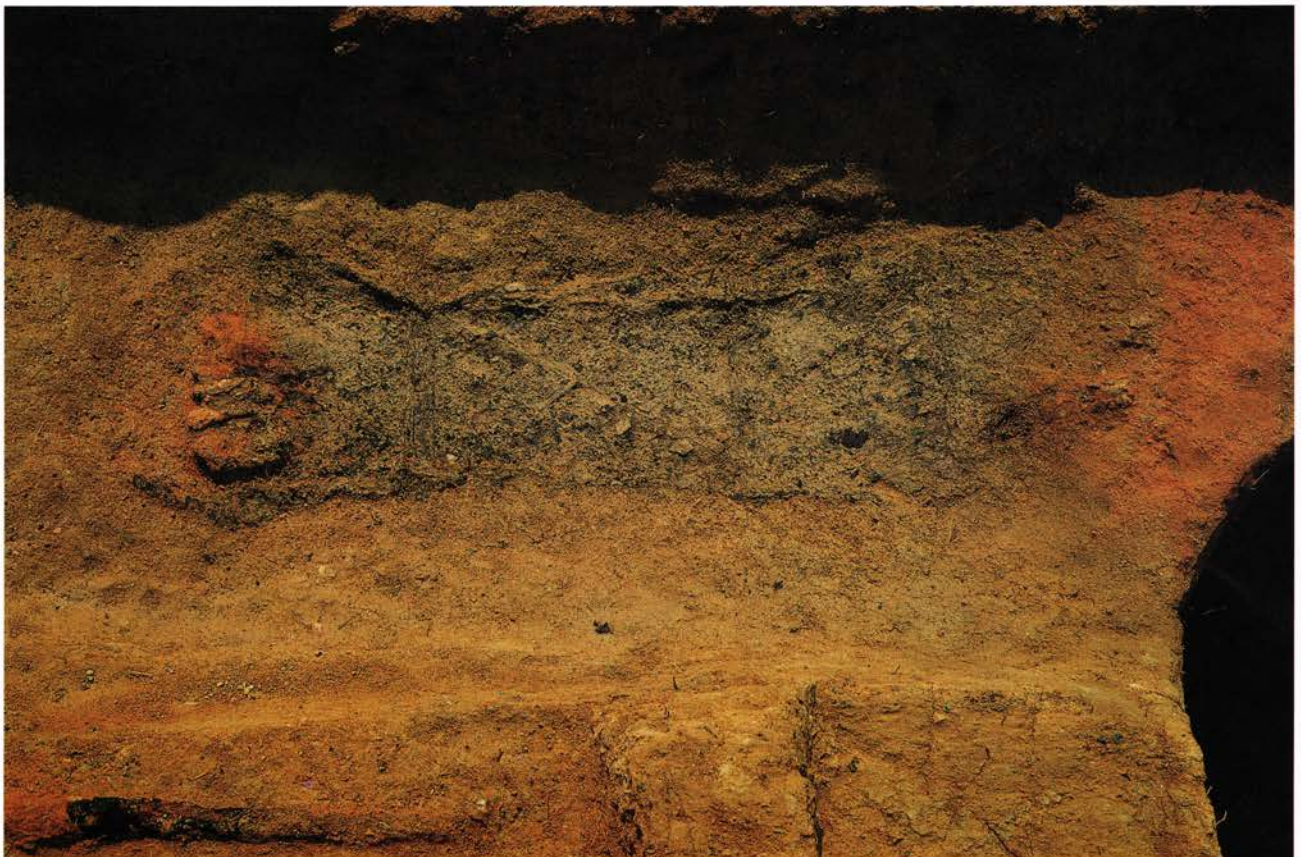
(2) 1号墳 第1主体 鋤出土状況
(上が東)



(3) 1号墳 第1主体(棺内陥没土
除去段階、南から)



(1) 1号墳 主体部南半部 遺物出土状況(南から)



(2) 1号墳 第2主体 革製漆塗り靴出土状況(東から)



(1) 1号墳 第2主体 北半部状況
(銅鏡・有機質地漆塗り製品出土状況、東から)



(2) 4号墳 全景(北から)



(1) 1号墳 第2主体 銅鏡(獸首形鏡)



(2) 1号墳 主体部 鏃形石製品・銅鏃



1号墳 第2主体 革製漆塗り鞆



出土遺物 埴輪

序

わたくしどもの京都府埋蔵文化財調査研究センターは、各種公共事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査事業、普及啓発・調査研究事業を主たる業務として、昭和56年に発足し、平成9年3月で満16周年となる公益法人であります。

上に記した主たる業務のうちの、発掘調査の成果については、『京都府遺跡調査概報』と本書を一例とする『京都府遺跡調査報告書』を刊行しており、調査研究の一端は『京都府埋蔵文化財論集』第1～3集、『京都府埋蔵文化財情報』等により広く一般に公表してきたところであります。

今回刊行のはこびとなった本書は、報告書としては23冊目にあたるもので、昭和61年度から平成5年度まで計7次にわたって発掘調査された瓦谷古墳群・瓦谷遺跡に関する調査成果を一冊にまとめたものです。むろん、各年度の調査成果の概要については、逐次『京都府遺跡調査概報』に収録・報告されています。前方後円墳、小方墳、埴輪棺、木棺墓などが同一丘陵上に同居する、あたかも古墳時代の各種のお墓のデパートのような様相を呈していることが、調査を経るごとに明らかとなってきました。

当センターでは、遺跡の重要性にかんがみ、報告書として調査成果をまとめるべきであるとの見地に立ち、原因者である住宅・都市整備公団のご了解を得て刊行の運びとなったものです。関係各位の深いご理解とご協力に対し、この場をかりて厚くお礼申し上げます次第であります。

本書は、調査を担当した当センターの若手職員の、学問的情熱に裏打ちされた、昼夜を分かたぬ数年に及ぶ努力の甲斐あって、ここにこのような形で結実させることができました。彼らの労苦をねぎらうとともに、本書が京都府のみならず、わが国の古墳研究の進展に大きく寄与することを心から願ってやみません。

平成9年3月

(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター
理事長 樋口 隆康

例 言

1. 本書は、京都府相楽郡木津町大字市坂小字瓦谷に所在する瓦谷古墳群の発掘調査報告書であり、木津地区所在遺跡の調査報告書としては『上人ヶ平遺跡発掘調査報告書』に続く第2集である。
2. 瓦谷古墳群は、住宅・都市整備公団関西支社関西文化学術研究都市整備局の依頼を受けて実施したもので、その現地調査期間は、一部中断期間を含めて昭和61年度から平成5年度までの7か年を要した。
3. 現地調査及び本報告書にかかる経費は、住宅・都市整備公団関西支社関西文化学術研究都市整備局が負担した。
4. 本書に掲載した遺構図は第6座標系を用い、方位はすべて座標北をさす。
5. 写真撮影は、遺構を各年度の調査担当者と一部を調査第1課田中 彰が、遺物写真は田中彰が行った。また、航空写真は(株)アジア航測、国際航業、パスコ、スカイサーベイが撮影した。
6. 本報告書の作成は、各年度担当者の協力のもとに、調査第2課石井清司・有井広幸・伊賀高弘・筒井崇史・森島康雄が行い、編集は、調査第1課土橋 誠の協力のもと石井・有井が行った。
7. 本文中の「bt」は、調査トレンチの所在する番地を示した記号である。
8. 遺物番号は、土器・埴輪は頭文字を付けていないが、金属器はRM、鏃形石製品はRQ、有機質製品はRUを頭文字に付けて表示した。
9. 鉄器のX線写真は、奈良国立文化財研究所の協力のもと、京都府立山城郷土資料館橋本清一氏が撮影した。
10. 本書に掲載した遺物・写真・図面などは当分の間、(財)京都府埋蔵文化財調査研究センターが保管している。

本文目次

第1章	序説	1
第1節	市坂地区の調査	1
第2節	周辺環境	2
第3節	調査の経過	5
第2章	古墳時代の遺構	10
第1節	遺構の種類とその分布	10
第2節	古墳時代の遺構	12
第3章	古墳時代の遺物	48
第1節	1号墳の副葬品	48
第2節	2号墳及び埴輪棺出土の遺物	76
第3節	埴輪及び土器	77
第4章	古墳時代以外の遺構・遺物	112
第1節	古墳時代以前の遺構・遺物	112
第2節	古墳時代以降の遺構・遺物	113
第5章	考察	120
第1節	瓦谷古墳群の調査成果	120
第2節	瓦谷1号墳について	121
第3節	古墳祭祀における靱の役割と性格について	140
第4節	瓦谷古墳群出土の円筒埴輪について	146
第5節	古墳群と埴輪棺について	161
おわりに		166

挿 図 目 次

第1章	序説	
第2節	周辺の環境	
第1図	調査地位置図-----	4
第3節	調査の経過	
第2図	年度別トレンチ配置図-----	6
第3図	瓦谷古墳群周辺遺跡図-----	7
第2章	古墳時代の遺構	
第1節	遺構の種類とその分布	
第4図	瓦谷古墳群土層柱状図-----	10
第5図	瓦谷古墳群遺構配置図(全体図)-----	12
第2節	古墳時代の遺構	
第6図	瓦谷1号墳墳丘測量図-----	14
第7図	瓦谷1号墳墳丘東西断面図(東半部)-----	15
第8図	瓦谷1号墳墳丘東西断面図(西半部)-----	16
第9図	瓦谷1号墳墳丘南北断面図(北半部)-----	17
第10図	瓦谷1号墳くびれ部・前方部断面図-----	18
第11図	瓦谷1号墳墳丘裾ピット列実測図-----	19
第12図	瓦谷1号墳主体部平面図(1)-----	22
第13図	瓦谷1号墳墳頂部断面図(内部施設横断面図)-----	23
第14図	瓦谷1号墳墳頂部断面図(第1主体完掘段階 縦断面図)-----	24
第15図	瓦谷1号墳第1主体遺物出土状況図(南端部)-----	25
第16図	瓦谷1号墳主体部平面図(2)-----	27
第17図	瓦谷1号墳第2主体北副室有機質地漆塗り短甲・草摺出土状況図-----	29
第18図	瓦谷1号墳第2主体遺物出土状況図(中央部)-----	30
第19図	瓦谷1号墳第2主体棺内北副室竪櫛出土状況平面図-----	31
第20図	瓦谷1号墳第2主体遺物出土状況図-----	32
第21図	瓦谷2号墳実測図-----	33
第22図	瓦谷2号墳西辺溝遺物出土状況図-----	34
第23図	瓦谷9号墳実測図-----	36

第3章 古墳時代の遺物	
第1節 1号墳の副葬品	
第24図	瓦谷1号墳第1主体小札革綴冑(小札)実測図-----50
第25図	瓦谷1号墳第1主体小札革綴冑(腰卷板)実測図-----51
第26図	瓦谷1号墳第1主体小札革綴冑復原実測図・革綴模式図-----52
第27図	瓦谷1号墳第1主体方形板革綴短甲実測図(1)-----54
第28図	瓦谷1号墳第1主体方形板革綴短甲実測図(2)-----55
第29図	瓦谷1号墳第1主体方形板革綴短甲実測図(3)-----56
第30図	瓦谷1号墳第1主体方形板革綴短甲展開図-----57
第31図	瓦谷1号墳第1主体方形板革綴短甲復原実測図-----57
第32図	瓦谷1号墳第1主体鉄鏃実測図-----59
第33図	瓦谷1号墳第1主体鉄鏃・鏃形石製品実測図-----60
第34図	瓦谷1号墳第1主体鉄製武器実測図-----62
第35図	瓦谷1号墳第1主体鉄製工具・漁具実測図-----64
第36図	瓦谷1号墳第2主体銅鏡実測図・拓影-----66
第37図	瓦谷1号墳第2主体ガラス小玉・管玉・白玉(8号埴輪棺)・ 鉄斧(22号埴輪棺)実測図-----67
第38図	瓦谷1号墳第2主体鉄鏃・銅鏃実測図-----69
第39図	瓦谷1号墳第2主体鉄製武器実測図-----71
第40図	瓦谷1号墳第2主体革製漆塗り鞆実測図-----74
第41図	瓦谷1号墳第2主体革製漆塗り鞆漆膜断面図-----75
第3節 埴輪及び土器	
第42図	蓋形埴輪各部名称図-----78
第43図	蓋形埴輪立ち飾り部文様比較図-----79
第44図	円筒埴輪各部名称図-----92
第45図	盾形埴輪(鋸歯文タイプ)復原図-----103
第46図	24号埴輪棺出土家形埴輪復原図-----109
第47図	古墳時代遺物実測図-----111
第4章 古墳時代以外の遺構・遺物	
第1節 古墳時代以前の遺構・遺物	
第48図	縄文時代遺物実測図-----112
第2節 古墳時代以降の遺構・遺物	
第49図	奈良時代の遺構に伴う遺物実測図-----116
第50図	中世の遺構に伴う遺物実測図-----118
第51図	遺構に伴わない遺物実測図-----119

第5章	考察	
第2節	瓦谷1号墳について	
第52図	蓋形埴輪復原図-----	134
第53図	盾形埴輪(直弧文タイプ)復原図-----	137
第54図	木津川流域前期古墳分布図-----	138
第3節	古墳祭祀における靫の役割と性格について	
第55図	靫形埴輪配置状況図-----	143
第56図	靫及び靫形埴輪相関図-----	145
第4節	瓦谷古墳群出土の円筒埴輪について	
第57図	円筒埴輪属性分類図-----	148
第58図	形態分類図-----	148
第59図	口縁部分類図-----	150
第60図	突帯間隔分類図-----	151
第61図	スカシ穴分類図-----	152
第62図	スカシ穴穿孔位置分類図-----	152
第63図	瓦谷古墳群出土円筒埴輪分類図-----	155
第64図	各地出土円筒埴輪実測図(1)-----	157
第65図	各地出土円筒埴輪実測図(2)-----	159
第66図	瓦谷古墳群・各地出土円筒埴輪変遷図-----	160
第5節	古墳群と埴輪棺について	
第67図	埴輪棺頭位推定模式図-----	163
第68図	瓦谷古墳群の古墳及び埴輪棺模式図-----	164

付 表 目 次

第1章	序説	
第3節	調査の経過	
付表1	年度別調査組織一覧表-----	8
第2章	古墳時代の遺構	
第2節	古墳時代の遺構	
付表2	古墳群一覧表-----	13
付表3	埴輪棺一覧表-----	38
第3章	古墳時代の遺物	
第1節	1号墳の副葬品	
付表4	1号墳内部主体副葬遺物出土一覧表-----	49
付表5	瓦谷1号墳鉄鍬一覧表-----	61
第3節	埴輪及び土器	
付表6	埴輪棺転用円筒埴輪一覧表-----	93
第5章	考察	
第2節	瓦谷1号墳について	
付表7	小札革綴冑一覧表-----	127
付表8	方形板革綴短甲一覧表-----	129
第3節	古墳祭祀における鞆の役割と性格について	
付表9	出土鞆一覧表-----	141
第4節	瓦谷古墳群出土の円筒埴輪について	
付表10	円筒埴輪属性分類表-----	149
第5節	古墳群と埴輪棺について	
付表11	埴輪棺一覧表-----	162

図 版 目 次

- 図版第1 瓦谷古墳群・瓦谷遺跡全体図
- 図版第2 瓦谷古墳群遺構配置図(分割図)(1)
- 図版第3 瓦谷古墳群遺構配置図(分割図)(2)
- 図版第4 瓦谷古墳群遺構配置図(分割図)(3)
- 図版第5 瓦谷古墳群遺構配置図(分割図)(4)
- 図版第6 瓦谷3号墳実測図
- 図版第7 瓦谷4号墳実測図
- 図版第8 瓦谷5号墳実測図
- 図版第9 瓦谷6・7号墳・S B03実測図
- 図版第10 瓦谷8号墳実測図、S B01・02実測図
- 図版第11 瓦谷10号墳実測図
- 図版第12 埴輪棺実測図(1) 1・2・4号埴輪棺
- 図版第13 埴輪棺実測図(2) 3・5・6号埴輪棺
- 図版第14 埴輪棺実測図(3) 8号埴輪棺
- 図版第15 埴輪棺実測図(4) 9・10・11号埴輪棺
- 図版第16 埴輪棺実測図(5) 12・15・17号埴輪棺
- 図版第17 埴輪棺実測図(6) 13・14・16号埴輪棺
- 図版第18 埴輪棺実測図(7) 18・21・23号埴輪棺
- 図版第19 埴輪棺実測図(8) 19・20・22号埴輪棺
- 図版第20 埴輪棺実測図(9) 24号埴輪棺
- 図版第21 埴輪棺実測図(10) 26号埴輪棺
- 図版第22 木棺墓・25号埴輪棺・S K04実測図
- 図版第23 S K05~12実測図
- 図版第24 S X02・竪穴式住居跡実測図
- 図版第25 形象埴輪実測図(1) 蓋形埴輪
- 図版第26 形象埴輪実測図(2) 蓋形埴輪
- 図版第27 形象埴輪実測図(3) 蓋形埴輪
- 図版第28 形象埴輪実測図(4) 蓋形埴輪
- 図版第29 形象埴輪実測図(5) 蓋形埴輪ほか
- 図版第30 形象埴輪実測図(6) 盾形埴輪

- 図版第31 形象埴輪実測図(7) 家形埴輪ほか
- 図版第32 形象埴輪実測図(8) 家形埴輪
- 図版第33 埴輪実測図(1) 円筒埴輪・壺形埴輪ほか
- 図版第34 埴輪実測図(2) 1・2号埴輪棺
- 図版第35 埴輪実測図(3) 3・4・5号埴輪棺
- 図版第36 埴輪実測図(4) 5・6・7号埴輪棺
- 図版第37 埴輪実測図(5) 5・8・9号埴輪棺
- 図版第38 埴輪実測図(6) 8号埴輪棺
- 図版第39 埴輪実測図(7) 11号埴輪棺
- 図版第40 埴輪実測図(8) 10・12号埴輪棺
- 図版第41 埴輪実測図(9) 10・12~14号埴輪棺
- 図版第42 埴輪実測図(10) 16・18号埴輪棺
- 図版第43 埴輪実測図(11) 18号埴輪棺
- 図版第44 埴輪実測図(12) 15・17・19号埴輪棺
- 図版第45 埴輪実測図(13) 19・22号埴輪棺
- 図版第46 埴輪実測図(14) 22号埴輪棺
- 図版第47 埴輪実測図(15) 20・21・23号埴輪棺
- 図版第48 埴輪実測図(16) 24号埴輪棺
- 図版第49 埴輪実測図(17) 24・25号埴輪棺
- 図版第50 埴輪実測図(18) 24号埴輪棺
- 図版第51 瓦谷遺跡26号埴輪棺埴輪実測図・出土遺物実測図
- 図版第52 古墳時代以外の遺構配置図、S K01・13、S X01実測図
- 図版第53 S X04~06実測図
- 図版第54 S K14~19実測図
- 図版第55 S K20~25実測図
- 図版第56 S D02・03実測図
- 図版第57 石製品実測図
- 図版第58 (1)調査地遠景(北西から) (2)調査地遠景(北東から)
- 図版第59 (1)瓦谷古墳群遠景(南西から) (2)瓦谷1号墳後円部調査前全景(西南西から)
(3)瓦谷1号墳後円部調査前風景(北東から)
- 図版第60 調査地全景(空撮写真、上が北)
- 図版第61 瓦谷1号墳全景(空撮写真、上が北)
- 図版第62 調査地全景(空撮写真、上が西)
- 図版第63 (1)瓦谷1号墳全景(南から) (2)瓦谷1号墳全景(西から)
(3)瓦谷1号墳後円部全景(北から)

- 図版第64 (1)瓦谷1号墳後円部南北墳丘セクション断面(北西から)
(2)瓦谷1号墳後円部東西墳丘セクション断面(西半部、南西から)
(3)瓦谷1号墳後円部東西墳丘セクション断面(東半部、北東から)
- 図版第65 (1)瓦谷1号墳後円部墳丘裾ピット列・溝(西から)
(2)瓦谷1号墳後円部墳丘裾ピット列・溝(北から)
(3)瓦谷1号墳後円部墳丘裾ピット(Pit-1)・溝(東から)
- 図版第66 (1)瓦谷1号墳主体部調査状況(盗掘坑掘削段階、南から)
(2)瓦谷1号墳主体部調査状況(第1主体被覆粘土上面掘削段階、南から)
(3)瓦谷1号墳主体部調査状況(第1主体被覆粘土上面1段下げ段階、南西から)
- 図版第67 (1)瓦谷1号墳主体部調査状況(第1主体北小口部被覆粘土検出状況、東北東から)
(2)瓦谷1号墳主体部調査状況(第1主体被覆粘土検出状況、北北東から)
(3)瓦谷1号墳主体部調査状況(第1主体棺内陥没土除去段階、南から)
- 図版第68 (1)瓦谷1号墳主体部調査状況(第1主体棺内陥没土除去段階、南から)
(2)瓦谷1号墳主体部調査状況(第1主体・第2主体完掘段階、南から)
(3)瓦谷1号墳主体部調査状況(第1主体・第2主体完掘段階、西から)
- 図版第69 (1)瓦谷1号墳第1主体北小口部半掘状況(南西から)
(2)瓦谷1号墳第1主体北小口部縦断面(小口板の状況、西から)
(3)瓦谷1号墳第1主体北小口部棺床部分断ち割り状況(南西から)
- 図版第70 (1)瓦谷1号墳第1主体断ち割り横断面(北から)
(2)瓦谷1号墳墳丘断ち割り断面(主体部より東側の墳丘盛り土部分、北西から)
(3)瓦谷1号墳墳丘断ち割り断面(主体部より西側の墳丘盛り土部分、北東から)
- 図版第71 (1)瓦谷1号墳第1主体北小口部完掘状況(南から)
(2)瓦谷1号墳第1主体棺内北端の鉄製甲冑ほか出土状況(上が東)
(3)瓦谷1号墳第1主体棺内北端の鉄製甲冑ほか出土状況(上が東)
- 図版第72 (1)瓦谷1号墳第1主体棺内南半部の遺物出土状況(北から)
(2)瓦谷1号墳第1主体・第2主体南半部の遺物出土状況(南から)
(3)瓦谷1号墳第1主体棺内南半部の鏃群出土状況(上が北)
- 図版第73 (1)瓦谷1号墳第1主体南半部の遺物出土状況(上が北)
(2)瓦谷1号墳第1主体南半部の遺物出土状況(上が西)
(3)瓦谷1号墳第1主体西長側側鉄槍出土状況(上が西)
- 図版第74 (1)瓦谷1号墳第2主体全景(棺底面まで掘削した段階、南から)
(2)瓦谷1号墳第2主体遺物出土状況(北半部、南から)
(3)瓦谷1号墳第2主体遺物出土状況(南半部、南から)
- 図版第75 (1)瓦谷1号墳第2主体全景(完掘段階、南から)
(2)瓦谷1号墳第2主体南小口の状況(南から)

- (3) 瓦谷 1 号墳第 2 主体棺内陥没土断面(横断面、北から)
- 図版第76 (1) 瓦谷 1 号墳第 2 主体北副室遺物出土状況(東から)
 (2) 瓦谷 1 号墳第 2 主体主室銅鏡出土状況(東から)
 (3) 瓦谷 1 号墳第 2 主体主室人骨(頭骨の一部)出土状況(上が北)
- 図版第77 (1) 瓦谷 1 号墳第 2 主体南半部遺物出土状況(西から)
 (2) 瓦谷 1 号墳第 2 主体南副室鞞口縁部付近出土状況(上が南)
 (3) 瓦谷 1 号墳第 2 主体南副室鞞内収納の鏃類出土状況(銅鏃が出土する面、上が南)
- 図版第78 (1) 瓦谷 1 号墳第 2 主体棺外遺物出土状況(鉄槍の穂先と柄、上が西)
 (2) 瓦谷 1 号墳第 2 主体棺外遺物出土状況(鉄槍・鉄矛、上が西)
 (3) 瓦谷 1 号墳第 2 主体棺外遺物出土状況(奥が鉄矛、手前が鉄槍、上が西)
- 図版第79 (1) 瓦谷 2 号墳・ 2 ～ 4 号埴輪棺検出状況(北から)
 (2) 瓦谷 2 号墳全景・ 1 ～ 4 号埴輪棺検出状況(東から)
 (3) 瓦谷 2 号墳・ 1 ～ 4 号埴輪棺検出状況(南東から)
- 図版第80 (1) 瓦谷 2 号墳全景・ 1 ～ 4 号埴輪棺検出状況(東南東から)
 (2) 瓦谷 2 号墳全景・ 1 ～ 3 号埴輪棺検出状況(西から)
 (3) 瓦谷 2 号墳全景(北から)
- 図版第81 (1) 瓦谷 2 号墳西辺周溝・ 2 ～ 3 号埴輪棺検出状況(北東から)
 (2) 瓦谷 2 号墳西辺周溝深掘り部遺物出土状況(東から)
 (3) 瓦谷 2 号墳西辺周溝完掘状況(南から)
- 図版第82 (1) 瓦谷 2 号墳中心埋葬施設墓壙内埋土の状況(南東から)
 (2) 瓦谷 2 号墳中心埋葬施設全景(北から)
 (3) 瓦谷 2 号墳中心埋葬施設全景(東から)
- 図版第83 (1) 瓦谷 3 号墳完掘状況(南から) (2) 瓦谷 5 号墳完掘状況(北から)
 (3) 瓦谷 5 号墳北東コーナー遺物出土状況(西から)
- 図版第84 (1) 瓦谷 4 ・ 6 ・ 7 号墳完掘状況(西から) (2) 瓦谷 4 号墳全景(西から)
 (3) 瓦谷 4 号墳西辺周溝内遺物出土状況(東から)
- 図版第85 (1) 瓦谷 4 号墳東辺周溝内遺物出土状況(西から)
 (2) 瓦谷 6 号墳完掘状況(北東から)
 (3) 瓦谷 6 号墳南東辺周溝内遺物出土状況(北東から)
- 図版第86 (1) 瓦谷 6 ・ 7 ・ 8 号墳完掘状況(上が西) (2) 瓦谷 8 号墳完掘状況(東から)
 (3) 瓦谷 8 号墳周溝内遺物出土状況(北から)
- 図版第87 (1) 瓦谷 9 号墳完掘状況(東から)
 (2) 瓦谷 9 号墳西辺周溝内 S X03 出土状況(東から)
 (3) 瓦谷 10 号墳完掘状況(上が北)
- 図版第88 (1) 1 号埴輪棺検出状況(南小口閉塞埴輪を残した段階、東から)

- (2) 1号埴輪棺全景(東から) (3) 1号埴輪棺全景(北から)
- 図版第89 (1) 2号埴輪棺検出状況(北半部、東から) (2) 2号埴輪棺全景(北から)
(3) 2号埴輪棺検出状況(被覆破片・閉塞埴輪を除去した段階、北から)
- 図版第90 (1) 3号埴輪棺全景(東から) (2) 3号埴輪棺全景(北から)
(3) 3号埴輪棺全景(南から)
- 図版第91 (1) 4号埴輪棺全景(東から) (2) 4号埴輪棺全景(南から)
(3) 4号埴輪棺南小口の閉塞痕跡(線で明示してある土色の変化、上が北)
- 図版第92 (1) S X 02・4号埴輪棺検出状況(北西から) (2) S X 02全景(西北西から)
(3) S X 02検出状況(北北東から)
- 図版第93 (1) 5号埴輪棺全景(北東から)
(2) 5号埴輪棺検出状況(南半部の攪乱埴輪除去段階、北東から)
(3) 5号埴輪棺検出状況(南半部の埴輪を除去した段階、北西から)
- 図版第94 (1) 6号埴輪棺全景(南東から) (2) 6号埴輪棺全景(南西から)
(3) 6号埴輪棺棺本体全景(上が南東)
- 図版第95 (1) 7号埴輪棺全景(北西から) (2) 7号埴輪棺側面状況(北東から)
(3) 7号埴輪棺墓壇内埋土堆積状況(北西から)
- 図版第96 (1) 8号埴輪棺検出状況(北から)
(2) 8号埴輪棺南半部埴輪出土状況(東から)
(3) 8号埴輪棺棺底検出状況(東から)
- 図版第97 (1) 10号埴輪棺検出状況(西から) (2) 10号埴輪棺完掘状況(西から)
(3) 10号埴輪棺北小口状況(北から)
- 図版第98 (1) 9号埴輪棺検出状況(北から) (2) 11号埴輪棺完掘状況(北から)
(3) 13号埴輪棺完掘状況(北から)
- 図版第99 (1) 12号埴輪棺検出状況(北から) (2) 12号埴輪棺完掘状況(北から)
(3) 14号埴輪棺検出状況(東から)
- 図版第100 (1) 16号埴輪棺検出状況(東から) (2) 16号埴輪棺完掘状況(東から)
(3) 16号埴輪棺北小口完掘状況(東から)
- 図版第101 (1) 15号埴輪棺検出状況(南から) (2) 17号埴輪棺検出状況(北から)
(3) 17号埴輪棺完掘状況(西から)
- 図版第102 (1) 18号埴輪棺検出状況(北から) (2) 20号埴輪棺検出状況(西から)
(3) 20号埴輪棺完掘状況(西から)
- 図版第103 (1) 19号埴輪棺検出状況(北から) (2) 21号埴輪棺検出状況(北西から)
(3) 21号埴輪棺完掘状況(南東から)
- 図版第104 (1) 22号埴輪棺検出状況(北東から) (2) 22号埴輪棺完掘状況(東から)
(3) 22号埴輪棺鉄斧出土状況(東から)

- 図版第105 (1)23号埴輪棺検出状況(北から) (2)23号埴輪棺完掘状況(東から)
(3)25号埴輪棺完掘状況(南から)
- 図版第106 (1)24号埴輪棺検出状況(北から) (2)24号埴輪棺掘削状況(東から)
(3)24号埴輪棺完掘状況(北から)
- 図版第107 (1)南調査区遠景(空撮写真、上が北) (2)南調査区全景(空撮写真、上が北)
(3)南調査区遠景(空撮写真、南から)
- 図版第108 (1)26号埴輪棺検出状況(南東から) (2)26号埴輪棺完掘状況(南東から)
(3)26号埴輪棺墓壇内出土鉄鏃(東から)
- 図版第109 (1)木棺墓検出状況(北から) (2)木棺墓内土層堆積状況(東から)
(3)木棺墓棺底検出状況(北から)
- 図版第110 (1)S K04完掘状況(北から) (2)S K06掘削状況(北から)
(3)S K10完掘状況(南から)
- 図版第111 (1)S K09掘削状況(西から) (2)竪穴式住居跡掘削状況(北から)
(3)竪穴式住居跡完掘状況(南から)
- 図版第112 (1)S K13全景(東から) (2)S K13完掘状況(北から)
(3)S K13遺物出土状況(南東から)
- 図版第113 (1)S B01・02・03全景(上が西) (2)S X05掘削状況(北西から)
(3)S X05遺物出土状況(北西から)
- 図版第114 (1)S X04掘削状況(東から) (2)S X04遺物出土状況(東から)
(3)S X04完掘状況(東から)
- 図版第115 (1)S X06掘削状況(東から) (2)S X06遺物出土状況(東から)
(3)S X06完掘状況(東から)
- 図版第116 (1)S K14掘削状況(東から) (2)S K16完掘状況(東から)
(3)S K17掘削状況(北から)
- 図版第117 (1)S K19掘削状況(南東から) (2)S K19完掘状況(西から)
(3)S K21掘削状況(西から)
- 図版第118 (1)S D03東辺北部掘削状況(北から) (2)S D03北辺中央部土層断面(北から)
(3)S D03西辺掘削作業風景(南東から)
- 図版第119 (1)S D03南辺中央部土層堆積状況(東から)
(2)S D03南辺中央部土層堆積状況(西から) (3)S D02・03全景(東から)
- 図版第120 瓦谷1号墳出土遺物(1) 第1主体 小札革綴冑
- 図版第121 瓦谷1号墳出土遺物(2) 第1主体 方形板革綴短甲
- 図版第122 瓦谷1号墳出土遺物(3) 第1主体 方形板革綴短甲
- 図版第123 瓦谷1号墳出土遺物(4) 第1主体 鉄鏃(処理前)
- 図版第124 瓦谷1号墳出土遺物(5) 第1主体 鉄鏃(処理後)

- 図版第125 瓦谷1号墳出土遺物(6) 第1主体 鉄槍・鉄剣(処理前)
- 図版第126 瓦谷1号墳出土遺物(7) 第1主体 鉄槍・鉄剣(処理後)
- 図版第127 (1)瓦谷1号墳出土遺物(8) 主体部 鉄製工具・鉄製漁具
(2)瓦谷1号墳出土遺物(9) 第2主体 銅鏡(獣首形鏡)
- 図版第128 瓦谷1号墳出土遺物(10) 第2主体 鉄鏃(処理前)
- 図版第129 瓦谷1号墳出土遺物(11) 第2主体 鉄鏃・鏃形石製品・銅鏃(処理後)
- 図版第130 (1)瓦谷1号墳出土遺物(12) 第2主体 銅鏃拡大写真(正面、茎部の状況)
(2)瓦谷1号墳出土遺物(13) 第2主体 銅鏃拡大写真(正面、鏃身基部と茎部の境
の状況)
(3)瓦谷1号墳出土遺物(14) 第2主体 銅鏃拡大写真(側面、茎部の状況)
- 図版第131 瓦谷1号墳出土遺物(15) 第2主体 鉄矛・鉄剣・鉄槍(処理前)
- 図版第132 瓦谷1号墳出土遺物(16) 第2主体 鉄刀・鉄槍(処理後)
- 図版第133 瓦谷1号墳出土遺物(17) 第2主体 鉄刀・鉄剣・鉄矛・鉄槍(処理後)
- 図版第134 瓦谷1号墳出土遺物(18) 第2主体 革製漆塗り鞆
- 図版第135 瓦谷1号墳出土遺物(19) 玉類・堅櫛・有機質地漆塗り短甲・有機質地漆塗り草摺
- 図版第136 古墳・埴輪棺出土遺物 埴輪(1) 蓋形埴輪
- 図版第137 古墳・埴輪棺出土遺物 埴輪(2) 蓋形埴輪
- 図版第138 古墳・埴輪棺出土遺物 埴輪(3) 蓋形埴輪
- 図版第139 古墳・埴輪棺出土遺物 埴輪(4) 蓋形埴輪・特殊鱗付埴輪
- 図版第140 古墳・埴輪棺出土遺物 埴輪(5) 盾形埴輪
- 図版第141 古墳・埴輪棺出土遺物 埴輪(6) 家形埴輪・楕円筒埴輪・壺形埴輪
- 図版第142 古墳・埴輪棺出土遺物 埴輪(7) 円筒埴輪
- 図版第143 古墳・埴輪棺出土遺物 埴輪(8) 盾形・円筒埴輪・特殊二重口縁壺
- 図版第144 古墳・埴輪棺出土遺物 埴輪(9) 朝顔形・円筒埴輪
- 図版第145 古墳・埴輪棺出土遺物 埴輪(10) 盾形・円筒埴輪
- 図版第146 古墳・埴輪棺出土遺物 埴輪(11) 朝顔形・円筒埴輪
- 図版第147 古墳・埴輪棺出土遺物 埴輪(12) 盾形・円筒埴輪
- 図版第148 古墳・埴輪棺出土遺物 埴輪(13) 朝顔形・円筒埴輪、鉄斧
- 図版第149 古墳・埴輪棺出土遺物 埴輪(14) ヘラ記号
- 図版第150 古墳・埴輪棺出土遺物 埴輪(15) 家形・盾形埴輪
- 図版第151 古墳・埴輪棺出土遺物 埴輪(16) 円筒・鉢形状の特製埴輪、鉄鏃・刀子
- 図版第152 古墳・埴輪棺出土遺物 土器
- 図版第153 縄文時代出土遺物 土器・石製品
- 図版第154 奈良時代・中世出土遺物 土器・鉄釘・鉄滓
- 図版第155 中世・包含層出土遺物 土器・砥石

第1章 序 説

第1節 市坂地区の調査

京都府の南端、木津町では東部に広がる丘陵地域に関西文化学術研究都市構想が計画された。当調査研究センターは、住宅・都市整備公団の依頼を受けて、昭和59年度からその開発区域内における埋蔵文化財の調査を継続して実施している。この14年間の試掘及び発掘調査では、数多くの注目すべき遺跡を検出し、その一部は関係機関の御助力によって保存されているものもある。今回は、木津地区所在遺跡のうち、整理作業が進んだ「瓦谷古墳群」の調査成果を報告する。

木津地区所在遺跡の調査は、昭和59年度の赤ヶ平遺跡・釜ヶ谷遺跡・上人ヶ平遺跡・市坂1号墳・同第23地点の試掘調査から始まる。釜ヶ谷遺跡は、第1次調査以降、平成6年度の第2次調査・平成7年度の第3次調査で多量の祭祀遺物を含む流路を検出している。上人ヶ平遺跡・市坂1号墳・同第23地点は、『京都府遺跡調査報告書』第15冊で報告したように、数次にわたる発掘調査で古墳群とともに奈良時代の瓦工房跡であることが明らかとなっている。

昭和60年度は、梅谷地区の6か所と市坂地区の1か所で試掘調査を実施し、中でも梅谷地区の中ノ島遺跡では、丘陵部にある梅谷瓦窯に関連した灰原を検出し、梅谷瓦窯が興福寺の創建瓦を焼成した大規模な瓦窯であることが明らかとなった。

昭和61年度は、上人ヶ平遺跡の試掘調査が継続して行われているほかに、瓦谷古墳群の調査が開始された年度であり、後述するように、瓦谷2号墳とその周辺の埴輪棺を検出した。また、瓦谷古墳群が立地する丘陵部のほか、谷部の調査も実施し、多量の土器とともに木器が出土した流路からは、年輪年代測定の好材料となる高野槇の木棺小口板も出土した。

昭和62年度は、上人ヶ平遺跡・瓦谷遺跡・瀬後谷遺跡・西山遺跡・菩提遺跡の5遺跡の調査を行い、各遺跡とも貴重な遺構・遺物がみつかった。上人ヶ平遺跡では、上人ヶ平5号墳を中心に3基の方墳を検出したほか、その周溝内からは形象埴輪を含む多量の埴輪が出土した。瓦谷遺跡では、谷部の調査を主に行い、74btで唐櫃を転用した奈良時代の井戸を検出し、上人ヶ平遺跡の瓦工房に関連した井戸と推定されている。瀬後谷遺跡では、窯に関連した灰原を検出し、その周辺からは興福寺式の軒丸瓦のほか、瓦塔も出土し、この試掘調査以降5次にわたって調査が続けられる。西山遺跡も瀬後谷遺跡と同様、試掘調査であり、奈良時代の甕棺墓の検出を契機として、この年度以降、4次にわたって発掘調査が続けられる。

昭和63年度は、上人ヶ平遺跡の継続調査で新たに埴輪窯を検出したほか、瓦谷遺跡でも谷部の試掘調査を継続して実施した。また、丘陵部にある幣羅坂古墳群の試掘調査を行い、幣羅坂古墳1基のみが古墳であることが明らかとなった。

平成元年度は、上人ヶ平遺跡の全容が明らかとなった年度で、他の調査としては瓦谷1号墳の

裾部で規模を確定するための試掘調査を行った。また、瀬後谷遺跡では前年度の調査で窯の存在が予想されたため、奈良国立文化財研究所の西村 康の協力で丘陵斜面での磁気探査調査を行った。

平成2年度は、瓦谷1号墳の調査を行い、墳頂部中央で2基の埋葬施設のほか、墳丘裾部で埴輪棺3基を検出した。また、瓦谷遺跡48btの谷部では、昭和61年度の試掘調査でみつかった木棺小口板が出土した流路の全容を明らかにするために約4,500㎡の調査を実施したほか、瀬後谷遺跡では瓦窯1基を検出した。

平成3年度は、瀬後谷遺跡の最終年度で、新たに1基の瓦窯と、灰原から平城京瓦編年のI期の瓦とともに須恵器や瓦塔が出土した。西山遺跡では、古墳の周溝2条と掘立柱建物跡1棟のほか、平安時代の冠を含む古墓と、その周辺から鉄板2枚を検出した。西山塚古墳は、西山遺跡に含まれる直径26mの円墳で、3基の埋葬施設を確認した。

平成4年度は、西山塚古墳・西山遺跡の継続調査とともに、今回の報告の中心となる瓦谷古墳群を6,900㎡調査し、新たに古墳8基のほか、17基の埴輪棺や奈良時代の掘立柱建物跡を検出した。

平成5年度は、瓦谷遺跡・上人ヶ平遺跡・市坂瓦窯・梅谷瓦窯の調査を実施した。瓦谷遺跡の調査は第7次を数え、平成4年度の調査地である丘陵部とは谷を挟んだ対岸にある丘陵地で発掘調査を実施し、埴輪窯3基と埴輪棺1基、奈良時代の土壙墓を検出した。上人ヶ平遺跡では昭和63年度に確認した2・3号埴輪窯の調査を行った。市坂瓦窯では、上人ヶ平遺跡に関連した瓦窯で保存整備に向けて試掘調査を実施し、7基の瓦窯を検出した。梅谷瓦窯では、丘陵部での試掘調査を実施し、7基の瓦窯の存在が明らかとなった。

平成6年度は、平成5年度に引き続いて梅谷瓦窯・市坂瓦窯の発掘調査を実施するとともに、新たに釜ヶ谷遺跡と上人ヶ平3号墳の調査を実施した。梅谷瓦窯では、登り窯のほかに登り窯から平窯への過渡的な窯の存在が明らかになるとともに、ここで焼かれた製品が興福寺へ供給されていることが明らかとなった。市坂瓦窯では、前年度検出した7基の窯のうち2基(2・8号窯)の発掘調査を実施し、定型化した平窯であることが明らかとなった。釜ヶ谷遺跡では、試掘調査を行ったところ、奈良時代の祭祀遺物を含む旧流路を検出した。

平成7年度は、釜ヶ谷遺跡の発掘調査(調査面積約1,800㎡)を実施し、平成6年度に引き続いて人形・斎串・ミニチュアカマド・墨書人面土器など、旧流路から多量に祭祀遺物が出土した。

平成8年度は、五領池東瓦窯の発掘調査を実施するとともに、瓦谷古墳群の報告書作成にむけて整理作業を実施した。

(石井清司)

第2節 周辺の環境

1. 自然環境

瓦谷古墳群は、京都盆地の最南端、木津町に所在する。京都盆地は、旧巨椋池を境に京都市域を中心とする北山城と、南に位置する南山城に区分することができる。この南山城地域は、南北14km・東西2～3kmの狭長な地形で、その中央には木津川が流れている。木津川は奈良・三重県を源とし東流して、瓦谷古墳群が位置する木津町で大きく流路を北に変え、盆地中央を貫流し淀

川と合流する。南山城盆地を流れる木津川には、井関川・鹿川・山松川・山田川などの中小河川があり、平地部はこの中小河川によって沖積地を形成する。平地の縁辺部には鮮新～更新統(洪積層＝大阪層群)が広く分布し、その内帯の各所には中～上部更新統の段丘地形が発達している。南山城地域の遺跡の分布状況をみると、縁辺部の台地上に遺跡が点在しており、今回報告する瓦谷古墳群も丘陵の縁辺部に位置している。

2. 歴史的環境

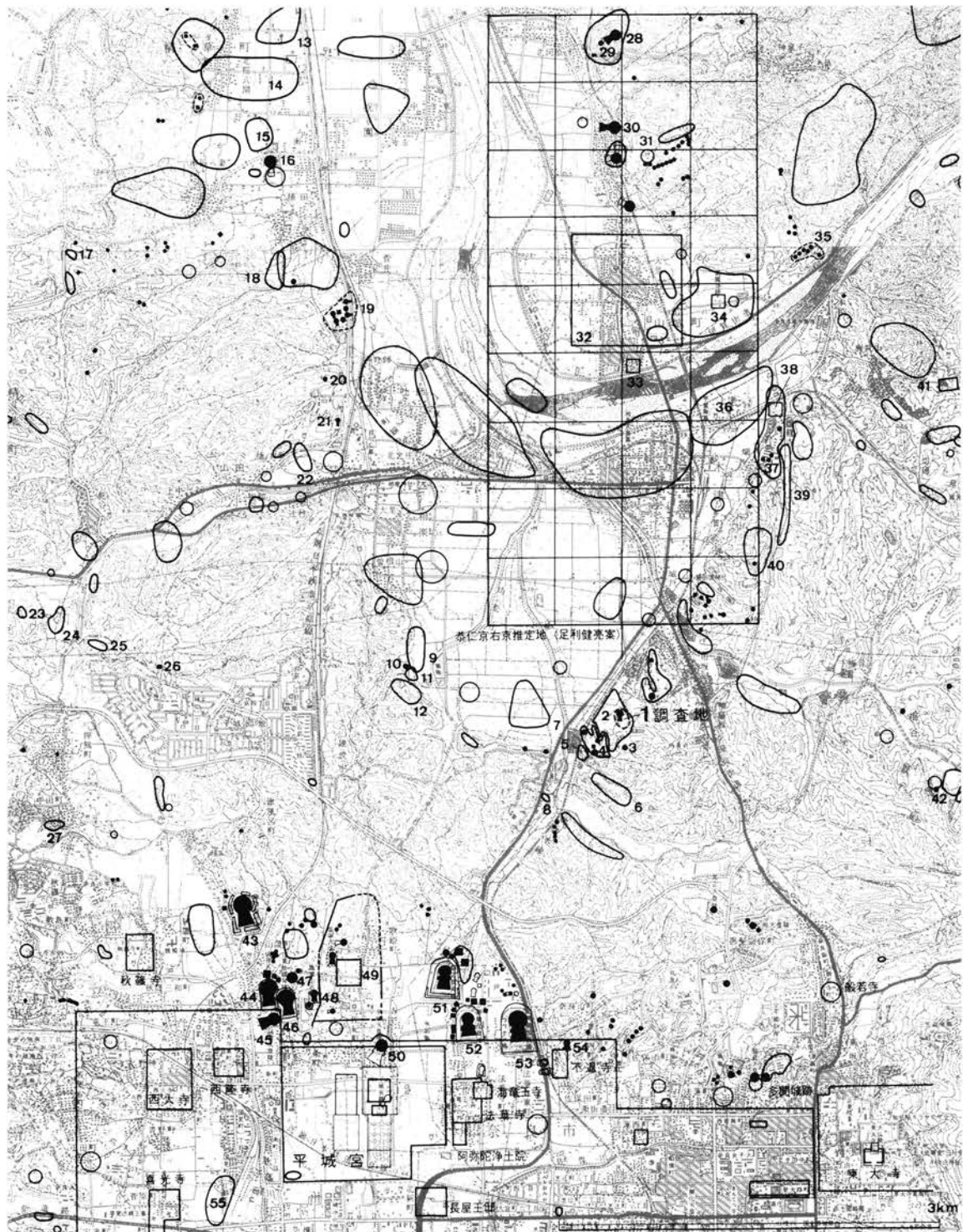
瓦谷古墳群は、奈良県と京都府を限る平城山丘陵の一角に位置しており、古墳時代・奈良時代の中心部に位置する遺跡である。瓦谷古墳群が所在する木津町を中心に周辺の遺跡を概観すると、旧石器時代にはサヌカイトの剥片が出土した木津町岡田国神社境内遺跡がある。続く縄文時代には、今回報告する瓦谷古墳群の一角で縄文時代晩期の土壙墓と思われる土坑を検出したが、木津町域では顕著な遺構はない。木津町の北に位置する山城町ではサヌカイト製有舌尖頭器が出土した千両岩遺跡や、縄文時代前期の土器や石器が出土した涌出宮遺跡などがある。

弥生時代には、木津町域では瓦谷古墳群とは平野部を挟んだ対岸の丘陵部に、弥生時代中期の竪穴式住居跡や方形周溝墓を検出した大島遺跡、扁平鈕式銅鐸が出土した相楽山遺跡などがある。また、木津川に面した燈籠寺遺跡や、瓦谷古墳群に近接した上人ヶ平遺跡では後期の竪穴式住居跡が見ついている。

古墳時代には、南山城地域で、山城町椿井大塚山古墳(全長約185m)・同平尾城山古墳(全長約110m)を筆頭に巨大古墳が築造され、数多くの古墳が分布するようになる。瓦谷古墳群の周辺でも、今回報告する瓦谷1号墳(前方後円墳：全長約51m)のほかに、上人ヶ平古墳群・西山塚古墳(円墳：直径約26m)があり、奈良県側には佐紀盾列古墳群が控えている。古墳以外の遺跡としては、埴輪窯の存在が特徴的である。埴輪窯には、瓦谷古墳群に近接して瓦谷埴輪窯3基・上人ヶ平埴輪窯3基のほか、平城山丘陵を挟んだ奈良市域にも平城宮埴輪窯や菅原東埴輪窯がある。また、最近の当調査研究センターの調査成果では、木津町弓田遺跡でも流路内から多量の埴輪が出土しており、竪穴式住居跡とともに埴輪工房の可能性も指摘されている。

古墳時代後期から飛鳥時代にかけては、木津町域では顕著な遺跡はないが、奈良時代になると平城宮の造営を契機として遺跡数が増大する。奈良時代の集落遺跡としては、前述の大島遺跡・弓田遺跡などがある。木津町域の奈良時代を代表する遺跡として上人ヶ平遺跡をはじめとする生産遺跡が多数ある。特に、瓦を生産した瓦窯には、梅谷瓦窯・瀬後谷瓦窯・市坂瓦窯・五領池東瓦窯などがあって、木津地区所在遺跡として当調査研究センターで発掘調査を進めているほか、奈良国立文化財研究所でも中山瓦窯・歌姫瓦窯などの発掘調査が実施された。また、上津遺跡は、平城京への物資運搬に係わる官の木屋所であり、周辺には大安寺・薬師寺・東大寺の木屋所の存在が想定されている。

平安時代以降は、瓦谷古墳群の一画で丘陵斜面に溝をめぐるした山城的な遺構のほか、上人ヶ平遺跡で中世の祠跡が、江戸時代には木津遺跡がある。



第1図 調査地位置図(1/50,000)

- | | | | | |
|-------------------|-------------------|---------------|---------------|-------------|
| 1. 瓦谷古墳群 | 2. 瓦谷遺跡 | 3. 幣羅坂古墳 | 4. 上人ヶ平遺跡・古墳群 | 5. 市坂瓦窯跡群 |
| 6. 瀬後谷窯跡群 | 7. 弓田遺跡 | 8. 歌姫瓦窯跡 | 9. 大島遺跡 | 10. 音乗谷古墳 |
| 11. 音如ヶ谷瓦窯跡群 | 12. 歌姫西瓦窯跡群 | 13. 柿添遺跡 | 14. 北稲遺跡 | 15. 北尻遺跡 |
| 16. 丸山古墳 | 17. 煤谷川窯跡 | 18. 畑ノ前遺跡・古墳群 | 19. 吐師七ツ塚古墳群 | 20. 坊谷古墳 |
| 21. 白山古墳 | 22. 樋ノ口遺跡 | 23. 得所瓦窯跡 | 24. 乾谷瓦窯跡群 | 25. 押熊瓦窯跡 |
| 26. カザハビ(石のカラト)古墳 | 27. 中山瓦窯跡 | 28. 平尾城山古墳 | 29. 稲荷山古墳 | 30. 椿井大塚山古墳 |
| 31. 松尾神社(松尾庵) | 32. 山城国府推定地(木下良案) | 33. 泉橋寺 | 34. 高麗寺跡 | 35. 千両岩古墳群 |
| 36. 上津遺跡 | 37. 燈籠寺遺跡(内田山古墳群) | 38. 燈籠寺廢寺 | 39. 釜ヶ谷遺跡 | 40. 木津城跡 |
| 41. 鹿背山城跡 | 42. 梅谷瓦窯跡群 | 43. 五社神古墳 | 44. 佐紀石塚山古墳 | 45. 佐紀高塚古墳 |
| 46. 佐紀陵山古墳 | 47. マエ塚古墳 | 48. 瓢箪山古墳 | 49. 松林苑跡 | 50. 市庭古墳 |
| 51. ヒシアゲ古墳 | 52. コナベ古墳 | 53. ウワナベ古墳 | 54. 不退寺裏山古墳 | 55. 菅原東遺跡 |

第3節 調査の経過

瓦谷古墳群を含めた瓦谷遺跡(対象面積約60,000m²)は、京都府と奈良県の府県境をなす平城山丘陵(奈良市北方丘陵)の北西側斜面の裾部に形成された扇状地と、それに連なる小規模な谷地形に立地している。周囲には、幣羅坂古墳(円墳：5世紀前半)・上人ヶ平古墳群(帆立貝式古墳を含む古墳17基：5世紀中頃～6世紀前半)・西山塚古墳(円墳：5世紀後半)などの古墳が分布する。また、瓦谷古墳群に近接して、主に上人ヶ平古墳群に埴輪を供給したと考えられる埴輪窯(瓦谷埴輪窯3基・上人ヶ平埴輪窯3基)があり、瓦谷古墳群に続く古墳と、その古墳に関連した生産遺跡が点在している。

瓦谷遺跡の発掘調査は、昭和61年度の第1次調査以降、平成5年度までの第7次調査までの7か年を要して試掘・発掘調査を実施した。その結果、古墳時代前期以降中世までの遺跡が連綿と点在し、流路・竪穴式住居跡・古墳・掘立柱建物跡・溝状遺構・土坑など、多くの遺構とそれに伴う多量の遺物を検出した。

整理作業は、発掘調査終了後の平成6年度以降に実施し、今なお継続中であるが、本年度は瓦谷遺跡の中でも、丘陵先端に位置する古墳群を瓦谷遺跡から切り離して「瓦谷古墳群」として、その詳細を報告する。ただし、谷部で検出した古墳時代前・中期の流路、古墳時代中期の埴輪窯については機会を改めて報告する。ここでは、過去の調査成果を簡単にふりかえることとする。

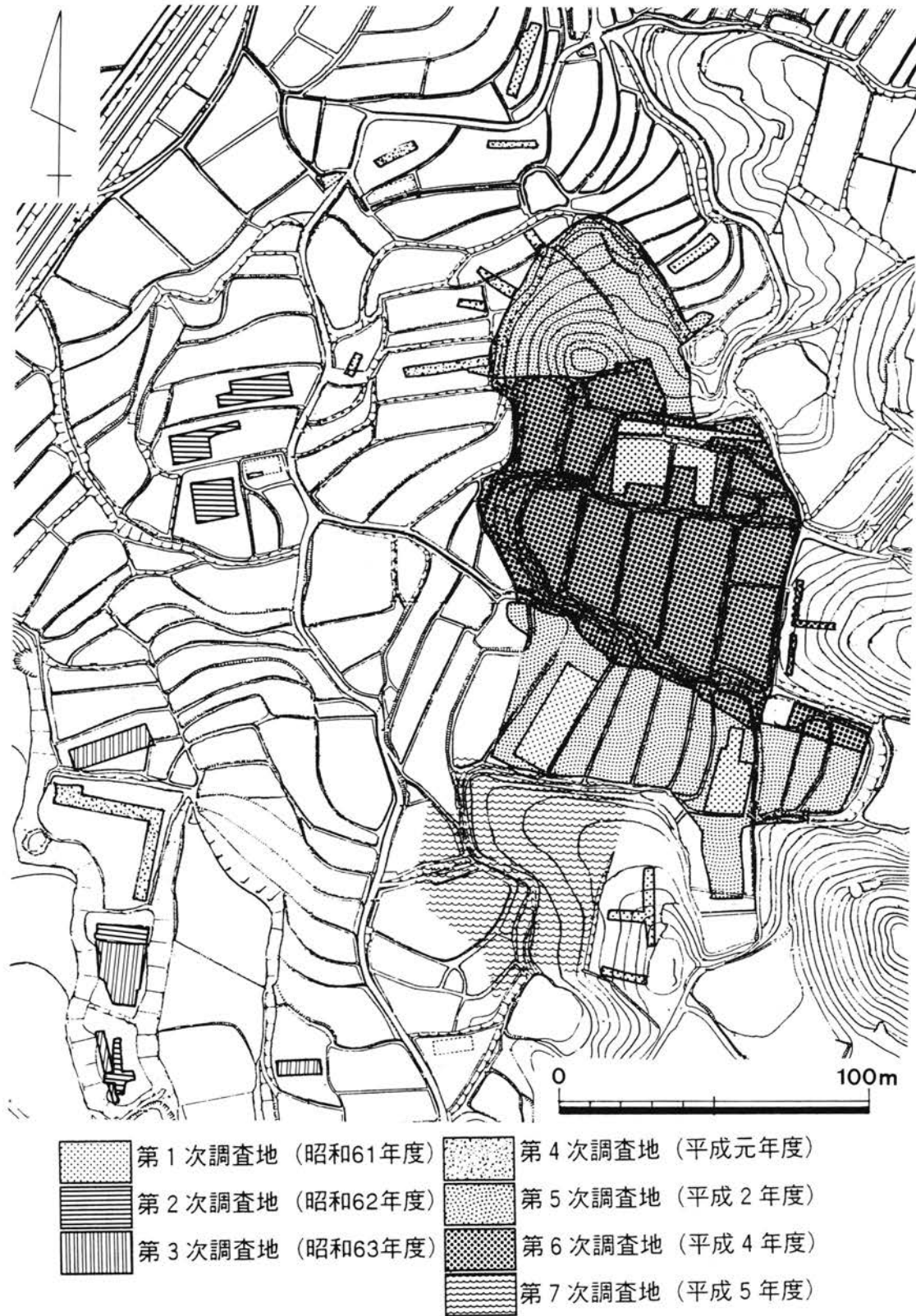
昭和61年度の調査 調査を開始した昭和61年度は、瓦谷古墳群の東縁部に主眼を置いて20btの試掘調査(約580m²)を実施した。その結果、瓦谷古墳群の立地する丘陵上の20btでは4世紀にさかのぼる小規模な方墳1基(後述する2号墳)と、2号墳の西周溝に沿ってゆるい円弧状に配列された埴輪棺4基(後述する1～4号埴輪棺)を検出した。また、その丘陵の南側を開析するやや規模の大きな谷部の調査区(39・48bt)では、布留式併行期の土器・木器を多量に包含する自然河道を確認した。

昭和62年度の調査 翌昭和62年度は、上人ヶ平遺跡の所在する台地を開析する小規模な谷部及び遺跡のほぼ中央で、扇状地形が西方の平野部に移行する地区の調査を行った。その結果、前者でも東側の谷部の調査区(74bt)で、古墳時代前期及び奈良時代の遺物(布留式土器・木製品・瓦など)を多量に包含する自然河道(埋没谷とした方がふさわしい)と、唐櫃を井戸枠に転用した奈良時代の井戸を検出した。一方、中央部地区(31～35bt)では、布留式土器を包含する樹脂状に流れる自然河道を確認した。なお、唐櫃を転用した井戸枠は、すでに報告したとおりである。

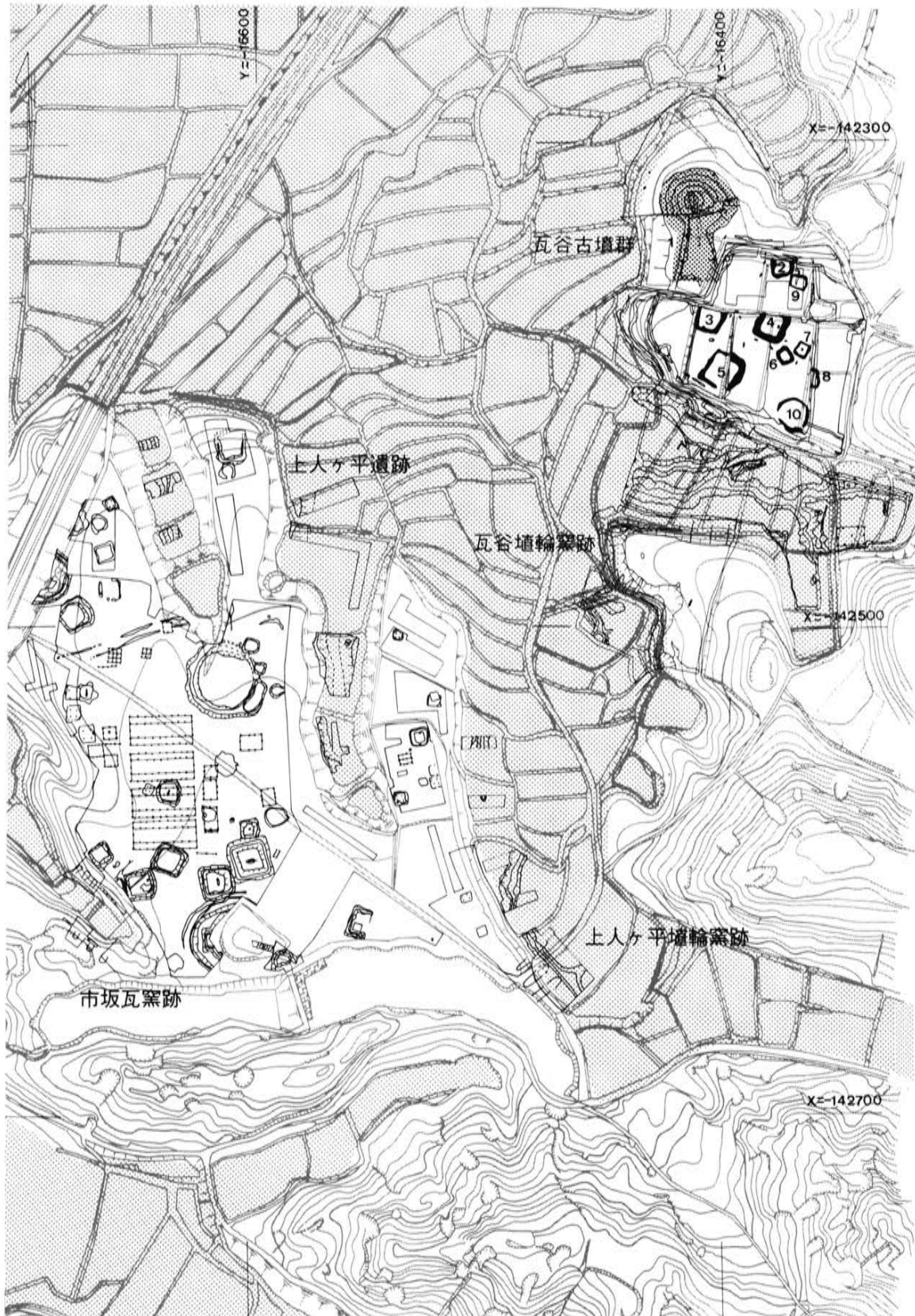
昭和63年度の調査 昭和63年度は、前年度の成果を受け、上人ヶ平遺跡の立地する台地の開析谷部(74・76bt)と、台地の水田部(40・58・59bt)にトレンチを設定して調査にあたった。その結果、各地区から古墳～奈良時代の遺物を包含する流路状遺構を追認したほか、台地の東縁部の南寄り(40bt)で5世紀後半の埴輪窯を3基(上人ヶ平埴輪窯)確認し、この内1基を完掘した。

平成元年度の調査 平成元年度は、瓦谷古墳群の北西側の水田部に試掘トレンチを設定して、古墳の範囲確認を行った。その結果、同古墳から流れてきた埴輪片を採取するとともに、古墳の境域(墓域)が丘陵(段丘)上で完結することを確認した。

平成2年度の調査 平成2年度は、瓦谷古墳群の位置する段丘性丘陵の南で、主軸をほぼ東西にとる幅約50mの谷部に、約4,500㎡にわたる面的なトレンチを設けて調査にあたった。この谷部は、昭和61年度の試掘調査で、古墳時代前期の遺物が多量に出土した自然河道を検出した地区



第2図 年度別トレンチ配置図



第3図 瓦谷古墳群周辺遺跡図(1/2,500)

で、自然河道の性格がより明らかになった。自然河道は、谷部奥からの流路2本が調査区東半部で1本に合流する「Y」字形を呈し、調査地の東端、流路に挟まれた平坦部で東西棟の掘立柱建物跡を検出した。古墳群の調査では、瓦谷1号墳の墳丘及び埋葬施設の有無を確認するため、1号墳の北半部の調査を実施した。その結果、瓦谷1号墳では、後円部の墳頂部に2基の埋葬施設(第1主体:粘土槨、第2主体:木棺直葬)を確認し、棺内及び棺外から多量の副葬品が出土した。

平成4年度の調査 平成4年度には、1号墳の墳形の規模を確定するとともに、20btで確認した古墳及び埴輪棺の広がり、瓦谷1号墳と方墳及び埴輪棺の関連を明らかにするため、瓦谷1号墳が立地する台地部の未調査部分の全域(調査面積は約6,900m²)にわたって発掘調査を実施した。その結果、後述するように、瓦谷1号墳は全長約51mを測る前方後円墳であり、周辺には方墳8基・円墳1基・埴輪棺25基が点在し、前方後円墳を頂点として方墳・埴輪棺という当時の階層分化を示す遺跡であることが明らかとなった。また、古墳時代以降では奈良時代の掘立柱建物跡や、中世の城館を思わせる堀の跡も見つかった。

平成5年度の調査 平成5年度は、瓦谷古墳群が立地する丘陵縁辺部とは谷を挟んで南側にあたる丘陵部で調査を実施した。試掘調査で埴輪棺1基を確認し、調査地を広げたが、新たに埴輪棺や古墳は確認できなかった。しかし、丘陵北斜面で埴輪窯3基を確認した。3基の埴輪窯は、いずれも地下式構造の登り窯で、昭和63年度に検出した埴輪窯3基(上人ヶ平埴輪窯)とともに、瓦谷遺跡周辺では総計6基の埴輪窯を検出した。この地点では、奈良時代の土坑や中世の堀状の溝跡も見つかっている。

なお、調査組織は、付表1のとおりである。

付表1 年度別調査組織一覧表

	年度	調査主体者	調査責任者	事務局	調査担当 責任者	調査担当
第1次調査	昭和61年度	理事長 福山敏男	荒木昭太郎	中西和之	中谷雅治	主任調査員 松井 忠春 調査員 戸原 和人 同 伊賀 高弘
第2次調査	昭和62年度	理事長 福山敏男	荒木昭太郎	田中秀明	中谷雅治	係 長 小山 雅人 主任調査員 戸原 和人 調査員 伊賀 高弘
第3次調査	昭和63年度	理事長 福山敏男	荒木昭太郎	田中秀明	中谷雅治	係 長 小山 雅人 主任調査員 石井 清司 調査員 伊賀 高弘
第4次調査	平成元年度	理事長 福山敏男	荒木昭太郎	山本 勇	中谷雅治	係 長 小山 雅人 主任調査員 石井 清司 調査員 伊賀 高弘
第5次調査	平成2年度	理事長 福山敏男	堤圭三郎 松阪寛支	小林将夫	中谷雅治	係 長 小山 雅人 主任調査員 石井 清司 調査員 伊賀 高弘
第6次調査	平成4年度	理事長 福山敏男	城戸秀夫	佐伯拓朗	中谷雅治	係 長 小山 雅人 主任調査員 石井 清司 調査員 伊賀 高弘 同 有井 広幸
第7次調査	平成5年度	理事長 福山敏男	城戸秀夫	佐伯拓朗	中谷雅治	係 長 小山 雅人 主任調査員 石井 清司 調査員 森正 哲次 同 有井 広幸

調査期間中は、下記の方々から協力及び有益な助言をいただいた。記して謝意に代えたい(順不同、敬称略)。

小野山節・高橋克壽(京都大学)、高橋美久二(滋賀県立大学)、佐々木憲一・和田晴吾(立命館大学)、和田萃(京都教育大学)、杉井 健・都出比呂志・福永伸哉(大阪大学)、石野博信(徳島文理大学)、植野浩三・西山要一(奈良大学)、堅田 直(帝塚山大学)、佐古和枝(関西外国語大学)、川西宏幸(筑波大学)、北條芳隆(徳島大学)、上原真人・金子裕之・岸本直文・工楽善通・小林謙一・田中 琢・西村 康・町田 章・松井 章・山中敏史(奈良国立文化財研究所)、吉岡康暢(国立歴史民俗博物館)、今尾文昭・河上邦彦・木下 亘・関川尚功(奈良県立橿原考古学研究所)、横山浩一(福岡市立博物館)、橋本清一(京都府立山城郷土資料館)、伊藤 純・岡村勝行・高橋 工((財)大阪市文化財協会)、大谷弘幸((財)千葉県文化財センター)、中川正人(滋賀県埋蔵文化財センター)、高野弘之(大分県緒方町立歴史民俗資料館)、朴成澤(東亜大学校博物館保存科学研究室)、李午熹(三星美術文化財洞湖巖美術館保存科学研究室)、岸本道昭(龍野市教育委員会)、大船孝弘・森田克行(高槻市教育委員会)、笠井敏光(羽曳野市教育委員会)、鷹野一太郎(田辺町教育委員会)、黒田恭正・西岡巧次(神戸市教育委員会)、鐘方正樹・中島和彦(奈良市教育委員会)、柳本照男(豊中市教育委員会)、宮脇正実(長野県教育委員会)、百瀬正恒・吉村正親((財)京都市埋蔵文化財研究所)、荒川 史(宇治市教育委員会)、鹿島昌也(富山市教育委員会)、贅 元洋(愛知県豊橋市教育委員会)

文献

1. 松井忠春・戸原和人・小山雅人・黒坪一樹「木津地区所在遺跡昭和59年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第17冊 (財)京都市埋蔵文化財調査研究センター) 1985
2. 松井忠春・戸原和人・小山雅人「木津地区所在遺跡昭和60年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第21冊 (財)京都市埋蔵文化財調査研究センター) 1986
3. 戸原和人・伊賀高弘・荒川 史「木津地区所在遺跡昭和61年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第26冊 (財)京都市埋蔵文化財調査研究センター) 1987
4. 戸原和人・伊賀高弘・小池 寛「木津地区所在遺跡昭和62年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第32冊 (財)京都市埋蔵文化財調査研究センター) 1989
5. 石井清司・伊賀高弘・中井英策・八瀬正雄「木津地区所在遺跡昭和63年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第35冊 (財)京都市埋蔵文化財調査研究センター) 1989
6. 石井清司・伊賀高弘「木津地区所在遺跡平成元年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第40冊 (財)京都市埋蔵文化財調査研究センター) 1990
7. 石井清司・伊賀高弘「木津地区所在遺跡平成2年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第46冊 (財)京都市埋蔵文化財調査研究センター) 1991
8. 石井清司・伊賀高弘・黒坪一樹・小池 寛・筒井崇史・中井英策・三辻利一『上人ヶ平遺跡』(『京都府遺跡調査報告書』第15冊 (財)京都市埋蔵文化財調査研究センター) 1991
9. 小山雅人・石井清司・伊賀高弘・竹井治雄「木津地区所在遺跡平成3年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第51冊 (財)京都市埋蔵文化財調査研究センター) 1992
10. 石井清司・伊賀高弘・有井広幸「木津地区所在遺跡平成4年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第56冊 (財)京都市埋蔵文化財調査研究センター) 1994
11. 石井清司・有井広幸・森島康雄・森正哲次「木津地区所在遺跡平成5年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第61冊 (財)京都市埋蔵文化財調査研究センター) 1995
12. 石井清司・有井広幸・森島康雄「木津地区所在遺跡平成6年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第68冊 (財)京都市埋蔵文化財調査研究センター) 1996
13. 有井広幸「木津地区所在遺跡平成7年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第73冊 (財)京都市埋蔵文化財調査研究センター) 1996

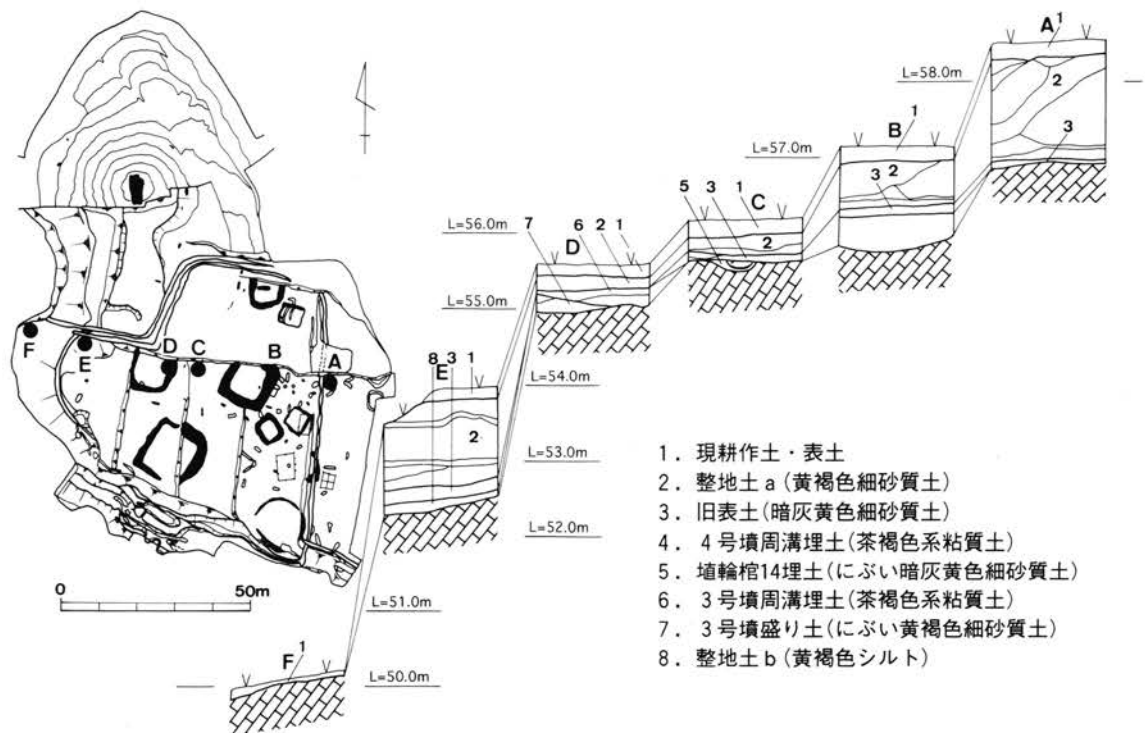
(石井清司)

第2章 古墳時代の遺構

第1節 遺構の種類とその分布

1. 地形と層位(第4図)

瓦谷古墳群の造られている台地は、調査前には東から西に向かって階段状を呈する水田が作られていたが、転作が進んで、一部柿畑や荒地になっていた。古墳群の立地する地形は、標高105.9mの州見山から西方へのびる丘陵斜面の端部に台地状の平地が広がっていた。その台地の南辺に東西方向の谷地形があり、また、1号墳の東に小開析谷が入り込んでいるため、「L」字形の北に向かってゆるやかに傾斜した台地であった。台地面上の標高は、調査地南東端で約58.1m、南西端で約54.0m、2・9号墳付近で約55.0m、1号墳前方部付近で約53.4m、1号墳後円部裾北端で約50mである。また、台地裾付近の標高は、南側で約52.0m、台地面との比高差は約4m、西側で標高約47.0m、比高差約7.2mを測る。傾斜地を水田にするため、一筆の区画内では、南東側の高い部分を削り、北西側の低い部分に盛り土で整地している。整地の時期は、近代になってからと思われる。各水田は、南北方向に長く、西に階段状に低くなっていく棚田が南北2列形成されていた。A～E地点で堆積している第2層は、この時の整地土で、地山土に当たる明黄褐色土のブロックが観察できた。ブロックの堆積は、北西方向に向けて厚さ0.2mほどの斜め層が連続して観察でき、人手による小単位の造成が想定できる。こうした整地土の一部には、



第4図 瓦谷古墳群土層柱状図

古墳を削平した影響による埴輪片の混入もみられた。この層の厚さは、A地点付近で最大約1.2mを測る。このため、旧水田の区画内では南半部の遺構の残りは悪く、北半部では比較的良好な傾向がある。遺構配置図(第5図)で、調査地南半部に南北方向に4段の段差があり、南に行くにつれて大きくなるのは、この水田造成の影響である。

水田化される以前は、畑作が行われていたようで、4号墳から3号墳にかけての範囲で南北方向の溝跡群は、畑作に伴う耕作溝と思われる。第3層がこれに対応する層で、削平された古墳(3・4・9号墳)の上面にも耕作溝が続くことから、この時点ですでに古墳の削平がかなり進んでいたことが確認できる。第3層は、出土遺物から近世頃と考えられる。これ以前の遺物包含層は、遺構内埋土以外は基本的に存在しない。ただ、E地点の第8層は、この付近にのみ堆積しており、層序・出土遺物から古墳時代の層と考えられる。第8層は、1号墳前方部の地山削り出し部付近に当たり、その関連で整地された層の可能性がある。

台地の斜面にも水田が作られており、1号墳の前方部西側斜面も削平を受け、西向き斜面下手側に水田を拡張・整地した土層が厚く堆積していた。

2. 遺構の種類とその分布(第5図)

遺物の出土量は少ないが、縄文時代の遺構には、A地点で東側に晩期の土器棺墓1基・ピット・土坑・溝などがある。

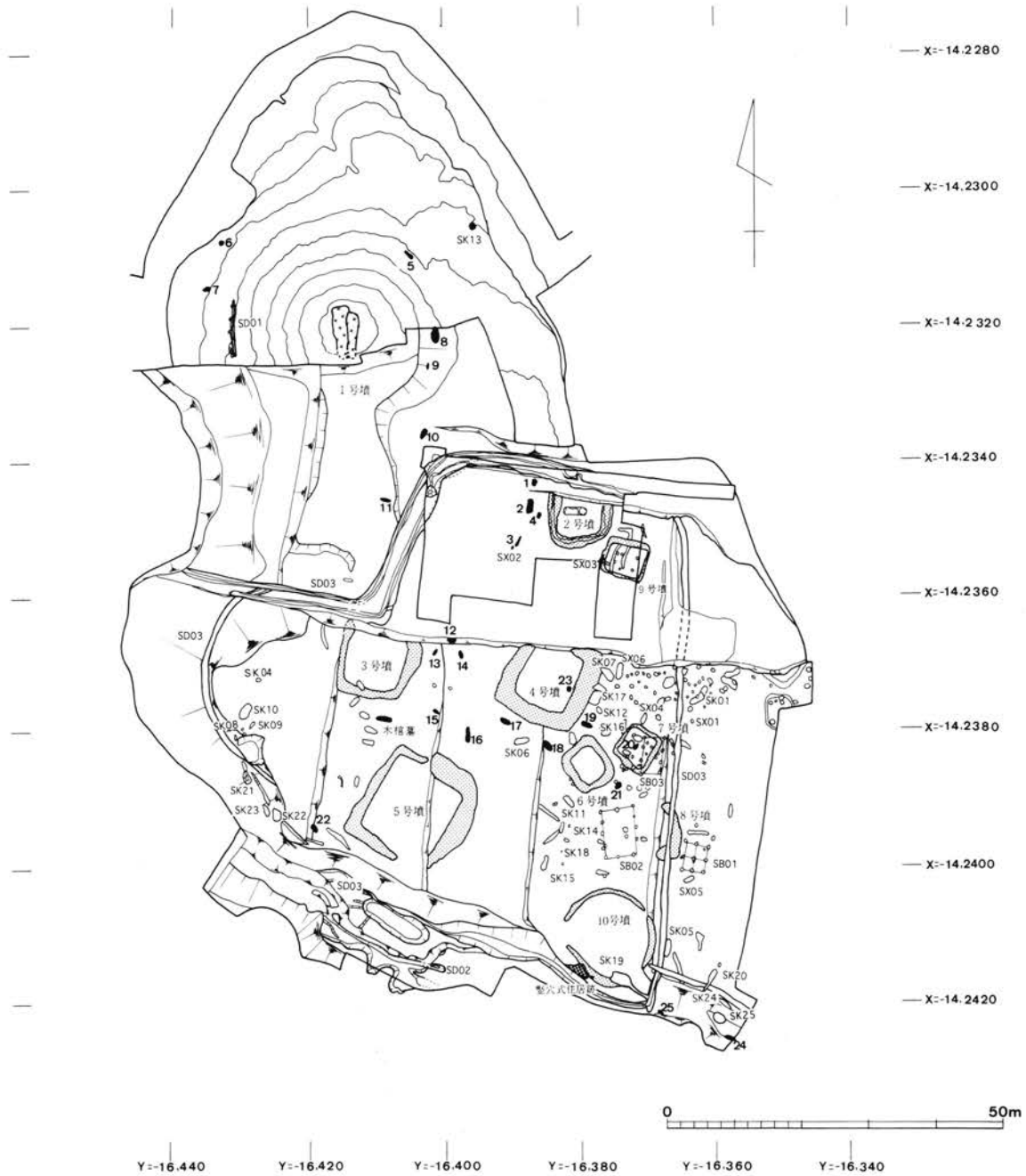
古墳時代の遺構では、前期末から中期前半頃にかけての遺構が台地全面に分布しており、前方後円墳1基・方墳8基・円墳1基・木棺墓1基・埴輪棺26基・土器棺墓2基・土壙墓8基以上・竪穴式住居跡1基などがある。古墳の築造順は、1号墳以後、南東方向に順次造られたようである。埴輪棺は、1号墳を取り巻くように、墳丘斜面・裾付近に分布し、さらに、各古墳周辺に分布する。土壙墓は、台地南西端に3基みられるほかは、各古墳周辺に分布する。

奈良時代の遺構としては、4号墳から8号墳が分布する範囲に、掘立柱建物跡3棟・土壙墓7基・焼土坑1基・ピット群が集中する。また、1号墳の後円部裾北東付近に土器埋納土坑1基が単独で分布する。調査地南斜面裾には、東西方向の溝が1条ある。

中世の遺構は、台地南半部をほぼ完周する溝と、調査地南斜面にあわせて土坑6基が分布する。ほぼ完周する溝は、1・2・9号墳付近では平行する2条の溝となる。この溝は、1号墳前方部付近では、それを避けるように鍵形に2回屈曲する。この付近では、A地点北側に位置する溜め池から流れ出す用水路が上層に重なり、1号墳前方部南側を西に向かって流れていた。また、この溝は、調査地南斜面裾にも続き、10号墳南西側では、斜面中腹部で溝上端幅約4m・深さ約2mの堀状の景観となる。西側では、台地崖面裾に沿って規模を小さくして西の調査地外へ続く。南斜面裾には、現代まで使用されていた小規模な溜め池がある。A地点付近の溜め池に使用されていた導水用土管と同じ土管が出土しており、ともに近代以後に使用されたと考えられる。

ここでは古墳群造営を境にして、それ以前の遺構と以降の遺構に区分して記述する。

(有井広幸)



第5図 瓦谷古墳群遺構配置図(全体図)

第2節 古墳時代の遺構

1. 古墳群

瓦谷古墳群は、州見山を最高所とする山丘から西に向かって派生する複数の尾根筋のうち、北方に折れる尾根筋に営まれている。調査前の分布調査では、瓦谷1号墳の後円部のみが竹藪のなかに残っているにすぎず、1号墳の背後から尾根の基部にかけては、約100mにわたって棚田状の水田が広がっており、水田直下に瓦谷1号墳の前方部や小規模な古墳が埋没しているとは想像すらできなかった。墳丘や埋葬施設の大半は、削平されており、1・2号墳を除いて周溝のみが遺存する程度であった。古墳は、前方後円墳1基・方墳8基・円墳1基を確認した。

付表2 古墳群一覧表

古墳名	形態	規模	埋葬施設	出土遺物
1号墳	前方後円墳	全長51.0m	木棺直葬・粘土槨	主体部より鏡・漆塗製品・多くの鉄器、墳丘周辺に埴輪棺数基
2号墳	方墳	一辺7.9m	木棺直葬	埴輪片(周溝)
3号墳	方墳	一辺10m	削平	土師器片
4号墳	方墳	一辺10.5m	削平	埴輪片、須恵器壺(周溝北東隅)
5号墳	方墳	一辺13.9m	削平	長頸壺・高杯(東周溝)、壺(周溝南西隅)
6号墳	方墳	一辺5.5m	削平	壺(南周溝)、石鏃(縄文?、墳丘より)
7号墳	方墳	一辺5.2m	中心に埴輪棺	土師器片
8号墳	方墳	一辺7m	削平	家形埴輪(北周溝)
9号墳	方墳	一辺6m	削平	土師器壺埋納土坑、土師器片
10号墳	円墳	直径14m	削平	なし

1号墳

(1) 墳丘と外部施設(第6～11図、図版第2・63～65)

1号墳は、西側に展開する平野部からの眺望を意識して占地したかのように、丘陵の先端に位置する。1号墳が立地する丘陵部の地質構造は、100万～200万年前の淡水性砂・砂礫層が卓越し、その間に粘土層を挟む全層厚約100mに達する大阪層群下部層からなり、痩せ尾根状の地形を呈する。ただ、1号墳が立地する丘陵先端部付近には、この大阪層群を不整合に覆うかたちで、段丘縁辺の半陸成層が薄く重なっており、尾根上面がやや平坦な地形となっている^(注1)。

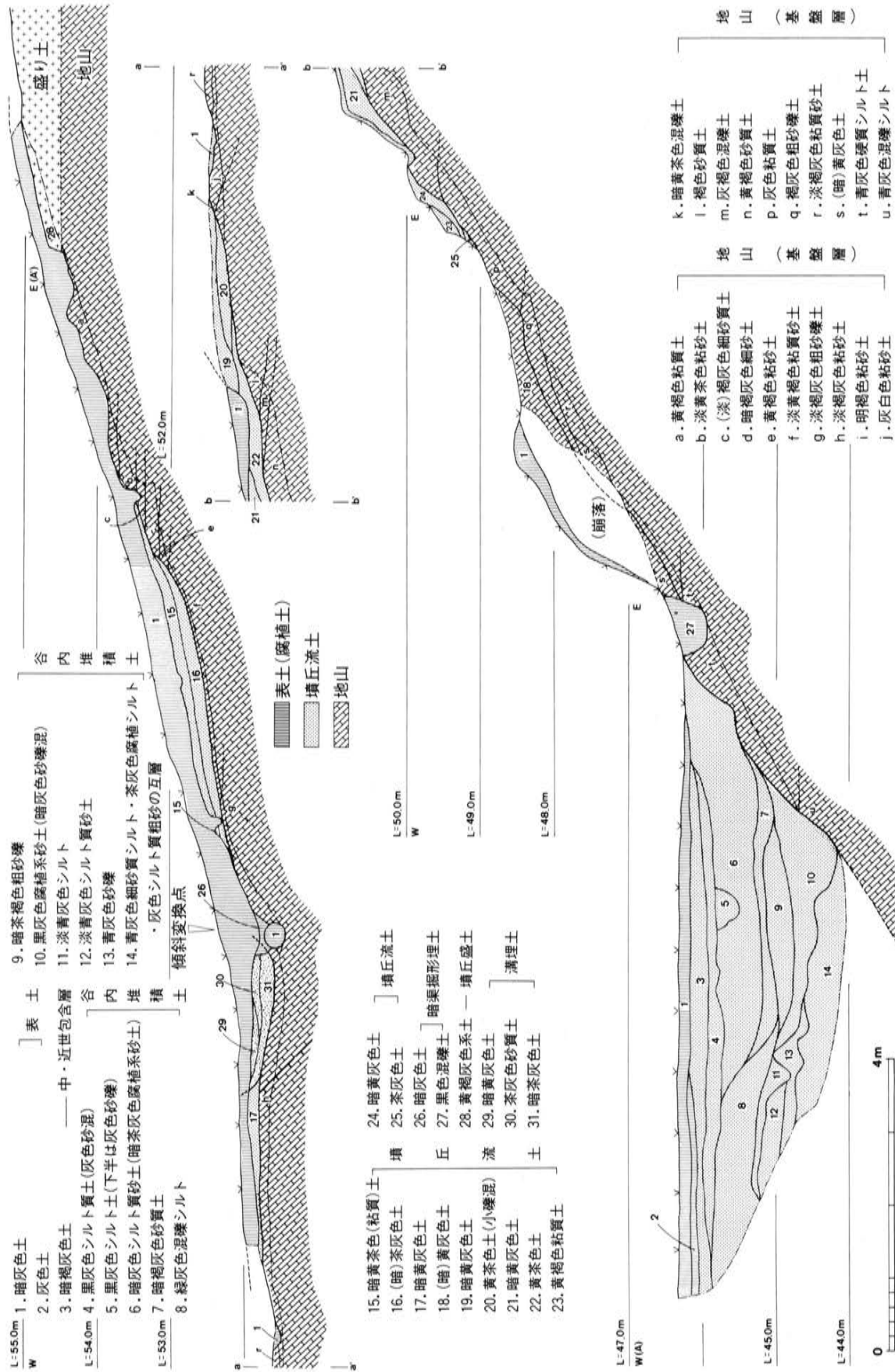
丘陵部分の現況は、近世初頭に始まるこの地域の谷水田の開発行為に伴って丘陵部も開墾の対象となり、1号墳の後円部を残してその南側に続く尾根上は、100m以上にわたって棚田状に造成されている。このため、発掘調査で判明した前方部の存在は、調査前の現況地形からは全く追跡できず、墳丘測量調査が実施された1984年以降、円墳と認識されていた。ただし、明治期に吉田東伍は『大日本地名辞書 第二巻 上方』(1900年)の中で、この古墳を取り上げて「河田氏云」として「瓦谷塚一に車塚と云…」という当時の聞き取り調査の結果を公開している^(注2)。これによれば、瓦谷1号墳は、少なくとも明治期には地元で「車塚」と俗称されていた形跡があり、当該時期まで前方部が地表上に目に見えるかたちで残されていたか、そうした状況の記憶伝承が残されていたと考えられる。実際、今回の発掘調査によって円丘の南にのびる前方部をその基底部分に限り確認し、前方後円墳であることが明らかになった。

墳丘は、先にも述べたように、近年の耕地造成でかなり地形の改変を受けている。特に、前方部は、高所から順次階段状に削平を伴う造成がなされており、これによって1号墳のくびれ部よりやや後円部側に比高差最大約1mを測る崖状の段差が東西方向に生じている。

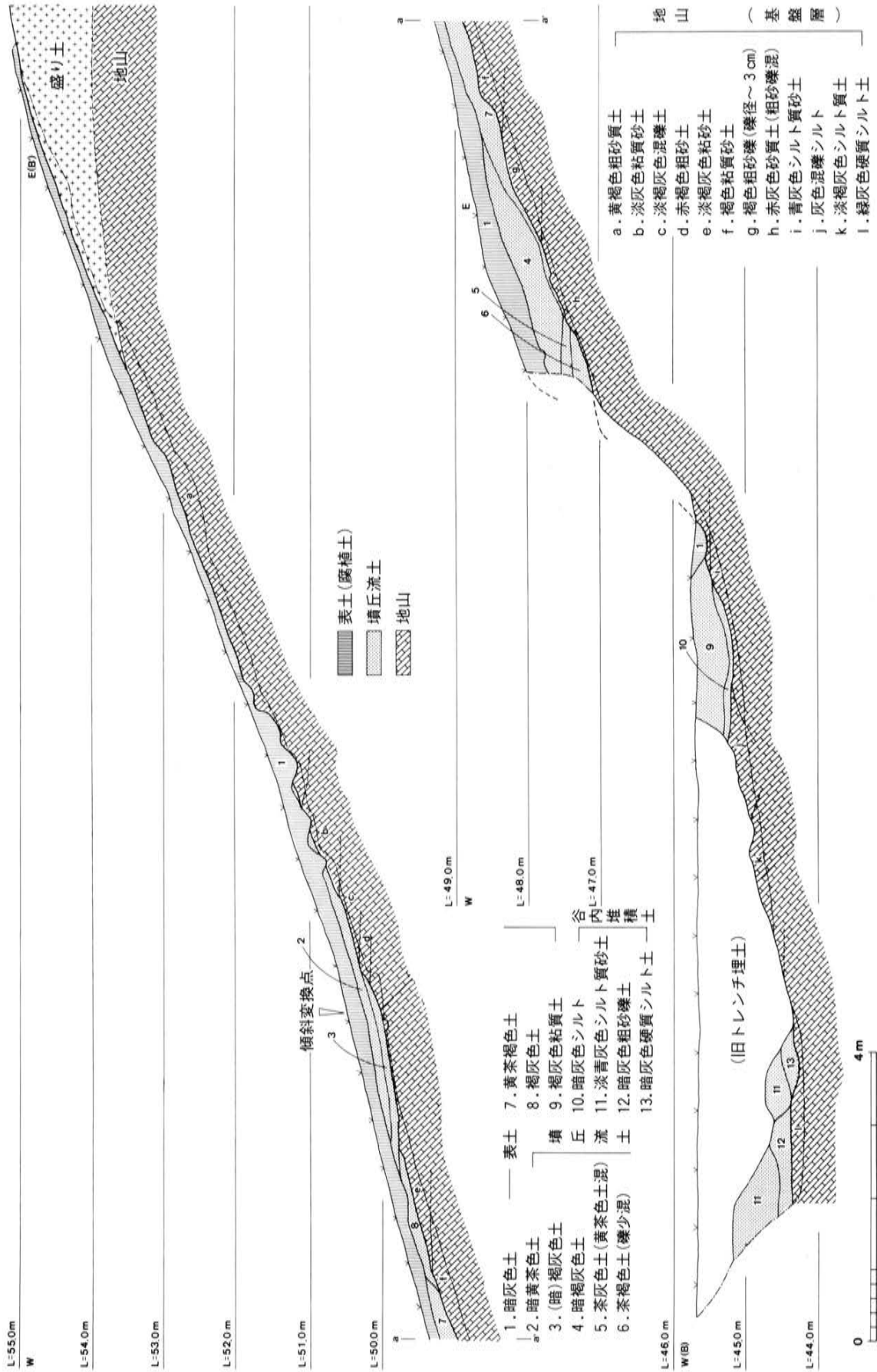
後円部は、後述する内部施設の遺存深度や埴輪類の広範な散乱状態を考慮すれば、一見良好に保存されているようにみえたが、後世に相当量の土砂が流出し、前方部ほどではないが、人為的な改変を受けたことが指摘できる。実際、近年における後円部の植生をみると、松林→芋畑→竹藪と順次推移しており、特に竹藪の段階で、土入れ・土取りなど土砂が人為的に動かされている可能性は高い^(注3)。



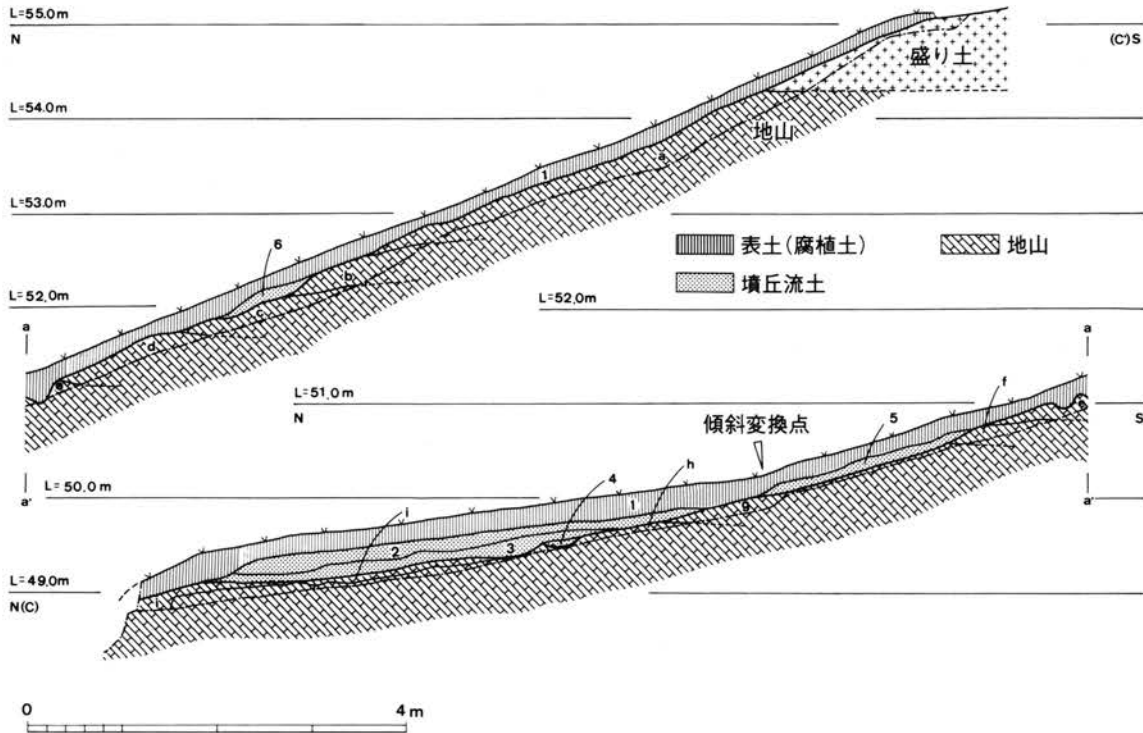
第6図 瓦谷1号墳丘測量図



第7図 瓦谷1号墳墳丘東西断面図(東半部) 断面位置は図版第2参照



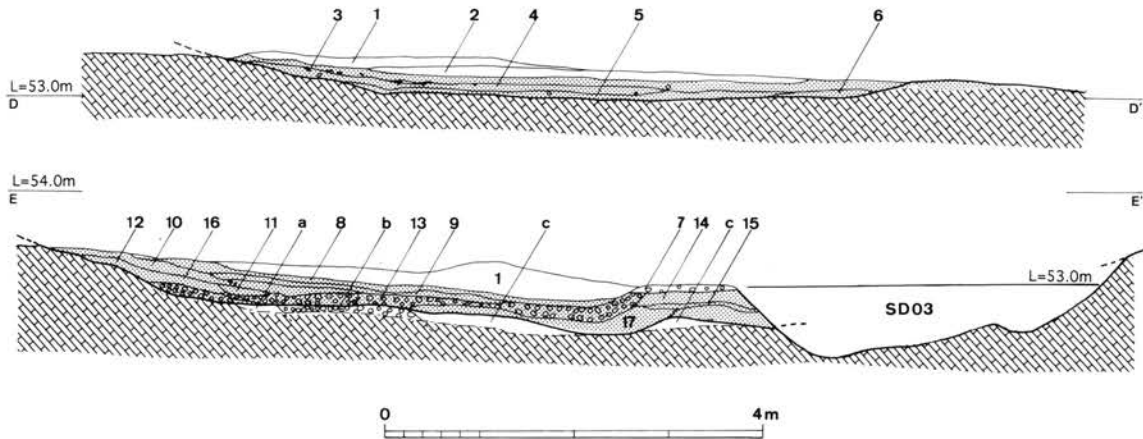
第8図 瓦谷1号墳墳丘東西断面図(西半部) 断面位置は図版第2参照



第9図 瓦谷1号墳墳丘南北断面図(北半部) 断面位置は図版第2参照

- | | | | |
|--------------------------|-------------------|---------------------|-------------|
| 1. 暗灰色土 | 表土 | a. 灰褐色砂土 | 地山
(基盤層) |
| 2. (暗)黄茶色土 | 墳丘流土 | b. (暗)黄茶色土 | |
| 3. 暗褐色灰色土(小礫混
・やや腐植化) | | c. (暗)黄茶色混礫土(礫径1cm) | |
| 4. 灰褐色土 | | d. 褐色粘質土 | |
| 5. 暗褐色灰色土(3に近似) | | e. 淡褐色粘砂質土 | |
| 6. 暗茶灰色土(やや腐植化) | | f. 淡褐色灰色粘砂質土 | |
| | | g. 淡灰色粘砂土(淡黄褐色砂質土混) | |
| | h. 灰白色粗砂土(上面は粘砂質) | | |
| | i. 淡黄白色粘砂土 | | |

このため、築造時の形状をどの程度残しているのか疑問が残るが、調査時の地形を詳細に観察すると、等高線の間隔の広狭で求められる墳丘裾は、少なくとも後円部の北半部だけをみても、同じ標高で水平にはめぐらない。現在の表土(腐植土)と墳丘斜面下半に薄く堆積する墳丘流土を除去すると、上位1.0m前後は盛り土による墳丘が認められたが、それよりも下位はすべて基盤層である黄灰色系の地山が直接露頭していることが明らかになった。この地山の傾斜ラインは、標高50.0m前後の高さでゆるく屈折し、それより外方では傾斜をややゆるめてテラス状地形に移行する。ただ、この標高50.0m前後の傾斜変換点を等高線で追跡すると、後円部の北東側にある南東から北西に向かって掘削された地境溝を境に、円弧を大きく逸脱して東に向きを換えてしまう。また、墳丘の断面観察によると、後円部東側の裾を示す傾斜変換点は、標高51.7m付近にあり、それより東側はしばらく同一高度を保って水平面を形成する。つまり、後円部の墳丘と外域を画する墳丘裾は、傾斜面を少しばかり屈曲させることで明示される。墳丘裾ラインは、西から北にかけては標高約50.0mの等高線にほぼ一致し、北から東にかけては墳丘裾のレベルを徐々に上げていったと理解される。これは、墳丘外周囲の基盤層自体の標高が東側に向かって徐々に高まっており、同一レベルで裾を形成しようとする、墳丘外周囲を大規模に削平するという土木



第10図 瓦谷1号墳くびれ部・前方部断面図 断面位置は図版第2参照

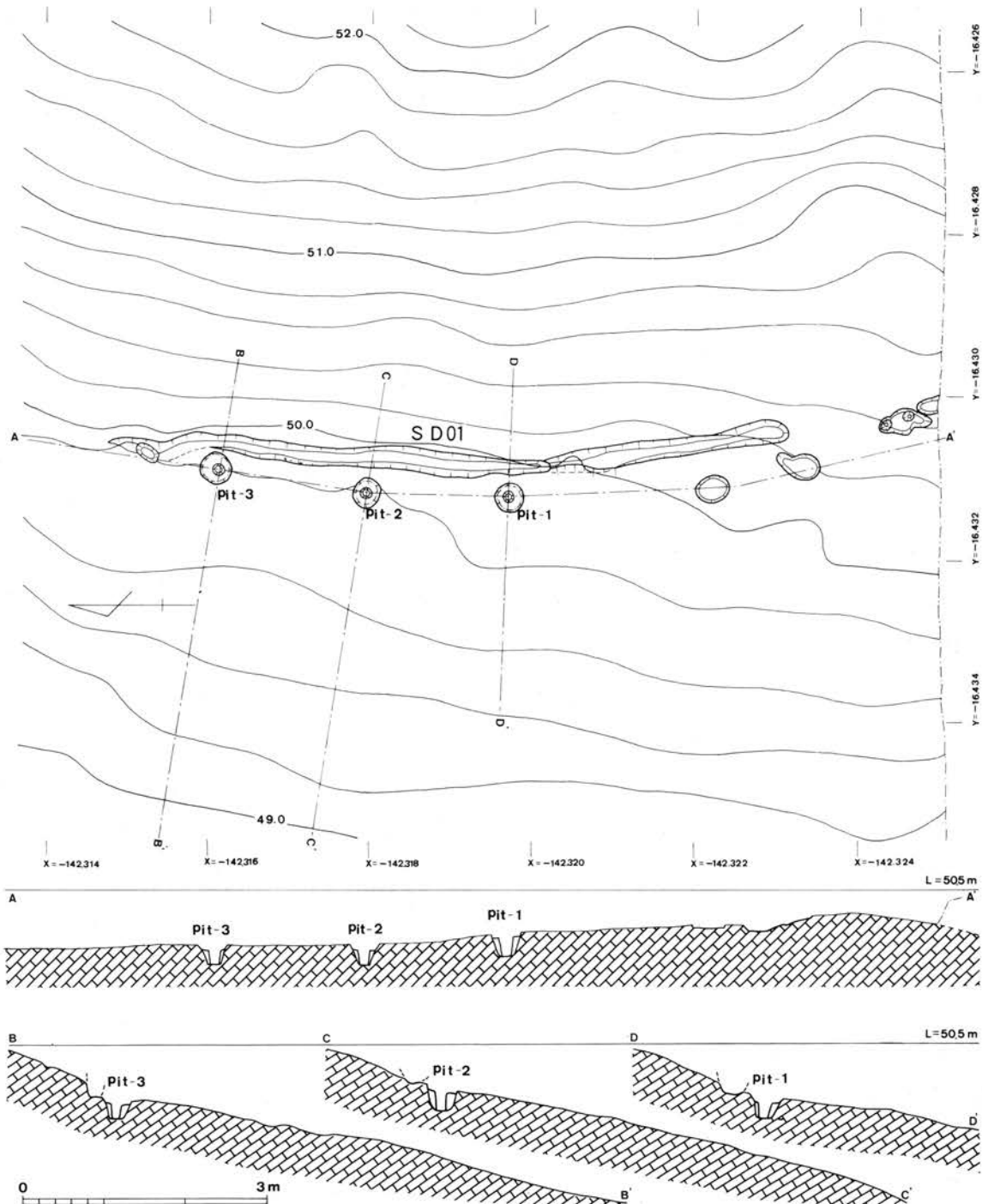
- | | |
|-------------------------|-------------------------|
| 1. におい黄褐色細砂質土(整地土) | 12. 黄褐色砂質土 |
| 2. におい暗黄褐色細砂質土(整地土) | 13. 茶褐色砂礫(径10cm以下) |
| 3. 褐色粘質土混埴輪片・礫(径5cm以下) | 14. 黄褐色シルト混礫(径10cm以下少量) |
| 4. 黒褐色粘質土混埴輪片・礫(径5cm以下) | 15. におい褐色細砂質土混細礫 |
| 5. 明黄褐色粘質土混黒褐色粘質土 | 16. 灰褐色砂礫土(径10cm以下) |
| 6. 明黄灰色砂質土 | 17. におい黄褐色粘質土 |
| 7. 黄褐色粘質土混礫(径10cm以下) | |
| 8. 暗灰色粘質土 | 以下、地山 |
| 9. におい褐色粘質土 | a. 灰黄色シルト |
| 10. におい茶褐色粘質土混埴輪片 | b. 灰黄色砂礫(径10cm以下) |
| 11. 灰色砂質土 | c. 黄褐色シルト |

工事が必要となるため、それを避けて簡略な方法を用いたと思われる(後円部東西長約33m)。

前方部は、前述のように棚田によって大きく削平されており、特に前方部西側では基底部の痕跡すら遺存せず、わずかに前方部南側と東側で基底部の痕跡を確認するのみであった。前方部東半部では、褐色または黒褐色粘質土を埋土とする周溝状の落ち込みを確認した。周溝状の落ち込みには円筒埴輪及び蓋形埴輪片が多く含まれ、くびれ部付近に相当する落ち込みと考えられる。くびれ部付近の落ち込みは南に向かって浅くなっている。また、前方部端と思われる落ち込みも東に向かって浅くなっていることから、前方部南東角は、ほとんど地山を削り出していなかった可能性がある。前方部端に相当する南側は、東側くびれ部以上に遺存状態が悪く、標高50.5～51.2m付近に若干の落ち込みを残す程度である。また、落ち込みの南側では、中世の遺構であるSD03があるため、落ち込みの幅は判然としないが、残存幅約7.8mを測る。南端の落ち込みの埋土は、下層に拳大の円礫を多く含む茶褐色砂礫層で、その上層ににおい褐色または茶褐色粘質土が堆積しており、この層から少量の埴輪片が出土した。なお、下層の礫は、地山に含まれる礫であり、葺石の転落したものとは考えられない。このように、前方部については判然としないが、落ち込みの状況から、前方部長22.0m・前端部幅(推定)18.0mを測るとと思われる。

墳丘の外部施設のうち、現状では段築は確認できず、後円部は一段構成で築造されている。葺石については、原位置を保つものはおろか、墳丘流土中にも全く混入しておらず、当初から葺かれていなかったと考えられる。埴輪は、原位置を保つ個体はないものの、墳丘流土中や墳丘周囲の谷水田部、墳頂部攪乱坑などから出土しており、その分布の偏りなどから墳頂平坦部と墳丘裾

の外周に埴輪(円筒・形象)が樹立されていたことが想定できる。また、後円部西側の墳丘裾に小規模な断面「U」字形の素掘り溝(S D01、幅約0.2m・深さ約0.15m)が、円弧長約8.0mにわたって検出された(第11図)。この素掘り溝に接するようにピット3基が1.8m間隔で並んでいた。ピットは、比較的深い柱当たりを残しており、木製樹物(木製の埴輪か)の掘形の可能性もある。ただ、このようなピットを伴う小規模な溝がすべての墳丘裾にめぐらされていた痕跡はなく、おそらくこの西側の一面にのみ構築された施設と考えられる。この場所は、平野側から1号墳を見た場合、後円部の中心を指向する正面にあたり、墓前儀礼に関わる遺構とみることもできよう。



第11図 瓦谷1号墳墳丘裾ピット列実測図

(2) 墳頂部の埋葬施設

調査前の墳頂部は、南側が東西方向に直線状に削られた落差約1.0m程度の崖状を呈していた。しかし、それは、調査前の墳頂平坦部を大きく変形させるものではなく、その南縁をかすめる程度であった。

この改変部を除く墳頂部は、凹凸のない整美な平坦面を呈しており、内部施設(埋葬施設)の盗掘を目的としたような土坑の形跡は全く認められなかった。ところが、表土を除去して調査を進めていくと、直径1.0m前後の円形の土坑が、ほぼ一定の間隔を保って10か所ほど確認された。また、墳頂の中央やや西寄りの地点で、埴輪や鉄器の小片が埋土に混入する南北方向の長円形の土坑の存在も確認した。両者とも埋土中に腐植土や白色粘土ブロックが混じっていたので、古墳築造時の構造物とは考えられないため、まず、これらを掘り下げた。その結果、円形の土坑は、壁面が垂直に近い正円筒形を呈しており(深さは検出面から約1.5m弱)、地元の人々の聞き取りによると、戦時中から昭和20年代にかけて、墳丘が芋畑として開墾されたときの収穫物の貯蔵施設(芋穴)であることが判明した。

一方、墳頂中央に穿たれた長円形の土坑は、検出面では比較的円形に近かったが、深くなるにしたがって、南北方向に細長くのびていくようすが確認できた。この土坑壁に精良な白色粘土が認められたことや、埋土から遺物が出土したことなどから、盗掘を目的に掘削された土坑であることが容易に認識できた。

このことから盗掘の手順を推定すると、まず円形に近い縦坑を白色粘土層を越えて一部地山層にまで達するまで掘削し、おそらく副葬遺物が得られたため、粘土層がのびていく深さと方向を確認した上で、今度は南北方向に向かって掘削の手をのばしていったと考えられる。なお、このような盗掘の手口は、南山城地域のほかの古墳でも多々認められ、同一集団による組織的な行為と推測することもできる^(注4)。

これらの盗掘坑や芋穴は、昭和30年代以降の竹林の植栽によって完全に埋められ、現在に至るまで平坦面を保っていたと解釈される。

なお、前述した既掘坑を掘り下げて壁面の断面を観察した結果、墳頂部中心点よりやや西に偏った地点で精良な粘土を多用した埋葬施設が、また、これと東に接する地点で粘土を全く用いない埋葬施設がそれぞれ主軸を南北にとって、東西に並設されるかたちで構築されていることが判明した。両者は、墓壙に重複関係が認められ、西側の粘土を多用した埋葬施設が、東側の埋葬施設に先行することが観察できたため、構築順にしたがって西側の埋葬施設を第1主体、東側を第2主体と呼称することとする。

両埋葬施設は、互いの墓壙が接する側で、わずかに切り合っている。後出する埋葬施設は、先行する施設の棺本体及びその長側辺に設けられた遺物床を意識的に破壊していない。さらに、両主体の中間に墳頂中心が位置することを考慮すると、当初から2棺並葬を予定していたことがうかがわれる。両主体の時期差は、先行する主体部の位置が記憶されている段階での追葬とみるのが妥当と思われる。

A. 第1主体(第12~15図、図版第66~73)

①第1主体(粘土槨)の構造

現状では、埋葬施設のはほぼ中央に棺の主軸方向にのびる長円形プランの盗掘坑が、また、北西と南端に近年の芋穴が存在し、遺構の一部が破壊されている。

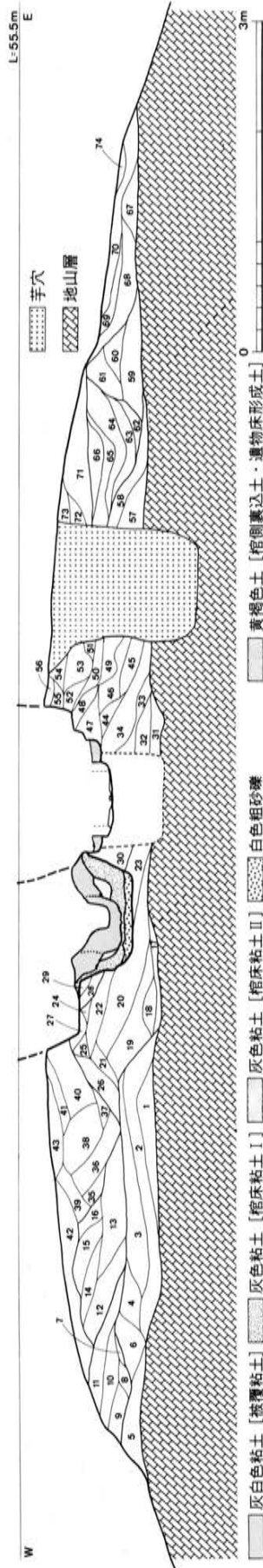
墓壙は、墳丘を盛り土成形して完成させた後、その上面から2段に掘り込む構造をとっている(掘り込み墓壙)。平面形態は、長辺・短辺ともに直線状を呈する南北に長い長方形(主軸方位N-9°-W)で、検出面での規模は、長辺約7.8m・短辺約2.5m、検出面からの深さ約0.3mを測る。現存する上段墓壙の立ち上がりの勾配は、一律に63°という比較的ゆるい傾斜を示す。ただ、築造当初の墳頂面が相当削平を受けて、現状ではその下半部を残すにすぎないと思われる。下段墓壙は、上段墓壙底の内側を南北に細長く掘り下げており、いわゆる木棺を固定するための棺床粘土を設置するための掘形である。ちなみに、このような形態の粘土槨の棺床構造は、都出比呂志分類のNC型式(墓壙底を「U」字形に掘りくぼめて粘土を貼り付け、粘土床とするもの)^(注5)、または、山本三郎分類のE型式(墓壙中央の棺床粘土を設置する個所を「U」字形に掘りくぼめているもの)^(注6)の範疇で捉えられる(第13図)。

その構造を詳しくみると、下段墓壙は、上段墓壙底の外縁部から長側辺側では0.45~0.7mの、北小口部では約0.25mの距離で掘り込まれている。下段墓壙の平面形は、南小口部が芋穴で完全に破壊されていて不明であるが、北側の短側辺が上段墓壙に比べてやや丸みを持ち、長側辺は東・西辺ともにほぼ直線状を呈している。また、その東西幅は南側ほど狭くなる。その規模は、長軸長6.8m・北幅1.2m・南幅(残存幅)0.9mである。下段墓壙の横断面形は、「U」字形というよりも各辺が直線的な逆台形を呈し、上縁幅約1.2m・下底幅約0.7m・上段墓壙底からの深さ約0.5mを測り、長側壁の立ち上がりの勾配は約60°である。長軸方向の断面形は、盗掘坑や芋穴の影響を受けて全容は不明である。ただ、底部はほぼ平坦で、その比高差は残存部の南端と北端の間で約0.04mを測り、北側に向かってわずかに高くなる。北小口の縦断面は、横断面の形状と異なり、ゆるやかに内湾するように立ち上がる。

槨の構築は、棺床及び棺上とも基本的には粘土を用いて入念に造っている。

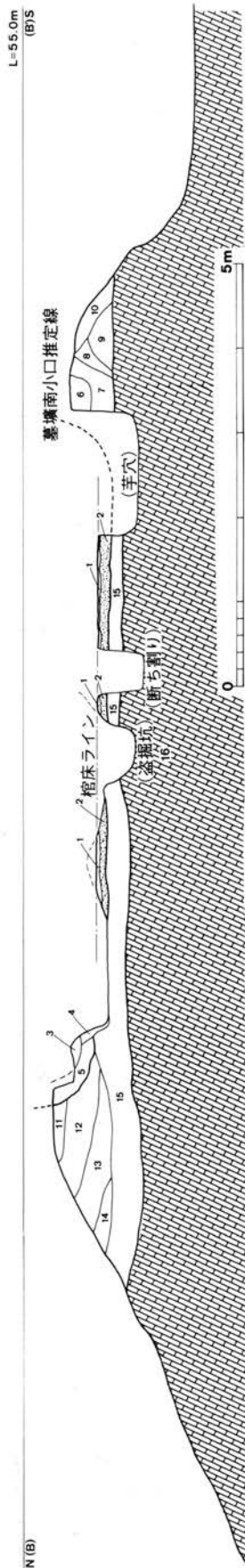
棺床施設は、平坦な下段墓壙底に小礫混じりの粗砂を均等に敷き(厚さ約0.1m)、その上に灰白色の精良な粘土を用いて棺床を形成している。なお、棺床粘土の構築には2段階の工程がみられる。すなわち、粗砂上に設置する粘土は、槨の中でも最も精選された灰白色の粘土を用いて、底面付近の幅約0.4mの範囲で非常に薄く敷いている(厚さ約0.05m)。その形状は、長側方に向かって内湾するように立ち上がり、外方に屈折して水平面を形成する。この粘土はさらに長側方に向かって大きく立ち上がり、その末端は一部上段墓壙底面を覆う(棺床粘土I)。第1段階の粘土床にみられる階段状の構造は、東側が顕著で、テラス面の幅は北側ほど広い(横断面観察ライン上で幅約0.15m、盗掘坑以北で約0.25mを測る)。

第2段階では、木棺と第1段階の棺床粘土のすきまを埋めるように、第1段階の粘土のテラス面を中心に、やや質の劣る灰白色粘土を充填する(棺床粘土II)。この充填された粘土の上面ライ



第13図 瓦谷1号墳墳頂部断面図(内部施設横断面図)

- | | | | |
|----------------------|---------------------|-----------------------|-------------------|
| 1. 黄茶色土(灰白色土混) | 20. (淡)褐灰色土 | 39. 灰褐色土 | 58. 茶灰色土(淡褐灰色土混) |
| 2. 淡灰褐色土 | 21. 灰褐色土 | 40. 茶褐色土 | 59. (暗)黄茶色土 |
| 3. 褐灰色土(茶灰色土混) | 22. (淡)灰褐色土 | 41. 明茶褐色土 | 60. 淡褐灰色土 |
| 4. 黄茶色土 | 23. 灰褐色土 | 42. 黄茶色土 | 61. 茶灰色土 |
| 5. 黄茶色土(淡黄白色土混) | 24. 褐灰色土 | 43. 淡灰褐色土 | 62. 茶灰色土(淡褐灰色土混) |
| 6. 茶褐色土 | 25. 淡褐灰色土(淡茶褐色土混) | 44. 灰褐色土 | 63. 灰褐色土(白色土混) |
| 7. 褐色砂土 | 26. (淡)褐灰色土(灰白色砂土混) | 45. (暗)灰褐色土 | 64. (暗)灰褐色土(白色土混) |
| 8. 淡灰褐色土(灰白色土混) | 27. 黄褐色土 | 46. 淡褐灰色土(灰白色土混) | 65. 灰褐色土(淡灰色土混) |
| 9. 黄茶色土 | 28. 黄茶色土 | 47. 黄茶色土 | 66. 茶褐色粗砂土 |
| 10. 茶灰色土 | 29. 褐灰色土 | 48. 淡褐灰色土(灰白・黄褐色土混) | 67. (暗)茶褐色粗砂質土 |
| 11. 茶褐色土 | 30. 淡黄茶色土 | 49. 灰褐色土(灰白色土混) | 68. 茶黄色土(茶灰色土混) |
| 12. 褐灰色土(茶灰色土混) | 31. 黄茶褐色土 | 50. (暗)黄灰色土 | 69. 黄茶色土(白色土混) |
| 13. 灰褐色土(灰白色砂土混) | 32. (暗)灰褐色土 | 51. (暗)黄灰色土(灰白色土混) | 70. (暗)黄茶色土 |
| 14. (淡)茶褐色土 | 33. (暗)褐灰色土 | 52. (淡)灰褐色土(灰白・黄褐色土混) | 71. 黄灰色細砂質土 |
| 15. (淡)茶灰色土 | 34. 灰褐色土(灰白色土混) | 53. 淡褐灰色土(灰白色土混) | 72. 淡褐灰色土(黄色土混) |
| 16. (淡)茶灰色土(灰白色砂土少混) | 35. 茶褐色土 | 54. 淡灰褐色土 | 73. 茶灰色土 |
| 17. 淡黄白色粘質土 | 36. (暗)茶褐色土 | 55. (暗)黄灰色細砂質粘土 | 74. 茶灰色粗砂質土 |
| 18. 黄茶色土 | 37. 黄褐色粘砂土 | 56. 淡黄褐色土 | |
| 19. 淡褐灰色土 | 38. 灰褐色土(灰白色砂土混) | 57. 灰褐色土(下縁は黄褐色に酸化) | |



第14図 瓦谷1号墳墳頂部断面図(第1主体完掘段階 縦断面図)

- | | | | | | |
|-------------------|-------|-----------------|-------|---------------------|-------|
| 1. 淡灰色粘土 | 棺床粘土 | 7. 明黄褐色土(白色砂土混) | 墳丘盛り土 | 13. 淡黄灰褐色土(淡灰色粘土混) | 墳丘盛り土 |
| 2. 淡褐灰色粗砂礫 | 棺床砂礫 | 8. 黄褐色土 | 墳丘盛り土 | 14. 黄茶色土 | 墳丘盛り土 |
| 3. 黄褐灰色粘質土 | 盗掘坑埋土 | 9. 淡黄褐色土(白色砂土混) | 墳丘盛り土 | 15. 黄茶褐色粘質土 | 墳丘盛り土 |
| 4. 淡灰色粘土(淡灰色粗砂礫混) | 盗掘坑埋土 | 10. (暗)黄灰色土 | 墳丘盛り土 | 16. 淡褐灰色土(下ほど黄灰褐色土) | 地山 |
| 5. 黄茶色土(軟質) | 墳丘盛り土 | 11. 明黄灰色土 | 墳丘盛り土 | | |
| 6. 黄茶色土 | 墳丘盛り土 | 12. (淡)黄褐色土 | 墳丘盛り土 | | |

ンは、第1段階の粘土の上縁が描く線とほぼ一致し、水平に対して約26°の角度で棺に向かって内傾している。後述する棺長側辺の遺物は、この内傾面に置かれたものである。なお、赤色顔料は、上下両方の棺床粘土面にみられるが、いずれも棺に接する側のみ残っており、粘土と粘土の境界や、遺物が置かれた内傾面、すなわち棺に接しない面には認められなかった。

棺材は、完全に腐って遺存していなかったが、棺床粘土に残された痕跡から復原すると、その棺身部分の横断面形状は、半円形ではなく、底部が平坦に近い偏平な刳り抜き式の木棺(一種の割竹形木棺)と推定され、その規模は全長約6.0m以上、幅は北端で約0.8m、南端で約0.6mを測る。

小口の構造及び閉塞方法は、北端部でも、盗掘坑掘形が木棺北小口付近まで達しているため、詳細は不明である。ただ、この部分の縦断面観察によると、幅約0.03mの粗悪な土混じりの粘土の帯が棺の中央に向かって内傾している状況を確認できる。このことから、少なくとも小口板を棺の端に当てがうのではなく、筒状の木棺の端から少し内側に入ったところに小口板が設けられ、その外側に比較的精良な灰白色の粘土塊を入れて小口板を固定していたと推定される。

棺上の被覆にも粘土が用いられる。ただ、この粘土は、棺床粘土と比べてやや粗悪で、わずかに黄灰色土の小ブロックが混入する。被覆粘土は、木棺

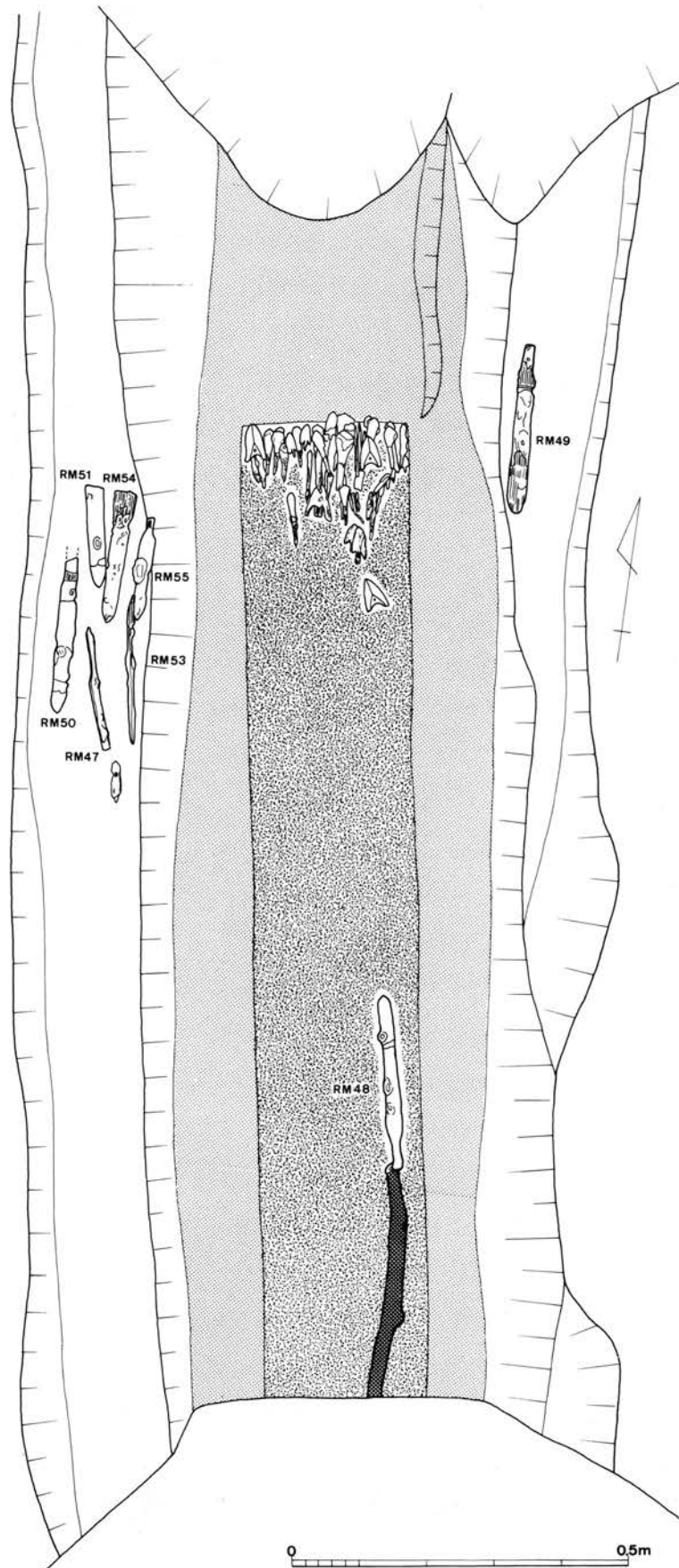
の腐朽に伴って、中央部が大きく陥没している。棺長側の旧状を保つ部分でみると、被覆粘土の開始部分は、棺床粘土よりも内側の上段墓壙底の平坦部にある。

②第1主体の副葬遺物の出土状態

第1主体に伴う出土遺物は、原位置を保つものはいずれも粘土槨内に副葬されており、出土位置から大きく棺内・棺外に分けられる。また、これ以外に盗掘坑及び芋穴埋土からも出土している。

棺内遺物は、盗掘坑を境に南北に分けられる。北側では鉄製短甲・鉄製冑・鉄製工具・鉄製漁具などが出土している。しかし、その出土状態は、棺底直上まで盗掘による攪乱が及んでおり、鉄製武具類などは、それを構成する個々の部材の状態に散乱している状況であった。なお、この鉄製武具が出土した範囲に限り、棺床上面が暗紫灰色に変色していた。この変色部分は、漆のような膜状ではなく、棺内にまかれた赤色顔料と同じく細かい粉状を呈しており、有機質素材で構成された武具付属具の痕跡とも考えられる。

一方、盗掘坑以南の棺内で



第15図 瓦谷1号墳第1主体遺物出土状況図(南端部)

は、鋒を北に向けた鉄鏃46点・鏃形石製品3点(RQ-1~3)により構成される矢鏃の集積(RM-1~46、RQ-1~3)と、鉄剣状利器1口(RM-48)が出土した。これらの遺物と重なるように、棺床粘土上に幅25cm・長さ145cm以上(南端は芋穴に切られている)の赤茶色を呈する長方形の変色域が認められた。総数49点の矢鏃は、3段重ねにしてこの変色域の北端に配し、変色域の北端から0.8m南で、この変色域のやや東寄りに鋒を北に向けた鉄剣状利器(RM-48)が置かれていた。また、矢鏃の集積から鉄剣状利器までの変色域を詳細に観察すると、棺の長軸方向と平行する振幅1cm未満の波板状の起伏がわずかに見られる。鉄剣状利器の茎の延長線には、やや弓なりに曲がる幅2.5cmの黒褐色の帯状の変色部分が認められた。おそらく、矢柄の痕跡、後者は柄に塗られた黒漆の皮膜が風化したものと考えられる。そして、赤褐色の変色域は、これらの武器を収納した木製の容器(盛矢具か)の痕跡かもしれない。

棺外遺物は、盗掘坑以南に限られる。盗掘坑以北にも遺物を副葬できる空間は十分あり、棺床粘土の上半に設けられた遺物床も広く確保されている。しかし、この部分からは、副葬品は確認できなかった。

副葬品が配列された盗掘坑以南の状況を見ると、ちょうど棺内に矢鏃が集積する場所の東西両側の遺物床に茎式の長柄の武器の武器とみられる鉄槍が鋒を南にして、西側に6口(RM-47・50・51・53~55)、東側に1口(RM-49)が副葬されていた。いずれも、穂先(槍身)を残すのみで、茎から続く柄の部分の痕跡は確認できなかった。これより北側の遺物床には副葬品がないことから、北側にはこれらの鉄槍の長柄が展開していたかもしれない。

盗掘坑埋土中からは、おそらく棺内北寄りに副葬されていたと推定される鉄製武具や工具・漁具の類が碎片になって出土している。

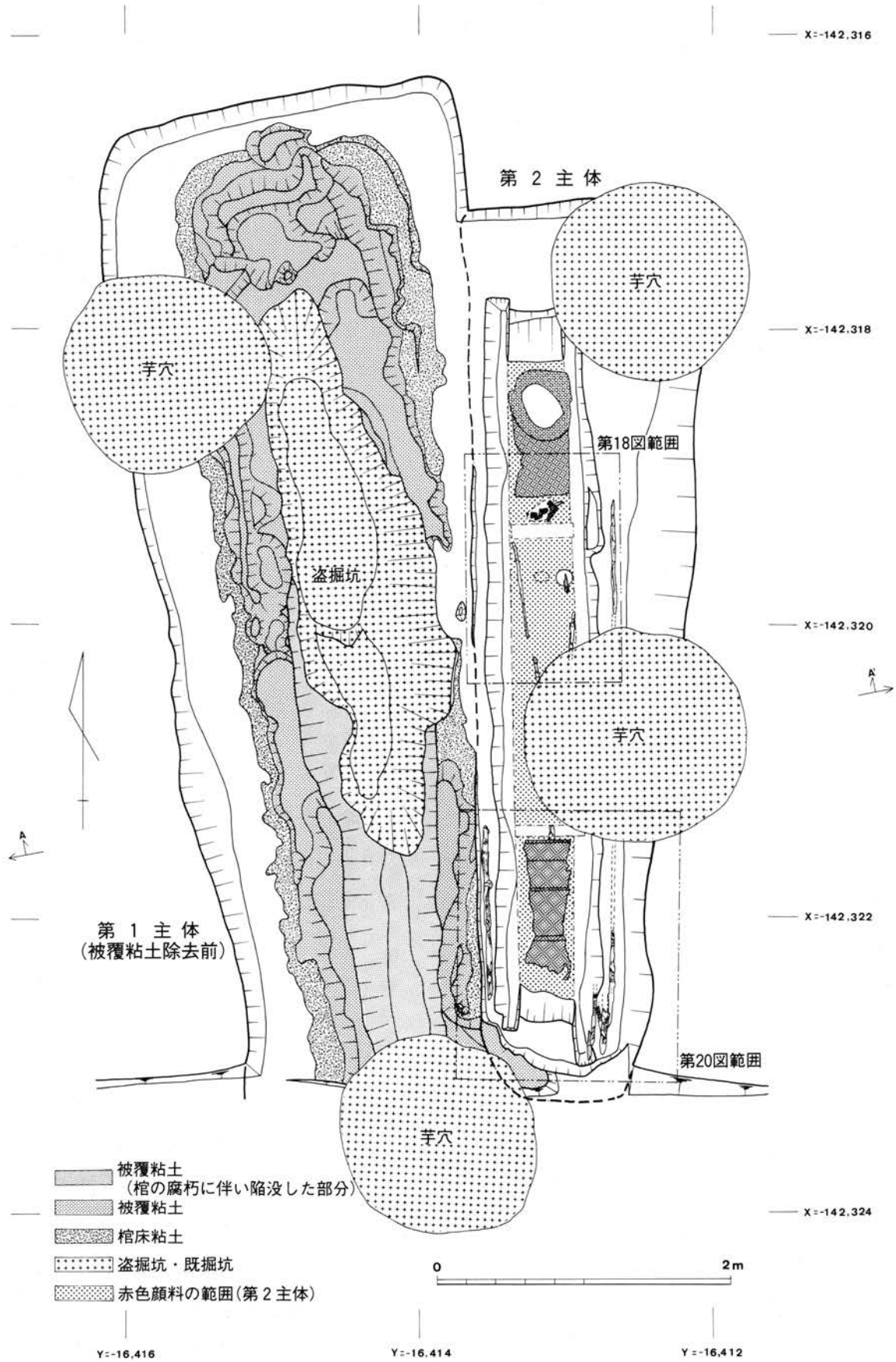
B. 第2主体(第16図、図版第74~78)

①第2主体の構造

第1主体のすぐ東側で、主軸をやや東に振って(ほぼ座標北方向)営まれた埋葬施設である。現状では、北東隅と中央東寄りが芋穴によって攪乱されているが、盗掘は受けていない。

墓壙は、基本的には2段に掘り込まれている。上段墓壙は、第1主体の上段墓壙に比べてやや小規模で、長辺・短辺とも直線状を呈し、若干北に開く矩形ぎみの長方形プランを呈する。検出面での長辺主軸長約6.1m・北側幅約1.8m・南側幅約1.6m、検出面からの深さ約0.4mを測る。下段墓壙は、平坦でほぼ同一レベルを保つ上段墓壙底の中央部に設けられており、これは棺を設置する際の掘形の役割を果たす。下段墓壙を横断面で観察すると、長側壁は2段の階段状を呈し、下半部の壁は垂直で、直接棺の長側板の基底部と接している。下段墓壙の上半部は、棺材固定のための裏込めとして、約0.1mの厚さまで埋め戻されて、その上面は水平にならされ、棺長側の遺物床を形成している。下段墓壙の下半部分の平面形は、棺の規模と形状を反映しており(最大長約5.2m・幅約0.7m)、両小口側は、棺の長側板の形態に合わせて南北とも主軸方向に突出している。

棺は、棺材こそ完全に腐ってなくなっていたが、下段墓壙の下半部の形状から内法長約4.3



第16図 瓦谷1号墳主体部平面図(2) 第2主体遺物出土状況図

m・同幅約0.4mを測る組合式木棺と推定される。棺内に塗布された赤色顔料が長側板内壁に沿って直線上に終わることから、木棺の底板は存在したと推定される。また、一枚の板材で構成された底板の上に設置された両長側板は、赤色顔料の終わるラインが直線状を呈することから、両長側板も一木の板材を用いたとみられる(西側の長側板の長さ約4.96m・厚さ約0.1m、東側の長側板の残存長さ約4.98m・厚さ約0.1m)。

小口側の閉塞は、長側板の端の小口側への突出が左右(東西)で一致しないことや、棺内の赤色顔料の塗布面が長側端より内側で直線状に終わることから、長側端より内側に小口板をはめ込む形式であったことがうかがわれる。^(注7) 棺内には、それぞれの側板が組まれた後、赤色顔料(ベンガラと水銀朱)が塗布されるが、両小口の間に2か所、赤色顔料が一定の幅で途切れる部分があり、ここに仕切り板の存在を想定できる(北側仕切り板の厚さ0.1m・南側仕切り板の厚さ0.08m)。したがって、棺内は、2枚の仕切り板によって3つの空間(室)に区分される(内法長は北から順に約1.1m・約1.95m・約1.1m)。

②第2主体の副葬遺物の出土状態

第2主体に伴う遺物は、出土位置から棺内と棺外に分けられる。棺外遺物は、下段墓壙の棺材を安定させる目的で置かれた裏込め土によって形成された遺物床に置かれていた。

棺内は、南北2枚の仕切り板によって3つの空間に分離される。中央の空間が最も長く、人骨の一部が出土したことから、2枚の仕切り板に挟まれた部分を主室と称し、この主室の南北に隣接し、人体埋葬の痕跡のない空間を副室と称することにする。副室は、北小口から北側の仕切り板までを北副室、南側の仕切り板から南小口までを南副室と呼称して、以下に遺物の出土状態について記述する。

棺内遺物のうち、北副室では、北側3/4ほどの範囲に、環状の漆膜と、その南側に一部重なるように底辺を南に向けた台形を呈する漆膜の広がり認められた(第17図、図版第76)。各漆膜とも非常に残りが悪く、皮膜状に残る部分はわずかで、棺底を構成する土が上記の範囲で薄い黒褐色に変色するような状態であった。しかし、その変色域を細かく観察すると、環状のものには同心円状の繊維質の細い帯がいくつも重なり、この同心円間を橋渡しするような放射状の帯状の組織が断片的に認められた。この環状の漆の広がり東西方向の外縁は、ほぼ棺の内法幅に達するが、外縁からの幅約10cmを残してその内側には漆の痕跡は全く認められなかった。この漆膜は、環状を呈する点と、漆の皮膜部分に認められる綾杉文とも見られる文様から判断して、皮革などの有機質素材を素地として、その上に繊維で加飾して黒漆を塗布した草摺^(注8)と思われる。

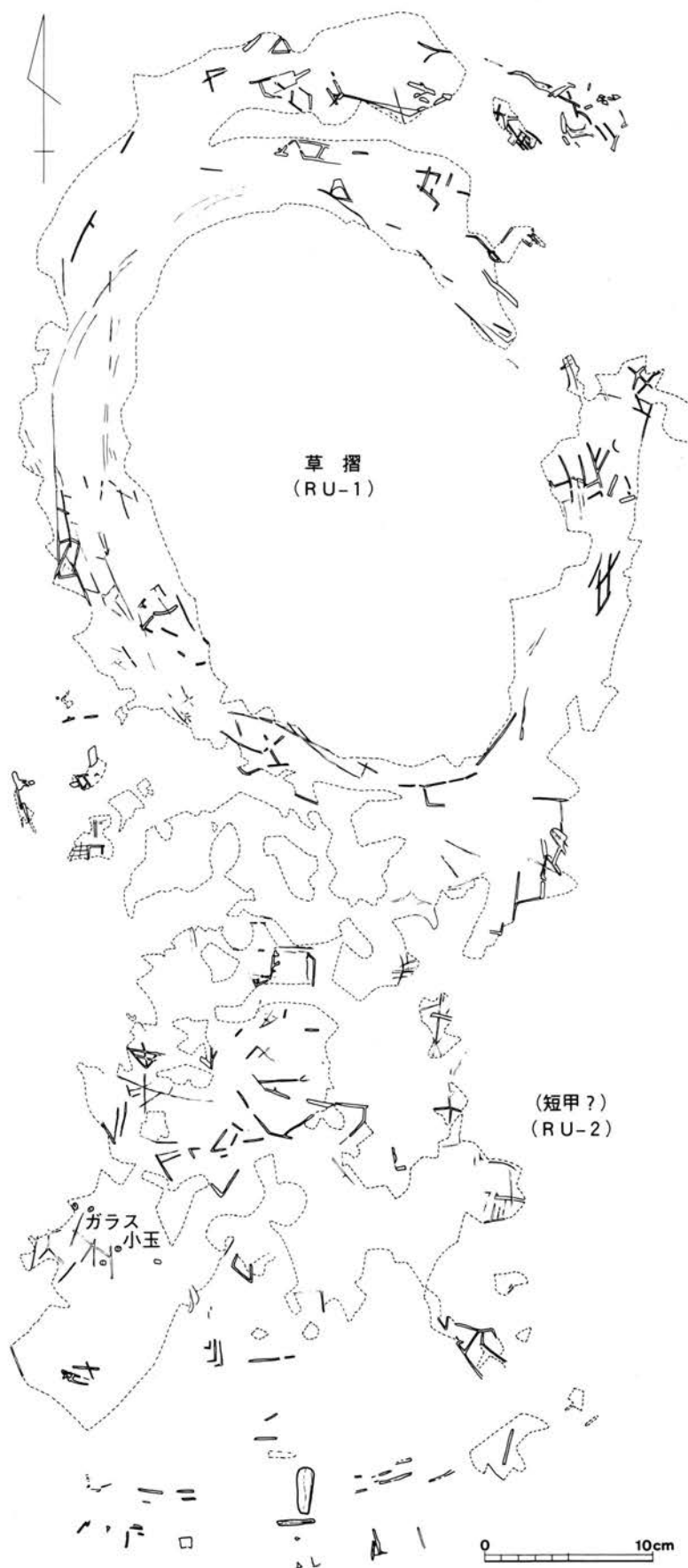
環状漆膜の南に広がる漆黒色の変色範囲は、西縁が外反する曲線を描いて南側にスカート状に広がるラインを示す。これと対称となる東縁ラインは、残存状態が極めて悪く、同じような曲線を追求することは困難である。ただ、調査の過程で、西側と同じような曲線を描いて南側に広がる痕跡を確認している。また、南端部では、漆の面的な痕跡は見い出せなかったが、二重三重の外側にゆるく円弧を呈する繊維の筋が横方向に断片的に残されている。このような両側辺が北側から外反しながら南に広がり、南端が円弧を描いて外側に膨らむ製品は、その規模や形状、ある

いは第1主体の副葬遺物の配置状況との比較などから、有機質素材を素地にした漆塗り短甲とみることができる。^(注9)

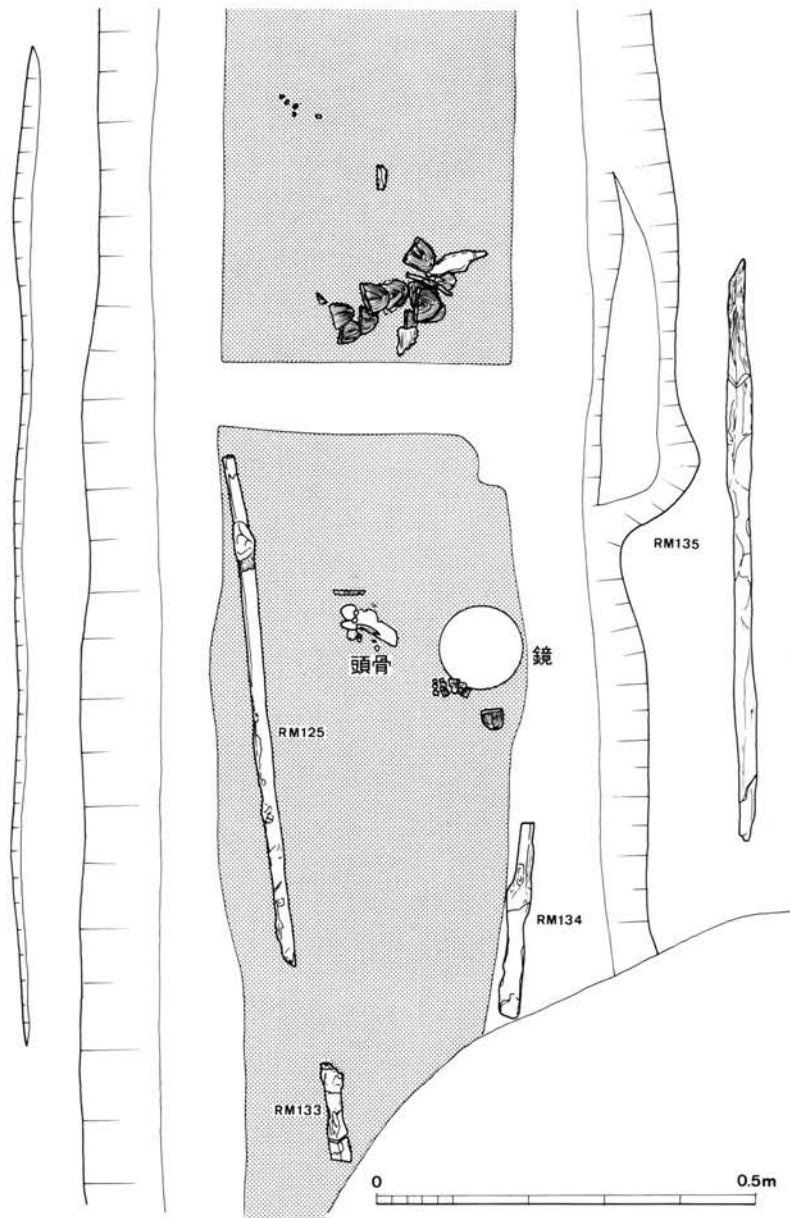
この漆塗り短甲の西縁の途中でガラス小玉5点が出土した。個々の玉は連なっておらず、約6cmの範囲に散乱していた。すべてが前述の漆膜の広がりの中に納まるが、漆を被ったものはなく、その上に載った状態で出土している。

漆塗り短甲と北側の仕切り板との間の狭い空間に、竪櫛の集積と刀子・針状鉄器各1点が出土した(第19図、図版第135)。竪櫛は、遺存状態が悪く、個別に取り上げることはできなかったが、18点確認した(RU-3~20)。いずれも、ムネの部分を残すのみで、歯はほとんど失われている。それらは、すべて歯先を西方に向け、その多くが東西方向に縦列に重なるように配されている。

刀子(RM-137)は、この竪櫛の集積に重なるように、その東寄りで出土した。先端を折損しているが、鋒を東に、刃先を南に向ける。



第17図 瓦谷1号墳第2主体北副室有機質地漆塗り短甲・草摺出土状況図



第18図 瓦谷1号墳第2主体遺物出土状況図(中央部)

針状鉄製品(RM-138)は、刀子のすぐ南側に位置する直径3mm程度の円形断面をもつ鉄製品で、先端を東に向けており、縦列する豎櫛群の北縁に沿って約6.0cmのびる。

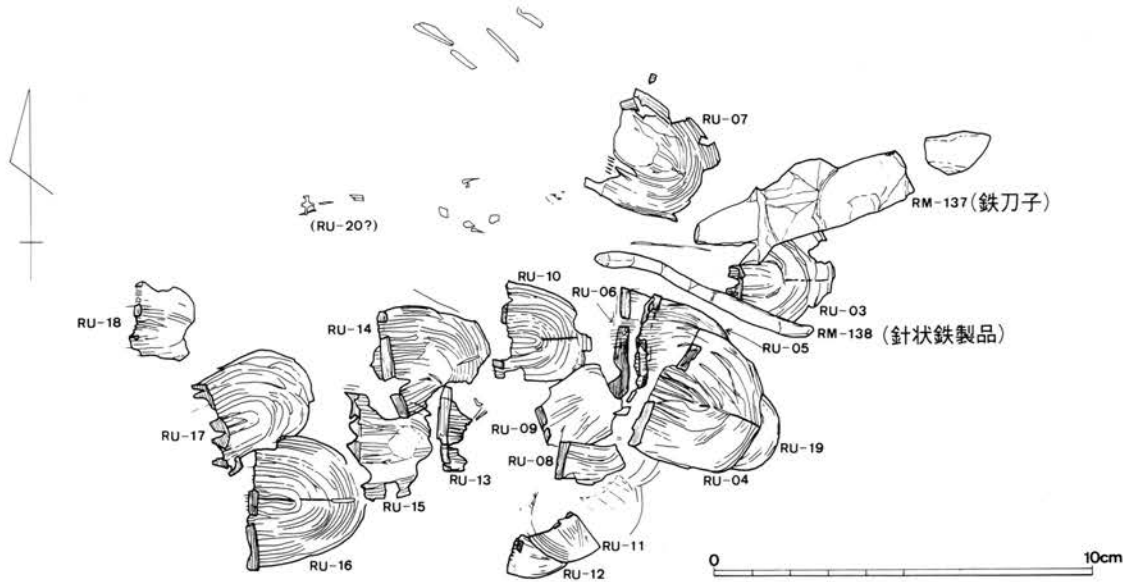
主室は、主軸長が約2.0mと成人埋葬が十分可能な容積で、人骨の一部が確認されている。主室と北副室を画する北側の仕切り板から南0.2~0.5mの部分で、赤色顔料(水銀朱)^(注10)がひとときわ厚く堆積する領域(南北約0.3m・東西約0.35m)があり、そこから頭骨の一部と歯を検出した。頭骨は、歯との位置関係からみて下顎骨とみられるが、具体的な部位は不明である。歯も顎骨の歯槽の輪郭か、歯そのもののエナメル質部分のみが環状に残ったものか区別ができない。遺存状態は

非常に悪く、単体で取り上げることはできなかった。ただ、頭骨の位置から埋葬頭位が北枕であったことが確認できる。なお、頭骨に続く胴骨・四肢骨は、その痕跡すら残されていなかった。

頭骨のすぐ東側で、長側板に接するように完形の銅鏡(獸首形鏡)1面が鏡面を上に向けて出土した^(注11)。鏡面上には赤色顔料・木質・豎櫛の歯などが見られた。このうち、木質は、鏡背側には全くなく、棺材のうち側板か棺蓋の残欠とみられる。

銅鏡のすぐ南側には、豎櫛のムネの部分が2~3個体、歯を北に向けて副葬されていたが、銅鏡と重なる個体には、鏡面部分に限り歯が残存していた。

遺骸の頭部の西側には、鉄刀1口(RM-125)が鋒を南に、刃先を西に向けて、棺主軸に対して鋒側がやや棺中軸寄りに斜行するように置かれていた。刀身や茎部分に木質や有機質の付着は全く認められず、鞘の存在は否定的である。



第19図 瓦谷1号墳第2主体棺内北副室竪櫛出土状況平面図

この鉄刀と軸線をそろえて南側0.12mのところ、刀剣1口(RM-133)が副葬されている。しかし、これは、主室の南半を大きく攪乱する芋穴によって、身(刃部)の部分を欠落しており、茎の部分のみ原位置を留めている。もはや、刀か剣かの区別はつかない。

これら縦列する刀剣の東側の長側板の痕跡の中に、鋒を南に向けた抜き身の鉄剣1口(RM-134)がある。この個体も刃部の大半を芋穴によって失っているため、全体の形状や大きさは不明である。ただ、出土地点が赤色顔料の及ばない長側板の痕跡の中にあることから、側板に立てかけてあったものが、木棺が腐ったために外側に倒れたのか、あるいは芋穴掘削の際に外部からの力によって移動した可能性が考えられる。

南副室からは、矢を納めた革製漆塗り鞆(盛矢具)1具が口縁側を南に向けて出土している。遺存状態は、部分的に漆の被膜が剥離しているが、比較的良好であった。特に、矢筒部の残りはよく、糸を編んで菱形の文様を構成する表面の装飾が、漆の被膜となって残されていた。ただ、鞆の底部にあたる木製と推定される底部は、遺存状態が非常に悪く、その外郭線をようやく確認できた程度である。口縁部には、鉄鏃40点と銅鏃1点が、ほぼ3段重ねで鋒を南に向けて収納されていた。

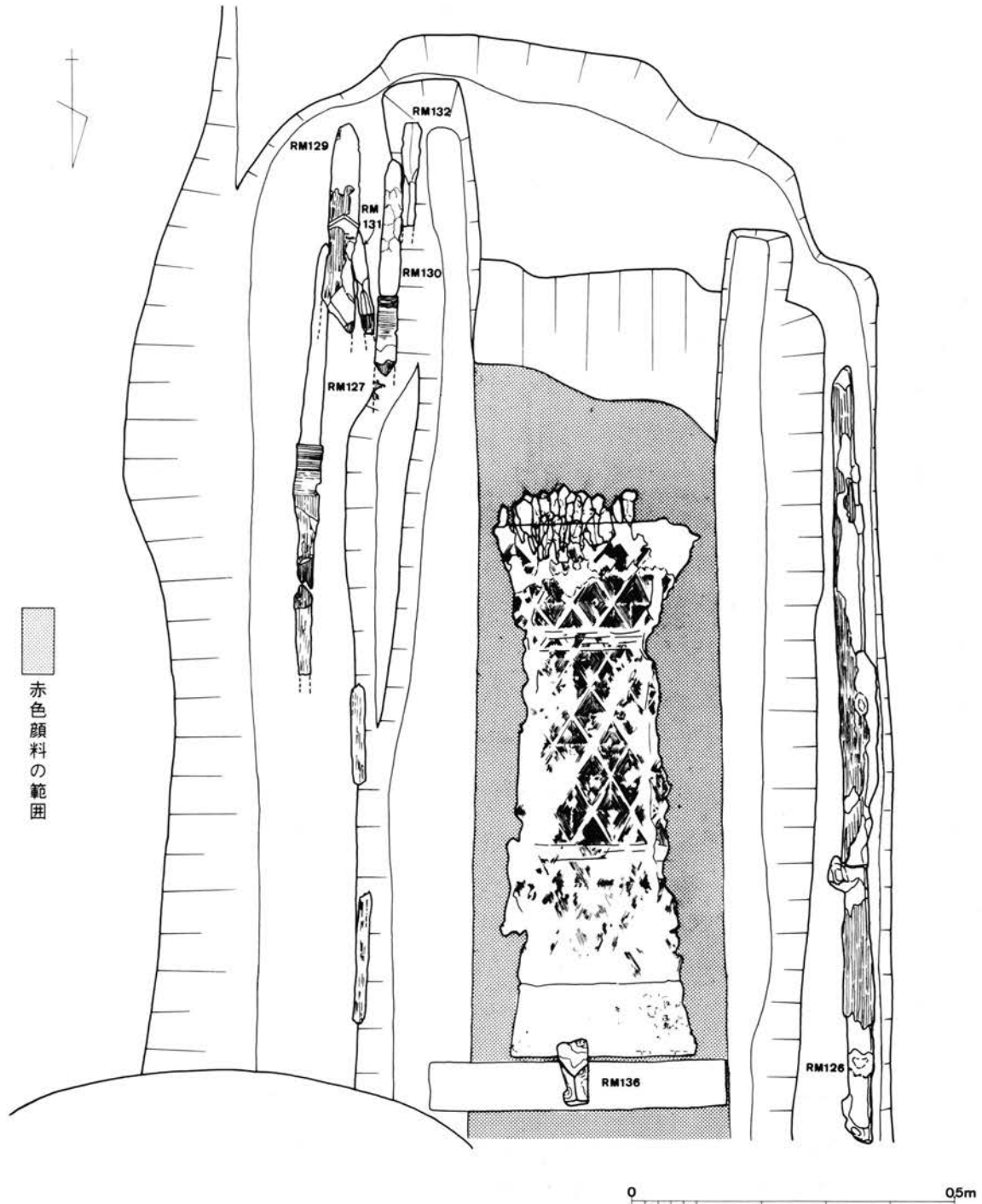
鞆の底部の上に一部重なるように鉄斧1点(RM-136)が刃先を南に向けて出土した。出土地点が、南側の仕切り板の領域と重なることから、この鉄斧は原位置を保っているとは考えがたい。仕切り板が腐って倒れ込んだのか、棺蓋上に置かれていたものが棺内に落ち込んだと見るのが妥当と思われる。

棺外遺物は、木棺の長側板が外側に倒れるのを防ぐ目的で、下段墓壙内に裏込めされた土の上面を平坦にして遺物床とし、その上に置かれていた。遺物床の棺短軸方向の幅は、東側と西側で異なっており、西側(現状で0.06~0.12m)が東側(現状で0.14~0.30m)よりも狭い。これは、西側が時間的に先行する第1主体と重複していることから、第2主体の構築に際して第1主体の粘

土槨を破壊しないという規制が働いていたと思われる。

遺物の副葬状況をみると、東西両側の遺物床に武器が副葬される。東側では、木棺の北仕切り板付近くに、穂先を北に置く鉄槍(RM-135)が鋒を北に向けて1口出土している。この鉄槍は、茎側の南延長部で直線状に黒漆の被膜が帯状にのびており、木柄の痕跡とみられるが、芋穴に攪乱されているため、全長は不明である。

東側遺物床の南端付近には、長柄をもつ刺兵の類が数個体まとまって置かれている。内訳は、鉄槍3口と鉄矛2口で、いずれも鋒を南に向けている。^(注12)配置状況は、刃部の長い細身の鉄槍(R



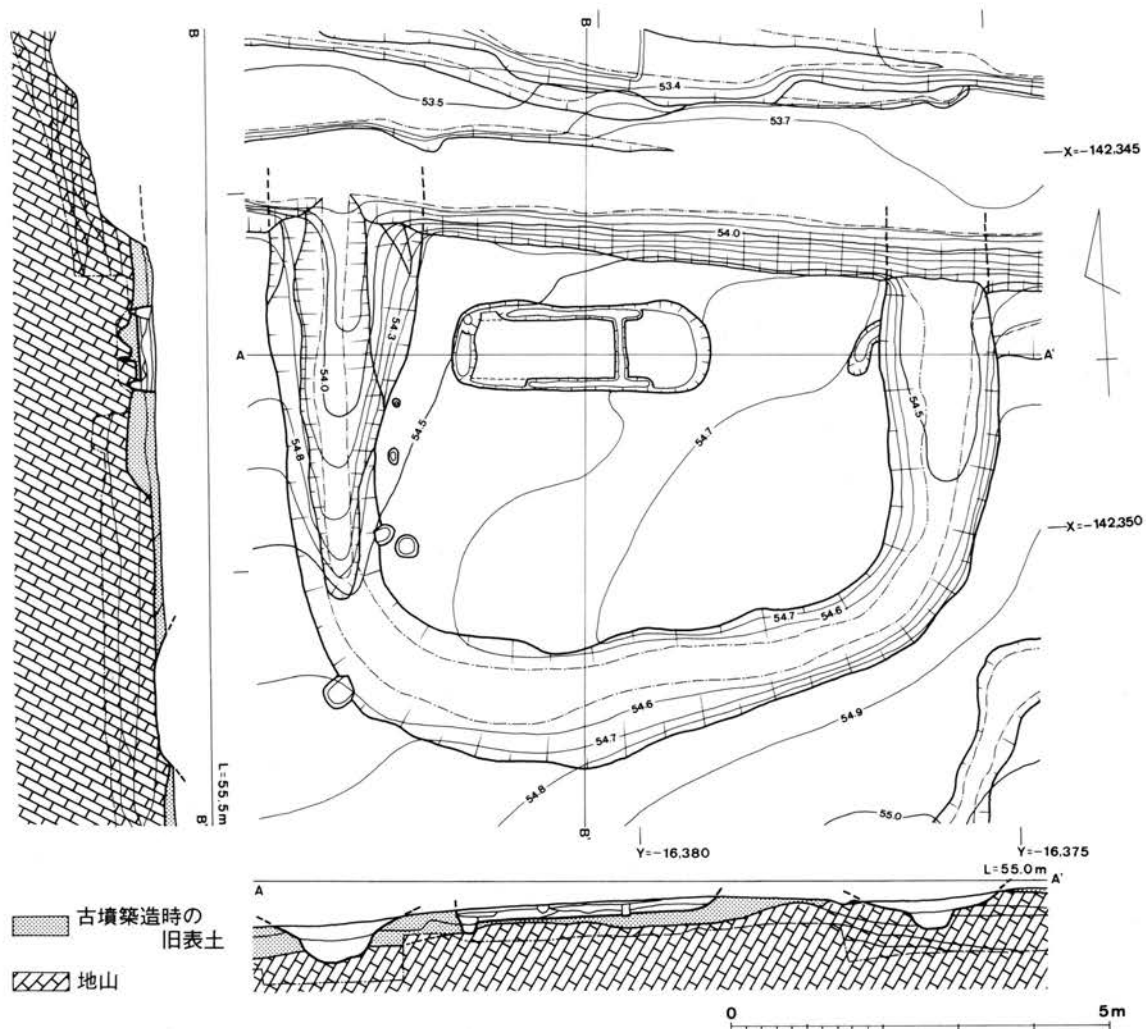
第20図 瓦谷1号墳第2主体遺物出土状況図(南端部)

M-127)と鉄矛(RM-131)が鋒をそろえて、その鋒部分に鬘部を合わせるように2者の上に刃部が幅広く短い鉄槍(RM-129)を配する。さらに、木棺側に先の鉄矛と木柄先端をそろえるように、刃部が小形の鉄槍(RM-130)1口が副葬され、最も内側に鋒を欠いた鉄矛(RM-132)が槍に接するように置かれていた。ただし、後2者は、出土レベルが他よりも低く、長側板の領域に近いことから、長側板が腐ったため棺内に向かって多少動いている可能性がある。これらの長柄の武器は、すべて木柄を伴っていたらしく、基部の延長ライン上に数条の漆膜の帯を確認している。ただ、その遺存状態は悪く、全容のわかる個体はない。

狭く造られた西側の遺物床では、木棺南副室の西に面して鉄刀1口(RM-126)が出土した。全長1mを越える大刀で、鋒を南に、刃先を東(棺側)に向ける。刃部には、木質が顕著に残り、木鞘に納めて副葬したとみられる。

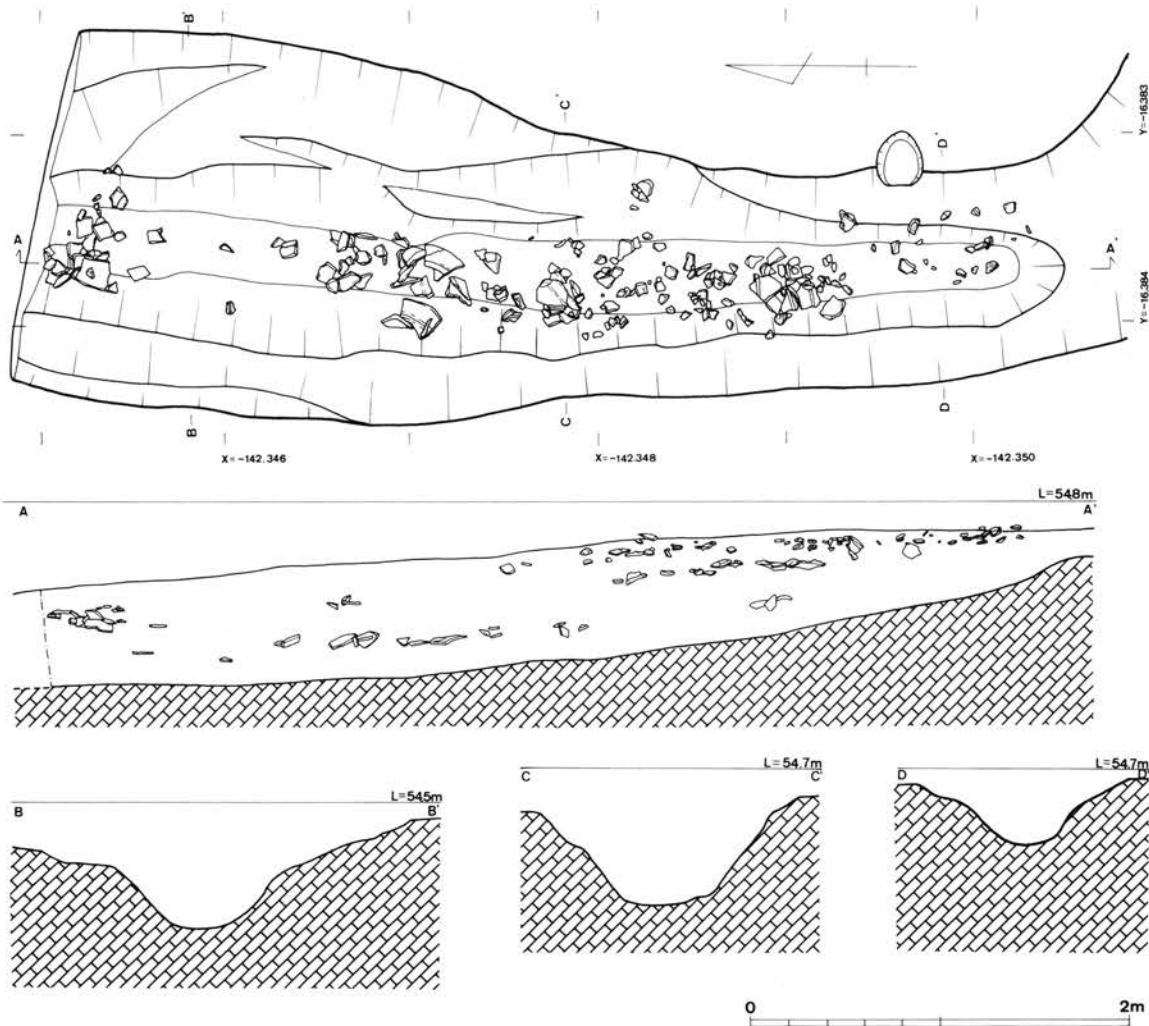
(伊賀高弘)

2号墳(第21・22図、図版第79~82) 調査区東寄りで検出した小規模な方墳である。墳丘の大半は、後世の耕作によって削平されている。中でも、北辺部では約1.5mの段差をもって削り取られている。また、遺構の大部分が位置する上段耕地部分では、南側ほど削平が激しいものの、



第21図 瓦谷2号墳実測図

溝が途切れることなく、ほぼ原形を保っている。周溝の掘削によって内側に削り出された台状部は、北辺を失うものの、全体としては隅丸方形プランを呈し、上縁間の規模は東西約7m・南北6m以上を測る。周溝は、現状では古墳時代の整地層から掘り込まれ、溝底はわずかに地山面に達する。周溝の断面形態は、ゆるやかに外上方に広がる「U」字形を基本とし、上面幅約1.0～2.0m、検出面からの深さ約0.3mを測る。西辺溝は、南西隅屈曲部から溝底をさらに深く掘り込む二段構造をとり、傾斜変換線で示される下段溝の規模は、長さ5.5m以上・幅約1m、検出面からの深さ約0.6mを測る。東辺溝でも一部掘り窪めたところがある。周溝掘削の際の排土は、墳丘の盛り土に供給されたと考えられるが、この盛り土は、削平のため残存しない。周溝内、とりわけ西辺溝から埴輪類がまとまって出土した。それらは、いずれも溝底より若干高い埋土中にみられることから、その多くは元来墳丘上に樹立されていた埴輪が削平とともに溝内に崩落したと考えられる。西辺溝からは、土師器甕・碧玉製管玉1点(第37図7)が出土した。墓壙は、墳丘の中央やや西寄りで主軸を東西にもち、長辺約3.5m・短辺約1.0mを測り、平面形は隅丸方形を呈する。墓壙は、古墳時代整地層から掘り込まれており、検出面からの深さは約0.2mを測る。墓壙底は地山面に達せず、広い平坦面をもつ。排水施設などはない。側面は、北長側面を除き垂



第22図 瓦谷2号墳西辺溝遺物出土状況図

直に近く立ち上がる。墓壇底の西寄りには、内法長約1.9m・同幅約0.8m・主軸方向E-2°30'-Sの組合式木棺の痕跡が残る。副葬品は、棺内・墓壇内ともに出土しなかった。

3号墳(図版第6・83) 1号墳の前方部端から南に約10mの位置にある一辺約10mの方墳である。3号墳の墳丘の大半は、後世に大きく削り取られており、周溝が遺存するのみである。周溝は、上面の幅約1.9m、検出面からの深さ約0.15mを測り、ゆるやかな断面「U」字形で浅く、北辺のすべてと西辺の一部も削平されて残存しない。溝内の埋土は、灰黒色細砂質土・灰黄色細砂質土で、南周溝内の底よりも高いところで土師器片が少量出土したのみである。

4号墳(巻頭図版5-(2)、図版第7・84・85) 4号墳は、1号墳の前方部端から南東方向に約30mの位置にある一辺約10.5mの方墳である。4号墳も3号墳と同様、墳丘の大半が削り取られており、周溝が遺存するのみである。周溝は、上面幅約2.4m、検出面からの深さ約0.3mを測り、ゆるやかな断面「U」字形を呈する。周溝の北辺部分は、一部削平されて残っていない。周溝内の埋土は、暗黄褐色細砂質土・茶褐色粘質土で、溝底からやや上面の茶褐色粘質土内から壺形埴輪・蓋形埴輪・家形埴輪などが細片となって出土した。また、北東端では奈良時代の須恵器長頸壺片が出土している。4号墳の周溝から出土した埴輪は、普通円筒埴輪がほとんどなく、埴輪の大半が壺形埴輪で占められている。また、周溝内から出土した蓋形埴輪(佐紀陵山古墳タイプ)と同一個体のものが、4号墳の南に隣接してある17号埴輪棺からも出土しており、4号墳の埴輪を利用して埴輪棺に転用した例として注目できる。4号墳の東周溝に隣接した墳丘内に23号埴輪棺がある。この埴輪棺も1号墳の前方部で検出した11号埴輪棺と同様、想定墳丘高よりかなり下に位置するため、4号墳の墳丘築造以前に造られた可能性も考えられる。

5号墳(図版第8・83) 5号墳は、4号墳の南西約12mに位置し、4号墳とはほぼ同じ主軸の一辺約13.9mの方墳である。5号墳も、周溝が遺存するのみである。東半の周溝は、比較的遺存状態がよく、上面幅約3.6m、検出面からの深さ約0.5mを測るが、西半は後世の田畑によって大きく削り取られており、遺存状態は悪く、遺構検出面からの深さ約5cmと浅く残るのみである。周溝は、ゆるやかな断面逆台形を呈し、その埋土は、上層から茶褐色系粘質土・黒灰色粘質土の2層に大別でき、下層の黒灰色粘質土内から土師器片や埴輪片が比較的まとまって出土した。周溝内からは、古墳に伴う遺物以外に、奈良時代の須恵器片が北東隅の上層から出土している。5号墳の墳丘及び埋葬施設は4号墳と同様、後世の削平によって遺存していない。

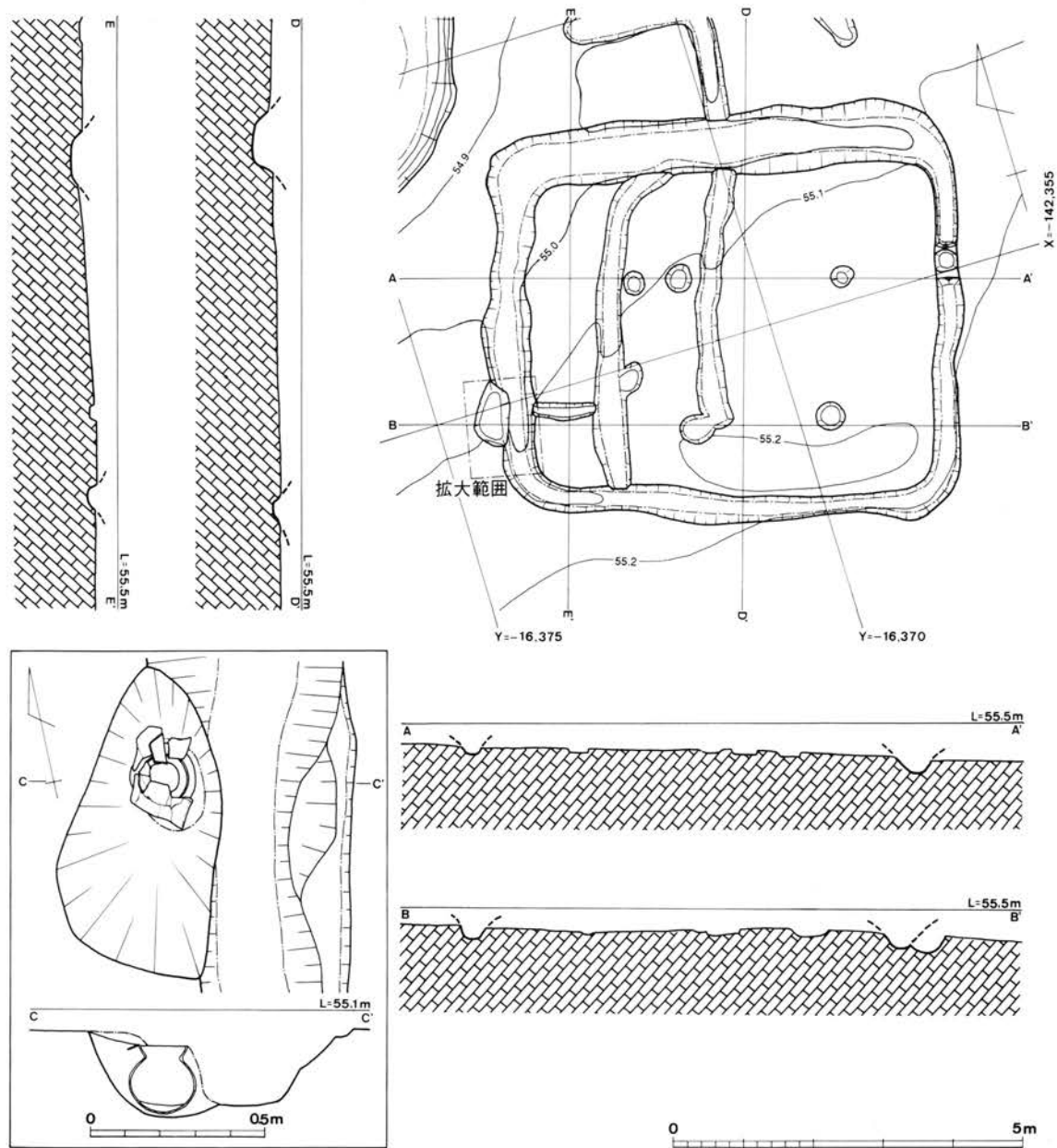
6号墳(図版第9・84・85) 6号墳は、4号墳の南東約2.5mに隣接する一辺約5.5mの方墳である。6号墳も他の古墳と同様、墳丘の大半は削られており、周溝のみ遺存する。周溝は、上面幅約0.9m・検出面からの深さ約0.2mを測り、ゆるやかな断面形を呈する。周溝内の埋土は、淡茶褐色細砂質土で、南東辺周溝内から土師器壺がほぼ完形で出土したが、非常にもろくなっていた。また、周溝内北端部に、長さ約1.4m・幅約0.6m・深さ約0.2mを測り、埋土が暗灰色粘質土の長楕円形の土坑状の掘り込みがあったが、遺物は出土していない。

7号墳(図版第9・86) 7号墳は、6号墳の北東約1mに隣接する一辺約5.2mの小方墳である。7号墳も上面幅約0.8m、検出面からの深さ0.2mを測り、断面形はゆるい逆台形の周溝のみ

遺存している。溝内埋土は暗灰黄色細砂質土・暗灰色粘質土で、周溝内から土師器片が出土した。7号墳の墳丘内中央付近から20号埴輪棺を検出したが、この埴輪棺も7号墳に伴う埋葬施設なのか、7号墳の墳丘構築以前の埴輪棺かどうかは明らかではない。

8号墳(図版第10・86) 8号墳は、7号墳の南東約5mにある一辺約7mの方墳である。8号墳は、墳丘及び周溝の西半部が大きく削り取られており、わずかに東辺の周溝のみが遺存している。しかも、東辺はSD03によって切られており、遺存状態は悪い。東辺周溝は、上面幅約1.5m、検出面からの深さ約0.2mを測り、断面は浅い逆台形を呈する。周溝内埋土は暗茶褐色細砂質土で、北辺の周溝底からやや上面で家形埴輪(屋蓋部のみ)が反転した状態で1点出土した。

9号墳(第23図、図版第87) 9号墳は、2号墳の南東約1mに隣接する東西約6m・南北約4.5mの方墳である。墳丘及び埋葬施設は遺存せず、上面幅約0.8m・検出面からの深さ約0.2m



第23図 瓦谷9号墳実測図

の周溝のみが遺存している。周溝の規模や墳丘側にある6か所のピットの存在から、当初は竪穴式住居跡と考えた古墳である。周溝内の埋土は、灰黄褐色細砂質土・にぶい黄褐色粘質土で、溝底から遊離した状態で土師器の細片が出土した。また、周溝の西側で周溝をさらに掘り広げた土坑(周溝内土坑S X03)があり、この中に布留式甕(189)が正位の状態で見えられおり、口縁部には鉢状土師器(188)の体部片を利用した蓋が置かれていた。土坑の規模は、長軸約0.9m・短軸約0.45m・深さ約0.25mを測り、平面形は楕円形を呈する。甕の内部は空洞で、遺物は出土していない。この周溝内土坑は、溝内埋葬施設あるいは古墳に伴う土器供献土坑と思われる。

10号墳(図版第11・87) 10号墳は、8号墳の南約5mにある直径約14mの円墳である。10号墳は、わずかに周溝の底部近くが遺存するのみで遺存状態が悪い。東側の比較的残りのよい部分で、わずかに検出面からの深さ約0.5mを測るのみである。周溝内から出土した遺物は皆無であった。しかし、南側の丘陵斜面からは、朝顔形埴輪や蓋形埴輪片などが出土しており、10号墳との関連が考えられる。

(有井広幸・石井清司)

2. 埴輪棺

埴輪棺は26基を確認した。そのうち、1基(26号埴輪棺)は瓦谷古墳群の立地する丘陵とは谷部を挟んで南側にある丘陵に単独で存在する。埴輪棺に転用された埴輪は、1号墳を含めた各古墳の墳丘に樹立されていた可能性が高いとともに、埴輪棺に使用するために作られた特製埴輪もある。各埴輪棺は、1個体の埴輪を棺本体に転用した単棺構造のものほか、2個体以上の埴輪を組み合わせた複棺構造のものがある。棺に使用された埴輪には、普通円筒埴輪・鱗付円筒埴輪・朝顔形円筒埴輪・鱗付朝顔形円筒埴輪のほか、家・盾・蓋などの形象埴輪がある。棺内からは人骨などは遺存していなかったが、埴輪片あるいは拳大の河原石を利用して枕に転用しているものもある。なお、棺に利用された埴輪の傾向として、1号墳に近い地点では鱗付円筒埴輪(朝顔形を含む)を使い、遠ざかるにつれて普通円筒埴輪を使う傾向がある。埴輪の時期も1号墳から遠ざかるにつれて新しくなる傾向がある。埴輪棺の配置は、墳丘内に構築されているもの(11・20・23号埴輪棺)を除くと、古墳の周辺に配置されており、各古墳との新旧関係が注目される。副葬品は、8号埴輪棺の棺内で滑石製白玉が、1・22・26号埴輪棺の墓壇内埋土から滑石製管玉・鉄斧・鉄鏃が出土しているのみで、棺内あるいは墓壇内からの副葬品の出土は少なかった。

以下、各埴輪棺について簡単にその概略を説明する。

(有井広幸)

付表3 埴輪棺一覧表

埴輪棺名	墓域規模 (m)	棺規模 (m)	本体・棺蓋	小口部分	つなぎ部 その他	時期	出土位置	その他
1号埴輪棺	0.96×0.70 一段墓域	最大長0.7 幅0.32	普通円筒埴輪 (単棺)	普通円筒 埴輪		Ⅱ期	2号墳西辺	棺本体と同一の埴輪を閉塞 埴輪に使用。一辺10cm前後 の埴輪片を枕に利用。墓域 内埋土中から管玉1点出土
2号埴輪棺	2.20×1.0 一段墓域	最大長1.25 幅0.49	普通円筒埴輪 (複棺)	鱗付円筒 埴輪	普通円筒 埴輪	Ⅱ期	2号墳西辺	
3号埴輪棺	1.60×0.45 一段墓域	最大長1.35 幅0.25	普通円筒埴輪 (複棺)	有機材?		Ⅱ期	2号墳西辺	
4号埴輪棺	1.05×0.6 一段墓域	最大長0.65 幅0.24	普通円筒埴輪 (単棺)	普通円筒 埴輪		Ⅱ期	2号墳西辺	本体の埋置に先行し閉塞埴 輪を設置
5号埴輪棺	1.64×0.52	残存長1.3 最大幅0.35	棺蓋のみ鱗付 円筒と普通円 筒埴輪	盾形埴輪 (Ⅰ類)を 含む	普通円筒 片で隙間 を閉塞	Ⅱ期	1号墳後円 部北東裾部	
6号埴輪棺	0.94×0.78	最大長0.76 幅0.37	蓋形埴輪Ⅰ類			Ⅱ期	1号墳後円 部北西、墳 丘外	
7号埴輪棺			土師器二重口 縁	有機材?		Ⅱ期	1号墳後円 部	
8号埴輪棺	2.5×0.95	最大長1.63 幅0.62	鱗付円筒埴輪 ・朝顔形埴輪 (複棺)			Ⅱ期	1号墳後円 部東、墳丘 裾部	
9号埴輪棺	1.13×0.5	最大長0.7 幅0.38	普通円筒埴輪 (単棺)			Ⅱ期	1号墳後円 部東、墳丘 裾部	
10号埴輪棺	1.65× 0.6~0.93	最大長1.15 幅0.32	鱗付朝顔形埴 輪(単棺)			Ⅱ期	1号墳東く びれ付近墳 丘外	
11号埴輪棺	1.68×0.55	最大長1.50 幅0.33	普通円筒・鱗 付円筒埴輪 (複棺)	盾形埴輪 Ⅰ類		Ⅱ期	1号墳前方 部東	埴輪棺を設置する以前に、 埴輪を粉碎し、棺の下に敷 きつめている。
12号埴輪棺	1.6×0.4 以上	最大長1.44 幅0.3	鱗付朝顔形埴 輪(複棺)			Ⅱ期	3号墳東辺	
13号埴輪棺	残存長1.06 ×幅0.44	残存長0.6 幅0.27	普通円筒埴輪 (単棺)			Ⅱ期	3号墳東辺	棺底のみ遺存
14号埴輪棺	残存長1.22 ×幅0.56	残存長1.05 幅0.31	普通円筒埴輪 (単棺)	普通円筒 埴輪		Ⅱ期	3号墳東辺	棺底のみ遺存
15号埴輪棺	1.3×0.42	残存長0.9 幅0.25	普通円筒埴輪 (複棺)	普通円筒 埴輪		Ⅲ期	5号墳北辺	棺底のみ遺存
16号埴輪棺	2.83×0.8	最大長1.4 幅0.43	普通円筒埴輪 (複棺)	朝顔形埴 輪		Ⅲ期	5号墳北辺	壺形埴輪片を枕に転用
17号埴輪棺	1.50×0.79 二段墓域	最大長0.71	普通円筒埴輪 (複棺)	朝顔形埴 輪	蓋形埴輪 Ⅰ類	Ⅲ期	4号墳南辺	
18号埴輪棺	1.7×0.84 二段墓域	残存長1.05 幅0.37	普通円筒埴輪 盾形埴輪Ⅱ類 (複棺)	朝顔形埴 輪+盾形 埴輪Ⅱ類		Ⅲ期	4号墳南辺	拳大の河原石で枕に転用
19号埴輪棺	1.59×0.68	残存長0.75 幅0.32	普通円筒埴輪			Ⅱ期	4号墳西辺	細片が多く棺の遺存状態は 悪い
20号埴輪棺	1.14×0.55	最大長0.67 幅0.33	普通円筒埴輪 (単棺)	普通円筒 埴輪(横位 で使用)		Ⅲ期	7号墳墳丘 内中央	棺本体の上部(蓋部)は細片 で出土

21号埴輪棺	1.23×0.53	最大長0.74 幅0.3	鱗付円筒埴輪 (単棺)	朝顔形埴輪		Ⅱ期	7号墳南辺	
22号埴輪棺	2.15×0.95	残存長1.20 幅0.45	普通円筒埴輪 朝顔形埴輪 (複棺)	朝顔形埴輪		Ⅲ期	尾根の南端	小口部の埴輪上部に鉄斧出土、棺本体は完形に近い状態で出土
23号埴輪棺	1.05×0.63	最大長0.9 幅0.43	普通円筒埴輪 (単棺)	土師器壺 (片面のみ ふさぐ)		Ⅲ期	4号墳墳丘内	棺本体は完形の状態で出土
24号埴輪棺	2.93×1.23	最大長1.85 幅0.55	盾形埴輪+普通円筒埴輪	蓋形埴輪	蓋部に普通円筒埴輪とともに家形埴輪の細片出土	Ⅲ期	尾根の南端	棺本体は盾面を下にし、その後、一部白色粘土で、盾形埴輪を固定している。本体の埋置に先行して閉塞埴輪を設置
25号埴輪棺	1.15×0.6		蓋形埴輪片					埴輪棺ではなく、墓壇内に埴輪を入れた可能性あり。埴輪の下に青灰色粘質土混礫を敷いている。
26号埴輪棺	3.0×0.9	最大長2.1 幅0.5	特製埴輪	鉢形状特製埴輪		Ⅲ期	古墳群とは別丘陵	

備考 蓋形埴輪 I類 佐紀陵山古墳タイプ 盾形埴輪 I類 直弧文(忍岡系対称文) 時期
II類 その他 II類 川西編年

1号埴輪棺(図版第12・88) 2号墳の北西方向で検出した単棺構造の埴輪棺で、後述する中世の溝(S D03)によって棺体の上半部及び墓壇の北界を欠失するが、残存状況は相対的に良好であった。墓壇は、残存長約0.96m・最大幅約0.7m・検出面からの深さは約0.2m・主軸方位N-21°-Eを測り、平面形は隅丸長方形を呈する。墓壇底は、北半がやや深く掘り込まれている。墓壇底は、厚さ約10cmにわたって土を敷いて棺床とし、この上に棺体を置いている。棺本体は、内法長約0.7mを測り、1個体の普通円筒埴輪を転用したもので、北側に位置する埴輪の最下段を打ち欠いて棺長を調整している。また、本体と同一個体の破片で小口部の閉塞埴輪と棺本体の間のできる半円形のすきまを覆っている。両小口の閉塞は、南側と北側で様相が異なり、北小口は普通円筒埴輪の口縁部を含む破片を約1/3に截断したものを正立させて塞ぐ。一方、南小口は、円筒埴輪片数個を横方向あるいは縦方向にあてがって閉塞している。なお、南小口の閉塞は、それだけでは不安定であり、墓壇の埋め戻し作業と並行して行われたと考えられる。遺骸は、他の埴輪棺同様、全く遺存していないが、棺の規模が閉塞埴輪を含めても0.81mと短いことから推測すると、小児埋葬が想定される。埋葬頭位は、口縁部を南に位置させることに加え、棺内底が墓壇底に規制されて南側との比高差が約0.08mと高いこと、また、その南端付近に内面を上に向けた一辺0.1m前後の埴輪片が枕状に置かれていたことから、南枕であったと考えられる。棺内副葬品は皆無であるが、墓壇内から碧玉製管玉1点が出土した。管玉は、検出面付近の墓壇内埋土中から出土したため、この埴輪棺に副葬されたかは疑問が残る。なお、1号埴輪棺の北西約1mの範囲に破碎された埴輪片が密集して広がっており、削平される以前は棺体がほぼ完存していたことがうかがわれる。

2号埴輪棺(図版第12・89) 1号埴輪棺の主軸に沿って南方約2mに位置する埴輪棺で、2号墳西辺溝に約2mと近接する。2号埴輪棺は、1号埴輪棺より一段高い面で検出されたが、それでも棺南半の遺存状態は悪く、南棺天井部及び南閉塞を欠失する。墓壙は、長辺約2.2m・短辺約1.0m、検出面からの深さ約0.2m・主軸方位N-24°-Eを測り、平面形は隅丸長方形を呈する。現状では古墳時代整地層から掘り込まれ、底部に平坦面を残す墓壙である。墓壙底は、厚さ約0.1mにわたって礫を含まない良質の土を敷いて棺床とし、この上に棺本体を置く。棺本体は、普通円筒埴輪2個体を組み合わせた複棺構造で、各埴輪は基底部を互いに打ち欠いた後、北側で使用された埴輪を口縁部方向から南側の埴輪の基底部へ入れ口状にした状態で棺を構成する。棺の内法長約1.25m・最大幅約0.49mを測る。南棺使用の埴輪が通常の円筒形を呈するのに対して、北棺使用のものはスカシ穴をもたない楕円形埴輪を用いている。南棺の天井部が欠失するのは、この点に起因する。また、両者が置かれた時に生ずるすきまを覆うために、口径の比較的小さな円筒埴輪片が連繋部上面に倒れた状態で出土している。北小口は、鱗付円筒埴輪片を横方向に当てがって塞ぐ。遺骸は、天井部が残る北棺部分でも土砂が充填していて全く遺存しない。棺底のレベル差はほとんどないが、使用埴輪の口径から判断して南枕が想定される。副葬品は出土していない。

3号埴輪棺(図版第13・90) 2号埴輪棺の南方約3.0mで検出した埴輪棺である。近世に造成された耕地の山側に位置しており、1号埴輪棺と同様、上面が大きく削平され、現状では棺体下半部が遺存するのみである。墓壙は、全長約1.6m・最大幅約0.45m、検出面からの深さ約0.13mを測り、平面形は隅丸長方形を呈する。現状では地山面に掘り込まれている。墓壙底は、ゆるい舟底形を呈し、棺本体を置きやすく配慮している。棺本体は、2個体の普通円筒埴輪をつなぎ合わせた複棺構造で、棺全長約1.35m・内法幅約0.25m、棺の主軸方位N-13°-Eを測る。埴輪は、ほぼ完形の南棺使用埴輪の底部に、基底段を打ち欠いた上、さらに体部中位を欠き取って短くした北棺使用埴輪の口縁部を合せ口にしてつないでいる。小口の閉塞には埴輪が残存せず、その構造は明らかでないが、南小口では幅0.02~0.03mの帯状に土質の異なる領域がゆるく円弧を描くように確認されており、樹皮などの有機物質による閉塞も考えられる。遺骸は遺存しないが、棺底では南端が北端よりも0.04m高いことから判断して、南枕と推定される。副葬品は、棺内・外ともに出土しなかった。

4号埴輪棺(図版第12・91) 2号埴輪棺の南東約1mに位置する小規模な埴輪棺で、棺体上半部が削平を受けている。墓壙は、一部畔の排水溝によって切られているが、長軸約1.05m・短軸約0.6m、検出面からの深さ約0.18m・主軸方位N-18°30'-Eを測り、平面形は長円形を呈する。現状では古墳時代の整地層から舟底形に掘り込んでいる。墓壙底は、厚さ約0.1mの茶灰色土を敷いて棺床とし、その上面に棺本体を置く。棺本体は、口縁部を北にした全長約0.65mの普通円筒埴輪1個体をそのまま転用した単棺構造である。小口部は、円筒あるいは楕円形埴輪の破片を正立させて使用し、墓壙底から立ち上がってきた墓壙斜面に直接据え付けている。この場合、閉塞埴輪の方が本体よりも深く据え付けられていることから、本体に先行して閉塞埴輪を設置し、

その後棺床土を敷いて棺床を造ると同時に閉塞埴輪を固定したと考えられる。なお、閉塞埴輪によって画された内法長は0.82mを測る。頭位は、棺底の南端が北端よりも0.05m高いことから、南枕の可能性が考えられる。遺骸、副葬品ともに検出されなかった。

5号埴輪棺(図版第13・93) 5号埴輪棺は、1号墳の後円部の北東裾で検出した埴輪棺である。墓壇は、平面形が隅丸長方形を呈し、全長約1.64m・最大幅約0.52m、検出面からの深さは約0.6mで、主軸方位はN-58°-Wを測る。棺は、推定全長約1.3m・同最大幅約0.35mを測り、遺骸を覆う棺蓋の部分のみに埴輪を用いて、棺身には埴輪を使わない構造を持つ。鱗付円筒埴輪1個体を半截したものをつなげ、さらにもう1個体の普通円筒埴輪を破碎して、すきまを閉塞している。小口の閉塞に用いられた埴輪片の中には、直弧文(忍岡系対称文)を線刻した盾形埴輪(佐紀陵山古墳タイプ)が含まれている。5号埴輪棺では、棺蓋のみに埴輪を使用しているため、頭の方については推定の域をでないが、墓壇底が北西方向に高いことから、北西方向の可能性が考えられる。

6号埴輪棺(図版第13・94) 6号埴輪棺は、1号墳の後円部の北西方向で墳丘基底部の外側で検出された。墓壇は、平面が楕円形を呈し、長軸約0.94m・短軸約0.78m、主軸方位N-48°-Eを測る。棺本体は、蓋形埴輪の円筒形台部から笠部にかけての部位を巧みに打ち割って棺底及び蓋としており、他に例をみない構造である。棺最大長約0.76m・同幅約0.37mを測る。転用された蓋形埴輪は、佐紀陵山古墳タイプで、同型の埴輪が墳頂盗掘坑や墳丘基底部付近からも出土しており、本来、墳頂部に樹立されていたものを転用したことがうかがえる。

7号埴輪棺(図版第13・95) 7号埴輪棺は、1号墳の後円部西側で墳丘外側に位置する。墓壇は、平面形が楕円形を呈し、長軸約1.12m・短軸約0.8m、主軸方位N-80°-Eを測る。棺は、埴輪ではなく、特殊な線刻を有する土師器二重口縁壺を用いた土器棺の範疇に含まれ、口縁部を後円部墳丘頂部に向けている。現状では、土器の体部の大半を失っており、口縁の閉塞方法も不明であるが、壺1個体を棺本体としていた可能性が高い。小口は、口縁部付近の土が炭化していたことなどから、有機材(木製板など)によって閉塞されていたと推測される。

(伊賀高弘)

8号埴輪棺(図版第14・96) 8号埴輪棺は、1号墳の後円部の東側、墳丘内に位置する。墓壇は、平面形が隅丸方形を呈し、全長約2.5m・幅約0.95m、主軸方位N-5°-Wを測る。棺本体は、北半分が後世の削平で遺存せず、南半分のみ残す。棺は、鱗付円筒埴輪の基底部を南に向けて設置し、その上面をさらに破碎した埴輪で覆っている。両小口とも閉塞に使用された埴輪はなく、北小口部で棺に直交するように鱗付円筒埴輪を半截して据えている。棺内埋土中から滑石製白玉2点が出土した。8号埴輪棺は、棺本体の埴輪が基底部を南に向けて設置していること、北端の埴輪が枕に使用された可能性があるため、頭位は北枕であった可能性が考えられる。

9号埴輪棺(図版第15・98) 1号墳の後円部西側斜面で墳丘裾近くに築かれており、1号墳の主軸とほぼ同方位を示す埴輪棺である。墓壇は、長さ約1.13m・幅約0.5m、検出面からの深さ約0.14m、長軸方位N-4°-Eを測る。棺本体は、円筒埴輪1個体を使用した単棺構造で、北小

口部には棺本体と同一個体の埴輪片を立てて使用している。9号埴輪棺は、墳丘斜面にあることから、1号墳の構築後に、築かれたと思われる。棺内からは副葬品は出土していない。

10号埴輪棺(図版第15・97) 10号埴輪棺は、1号墳の西くびれ部から西南方向へ約5mの位置にあり、墓壙は、長軸約1.65m・短軸約0.55~0.93m、検出面からの深さ約0.25m、長軸方位N-34°-Eを測る。棺本体は、1個体の鱗付朝顔形円筒埴輪を使用した単棺構造で、全長約1.15m・最大幅約0.32mを測る。棺に使用した鱗付朝顔形円筒埴輪は、口頸部及び鱗部分を打ち欠いて、体部上面を北側に向け、スカシ穴は墓壙の主軸に一致するように据えている。棺の両小口部分は、棺本体と同一個体の体部破片とともに鱗部で棺本体を塞ぐ。棺内には枕などの施設はなく、遺体の頭部位置は明らかではないが、朝顔形円筒埴輪の上部を北側に向けていることから、棺の北側が頭位であったと考えられる。棺内からは副葬品は出土していない。なお、10号埴輪棺と同一の破片が南へ約70m離れた丘陵の南側斜面で出土している。

11号埴輪棺(図版第15・98) 11号埴輪棺は、1号墳の前方部東側で、1号墳の主軸に直交する形で築かれた埴輪棺である。墓壙は、長さ約1.68m・幅約0.55m、検出面からの深さ約0.15m、主軸方位N-74°-Wを測る。棺本体は、円筒埴輪2個体と直弧文を描いた盾形埴輪を利用した複棺構造をとる。円筒埴輪は、基底段から口縁部まであるものと、口縁部を含む上半部を残して下半部を打ち欠いて棺本体の長さを調整したものからなる。棺の西端には、盾面を下に向けた盾形埴輪片を枕に使用するかのように、やや傾斜をもたせて設置している。棺本体の埴輪は、遺構検出面から棺底まで浅く、その大半が大きく削り取られている。なお、棺の下には一辺10~20cm程度の大きさに破碎した円筒埴輪片を敷きつめている。使用された円筒埴輪は、1号墳の東くびれ部付近で比較的まとまって出土した埴輪片の中に同一個体のものがあり、1号墳の墳丘に樹立していた埴輪を抜き取って埴輪棺に転用した可能性がある。頭位は、枕と思われる盾形埴輪の位置、棺本体の埴輪の口縁部が西側を向いていることから西方向と思われる。

12号埴輪棺(図版第16・99) 1号墳の前方部東隅から南東方向へ約15mで、3号墳の北東隅から北東へ約5mの位置にあり、主軸を東西方向にむけた埴輪棺である。現田畑の畦畔の直下にあたり、墓壙の大半が後世に削平されて、偶然にも埴輪のみが削平されずに残った状態であった。遺存する墓壙は、長さ約1.6m・幅約0.4m、主軸方位N-89°-Wを測り、棺本体は鱗付朝顔形円筒埴輪2個体をつないだ複棺構造で、小口部には打ち欠いた棺本体と同一個体の埴輪片を使用している。

13号埴輪棺(図版第17・98) 3号墳の東約4mに位置する埴輪棺である。棺の大半が大きく削られており、棺底の埴輪片が遺存する程度であった。墓壙は、現存長約1.06m・最大幅約0.44m、検出面からの深さ約0.1m、主軸方位N-27°-Eを測る。棺本体は、円筒埴輪1個体を使用した単棺構造と思われるが、遺存状態が悪く不明である。棺内から副葬品は出土していない。頭位は、枕などが遺存しないため不明であるが、棺の東側で使用された鱗付朝顔形円筒埴輪の口縁部が北側にあること、棺北端の埴輪片の北側がわずかに高いことから、遺骸は北向きに置かれていたと思われる。

14号埴輪棺(図版第17・99) 3号墳と4号墳のほぼ中間に位置する埴輪棺で、棺及び墓壙の北半部は後世に削り取られており、墓壙長は不明で、墓壙最大幅は約0.56m、主軸方位N-9°-Wを測る。棺本体は、復原径約30cmに対して残存高約1.04m以上の細長い円筒埴輪1個体を使用した単棺構造である。北小口部は、棺本体に使用した円筒埴輪片を正位の状態で据えている。棺内から副葬品は出土していない。頭位は、棺本体に使われた埴輪の基底段が南にあることから、北方向と思われる。

15号埴輪棺(図版第16・101) 3号墳と5号墳の中間に位置する埴輪棺で、旧耕作土で上面が大きく削られており、遺存状態は悪い。墓壙は、長さ約1.30m・幅約0.42m、検出面からの深さ約0.25m、主軸方位N-62°-Wを測る。棺本体は、円筒埴輪2個体を組み合わせた複棺構造で、口縁部を中央に向けて合わせ口状にしており、棺の長さ約0.9mを測る。棺小口部には円筒埴輪片を立てて使用している。棺内からは副葬品は出土していない。遺骸の頭位は、口縁部が東を向いていること、墓壙の東側がわずかに高いことから東方向と思われる。

16号埴輪棺(図版第17・100) 16号埴輪棺は、台地中央部の4号墳と5号墳の中間に位置する。墓壙は、長さ約2.88m・最大幅約0.8m、検出面からの深さ約0.3m、主軸方位N-1°-Eを測る。棺本体は、底部から口縁部までである円筒埴輪1個体と、棺の長さを調整するために口縁部から約50cmの長さを残して打ち欠いた円筒埴輪を組み合わせた複棺構造である。棺設置に際しては、スカシ穴を墓壙の中軸に一致した状態で置き、棺側面にあたるスカシ穴は、埴輪片で塞いでいる。棺の全長は約1.4mで、棺の北側には壺形埴輪の破片を利用した枕がある。両小口部は、朝顔形埴輪の口頸部を据え、頸部のすきまには埴輪片で塞いでいる。棺内から副葬品は出土していない。

17号埴輪棺(図版第16・101) 4号墳の南約2mで、4号墳の南辺溝にほぼ平行して築かれている。墓壙の長さ約1.50m・最大幅約0.79m、検出面からの深さ約0.23m、主軸方位N-73°-Wを測り、棺を設置する部分がやや深く掘り込まれた二段墓壙である。棺本体の長さは約0.7mで、口径22~27cm・器高45cm前後の円筒埴輪2個体を使用した複棺構造である。棺本体に使用した埴輪は、口縁部を合わせ口状にし、両口縁部の接合部北辺には蓋形埴輪の笠部分の破片を据えている。棺小口部分には、朝顔形埴輪の口頸部を使用している。棺本体の合わせ部分に使用した蓋形埴輪は、隣接する4号墳の周溝内から出土した蓋形埴輪と接合しており、4号墳に樹立していた蓋形埴輪の一部を利用していたことが明らかである。棺内から副葬品は出土していない。

18号埴輪棺(図版第18・102) 18号埴輪棺は、4号墳の周溝の南側で、4号墳と6号墳の中間部分に位置する。墓壙は、長軸約1.7m・短軸約0.84mの楕円形を呈する。墓壙検出面からの深さ約0.18m、主軸方位N-45°-Wを測り、棺の遺存状態は悪い。棺は、盾形埴輪1個体を盾面部分と円筒部に半截したのち、棺の東側に半截した円筒部を置き、西側には一部円筒部と重なる状態で半截した盾面部分を盾面を下にして置いている。遺存する棺本体の長さは約1.05mを測る。棺の東小口部は、朝顔形埴輪の口頸部片を使用し、口頸部片の外側で頸部を塞ぐように盾面を内側に向けた状態で盾形埴輪片が据えられている。西小口部は遺存していない。棺本体部分の内側で東端に接して河原石2個が据えられており、枕に使用したと思われる。棺内から副葬品は出土

していない。盾形埴輪(127)は、線鋸歯文と菱形文を組み合わせたものである。

19号埴輪棺(図版第19・103) 4号墳の南辺の周溝に近接している埴輪棺で、墓壙は長さ約1.59m・幅約0.68m、検出面からの深さ約0.25m、主軸方向N-74°-Wを測る。他の埴輪棺に比べて墓壙の検出面から棺底までは深い。棺に使用した埴輪はわずかに東側半分に使われていた程度で、墓壙の西半部は棺に使用されたような埴輪は遺存せず、上面に埴輪片が散布する程度であった。わずかに原位置を保った埴輪は、口縁部を東側に向けている。墓壙内から副葬品は出土していない。

20号埴輪棺(図版第19・102) 7号墳の墳丘内中央で検出した埴輪棺である。墓壙は、長さ約1.14m・幅約0.55m、検出面からの深さ約0.18m、主軸方向N-31°-Eを測る。棺本体は、円筒埴輪1個体を使用した単棺構造で、棺の全長約0.67m・幅約0.33mを測り、口縁部を北側に向けている。また、棺側面の円形のスカシ穴を塞ぐように埴輪片が置かれている。小口部分は、円筒埴輪片を破砕し、北小口部では一重に、南小口部では三重以上に重ねて置かれている。棺の上面には破砕した状態で埴輪片が散布しており、円筒埴輪を半截して棺に利用し、残り半分を被葬者の上に破砕してばらまいたような状態である。20号埴輪棺は、7号墳の周溝とほぼ同じ主軸方位を示し、墳丘中央部に配置されていることから、7号墳の中心埋葬施設と思われる。棺内から副葬品は出土していない。

21号埴輪棺(図版第18・103) 21号埴輪棺は、6号墳の東約3mに隣接し、周溝とほぼ主軸を同じくする埴輪棺である。墓壙は、隅丸方形を呈しており、長さ約1.23m・幅約0.53m、検出面からの深さ約0.2m、主軸方向N-44°-Wを測る。棺本体は、鱗部分を打ち欠いた鱗付円筒埴輪1個体を使用し、また両小口部分には朝顔形円筒埴輪の口頸部片を使用しており、棺全長は約0.7mを測る。棺本体の鱗付円筒埴輪は、口縁部を北東に据えられている。両小口部は、朝顔形埴輪の口頸部片を据えるために、墓壙底を一部深く掘りくぼめている。棺内から副葬品は出土していない。

22号埴輪棺(図版第19・104) 22号埴輪棺は、5号墳の南面コーナーから南西方向に約5mの位置にある。出土地点は、調査前には田畑の畦畔部分にあたり、西側の低い部分は削平されていた。また、重機による表土除去に際して一部上面を削平したため、埴輪棺の全体の様相は明らかではない。遺存する墓壙は、長軸約2.15m・短軸約0.95m、主軸方向がN-28°-Wを測る楕円形で、棺本体は普通円筒埴輪2個体と朝顔形円筒埴輪2個体を使用した複棺構造である。棺使用に際して、円筒埴輪の口縁部へ別個体の円筒埴輪の基底部を挿入する「入れ子」状にしており、棺本体の残存長は約1.2mを測る。東小口部は、打ち欠いた朝顔形円筒埴輪の口頸部で塞いだ後に、朝顔形円筒埴輪の肩部で頸部を塞ぐ。東小口部の埴輪片の上面から、鉄斧1点(RM-137)が出土した。

23号埴輪棺(図版第18・105) 23号埴輪棺は、4号墳の周溝の内側で、周溝の東辺に隣接した墳丘内に位置する。この埴輪棺は、4号墳の築造に伴う可能性が高いが、墳丘内の埴輪棺の位置から中心埋葬施設とは考えがたい。墓壙は、長軸約1.05m・短軸約0.63mの楕円形を呈し、検出

面からの深さ約0.35m、主軸方向N-14°-Eを測る。棺本体は、1個体の円筒埴輪を使用した全長約0.9mを測る単棺構造であり、棺本体の円筒埴輪の口縁部分(南側)には、口頸部を打ち欠いた土師器壺と、口縁部を含む1個体分の土師器壺で小口部を塞いでいる。棺本体の円筒埴輪の底部側(北側)には埴輪片などで塞いだ痕跡は認められない。調査時には棺内は空洞で、円筒埴輪は完形のままであった。遺体の埋置方向を示す枕などがなく、その方向は不明である。副葬品は出土していない。

24号埴輪棺(図版第20・106) 24号埴輪棺は、調査地の南東端で、丘陵部から谷部に向かう南向き斜面中段の傾斜変換点にある埴輪棺で、瓦谷1号墳の中心埋葬施設から約120m離れた位置にある。墓壙は、長軸約2.93m・短軸約1.23m、検出面からの深さ約0.40m、主軸方向N-78°-Wを測り、西側が広い倒卵形を呈する。棺本体は、盾面を下にした盾形埴輪1個体に、長さ約50cmに打ち欠いた円筒埴輪を組み合わせた複棺構造で、両小口部は蓋形埴輪の笠部を使用している。棺本体は全長約1.85m、遺存する棺の最大幅約0.55mを測る。棺底の東側には、打ち欠いた円筒埴輪が主軸に直交する形で据えられており、枕に使用したと思われる。棺本体と小口部の設置は、西小口部の蓋形埴輪の笠部が棺本体よりも深く据えられていることから、西小口部の蓋形埴輪の笠部を設置した後に、棺本体の盾形埴輪を設置し、最後に長さを調整した円筒埴輪を据えたと考えられる。棺本体、特に盾形埴輪では完形の状態で被葬者を入れたのか、半截した後に被葬者を入れ、その後、残り半分の円筒部破片で被葬者の上面を覆ったのかは判然としない。棺本体の設置に際して、棺の安定を考慮してか、盾面を上下から挟むように黄色粘土を敷いている。副葬品は出土していない。上面の埴輪片の中には円筒埴輪や家形埴輪、11号埴輪棺に使用されたものと同一個体の鱗付円筒埴輪などの破片も出土した。

25号埴輪棺(図版第22・105) 24号埴輪棺の西側約12mにあつて、丘陵南側斜面に立地する。墓壙は、長軸約1.15m・短軸約0.6m、主軸方向N-77°-Wを測る楕円形を呈し、底部には青灰色粘質土を含む礫層が薄く堆積している。墓壙内からは蓋形埴輪が細片となって出土した。25号埴輪棺は、埴輪の出土状況から見れば、埴輪を廃棄した土坑の可能性もある。

26号埴輪棺(図版第21・108) 26号埴輪棺は、瓦谷古墳群が立地する丘陵とは南側の谷を挟んで対岸に1基だけ単独で存在する。墓壙は、南北方向に長軸をもち、南北約3.0m・幅約0.9m、検出面からの深さ約0.5m、主軸方向N-28°-Eを測り、墓壙のやや西側に偏って全長約2.1m・幅約0.5mの埴輪棺を設置している。埴輪棺に使用された埴輪は、棺本体を円筒埴輪状に製作した特製埴輪2個を組み合わせた複棺構造で、両小口部にも鉢形状の特製埴輪を使用している。なお、25号埴輪棺に使用された円筒埴輪と近似した埴輪が25号埴輪棺と同一丘陵に造られた埴輪窯でも出土している。棺内の南側棺底で鉄製刀子1点、棺外の棺中央付近、墓壙底から約0.2m上位で鉄鏃4点が重なった状態で出土した。鉄鏃は、先端を北に向けている。棺内に石や埴輪片を転用した枕はみられなかった。

(石井清司・有井広幸)

3. 土坑その他(図版第22～24・109～111)

土坑は、古墳群の立地する丘陵上で20基以上検出した。各土坑からは遺物の出土が乏しく、古墳時代の土坑か、または奈良時代以降の土坑か確定することができなかった。ここでは埋土の状況を考えて、古墳及び埴輪棺と関連する古墳時代の遺構として記述する。

木棺墓 3号墳の南側で、木製板を組み合わせて棺にしたと考えられる木棺墓を検出した。東西方向に長側板を置き、東西両小口に板を深く掘り込むとともに、長側板で挟むように固定した状況が観察でき、棺底には鶏卵大の礫を敷いていた。墓壙は、長さ約2.3m・幅約0.8m、主軸方向N-84°-Wを測る隅丸長方形で、小口板を固定した掘り込みの検出面からの深さは東側部分で約0.35m、中央部の墓壙の深さは検出面から約0.1mと浅く、棺底が残っていた程度である。長側板は長さ約2m・厚さ約0.07mで、小口板は西側が幅約0.35m、東側が幅約0.3m・厚さ約0.05mである。棺内の規模は、長さ約1.65m・幅約0.3mで、西側が若干広く、棺底のレベルもやや高い。礫敷の厚みは約0.05m程度である。遺構内からは、少量の土師器の破片が出土している。

S X 02 3号埴輪棺の南西に接するように位置する土器埋納遺構である。削平が著しく、その下部を留めるにすぎない。やや長円形の掘形(長径約0.75m・短径約0.5m、検出面からの深さ約0.15m)のほぼ中央部に、丸底の土師器を埋納している。土器は遺存状態が悪く、かつ体部上半を欠失するので、器種を明確にしがたいが、壺か甕であろう。底部に焼成後の穿孔がみられる。土器の内部、掘形内ともに共伴遺物などはない。周辺遺構のあり方から判断して、土器棺の可能性はある。

S K 04 3号墳の南西端から西約11mに位置し、その平面形は隅丸長方形で、全長約0.8m・幅約0.5m、検出面からの深さ約0.15m、主軸方向N-89°-Eを測る。土坑の断面形は逆台形で、埋土は上層がにぶい黄褐色細砂質土、中間層がにぶい黄褐色粘質土、下層が径10cm以下の礫が混じるにぶい黄灰色粘質土の3層に分かれる。遺構の底は、東側が5cmほど高く、地山層に混じる河川堆積性の円礫を全面に敷き詰めており、礫床を伴う土壙墓と考えられる。遺物は出土していない。なお、床面東側の幅が若干広いことと、床面が高いことから東頭位と考えられる。

S K 05 10号墳の東約2mに位置し、その平面形は隅丸長方形で、全長約2.8m・幅約0.8m、検出面からの深さ約0.2m、主軸方向N-9°-Eを測る。土坑の断面形は逆台形で、埋土は上層が黒褐色粘質土、下層が暗茶褐色細砂質土の2層に分かれ、底部はほぼ水平である。遺物は出土していない。

S K 06 4号墳の南約3mに位置し、その平面形は長楕円形(長軸方向N-85°-E)で、全長約2.4m・幅約0.7m、検出面からの深さ約0.25mを測る。土坑の断面形は逆台形である。埋土は、上層が径3cmほどの礫がまばらに混じる暗灰黄色粘質土、下層が黄褐色細砂質土で、底部は東側が5cmほど高い。遺物は出土していない。

S K 07 4号墳の東約2mに位置する隅丸長方形の浅い土坑で、全長約1.3m・幅約1.1m、検出面からの深さ約0.2m、主軸方向N-50°-Wを測る。埋土は、上層が炭の若干混じる暗茶褐色細砂質土、下層がにぶい黄茶褐色細砂質土で、底部は東南側がやや高い。遺物は出土していない。

S K 08 調査地南西端の台地端部に位置する長楕円形の土坑で、全長約1.1m・幅約0.5m・検出面からの深さ約0.25m・主軸方向N-5°-Eを測る。南側は、削平により浅くなっている。土坑の断面形は逆台形に近く、埋土は暗褐色細砂質土で、底部はほぼ水平である。遺物は出土していない。

S K 09 S K 10の東約1mに位置する平面長楕円形の土坑で、全長約1.4m・幅約0.6m、検出面からの深さ約0.2m、主軸方向N-48°-Eを測る。土坑の断面形は逆台形である。埋土は、上層が暗褐色細砂質土、下層が暗灰黄色砂質土の2層に分かれ、底部は北東側が7cmほど高い。上層から円筒埴輪片が出土している。

S K 10 S K 08の北約2.5mに位置し、S K 09と並んでいる平面隅丸長方形(全長約2.6m・主軸方向N-42°-E)の土坑である。土坑は、東側が二段に掘られており、最大幅約1.4m、中段での幅約0.9m・深さ約0.5mを測り、底部はほぼ水平である。土坑の断面形は逆台形で、埋土は上部3層ににぶい黄褐色系細砂質土が堆積し、下層が茶褐色細砂質土、最下層がにぶい黄灰色細砂質土である。遺物は出土していない。

S K 11 6号墳の南西約1.5mに位置し、平面形はやや不整形な隅丸長方形の土坑で、全長約2.1m・幅約0.9m、検出面からの深さ約0.2m、主軸方向N-46°-Wを測る。土坑の断面形は逆台形で、埋土は上層がにぶい茶褐色細砂質土、下層がにぶい灰黄茶褐色粘質土の2層に分かれ、底部はほぼ水平である。遺物は出土していない。

S K 12 4号墳の東約1mに位置する平面長楕円形の土坑で、全長約1.3m・幅約0.6m、検出面からの深さ約0.1m、主軸方向N-33°-Eを測る。土坑の断面形は浅い逆台形で、にぶい褐色細砂質土を埋土とし、底部はほぼ水平である。遺物は出土していない。

竪穴式住居跡 竪穴式住居跡は、10号墳の南側の谷部を臨む調査地南斜面にあり、その大半が後述する中世溝(S D 03)によって切られており、全体の約1/4程度が遺存するのみである。平面形態は方形で、北西隅のみ約2.5mが遺存しており、床面までの深さは約0.5mを測り、壁直下に浅い壁溝がめぐる。床面では直径約0.3m・深さ約0.4mの柱穴3か所を検出したほか、床面には若干の焼土と炭片の広がりが見られた。床面付近で土師器杯片1点が出土した。10号墳の周溝を切っているため、10号墳より時期は新しく、古墳時代中期頃であろう。

(有井広幸)

第3章 古墳時代の遺物

第1節 1号墳の副葬品

1. 第1主体出土の副葬品

第1主体から出土した遺物としては、棺内から鉄製冑・鉄製甲・鉄製工漁具・鉄槍(劍)があり、棺外の遺物床に鉄槍がある。このうち、甲冑は、盗掘による攪乱を受けているため、原位置を失っており、出土状況も甲冑を構成する各部材単位、またはそれ以下の小片となって散乱した状態であった。甲冑については、X線写真による観察や類例との比較検討を通じて復原を試みた^(註14)。鉄製工具及び鉄製漁具も、主として盗掘坑埋土中から出土しており、細片化したものが多い。それ以外の武器類は、後世の攪乱を受けておらず、ほぼ良好な保存状態を示していた。以下、各遺物について説明するが、鉄製甲冑の個々の部材の説明は省略し、復原したものの特性を記述する。

(1) 甲冑類

① 甲冑の出土状態

第1主体の棺内北端部で、わずかに薄い赤色顔料の痕跡が認められる棺床が遺存する。この地点を中心に、散乱した状態で小形の薄板状鉄製品が多数出土した。薄板状の鉄製品の多くは原位置を失い、大半が棺内陥没土か盗掘坑埋土に含まれる。ただ、棺床に接して原位置のわかるものも少しあり、元来の副葬された位置をかるうじて知ることができる。

鉄片は、第24・25・27～29図に図示したとおり、小形で魚鱗状のもの、長辺12cm前後の方形(カルタ)状のもの、環状に曲げられた帯状のものなどがある。これらの鉄片には、複数の個体(部材)が本来の接合状態を保って錆着したものや、1個体にも満たない大きさに欠損したものなど、さまざまな遺存状況を示していた。

これらの板状鉄板は、形状や接合状態、そして出土分量などから検討すると、小札革綴冑と方形板革綴短甲に復原でき、それぞれ1領ずつ存在することが明らかになった。各部材の出土地点の偏りから、冑が北に、甲がそれに隣接する南側に縦列に埋納されていたようすが復原できる。

② 小札革綴冑(第24～26図、図版第71・120)

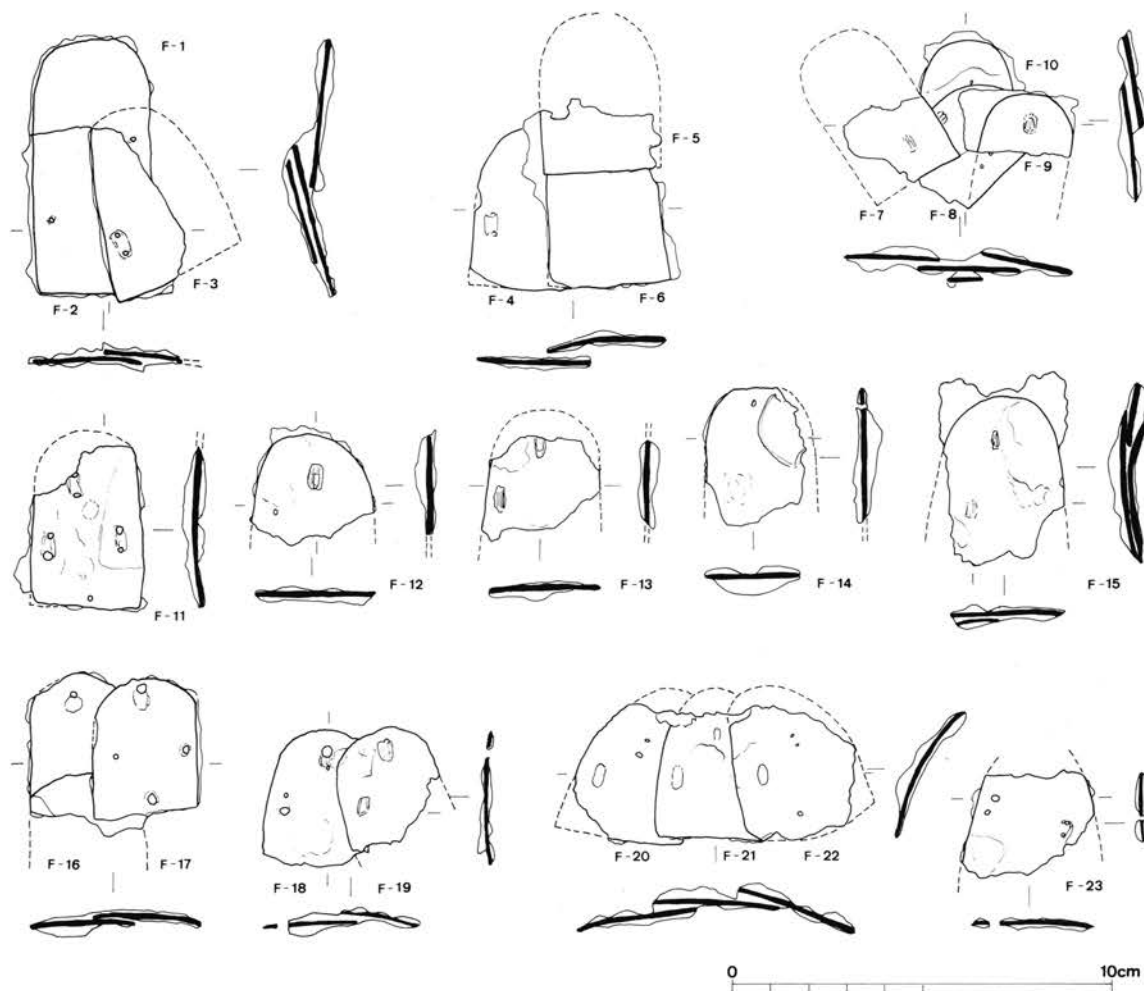
鉢部を構成する小札と腰巻板を確認した。小札は、上部が円弧を呈し、下部が直截に終わるいわゆる魚鱗形を呈する(頭円下直截形)。また、X線写真などによれば、各々の小札には、上部中央と中間部両側、下部中央に径約2mmの円孔(綴孔)が配され、上部と両側の位置には縦に2連ずつ穿孔されている。各小札は、平面規模と縦断面形状の違いによって大きく3群に分類できる。

第1群は、長さ約3.5cm・下縁幅2.3～2.4cmを測る最も小さなもので、縦断面は直線状を示す。

第2群は、第1群よりやや大きく、長さ約4cm・下縁幅3.1～3.2cmの大きさで、上下方向に大きく内湾する。

付表4 1号墳内部主体副葬遺物出土一覧表

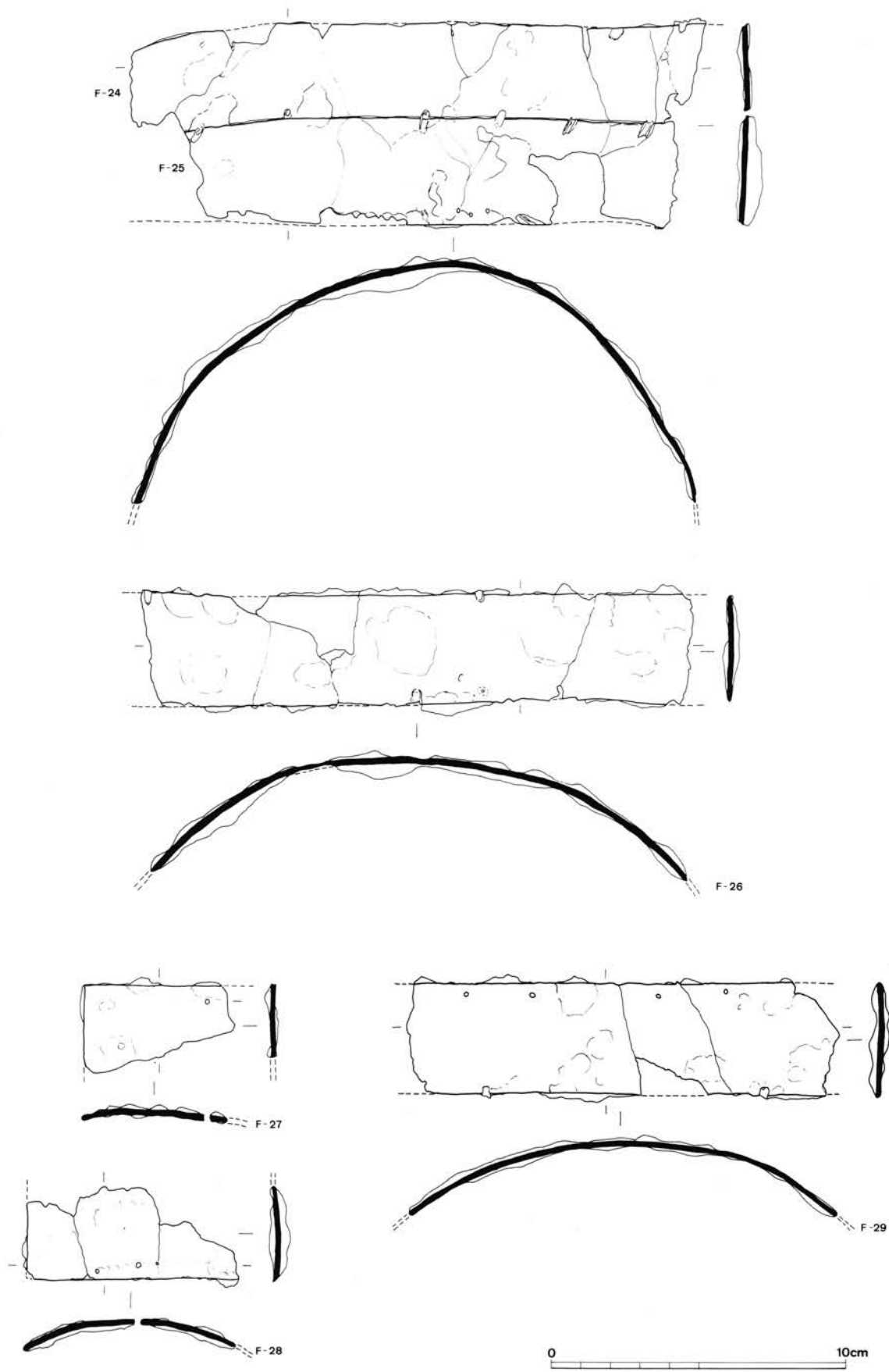
第1主体	棺内	盗掘坑以北	小札革綴冑 (残欠) ……………	1	鉢相当	
			方形板革綴短甲 (残欠) ……………	1	領相当	
			鉄刀子 ……………	1	点	
	棺内	盗掘坑以南 (木製容器内)	鎌形石製品 ……………	3	点	
			鉄 鎌 ……………	46	点	
			ヤ ス (残欠) ……………	7	片	
			鉄 剣 ……………	1	口	
	棺内	盗掘坑内 (埋土中)	上記甲冑の残欠			
			鉄刀子 (残欠) ……………	4	片	
			鉄 鉈 (残欠) ……………	12	片	
			鉄 鑿 (残欠) ……………	3	片	
	棺外 (槨内)	西側遺物床	鉄 槍 ……………	6	口	
		東側遺物床	鉄 槍 ……………	1	口	
	第2主体	棺内	主室空間	銅 鏡 ……………	1	面
				鉄 刀 ……………	1	口
鉄 剣 ……………				1	口	
鉄刀剣基部 ……………				1	片	
豎 櫛 ……………				1	点以上	
棺内		北副室空間	有機質地漆塗り草摺? (漆被膜) ……………	1	領	
			有機質地漆塗り短甲? (漆被膜) ……………	1	領	
			豎 櫛 ……………	18	点	
			ガラス小玉 ……………	5	点	
			刀子状鉄器 ……………	1	点	
棺内		南副室空間	針状鉄器 ……………	1	点	
			革製漆塗鞆 ……………	1	具	
			銅 鎌 (鞆内に収納) ……………	1	点	
棺外		西側遺物床	鉄 鎌 (鞆内に収納) ……………	40	点	
			鉄 刀 (大刀) ……………	1	口	
		東側遺物床	鉄 槍 (木柄・装着痕遺存) ……………	4	口	
			鉄 矛 (装着痕遺存) ……………	2	口	
		南仕切板部分 (棺蓋上?)	鉄 斧 ……………	1	点	



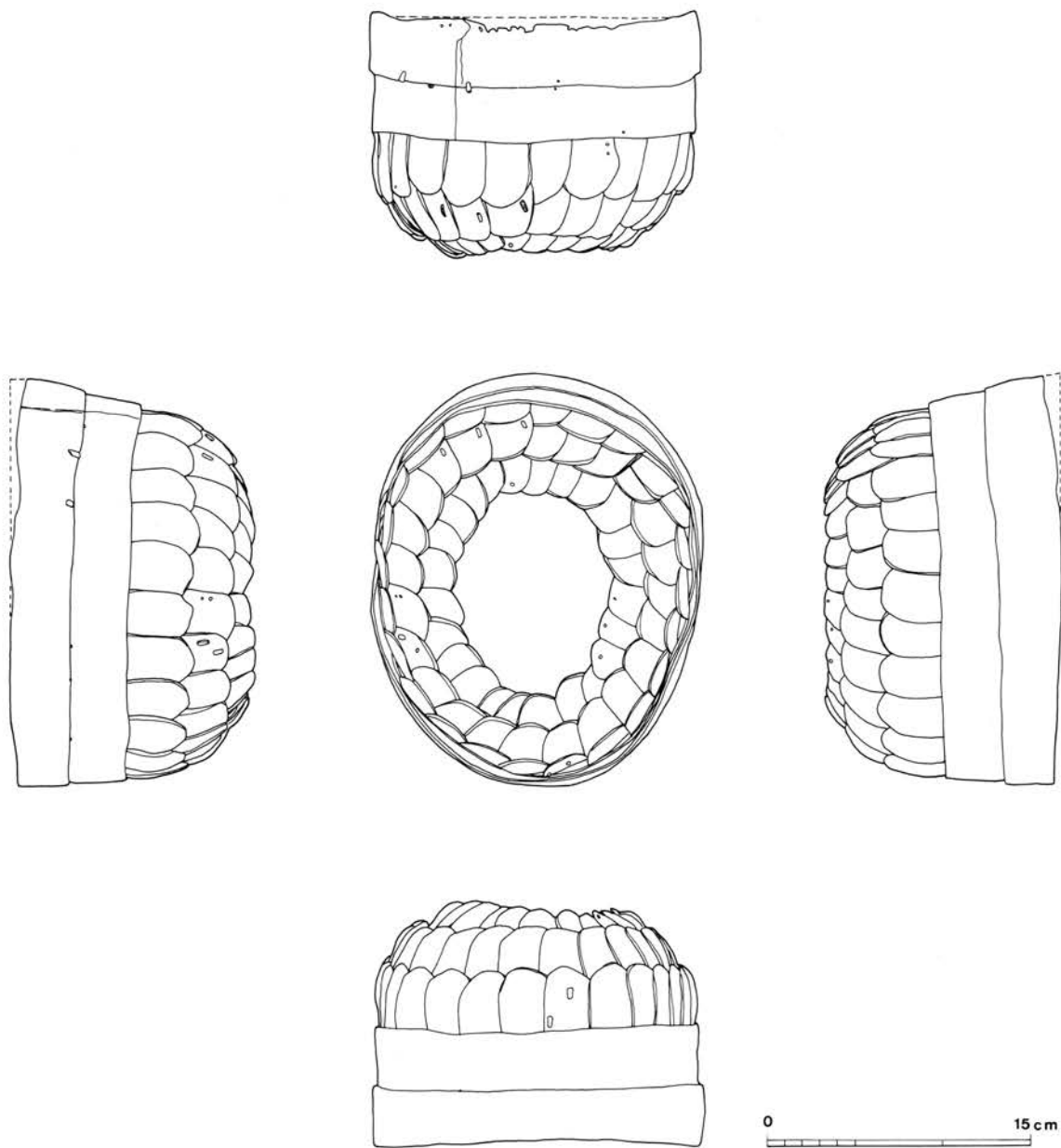
第24図 瓦谷1号墳第1主体小札革綴冑(小札)実測図

第3群は、最も規模が大きく、長さ約4.3cm・下縁幅3.2~3.5cmを測り、縦断面は上半でやや屈折して、それより上位がゆるく内湾する。旧状をとどめて接合錆着する資料を見ると、鉢部を構成する小札列は、上下方向に3段で構成されていたようで、上位から下方に向かって第1群→第2群→第3群と徐々に規模を拡大していったようである。小札相互の重なりについては、左右方向では、右側の小札を左側の小札の上(外側)に、上下方向では、下位の小札を順次上位の小札の上に重ねている。

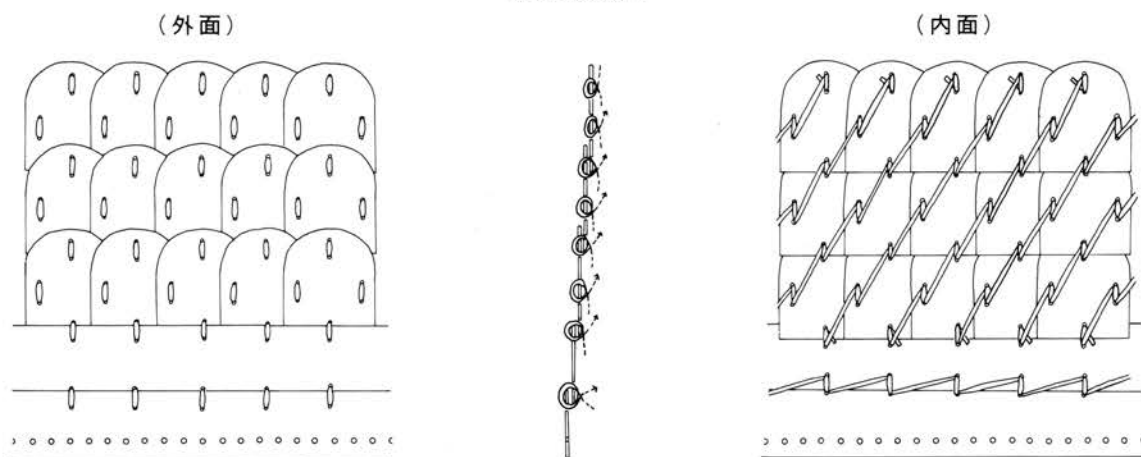
小札の上下方向の重なる位置は、中国漢代にみられるいわゆる魚鱗甲^(注15)のように、円頭部の位置が縦に千鳥配置にはならず、同一位置で縦方向に並び、直線状に目地が通る。各小札間の連結は、綴じ技法によるため可動性はなかったとみられる。小札の重なりは、上下方向では小札下辺中央の1孔と上部中央の縦列2孔のうち上の1孔を、左右方向では小札中間部両側の2孔をそれぞれ一致させている。小札どうしは革紐で縛られ、その痕跡が表面では各綴孔上を覆うように縦の1点となる。裏面の状況に関しては、X線写真から、革紐が右上がりの鋸歯状に走ることが確認された。すなわち、下位の小札下部中央の綴孔に革紐を通した後、横方向の小札と中間部側の綴孔で綴じ、次いで同じ小札の上部中央2孔と上位の小札下辺中央の1孔の綴じへと進む。つまり、



第25図 瓦谷1号墳第1主体小札革綴冑(腰卷板)実測図



革綴模式図



第26図 瓦谷1号墳第1主体小札革綴胃復原実測図・革綴模式図

椿井大塚山古墳出土の復原例^(注16)のように、横の列と縦の段を別々に結ぶ技法は採らず、上下方向の綴じと左右方向の綴じを一連に行う技法で組み上げられたと考えられる。

腰巻板は、上下2段からなる幅広の形態を示す。各带状鉄板は、ともに幅約3.5cmを測り、両者は革紐による綴技法で結ばれる。綴孔は、径約2mmの円孔で、上段・下段ともに約2.5cmの間隔で横1列に穿孔されている。上段の上縁線に沿って、これと同じ間隔の1列の穿孔がみられ、鉢部の小札が小札下部中央の綴孔を一致させてこれに取り付くとみられる。下段の下縁には直径2mm前後の覆輪孔が約0.7cmの間隔で連続しており、一部で布包覆輪の痕跡を確認できる。上下の腰巻板の重なりは下段が上重なりになっている。上段の腰巻板は、折損部を接合するとほぼ全周(全周約62.0cm)し、1枚の带状鉄板をやや楕円形に曲げて曲率の高い一端(胄正面か?)に重ねて接合するが、この部分の綴孔は不明である。

③方形板革綴短甲(第27～31図、図版第71・121・122)

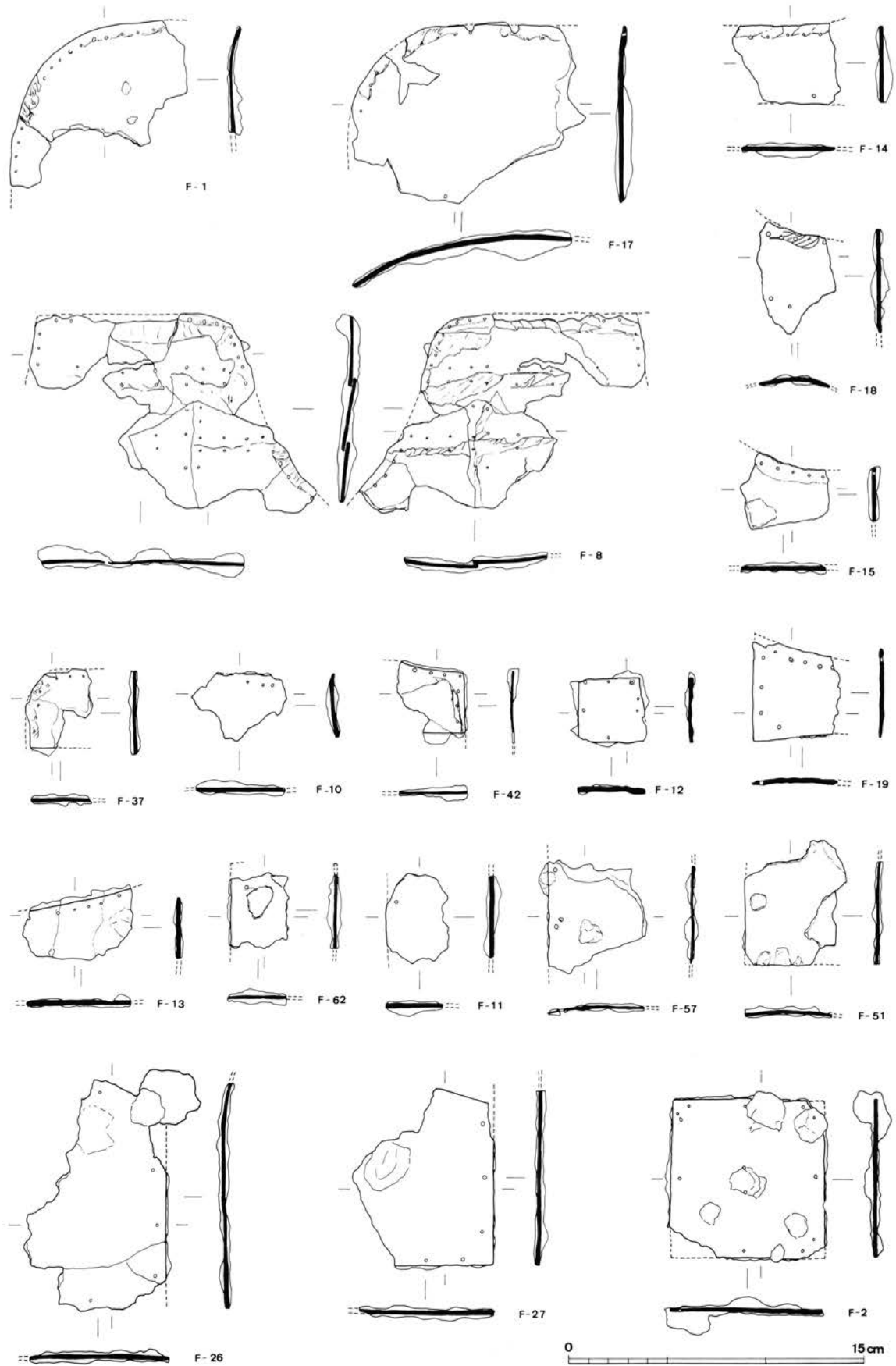
短甲も上記の胄と同様、それぞれの部材が遊離した状態で出土し、部材単体を見ても完存するものは少ない。このような出土状況のもとで、年次報告^(注17)の段階では短甲の形状として復原不能としていたが、保存処理後にさまざまな視点から検討を重ねた結果、遊離あるいは小片化しているそれぞれの部材(地板)のおおよその部位や個々の地板の形状、覆輪孔の穿孔位置などから、短甲の展開図を作成し^(注18)(第30図)、欠損部を補って短甲の復原を実施した(第31図)。以下、この復原案をもとに本資料の内容について記述する。

短甲は、主要部分が上下3段、各段左右13枚からなる方形の地板43枚(39区画)で構成され、後胴上部にはおそらく1枚からなる横長の半月形の押付板が、また、前胴左右の上縁には刀の切先形(刀尖形)の堅上板を各1枚付設する。引合板は、前胴左右両側に備わっていたとみられる。

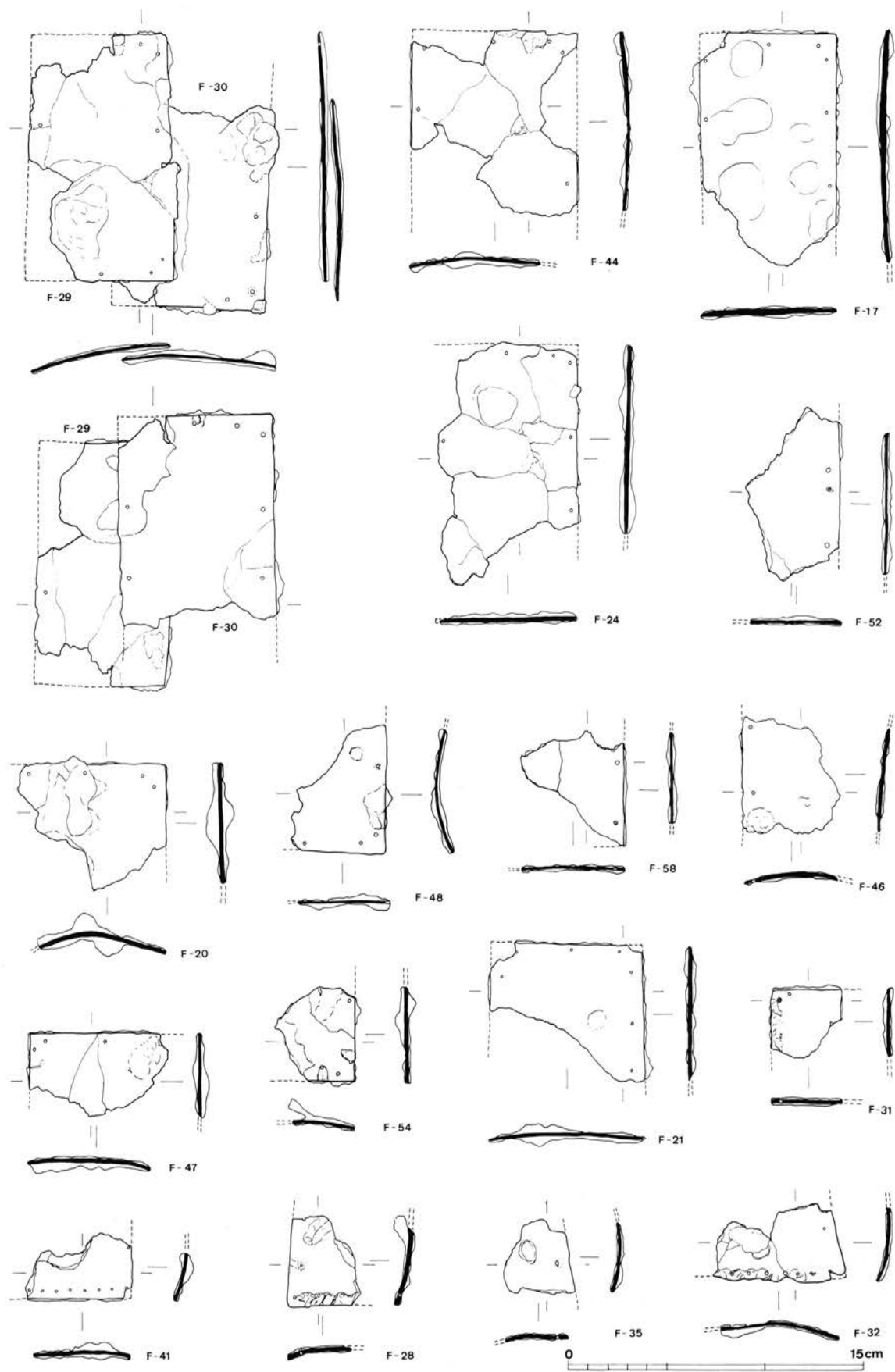
後胴押付板(F-1・17)は、左右の端付近のみ残存する。いずれも上縁の示すラインが、両側で一律の円弧を描いて下向する平面形を呈する。断面形は、上下・左右ともに内方にゆるく内湾している。遺存個体の上縁に沿って径約2mmの覆輪孔が約0.7cm間隔で一列に穿たれており、一部に、鏽に置き換わって膨れた状態の革組覆輪の痕跡が認められた。他の部材に比較して保存状態が良好で、厚さは1.4～1.5mmを測る。

前胴左右の堅上板(F-8の上部、F-10・37・42)は、完存する資料から左右方向の長さ10.5cm、上下方向の幅3.0cmを測る横長の部材である。引合側は、垂直に折れて直角に截断されるのに対し、脇側は、刀鋒状に斜め方向に下向し、そのまま脇線のラインに連続する。下辺を除いた各辺には覆輪孔がみられ、革組覆輪の痕跡が約1cmの幅で遺存する。

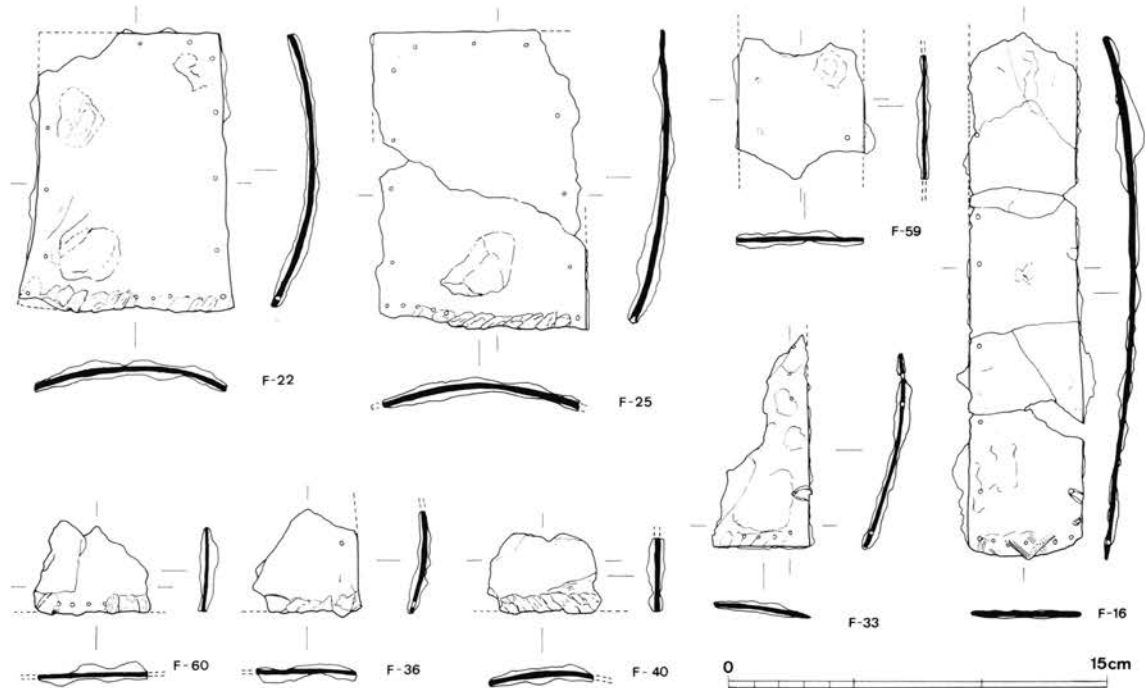
引合板(F-16・59)は、右側の部材が比較的良好に残存している(F-16)。それは、部材の下半部で、下端部の幅は4.5cmで、上位に向かってわずかだが、徐々に幅を狭める平面形を呈する。横断面は、ほぼ直線的である。上下方向は、裾部に向かって大きく外反する断面形を示す。下端と左側辺に沿って円孔列がみられるが、下端のそれは間隔が狭く、覆輪孔で一部革組覆輪の痕跡が残る。引合板の上端は遺存しないが、堅上板の覆輪のあり方から推定して、堅上板下縁線で終わると考えられる(推定長約32.0cm)。



第27図 瓦谷1号墳第1主体方形板葺短甲実測図(1)



第28図 瓦谷1号墳第1主体方形板革綴短甲実測図(2)

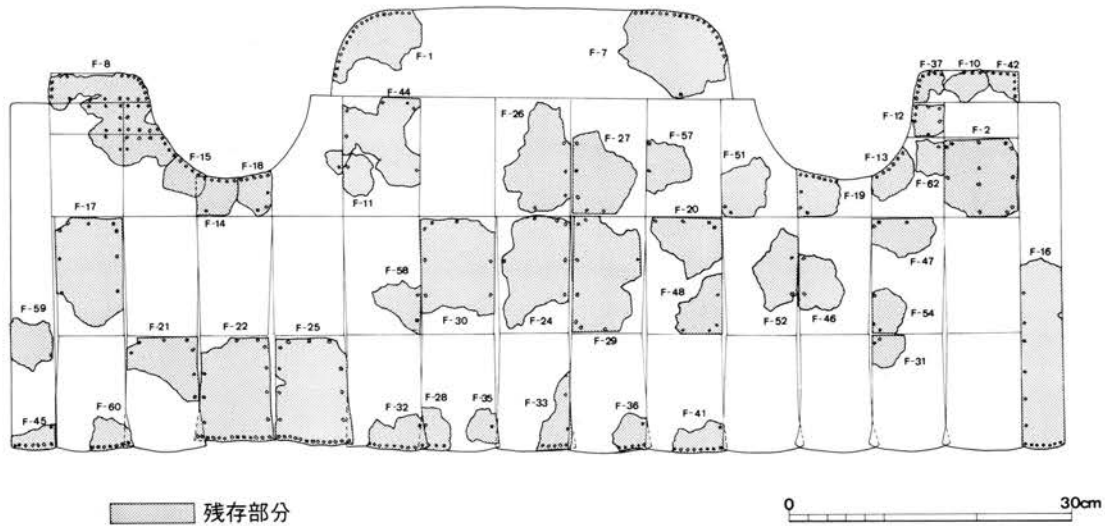


第29図 瓦谷1号墳第1主体方形板革綴短甲実測図(3)

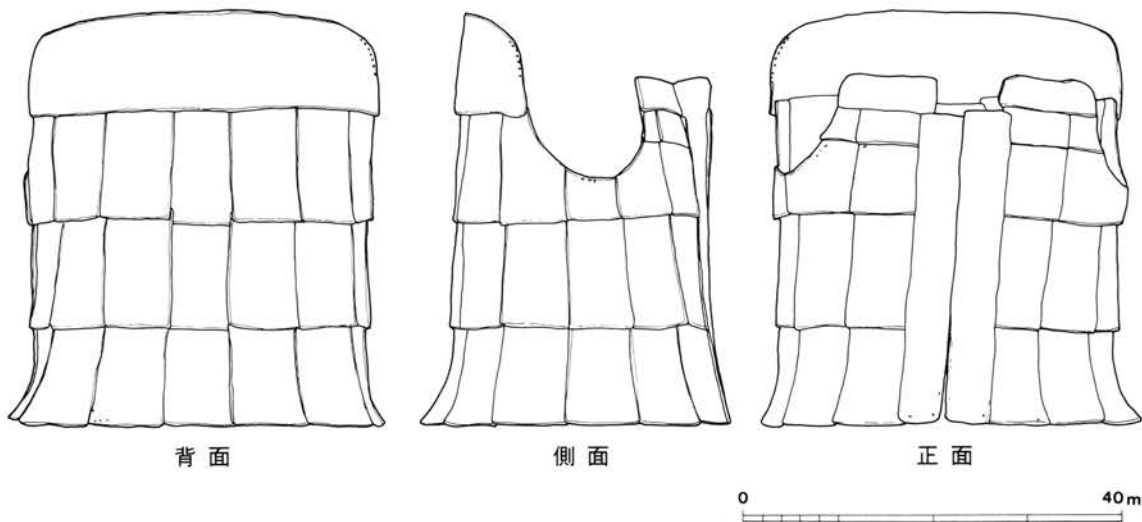
主要部分を構成する方形板は、破片資料が多いが、その中でも比較的残りのよい資料がある(F-17・22・25・29・30など)。綴孔は、各辺に沿って1列で短辺には3孔、長辺には4孔がほぼ等間隔で配列する。両辺の交わる方形板の四隅では、それぞれの穿孔が約1.3cmと短い間隔で、垂線に対して45°の角度で並ぶ。断面形は、F-17・24・29・30・44などが縦方向にほぼ直線的で、左右方向にやや内湾する。後胴押付板に接する第1段(上段)、あるいは第2段(中段)を構成する部材であろう。これに対して、F-22・25の平面形はやや裾広がり台形を呈し、断面形は左右方向の内湾・上下方向の外反の度合いが大きい。F-22・25は、下縁線に沿って覆輪孔が1列に並ぶこと、第3段(裾板)の部材で、特に横方向の内湾度が高いことから、脇部に近い部位の地板とみられる。この方形板の下縁には、錆に置き換わっているものの、覆輪の痕跡がよく残っている。それによると、通常の革組覆輪を施した後、さらにその上に重ねるように、より細い革紐のような原体を用いた覆輪孔間を半返し縫い風にたどった形跡が認められる。

方形板の第2の形態は、F-2にみられるように、四辺の長さが約8.0cmの正方形の平面形を呈し、断面形は縦横ともに湾曲を示さない。各辺に沿って3孔ずつの綴孔が等間隔で見られるほか、方形板の中央にも上下に近接して並ぶ2個の穿孔がみられる。中央の穿孔がワタガミ緒孔とすれば、引合板に接続する上段(第1段)の部材とみることが可能である。

方形板の第3の形態は、F-12・14・15・19などで、前二者に比べて規模が小さく、形状も不定形のものが多い。そして、残存する辺のうち弧状を呈する辺に沿って例外なく覆輪孔が認められることから、第1段(上段)の脇剝部を構成する部材である可能性が高い。なお、F-8の堅上板の下位にくる第1段の方形板は、長辺約8.0cm・短辺約4.0cmの横長に湾曲し、長方形を呈する。しかし、この部材の直下に先のワタガミ緒孔を有する正方形部材(F-2)が接続するとすると、



第30図 瓦谷1号墳第1主体方形板革綴短甲展開図



第31図 瓦谷1号墳第1主体方形板革綴短甲復原実測図

両者合わせて、上下長12.0cmとなり、一般の部位の方形板と同寸となる。また、これに隣接する脇斜側の方形板も、同一位置で上下に2分割されている。つまり、前胴左右の堅上板の下にくる第1段(上段)の方形板は、左右の引合板よりの各2枚分が上下2段からなるため、第1段は計17枚で構成される。

方形板は、第2段の後胴中央とみられるF-24と、その右側に接合関係をもつことが判明したF-29の事例から、右側のF-29がF-24の上に重なっている。また、小部材複数が錆着しているF-8の部位を見ると、堅上板も含めて上位の部材が下位の地板の上(表側)に重なっている。これらの断片的なデータから推測すると、左右方向は後胴中央を中心に左右に順次上重なりに展開し、上下方向は下位の部材が下重なりになるとみられる。

部材間の連結は、可動性をもたない綴技法によるが、X線写真による詳細な観察では、革紐で結ばれていることがわかる。その綴じの技法は、通有の革綴短甲にみられるものと変わらない。革紐は、表面側では上下間は縦の1点、左右間は横の1点となって現われるが、裏面側は各々縦

横の鋸歯状となる。ただ、F-8の堅上板に続く第1段方形板をよく観察すると、上下方向で重なる部材を綴じた後、左右方向で重なる鉄板を綴じるという先後関係が明らかである。この手順が全体に適用されたとみれば、革紐の綴じはまず脇から引合板側に向かって横方向に進み、各段が綴じられた後に、革紐は下から上へと縦方向に進み、段間が結ばれるという手順が復原できる。

(2) 石製品

鎌形石製品^(注19)(第33図、巻頭図版6-(2)、図版第129)

いわゆる平根腸袂長三角形鉄鎌(例えばRM-39など)を模倣原体とした軟質で淡緑色を呈するグリーンタフ製模造品で、同形態のものが3点ある(RQ-1~3)。鎌身の形態は、鋒よりふくらを有して少し内向した後、外反していわゆる「S」字状を示し、多少開き気味に逆刺端に至る長三角形の外形ラインを呈する。鎌身の基部には浅い腸袂を入れるが、その形態は三者三様である。RQ-1では、平面形が隅丸台形を呈するが、RQ-2では半円形、RQ-3では頂点が丸い三角形状に抉っている。これら腸袂によって生じる逆刺は、下端がほぼ水平(RQ-1・2)、あるいは一方が若干外上がり(RQ-3)の直線的な面をなす。鎌身の下半部には、やじりばさみを介するか、直接篋代を受ける仕口として、平面的にみて外反する山形(三角形)の抉りを入れ、その中央に目釘孔(直径0.2cm)を1孔穿孔する。鎌身部の断面形は、山形抉りより上位は、鎌身中軸に縦方向に鑄を造るため菱形を呈するが、その各辺はわずかに湾曲する。山形抉りの部分は、逆にゆるやかな凹面をなすように造られている。3者は、計測寸法に微妙な差があるため、わずかな形態変化を生じている。すなわち、RQ-1を標準型(全長5.4cm・復原最大幅約3.5cm・最大厚さ0.8cm)とすると、RQ-2はやや細身を呈し(全長5.5cm・復原最大幅約2.8cm・最大厚さ0.7cm)で、RQ-3は全長の減少により正三角形に近い平面形を呈している(復原全長約4.9cm・最大幅3.8cm・最大厚さ0.8cm)。

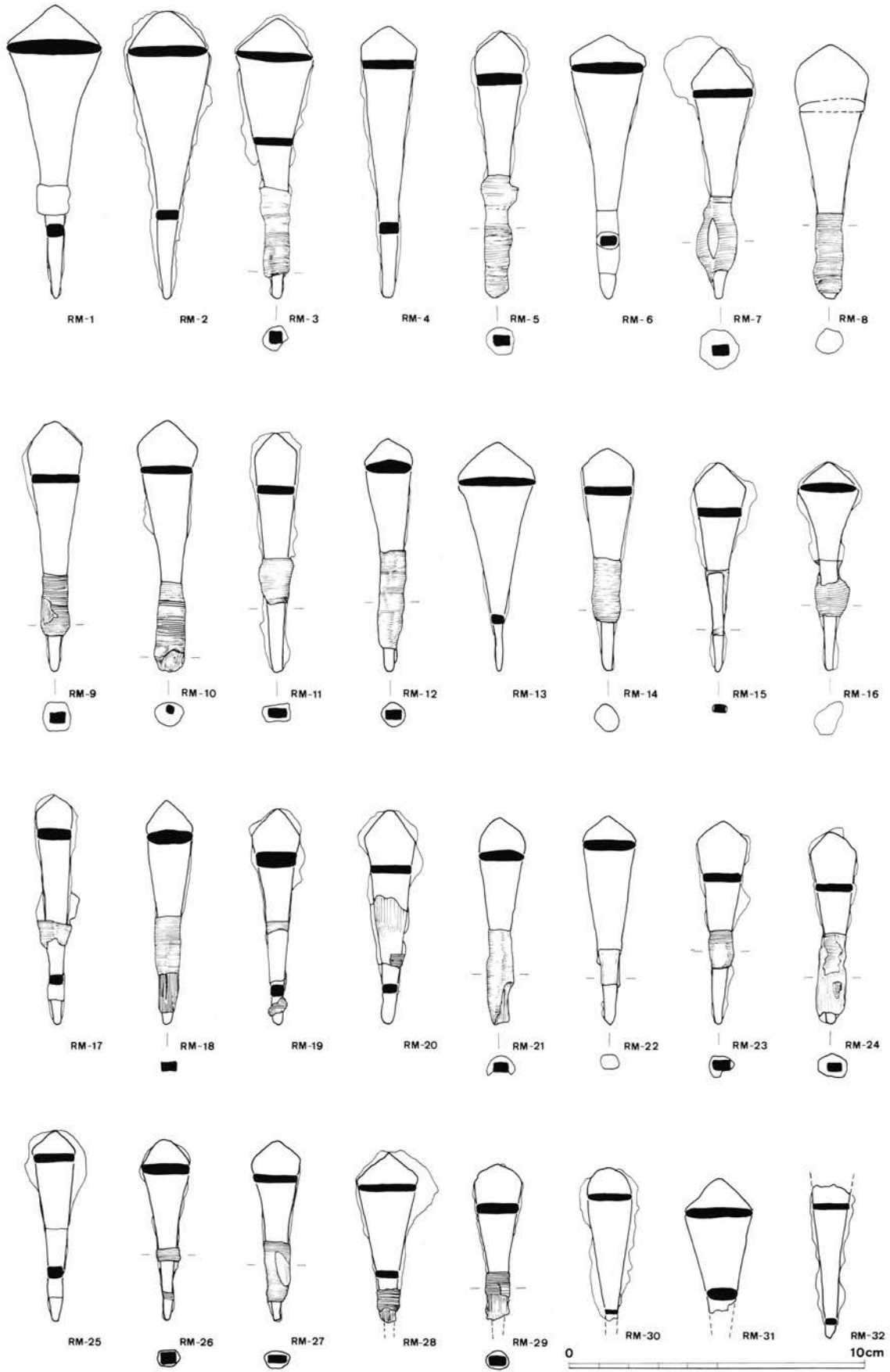
(3) 武器類

① 鉄鎌(第32・33図、図版第123・124)

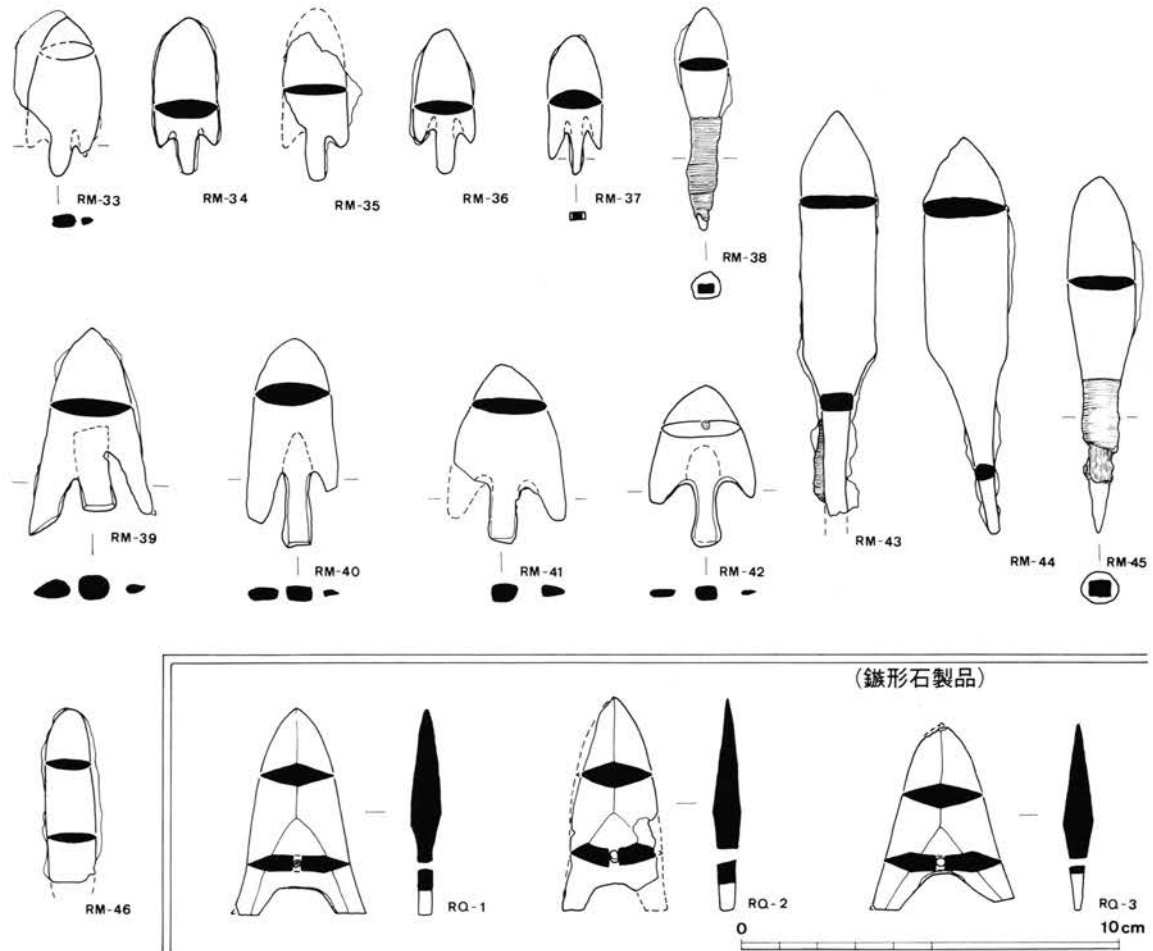
棺内南よりに設置された木製の盛矢具(想定)内に鋒を北に向けて埋納されており、総数46点を確認した。その内訳は、圭頭斧箭式^(注21)(圭頭鎌群B形式)^(注22)鉄鎌が32点で、全体の7割を占め、ほかに腸袂柳葉式鉄鎌5点・広根短頸腸袂長三角形鉄鎌4点・柳葉式鉄鎌4点・不明形式1点がある。

圭頭斧箭式鉄鎌(RM-1~32) 偏平な広根系の鉄鎌で、鎌身上部が平面山形あるいは鋒のやや丸い圭形を呈し、この部分のみ刃部が形成される。刃部以下の鎌身部は、徐々に幅を狭め、その外形の描く線は、直線的なものと、やや内湾ぎみのものがある。これは、刃部下端の幅に規制され、幅広のものは内湾し、狭いものは直線状を呈する。鎌身部から茎部への境界(篋被部分)には段を造り出さず、いわゆる無関の形状に造る。鎌身の造りは平造りで、茎部の断面は長方形をなす。これらは、その大きさから、全長10.0cm・鎌身幅3.0cm前後と、全長7.0cm・鎌身幅1.5cmの2群に分類できる。

腸袂柳葉式鉄鎌(RM-33~37) 全長約2.0cm・鎌身幅約1.5cm前後の小形で、厚手の鉄鎌である。その平面形は、鋒からふくらを有した後、ほぼ真っ直ぐ、あるいはわずかに開きながら逆刺



第32図 瓦谷1号墳第1主体鉄鏃実測図



第33図 瓦谷1号墳第1主体鉄鍬・鍬形石製品実測図

端に至る。腸挟は、浅く丸味をもち鋭さを欠く。茎は、逆刺端より長くのびるが、逆刺そのものが非常に短く、相対的に長く見えるだけで、絶対的には短いものである(1.0cm前後)。

鍬身の断面は、外面に鑄が痕跡状に残る両丸造りである。茎の断面は、丸味を帯びた長方形を基本とする。

広根短頸腸挟長三角形鉄鍬(RM-39~42) 鍬身が長三角形を呈する広根系の鉄鍬である。その外形ラインから、鋭い鋒からふくらを有して内向した後、外反して多少開き気味に逆刺端に至るもの(RM-39・40)と、鋒が鈍く、ふくらを有してそのまま内湾ぎみの鍬身に至るもの(RM-41・42)に2分できる。前者は、腸挟が比較的深く、逆刺端部は鋭角状をなすが、その内縁線は途中で屈折し、先端には平坦面を形成しているのに対し、後者の腸挟は、未発達で丸味を帯びて浅く、逆刺端も鋭くない。茎は、断面が方形に近い隅丸長方形を呈し、鍬身を挟みこむようにして接合する。茎の下端は、方頭状に終わるが、逆刺より短いもの(RM-39)と、より長いもの(RM-40~42)がある。鍬身は、平造りに近い偏平な両丸造りである。RM-42は、鍬身部中央やや上寄りに貫通しない小さな円孔が1か所穿孔されている。茎との装着の際の仕口であろうか。

柳葉式鉄鍬(RM-38・43~45) 全長6.0cmの小形のもの(RM-38)と、全長10.0cm前後の大形のもの(RM-43~45)がある。RM-38は、茎部分に篋代の木質が残り、その全体の形状はわから

付表5 瓦谷1号墳鉄鏃一覧表(cm)

遺物番号	全長	鏃身長	最大幅	鏃身厚さ	茎部長	遺物番号	全長	鏃身長	最大幅	鏃身厚さ	茎部長
RM-1	9.90		3.20	0.43		RM-43	[9.8]	[5.6]	2.10	0.45	[4.4]
RM-2	9.70		2.85	0.40		RM-44	10.50	5.50	2.30	0.55	5.00
RM-3	9.50		2.60	0.30		RM-45	9.50		1.80	0.45	
RM-4	9.15		1.80	0.45		RM-84	<7.5>		1.80	0.50	
RM-5	<9.1>		1.90	0.50		RM-85	7.30		1.50	0.40	
RM-6	8.90		1.50	0.43		RM-86	6.50		1.80	0.50	
RM-7	8.90		2.80	0.35		RM-87	<7.0>		1.75	0.60	
RM-8	7.60		2.30	0.45		RM-88	<7.1>		1.65	0.40	
RM-9	8.50		2.01	0.40		RM-89	<6.9>		1.20	0.40	
RM-10	<8.5>		1.90	0.47		RM-90	6.90		1.65	0.50	
RM-11	8.20		1.40	0.55		RM-91	<6.6>		1.50	0.40	
RM-12	7.90		1.65	0.48		RM-92	5.80		1.20	0.29	
RM-13	7.80		2.60	0.29		RM-93	[4.65]		2.00	0.43	
RM-14	7.50		1.85	0.50		RM-95	9.10		2.05	0.60	
RM-15	7.20		1.85	0.60		RM-96	9.00		1.85	0.45	
RM-16	7.10		2.05	0.35		RM-97	8.60		1.70	0.56	
RM-17	7.81		1.35	0.35		RM-98	[7.8]		1.60	0.40	
RM-18	7.60		1.60	0.43		RM-99	6.90		1.40	0.50	
RM-19	7.35		[1.6]	0.50		RM-100	<6.6>		1.60	0.60	
RM-20	7.20		1.81	0.35		RM-101	<6.6>		1.90	0.58	
RM-21	<7.05>		1.55	0.36		RM-102	<5.95>		1.30	0.33	
RM-22	7.05		1.80	0.43		RM-103	[6.0]		[1.5]	0.50	
RM-23	7.00		1.90	0.45		RM-104	[6.0]		2.00	0.52	
RM-24	6.70		1.65	0.35		RM-105	<8.5>	5.30	1.80	0.45	<3.2>
RM-25	6.65		2.10	0.60		RM-106	<8.4>	5.45	1.85	0.50	<2.95>
RM-26	6.30		1.75	0.45		RM-107	<8.0>	5.40	1.90	0.50	<2.6>
RM-27	5.90		1.60	0.45		RM-108	<7.3>	5.00	1.50	0.50	<2.3>
RM-28	<5.9>		2.51	0.40		RM-109	<7.2>	4.70	1.75	0.50	<2.5>
RM-29	<5.4>		1.80	0.39		RM-110	7.10	4.80	1.60	0.45	2.30
RM-30	[5.3]		2.00	0.40		RM-111	7.00	5.90	2.05	0.54	1.10
RM-31	[4.6]		2.40	0.36		RM-112	[7.0]	5.20	1.90	0.44	[1.8]
RM-32	5.30		1.40	0.30		RM-113	<6.0>	5.20	1.85	0.55	<0.8>
RM-33	4.20	3.80	2.05	0.54	0.80	RM-114	5.25	4.20	1.55	0.56	1.05
RM-34	[4.2]	3.50	1.75	0.50	[1.05]	RM-115	<6.7>	3.60	1.60	0.43	<3.1>
RM-35	[4.0]	[3.0]	2.10	0.53	1.40	RM-116	<6.65>	3.85	1.20	0.40	<2.8>
RM-36	4.00	3.10	1.65	0.55	[1.25]	RM-117	<6.6>	3.70	1.40	0.45	<2.9>
RM-37	3.80	[3.05]	[3.0]	0.55	[1.21]	RM-118	[6.2]	[3.15]	1.00	0.41	<3.05>
RM-38	5.95		1.40	0.50		RM-119	<6.2>	[3.3]	1.20	0.44	<2.9>
RM-39	5.50	5.50	2.50	0.70	1.30	RM-120	<5.6>	3.30	1.40	0.35	<2.3>
RM-40	5.50	[4.85]	2.45	0.60	2.00	RM-121	<6.3>	4.50	1.80	0.39	<1.8>
RM-41	4.70	4.10	2.90	0.54	1.65	RM-122	[5.35]	[4.0]	1.65	0.58	[1.35]
RM-42	4.30	4.30	2.90	0.60	1.80	RM-123	6.10	4.20	1.70	0.49	1.90

※ < > 下端が矢柄で不明

【 】 両端が破損で不明

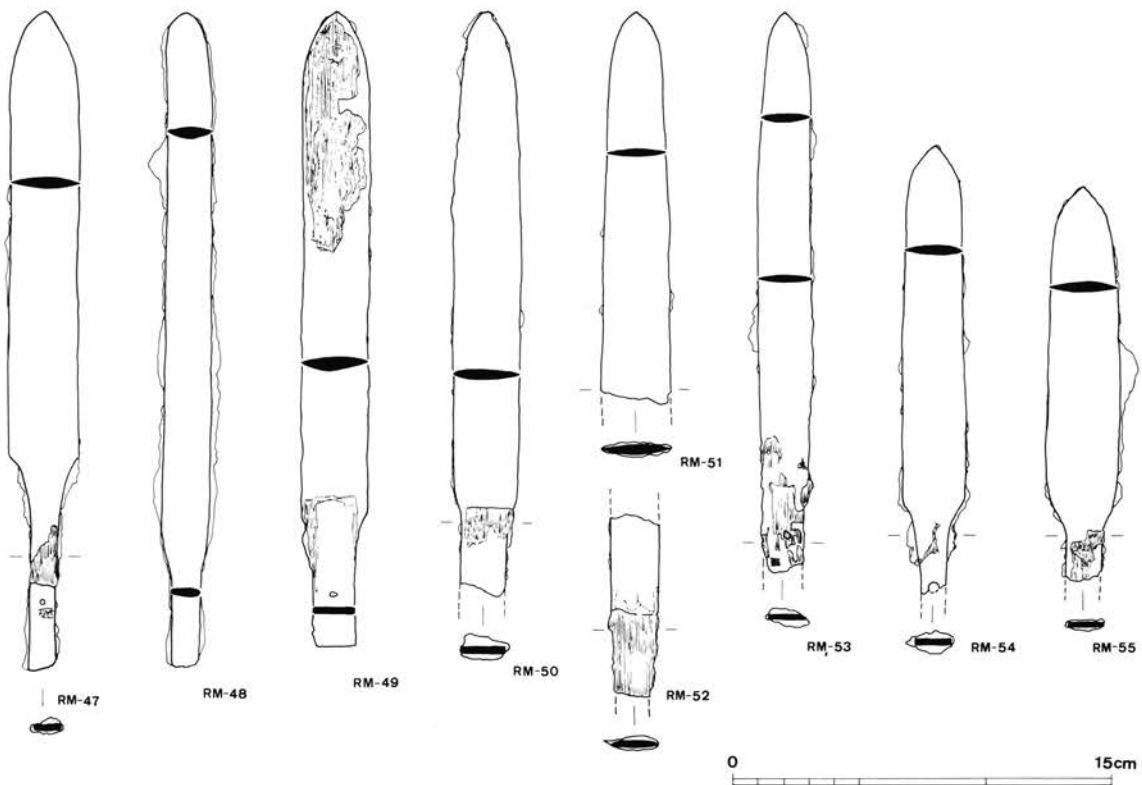
ないが、鋒からふくらを有して内湾し、そのままならかに内方に向けて茎部に至る外形線を示し、鍔身は、いわゆる凸レンズ状(椿葉形^(注23))を呈する。鍔身の断面は、偏平な両丸造りで、茎が長方形を呈する。一方、大形の柳葉系鉄鍔は、鍔身に明瞭な関を有するもの(RM-43)と、関が不明瞭で撫角関状を呈するもの(RM-44)、全く鍔身に関を造らないもの(RM-45)など、形態は多様である。RM-43・44は、鋒よりふくらを有し、ほぼ直線状に関部に至り、茎部の外縁線は内湾して、断面長方形または方形の茎端に達する。鍔身部の断面は平造り(RM-43)、あるいは偏平な両丸造り(RM-44)である。RM-45は、小形鍔RM-38を大形にしたような平面形状を呈し、いわゆる椿葉形と呼称されている。茎部分の根太巻が残り、正確な形状は不明である。茎上端に段による関を有するものではなさそうである。鍔身は平造りに近い両丸造り、茎部は長方形断面を呈する。

不明形式の鉄鍔(RM-46) 鍔身下半部を折損し、全体の形状をうかがえないが、丸味をもった鋒からふくらを経て直線状に下る平面形状を呈する。鍔身幅が狭く、通常の柳葉形に復原される可能性が高い。鍔身の断面は、偏平な両丸造りである。

②鉄槍(第34図、図版第125・126)

総数8口あるが、棺内から出土した1口(RM-48)を除いて、他はすべて棺外の遺物床に副葬されていた。RM-48は、長く続く木柄の痕跡から槍としたが、刃部の形状がほかと異なり細身であることから、剣の可能性もある。それ以外は、副葬状態から長柄の槍とみられる。

RM-47は、全長26.1cm・刃部最大幅2.8cmを測る。刃部は、鑄が不明瞭な両丸造りである(刃部長14.7cm・刃部厚さ約0.4cm)。関は、撫角に挟り込み、徐々に幅を狭め、相対的に長めの茎に



第34図 瓦谷1号墳第1主体鉄製武器実測図

続く。茎は、長さ11.4cm、幅は関部で2.8cm、茎尻付近で1.1cm、厚さ約0.3cmである。茎部には木柄の木質がわずかに残るが、漆の遺存は認められない。

RM-48は、全長(25.8cm)に対して、刃部幅(1.8cm)が相対的に小さく、全体として細身の形状を示す。唯一棺内に副葬されていたことから、短柄の剣の可能性が考えられる。鋒は、鋭さを欠き、丸味を帯びる。刃部は、偏平な両丸造りである(刃部長21.0cm・刃部厚さ約0.5cm)。関の形状は、浅い斜角をなし、短い茎に続く。茎は、長さ4.8cm・幅1.2cmで、茎尻は一文字尻である。

RM-49～52は、49を除くといずれも茎末端を欠き、全長を知ることができないが、全形がわかる49は刃部長25.1cm・刃部幅2.7cmの大きさで、やや幅広の形態を呈する。関は撫角で、徐々に幅を狭め茎に移行するが、その段差は浅く小さい。茎は、RM-52をみると、茎尻に向かって下端の幅をやや狭めた形態(微先細)を示す。刃部の断面形は、鎬をほとんど表さない平造りに近い偏平な両丸造りである。一方、茎の断面は、薄い長方形を呈する。木柄との接合は、RM-49やRM-50にみられるように、刃部関を前後する位置で木質の上端が横一文字に終わっており、遺存状態はよくないが、直截式拵^(注24)を示唆する残り方を示している。また、RM-49の刃部には木質が錆着し、木鞘の存在がうかがわれる。

RM-53は、やはり茎尻を失うが、刃部から茎への移行が不明瞭で、明確な関を造り出さない形状を呈する(無関または非常に浅い斜角関、残存長22.1cm)。刃部は、鋒が鋭く全体としてやや細身(刃部幅2.1cm)の平面形を呈し、鎬の不明瞭な薄手の両丸造りの断面形状を示す。下部に遺存する木質が、身幅がわずかに細くなる茎元の付近で、剣軸に対し直交に終わる痕跡が部分的に残るので、木柄との装着は直截式拵である可能性が考えられる。

RM-54は、前述の個体に対し、刃部長が短い茎式の長柄の武器である。刃部は鋒からふくらを有してやや幅広に開き、関部に至るまで身幅を徐々に増加させる平面形を呈する(刃部長14.0cm・関部での刃部幅2.5cm)。断面は、平造りに近い偏平な両丸造りで、鎬を造り出さない。茎は、山形の関から撫角に刳り込み、目釘穴付近で幅1.0cmを測る。

RM-55は、RM-54よりもさらに刃部長の短い鉄槍である(残存長15.6cm)。刃部は、長さ(11.5cm)に対して幅が広く、身幅は関部を最大として(2.9cm)、鋒下のふくらから徐々に幅を増加させる下膨れ状の形態を示す。刃部の断面は、薄いレンズ状の両丸造りである。関は、丸味を帯びた「S」字状にくったもので、明瞭な隅角を示さない。茎は、下半を折損するが、茎元で幅1.5cmを測り、薄い長方形断面を呈する。茎に断片的に残る木質から、直截式拵で木柄が装着されていた可能性がある。

(4) 工具・漁具類

① 鉈(第35図、図版第127)

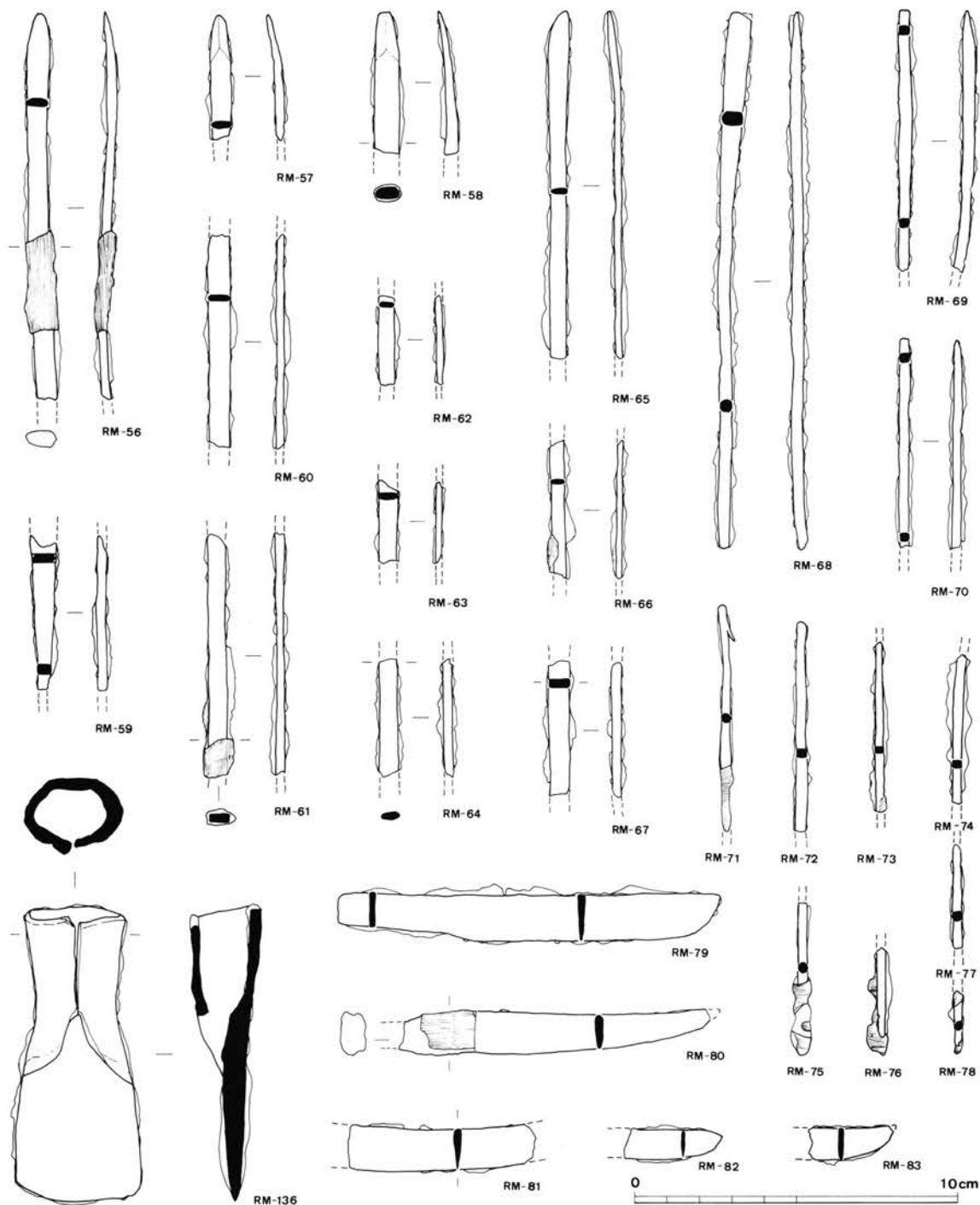
RM-56は、鉈身(柄部)の下半を折損する(残存長11.8cm)。平面形態は、刃部の顎がわずかに張った縦長の鋸形を呈し、首で若干くびれて刃部から少し細い茎に続く(刃部長1.7cm・刃部最大幅0.7cm・茎部幅0.6cm)。刃部は両刃で、ゆるやかな反りを持ち、反りの内側に三叉鎬を造り出す。刃部の裏面は、裏透きがなく平坦面となり、その断面は偏平な三角形を呈する。茎部は、

厚さ0.2~0.25cmの長方形断面を呈し、柄の木質が茎を取り巻くように遺存する。

RM-57・58は、鉞の先端部付近の小片資料である。刃部は顎の張りがなく、くびれることなく、そのまま茎部に同幅で連続する剣身形の平面形を呈する(刃部長1.3cm・1.5cm、刃部最大幅0.6cm・0.7cm)。刃部は、両側辺に刃をもち、反りはゆるやかで、その内側(表側)に三叉鑿をつける。裏側は、匙状にすかれておらず、平坦で中高の三角形断面を呈する。

②鑿(第35図、図版第127)

RM-68は、全長16.4mを測る完形品である。穂先がやや広く(刃部幅0.7cm)、首に向かって



第35図 瓦谷1号墳第1主体鉄製工具・漁具実測図

RM-136は第2主体出土

徐々に幅を狭くする平面形を呈する(無肩式)。穂先は薄手で、刃部は一部が欠けているが、不明瞭ながら両刃造りとなっている。首部以下は細い角棒状で、断面形はやや丸味をもった正方形を呈する(一辺0.4cm)。着柄部は、特に首部と区別せず、関を設けなくて同じ幅(厚さ)を保つ。

RM-69・70は、いずれも末端(茎)側を欠損するが、同形態を示す細身の無肩式鑿である。その平面形態は、穂先が首と同じ幅の角棒状を呈する(幅0.3cm)。刃部は、やや鋭角的な断面を呈し、両刃造りである。首部の断面形は、一辺0.3cmを測る正方形である。

③ヤス(第35図、図版第127)

RM-71・75・76は、その形状や規模、基部に残された糸巻きの痕跡などから複数の頭の基部を束ねて構成した型式(和田晴吾氏の分類による複式ヤスA類^(注25))のヤスの頭の小片資料である。RM-72~74・77・78もその形状から同型式のヤスの可能性がある。ただし、出土資料は、糸巻き部を含めて、個別の頭に分離しており、製品が何本の頭で構成されていたかを知ることはできない。各部位の特徴を示すと、刃部を残す資料はなく、形態は不明である。細い棒状の頸部には逆刺が1か所付けられている(RM-71)。頸部の断面は、直径0.2~0.3cmの円形あるいは隅丸方形状を呈する。頭どうしを固着する各頭の基部(茎部)は、徐々に先細りとなり、糸巻きの痕跡を断片的にとどめている。

④刀子(第35図、図版第127)

RM-79は、ほぼ完形である(全長11.7cm)。刃部は、刀尖形でわずかな内反りが認められる(刃部長8.0cm・刃部幅はほぼ一定値で1.4cm)。刃部の断面は平棟平造りで、背関を有さない(背の厚さ0.2cm)。関は、傾斜のゆるやかな斜角状で、その段差は浅く小さい。茎は、元幅と尻幅がほとんど変わらず(1.0cm)、茎尻は直截に終わる一文字である。茎部に目釘孔はない。

RM-80は、鋒と茎を欠く(残存長9.6cm)。刃部には軽い内反りがあり、刃部幅は関部から鋒に向かって徐々に狭く造る(刃部残存長7.3cm・関部での幅1.2cm)。刃部の断面は、平棟平造りである(背の厚さ0.2cm)。茎部は木質で覆われ、関の形態も含めてその形状は不明である。

RM-81は、刃部のみ破片で、背・刃側とも内反りを有している。断面は、薄い二等辺三角形(切刃造り)を呈する(刃部幅1.2~1.3cm)。

RM-82・83は、刃部の鋒に近い部分の小片である。背側に軽い内反りが認められる。断面は非常に薄い平棟平造りである。

2. 第2主体出土の副葬品

第2主体からも棺内・外から豊富な副葬遺物が出土している。棺内は、主室部分の5割程度が芋穴によって大きく破壊されており、遺骸の下半身に接して埋められたものは失われた可能性がある。それでも多種多様な内容の遺物が確認されており、第1主体よりも盗掘などによる被害は小さいと考えられる。その品目は、北副室には、有機質(皮革か?)地漆塗り草摺・有機質(同)地漆塗り短甲・堅櫛・刀子・針状鉄器・ガラス小玉が、主室には銅鏡・堅櫛・鉄製刀剣類が、南副室には鉄鍬・銅鍬を収納した革製漆塗りの鞆が置かれていた。棺外遺物には、木棺長側辺に沿っ



第36図 瓦谷1号墳第2主体銅鏡
実測図・拓影

て長柄の武器(槍・矛)と大刀・鉄斧がみられる。出土状態は前項に記したので、ここでは遺物の特徴を記述する。なお、有機質製の草摺と短甲・竖櫛は、出土状況の項目でその特性についても明記したので、本項では省略する。

(1)銅鏡(第36図、巻頭図版6-(1)、図版第127)

変形四首鏡(獸首形鏡)

全面が緑青で覆われているが、鑄上がりはよく、鏡背文様も比較的鮮明である。直径11.8cm・面の反り0.2cmを測る。偏平な半球形の鈕を中心に、周辺に乳を4個配した内区地文部を設け、素文帯・外向鋸歯文・櫛歯文からなる外区を、間に二重の圈線を介して配する構成をとる。

鈕は径2.2cm、高さは鏡面から1.0cmを測る偏平な半球形の断面を呈する。鈕座は底径2.9cmの低平な円座である。鈕孔は、断面が蒲矛形で(底部の幅0.6cm・高さ0.5~0.6cm)、鈕孔底部をおおむね鈕座上面とそろえている。

内区地文部には、太い突線描きの渦文風の文様を表わし、四乳によって、画面を4区画する。乳は、頂点が丸味をもって鋭さを欠く円錐形(底部約0.6cm・高さ約0.4cm)で内傾する面をもつ円圏の乳座(径0.9cm)を伴う。四乳の間隔は、図の左上から時計回りで3.5・3.8・3.7・3.9cmを測り、頂点を結ぶラインは正確な正方形にはならない。内区の主文様は、各区で微妙に異なるが、二重線で表現した茎状のものを基礎に、その上に二重平行線で表わした両先端が内外に蕨手状に巻く「~」形の図形を載せる構図で、内区内縁または外縁、または両方から派生させるのを基本とし、これを乳間で4単位繰り返す。これは、獸首文が形骸化・簡便化した図文とみられる。これら獸首文以外の地文部にはさまざまな種類の蕨手文や渦状文・曲線文で主文部間を充填する。特に、各乳から外周方向にイカの脚状に曲線文が連続的に多数のびている充填文は、四乳ともに共通した構図となり、何かの図像が簡便化し

たものかもしれない。いずれにせよ、内区の主文様は獸首鏡の図文が簡便化した印象が強い。

内区と外区を分ける帯状部分(界圈)には二重の凸細線からなる圈線をめぐらせている。

外区は、二重の文様帯(外周部)と素文の平縁の縁部からなる。外周部は、内区・界圈とも段差はなく、正放射状の櫛歯文・外向鋸歯文の2帯から構成されている。縁部は一段高く(段差は約0.1cm)、無文でその上面はやや反りをもたせた匙面となり、縁に向かって厚みを増す。縁頂部までの斜距離は0.9cm。縁部の外斜面もゆるく内湾しており、その斜面長は約0.4cmを測る。

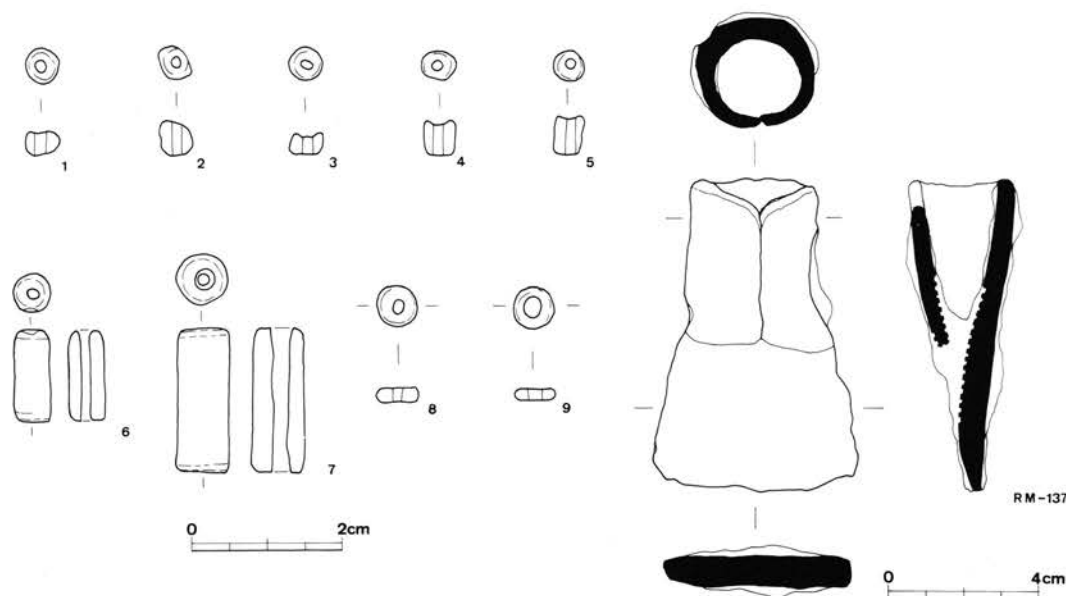
この鏡の様式は、全体に仿製鏡的であるが、中国やロシアから同趣の簡易鳥獸文鏡^(注26)が出土しており、舶載の可能性も残している。なお、鏡面には出土時、木質と豎櫛の歯・水銀朱が付着していた(第36図下段)。そのうち、木質は鏡背には全く痕跡もなく、木棺の長側板もしくは棺蓋材の一部が銅の成分で残ったと考えられる。

(2) 玉類(第37図、図版第135)

ガラス小玉(第37図1~5) 北副室の有機質地漆塗り短甲と推定した黒漆の被膜上に、約6cmの範囲に散乱するかたちで出土した。総数5点を数える。出土状態から、これらの玉は一連珠に綴られていたと断定することはできない。ただ、その個数から小規模な手玉の類とみることもできる。すべての玉が同じ色調を呈し、ややくすんだ濃青緑色に発色している。非常に細かい気泡が一定方向に流れる状況を確認できることから、成形は、管切り技法によると考えられる。以下、個体ごとの形状の特質を記す。

1は、全長0.3cm・直径0.45cmのやや扁平で、横断面は正円を呈する。内孔は正円で、径0.1cmを測る。両端は隅の稜が丸く、側線も円弧を描くことから、全体に丸味を持った縦断面形となる。

2は、全長0.45cm・最大径0.5cmを測る。横断面形は、平行四辺形に近いびつな円形を呈する。内孔は正円で、直径は0.1cmである。上端面は、稜に丸味をもっているが、内孔周囲は円形



第37図 瓦谷1号墳第2主体ガラス小玉・管玉・白玉(8号埴輪棺)・鉄斧(22号埴輪棺)実測図
6. 2号墳 7. 1号埴輪棺

の平坦面をなす。下端面は、より強い丸味をもち、平坦面は形成されない。側線も円弧を呈することから、全体に円形に近い縦断面形を呈している。

3は、全長0.3cm・直径0.43cmの白玉に近い形状を呈する。正円に近い横断面形を呈し、ややいびつな楕円形の内孔(長径0.1cm)を呈する。上端面は、「U」字形にえぐられた切断面が形成されているが、角は丸い。下端面も稜に丸味をもつが、内孔よりに狭い平坦面がある。側面は比較的直線的で、全体として正円筒形を呈する。

4は、全長0.43cm・直径0.45cmの側面が直線的な正円筒状を呈する小玉である。上端面には「U」字形にえぐられた切断痕があり、この部分にわずかな光沢をもつ。両端部とも角の稜が丸く、内孔よりも平坦面がない。内孔は楕円形で、長径0.125cm・短径0.09cmを測る。

5は、4と近似した形状を示し、横断面は多角形に歪んだいびつな円筒形を呈する(全長0.5cm・最大径0.4cm)。上端面は角に丸味をもつが、内孔よりに比較的広い円形の平坦面を作る。下端面も角が丸味をもつが、狭い平坦面をもつ。側面は直線的である。

(3) 武器類

① 銅鏃(RM-124: 第38図、巻頭図版6-(2)、図版第129・130)

鞆の口縁部に、多くの鉄鏃に混じって1点のみ正位置を保った状態で出土した。いわゆる有茎の柳葉式で、篋代(茎)に篋被をもたせたタイプである^(註27)(全長6.9cm)。

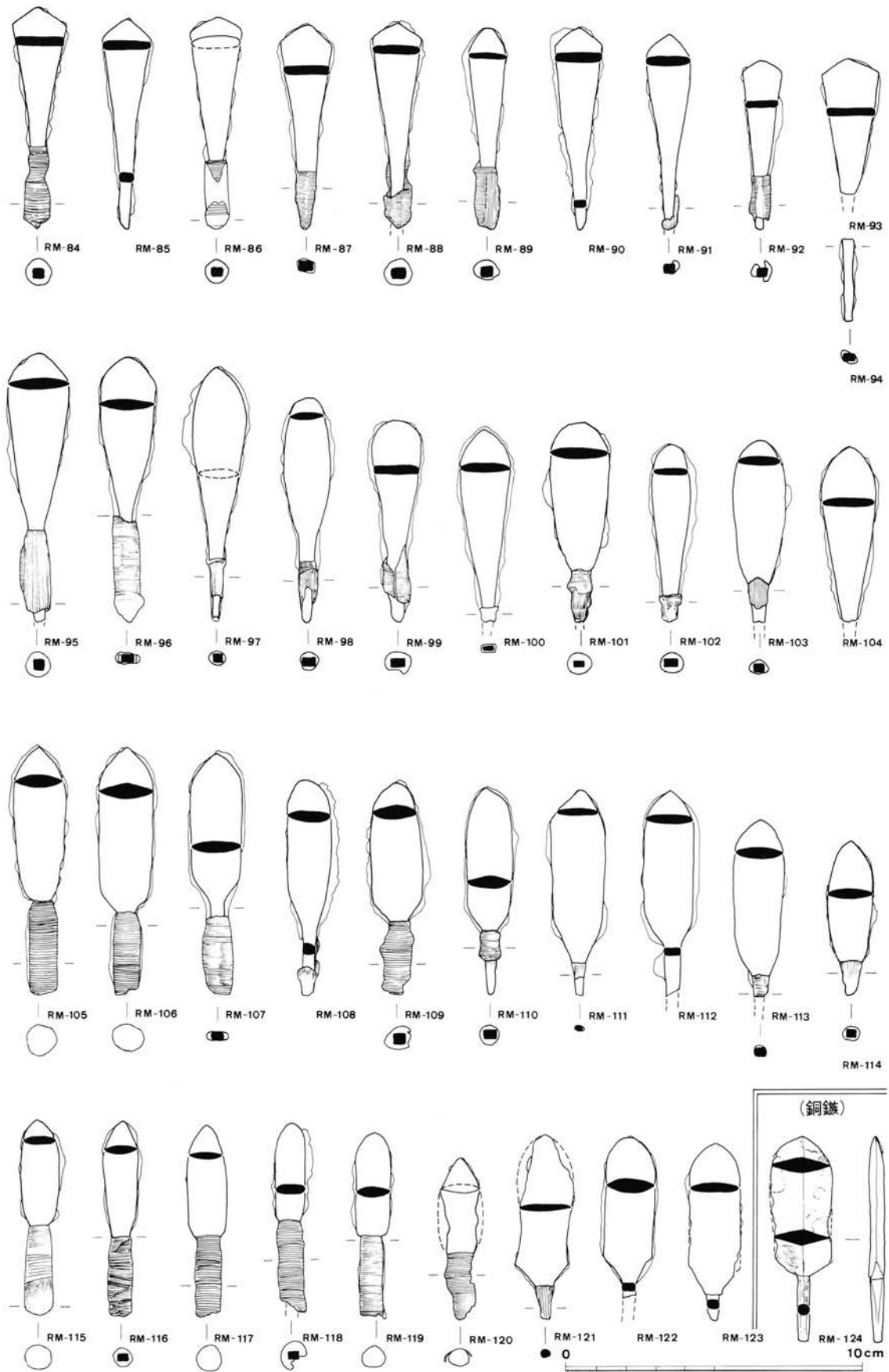
鏃身部の平面形は、鋒よりふくらを有して内向した後、少し外反して、多少開き気味に鏃身基部に至り、その外形ラインはゆるやかな「S」字状を呈する。鏃身基部の下辺は、弧を造らず直線的で、茎の斜め下方に向かって収束する。鏃身長(4.6cm)に対する刃部最大幅(2.0cm)は、2:1以上で、標準的な比率を示す。なお、刃部最大幅は、鏃身上半のふくらにあり、鏃身基部幅(1.85cm)をわずかに凌ぐ。鏃身には縦一文字の鑄が造られ、菱形の断面を呈している。茎部は、下ほどわずかに細くなり、下端には切断の痕跡を残している。

鏃身部の研磨は、鑄に対して直交する方向に施されているようで、細かい擦痕が部分的に観察できる。茎部は、中軸に対して10面以上の研磨面が形成されるが、その稜線はあまり顕著でなく、円形に近い断面を呈している(図版第130)。

② 鉄鏃(第38図、図版第128・129)

棺内の南副室に副葬されていた鞆の口縁部付近に、鋒を南にして正位置を保って納められていた。総数40点を数える。このうち、全体の形状がわかる39点を図示した。内訳は、圭頭斧箭式鉄鏃がその可能性のあるものも含めて12点で、残りはすべて柳葉系鉄鏃に分類される。

圭頭斧箭式鉄鏃(RM-84~93・95・96) 鏃身上部が圭形をなし、そこに刃部を有する広根系の鉄鏃である。その平面形から、刃部が三角形で、刃部以下の鏃身部が直線状あるいはわずかに内湾ぎみに下がるもの(RM-84~93)と、鋒が丸味を帯びて刃部最大幅部分で明確な稜角を造らず、曲線を描いて刃部以下の鏃身部に移行し、その側線は柳葉形に近く、ゆるい「S」字状を呈するもの(RM-95・96)に分類できる。前者の全長が5.6~7.4cmと小形であるのに対し、後者は全長約9.0cmとやや大きい。鏃身部の造りは、前者が平造りで、後者は偏平な両丸造りである。



第38図 瓦谷1号墳第2主体鉄鍔・銅鍔実測図

下端に篋代の木質を残す個体が多いが、おそらくすべて無関で、篋に挿入される部分(茎)の断面は長方形を呈する。

柳葉式鉄鏃(RM-97~123) 鏃身が柳葉形を呈する鉄鏃は、その形態や法量から大きく4つに分類できる。第1は、鋒からふくらを有した後、内湾し、そのまま側線がなだらかに下降して関部が不明瞭なまま茎に至るもので、圭頭斧箭式鉄鏃に近い平面形を呈するが、鏃身の造りは偏平な両丸造りのものである(RM-97~104)。この類型に含めたものには鋒が極端に丸いもの(RM-99・101)や、刃部最大幅が鏃身部中位にあつて椿葉形をなすもの(RM-98・103)もある。いずれも関を造り出さず、茎の断面は長方形である。

第2は、鏃身部の平面形態が鋒からふくらを持った後、ほぼ直線状に垂下して鏃身関部に撫角関をつくり、全長7.0~8.0cmの大きさのものである(RM-105~114)。ここは、鏃身関部にシャープさがなく、なだらかに内向して茎部に至る側線ラインを呈する。鏃身部は両丸造りで、茎は長方形断面に造る。

第3は、鏃身長が3.0~4.0cmと小振りで、その平面形は第2類型のものをそのまま小形化したようなものである(RM-115~120)。すべての個体が篋代の木質をよく残しており、不明な点もあるが、茎は鏃身に近い長さを有し、その断面は長方形である。

第4は、鋒からふくらを有し、内向した後、ゆるやかに外反してその側線が「S」字状を呈しながら明瞭な鏃身関部に至り、典型的な篋被をもたない柳葉系銅鏃(例えばRM-124)と共通した平面形態をもつ(いわゆる類銅鏃式鉄鏃^(注28))もの(RM-121~123)。鏃身関部は、RM-121のように山形関に近い形状を呈するものがある。鏃身部は、鏃をもたない偏平な両丸造りに仕上げられ、茎部断面は円形に近い隅丸正方形である。

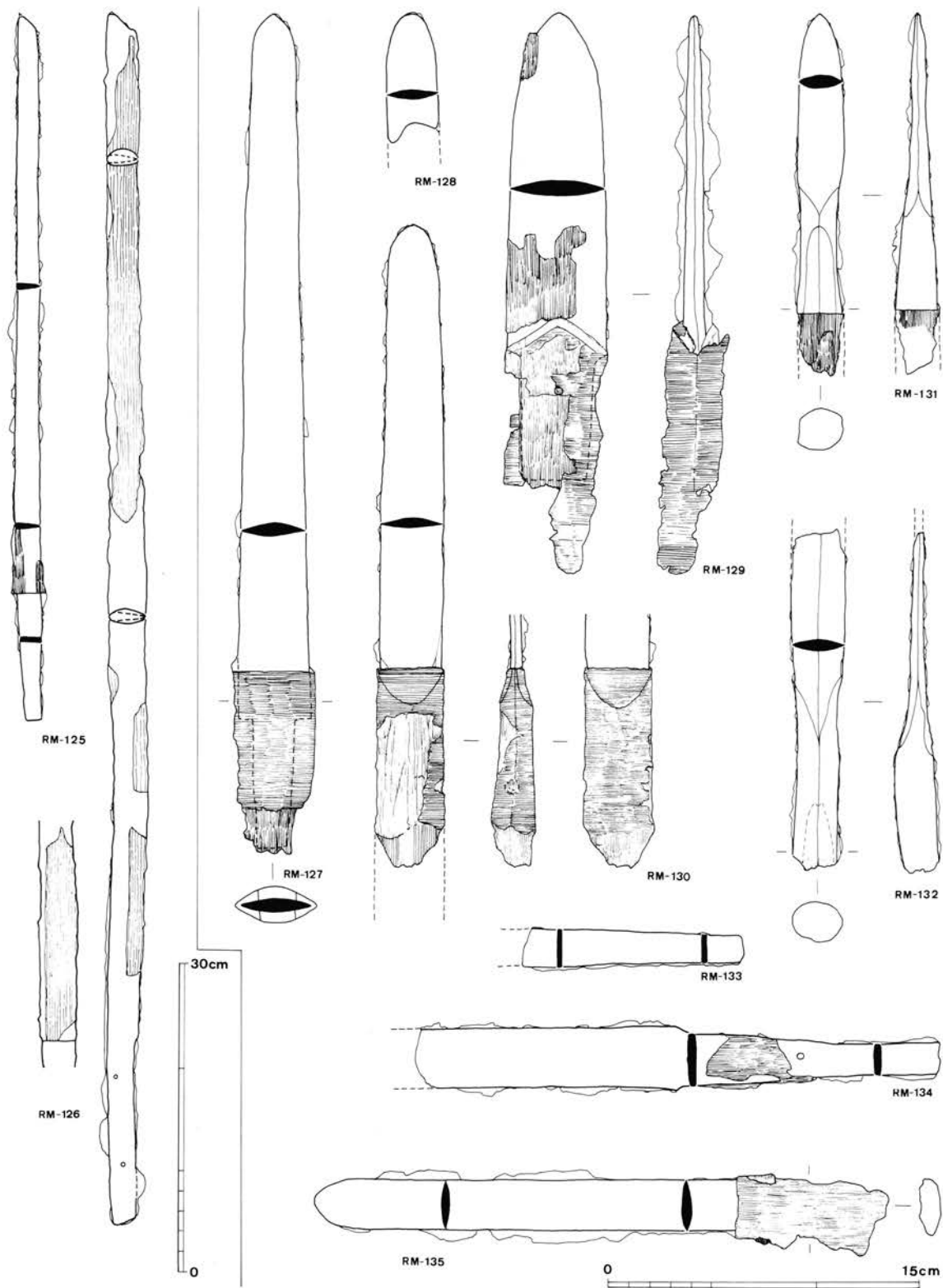
③鉄刀(第39図、図版第132・133)

確実に片刃の刀と認定できるものは2口あり、ほかに刀剣の区別がつかない茎のみの破片資料1点がある。このうち、RM-125とRM-133(茎断片)は棺内主室空間に置かれていた。全長100cmを越える大刀(RM-126)は棺西側に設けられた狭長な遺物床に置かれていた。いずれも鋒を南に向けていた。

RM-125は、全長約70.0cmを測り、大きさによる分類では全長が2尺以上となり、大刀の範疇で捉えられる。平造りで、刀身は片刃に造る。刀身部は、直線的で反りをもたない。茎尻から12.3cmの位置で、鋒方向から続く木鞘の木質が直截に終わり、この部位に鞘口(把縁)が存在したと推定されるが、刀身には明瞭な関を造り出さず(無関)、同じ幅を保ったまま茎に移行する。茎は、元幅が2.4cmで茎尻に向かってわずかに幅を狭め、茎尻幅は1.5cmを測る(微先細茎)。茎尻は一文字尻である。

RM-126は、全長119.2cmを測る平棟・平造りの大刀である。木鞘の木質が刀身部に厚く遺存しており、また鏽膨れによる変形も著しいため、刀身の形態の詳細については明らかではない。刀身には極めて軽い内反りが認められる。鋒は、刃側の描くラインがふくらで屈折する特異な刀尖形を呈する。関は、茎尻から18.0cmの部分で刃側に極めて浅い片関を設けるが、その形状は撫

角あるいは斜角を呈する。茎部は、元幅と尻幅がほとんど変わらない(2.4cm)形状を示し(直茎)、茎尻は鈍角の隅切尻で、斜角に面取りした部分は直線的である。茎尻から6.0cm・14.7cmの位置に目釘孔が2つ穿孔されている。尻側の目釘孔は、茎の中軸線上に載るが、茎元側の目釘孔は背側にかたよっている。



第39図 瓦谷1号墳第2主体鉄製武器実測図

RM-133は、茎のみの断片資料である。その平面形は、茎元側の幅が尻幅よりわずかに長く、図の下側の側辺がわずかに斜角状に内側に切り込んで規模を縮小している。断面は、厚さ0.4cmの平造りである。茎尻は一文字尻に終わる。

④鉄剣(第39図、図版第133)

RM-134は、刃部の鋒側を失い全体の大きさは不明である(残存長25.2cm)。茎尻から約12.0cmのところ幅が両側とも広がり、ここに関が想定される。関は、浅く撫角状を呈する。この関を境に断面形状が変わり、刃部側は偏平な両丸造り(最大厚0.4cm)であるが、茎部は長方形を呈する。茎は、茎元から9.0cmまでは徐々に幅を減らし、それより茎尻まではほぼ一定の幅の平面形を呈する。茎尻は一文字尻である。茎尻から8.1cmの位置に目釘孔が1つあるが、目釘は残っていない。茎に付着する木質は、図の裏面にもあり、茎に限り残ることから柄木の木質とみられる。

⑤鉄槍(第39図、図版第131～133)

木棺の東側に設けられた遺物床に、長柄の武器が合計6口置かれていた。このうち、2口は袋穂式の鉄矛で、ほかは茎式の鉄槍である。いずれも、木柄に塗られた漆の膜が帯状に長くのびており、長柄の武器であることは間違いない。この木柄は、完全に腐っており、漆の被膜のみで極めて脆かったため単体で取り上げることはできなかった。

RM-127は、木柄装着部から鋒までの長さ(有効刃長、以下同じ)31.5cmを測る長身の鉄槍である。刃部は、鋒から横方向への突出度の小さいふくらを経て、尻側に向かって幅を徐々に広げていく平面形態を示す(ふくら部での幅2.1cm・木柄装着部上縁での幅3.4cm)。刃部中軸の断面形は、鑄の稜線をわずかに残す両丸造りに近い菱形を呈する。茎及び関の形状は、木柄に覆われていて不明確であるが、X線写真から深い直角関で、茎は微先細の一文字であることが判明した。木柄は、関部から2.1cm鋒側から刃部下端と茎を包み込むように木柄を挟んで装着する。木柄の先端は横一文字に切れ直截式拵に造る。木柄の断面は、直截部から約7.0cmまでは厚い杏仁形を呈するが、それから尻側は楕円形になっていく。木柄には、残存部の全面にわたって細い糸がすきまなくついでいねいに巻かれ(16本/cm)、その上から黒漆を塗って仕上げている。

RM-129は、有効刃長16.2cm、着柄部付近の刃部幅4.8cmを測る、幅広で短い刃部をもつ鉄槍である。刃部は、鋒からふくらを有した後、関に向かってわずかに幅を広げていく平面形を呈する。刃部に鑄は造らず、断面は偏平な両丸造りを呈する。関は、直角で両側とも0.5cm切れ込む。茎は、幅に対して長さ約5.4cmと短く、微先細一文字である(元幅3.6cm・尻幅3.0cm)。茎元に近い中軸線上に目釘孔が1つある。木柄は、関部から2.7cmの刃部側から始まり、その先端は逆「V」字形のいわゆる呑口式拵に造る。木柄の断面は、最大厚さ2.5cmの厚手の杏仁形で、先端までこの形状を保つため、その截断部で刃部面との間に段差が生じ、そこにわずかに外傾する面が形成される。木柄の残存部全面にわたって細い糸巻きの痕跡(13本/cm)が残り、その表面は黒漆で仕上げている。刃部に部分的に鞘木の木質が残るが、鞘口は木柄の先端の形状に合わせて山形に刳り込みを入れる仕口が施されている。

RM-130は、刃部有効長21.0cm・幅2.4～2.8cmを測る。刃部の形態は、鋒からふくらを経て、

関部に向かってわずかに刃部幅を拡大させる平面形を示し、断面は偏平な両丸造りで鑄の稜線はみられない。鋒が鈍く丸味をもつのは、先端が折損したためと思われる。関も含めた茎の形状は木柄が良好に遺存しているため不明である。木柄は、最大厚さ2.0cmの厚手の杏仁形の断面を呈し、先端の拵は直截に終わる。木柄の先端は、表裏両面から中軸に向かって斜めにカットされており、平面的にみて「U」字形の輪郭をもつ匙面が形成され、刃部面との段差をなくしている。木柄部分には横方向に巻かれた細い糸の痕跡が残り(12本/cm)、上から黒漆を塗って固めている。

RM-135は、有効刃長24.9cm・刃部幅2.85~3.15cmを測る鉄槍の穂先である。刃部は、ふくら付近から関にかけてほぼ一定の幅を保つ平面形を呈する。刃部の断面は、偏平な杏仁形(両丸造り)を示し、鑄は造らない。木柄に隠れる関以下は、X線写真で、やや深い斜角関を呈し、短い一文字尻の直茎に続くことが確認された。木柄の装着は、遺存状態があまりよくないが、直截式拵によるものであろう。槍身と直交する方向の糸巻きの痕跡と黒漆膜が木質の上面に部分的に残る。木柄の断面は、中軸に近い部分が剝離して旧状を失っているが、先端付近の刃側に残る漆膜から杏仁形であつたらしく、木質の遺存状態から判断して、先端の截断面までこの断面形状を保っていたことが推定できる。

⑥鉄矛(第39図、図版第131・133)

ほぼ同形態を示すものが2口あり、前述の鉄槍と混在して東側の遺物床の南端部に鋒を南に向けて副葬されていた。袋穂式の着柄部をもつことから、矛と思われる。

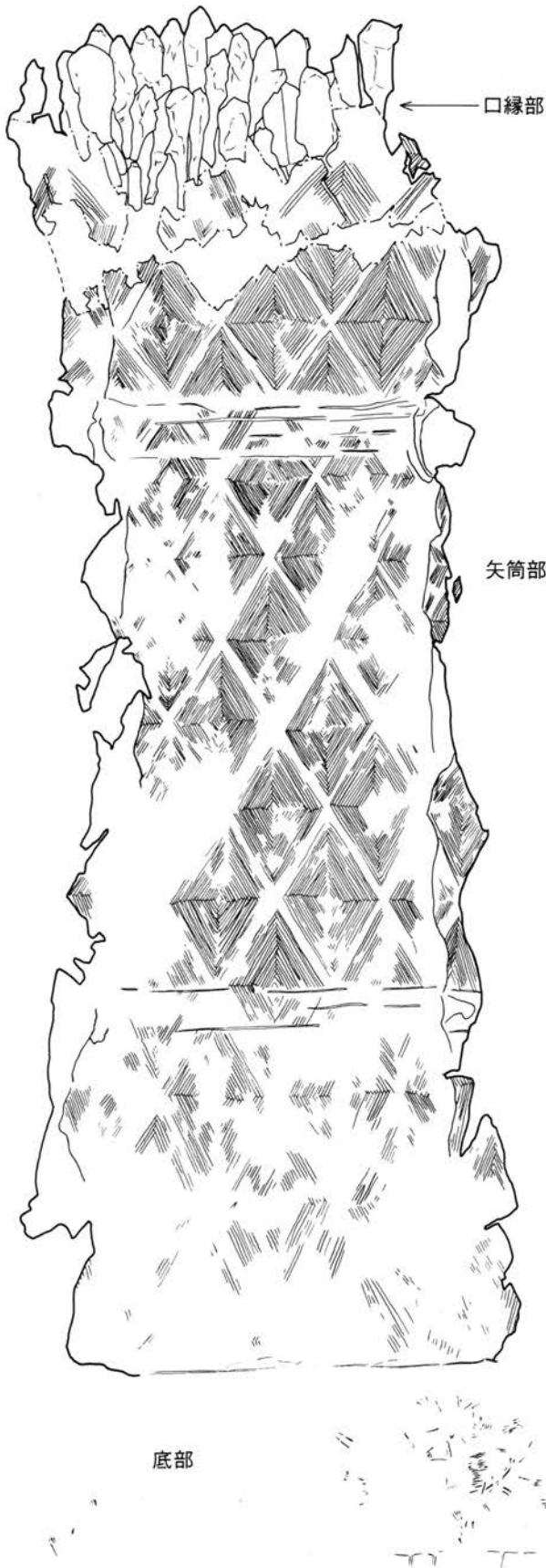
RM-131は、鋒からふくらを有してやや広めに開き(広鋒)、ゆるやかに内向した後、不明瞭な関部を経て袋部に至り、下半は少し外反する外形ラインをもつ(全長14.4cm)。矛身部は、やや厚手(厚さ0.6cm)の両丸造りで、矛身の中軸に鑄を造らない(矛身長8.25cm・矛身最大幅2.1cm)。矛身部と袋部の境界の両側線は、浅くくびれる程度で明瞭な関をもたない(無関)。袋部は、袋状鉄斧の袋部のように、左右から折り返して前面に合わせる造りで、不明瞭ではあるが中軸に沿って合わせ目が縦の一線となる。この袋部折り返しの両端は、矛身部側で斜め上方に切れ上がって、この部分は密着していない。袋端部は直截に終わり、その断面は円形である(円筒袋)。袋端部に近い袋部の側面に直径0.25cmの目釘孔が1つ存在するが、目釘は残存しない。

RM-132は、矛身の鋒側を折損するが、RM-131とはほぼ同形態を示す矛と思われる(残存長16.3cm)。ただし、矛身部は、その側線から推定すると、折損したところからしばらく鋒に向かってのびていくようで、RM-131より長めであつたと考えられる。矛身部の断面形は、鑄を痕跡的に残す偏平な両丸造りに近い菱形を呈し(鑄造り)、その幅は袋部幅より大きい(矛身最大幅2.5cm)。袋部の造りもRM-131と同じで、前面に上端が密着しない折り返し目が痕跡的に観察できる。袋端部は直截に終わり、断面は円形である。

(4)工具類

鉄斧(第35図、図版第127)

RM-136は、鍛造の有袋式鉄斧の鉄斧頭である。全長9.3cm・刃部幅4.0cmを測り、中形に属する。袋部から刃部にかけては、袋口から徐々に幅を狭め、袋部の中ほどで、少しくびれて刃先に



第40図 瓦谷1号墳第2主体革製漆塗り鞆実測図

かけて広がる平面形を示す。袋部から刃部に至る間に、側線が極端に張り出さない無肩鉄斧に分類される^(注29)。袋部の折り返しの両端は、基部側で密着するが、刃部側では外下方に離れている。袋部の断面は、やや横に長い楕円形を呈する(挿入部で長径3.0cm・短径2.3cm)。刃先部はゆるい弧状の刃線を呈する(曲線刃)。

(伊賀高弘)

(5) 漆塗り製品

革製漆塗り鞆(第40図、巻頭図版

7、図版第134)

鞆は、土圧で押し潰されていたが、ほぼその全容を知ることができる(検出長約90cm・検出幅約28cm)。遺存していたのは全面に塗布されていた漆の膜に限られるが、蓋・矢筒部・底部の3つの部分から構成されていたことがわかる。なお、実測面(出土時の表面)を当初から上にした状態で副葬されていたと考えられる。

鞆の形状 矢筒部の形状は、両側端近くに山状の隆起が縦方向にほぼ平行してみられるので、その部分を頂点とする断面が長方形(あるいは隅丸長方形)の、やや裾広がり呈する筒状容器であったと思われる。矢筒部の漆膜に毛穴の痕跡や獣毛と思われる短い毛の痕跡が認められ、革製であったと考えられる。矢筒部には、鞆の形を整えるために横方向の帯が2か所に取り付けられている。これは幅約1cmの帯状のものを2~3本巻きつけていたと考えられ

る。ただし、検出時・整理時の剥落が激しく、どのような材質のものが使用されていたかは不明である。なお、口縁部には、横帯は認められない。

蓋・底部は、漆膜の状態から木製と考えられるものの、遺存状態が良好でなく、その構造などは明らかでない。底部には何らかの文様が彫刻されていたようである。蓋を除く鞞の大きさは、全長約84cm・幅約19cmに復原される。

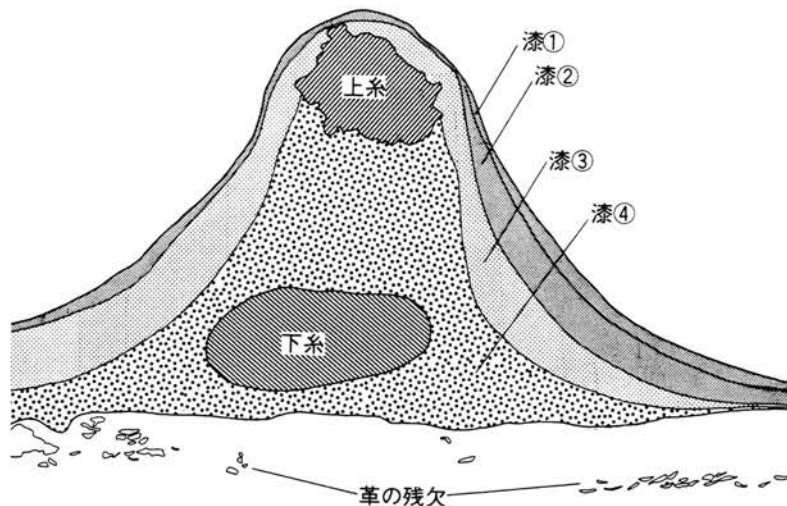
鞞の内部には、鉄鏃40点・銅鏃1点(第38図)がいずれも鏃側を上に向けて収納されていた。なお、鞞形埴輪や他の出土例にみられる飾り板・背当ては出土していない。

鞞は、保存処理中であるため観察は実測面に限って行った。^(注30)

菱形文様 矢筒部は、その表面に菱形文様を表現している。菱形文様は、直径約0.5mmの糸と幅約5mmの帯状品(革製?)を用いて構成されている。観察の結果、通常の織物ではなく、糸を1本ずつ組み上げて作られていることがわかった。文様の構成方法は、帯に平行する糸が常に上側の糸となるように配置される。この糸は、菱形文様の対角線に相当する位置で上下が逆転する。菱形文様は、同じ方向に平行する糸によって、直角三角形を表しており、1個の菱形文様は、それら4個によって形成される。また、この直角三角形1個当たりの糸の本数は、上下それぞれ16本から18本ずつである。現状では糸の構成方法は、以上のように理解することができるが、ここで問題となるのは、帯状製品で個々の菱形文様を強調している点である。この帯状製品は、その上に糸がみられないことや途中で途切れている部分がみられないことから、糸の組み上げが終了した後に配置されたと思われる。したがって、糸を組み上げた段階では、直角三角形や菱形文様は全く見られず、上側の糸が同じ方向に平行することによって形成された長方形が配列されるにすぎない。その後、帯状製品を上側の糸と同じ方向を示す長方形の対角線上に配置して、菱形文様を作り出していると考えられる。なお、糸の配置方法は、滋賀県雪野山古墳舟形木棺内出土の鞞の表面にみられる菱形文様と同じ方法と考えられる。

また、菱形文様の配列方法にも規則性が認められる。鞞(矢筒部)の形状が、先に述べたように断面長方形の、やや裾広がり
を呈する筒状容器であった場合、矢筒長で7個分、幅で3個分、厚さで1個分の菱形文様が見られる。このような菱形文様の配列方法も、雪野山古墳出土の鞞の場合と全く同じである。^(注31)

漆膜の断面写真 以上の表面観察の成果に加えて、漆膜の断面写真による検討を行った。^(注32) まず、菱形文様を構成



第41図 瓦谷1号墳第2主体革製漆塗り鞞漆膜断面図
(写真をトレース 注30文献、20頁から引用)

する糸のよりのと思われる痕跡が確認できた。糸の種類を特定することはできなかったが、雪野山古墳出土の鞆と同様に、絹である可能性は高い。また、数回にわたって漆を塗布していることがわかった(第41図)。瓦谷1号墳出土の鞆では、少なくとも4回、漆が塗布されていることが確認できた。このうち漆①・漆②は純粋な漆を使用し、漆③は炭粉を混ぜたと考えられる。以上の3つは、菱形文様を構成する糸の上に塗られている。漆④は何を混ぜたか不明であるが、菱形文様を構成する糸の下に塗られているようであり、菱形文様を構成する糸と革の接着剂的な役割を果たしていたと考えられる。

以上のことから、製作工程を部分的に復原することができる。まず革の上に漆④を塗りながら、菱形文様を構成する糸を組み上げていく。文様の構成方法は、先述の通りであるが、菱形文様を強調する横帯がどの漆を塗布する段階で配置されたかは不明である。文様ができ上がると、その上に漆③、漆②、漆①の順に塗布して完成させる。この漆①・漆②は、純粋な漆を使用しているので仕上げ用と思われる。

(筒井崇史)

第2節 2号墳及び埴輪棺出土の遺物

管玉(第37図、図版第135)

6は、2号墳の西辺周溝埋土上層から出土した。直径0.5cm・長さ1.2cmを測る。長さを径で除した比率2.4を計測する小形の管玉である。両端部の角は、磨滅を受けて丸くなっており、内孔より小さな円形を呈する平坦面がわずかに残る。内孔は、両側から穿孔されて、ほぼ正円形の横断面を呈する。内孔の径は、図の上端で0.18cm、下端で0.16cmを測る。表面の色調は、濃緑灰色を呈する。外表面に若干の風化がみられるが、光沢をもち、硬質の感を与える。石材は、表面に光沢があり、カルシウムやマグネシウムの微細な結晶が混入することから、滑石とみられる。

7は、1号埴輪棺の墓壙掘形内に堆積した土中から出土した。直径0.7cm・全長1.9cmを測る。長さを径で除した比率2.71を計測する。両端部とも角がわずかに丸味をもつが、比較的シャープな稜を残している。内孔は、内孔の中央部に残るわずかに違いから、両側から穿孔されているようすがわかる。内孔は、正円形の横断面を呈し、直径は上端で0.18cm、下端で0.16cmを測る。色調は淡緑灰色を呈し、石材は風化した緑色凝灰岩(グリーンタフ)でやや軟質な感を与える。表面は、多孔質に二次的風化を受けており、製作時の研磨痕をうかがえない。

(伊賀高弘)

白玉(第37図、図版第135)

8・9は、8号埴輪棺の埋土中から出土した滑石製白玉である。いずれも土の水洗後に確認したため、出土状況は不明である。8は、直径0.5cm・厚さ0.2cmを測る。内孔の直径0.15cmで、片側から穿たれている。9は、直径0.55cm・厚さ0.15cmを測る。内孔の直径は0.2cmで、片側から穿たれている。

(有井広幸)

22号埴輪棺出土の鉄斧(第37図、図版第148)

RM-137は、22号埴輪棺の東小口の棺上に置かれた状態で出土した鉄斧である。鍛造の有袋式無肩鉄斧に分類される。^(注33)全長8.2cm・刃部幅5.4cmを測り、無肩鉄斧では最も通有の法量をもつ。全体の平面形は、袋口から刃先に向かって徐々に幅を広げるが、その開き具合は袋部の下位2/3あたりから高まり、その境に傾斜変換点が見られる。刃部の側線は、やや内湾ぎみに下方に向かって開き、刃先部はゆるい円弧を描く刃線を呈する。長さ約5.0cmを測る袋部の袋口の横断面は、やや横方向に長い楕円形(長径3.4cm・短径約2.8cm)を呈する。袋口の正面はゆるい「V」字形にえぐられているが、折り返し部の両端は、その下端に不明な点を残すが、おおむね密着している。

(伊賀高弘)

26号埴輪棺出土の鉄製品(図版第51・151)

RM-138～141は、埴輪棺東側の棺外から出土した鉄鏃である。RM-138は、残存長4.4cm・残存幅4.0cmを測る。全体の平面形は三角形で、先端から直線的な刃部が両側に開くが、両端の逆刺部分を欠き、頸部の一部に木質が残る。RM-139は、残存長5.01cm・幅3.2cmを測る。幅より全長が長く、刃部がゆるやかに弧を描き、逆刺が短い形をしている。中心部分には鏃を固定した木質が残る。RM-140は、残存長5.25cm・幅3.6cmを測る。逆刺が長く、その中間にもう一段の逆刺がある。RM-141は、残存長6.25cm・幅3.2cmを測る。今回出土した鉄鏃の中では一番大きく、幅に対して全長の長い三角形をしている。RM-142は、26号埴輪棺棺底南側中央付近から出土した刀子と思われる鉄製品である。残存長9.8cm・最大幅約2cmを測る。一部に木質が残る。

(有井広幸)

第3節 埴輪及び土器

(1)埴輪類(図版第25～51)

埴輪類は、埴輪棺に転用されたものや、古墳の周溝などから多数出土した。これらの埴輪には、円筒埴輪(朝顔形・鱗付を含む)のほか、形象埴輪も含まれる。出土した埴輪を検討した結果、円筒埴輪を中心に多様な形態の埴輪の存在が明らかになったため、ここでは個別に概要を述べる。

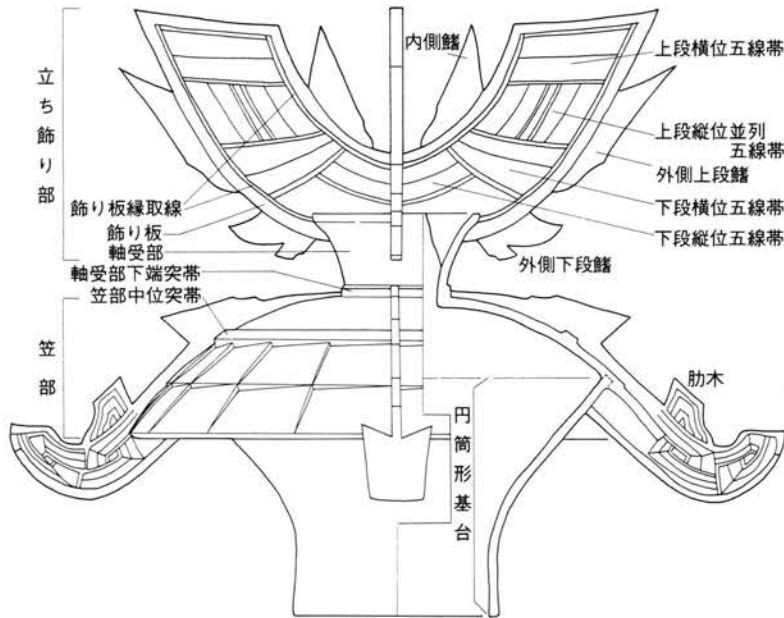
以下の記述のうち、円筒埴輪の記述にあたって次のような整理をしておく。「円筒埴輪」には、「普通円筒埴輪」と「朝顔形円筒埴輪」があり、さらに鱗を有する場合は「鱗付普通円筒埴輪」、「鱗付朝顔形円筒埴輪」と呼称する。また、段や突帯を上から数えるときは、何段目・何条目と数える。円筒埴輪については、第44図に各部の名称を示した。

(筒井崇史)

①古墳出土の埴輪

1号墳出土の埴輪(図版第25・26・27・28～30・33・137～140)

ここで取り上げるのは主として1号墳の墳丘斜面や周溝状の窪地に堆積した墳丘流土、あるいは墳頂の攪乱坑内の埋土の中から、原位置を失った状態で出土したものである。個体数が多い蓋形埴輪については、各部の名称を示した図を用意した(第42図)。



第42図 蓋形埴輪各部名称図

蓋形埴輪 (図版第25・26・28・137~139)

1は、立ち飾り部の飾り板本体の上部内側の破片である。上辺と内縁の描くラインはともにわずかに内湾する。上辺と内縁の境は鈍角に屈折するが、その隅は鋭利でシャープな感を与える。飾り板の表面(文様面)には表裏とも同様の線刻を施す。その構成は、飾り板の外郭側線と相似形の縁取り

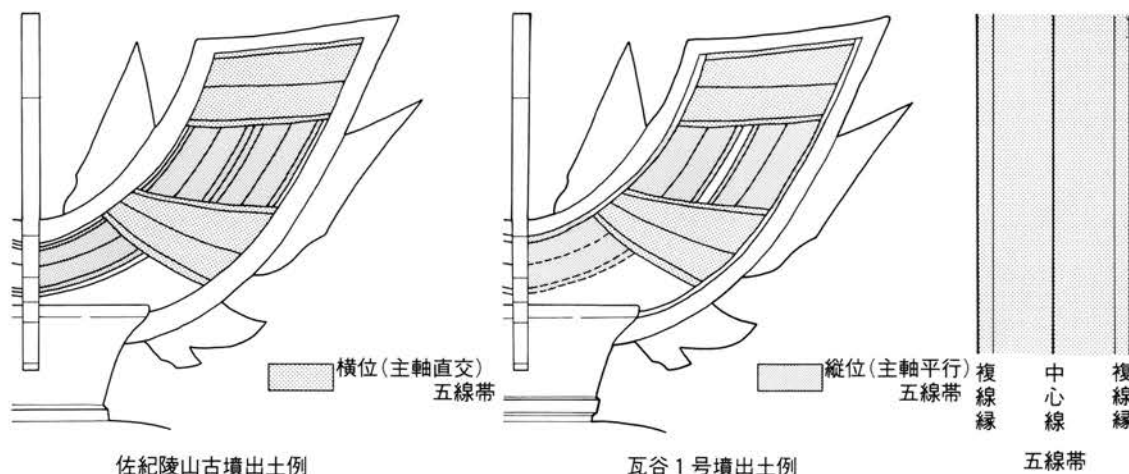
り線を二重の平行線(複線)で表わし、その内部を横方向の直線で区画する。横方向の線は、単線(上)と複線(下)からなり、同じ間隔を保って配されている。上辺に沿った縁取り線を含めると、これらの横方向の線は複線縁と中心線からなる「^(注34)五線帯」を構成している(第43図右参照)。調整は、器表面が著しく磨滅しているため不明である。

2は、立ち飾り部の内側に付された鱗状部(以下内側鱗と記す)の外縁を残す資料である。残存する外縁線は、比較的大きく内湾している。文様面には外縁線に沿ったゆるい円弧を呈する1条の線刻(線刻の上幅0.15cm)を施しており、飾り板と鱗を区画する線(以下、鱗区画線と記す)とみられる。調整は、器表面が磨滅しているため不明である。

3は、飾り板の破片で、その部位はおそらく外側上段鱗と内側鱗に挟まれた部分とみられる。文様面は、表面(図の左側、以下同じ)が強く磨滅しており、わずかに縦方向の複線が観察される程度であるが、裏面(図の右側、以下同じ)は比較的好く残る。つまり、線刻はすべて平行する複線からなり、図の右寄りに斜めに下がる線(縁取り線)を入れ、その中間から水平方向の直線を描き(飾り板の軸に対して直交方向の五線帯の上位の複線縁)、さらに水平方向の線から上位にのびる線を加えている。器表面の調整は、裏面で観察でき、縦方向の断続的なハケメをていねいに施した後、ナデを加え器表面を平滑にしている。

4は、飾り板の内側鱗の下端部を含む資料である。上辺にみられる鱗の側線は、残存部の中間付近で屈折して、それより下は内湾する。文様面には表裏面とも同じ位置に、円弧線を数条配しており、その構成は上位から単線(鱗と飾り板本体を画す線)、複線(飾り板の縁取り線)、単線(飾り板の主軸方向にのびる五線帯の中心線)となる。磨滅のため調整は不明である。

5は、両面に同じ文様の線刻があることから、蓋形埴輪の立ち飾りとみられる。ただ、その文様構成は特異で、外形に平行する円弧を等間隔に3条配しており、線刻はいずれも単線である。器表面は、磨滅して本来の器面が失われ、線刻は非常に浅くなってその底部付近を残すのみであ



第43図 蓋形埴輪立ち飾り部文様比較図

る。調整は、磨耗のため不明である。

6は、1と同じ部位の小片資料である。縦方向の側線はゆるやかに内湾するのに対し、図の上辺は逆に外反する。両図の外側よりに縦方向の単線からなる線刻がわずかにみられ、これが五線帯の中心であれば、表裏を表わした図の中軸に向かう側が上位となる可能性もある。両面の線刻の構成は共通しており、外郭側線と相似縮小した縁取り線を線刻する。縁取り線は複線で、上幅0.15~0.2cmとやや細めで、その断面は「V」字形を呈する。上辺と側辺は、ヘラあるいは板状工具のナデによって平坦に仕上げられ、その屈折部には鋭利な稜をつくる。表面は、磨滅しているが、裏面は良好に残り、器面の状況がよくわかる。器面は、斜め方向のハケメを施した後、布を介したナデによって平滑に仕上げる。なお、線刻施文の後、赤色顔料(ベンガラ)が塗布された形跡がある。

7は、立ち飾りの内側鱗の上側半部と考えられる。図の内側の破面線は、鱗の飾り板本体の境を示すものではない。鱗の側線は、内側(図の上辺)が直線的であるのに対し、外側は大きな円弧を描いて内湾している。端側面は、板またはヘラ状工具のナデによって方頭状に整形されている。鱗の両面に外形ラインに沿ってゆるく円弧を描く複線の線刻を施すが、その上部は内側辺に至るまでに途切れる。線刻は、その位置から飾り板本体と鱗を区画する表示とみられるが、複線で表現されている点の特異である。器面調整は不明である。

8は、1・6と同じ部位を示す資料である。外形ラインは、上辺・内側辺ともにゆるく内湾しており、その接点は鋭く屈折する。表裏面とも磨滅がかなり進んでおり、いささか不明瞭であるが、図のような線刻が痕跡として観察できる。施文は1と変わらないが、破片の下辺よりに五線帯の外郭線と思われる縦方向の線刻が複線で描かれている。調整痕は全く残らず、明らかでない。

9・10は、鱗の上端あるいはそれに近い部位の破片である。先端を残す10をみると、内側両側面とも直線的で、その先端を鋭く作る。図の両側の側辺の最下部が外反することから、この部分で飾り板本体と接していたとみられる。その形状から判断して、外側上段鱗の可能性が高い。磨滅が著しく、調整痕は全く残らない。

11は、平面三角形の細片で、先端は欠損している。図の上辺がヘラ状工具のナデで方頭状に整えられた板状埴輪片で、両面に線刻をもつ。線刻は、器表面が比較的好く残る裏面で見ると、外形ラインに沿った単線の縁取り線と、その内側に縁取り線を二等分する中心軸線を加えており、上述の立ち飾り上端の縁取り線と様相を異にする。線刻は太くて深い(上幅0.15~0.30cm・断面「U」字形)。外形ラインが鋭角であることから、立ち飾りの上外端ではなく、肋木に付く鱗状装飾の可能性が考えられる。

12は、外側上段鱗の下半部を含む立ち飾り部の小片である。表面の左側に鱗が展開するもので、両面に同じ文様と思われる線刻がある。比較的好残りのよい表面で見ると、単線からなる縦方向の円弧線を間隔をあけて2条配し、その内側の線からは複線が直交方向に描かれている。外側円弧線が鱗を飾り板から分ける区画線となるのか、飾り板縁取り線の外側の線なのか判断しがたい。しかし、表面の左側破面が線刻に沿って破断している可能性があることから、後者の可能性が高い。線刻は細く(上幅0.07cm弱)、「V」字形断面を呈する。両面に赤色顔料が痕跡的に残る。

13は、「J」字形を呈する平面形や両面に同様の線刻施文を有することから、立ち飾り部の飾り板と考えられる。ただし、残存部に外側の鱗が付く痕跡がないことや、五線帯の交互配列(いわゆる用形文^(注35))をとらないことから、通有の蓋とは異なった施文の立ち飾りと考えられる。線刻は、表裏面ともに共通しており、飾り板の外郭線(内側は残されていない)に沿って複線の縁取り線を入れて文様区の外郭を明示する。そして、残存部の中央やや下寄りに縁取り線と直交する方向の複線を橋渡し状に加えて、文様を上下に二分する。上下の文様区には、「L」字形に曲折する鍵手文系統の図文を配する。この鍵手文は、正確な五線帯ではないが、基本的には上下の区分線を境に左右を逆にした対称形に描く。ただし、この図形は純正鍵手文に比べると、必要な線の欠如や余分な線の追加がみられるなど、かなり変容している。表裏面とも、部分的に元来の器表面が磨滅せずに残っており、その部分にハケメが観察される。ハケメは、飾り板の主軸方向に沿って断続的に施す(ハケメの条線は8本/cm)。側面は、板あるいはヘラ頭部分でスリナデして平坦な面をつくる。器表面にベンガラが広くみられ、全面に塗布されていたとみられる。

14は、立ち飾り部の外側上段鱗を含む資料で、鱗の外側線はその下半部が遺存している。残存部の上半は直線状をなすが、下半は内湾するようにくびれて、その境に稜をつくる。器面には表裏同じ構図の線刻(上幅0.2cm程度、「U」字形断面)を有するもので、外側から鱗区画線、縁取り線を平行に配し、縁取り線の内側には下段横位五線帯の両側の複線縁が直交方向にのびる。鱗区画線は、通常単線で施文されるが、裏面では複線となる。また、この複線と平行してすぐ外側に非常に細い沈線(幅0.02cm)が1条入る。これは、鋭利な刃物のようなもので施されており、通常の線刻施文以前に鱗と飾り板を区別する目的で入れられた設計段階の割り付け線かもしれない。両面とも磨滅が著しく、調整は不明である。成形は、粘土紐を縦に積み上げて板状にするようである。

15は、裏面に残る線刻から、立ち飾り部の飾り板上部の外側の小片と思われる。線刻は鋭角的に屈曲する縁取り線を複線で描いたもので、その線刻は深く、上幅0.1~0.2cmの「V」字形断面

を呈する。調整は、多方向からハケメ(条線密度7本/cm)を断続的に施した後、布を介したナデを加えて、施文面を平滑に仕上げる。線刻後(焼成前)ベンガラが塗布されている。

16は、厚さ1.5cmを測る板状の小片で、器面は磨滅しているが、表面に1条の線刻(上幅0.3cm、「U」字形断面)が入る。蓋形埴輪のいずれかの部位と判断できる要素はない。

17は、上段の縦位並列五線帯の一部が線刻された小片である。複線による2方向の線刻が両面に施されている。遺存状態は概して悪い。

18は、外側上段鱗を含む飾り板片である。同様の線刻が表裏面に施されており、内側から五線帯中心線、五線帯の複線縁を兼ねた飾り板縁取り線、鱗部区画線に各々比定できる。線刻は上幅0.15~0.2cmで、断面「U」字形を呈する。調整は、磨滅のため不明である。

19は小片で、線刻のあり方から上段の縦位並列五線帯の一部を表したものであると思われる。磨滅が著しく、線刻もその底部付近が痕跡的に残るにすぎない。

39は、両面に同じ構図の線刻を表した、厚さ約1.9cmの板状の埴輪片である。線刻の文様は、断片的ではあるが、復原線のような鍵手文の一部と見られる。線刻は、本来の上幅を失うが、「V」字形の断面を呈する。器面の調整は、磨滅して不明である。線刻文様などが、奈良県佐紀陵山古墳出土の蓋形埴輪(注37)の肋木ろくぼくの側面に描かれた鍵手文と類似しており、肋木の断片資料である可能性が考えられる。

43は、横方向の断面がゆるい円弧を呈する個体で、外面に幅の広い低平な突帯を横方向に貼り付けている。突帯の上下両端には、断面が円形を呈する棒状のもので、その側辺に沿って1列に連続的に刺突を加える。断面形状などから、蓋形埴輪の笠部を構成する断片とみられ、外面の突帯は、笠部中位突帯に相当すると考えられる。調整手法は、器面磨滅のため不明である。

44は、横方向の断面が大きな曲線を描く円筒状の埴輪の一部である。外面には上幅2.5cm・基底幅3.5cm・高さ0.6cmを測る低平な台形断面の突帯を横方向に貼り付けている。内面には縦方向に粘土板を貼り付け、その突出は上位ほど高くなる。調整は、外面では突帯より上位の円筒部に横方向にハケメ痕がわずかに残る。内面は成形段階のナデが痕跡として残っている。この個体は、形態や法量から蓋形埴輪の軸受け部に相当するとみられ、外面の突帯は軸受け部下端突帯、内面の粘土の突出は立ち飾りの飾り板に続くと考えられる。この資料から、軸受け部下端突帯は笠部上端の屈折点には接しないで、やや上位にめぐること、また、立ち飾り部は笠部と別体ではなく、佐紀陵山古墳出土例と同様、一体のものとして作られていることがわかる。

46は、円筒形基台との接合部付近の笠部の破片である。円筒形基台上端から笠部上半までは連続的に製作し、直線的に外下方にのびる笠下半(笠縁)部は後から加える(注38)(笠部分割成形)。笠部外面には浮彫り状の段差があり、いわゆる「貼布」の表現がある。調整は、磨滅により不明である。

50は、蓋形埴輪の笠部の破片で、1号墳東周溝内くびれ部付近から出土した。笠縁付近から笠部頂部近くまでの破片である。笠部中位突帯は、上幅1.0cm・器面からの高さ0.9cmを測り、断面形は台形である。貼り付け位置は、円筒形基台接合部より内方(上方)になる。円筒形基台上端から笠部上半は連続的に製作し、直線的に外下方にのびる笠下半(笠縁)部は後から付加する(笠部

分割成形)。接合部より笠部上半はゆるやかな曲線を描くが、笠部頂部付近は平坦に近くなるようである。笠部外面には文様などは施していない。器面の調整は、磨滅のため笠部外面の観察が困難であるが、笠縁付近には、縁に沿ってハケメ調整が行われていた痕跡がわずかに認められる。内面は、基台と笠部の接合部付近にユビオサエ痕が残り、さらに上面は指ナデが上方に向かって行われている。

51は、1号墳墳丘裾から出土した蓋形または壺形埴輪に類する笠部縁の破片である。瓦谷古墳群では、同様の個体の出土例はなく、全容は不明である。円筒形基台と笠部は連続して製作し、縁部は突帯状に後から貼り付ける。外面縁部の貼り付け付近に、端部に沿って1条の沈線がめぐり、その上方に、放射状の沈線9条を上から下に向かって描く。この沈線は、右から左に向かって縁部の沈線に対し角度が大きくなり、立ち上がる傾向が見られるため、鋸歯文状の文様の一部の可能性はある。

盾形埴輪(図版第30・140)

56・59は、奈良市佐紀陵山古墳から出土した精緻な直弧文の帯状表現をもつ「目」字形分割の盾形埴輪(注39)と同じ系列の、しかも型的にみてもそれとかなり近い内容をもつ盾形埴輪の断片資料である。

56は、盾面の左上部を示す比較的大きな破片である。図の左側線は生きており、盾面の側辺と上辺の一部が残る。側辺から上辺への屈折部の外側線は鈍角に折れ、その境は側辺が平坦に加工されていることから、比較的鋭利な稜をなす。縦方向に展開する直弧文帯(外周の直弧文施文帯・外区(注40))の断面形は、縦方向では盾面側に内湾し、上位ほどその湾曲は大きくなる。残存個体の横断面も同じく盾面側が内湾し、その湾曲率は側方向に向かって徐々に高くなる。したがって、盾面の左上部は図ではわかりにくい、大きく手前に向かって反り返っている。外周の直弧文施文帯(外枠)と内区の直弧文施文帯(横棧)、そして地板となる内区の平行線部分は、それぞれの文様帯が接する部分では約0.2cmの段差を造って各文様区を区別している。この段差の壁部分は、ヘラ状工具を用いて平滑面を形成するため、その下縁に工具の当たりの沈線が残る。しかし、器壁の厚さは、各々の文様区が接する部分でわずかに減少するのみで、全体としては1.7~1.8cmを保っている。

縦横の直弧文帯には、紫金山古墳出土の鋳形石形貝製腕輪に刻まれた「人」字形組み合わせ文を祖形とし、主として幅の狭い帯状部を埋めるために考案された「人」字形鍵手複合文が、さらに長さの限られた範囲に用いられるに際し、左右対称性を指向して左右両図形の一方の先端が、他方を蔽う部分を透視して書き重ねた図形(注41)(いわゆる忍岡系対称文)に変容したものが、単線からなる縁取り線に囲まれた中に用いられる。ただ、この種の盾形埴輪にこの文様が使用される場合、外周や横棧がたとえば靱形埴輪の矢筒部の横帯ほど短くないため、複数単位(各辺ともに3単位)の忍岡系対称文を連続する方向に巧妙に反転させながら、この帯状区を充填する。ただし、外周区の側辺と上辺の接点部分では各々の帯の一方が他方を覆うような切り合いを示さず、また両辺が対等であった場合の両者を区画する外角と内角を結ぶ線を設けることもない。そこには、忍岡

系対称文の原理に合わない直線文をバランスよく数条入れて、この交角部分の文様面を処理している。最下段の内区の地板部には横方向の平行線を1.3~1.5cm間隔で入れ、木目模様を表現する。^(注42)これらの各種文様に用いられた線刻は、上幅0.1cmとやや細めで、断面は「V」字形を呈する。

円筒形基台と盾面の製作上の関係は、すでに完成している偏平な円筒部の平坦な面を正面にして、その側方に盾面外縁部を鱗状に付加することで形成する。したがって、盾の側縁部と盾中軸部との器壁の厚みはほとんど変わらない。なお、円筒部に残る突帯は、盾面を成形する段階で正面部分が削り取られているようで、その痕跡が鱗状部と円筒部の接する部分で突帯が斜めに削られていることに示される。器面調整は、盾面全体と鱗状部裏面の磨滅が著しいため、詳細は不明である。円筒形基台の内側は、比較的遺存状態がよく、布を介したため細い条線を残すナデを横方向に隙間なくといねいに施して最終的に器面を平滑に仕上げている。

59は、忍岡系対称文が線刻された内区横棧部分で、上位にみられる地板との段差はやや大きく0.4cmを測る。破片の下部は、表面が厚く1.4cmほど剥離するが、その剥離面に縦方向の沈線が2条観察できる。なお、この面は、盾面が形成された折りには完全にかくされるため、この線は盾の位置を決めるための設計段階の割り付け線とみられる。器面は、ある程度磨滅しており、特に表面(盾面)は器面が剥落して線刻も浅い。裏面は、横方向のハケメ(条線密度8本/cm)調整の後、横方向の布を介したナデを加えてていねいに仕上げる。

57・58は、片面にのみ線刻施文する板状埴輪である。描かれた文様は、いわゆる直線と曲線を組み合わせた一種の直弧文であろうが、典型的な直弧文とは趣を異にする。裏面に線刻が表現されないことなどから、忍岡系対称文を主体とする盾形埴輪とは別系統の直弧文系の盾形埴輪の可能性が考えられる。^(注43)

57は、横断面が裏面側に内湾し、縦断面が直線的で、下位で厚みを増し、別体と斜め方向に接合していた断面形態を示す。器表面は、著しく磨滅しており、調整は不明である。

58は、横方向は図示したとおり裏面側に内湾するが、縦方向は逆に表面側に比較的大きく内湾する断面を示す。表裏面とも磨滅しており、表面の線刻は浅く痕跡を残すのみで、図示した線刻以外にも線刻の痕跡がわずかに確認できる。裏面も相当激しく磨滅しているが、一定方向の成形段階と思われるナデによるくぼみが平行して認められる。

(伊賀高弘)

その他の埴輪(図版第29・33)

54は、1号墳東周溝内から出土した鱗付円筒埴輪の鱗の破片である。鱗の幅は10.5cmを測る。鱗の中位にあたると考えられ、片面に突帯を貼り付けている。この突帯は円筒部の突帯に続くようである。突帯の断面は台形で、上端幅0.8cm・高さ1.0cmを測る。

85は、1号墳の墳丘裾から出土した朝顔形円筒埴輪の口縁部である。口縁部はやや外反し、端部を丸くおさめる。口縁部中位の屈曲部外面に断面三角形の突帯がめぐる。復原口径は30.5cmである。外面はタテハケ調整され、内面は下半にヨコハケ調整、上半にタテハケ調整を行っている。

(有井広幸)

2号墳出土の埴輪(図版第33・141)

83・84は、朝顔形円筒埴輪の口縁部である。83は、口縁部が大きく外反し、端部を丸くおさめる。口縁外面に断面台形の突帯がめぐる。外面の調整はタテハケ調整が施された後に、ヨコハケ調整が施される。84は、口縁部が外反し、端部は外傾する面を持つ。口縁部外面に断面三角形を呈する突帯がめぐる。外面の調整は、磨滅が著しくタテハケ調整の痕跡がわずかに確認できる程度である。内面の調整は、口縁部下半にヨコハケ調整、口縁部上半はタテハケ調整が施される。

(筒井崇史)

89は、2号墳西側周溝内の埋土中から出土した。横断面が極端な楕円形を呈する円筒埴輪である。突帯2条相当分を残す破片であるが、完周する。長径40.6cm・短径15.5cmを測り、短径を1とした場合の長径の比率は2.6を示す。側面形は、上位ほど内側に直線的に内傾してその径を縮小する。外面調整は、間断なく垂直方向に施されたタテハケ(1次調整)の後、突帯間に上位ほど左に傾くタテハケを施し、さらに比較的ストロークの長い断続的なヨコハケ(A種ヨコハケ)を突帯間の中央付近にのみ加える。内面は、上位ほど左に傾く縦方向のナデで、粘土帯積み上げ痕をならして器面を平滑にし(成形)、図の下段突帯より上位にストロークの長い断続的なヨコハケを加えている。胎土は、埴輪としては精良で砂粒をほとんど含まない。断面・表面とも淡黄灰色を呈し、黒斑はみられない。なお、残存部にスカシ穴はみられない。

(伊賀高弘)

4号墳出土の埴輪(図版第29・31・33・139・141)

52は、蓋形埴輪の笠部から円筒形基台の中位付近まで残り、4号墳東辺周溝から出土した。円筒形基台上端から笠部上半は連続的に製作し、直線的に外下方にのびる笠下半(笠縁)部は後から付加する(笠部分割成形^(注44))。笠部中位突帯は、笠部と基台の接合部付近の笠部外面に貼り付けられている。笠部中位突帯は、低平なもの(上幅1.7cm・高さ0.4cm)で、上面にヨコハケ調整が残る。笠部外面には中位突帯付近にヨコハケ調整を行う。軸部下端の突帯は、端部を丸くして貼り付けている。円筒形基台の中位には、円形スカシ穴が推定2か所、対称する位置に穿孔されていたようである。基台の外面上半にナナメハケ、下半にタテハケ調整を施すが、中位付近に一部ヨコハケも観察できる。基台内面はナナメハケ調整が残る。基台と笠部の接合部付近の内面にはユビオサエ痕が残り、さらに上面では指ナデが上方に向かって行われている。

53は、蓋形埴輪の笠部から円筒形基台を含む破片である。全円周の約1/4が残存する。笠部の復原径は99.8cmを測る。主要部分は、4号墳西辺周溝からまとまって出土したが、笠部下半の一部は17号埴輪棺東小口から出土した破片が接合した。笠部外面中位突帯は、基台と笠部の接合部より上位に低平に貼り付けられ、上幅3.7cm・高さ0.9cmを測る。突帯より下半は、笠縁端部との中間に横方向の界線をめぐらせ、その上下に放射状の界線を施す。放射状の界線は、方形板を左側が上にかさなるような板葺状の表現をし、段差部分は削り出しによっている。笠部上半から笠下半(笠縁)部は連続的に製作し、笠部外面は下方にゆるやかな曲線を描いて内湾する(笠部一括成形^(注45))。円筒形基台は、笠部とほぼ直角に接合し、内方に斜めに下がる。笠部上面・基台外面は、

磨滅が著しい。基台内面には、ナメハケ調整がていねいに行われている。基台と笠部の接合部付近やや上の内面にはユビオサエ痕が残り、さらに上面は指ナデが上方に向かって行われている。101と同じく、佐紀陵山古墳出土の蓋形埴輪と同型式と考えられる。

78は、4号墳南東隅から出土した家形埴輪の破片である。家の一隅の部分で、一辺側に入り口と推定される方形の穿孔がある。裾部の突帯は、断面「へ」の字形にめぐる。内面に床張りがあったことをうかがえる破断面がある。壁の内面床部剝離部分には、タテハケ調整が残っており、器面の調整も同様であったと考えられる。

(有井広幸)

86・87は、壺形埴輪の円筒形基台である。いずれも頸部から上を欠損する。円筒形基台は逆円錐台形を呈し、円形のスカシ穴が穿孔される。頸部と肩部、肩部と円筒形基台の境に断面台形の突帯がみられる。

(筒井崇史)

5号墳出土の埴輪(図版第31・33・141)

76・77は、家形埴輪の壁材の破片と考えられる。76は、破片の中央部に剝離痕が残る壁材の底部隅片である。剝離痕部分にはタテハケ調整が残る。剝離痕部分の下方に線刻に挟まれた「X」字状の文様が連続する。77は、壁材の中位部分のコーナー付近の破片である。

88は、朝顔形埴輪の肩部である。内・外面ともヨコハケ調整をわずかに確認できる。

8号墳出土の埴輪(図版第32)

80～82は、8号墳及びその付近のS D03から出土した切妻形の家形埴輪である。破風板を含む屋根の主要部分と、平側・妻側の壁材の中位から基底部の破片が残るが、80と81・82には直接接合する部分がなく、全体の推定高は32cm前後、壁高は平側で19cm前後であろう。屋根部の長さは破風板先端間で推定51cm、幅は破風板端部間で推定28cm、軸部の桁行長は推定24cm、梁間長は15.2cmである。平側に縦推定7.5cm・幅4.5cmの入り口を表現した長方形の穿孔が左側に開いている。妻側では穿孔は確認できない。妻側の壁の最上部には丸太を半分にしたような棟木の出ている表現があり、平側の壁の最上部にも長方形板状の梁の突出表現がある。全体に器壁の残りは悪いが、屋根部外面はハケによる調整が行われていたようである。屋根の頂部は、やや丸みを帯びており、付近には黒斑がみられる。屋根部外面頂部には屋根材を押さえるように突帯が、桁方向に各1本(突帯の上幅1.3cm・高さ0.2cm)、梁方向に4本(2本は破風板の基底部付近)貼り付けられている。梁方向の突帯は、屋根の頂部付近で広くなり、突帯の規模は下方端で上幅1.9cm・高さ0.4cm、頂部で推定上幅2.2cm・高さ0.5cmを測る。この突帯の表現は、茅葺屋根の屋根材を押さえるための板などを表現している可能性がある。破風板は、頂部付近を欠くが、残存部位から、下方端から頂部に向かって徐々に幅を広げることが推定できる。破風板の下方端の内側幅は2.1cm、頂部端の推定幅7cmである。屋根の内面はほとんど未調整で、粗いユビオサエ痕が残り、特に中央部には粘土を粗く押しただけの部分が目立つ。屋根部は、軸部を作った後、梁方向に「V」字形に曲げた粘土板を両妻側から繋いで、中央部に最後に開いた穴を粘土で塞いでいる。

軸部裾付近にめぐる突帯は、やや幅広(2.2cm)の断面台形で、端部(幅0.8cm)が貼り付け部に比べ薄くなる。壁材は、幅約4cmの板状の粘土紐を積み上げている。基底部には妻側・平側の中央に各1か所ずつ計4か所に、三角形の切れ込みがある。床張りは行われていない。

(有井広幸)

S D03出土の埴輪(図版第27・30・31・33・140・141)

32～34・38は、蓋形埴輪の立ち飾り部の破片である。細片化したものが多い。これらも佐紀陵山古墳出土の蓋形埴輪と同型式と思われる。

32は、飾り板の外側辺を残している。側線は、同一曲率で曲線を描くが、その側面は風化して平滑面を失う。外側線と平行して描かれた複線は、飾り板縁取り線であろう。ただし、両面とも激しく磨滅しており、図示した線刻も極めて痕跡的である。

33は、両面に横方向の複線からなる直線的な線刻(上幅0.15cm・断面「V」字形)を施す小片資料である。器面は残りが悪く、調整は不明である。

34は、表裏面に同様の線刻をもつ小片で、表面左下に外側縁が残っている。線刻は、外側線に平行するように複線からなる直線を入れる。その内側に、複線とは角度の異なる単線の線刻を加える。裏面の上位に水平方向の線刻があり、外側に向かって集まる三角形の構図が想定できる。

38は、平行した数条の直線が両面に線刻された板状の埴輪片である。文様は、斜め方向の複線(裏面は非常に細い単線)2帯を平行に配している。外側の複線のうち、内側の線は他と比べて非常に細く、鱗と飾り板の本体を区画する際の割り付け線と見られる。これ以外の線刻は、器面が磨滅しているため、痕跡が残るにすぎない。

61・62は、佐紀陵山古墳出土の盾形埴輪と同型式と思われる。

61は、側面に鱗状に付加される盾外周区の断片である。図の左側面は、ヘラあるいは板状工具で、やや傾きをもって平坦に成形される。盾面には忍岡系対称文が線刻されるが、磨滅が著しく、残りが悪い。成形は、粘土帯を横方向に順次重ねて板状に形成しており、鱗部と円筒部では粘土帯の積み上げ方向が異なるようである。

62は、内区の横棧を含む破片である。上位に残る横棧と地板との境の段差は0.3cmで、その下縁に段差面を成形するために生じた沈線が残る。器壁は、地板と横棧の境界部分で横棧側に厚さを増す。しかし、横棧の範囲内で下位に向かうにしたがって漸次減少して、図の下端では地板部分と同じ厚さとなる。したがって、各文様区間の段差は粘土の補充で作り出されたものではなく、器壁面を強く押し出して段差を作っていると考えられる。

(伊賀高弘)

65は、鋸歯文が連続し、鋸歯文の下に界線と考えられる線刻を数条施文する板状の埴輪である。図面左側は、円筒部と施文面を接合した部分である。盾形埴輪片の可能性はあるが、他の盾形埴輪より器壁が薄く、他の器財埴輪の一部とも考えられる。

66は、形象埴輪の端部付近の破片である。直線状の端部付近に平行して1条の沈線が残る、図面左側に接合痕が残る。盾形または家形埴輪の一部と考えられる。

67～69は、平行する線刻に挟まれて、連続する逆「V」字形の線刻文様を施す板状の埴輪片である。家形埴輪の壁材の可能性がある。

73～75は、家形埴輪の妻側壁の最上部の破片である。74は、円形スカシ穴の一部が残る。内面側にナデ痕が明瞭に残る。

(有井広幸)

90は、正円筒形の鱗付円筒埴輪で、最下段と第2段の一部が残存する。突帯は断面台形を呈し、突帯の接合位置を明示する方形の刺突が認められた。鱗は残存していなかったが、第2段の器壁に接合痕が確認できた。外面の調整は、磨滅が著しいものの、タテハケ調整が確認できる。内面の調整は、ナナメハケ調整の後に、一部ナデ調整が施される。底部内面には、ユビオサエ痕が多数認められる。なお、器壁の一部に赤色顔料が付着する。

(筒井崇史)

②包含層出土の埴輪(図版第26～31・137～141)

20～31は、蓋形埴輪の立ち飾りの破片である。瓦谷古墳出土の蓋形埴輪は、佐紀陵山古墳出土の蓋形埴輪と同型式である。

20は、一連の調査で出土した中では最も残存率の高い立ち飾り部の飾り板の破片である。外側上段鱗とそれに続く飾り板の多くの部分が残存する。鱗の側線は、直線状を呈した後、そのまま「S」字状に反転して飾り板本体につながる。鱗の内部には線刻などはみられず、素文のままである。鱗と飾り板本体の境には、鱗部区画線が鱗の接合部分にのみ線刻される。この線刻とは別に、これと平行に鱗側と近い位置にも細い線刻がある。この線刻は、他の線刻に比べて著しく細かい線で描かれており、14と同様に鱗と本体とを区画する割り付け線とみられる。複線からなる飾り板縁取り線より内側には、上下に横方向の五線帯を渡す。この五線帯に挟まれた空間に飾り板の主軸方向の五線帯を2帯横に並べる。線刻順序は、縁取り線→横位五線帯→縦位並列五線帯と進む。この五線帯の交互配列にみられる施文は、佐紀陵山古墳出土の蓋形埴輪(以下、陵山例)と同じ文様構成をもつ。ただし、縦位並列五線帯をみるといくつかの相違点がある。つまり、陵山例では、五線帯の複線縁が飾り板縁取り線(1条)とは別に独立しているのに対し、瓦谷古墳群出土の蓋形埴輪(以下、瓦谷例)ではその部分が複線縁と共有している。また、並列する五線帯どうしの接点は、陵山例では、3条の平行沈線で表現した中央の1線を共有している。これに対して、瓦谷例では両方の複線縁が表され、五線帯が左右に分離して、その間に無文部を生じさせている(第43図参照)。形式的には陵山例が瓦谷例に先行すると考えられるため、瓦谷例は、陵山例を範型として製作されたと考えられる。器面は、表裏面とも磨滅しているが、本来の器面を残す部位には、飾り板の主軸方向に施された細かいハケメ(条線密度8～9本/cm)や、布を介したナデ(ハケに後出する)調整が認められる。また、線刻は太めで(上幅最大0.3cm)、「V」字形断面を呈する。線刻の溝内を中心にベンガラが残り、本来は全面に塗布されていたと考えられる。

21は、内側鱗から飾り板にかけての断片資料である。鱗は、先端と基部を欠損するが、外縁線はゆるやかに内湾し、上部の内縁線は直線状である。上部の鱗の付け根は、鋭角的に仕上げられ

ている。この付け根部分は、刀子状の鋭利な工具で鱗を本体から切り出したものではない。鱗部を本体側に接合した後、側面をヘラ状工具でいねいにナデている。表面の上半部は、比較的残りがよく、斜め方向の断続的なハケメ(条線密度9本/cm)が観察される。線刻の底面にはベンガラが残り、本来は全面に塗布されていたようである。

22は、外側上段鱗を少し含む立ち飾りの破片である。両面とも磨滅が著しく、一方の器面は完全に剝離している。裏面には、縦位並列五線帯の線刻が一部残っている。残存部分の線刻は、外側の五線帯と鱗部区画線(右側の単線)である。裏面の線刻は、器面磨滅のため、その下半部が残されているにすぎない(現状での上幅0.15~0.2cm)。断面は、「V」字形を呈する。

23は、器面の磨滅が著しく、線刻も痕跡的に残る程度で、実測図の線刻には確証を欠くものがある。比較的残りのよい裏面でみると、図の左縁に描かれた円弧線は、飾り板の縁取り線(複線)のうちの内側の線と思われる。また、複線からなる水平線は、上段の横位五線帯の下側の複線縁に相当するとみられる。遺存状態のよい縁取り線の線刻は、上幅0.1~0.15cmを測り、「V」字形断面を呈する。調整は不明である。

24は、器面の磨滅が著しく、裏面に記された線刻は確証を欠く。表面のわずかに円弧を呈する複線はよく残り、上幅0.15~0.2cmを測り、断面は底の丸い「U」字形を呈する。調整は、全く不明である。

25も磨滅が著しく、特に、裏面は器面が完全に剝がれている。表面に残る線刻の構図は、外側に沿ったゆるい円弧を呈する複線が、一定の間隔をとって平行に描かれる。その内側には単線からなる円弧線が付加される。外側線や複線からなる線刻が同一方向の円弧を描いていることから、蓋形埴輪の立ち飾りと考えられるが、具体的な部位は明確でない。

26は、飾り板上辺の外縁側の破片である。上縁はゆるく内湾するが、外側辺は直線的である。両面に、外形線と平行して飾り板の縁取り線(複線)を線刻する。表面の線刻は、外側辺に沿った線が、その屈曲部で上辺に平行する線の上を覆い、外側辺に沿った線刻が上辺の線刻に切り勝っている。水平方向の複線は、横方向の五線帯の複線縁であり、陵山例を参考にすると、本来は左右両側の飾り板縁取り線の間を橋渡しする構成を基本とする。この意味で本資料は、縁取り線が複線か単線(陵山例)かの違いはあるが、本来の文様構成を残しているといえる。器面の調整は、磨滅で不明瞭であるが、表面の上辺付近に横方向のハケメの痕跡が残る。側面は、ヘラ状の工具でいねいに仕上げられる。

27は、先端が三角形状を呈する板状の小片である。両面に同じ文様の線刻がある。線刻は、外側ラインに沿った1点に集まる直線に中軸線が加えられ、1・6・8・26の蓋形埴輪の立ち飾りとは異なった構図を示す。

28は、両面に同じ文様の線刻を有する。線刻は、すべて複線からなり、ゆるい円弧線を2条平行に配し、下方の線からは斜め下に向かう線が書き加えられる。器面は、磨滅しており、「V」字形断面をもつ線刻は、裏面では痕跡しか残らない。

29は、縦位並列五線帯を表現した小片である。線刻が残るのは片面だけで、並列する2帯の五

線帯の接する側の複線縁が、この個体の左よりに縦方向の複線2帯として描かれている。ただ、右側の五線帯の複線縁と中心軸線との間隔が他の資料に比べて広い。もう一方の面は、器表面剝離のため線刻が完全に消えている。

30は、図の中軸よりが内側鱗に相当する小片である。両面に同じ構図の線刻が入るが、裏面の鱗側(左側)の1線は、他の線刻(上幅0.2~0.3cm、断面「U」字形に近い「V」字形)に比べて0.1cm以下の細かい線で、鱗と本体を画する際の割り付け線的な性格を持つとみられる。

31は、立ち飾りの鱗本体の基部(飾り板が十字形に展開する付け根の部分)に近い部位を示す資料である。なお、直角方向に展開する他の飾り板までは残っていないため、その接合状態を知ることにはできない。ただ、残存部をみる限り、中心軸付近で粘土を加えることで器厚を増している。この個体の表面上位に残る複線からなるゆるい円弧線は、飾り板の主軸方向にのびる五線帯の複線帯である。これに平行する単線が下方にみられないことから、下段の縦位五線帯は、主軸の左側(上側)のみ施文されていたことが本資料からうかがわれる。器表面は磨滅しているが、表面側の上位で縦方向のナデ調整が認められる。

36は、比較的大きく内湾する外郭線を持っている。器表面は、相当磨滅しているが、比較的よく残る表面には細く浅い線刻が残る。線刻の構図は、外形ラインに沿った縁取り線(単線)を配し、その内側にこの縁取り線と平行、または直交・斜交する線を描く。小片資料のため、全容は不明であるが、直角に折れて重なる部分で他方を隠す、一種の鍵手文風の図文構成と考えられ、五線帯交互配列の立ち飾りとは別系列の飾り板と見られる。

37は、飾り板上辺の外側隅付近の小片である。直線的な外郭線の内側に、飾り板の縁取り線(複線)を表す。器面の遺存状態は良好で、文様面はハケメで調整した後、布を介在させたていねいなナデを加えて平滑に仕上げる。側面は、先の平坦な工具を用いて長軸方向と平行に強くナデを施して平坦面を作る。

40は、両面に「V」字形に屈曲する複線の頂点から単線が直線状にのびる構成の線刻を有する。これを鍵手文の一部と考えると、それが使用される部位は肋木の側面に限定されるので、陵山例と同型式の蓋形埴輪の肋木の一部の可能性はある。

41は、厚さ約1.0cmの薄手の個体で、その縦断面から、土師器の壺形土器、あるいは薄手の蓋形埴輪の笠部上半の部位に相当すると考えられる。笠部外面には、軸受け部との屈曲部直下に線刻が施されている。文様は、上から見ると、軸受け部下端の周囲に、一定の間隔を保った同心円状の線(内側は単線、外側は複線)を描き、この両者の間を橋渡しする放射状の線(複線)を加える構図となる。笠部から軸受け部に至る屈曲部外面には、粘土帯を貼り付けた突帯をめぐらせるが、その断面形は磨滅・剝落が著しく不明である。器面は、外面は布を使って横方向にナデで平滑にし、内面は横方向のヘラケズリ調整を施す。

42も、厚さ約0.7cmの薄手の資料で、断面形は、上下・左右いずれの方向も内湾しており、球面の一部を構成する小片である。表面のみ複線の直線文が線刻されるが、裏面に線刻はみられない。表面は、最終ナデ仕上げで、平滑な面となっている。裏面は、横方向にヘラケズリ調整を施

した後、横方向のハケメを加え、さらにナデで仕上げるといっていねいな手法を用いる。表面の線刻は、他の埴輪に比べて繊細な感じで、上幅0.1cm、断面「V」字形を呈する。器厚や調整技法の類似から、41と同一個体の可能性がある。

45は、笠部中位突帯を主体とした笠部の断片である。外面に粘土帯を貼り付けて作られた笠部中位突帯は、上幅3.3cm、器面からの高さ0.9cmを測る。その上側面と外側面は、成形段階のユビナデによって、ゆるく内湾する。一方、下側面は、突帯以下の笠縁部の段差と一連の工程で成形されたようで、板もしくはヘラ状工具によるナデ技法が用いられるため、その側線は直線的となる。突帯以下のわずかな平坦面には約12.0cmピッチで縦方向に走る段差が表現される。器面は、内外面とも磨滅し、調整は不明である。

(伊賀高弘)

47は、円筒形基台との接合付近の笠部の破片である。笠部上半から笠部下半(笠縁)部にかけては、連続的に製作され、円筒形基台は笠部とほぼ直角に接合する。器面は、磨滅が著しい。

48は、笠部中位突帯から円筒形基台の上端部を含む笠部の段片である。外面の粘土帯貼り付けによって作られた笠部中位突帯は、上幅1.3cm・高さ0.4cmを測る。低平で小規模な笠部中位突帯は、円筒形基台接合部より内方(上方)に位置する。

49は、円筒形基台との接合付近の笠部の破片である。笠部上半から笠下半(笠縁)部にかけては連続的に製作され、笠部外面は下方にゆるやかな曲線を描いて内湾する(笠部一括成形)。円筒形基台は、笠部とほぼ直角に接合し、内方に斜めに下がる。接合部分は、基台側が笠部に食い込んでいる。

55は、器種不明の埴輪である。推定径38cmの円筒部に、幅10.5cmの鱗が付く。鱗の上端部は、鍵手状に屈曲し、円筒部を半周すると考えられる受け状突帯に続く。円筒部は、受け状突帯の接合部付近でわずかに外反する。受け状突帯の高さは4.8cm、円筒部外面から受け部外端までは3.5cmを測る。円筒部の内外面とも、ヨコハケ調整を行う。

(有井広幸)

63は、盾外周区の断片資料である。右側面は、先端が平坦な工具を用いて成形するが、上下方向に2回にわたってなでるため、断面が不整形な三角形状を呈する。盾面には忍岡系対称文を線刻で施すが、磨滅しているため線刻はやや浅い(上幅0.2~0.3cm・断面「U」字形)。縦方向にのびる粘土帯を横方向に重ねて板状に仕上げる。円筒部との接合部は、円筒部の円弧に沿って斜めに剥離しているが、その破面(接合面)には、刻みなどの接合の際の仕口は施していない。

(伊賀高弘)

64は、片面にのみ線刻施文する板状の埴輪である。文様は、平行する斜線で構成された鋸歯文が連続する。図面上辺部は端部が残っており、鋸歯文の先端は外向きである。裏面に線刻がないことから、盾形埴輪の可能性はある。

70~72・79は、家形埴輪の破片と思われる。

70・71は、一側面に梯子状の表現を立体的に表わした板状の埴輪小片である。このうち、70は、

縦横両方向とも直線的な断面を呈する。梯子状部は、図の右端に残る小さな面が基盤であれば、そこに粘土帯を付加して低平な突帯状に一段高く造り、この突帯上に縦断面でみて鋸歯状になるように梯子状に作る。この立体的な梯子状の造形は、おそらく厚みのある角頭状の工具を用いて浅い角度で粘土面を押圧し、それを縦方向に繰り返して製作していると考えられる。梯子状表現の左側は破面で、この表現が載る突帯の幅は不明であるが、破面との間に1条の直線的な沈線が入る。磨滅のため、器表面の調整は不明である。

71も70と同様、一側面に突帯と立体的な梯子状造形の破片資料である。ただ、70は、縦断面は直線的であるが、横断面は図の左側ほど曲率を高めて、裏面側に内湾する形態を示す。表側の文様はすべて立体的に表現される。つまり、図の左寄りに上面が平坦に作られ、台形断面のひときわ高い(高さ1.0cm)突帯を配し、その右手に接するように梯子状帯を配する。一方、突帯の左側には、その突帯に直交する方向に、幅3.3cm・高さ0.3cmの低平な長方形断面の突帯を派生させる。梯子状帯は、突帯に接する高さ0.4cmの低平な台状部を基礎にし、内部を縦断面が鋸歯状になるように造形する。梯子の一単位の長さは平均2.0cmで、これを縦方向に繰り返している。その製作方法は、71と同様と推定される。内外面とも磨滅のため、調整は不明である。70・71に類似した埴輪が奈良県マエ塚古墳や同櫛山古墳で出土しており、全体の形状をうかがえる資料はないが、いずれも家形埴輪と報告されている。本資料も形態の類似性から家形埴輪の屋根部を構成する破片である可能性が高い。特に71は、断面の描く曲線から棟部に近い部位が想定される。

72は、家形埴輪の屋根端部の破片と考えられる。79は、家形埴輪の基底部の裾まわりの破片と考えられる。

(有井広幸)

③埴輪棺転用の埴輪

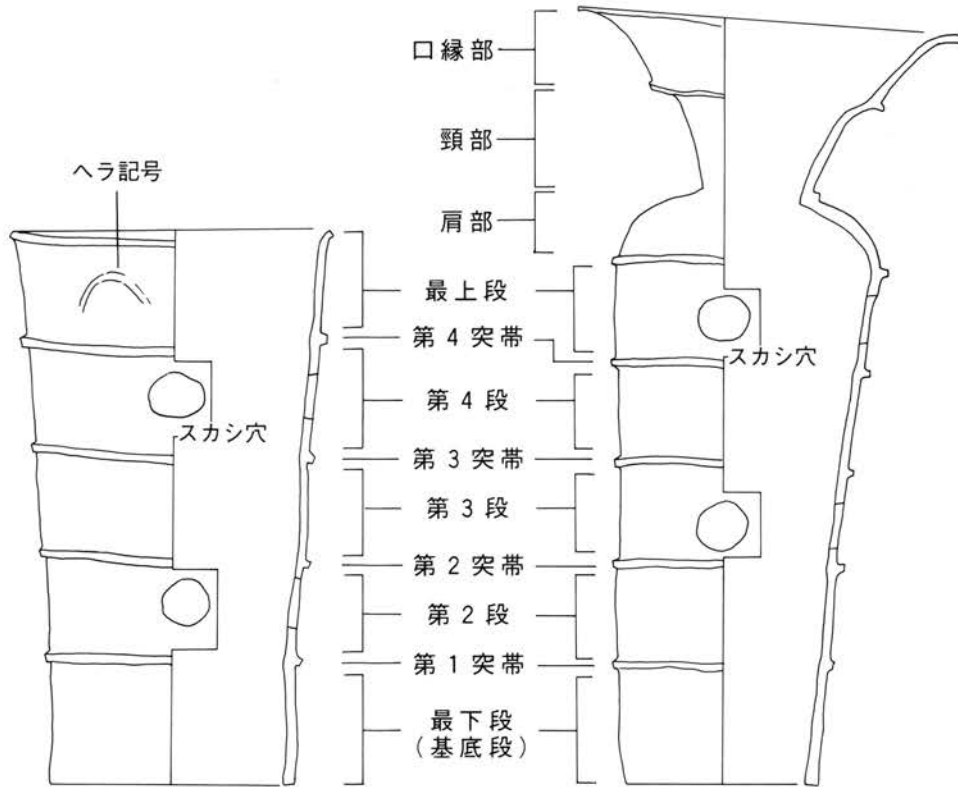
1号埴輪棺転用の埴輪(図版第30・34・142)

60は、直弧文系盾形埴輪の破片である。内区の地板を表現した平行線部分にあたると考えられる。

91は、北側小口の閉塞用に転用された普通円筒埴輪で、正円筒形を呈すると思われる。最上段と2段目が残存し、突帯の間隔は最上段が著しく狭い。口縁部は外反ぎみで、端部をつまみ上げる。突帯は、上辺をわずかにつまみあげ、断面形が方形に近い「M」字形を呈する。スカシ穴は長方形を呈し、2段目に3方向に穿孔される。外面の調整は、タテハケ調整ないしナメハケ調整(1次調整)が施された後に、いわゆる「A種」ヨコハケ調整(2次調整)が施される。内面の調整は、ヨコハケ調整が施される。口縁部には、内・外面ともていねいなナデ調整が施される。

(筒井崇史)

92は、長方形のスカシ穴をもつ円筒埴輪の破片で、外面に線刻文様をもつ。文様は、横8.0cm×縦10.0cmの範囲に描かれる。その文様構成は、直線と弧線を巧みに用いて表現するが、そこに定型化した直弧文を読み取ることはできない。ただ、一方が鑿頭状断面、あるいはゆるい円弧を呈した刀尖形状に集まる単線縁からなる帯状のモチーフが随所にみられる。文様を正立にみた場合、その輪郭は水平線に対しておよそ30°傾いたおおむね長方形を呈する。そして、その



第44図 円筒埴輪各部名称図

上辺と右側辺の輪郭をなす帯状文は、ともに右上隅に向かって曲線を描きながら融合して1点に集まる。これらの2本の帯状文の他方の端は、上辺では途中から中心線を派生させて幅を増しながら下方に屈曲し、末端は開放されたまま終わる。右側辺の帯状文の下端は、下方から現われる逆「L」字形を呈し、一端が刺状に終わる別の図形の尖端付近に切られて、下には続かない。底辺と左側辺については、不規則に幅を変化させながら蛇行する1本の帯状文を配し、文様区の左下方を閉じる。この周縁帯で閉塞された内部には、右側辺の屈曲に規制された逆「く」字形に屈曲する線を数条入れて充填する。施文に用いられた線刻は、幅0.03~0.05cmと非常に細くて繊細であるが、底は器面を比較的深く刻んでおり、鋭利な針状の施文具を原体としているようである。器面の調整は、外面に広がる黒斑部分でとりわけ良好に観察できる。つまり、突帯を製作する前には、ストロークの長い垂直方向に近いタテハケを全面に施し(1次調整)、突帯を成形した後、突帯間にやや左右に傾くタテハケを横方向に重複するようにていねいに施し、部分的に布を介させた横方向のナデを加える(2次調整)。特に、施文部分ではていねいにナデが施され、文様面を平滑に仕上げる。なお、線刻のある段に限り、赤色顔料(ベンガラ)の塗布が認められる。

(伊賀高弘)

93は、棺本体に転用された普通円筒埴輪である。正円筒形を呈するが、体部下半を打ち欠いており、3条4段分が残存する。口縁部は直口縁で、端部に面を持つ。突帯は、断面台形を呈し、突帯の間隔は最上段を除いてほぼ等間隔である(平均値16.6cm)。スカシ穴は、2段目に長方形、4段目に隅丸方形(下半部を欠損する)と思われるのものがそれぞれ穿孔される。外面の調整は、

付表6 埴輪棺転用円筒埴輪一覧表

出土遺構	番号	種類	法量(単位はcm)			突帯間隔(単位はcm) (最下段よりの値を示す)
			口径	底径	器高	
1号埴輪棺	91	普通	34.8	—	*23.6	?→8.8
1号埴輪棺	93	普通	31.6	—	*57.6	?→16.4→16.8→11.6
2号埴輪棺	94	普通	38.0	—	*62.0	?→16.4→16.4→10.0→11.2
2号埴輪棺	95	普通	43.6	—	*55.2	?→16.8→16.8→13.2→8.0
3号埴輪棺	96	普通	28.8	—	*55.2	?→16.0→14.8→16.4→5.2
3号埴輪棺	97	普通	31.6	28.8	72.2	16.8→17.2→16.6→(16.8)→(4.8)
4号埴輪棺	98	普通	25.2	25.6	65.0	16.8→14.4→13.2→12.8→7.8
5号埴輪棺	99	普通	31.8	29.8	69.5	27.2→14.0→14.0→14.3
5号埴輪棺	103	普通	33.0	—	*62.0	?→13.8→13.0→13.8→8.4
8号埴輪棺	104	鱗付普通	35.5	—	*89.0	?→14.6→13.5→13.9→14.9→14.9→13.9
8号埴輪棺	107	鱗付普通	40.5	—	*80.5	?→17.2→17.1→17.1→17.0→7.5
8号埴輪棺	108	鱗付朝顔形	—	—	*63.7	?→15.5→16.1→15.6→7.2
9号埴輪棺	105	普通	32.8	26.4	67.2	18.7→14.3→14.5→14.1→5.6
9号埴輪棺	106	普通	34.9	—	*19.0	?→7.6
10号埴輪棺	112	鱗付朝顔形	—	32.0	*116.9	35.1→16.1→16.3→16.4→16.7→9.7
11号埴輪棺	110	普通	29.8	31.9	75.6	27.3→14.1→14.0→13.8→6.4
11号埴輪棺	111	鱗付普通	42.4	—	*72.4	?→15.3→16.6→15.6→12.2→11.8
12号埴輪棺	113	鱗付朝顔形	—	—	*92.4	?→16.3→16.5→15.3→16.0→16.3→7.1
12号埴輪棺	119	鱗付朝顔形	—	—	*50.2	?→15.6→15.3→8.0
13号埴輪棺	117	鱗付普通	36.6	—	*16.8	?→16.8
13号埴輪棺	118	普通	36.8	—	*13.8	?→8.0
14号埴輪棺	120	普通	—	26.8	*104.6	19.0→15.6→15.6→15.8→16.0→15.0→?
15号埴輪棺	146	普通	21.5	20.0	45.5	15.2→15.8→14.5
15号埴輪棺	147	普通	26.5	18.8	44.2	15.7→15.4→13.1
16号埴輪棺	121	朝顔形(口縁部)	42.4	—	*26.6	—
16号埴輪棺	122	朝顔形(口縁部)	52.6	—	*20.5	—
16号埴輪棺	125	普通	40.9	33.1	95.1	17.7→12.1→12.2→12.0→12.6→12.1→16.4
16号埴輪棺	126	普通	51.2	—	*62.6	?→13.4→13.4→13.5→18.8
17号埴輪棺	148	普通	34.2	—	*35.4	?→12.1→12.6
17号埴輪棺	149	普通	37.2	—	*35.5	?→11.2→13.4
19号埴輪棺	144	朝顔形(口縁部)	70.5	—	*10.4	—
19号埴輪棺	150・151	普通	38.2	—	*58.4	?→(13.6→)13.1→13.2→6.7
19号埴輪棺	152	鱗付普通	32.5	—	*26.8	?→13.6→6.7
20号埴輪棺	159	普通	29.4	26.8	66.7	15.2→11.9→13.2→12.5→13.9
21号埴輪棺	160	鱗付普通	31.6	28.0	72.0	28.4→14.4→14.4→14.8
22号埴輪棺	153	普通	42.2	32.2	72.9	16.8→15.3→13.8→13.4→13.6
22号埴輪棺	154	普通	49.7	33.4	71.6	16.4→14.1→14.3→13.6→12.4
22号埴輪棺	155	朝顔形普通	50.4	25.4	100.8	15.5→14.3→13.4→13.8→13.6
22号埴輪棺	156~158	朝顔形普通	61.6	26.6	101.6	16.0→13.2(→13.2→12.0→13.2)
23号埴輪棺	162	普通	40.8	23.4	61.8	15.0→12.0→11.0→11.4→12.4
24号埴輪棺	168	普通	—	40.2	*50.3	13.3→14.8→15.5→?
24号埴輪棺	169	鱗付普通	39.4	—	*57.8	?→15.9→16.3→10.9→12.4

器高欄の*は、残存高を示す。

タテハケ調整(1次調整)が施された後に、横方向のナデ調整が施される。内面の調整には、縦方向ないし横方向のナデ調整が施される。一部に赤色顔料が付着する。

2号埴輪棺転用の埴輪(図版第34)

94は、南側の棺本体に転用された正円筒形の普通円筒埴輪で、体部下半を打ち欠いており、4条5段が残存する。口縁部はやや外反しており、端部を丸くおさめる。突帯は断面台形を呈するが、2条目の突帯は、大きく外方に突出する鋸状の特異な形態を示す(突出高3.2cm)。突帯の間隔は、3段目と4段目がほぼ一致するが、上2段は3・4段目の約2/3の長さに割り付けられている。スカシ穴は長方形で、3段目と5段目に穿孔される。外面の調整は全体的に磨滅が著しいが、タテハケ調整(1次調整)が施された後に、いわゆる「A種」ヨコハケ調整(2次調整)が施されるようである。内面の調整は、磨滅が著しく不明である。

95は、北側の棺本体に転用されたもので、逆円錐台形に近い形状を呈する。横断面形は楕円形を呈し、いわゆる楕円筒形埴輪である。体部下半を打ち欠いており、4条4段が残存する。口縁部は直口縁で、端部に面を持つ。突帯は、やや偏平な台形を呈する。突帯の間隔は、最上段が著しく狭く、2段目もやや狭いが、3・4段目は等間隔である。スカシ穴は確認できなかった。外面の調整は、タテハケ調整(1次調整)が施された後に、横方向のナデ調整(2次調整か)が施される。内面の調整にはタテハケ調整が施される。外面の広い範囲に赤色顔料が塗布される。瓦谷古墳群で断面楕円形を呈する円筒埴輪は、ほかに89がある。

3号埴輪棺転用の埴輪(図版第35・142)

96は、北側の棺本体に転用された普通円筒埴輪である。体部最大径が2条目の突帯付近にくるもので、体部がやや膨らみぎみの形態を呈する。上下に破碎されているため、接合できないが、4条5段構成をとる(図は復原)。口縁部は、外反ぎみで端部をやや丸くおさめる。突帯は、断面台形を呈する。突帯の間隔は、最上段が著しく狭く、他の段はややばらつきがみられるが、ほぼ等間隔に割り付けられる(平均値15.7cm)。スカシ穴は隅丸三角形ともいべき形状で、2段目と4段目に穿孔される。内・外面とも磨滅が著しく、調整は不明である。

97は、南側の棺本体に転用された正円筒形の普通円筒埴輪で、現状では3条4段構成の円筒埴輪のようであるが、最上段の幅を考慮すると剝離痕を直接確認できないものの、突帯がもう1条存在した可能性が高い。その場合、前述の96と同様の形態であったと考えられ、本来は4条5段構成をとる円筒埴輪であったと推測される。口縁部は、直口縁で端部を丸くおさめる。突帯の断面形は、やや偏平な台形を呈する。突帯の間隔は、最下段から第3段までがほぼ等間隔であり(平均値16.9cm)、先に述べたように、1段分の間隔がほかの段と同じとすれば、最上段の間隔は4.8cmに復原できる。スカシ穴は、確認できなかった。外面の調整は、全体的に磨滅が著しいながらも、タテハケ調整(1次調整)が施された後に、いわゆる「A種」ヨコハケ調整(2次調整)が施される。内面の調整には、部分的にヨコハケ調整の痕跡が認められる。

4号埴輪棺転用の埴輪(図版第35・142)

98は、棺本体に転用された普通円筒埴輪である。体部最大径が第1突帯付近にくるもので、体

部がやや膨らみぎみの形態を呈する。口縁部は外反ぎみで端部を丸くおさめる。突帯は、やや偏平な台形を呈する。突帯の間隔は、最上段・最下段を除くと、ややばらつきがみられるが、ほぼ等間隔に割り付けられる(平均値13.5cm)。スカシ穴は確認できなかった。外面の調整は、タテハケ調整を基本とし、部分的に横方向のナデ調整が施される。内面にはタテハケ調整が施される。

5号埴輪棺転用の埴輪(図版第35～37・143)

99は、北側の棺本体に転用された鱗付普通円筒埴輪である。正円筒形を呈し、3条4段構成をとる。口縁部は、外方に屈曲させて突帯状に仕上げ、端部は面をなす。突帯は、断面台形を呈する。突帯の間隔は、最下段を除いて等間隔に割り付けられており(平均値14.1cm)、最下段は他の段の約2倍の長さ(約27.2cm)に設定される。突帯の接合位置を明示する方形の刺突が確認できる。スカシ穴は、第3段に長方形、最下段に半円形のもの穿孔される。半円形のスカシ穴は、長方形のものを軸をずらして穿孔される(鱗から約7cmのところを位置する)。外面の調整は、タテハケ調整(1次調整)が施された後に、横方向のナデ調整(2次調整)が施される。内面の調整は、最下段にタテハケ調整、それ以外の段に縦方向のナデ調整が施される。外面には、全面に赤色顔料が塗布される。

103は、南側の棺本体に転用された普通円筒埴輪である。底径がやや小さくなるものの、ほぼ正円筒形に近い形状を呈する。底端部は欠損するが、4条5段構成の円筒埴輪であったと考えられる。口縁部はゆるやかに外反し端部に面をなす。突帯はすべて剥離しており、突帯の接合位置を明示する方形の刺突と2条の沈線(幅約2cm)を確認できる。この割り付け線から突帯の間隔を復原すると、第2～4段はほぼ等間隔に割り付けられている(平均値13.5cm)。スカシ穴は、第2段と第4段に長方形のものが3つずつ、最下段に半円形のもの2つ穿孔される。半円形スカシ穴の1つが、長方形スカシ穴の1つと一致する。瓦谷古墳群でスカシ穴が1段に3つ穿孔される例は、103と91・119の3例しかない。外面の調整は、体部下半にナデ調整、体部上半にヨコハケ調整ないしタテハケ調整が施される。2次調整として、第2段のみに部分的な横方向のナデ調整が認められる。内面には、おおむねナデ調整が施されるが、第4段にヨコハケ調整が施される。

(筒井崇史)

100は、棺本体南半部分から出土した。忍岡系対称文を外周と横棧に表現した「目」字形分割の直弧文系盾形埴輪である。出土した破片は、横棧の左端と一部外周区を含む部位である。横棧部と図の下位に少し残る地板部の境には0.3cmの段差が作られるのに対し、横棧と外周区との境界に段差はなく、1条の線刻で区画している。盾面は、側方に展開する鱗状部を円筒部に付加接合することで形成されている。つまり、円筒部に別に製作した盾部を貼り付けるのではなく、円筒部も盾面の一部として利用している。外面(表面)は、布を介した横方向のナデをていねいに施し、器面を平滑に仕上げた後に、線刻施文する。線刻の幅は0.1～0.15cmと比較的細く、その断面は「V」字形である。内面は、横方向のハケメ痕が顕著に残り(条線密度8本/cm)、ナデによる仕上げは施されていない。図の右半部に黒斑が広くみられ、表面全体にベンガラが塗布された痕跡が部分的に残る。直弧文が施された埴輪の破片を埴輪棺の一部に用いたことについては、

盾がもつ威力(例えば迫り来る敵=邪霊から身を守る力)を期待したというよりも、むしろそこに描かれた直弧文がもつ除魔・辟邪の力を期待して、小さな埴輪片であるが、棺に供えたものと解釈される。

6号埴輪棺転用の埴輪(図版第36・136)

101は、蓋形埴輪の笠部で、棺本体に転用されていた。残存する部位は、笠部と円筒形基台の上半部で、全円周の約1/4が残存する。笠部は、復原口径が約95.0cmを測り、蓋形埴輪としては極めて大型の部類に属する。笠部の断面形は、一律の曲線で内湾する深い菅笠状を呈する。笠部の高さは約25.0cmを測る。

笠部外面には、笠部の円弧長をおおむね二等分する位置に幅の広い断面台形の突帯(上幅2.7cm・高さ1.2cm)を横方向に1条めぐらせて、笠部外面を上下に二分する。この突帯(笠部中位突帯)より上位は、全く線刻の痕跡はなく、素文のままである。中位突帯以下は、笠縁端部との中間に横方向の界線(中位界線)を入れた放射状の文様が表現される。この放射状の界線は、中位横線を境に上下段でずれず、一直線に通っている。そして、この笠部下半の文様は、浮彫り状に段差を作り出して、いわゆる「貼布」のようすを写實的に表現する。この造形は、段差による方形板を上下同じ位置で二段に重ねたような板葺状に表現している。個々の方形板(方形単位)をみると、右下を基点として対角線上の左上の角に向かい、器壁を徐々に減らすように加工している。

笠部を支える円筒形基台は、下半部を欠損するが、残存部をみると、笠部とほぼ直角に接し、下内方に直線的に下降する。このまま、まっすぐに下降すると基底部分が著しく縮小した逆円錐形になるが、おそらく折損部下方で外反するように屈曲していたと予想される。

円筒形基台も含めた笠部の成形は、いわゆる笠部一括成形で製作される。すなわち、粘土紐を積み上げて製作し、十分乾燥させて硬化した円筒形基台にやはり粘土紐の積み上げで逆碗状に造形した笠部を載せるように接合し、接合部を内側は基台の内壁を、外側は笠の内壁の粘土を軽く押し出して補充している(内外とも補充粘土を用いない)。ただし、断面をよく観察すると、円筒形基台の上端が笠部の壁内にくいこんだ状態を観察でき(図版第136)、笠部内壁に柄状の溝を穿って、円筒形基台の上端をそこに挿入して、接合したのかもしれない。

肋木の有無については、器表面が相当磨滅していることや破片の残存率から、剝離痕すら確認できない。しかし、39・40のような肋木の一部を構成する破片資料が存在することから、否定することもできない。

器面の調整は、磨滅しており、特に笠部外面の調整を知ることはできない。一方、円筒形基台の内面はよく残り、横方向のハケメですきまなくいいねいに施され、ハケ以降の調整を省略している。笠部内面は、ハケメ調整の後、おそらく布を介したナデで先行するハケメを消している。笠部と円筒形基台にみられる内面調整の相違は、両者が別々に製作されたことを示している。

7号埴輪棺転用の埴輪(図版第36・143)

102は、7号埴輪棺と呼称された埋葬施設に転用された土師器壺である。非常に厚手の器厚をもつことや、朝顔形円筒埴輪に共通する突帯の形態、貼り付け位置などから、当初壺形を形象し

た埴輪と考えていた。しかし、埴輪にこのような形態のものではなく、むしろ土器に同形態のものが存在することから、壺形土器として理解した方がよいと思われる。残存するのは、口縁部を中心に体部の一部が1/2程度残っている。体部の大半は、棺に転用された際に、墳丘の外周側にあったため、削平を受けて欠失したものとみられる。

形態は、大きな球形に近い体部を呈し、頸部との境で「く」字形に屈曲し、頸部は外上方に外反し、その上半はさらに外反度を強めて大きく開いた後、内折して口縁部は直線を保って内傾する。頸部下端と口縁部下端の屈曲部外面に、断面形が「M」字形に近い台形を呈する突帯を1条ずつめぐらせる。

頸部と体部外面には、線刻により施文される。頸部では上下2段からなる下降鋸歯文で、段ごとに交互に配列し、内部は右下がりの部位に平行する線で充填する。体部の図文は、展開図のとおり、一種の横に展開する帯状文と推測され、複線からなる「几」字形文と単線からなる中心点をもつ二重の同心円文を文様単位とし、それを上下に反転させながら横方向に連続する構成をとる。

器面調整は、ていねいに施し、特に外面は最終的には非常に平滑な面に仕上げる。つまり、口縁部外面は、上位ほどやや右に直線的に傾く縦方向のナデを間断なく施した後、全面に布を介した横方向のナデを加える。さらに、口唇部と突帯付近にそれらを成形するための布を介したヨコナデを施す。頸部外面は、上位ほど右にわずかに傾くタテハケ(条線密度10本/cm)の後、布を介した横方向のナデを加え器面を平滑にする。体部外面は、残存部をみると、全面に横方向のハケを施した後、やや不明瞭ながらヨコナデ調整を加えているようである。内面はやや磨滅しているが、口縁部は外面と同様タテナデの後、布を介したヨコナデを加えている。しかし、外面に比べやや雑で、粘土紐の積み上げの痕跡を完全に消しきれていない。頸部内面は、最も磨滅がひどく、調整技法の詳細を知ることはできないが、器面にわずかにヨコハケ痕が観察できる。体部内面には、頸部との境界(屈曲部)から2.0cm以下で横方向のヘラケズリが顕著にみられる。

線刻は、器面の調整が完了した後に、ヘラ状工具で施す。頸部外面の上下に重列する鋸歯文は、線刻の進み方などから判断して、器体を正立させた状態で施しているようである。その順序は、まず両突帯間に鋸歯文の斜辺に相当する直線を通して横方向に連続する「X」字状に施し、その後、上下の文様帯の両側の縁とその中間に横線(単線)を加えて、三角文様を上下に二分割する。三角文様内の平行線は、これらの輪郭線が引かれた後に入れる。体部の線刻は、同心円文を横方向に等間隔(12.5cm)に配した後、その間に上下に反転する「几」字状の文様を充填するようである。同心円文の中心には先の尖った細い円棒状の工具が回転したような断面「V」字形の刺突があることから、二重の円はコンパスの原理で引かれたとみられる。線刻の幅や深さは、施文部位に関係なく同じことから、同一工具を用いて連続的に引かれたと考えられる。なお、鋸歯文が施された頸部外面には、赤色顔料が塗布された痕跡が部分的に残る。

(伊賀高弘)

8号埴輪棺転用の埴輪(図版第37・38・144)

104は、棺本体南側に転用された鱗付普通円筒埴輪である。正円筒形を呈し、最下段を欠損す

る。したがって、6条7段構成をとると思われる。口縁端部外面に粘土紐を付加して突帯状にめぐらすが、他の突帯に比べると突出度も低く、断面形も長方形に近い。突帯は、断面台形を呈する。突帯の間隔は、ややばらつきが認められる(平均値は14.3cmを測るが、最大値と最小値で最大1.4cmの差がある)。スカシ穴は長方形で、鱗に直交する位置に穿孔される。残存部分の関係で2段目にしか確認できないが、類例から1段おきに2つずつ穿孔されていたと考えられる。鱗は、口縁端部を上縁とし、第1突帯を下縁とする範囲に幅約10cmの粘土板が接合される。鱗の接合は、円筒部の器壁に縦方向のヘラキズを1条または2条刻んだ後に行われる。外面の調整は、全体に磨滅ぎみのため判別しにくい、タテハケ調整の痕跡がわずかに認められる。内面の調整も磨滅ぎみであるが、ハケ調整などの痕跡は認められず、ナデ調整で仕上げたと思われる。

107は、南小口部分を覆うために転用された正円筒形の鱗付普通円筒埴輪で、体部下半を欠損し、5条6段が残存する。口縁部は、外方へ強く折り曲げられ、端部は突帯状を呈する。突帯は、断面台形を呈するが、突帯の突出度は低い。突帯の間隔は、最上段が他の段にくらべて著しく狭いほかは、全く等間隔に割り付けられている(平均値17.1cm)。スカシ穴は長方形で、3段目と5段目に認められ、鱗に直交する位置に2つずつ穿孔される。鱗は、口縁からではなく、1条目の突帯から付加されている。鱗は、幅11cm余りを測り、上縁は水平である。外面の調整は、磨滅が著しいが、部分的に粗いタテハケ調整が認められる。これが2次調整かどうかは不明である。内面の調整は、粗いヨコハケ調整を基本とし、部分的にナメハケ調整が認められる。内面の調整に粗密がみられるのは、製作工程の違いによると考えられる。突帯接合時に、内面にユビオサエを加えているため、突帯接合部分のハケ調整の痕跡が消されている。

108は、南側を覆うのに転用された鱗付朝顔形円筒埴輪である。正円筒形を呈すると思われるが、肩部以上と体部下半を欠損し、体部の上半のみ(5条5段分)が残存する。突帯は、最上段が断面正方形であるのに対して、他の突帯は断面台形を呈する。突帯の接合位置を示す沈線が1条施される。突帯の間隔は、最上段の間隔が著しく狭いほかは、ほぼ等間隔に割り付けられている(平均値15.7cm)。鱗は、1条目の突帯から始まるが、大半は欠損しているため、その形状は不明である。なお、幅は約8cmを測る。スカシ穴は長方形で、1段おきに2つずつ鱗に対して直交するように穿孔される。外面の調整は、磨滅ぎみであるが、タテハケ調整(1次調整)が施された後に、部分的にヨコハケ調整が施される。ヨコハケ調整が2次調整にあたるかどうかは不明である。なお、4条目の突帯を境にタテハケ調整の密度が変わり、上半は細かく(6本/cm)、下半は粗い(4本/cm)。作業工程の差を示すものであろう。内面は、ヨコハケ調整が施された後に、ナデ調整で仕上げられる。突帯の剥離か所にも赤色顔料が付着していることから、埴輪棺転用時に顔料を塗布したと考えられる。

9号埴輪棺転用の埴輪(図版第37・143)

105は、棺本体に転用された普通円筒埴輪で、5号埴輪棺に転用された103と同形態の、底径がやや小さくなる正円筒形に近い形状を呈し、4条5段構成をとる。口縁部はゆるやかに外反し、口縁部の内・外面に強いナデ調整が施される。突帯は、すべて剥離しており、突帯の接合位置を

明示する沈線が約2cmの間隔で2条ずつ、4か所に施されている。また、第2段に穿孔されたスカシ穴のすぐ上にも長さ9cmほどの沈線があり、誤って引かれた割り付け線と考えられる。割り付け線から突帯の間隔を復原すると、第2～4段の間隔はほぼ等しい(平均値14.1cm)。スカシ穴は長方形で、第2段と第4段に穿孔される。103と同形態とすれば、3つずつ穿孔されていた可能性が高い。外面の調整は、ヨコハケ調整またはナナメハケ調整が施されており、2次調整は認められない。第4段にみられるハケ原体の幅(6本/cm)は、第3段以下のハケ原体(10本/cm)に比べて粗い。内面の調整も、ヨコハケ調整またはナナメハケ調整を施すが、外面調整と同様、ハケ原体に精粗が認められる(上半の10～11本/cmに対して下半の6～7本/cm)。なお、突帯の剝離痕の上にも赤色顔料が塗布されており、少なくとも埴輪棺に転用された段階で、すでに突帯が剝離していたと考えられる。

106は、棺本体の長側面に置かれた正円筒形に近い形状の普通円筒埴輪である。口縁部はゆるく外反し、端部をややつまみ上げて外傾する面をなす。端部直下の外面には、強いナデ調整による凹線が認められる。突帯は、突出度の高い断面「M」字状を呈する。スカシ穴については不明である。外面の調整は、タテハケ調整が施される。内面の調整は、左上がりのナナメハケ調整が施される。

10号埴輪棺転用の埴輪(図版第40・41・144)

112は、棺本体に転用された正円筒形の鱗付朝顔形円筒埴輪である。口縁部を欠損するが、残存高116.9cmを測る大型品である。体部は6条6段構成をとり、体部最上段から偏球形を呈する肩部を形成する。突帯は、断面台形を呈する。第2～5段の突帯間隔は、ほぼ等間隔に割り付けられ(平均値16.4cm)、突帯の接合位置を明示する方形の刺突が認められた。スカシ穴は、第3段と第5段に長方形ものが、最下段には半円形ものが、それぞれ2つずつ穿孔される。鱗は第1突帯から第6突帯までにみられるものの、大半が欠損している。外面の調整は、磨滅が著しく不明である。内面の調整は、ナデ調整によって仕上げられているようである。

114～116は、北小口の閉塞に使用された鱗の破片である。3点とも鱗の表面に突帯を有する。116は、裏面にも突帯がみられる。タテハケ調整が認められる。

(筒井崇史)

11号埴輪棺転用の埴輪(図版第39・144・145)

109は、「目」字形分割の文様構成をもつ盾形埴輪で、56・59・60～63と同型式である。出土した破片は、上段横棧から外周区の右上にかけての比較的大きな破片である。図の右辺は盾面の側辺にあたり、ゆるやかに内湾する。横断面形は、大きな曲率の円筒部から鱗状の外周区に向かうにつれて、「S」字状に反転して、その外縁部は正面に向かって湾曲している。一方、外周区における縦断面は、横棧上縁線を越えてしばらくは直線状を示すが、上端から約15cmの範囲は正面側に反り返る。こうした断面形は、56と共通する。

外周区と横棧区、そして地板区は、それぞれ接する部分で約0.2cmの段差を作って徐々に低くなる。しかし、最下段の地板区と最上段の外周区の段差は、横棧区に接する部分では0.4cm前後

と大きいのが、横棧から離れるにしたがって小さくなる(段差約0.2cm)。器壁の厚さは、粘土を付加するなどして徐々に厚く作るのではなく、異なった文様区が接する部分で器厚を漸次増して、見かけ上の段差を作っているだけで、全体としては約1.6cmの厚さを保っている。各文様区の段差部分は、ヘラ状工具でその壁面を平滑に成形する。この際、段差の下縁には、工具の先端が当たったために生じたと思われる1条の沈線が残っている。

外周区と横棧区には文様区の縁に縁取り線(外郭線、単線)を入れ、その内部に忍岡系対称文の連続反転図形で充填している。ただ、その文様の配置は、佐紀陵山古墳出土例とまったく同じというわけではなく、単位図形の単単位分がずれている。比較的残りのよい横棧区でみると、線刻は上幅0.2cm・断面「V」字形を呈する。見かけ上の最下段となる地板部には横方向の単線による線刻が1.0～1.6cmの間隔で平行に引いてあり、木目模様を表現している。この地板部にみられる線刻は、横棧区の上縁線に対して平行ではなく、盾の中軸に向かって、山形に傾斜している。

器面の調整は、全体に磨滅しているためわかりにくいのが、横棧区から地板区にかけて広がる黒斑部分は比較的遺存状態がよく、器面が布を介在させたナデによって最終的に仕上げられていることが観察できる。なお、盾面には部分的にベンガラが塗布された痕跡があり、本来は全面に塗られていた可能性がある。

(伊賀高弘)

110は、東側の棺本体に転用された正円筒形に近い形状の普通円筒埴輪である。底径が口径よりもやや大きく、4条5段構成に復原できる。口縁部は強く外反し、端部を丸くおさめる。突帯は断面台形で、最上段の間隔が他の段より著しく狭い。なお、突帯が剥離したか所もあるが、接合位置を示すような割り付け線は確認できなかった。スカシ穴は円形で、第2段と第4段に同じ軸線上に穿孔される。外面の調整は、全体的に磨滅が著しく、最下段でタテハケ調整を確認したのみである。内面の調整も、最下段でやはりタテハケ調整が確認でき、第2段よりも上ではナデ調整が施される。なお、外面に赤色顔料が付着する。

111は、西側の棺本体に転用された鱗付普通円筒埴輪である。口径がわずかに広がるものの正円筒形に近い形状を呈する。体部下半を欠損し、5条5段分が残存する。口縁部は強く外方に屈曲し、断面「L」字形を呈する。口縁端部は、強いナデ調整によって成形された突出度の高い突帯状を呈し、端面がわずかにへこむ。突帯は、剥離が著しいが、断面台形を呈し、突帯の接合位置を明示する方形の刺突がみられる。なお、方形の刺突は、突帯の間隔を一定にそろえるために施されたとする意見もあるが、111では、各段の間隔のばらつきが大きい(最大値と最小値の差が1.3cmを測る)。スカシ穴は、長方形を呈し、1段おきに穿孔される。鱗は、大半が欠損するが、2条目の突帯から始まる特異なもので、瓦谷古墳群ではほかに169がある。他に出土例は知られていない。外面の調整は、タテハケ調整(1次調整)が施された後に、いわゆる「A種」ヨコハケ調整(2次調整)が施される。ただし、ヨコハケ調整が施されない段もみられる。内面の調整は、タテハケまたはヨコハケ調整の後に、部分的にナデ調整が施される。

12号埴輪棺転用の埴輪(図版第40・41・144)

113は、東側の棺本体に転用された鱗付朝顔形円筒埴輪である。肩部以上とおそらく最下段を欠損する。体部は正円筒形を呈し、7条7段分が残存する。突帯は、第7突帯が断面正方形に近く、突出度も低いのに対して、他の突帯は断面台形で、突出度もやや高い。突帯の間隔は、最上段が著しく狭いほかは、ほぼ等間隔に割り付けられている(平均値16.1cm)。鱗は、器壁にわずかに残っている程度であるが、剝離痕からみると、第1突帯から第7突帯まで付加されていたことがわかり、推定長は89cmを測る。スカシ穴は、第3段と第5段に長方形のものが、第2段に円形のものがそれぞれ穿孔され、円形のものも長方形のものとは軸をずらして穿孔される。長方形のスカシ穴が1段おきでない点や、円形のスカシ穴が穿孔されている点に113の特色がある。外面は、磨滅が著しく、タテハケ調整をわずかに確認できるが、2次調整かどうかは不明である。内面も磨滅が著しく、詳細は不明である。

119は、西側の棺本体に転用された鱗付朝顔形円筒埴輪である。頸部以上と体部下半を欠損する。体部は正円筒形を呈し、4条3段が残存する。突帯は、いずれも断面台形を呈するが、最上段の突帯のみ側面が斜め下方を向いている。突帯の間隔は、最上段が著しく狭いほかは、ほぼ等間隔であり(平均値13.0cm)、突帯の間隔は均等に割り付けられていたと考えられる。鱗は、最上段の突帯から始まるが、その大半が欠損する。スカシ穴は長方形で、鱗に対して直交する位置ではなく、若干ずらして穿孔される。外面の調整は磨滅が著しく、不明である。内面の調整は、肩部内面にヨコハケ調整がみられるほかは不明である。部分的に粘土紐の接合痕がみられる。

13号埴輪棺転用の埴輪(図版第41)

117は、棺本体に転用された鱗付普通円筒埴輪である。1段分しか残存しないため、全体の形状は不明であるが、おそらく正円筒形に近い形状を呈すると思われる。口縁部は、外面に粘土を付加して、断面形がほぼ台形の突帯状に仕上げる。突帯は、断面台形を呈する。鱗は、口縁部から始まるが、大半が欠損する。内・外面の調整は磨滅が著しく、不明である。

118は、棺本体に転用された普通円筒埴輪である。最上段の間隔が著しく狭く、正円筒形に近い形状を呈していたと思われる。口縁部は、外方に「L」字状に折り曲げられ、突帯状に仕上げられる。突帯は、幅2.5cm前後・高さ0.8cm前後の非常に偏平な台形を呈する。スカシ穴は確認できなかった。外面の調整は、タテハケ調整またはナナメハケ調整が施されるが、2次調整は施されない。内面の調整は、ヨコハケ調整がかすかに認められる。

14号埴輪棺転用の埴輪(図版第41・145)

120は、棺本体に転用された普通円筒埴輪である。底径がやや小さいものの正円筒形に近い形状を呈する。底径に比べて全体の高さが高く、非常に細長い円筒埴輪で、6条7段分が残存する。突帯は、側面がわずかにくぼむ断面台形を呈し、突出度が非常に高い。突帯の間隔は、最下段を除きほぼ等間隔に割り付けられる(平均値15.6cm)。スカシ穴は、他の例にくらべて幅が狭い長方形のものを第3段～第7段の各段に互いに直交するように穿孔される。外面の調整は磨滅が著しく、1次調整か2次調整かは判断できないが、わずかにヨコハケ調整を認めることができる。内

面の調整は、最下段にタテハケ調整が施されるほかは、全体的にナデ調整が施される。なお、外面にはわずかであるが赤色顔料が付着する。120は、形態・突帯・スカシ穴のいずれをとっても、瓦谷古墳群中に類似した埴輪を見いだすことはできない。むしろ、特製棺の可能性も考えるべきかもしれない。

15号埴輪棺転用の埴輪(図版第44・145)

146は、西側の棺本体に転用された普通円筒埴輪である。瓦谷古墳群で出土した普通円筒埴輪の中では、147とともに最小の部類に属する。正円筒形を呈し、2条3段構成をとる。口縁部は直口縁で、端部はやや丸くおさめる。突帯は断面台形を呈し、割り付け線は認められなかった。スカシ穴は円形で、第2段に穿孔される。外面の調整は、ナナメハケ調整(1次調整)の後に、いわゆる「A種」ヨコハケ(2次調整)が施される。2次調整は、第2段と最上段下半のみに施される。内面の調整は、ナナメハケ調整が施された後に、縦方向のナデ調整が施される。

147は、東側の棺本体に転用された普通円筒埴輪である。逆円錐台形を呈し、2条3段構成をとる。口縁部はいわゆる直口縁で、端部を丸くおさめる。突帯は、断面台形を呈する。スカシ穴は円形で、第2段に穿孔される。外面の調整は、タテハケ調整またはナナメハケ調整(1次調整)が施された後に、146と同様、第2段と最上段下半にのみ、いわゆる「A種」ヨコハケ調整(2次調整)が施される。内面の調整は、ナナメハケ調整が施された後に、縦方向のナデ調整が施される。部分的に粘土紐の接合痕が認められる。

16号埴輪棺転用の埴輪(図版第42・146・149)

121は、南側小口の閉塞に使用された朝顔形円筒埴輪の口縁部である。外面の調整は不明である。口縁部内面は、ヨコハケ調整が施される。122は、北側小口の閉塞に使用された朝顔形円筒埴輪の口縁部である。内・外面とも調整は不明である。123は、枕に転用された壺形埴輪の円筒形基台の破片である。長さ5cmを測る鏢状の突帯を有する。内・外面とも調整は不明である。

124は、南側の棺本体に転用された6条7段構成の普通円筒埴輪で、体部最大径が第2突帯付近にくる正円筒形に近い形状を呈する。口縁部はわずかに外反し、端部を丸くおさめる。突帯は断面台形を呈し、その間隔は第2段～第6段までほぼ等間隔に割り付けられている(平均値12.2cm)。スカシ穴は円形で、第2段～第6段の各段に交互に直交するように穿孔される。内・外面ともヨコハケ調整が施される。

125は、北側の棺本体に転用された正円筒形の普通円筒埴輪で、体部下半を打ち欠いており、4条5段分しか残存しない。口縁部外面には幅3.0cmほどの突帯を付加している。このような突帯を付加するのは、125だけである。突帯は、他の例にくらべてやや偏平な断面台形をし、その間隔は最上段を除いて、ほぼ等間隔に割り付けられている(平均値13.4cm)。スカシ穴は円形で、2段目と3段目に認められ、互いに直交する。外面の調整は、タテハケ調整(1次調整)が施された後に、いわゆる「A種」ヨコハケ調整(2次調整)が施される。内面の調整にはヨコハケ調整が施される。部分的に粘土紐の接合痕が認められる。なお、最上段外面に線刻によって三角形を描き、その内部を縦線で充填したヘラ記号がある。

17号埴輪棺転用の埴輪(図版第44)

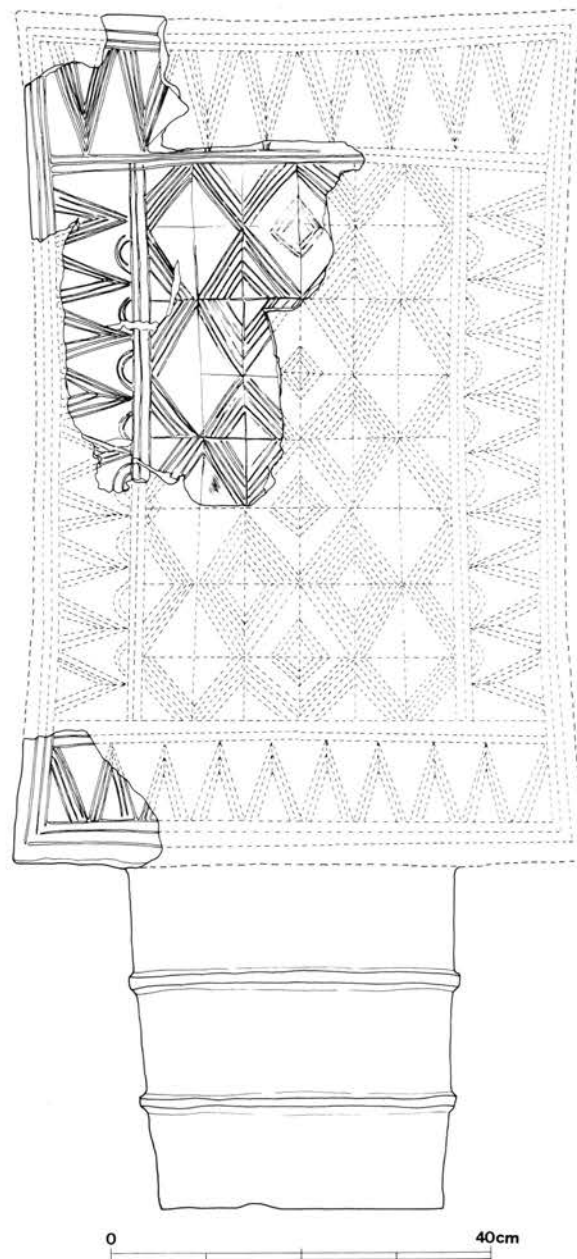
148は、西側の棺本体に転用された正円筒形の普通円筒埴輪で、体部下半を打ち欠き、2条3段分しか残存しない。口縁部は強く外方に屈曲し、断面「L」字形を呈する。口縁部内面に強いナデ調整が施される。突帯は断面台形で、最上段と2段目の間隔がほぼ等しい(平均値12.4cm)。スカシ穴は円形で、3段目に穿孔される。外面の調整は、タテハケまたはナナメハケ調整(1次調整)が施された後に、いわゆる「A種」ヨコハケ調整(2次調整)を施す。なお、3段目にハケ原体の静止痕と思われる条痕がみられる。最上段・2段目では粗いハケ原体(7~8本/cm)を使用するのに対して、3段目では細かいハケ原体(10~11本/cm)が使用され、2条目の突帯を境にハケ原体が変わる。これは、作業工程の違いなどを示すと思われる。内面の調整は、ナナメハケ調整を施した後に、ナデ調整を施す。

149は、東側の棺本体に転用された逆円錐台形の普通円筒埴輪で、148と同様、体部下半を打ち欠いているため2条3段分しか残存しない。口縁部は、端部に施されている強いナデ調整により、外反ぎみの直口縁を呈する。突帯は、断面台形を呈する。スカシ穴は確認できなかった。外面の調整は、タテハケ調整(1次調整)が施された後に、いわゆる「A種」ヨコハケ調整(2次調整)が施される。内面の調整は、ヨコハケ調整またはナナメハケ調整が施された後に、縦方向のナデ調整が施される。なお、内・外面とも粗いハケ原体(3~4本/cm)が使用されている。部分的に粘土紐の接合痕を確認できる。

18号埴輪棺転用の埴輪(図版第42・43・146・147)

126は、東側小口の閉塞に転用された朝顔形円筒埴輪の口縁部で、外面の調整は不明である。頸部内面には縦方向のナデ調整が認められる。(筒井崇史)

127・128は、棺本体に転用されていた盾形埴輪である。両資料は、同一個体であるが接合しない。127は、盾面を「Ⅱ」字形に区画して、線刻による文様が施さ



第45図 盾形埴輪(鋸齒文タイプ)復原図

れる。外区に内向する鋸歯文を描き、内区を菱形文で充填する。128は、盾形埴輪の円筒部で5条5段分が残存する。外面の調整は、最下段・第2段に縦方向のナデ調整が施されるのに対して、第3段以上にはタテハケ調整が施される。内面には、ほぼ縦方向のナデ調整が施される。

外区左辺の鋸歯文は、3または4本のほぼ平行する斜めの線刻で表現され、頂点の交点では上側の斜線を後から施す。各文様単位は、幅6cm前後・長さ8cm前後を測る。外区上辺の鋸歯文は、4、5本のほぼ平行する斜めの線刻で表現され、頂点の交点では左側の斜線が後から行われている。各文様単位は、幅7cm前後・長さ11cm前後を測り、側辺よりやや大ぶりである。盾面の縁は、3本の平行する線刻で囲む。内区と外区を限る3本の線刻は、上辺の線刻が側辺の線刻の後に施される。側辺の鋸歯文の頂点間には半円形の二重線が施文されるが、上辺には見られない。

内区は、縦・横のやや大雑把な直線によって長方形を単位とする割り付けが行われた後、6ないし7本の平行する斜めの線刻によって菱形文が構成される。盾面の内面は、不整方向のナデ調整を施す。盾面内区中央上端の剝離面には、外区上辺部を接合するための波板状の接合面が観察できた。盾面の一部に黒斑が見られる。

129～143は、いずれも盾形埴輪の盾面の破片である。133～136は内区の破片、他は外区の破片である。140は、盾面の四隅の一端の破片である。鋸歯文の配列が127の上辺部と異なり、隅に鋸歯文の半分が施文されている。127とは別個体とも考えられるが、他の部分の施文状況が127と似ていることから、復原にあたっては盾面の下辺の文様に取り入れた。142は、円筒部と盾面の接合部を含む盾面外区の破片である。鋸歯文の先端間に半円形の二重線が残る。次に述べる復原にあたっては、上辺・下辺とも半円形の二重線がなかったと推定しているため、別個体の可能性が考えられ、復原には取り入れなかった。

127・128・140を参考に、鋸歯文形盾形埴輪の復原を試みた。127が盾面のほぼ1/4が残存していると判断し、基本的に文様を左右、上下に反転して復原を行った。また、軸部の円筒部との接合点はないが、奈良県室宮山古墳出土M号盾形埴輪^(注46)を参考にして、盾面の下辺が、円筒部の第3突帯に一致すると仮定して、盾面と円筒部を接合復原した。

復原した盾形埴輪は、復原高127cm前後を測り、盾面は四辺の中央がやや内側にゆるやかな円弧を描く長方形で、復原長23cm前後・復原幅60cm前後を測る。外区上辺には鋸歯文が8単位、外区下辺には9単位分の鋸歯文が連続する。外区側辺には9単位の鋸歯文と8単位の半円形の二重線刻が連続する。内区中央部には、小型の鋸歯文を縦に配し、左右に大型の鋸歯文が連続する。盾面の形状は、内区付近が円筒部の外面にあたるため、ゆるやかに膨らみ、盾面の横断面は楕円形に近い曲線を描く。外区付近は円筒部との接合部から離れ、接線状に左右にのび、四隅は前に顕著には張り出さない。外区に鋸歯文と半円形の円弧を描く例として、奈良県佐味田石塚古墳出土盾形埴輪^(注47)、奈良県室宮山古墳出土盾形埴輪、大阪府茶山1号墳出土盾形埴輪^(注48)などが知られる。

(有井広幸)

19号埴輪棺転用の埴輪(図版第44・45)

150・151は、棺本体に転用された正円筒形の普通円筒埴輪である。復原口径は38.2cmを測るが、

互いに接合しない2個体からなる。口縁部は、外方に折り曲げられ、断面「L」字状を呈する。口縁端部は、強いナデ調整により面をなす。突帯は、6条分が確認でき、1条目の突帯はやや小さな断面三角形に近い形状を呈し、2条目以下の突帯は断面台形を呈する。突帯の間隔は、口縁部の破片をみると、最上段の間隔が著しく狭い。スカシ穴は長方形で、2段目と4段目に認められるが、4段目はスカシ穴の上辺がわずかに確認できる程度である。外面の調整は、タテハケ調整(1次調整)が施された後に、いわゆる「A種」ヨコハケ調整(2次調整)が施されるが、2次調整の及ぶ範囲はごくわずかである。内面の調整は、粗いナナメハケ調整、またはヨコハケ調整が施された後に、ナデ調整で仕上げられる。最上段外面に2本の弧線を谷状に線刻したヘラ記号がある。なお、外面のほぼ全面と内面の一部に赤色顔料が塗布される。

152は、棺本体に転用された正円筒形の鱗付普通円筒埴輪で、体部上半(2条3段分)のみ残存する。口縁部は、外方に強く折り曲げられ、断面「L」字状を呈する。口縁部端面は、強いナデによりやや凹面状になる。突帯は、側面がややくぼむ断面台形を呈し、突出度はやや高い。突帯の間隔は、最上段の間隔が2段目の約半分しかない。スカシ穴は確認できなかった。鱗は、口縁部から始まるが、大半が欠損し形状は不明である。鱗の接合は、器壁に縦方向のヘラキズをつけて行われている。外面には、タテハケ調整(1次調整)が施された後に、ナデ調整で消すようである(2次調整か)。内面には、ナデ調整が施され、突帯を接合する際のユビオサエ痕が認められる。なお、全面に赤色顔料が塗布される。

144は、棺本体に転用された朝顔形円筒埴輪の口縁部である。

20号埴輪棺転用の埴輪(図版第47・147)

159は、棺本体に転用された普通円筒埴輪である。形態は、口縁部・底部ともにすぼまりぎみの正円筒形に近い形状で、4条5段構成をとる。体部最大径(31.4cm)は、第1突帯付近にくる。口縁部は、第4突帯よりわずかにすぼまった後、再び直口する。口縁端部はわずかに外傾する面をなす。突帯は断面台形で、その間隔にはばらつきがみられる(最大値と最小値の差が約2.0cmを測る)。スカシ穴は円形で、第4段に認められる。外面の調整は、磨滅が著しいが、タテハケ調整ないしナナメハケ調整(1次調整)が施された後に、ヨコハケ調整(2次調整)が施される。ハケ原体は6本/cmを数える。内面の調整は磨滅が著しく、不明である。

21号埴輪棺転用の埴輪(図版第47・147)

160は、棺本体に転用された正円筒形の鱗付普通円筒埴輪で、3条4段構成をとる。口縁部は、口縁外面に粘土紐を付加して突帯状にめぐらす。突帯は断面台形を呈し、その間隔は第2段から最上段まで等間隔に割り付けられており(平均値14.5cm)、最下段は他の段の約2倍の長さ(28.4cm)にそろえている。スカシ穴は半円形で、最下段に認められるが、鱗に対して直交するのではなく、若干ずらして穿孔される。また、第3段にもスカシ穴(おそらく長方形)があった可能性が高い。鱗は、口縁端部から第1突帯に至るが、大半が欠損する。鱗の接合にあたっては、器壁に縦方向のヘラキズを2条以上刻んでいる。外面の調整は、磨滅ぎみであるが、タテハケ調整(1次調整)が施された後に、ナデ調整が全面的に施され、一部にいわゆる「A種」ヨコハケ調整

(2次調整)が施される。内面の調整は、底部に横方向のヘラケズリ調整が認められるほか、ナデ調整が施される。部分的に粘土紐の接合痕が認められる。以上の特徴から、160は、5号埴輪棺に転用された99と同型式と考えられる。

161は、北側小口の閉塞に転用された朝顔形円筒埴輪の口縁部で、内・外面とも調整は不明。

22号埴輪棺転用の埴輪(図版第45・46・148・149)

153は、東側の棺本体に転用された逆円錐台形の普通円筒埴輪で、4条5段構成をとる。口縁部は、端部のみがわずかに外反し、口縁端部は強いナデにより面をなす。突帯は断面台形で、突帯の間隔にはややばらつきがみられる(最大値と最小値の差が約1.5cm)。スカシ穴は円形で、第2段と第4段に2つずつ同じ軸線上に穿孔される。外面には、タテハケ調整(1次調整)が施された後に、いわゆる「A種」ヨコハケ調整(2次調整)を施す。第4段にハケ原体の静止痕と思われる条痕がみられる。内面には、タテハケまたはナメハケ調整が施される。最下段内面に縦方向の工具痕が認められる。なお、最上段外面に2本の弧線を山形に線刻したヘラ記号がある。

154は、西側の棺本体転用の普通円筒埴輪である。153同様、逆円錐台形状で4条5段構成をとる。口縁部は端部のみ外反させる。突帯は断面台形で、間隔にややばらつきがみられる(最大値と最小値の差が約1.9cm)。スカシ穴は円形で、第2・4段に2つずつ同軸線上に穿孔する。外面には、やや磨減ぎみながら、全面にいわゆる「A種」ヨコハケ調整が認められ、ハケ原体の幅は狭い。このヨコハケ調整は、2次調整と思われるが1次調整は不明である。内面には、ヨコハケ調整が施された後に、ナデ調整が施される。なお、最上段外面に2本の直線を鋭角に組み合わせて線刻したヘラ記号がある。153と154は、形態や大きさ、スカシ孔、調整といった共通性が高い。特に、最下段の長さが同じになるように意識しているようである。

155は、東側小口部分と、東側棺本体に転用された朝顔形円筒埴輪である。逆円錐台形を呈する体部に偏球形状の肩部と口縁部がつく。体部は5条5段構成で、突帯は断面台形を呈する。突帯の間隔は、最下段を除きほぼ等間隔に割り付けられている(平均値13.7cm)。スカシ穴は円形で、第3段と第5段に2つずつ同じ軸線上に穿孔される。外面の調整は、体部・肩部についてはタテハケ調整(1次調整)が施された後に、いわゆる「A種」ヨコハケ調整(2次調整)が施される。口縁部にはタテハケ調整が施される。内面の調整は、おおよそヨコハケ調整を主体とする。また、肩部内面にナデ調整がみられ、第1突帯の内面にヘラ状工具による圧痕が認められる。

156～158は、東側小口に転用された朝顔形円筒埴輪である。口縁部・肩部・体部下半という互いに接合しない3個体からなる。朝顔形円筒埴輪155とは、口縁部の形状、体部の形態、スカシ穴の形状・穿孔位置、突帯の本数といった点で共通した形態を呈していたと思われる。156～158は、復原高約103cmを測り、155よりもやや大型の朝顔形円筒埴輪である。突帯は、断面台形を呈する。体部外面には、タテハケ調整(1次調整)が施された後に、いわゆる「A種」ヨコハケ調整(2次調整)が施される。肩部にヨコハケ調整、口縁部にタテハケ調整が施される。内面には、体部・肩部ともヨコハケ調整が施された後に、縦方向のナデ調整が施される。部分的に粘土紐の接合痕もみられる。口縁部には、ヨコハケ調整が施される。

23号埴輪棺転用の埴輪(図版第47・147)

162は、棺本体に転用された逆円錐台形の普通円筒埴輪で、4条5段構成をとる。口縁部は、やや外反ぎみながらも直口し、口縁端部は強いナデ調整によってやや内傾する面をなす。突帯は断面台形で、突帯の接合位置を示す沈線が1条めぐっている。突帯の間隔は最下段を除いて、ほぼ等間隔に割り付けられている(平均値11.7cm)。スカシ穴は長方形で、第3段に2つ穿孔される。外面の調整は、タテハケ調整(1次調整)が施された後に、いわゆる「A種」ヨコハケ調整(2次調整)が施される。内面には、口縁部内面にヨコハケ調整が施され、体部下半にナナメハケ調整ないしタテハケ調整が施される。部分的に粘土紐の接合痕も観察できる。

163・164は、南側小口の閉塞に使用されていた土師器壺である。164は、163よりも一回り大きく、口縁部を欠損するが、ほぼ同形態であったと思われる。全体の形状がわかる163をみると、ほぼ球形を呈する体部に、やや外反気味の直線的な口縁部がつく。口縁端部は内面に肥厚し、端面は水平となる。外面には、肩部に横方向のハケ調整がみられる。内面は、体部下半に縦方向のヘラケズリ調整、体部上半に横方向のヘラケズリ調整が施される。ヘラケズリ調整は頸部まで及ばない。これらの特徴から、布留式中段階(Ⅱ式)に位置づけられる。

(筒井崇史)

24号埴輪棺転用の埴輪(図版第27・48～50・150)

35は、蓋形埴輪の立ち飾りの破片である。縦方向の並列五線帯の互いに接する側に複線縁が2帯描かれている。器面の遺存状態は悪く、図示した線刻もかすかに認められる程度である。表面の右端の縦線は、実測図では単線で表現しているが、すぐ左側に平行する線刻のわずかな痕跡が認められ、五線帯の縁であることが判明した。

(伊賀高弘)

165は、西側の棺本体に転用された盾形埴輪である。大きさは、高さ142cm・口縁径65cm・底部径42cm・盾面長86cm・同上辺幅推定65cm・同下辺幅推定60cmである。口縁部外面に、幅約3cmの偏平な突帯が貼り付けられる。円筒部には突帯が9条めぐり、突帯は断面台形を呈する。円形のスカシ穴は、第3・5・8段に穿孔される。第3段のスカシ穴は、正面に穿孔されるが、第5・8段のスカシ穴は、直交する方向に穿孔される。盾面とその反対側に黒斑が広がる。盾面には線刻による装飾はなく、円筒部の突帯と同じ位置に突帯が5本接合され、6区画に等分する。上から2～4区画にわたって、中央に長方形の窪みを表現する。盾面の左右端は、円筒部が作られた後に、追加形成され、盾面に接合痕が縦方向に観察できるとともに、接合部付近から突帯が太くなる。外面には、タテハケ調整の後に、ヨコハケ調整を施す。内面は、口縁付近ではヨコハケ調整、下に向かって左上がりのナナメハケ調整となり、中央付近から下ではタテハケ調整となる。中央部より上では部分的に粘土紐の接合痕が観察できる。

166・167は蓋形埴輪の笠部である。166は、西小口に転用されていたもので、軸受け部と円筒形基台を欠損する。笠部外面の中位付近に偏平な突帯がめぐり、突帯の位置は、円筒形基台と笠部の接合点である。外面の調整は、わずかにヨコハケ調整が確認できる程度である。内面の調整にも、ヨコハケ調整が施される。また、整形時のユビオサエ痕がみられる。167は、東小口に転

用されており、笠部中位に偏平な突帯がめぐる。突帯の位置は、円筒形基台と笠部の接合点に相当する。内・外面とも調整は不明である。

(有井広幸)

168は、東側の棺本体に転用された普通円筒埴輪である。形態は、最下段から上段に向かって体部径が大きくなる傾向が読みとれるため、口径が底径を上回る逆円錐台形を呈すると思われる。突帯は断面台形で、突出度はやや高い。突帯の接合位置を明示する沈線が1条めぐる。スカシ穴は円形で、第2段と第4段に直交するように穿孔される。外面の調整は、タテハケ調整(1次調整)が施された後に、ヨコハケ調整(2次調整)が施される。磨滅が著しいが、いわゆる「A種」ヨコハケ調整と思われる。内面の調整は、磨滅が著しく不明である。なお、底部付近にユビオサエ痕が確認できるほか、粘土紐の接合痕もみられる。図示されていないが、第4段外面に弧状の二重線があり、ヘラ記号と推定される。

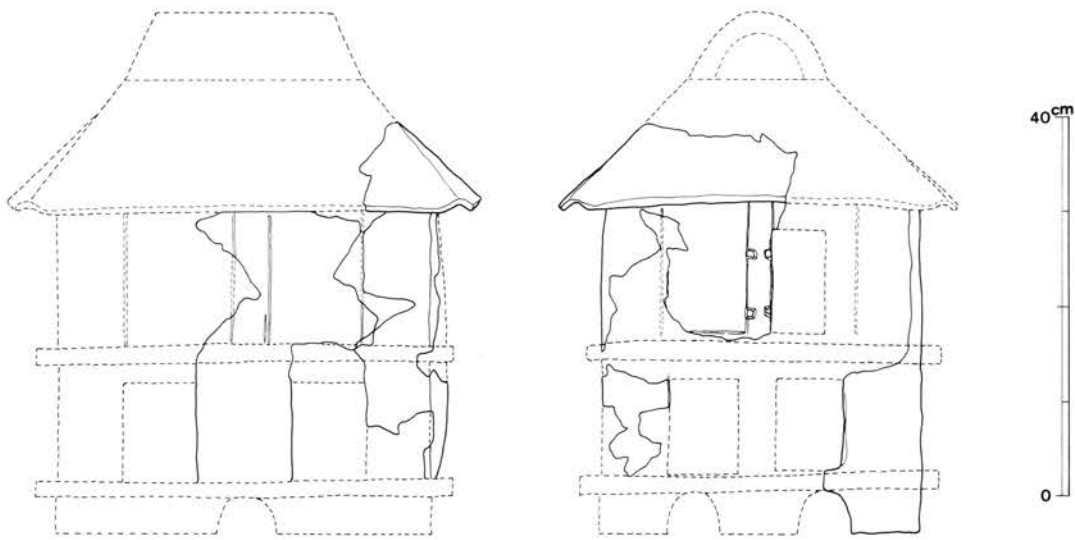
169は、棺本体西側に転用された正円筒形の鱗付普通円筒埴輪で、体部下半を欠損するので、4条4段しか残存しない。また、破片の一部が、18号埴輪棺でも見ついている。口縁部は外方に強く屈曲しており、口縁直下に強いナデ調整が施される。口縁端部は、強いナデ調整によって面をなす。突帯は断面台形で、突帯の間隔は、3・4段目がほぼ同じ間隔である(平均値16.1cm)のに対して、1・2段目がほぼ一致した数値(平均値11.7cm)を示す。スカシ穴は確認できなかった。鱗は口縁ではなく、2条目の突帯から始まる特異なもので、大半が欠損する。外面は、タテハケ調整(1次調整)が施された後に、ヨコハケ調整(2次調整)が施される。磨滅が著しいが、ハケ原体の幅は9~10本/cmを数える。内面にはヨコハケ調整を施した後に、ナデ調整が施される。内面に粘土紐の接合痕がわずかに認められる。

(筒井崇史)

171~178は、24号埴輪棺から出土した家形埴輪の破片で、高床式入母屋(寄せ棟)造りの家形埴輪1個体分である。屋根の頂部付近の破片を欠くが、壁面2隅が確認できる。171は、軒先から壁の下部にかけての破片である。妻側と考えられる面の上層部分には一辺約1cm方形の窪みが4か所二対施す。その右側には方形の開口部を設けている。この4か所の窪みは、扉の把手を表現していると考えられる。上層の壁部分には、縦方向の浅い沈線が2面とも各3条確認できる。壁の外面はタテハケを多用する。下層には、妻・平とも等間隔の開口部を設けており、2間×2間の規模であったと想定している。開口部の規模は、高さ約10.5cm・幅約8cmを測る。上層と下層の間及び裾付近には突帯がめぐっていたようであるが、その形状は該当する破片がなく不明である。172の裾部分の突帯下部の観察から、四隅の部分には壁から斜めに張り出した支え状の構造があったと推定している。全体高は不明で、壁の高さは推定約38cmを測る。色調は明黄褐色で、焼成は軟質、胎土は1mmほどの砂粒を多く含む。

25号埴輪棺転用の埴輪(図版第49)

170は、25号埴輪棺の内部に散在した蓋形埴輪である。円筒形基台上端から笠部上半は連続的に製作し、直線的に外下方にのびる笠下半(笠縁)部は後から付加する(笠部分割成形)。笠部端部



第46図 24号埴輪棺出土家形埴輪復原図

はやや反りぎみになる。笠部中位突帯は、笠部と基台の接合部付近のやや上側の笠部外面に貼り付けられている。笠部中位突帯はやや低平なもの(上幅1.1cm・高さ0.5cm)で、断面形は台形である。笠部外面は磨滅し、調整は不明である。基台内面にはナナメハケ調整が残る。基台と笠部の接合部付近の内面にはユビオサエ痕が残り、さらに上面は指ナデが上方に向かって行われている。

26号埴輪棺の埴輪(図版第51・151)

26号埴輪棺の埴輪は、いずれも棺専用として特製された埴輪である。180・181は、閉塞用の蓋である。179・182は、棺本体に使用された埴輪である。

180は、北小口の閉塞に用いられた鉢形状の製品で、軟質な焼成のため器壁の磨滅が著しい。内面にヨコハケ調整が若干残るが、外面の調整は不明である。181と同様の形態であることから、内・外面ともナナメハケ調整がていねいに行われていたと考えられる。全体の約1/2が残り、口縁端部に突带状の段がある。口縁付近で端部がやや内傾する。口縁部径61.2cm・高さ19.2cmを測り、181よりやや口径が大きい。181は、南小口の閉塞に用いられた鉢形状の製品である。180と同様の作りで、内外面ともナナメハケ調整がよく残る。口縁部径51.6cm・高さ18.1cmを測る。

179は、26号埴輪棺南側の棺本体使用の8条9段構成をとる円筒埴輪で、口径・底径がほぼ同じ正円筒形で、突帯はやや偏平な台形を呈する。スカシ穴は、第5段に円形のもの穿孔される。軟質の焼成で、器壁の磨滅が著しいが、外面にはヨコハケが上部付近で散見でき、内面には突帯の貼り付け付近にユビオサエ痕が残る。仕上げに中央付近はタテハケ調整、口縁付近はヨコハケ調整を行ったようである。高さ110.4cm・底部口径48.8cm・口縁径50.4cmを測る。

182は、26号埴輪棺の北側の棺本体に使用された5条6段構成をとる円筒埴輪で、正円筒形に近い形状を呈する。突帯の断面形は、やや偏平な台形を呈する。スカシ穴は、穿孔されていなかったようである。外面がタテハケ調整の後、断続的なヨコハケ調整を行う。第5突帯は、他に比べ突帯の突出が高く(高さ2.6cm)、受け状の突帯となっている。内面はていねいなナナメハケ調

整を行い、最下段付近にはユビオサエ痕が多数残る。また、受け状突帯の貼り付く最上段以上にはハケメの後に指オサエの痕跡が多数残る。高さ68.8cm・底部口径50.4cm・口縁径44.0cmを測る。突帯の間隔は、179と同様に11cm前後を測る。

(2) 古墳時代遺構出土の土器(第47図、図版第152)

古墳時代の遺構から出土した土器類は少量である。方墳などの周溝から出土した土器について若干の説明を加える。

183～186・190～192は、5号墳の周溝から出土した土師器・須恵器である。

183・184は、高杯杯部の破片で、色調は暗赤褐色、胎土は緻密である。内・外面はナナメハケの後でいねいなナデ調整で仕上げている。185は、高杯脚部の破片で、183と同一個体の可能性がある。外面は、ヘラによるいねいなタテナデ調整を施し、さらにヨコナデで仕上げている。頂部には杯部との接合のための放射状の起伏を付けている。186は、二重口縁壺の口縁から肩部にかけての破片である。口縁端部は、やや外反し口縁部中位に明瞭な段を付けている。肩部外面はタテハケ調整、内面は頸部との接合部分にユビオサエの後、横方向のヘラケズリを行っている。明黄灰色を呈し、胎土は良好、焼成はやや軟質である。

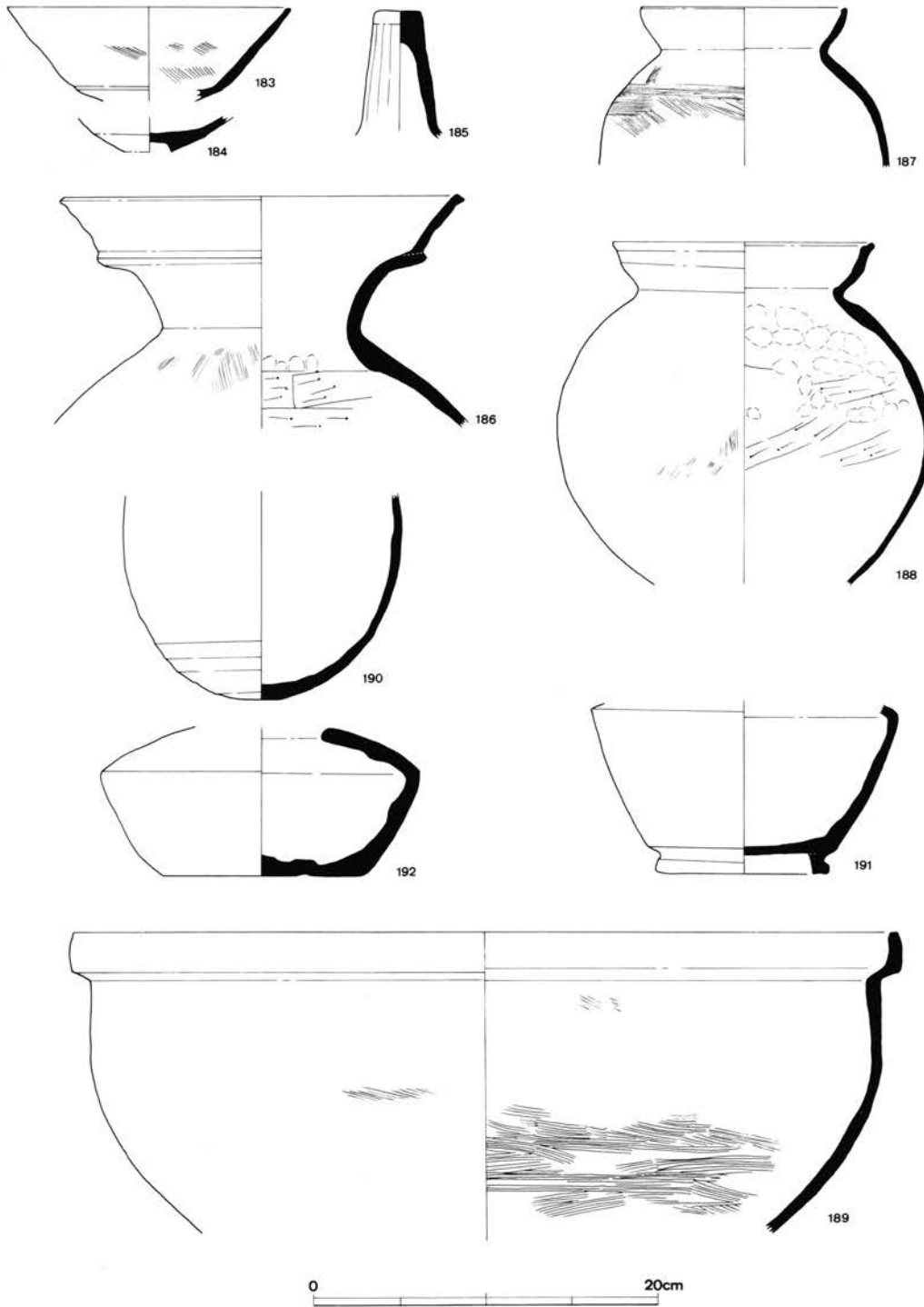
190～192は、5号墳周溝の上層で出土した土器である。190は、壺の体部から底部にかけての破片で、底部はほぼ球形に近い。外面底部付近にヘラケズリを施す。191は、長頸壺の体部以下の破片で、高台部分はやや外側に張り出す。一部に自然釉がかかる。192は、長頸壺の頸部から上を欠く破片である。底部には高台はつかず、粗いナデ調整を行う。体部から肩部はナデ調整を行う。肩部全面に自然釉が付着する。いずれも胎土は良質で堅く焼けている。奈良時代前半頃のものと考えられる。

187は、6号墳の周溝内から出土した土師器甕である。完形に近い状態で出土したが、非常にもろいため、体部以下は復原できなかった。口縁端部はやや丸く仕上げ、口縁はゆるやかに内側に立ち上がる。肩部外面は、ナナメハケの後にヨコハケ調整を行い、内面はヘラケズリの痕跡がわずかに残る。明黄褐色を呈し、焼成は軟質である。古墳時代中期前半頃と考えられる。

188・189は、S X 03出土の土師質の鉢状土器と土師器甕である。189は、破片の状態では188の蓋をしていた鉢状土器である。口縁部は、「L」字状の受け口になっており、復原口径は約48.5cmを測る。外面は、ナナメハケ調整を行っていた痕跡がある。内面は、ヨコハケ調整を行っている。軟質の焼成で、外面の磨滅が著しい。色調は、ほとんどの部分が淡赤褐色で、底部に近い部分は胎土が違い淡黄褐色を呈する。同様の色調・胎土の変化は16号埴輪棺に使われていた普通円筒埴輪(124)がある。こうした胎土の違いに目的があったのか、単に製作過程での問題であったのかは不明であるが、この土器と124の埴輪が同一作業工程内で製作された可能性は指摘できよう。また、埴輪特製棺の蓋として製作された可能性もある。

188は、ほぼ完形で出土したが、器壁が薄く、特に底部の復原が困難であったため、図面ではその部分を省いている。口縁端部は平らな面を持ち、口縁はゆるやかな丸味を持って内側に立ち

上がる。頸部から下は、球形に近い形状である。外面は磨滅が著しいが、ハケメ調整の痕跡がある。内面は、肩付近にユビオサエ痕が著しく、体部以下はヘラケズリを行っている。焼成は軟質で、色調は淡黄褐色を呈し、体部外面の一部に黒斑が付着する。胎土には径2mm以下の砂粒が多数含まれる。古墳時代中期前半頃のものと考えられる。 (有井広幸)



第47図 古墳時代遺物実測図
183~186・190・191. 5号墳周溝 187. 6号墳周溝 188・189. S X 03

第4章 古墳時代以外の遺構・遺物

第1節 古墳時代以前の遺構・遺物

1. 縄文時代の土坑(図版第52)

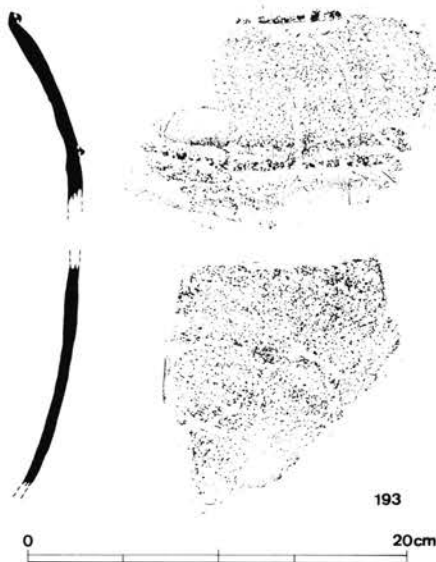
古墳造営前の遺構には、縄文時代の土坑SK01・SX01がある。

SK01 7号墳の北東約7mに位置し、全長約2.2m・幅約1.0m・深さ約0.6mを測る土坑である。平面形は長楕円形を呈し、断面形は逆台形で、底部はほぼ水平である。土坑の長軸方向は、N-52°-Eである。埋土は、にぶい黄褐色細砂質土・粘質土で、サヌカイト製の剥片が1点出土した。北東側を時期不明のピットが切っている。

SX01 SK01の南約2mに位置する直径約0.5m・深さ約0.15mの円形の土坑である。埋土は、にぶい黄褐色細砂質土で、中央から縄文時代晩期の突帯文系の深鉢片が重なり合って出土した。遺構の残りは悪く、土器がどのように置かれていたかは判断できなかったが、出土土器が土器棺として使用されている例が多いことから、土器棺墓と^(注49)考えられる。

2. 縄文時代の遺物

土器(第48図、図版第153) 193は、SX01から出土した突帯文深鉢の破片である。器高・口径は復原できなかった。口縁部と肩部に1条ずつ突帯を貼り付ける。器壁は薄く、口縁部は内傾し、肩部付近で最大径になると思われ、全体に断面はゆるやかな曲線を描く。突帯は、小さく摘んで貼り付けており、剥落のためわかりにくい^(注49)が刻み目が確認できる。器壁は、外面頸部にナデ調整され、体部及び内面は剥落のため調整不明である。色調は暗茶褐色で、径1~2mmの砂粒を多く含み、焼成はやや軟質である。縄文時代晩期の長原式土器の範疇に入ると考えられる。



第48図 縄文時代遺物実測図

石製品(図版第57・153) サヌカイト製の石器類は、4を除いて、包含層ないし時期の異なる遺構から出土している。掲載した以外にチップが数点あり、出土地点は、4号墳以東の調査地東側北部付近に集中する。ここでは、サヌカイト製石器類を一括して縄文時代の遺物として扱う。

1は、SK07から出土したサヌカイト製剥片である。全長3.9cm・最大幅4.9cmで、図面上で

の剥片下部は折れており、風化が進んだ自然面が一部に残る。2は、19号埴輪棺から出土したサヌカイト製搔器である。全長4.2cm・最大幅5.8cmのやや幅広の剥片である。全体に風化が進み、両面に波板状の細かい段差が現われており、灰色を呈する。主要剥離面側下部に微調整を行っている。3は、6号墳の周溝内から出土したサヌカイト製石鏃である。全体に灰白色になっており、風化がかなり進んでいるため、細かい調整はほとんど観察できない。全長2.1cm・幅1.6cmを測る。4は、一部に自然面を残す大型のサヌカイト製剥片である。周囲に大きめの剥離面が観察できるが、細かい調整は行われておらず、使用痕跡も観察できない。全長9.8cm・最大幅8.5cm、厚みは最大4.5cmを測る。5は、包含層から出土したサヌカイト製剥片である。風化が進んだ自然面が2か所残り、母岩の表面に近い剥片である。6は、包含層から出土したサヌカイト製の錐状石器と考えられる。図面下部の部分が欠損している。剥離面の片面に調整を行っている。残存長3.2cm・最大幅3.2cmを測る。7は、包含層から出土した一部に自然面の残るサヌカイト製剥片である。全長5.0cm・最大幅3.1cmを測る。

第2節 古墳時代以降の遺構・遺物

1. 奈良時代の遺構・遺物

(1) 奈良時代の遺構(図版第9・10・52～54・112～116)

掘立柱建物跡 掘立柱建物跡は、2間×2間の総柱建物跡(SB01)1棟と、2間×3間(SB03)、2間×4間(SB02)の各1棟がある。掘立柱建物跡は、調査地東側にまとまっており、その北側には、施設としてはまとまらなかったが、多数のピットを検出している。各建物跡の時期は、SB01は付近から出土した須恵器片から、奈良時代の倉庫と考えられる。SB02・03は決め手になる遺物がなく、時期不明である。なお、ピット群は、東側にあるSD03から、16世紀後半から17世紀始めの羽釜片などが集中して出土していることから、この時期になる可能性がある。

SB01 この建物跡は、隅丸方形か円形のピットから構成され、南北2間(約4m)・東西2間(約3.3m)を測る総柱の建物跡である。南北の柱間は、ほぼ等間隔であるが、東西の柱間は、東側が約1.8mに対し、西は約1.5mと狭い。ピットの規模は、一辺0.5～0.7m・深さ約0.3～0.4mを測り、柱痕跡は径約0.3mを測る。小規模な倉庫であったと考えられる。

SB02 この建物跡は、不ぞろいな円形のピットから構成され、南北4間(約6.9m)・東西2間(約4.8m)を測る建物跡である。棟筋に当たる南北方向のピット列は規模が小さいため、倉庫とは考えられない。南北の柱間は、南側2間がやや広くて約1.8mを測り、北側2間は約1.65mを測る。東西の柱間は、約2.4m等間隔である。ピットの規模は、径0.25～0.7m・深さ0.1～0.3mを測り、南側ほど浅くなり、削平の影響が顕著である。

SB03 この建物跡は、円形か隅丸方形のピットから構成され、南北3間(約4.6m)・東西2間(約3.2m)を測る建物跡である。各柱間は不ぞろいであるが、南北の柱間の南端1間がやや狭く約1.2mを測り、他は約1.6m前後である。ピットの規模は、径0.5～0.6m・深さ0.2～0.3mと浅い。7号墳が削平された後に、建てられている。

土坑(図版第52～54・56・112・114～116)

S X 04 7号墳の北約1mに位置し、全長約1.65m・幅約0.65m・深さ約0.2mの規模の土坑である。平面形は隅丸長方形で、断面形は逆台形を呈する。底部は船底形に似る。長軸方向は、N-28°-Eである。埋土は、上層が暗黄褐色細砂質土、下層が細礫の混じるにぶい黄褐色細砂質土である。遺物は、上層北端から土師器皿が1点(197)、それに重なって鉄釘が1点(RM-143)出土した。時期は奈良時代前半頃であろう。

S X 05 S B 86の南約1mに位置し、全長約1.9m・幅約0.6m・深さ約0.4mの規模を測る墓壙である。平面形は長方形で、四方の壁はほぼ垂直に立ち上がる。長軸方向は、N-78°-Eである。底部は東側が約5cm高い。土坑の幅は東側がやや広く、底もやや高くなることから東頭位と考えられる。埋土は、上層が礫の少量混じるにぶい灰黄色細砂質土、下層が黄褐色粘質土である。遺物は、下層から土師器小型壺が5点出土した(198～202)。墓壙の形状から推定すると、小型壺は、西側の足元付近からの出土点数が多く、胸部付近からも1点出土している。時期は、奈良時代前半頃であろう。

S X 06 4号墳の東約3mに位置し、長さ約2.5m・幅約0.8m・深さ約0.25mの隅丸長方形の浅い土坑である。長軸方向は、N-2°-Eである。土坑の北・東・西の三辺に焼土壁を持ち、内部に炭や灰がつまり、床面の北側と南側に直径約0.7mの焼けた床面が観察できた。焼土壁の厚さは、約0.05mを測る。遺物は、床面付近から土師器皿(196)と鉄釘(RM-144)、炭層内から少量の土師器片が出土した。周囲の焼土壁の厚さや、床面の焼けた状況から、数回の焼成作業を行ったと考えられるが、性格は不明である。遺構の周辺部で鉄滓が数点出土しており、関連が考えられる。時期は、奈良時代前半頃と考えられる。

(有井広幸)

S K 13 1号墳後円部の北東側で、墳丘裾から8.0mに位置する土坑である。平面形は、ほぼ正方形を呈するが、各辺が示す方位は正方方位に対して約45°傾く。平面規模は、主軸ラインで計測すると、北西—南東0.84m、北東—南西0.72mを測る。断面形は、底部の平坦な逆台形を呈する(検出面からの深さ約0.3m)。土坑のほぼ中央部で、ほぼ完形の須恵器杯Bが正立した状態で出土した。須恵器の出土した位置は、土坑底から0.1m高く、土坑が埋没する段階で据え置いたものか、混入したものであろう。

(伊賀高弘)

S K 14 6号墳の南約5mに位置し、全長約2.0m・幅約0.7m・深さ約0.3mを測る土坑である。平面形は隅丸長方形を呈し、断面形は逆台形で、底部は北端がやや凹む他はほぼ水平である。長軸方向は、N-15°-Eである。埋土は、上層が暗黄灰色細砂質土、下層が暗灰色粘質土である。遺物は出土していない。

S K 15 10号墳の北西約7mに位置し、全長約2.1m・幅約0.7m・深さ約0.3mを測る土坑である。平面形は隅丸長方形を呈し、断面形は逆台形である。底部は、ほぼ水平であるが、北側が約5cm高い。土坑の長軸方向は、N-11°-Eである。埋土は、上層が暗黄灰色細砂質土、下層が

暗灰色粘質土である。遺物は、布目の残る平瓦の小片が7点出土している。遺構の時期は、出土遺物から奈良時代と考えられる。

S K 16 6号墳の北西脇に位置し、全長約2.0m・幅約0.5m・深さ約0.25mを測る土坑である。平面形は隅丸長方形を呈し、四方の壁はほぼ垂直に立ち上がる。底部はほぼ水平である。長軸方向はN-2°-Eである。埋土は4層に分けられ、上層から暗黄褐色粘質土・にぶい黄褐色細砂質土・暗黄褐色細砂質土・暗灰色砂質土の順に堆積する。遺物は、奈良時代の須恵器鉢の破片のほか、埴輪片が少量出土した。時期は、出土遺物から奈良時代と考えられる。

S K 17 4号墳の東周溝の一部を切る状況で検出した、全長約2.3m・最大幅約1.2m・深さ約0.1mを測る土坑である。平面形は、不整形な楕円形を呈し、全体に浅く、底部は西に向かってゆるやかに下がる。長軸方向は、N-85°-Wである。埋土は3層に分けられ、東端に炭が多量に混じる黒灰色細砂質土、中央付近上層に灰褐色細砂質土、下層に灰褐色細砂質土が混じる明黄褐色シルトである。炭は出土したが、遺構の底や周囲に焼土は観察できなかった。遺物は、土師器甕(194)が出土している。時期は、出土遺物から奈良時代と考えられる。

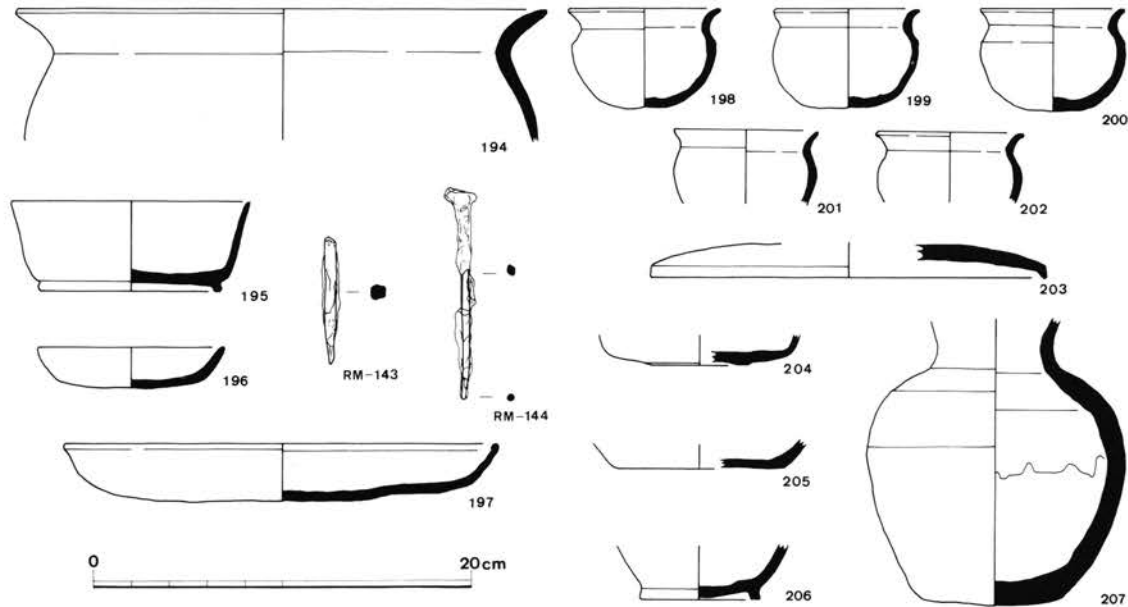
S K 18 S K 14の南東約1mにあり、全長約1.1m・幅約0.6m・深さ約0.2mを測る土坑である。平面形は隅丸長方形を呈し、断面形は逆台形で、底部には凹凸がある。長軸方向は、N-67°-Wである。埋土は、上層が暗黄灰色粘質土、下層が暗灰色粘質土である。遺物は出土していない。

S D 02 調査地南斜面裾を東から西にのびる自然流路と考えられる溝である。東端は二股に分かれ、北側は調査地内で終わるが、南側は旧河川方向に続く。西端は旧河川に続くことから、S D 02は谷内の旧河川の一部であろう。規模は、検出長約20m・幅約1.9m・深さ約0.4mを測る。断面形は弓形を呈する。埋土は、黒色・黒褐色粘土が主であり、滞水状況を示す堆積である。遺物は、奈良時代前半頃の須恵器が多く、内壁に漆膜の残る須恵器壺(207)も出土している。また、蓋形埴輪の底部片も出土している。時期は、奈良時代前半頃と考えられる。

(有井広幸)

(2)奈良時代の遺構に伴う遺物(第49図、図版第154)

194は、土師器甕である。内外面とも磨滅が著しいが、体部外面には縦方向のハケメ調整が施されているようである。195は、須恵器杯Bである。高台は低く、直立している。底部外面に爪状の圧痕がみられる。ロクロの回転方向は時計回りである。196・197は、土師器皿である。196は、器面の剝離している部分が多く、調整を観察することは難しいが、底部外面に凹凸が目立つことから、ヘラケズリなどは施されず、口縁部にのみヨコナデ調整が施されていると考えられる(a手法)。197は、内湾する口縁部の端部を内側に小さく巻き込んでいる。調整はa手法である。198~202は、土師器壺である。口縁部のみをヨコナデ調整し、体部は特に調整を施さない。203は、須恵器杯蓋である。204は、須恵器杯身である。底部が平高台状に作られ、静止糸切りの痕跡がみられる。205は、須恵器杯である。底部はヘラ切りである。底部外面を除いて回転ナデによっていねいに仕上げている。206は、須恵器壺である。底部ヘラ切りの後、高台を貼り付けている。207は、須恵器壺である。底部はヘラ切りの後、ナデ調整が施されている。胎土中に5



第49図 奈良時代の遺構に伴う遺物実測図

194. S K17 195. S K13 196・RM-144. S X06 197・RM-143. S X04
 198~202. S X05 203~207. S D02

mm程度以下の白色角礫を多量に含む。体部最大径以下の内面には漆が付着しており、漆の容器として使用されていたと考えられる。

(森島康雄)

2. 中世以降の遺構・遺物

(1) 中世以降の遺構(図版第54~56・117~119)

S K19 10号墳の南東端と切り合いを有する土坑と、それに付属する溝である。土坑は、長さ約3.4m・幅約1.6m・深さ約0.7mの規模で、平面形は隅丸長方形を呈し、断面形は逆台形で、底面の中央がゆるやかに凹む。埋土は、最上層が拳大の礫の混じる黄灰色細砂質土、それ以下は灰色系の粗砂と粘質土の互層堆積である。土層の状況から最上層は埋め戻された土、下層は土坑が機能ないしは遺棄された時期に徐々に堆積した土と考えられる。付属する溝は、土坑の南東隅から東にのび、S D03につながる。全長約3.5m・幅0.4~0.5m・深さ約0.25mの規模で、ほぼ垂直に掘られ、底部もほぼ水平である。溝底と土坑底の比高差は約0.4mを測る。遺物は、下層部分からホルンフェルス製の砥石1点(図版第57-9)・土師器小皿2点(第50図208・209)が出土した。遺構の性格は、水を貯めるための土坑と、導水または排水の溝と考えられる。時期は、出土遺物から16世紀後半頃と考えられる。

S K20 10号墳の東約9mに位置し、全長約2.2m・幅約0.7m・深さ約0.4mを測る。平面形は隅丸長方形で、断面形は逆台形に近い。土坑の長軸方向は、N-35°-Eである。土坑に付属する溝は、全長約1.8m・幅約0.3m・深さ約0.1mを測る。埋土は、暗灰黄色細砂質土で、遺物は出土していない。底部がほぼ水平で、S K20に付属する溝がS D03を切り、溝の南端は台地の南斜面に達する。遺構の性格は、S K19と同様と考えられる。時期はS K19より新しくなる。

S K 21～23 調査地南西端斜面に設けられた直径1 m前後の半円形ないし楕円形の土坑群である。埋土は、暗灰色系粘土と砂礫が互層堆積している。この付近は、斜面にテラス状の水田が設けられていた場所であり、用水関係の施設であったと考えられる。遺物は、土師器の小皿1点(210)が出土している。時期は、出土遺物から16世紀後半頃と考えられる。

S K 24・25 調査地南東端斜面に設けられた直径1 m前後の半円形ないし楕円形の土坑群である。埋土は灰色細砂質土である。S K 21～23と同様に、斜面にテラス状の水田が設けられていた場所であり、用水関係の施設であったと考えられる。遺物は出土していない。時期は、埋土の状況からS K 21～23と同じ16世紀後半頃と考えられる。

S D 03 調査対象地である台地の南半部分をほぼ完周する溝である。調査地東側を南北に続く部分は、溜池によって削平された部分もあるが、推定長約75m・幅約0.8m・深さ約0.8mを測る。両側壁は直立に近く、溝底は平らで、北に向かってゆるやかに下がる。埋土は、上層が暗灰色細砂質土、下層が暗黄灰色細砂質土である。遺物は、8号墳付近から溜池南端付近までが多く、埴輪片・土師質羽釜片(211～223)がまとまって出土した。

調査地中央付近を東西に続く部分は、平行する2条の溝となり、1号墳前方部付近では、前方部を避けるように、鍵形に2回屈曲する。この付近では、A地点北側にある溜池から流れ出す水路が上層に重なり、1号墳前方部南西付近を西に向かって下っていた。また、東側を南北方向に続く溝は、北端よりに約1.2mの段差があるため、東端の部分は残りが悪い。検出長約90m・幅約3.4m、深さは1号墳に近いほうがやや浅く約0.5m、もう一方は約0.6mを測る。埋土は、1号墳に近い側の溝には灰色系の砂質土が堆積し、遠い側には暗灰色粘質土が堆積している。堆積状況から、1号墳から遠い方が先に埋まり、近い側は流水による堆積が考えられる。遺物は、黒色土器・土師器皿などが出土している。黒色土器(229)は、3号墳北側の屈曲部付近の溝東肩から出土しており、別の遺構が切り合っている可能性がある。

調査地西側で南北方向にゆるやかな円弧を描く部分は、検出長約35m・幅約1.2m・深さ約0.7mを測る。両側壁のうち、西側はほぼ直立する。溝底は、南側が高く北に向かってゆるやかに下がる。埋土は、にぶい黄褐色粘質粗砂が主で、部分的に鶏卵大の円礫が混じる。埋土の状況から、水が流れていた可能性もある。遺物は、土師器片が少量出土している。

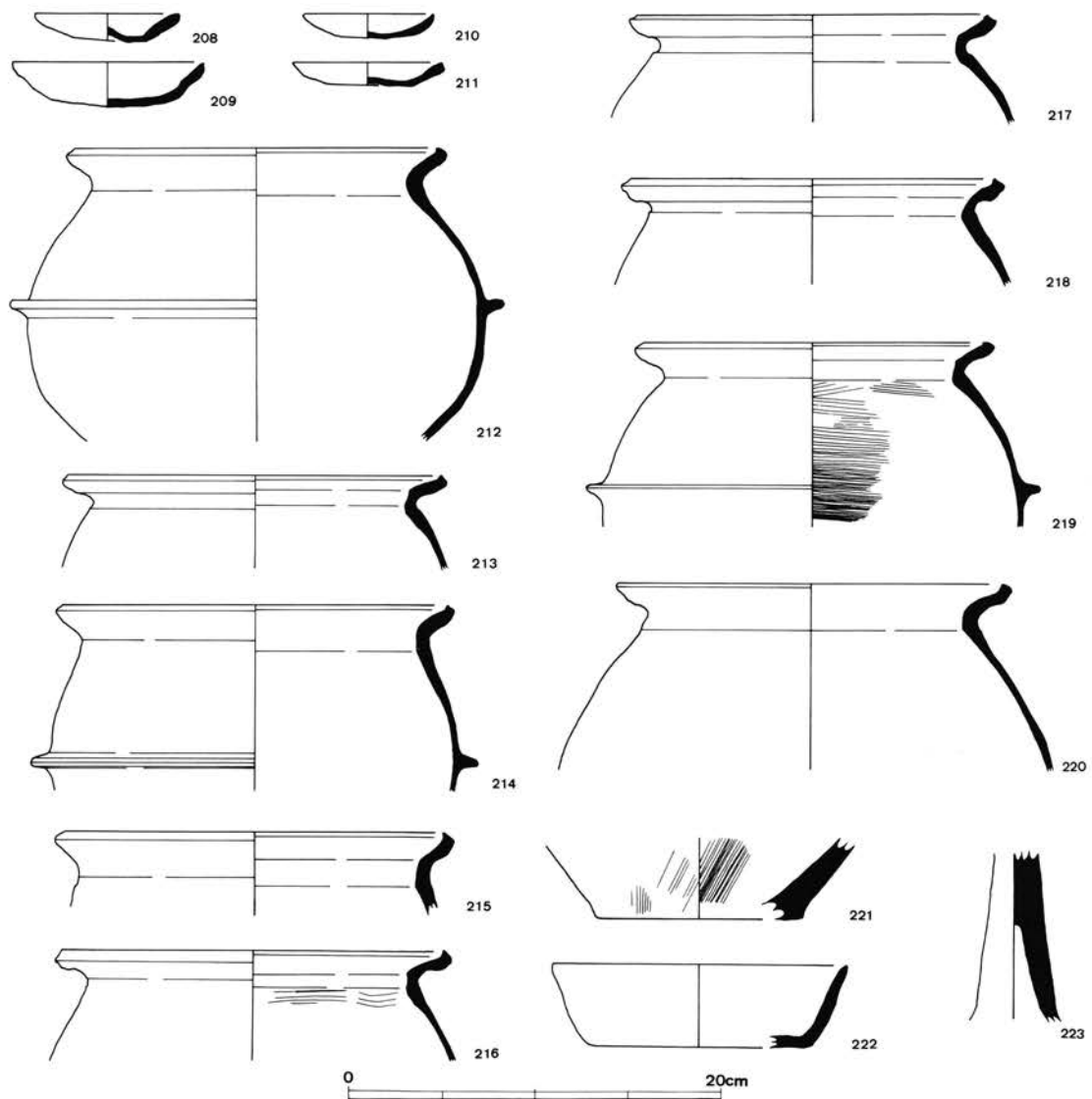
調査地南側を東西方向に続く部分は、10号墳南側付近では台地斜面中腹部を東側の溝と同規模で続き、西に下がるにつれて規模が大きくなる。また、5号墳の南側付近では、台地斜面の裾付近で規模を小さくして、西端は現代の用水に切られて終わる。検出長約55m・最大幅約4.2m・深さ約2.0mを測り、断面形は逆台形に近い。溝底は、流水の影響によると考えられる小規模な凹みがある。埋土は、上層に灰色粗砂、下層に灰色砂礫が堆積していた。遺物は、砂礫層から埴輪片・布目をもつ平瓦片などが出土している。

南東端から西に約18mのびる部分は、深さが約0.2mと浅く、西端で完周する溝と切り合い関係を持つことから、時期がやや下がると考えられる。

(有井広幸)

(2) 中世の遺構に伴う遺物(第50図、図版第57・154・155)

208～211は、土師器皿である。209は、赤褐色系、他は乳黄色系の色調である。208・211は、内面の底部と口縁部の境目に強いナデを施す。212～220は、土師器羽釜である。「く」の字に外反する口縁部と、球形の体部で、体部最大径付近に小さな鏝を貼り付ける。口縁端部は上方につまみ上げる。内外面ともにナデ調整であるが、内面には横方向のハケメが残るものがある。212～215は乳黄色系、216～220は赤褐色系の色調である。221は、瓦質土器すり鉢である。表面は淡灰色を呈するが、破断面は黄褐色を呈し、土師質に近い焼成である。内面には9条1単位のすり目が施され、外面は粗いハケメによる調整を施す。222は、須恵器杯である。底部外面以外は回転ナデ調整を施す。223は、土師器高杯である。内面には絞り痕がみられる。図版第57の8は、S D03の東側部分中央付近から出土した淡黄灰色の砂岩製砥石である。側面の片側には、使用による「V」字の斜めの溝が観察できる。全長は10.7cm、最大幅は5.2cm、厚さは1.3～2.2cmと全



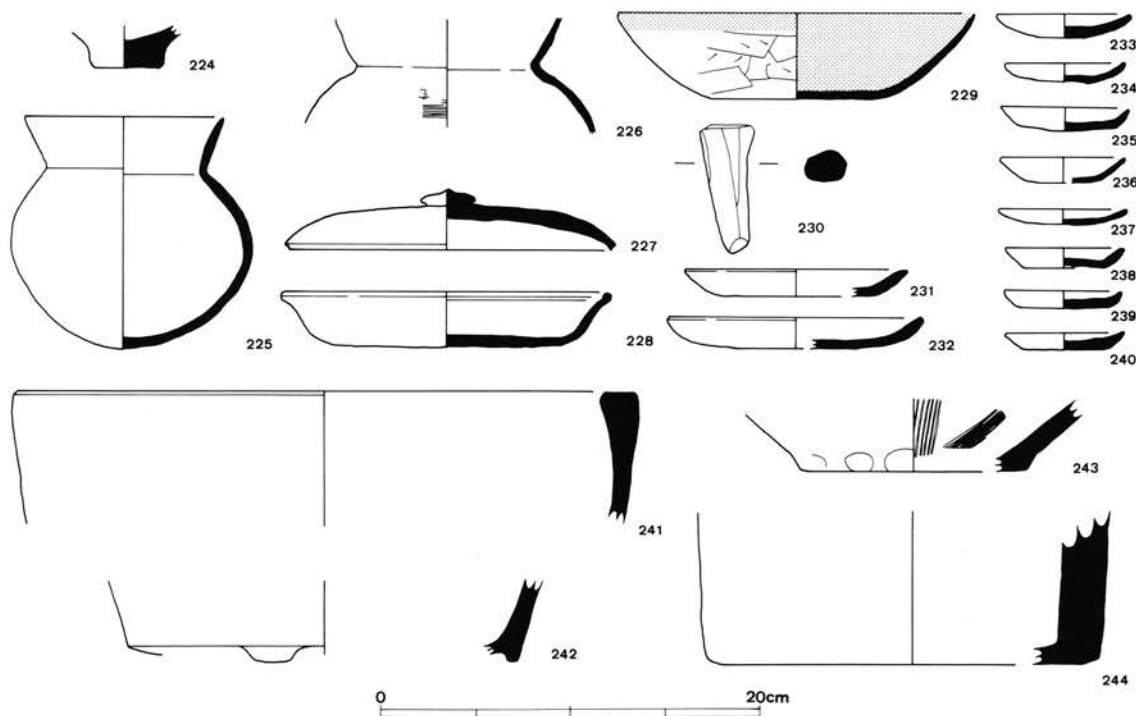
第50図 中世の遺構に伴う遺物実測図
208・209. S K19 210. S K21 211～223. S D03

体に偏平である。9は、S K19出土の淡灰色のホルンフェルス製砥石である。8とよく似ており、ほぼ同時期であろう。幅の広い2面に斜めに走る使用痕が見られる。上端部には、使用面の両側から打ち欠いた直径約0.6cmの穴を設ける。全長12.2cm・最大幅5.2cm・厚さ0.7~2.0cmを測る。

3. 遺構に伴わない遺物(第51図、図版第155)

224は、弥生土器の底部である。225・226は、土師器壺である。225は、内外面ともに磨滅が著しい。色調は赤褐色を呈する。227は、須恵器杯蓋である。1mm程度の砂粒を比較的多く含む胎土で、色調は灰白色を呈する。228は、土師器杯である。口縁端部を内側に小さく巻き込んでいる。調整はa手法で、底部外面には線状の圧痕がみられる。229は、黒色土器A類杯である。色調は茶褐色を呈する。外面は口縁端部を除いてヘラケズリ、内面は全面に密なヘラミガキを施している。内面の底部と口縁部の境目付近には連結輪状の暗文をめぐらしている。230は、土馬の足である。231~240は、土師器皿である。色調は、231・232が乳灰色、233~237が黄灰色、238~240が茶褐色を呈する。233~237は、内面は時計回りのナデ調整、底部外面はユビオサエでていねいに仕上げられている。238~240は、平らな底部から口縁部が短く立ち上がる。241・242は、瓦質土器火鉢である。ともに、破断面は乳白色を呈し土師質焼成に近い。242の器面には炭素が吸着し、灰黒色を呈する。243は、瓦質土器すり鉢である。色調は黄灰色を呈し、土師質焼成である。内面には1単位10条以上のすり目を施している。244は、用途不明の土器である。土師質で、胎土は粗い。平滑に仕上げられた内側のみが被熱しているが、鉾滓などは付着していない。

(森島康雄)



第51図 遺構に伴わない遺物実測図

第5章 考 察

第1節 瓦谷古墳群の調査成果

瓦谷古墳群の発掘調査は、昭和61年度以降、平成5年度までの7次にわたって丘陵上部の約10,000m²の発掘調査を実施した。その結果、前方後円墳1基を中心に9基の小型古墳と、それを取り囲むように26基の埴輪棺が点在することが明らかとなった。各古墳では1号墳と2号墳で中心埋葬施設を確認したのみで、他の古墳では埋葬施設と墳丘の大半が後世に大きく削られており、周溝の一部を検出する程度であった。しかし、古墳群の群構成や盟主墳と小型古墳・埴輪棺の関係を考える上での良好な資料となった。また、2基の埋葬施設が遺存していた1号墳では、第5章第2節「瓦谷1号墳について」で詳述するように、一部攪乱を受けていたが豊富な副葬品が出土しており、古墳時代前期後半における盟主墳の性格や、瓦谷古墳群の時期とその性格を考える上での良好な資料となった。ここでは、1号墳とその周辺の小規模古墳を中心に瓦谷古墳群の性格について簡単に説明する。

瓦谷古墳群は、木津町と奈良市の境界を限る標高100mにも満たない低い丘陵(奈良市北方丘陵、通称平城山)の一画に位置し、南には佐紀盾列古墳群が、北には南山城の古墳群があり、その中間に位置している。

瓦谷古墳群を含めた木津町では、木津地区所在遺跡の調査として、昭和60年度から発掘調査を実施し、瓦谷古墳群と相前後した時期の古墳が点在していることが明らかとなっている。

瓦谷古墳群の周辺の木津町市坂地区では、瓦谷古墳群に後続する時期の上人ヶ平古墳群が南西約300mにある。上人ヶ平古墳群は、古墳時代中期中頃～後期初頭にかけて順次古墳が15基造営され、中規模の造り出し付円墳である上人ヶ平5号墳(直径約25m)を盟主墳として7基の小規模方墳が群在しているグループと、円墳である1号墳(直径20m)を盟主墳として5基の小規模方墳からなるグループを検出している。また、瓦谷古墳群の北約200mには瓦谷古墳群・上人ヶ平古墳群とは性格を異にする西山塚古墳がある。その規模は、直径約26mを測り、外表施設として葺石・埴輪をもつ。瓦谷1号墳は、後述するように4世紀後葉、上人ヶ平5号墳は5世紀中葉の時期が想定でき、瓦谷1号墳→上人ヶ平5号墳→上人ヶ平1号墳へと盟主墳が移動することが考えられる(西山塚古墳は、上人ヶ平1号墳とほぼ同じ時期が考えられる)。この市坂地区の盟主墳の移動に伴う古墳群の相異をみると、4世紀後葉の瓦谷1号墳(前方後円墳)を盟主墳とする瓦谷古墳群では、4世紀後葉以降5世紀前半にかけて順次9基の小型方墳と埴輪棺が造られていくが、5世紀中葉の上人ヶ平5号墳を盟主墳とする上人ヶ平古墳群の南支群では造り出し付円墳と小型方形墳で構成されており、埴輪棺を含んでいない。

小規模方墳の性格について、伊賀高弘は、「王権は、墓制を媒介とする秩序編成の中で小規模

方墳を直接の政治単位としないで、より上位の首長層を通じてそれに連なるものとして間接的に小規模方墳の被葬者との間に政治的関係を結んだもの」と考えている^(注50)。また、筒井崇史は、小型方形墳の被葬者を「首長とともに集団内における支配者階層を形成し、例えば首長権を行使するために行政的組織の構成者として活動した」としている^(注51)。市坂地区における瓦谷古墳群から上人ヶ平古墳群への変化は、首長の親族や従属する共同体有力成員の古墳への扱われ方を考える上での良好な資料である。瓦谷古墳群の造墓順位については、後述のように盟主墳の造営を契機として小型方墳を順次造営していくことが明らかであり、その現象は上人ヶ平古墳群でも見られる。

瓦谷古墳群の特徴として、小型古墳とともに埴輪棺がある。この埴輪棺は、盟主墳と小型古墳の周辺に点在している。京都府内の埴輪棺の検出例をみると、丹後地域(加悦町)・乙訓地域(長岡京市・向日市)・南山城地域(宇治市・城陽市・精華町)などで広く分布しているが、埴輪棺の検出密度が高い加悦町作山古墳群・城陽市久津川車塚古墳群など、いずれも瓦谷古墳群で検出した埴輪棺とほぼ同時期に造営されているものが大半である。瓦谷古墳群の埴輪には、奈良県佐紀陵山古墳と同型式の蓋形・盾型埴輪を使用していること、佐紀盾列古墳群でもマエ塚古墳の周辺部で埴輪棺が点在していること、瓦谷古墳群が佐紀盾列古墳群と直線距離にして2.5~3.3kmと近接していることなどから、瓦谷古墳群が佐紀盾列古墳群の影響のもとに造営されたと考えられる。

(石井清司)

第2節 瓦谷1号墳について

1. 墳丘の特徴

瓦谷1号墳は、主軸を南北にとって南面する前方後円墳である。この古墳については、少なくとも明治時代には古墳(塚)と認識されていたようで、地元ではその所在地名をとって「瓦谷塚」、あるいは単に「車塚」などと称されていた^(注52)。

しかし、この古墳の墳形が前方後円形を示すことが明らかになったのは、平成4年度の発掘調査の成果によるもので、比較的最近のことである。それまでは、後円部のみが整美な截頭円錐形を呈して地表にその姿を現わしていた。このため、近世に始まるこの地域の耕地開発に際しても、塚としての伝承も影響したのか、後円部墳丘部分は造成の対象から外され削平を免れたとみられる。

一方、発掘調査によってその存在が確かめられた前方部墳丘に関しては、耕地造成の対象となり、削平を受けて地表から完全に姿を消してしまった。

前方部が削平された主な原因は、本来の墳丘が低平であったことに起因するものではなかろうか。その根拠を示すと、たとえば11号埴輪棺が前方部の墳丘内で検出されたことを挙げることができる。つまり、11号埴輪棺は、前方部の縁辺ではあるが、墳丘の削平面に位置する。埴輪棺が1号墳に後出することは、埴輪の年代差などから明らかであり、この埴輪棺が1号墳の墳丘上から墓壙を穿って営まれたものであることは確実である。とすると、仮に墳丘が高いものとするれば、そこをベースに墓壙を掘り込むわけで、削平面にその痕跡を留めることはなかったと思われる。しかし、実際は、削平面に棺本体を含め墓壙が大きく削られることなく遺存していたため、前方

部墳丘が本来はかなり低いものであったことが、この事例から判明する。

以上のことから、瓦谷1号墳の本来の姿は、後円部に対して前方部がかなり低い立面形を復原することができる。

次に、古墳の平面形であるが、本文中でも触れたが、この古墳の場合、傾斜変換点で示される墳丘裾は、一定レベルでめぐらないことが確認されている。すなわち、西方に開ける平野部からの眺望を考慮した場合の古墳の背面側、つまり墳丘の東側面が、自然地形に規制されて十分造作を加えないままで築造を終えている。つまり、前方部に関しては、古墳の正面側である西辺が大きく改変されて追求できない。しかし、少なくとも後円部東半部は、西から北にかけての裾が示す正円弧と、ほぼ正円を示す墳頂平坦面の中心との距離(円の半径=約17.5m)を、墳頂中心を軸にして東側に折り返した正円ライン(直径約35m)より内側に傾斜変換線=墳丘裾が通る。これは、おそらく墳丘を築造するのに際して、背面側の平野部から見えない側の造作を途中で省略してより簡便な方法で築いていることを意味する。つまり、築造における設計(築造規格)と実際の施工が必ずしも一致せず、墳丘の大半を地山の成形で築く工法を採るが故に、ベースとなる地形の標高が徐々に高くなる東側の築造工事を簡略化したとみておきたい。そして、同様のことが前方部の東側面でも行われたことが予想される。

要するに、瓦谷1号墳の墳丘は、主要な交通路が通り、生産基盤が広がる西側の平野部に面した側のみ、本来の築造規格に合わせて築造し、その背面である東側は、労働力の省力が図られて、規格線よりもひとまわり小さな墳丘に仕上げたと考えられる。

ところで、後円部にみられる復原根拠をもとにした当初の築造規格をみると、前方部側に不確定な要素が残るが、その墳丘裾が示すラインは、地理的に近接し、遺物の上で多くの共通点がみられる奈良市佐紀陵山古墳とおおむね相似形を示すことが判明した。

すなわち、佐紀陵山古墳の後円部の径を合わせるべく、約1/3.7に縮小して瓦谷1号墳と重ねると、くびれ部の位置や前方部の開き具合、墳頂平坦面の規模などがほぼ一致する。

ただ、現状での前方部の側辺(もちろん東側)と、前方部前面の縁ライン(前端線)は、このラインより2.0~4.0m内側に位置する。前方部の側辺については、先の推察から規格線より内側に位置する可能性が高く、その差は施工段階の差として解消できるとみられる。一方、前端線が内側にくること、すなわち前方部長が佐紀陵山古墳の築造規格から外れて、より短いことに関しては、他の要因を考えざるを得ない。この点に関しては、調査で確認された前端線のすぐ南側に、西方に開く東西主軸の浅い谷状地形があることから、地山成形工法による限り、現状より南に墳丘をのばせなかったことが主な要因と考えられる。

以上のように、瓦谷1号墳は、墳丘の築造に際して、一定の築造規格の基に設計されるが、実際の施工の段階になって自然地形の規制が働き、部分的な変更を余儀なくされたとみることができ。

ここで、あらためて墳丘の規模を整理すると、以下のようになる。

全長51.0m(築造規格長 $51.0\text{m} + \alpha$)・後円部東西長33.0m(築造規格直径35.0m)・前方部長

22.0m(築造規格長22.0m + α)・前端部幅推定18.0m(築造規格幅18.0m + α)・後円部高さ現状で約5.0m。

なお、墳丘主軸の示す方位は、前方部西辺が旧状を失っているため、前方部ののびる方向を明確に押さえられないが、周辺地形の中古墳の占地状況などを参考にすれば、およそ正南北方向に近い方位であったことが推測される。

墳丘の外部施設に関しては、埴輪の圍繞は想定できるが、葺石の存在は否定的である。

埴輪は、樹立された状態のものではなく、すべて原位置を失っている。墳丘斜面あるいはその周辺に堆積する流土中、または墳頂部の盗掘坑埋土中から出土しているが、その量は多くない。ただ、墳丘周囲では、丘陵下の谷水田部に設けた小範囲の試掘トレンチからも少ないながらも埴輪片が出土しており、墳丘が築造された尾根部を越えて相当広範囲に散逸している可能性が高い。したがって、調査で得られた量をかなり上回る量の埴輪が古墳の周囲の谷水田部に埋没していると予想される。なお、出土埴輪の内容をみると、形象埴輪の占める割合が高い傾向がある。

埴輪の樹立位置については、墳丘の最高所である内部施設の盗掘坑中から出土していることから、少なくとも墳頂平坦面に樹立されていた可能性は指摘できる。それ以外の墳丘部に関しては、樹立を想定できる根拠に乏しいが、埴輪の出土頻度は、墳丘斜面よりも墳丘裾からその外周部にかけての地区の方が高く、墳丘裾に接した外周の緩斜面に埴輪が、墳丘を囲うように樹立されていた可能性がある。

葺石に関しては、原位置をとどめるものはおろか、流土中にもその転落石が全く含まれないことから、当初から敷設されていなかったと考えられる。

墳丘の段築は、現状では全く確認できない。ただ、先の埴輪類の散乱状態を考慮すると、調査で検出された墳丘面は、比較的よく残る後円部側でも、ある程度は削平を受けて旧状を失っている可能性が高い。したがって、段築の存在は現段階でその存否を論議できない。

2. 内部施設について

内部施設としては、後円部墳頂部に長大な木棺を納めた竪穴系の埋葬施設が営まれている。これは、古墳築造の契機となるという意味で、内部主体というべきものである。

内部主体は2基あり、棺の主軸を南北にとって東西に並列している。両者は一つの墓壙内に同時に置かれたのではなく、それぞれの施設が別の墓壙を持ち、それが接する部分で重複している。両者の構築には、一定の時間的な距離がある。重複関係から、西側の施設が東側の施設に先行するため、構築の順序にしたがって西側を第1主体、東側を第2主体と呼ぶ。

いずれも、長大な木棺を用いる点は共通するが、棺の構造や槨の有無などに相違がある。すなわち、第1主体は刳り抜き式木棺を使用する粘土槨であり、第2主体は組合式木棺を墓壙内に直葬している。各主体部の構造の詳細は、本文で紹介されているので、ここでは構造に関する特記事項のみを記すこととする。

第1主体の構造 第1主体は、横断面で見ると逆台形状に掘られた墓壙底の中軸よりをさらに

掘りくぼめて、そこに粘土を貼り付けて粘土床としている。こうした断面構造は、既存の粘土槨の分類研究に照合させると、都出比呂志のNC型式^(注53)、山本三郎のE型式^(注54)の範疇で捉えられるものである。

しかし、両氏が分類した該当型式の典型例と比較した場合、瓦谷1号墳にのみ認められる特殊性をいくつか指摘することができる。

たとえば、典型例の場合、棺床粘土を設置するために上段墓壙底に掘られた掘形の横断面は、割竹形木棺の棺身のカーブに則して「U」字形を呈することを基本とする。これに対して、瓦谷1号墳第1主体の下段墓壙の横断面は、各辺が直線的な逆台形を示し、底には比較的幅の広い平坦面が形成される。

さらに典型例の棺床施設は、古い段階では精選された粘土を、下段墓壙のラインに沿って厚く貼り付けて構築するのに対し、瓦谷1号墳の場合、下段墓壙底に小礫混じりの粗砂を薄く敷き、その上に棺床粘土を設置する。そして、この棺床粘土は、横断面でみた場合、側面は通常の粘土床と同様に一定の厚みを有するのに対し、底面は非常に薄くなる。棺床粘土の下に礫石を敷く構造は、墓壙底を棺身の形態に合わせて掘り下げて棺床を構成する類例にはみられず、平坦な墓壙底に直接、あるいは基台状に高く掘り残した壇上に棺床粘土を設ける際、墓壙底に礫石を介在させる例が多い(都出分類のNB型式^(注55)、山本分類のB・C型式^(注56))。これらは、相対的に墓壙底を掘りくぼめる型式より古く位置づけられている。

この観点で瓦谷1号墳の棺床粘土の構造に解釈を加えるならば、棺床粘土を設置するための掘り込みを有するけれども、排水機能を期待して、薄い粘土の下に礫石(粗砂)を設置するというより古い技術を継承したものと捉えることができる。したがって、広義の都出分類NC型式、山本分類E型式に属するものであるが、その断面が示す特異なラインや粗砂層の介在を考慮すると、その中でも相対的に古い要素を持つ棺床構造の一形態とみることができる。

次に、棺床粘土の上面ラインに示される木棺の形態について言及したい。瓦谷1号墳第1主体の棺床上面に残された横断面線を見ると、底面は平坦でほとんど円弧を描かず、側面も円弧というよりは、底面から比較的鋭く屈曲して上外方に直線的に立ち上がった後、少し内折して上半は直角に近く伸びるというラインを描く。棺床粘土上面に残されたラインが木棺の身の形態を反映しているとすれば、瓦谷1号墳の場合、真正の割竹形木棺を想定するよりも、底が平坦で側部が「く」字形に屈折する加工を施した箱状の削り抜き式木棺(吉留秀敏分類のC型式=棺身が丸太状をなさず、部分的にせよ箱形になるもの^(注57))と考えるのが妥当であろう。

棺槨の小口の構造については、詳細な検討はできなかったが、それが痕跡的に残る北小口の状況は、粘土の形状などからある程度復原できる。それによると、瓦谷1号墳第1主体の木棺の小口は、端部まで削り抜いて筒抜けになった棺端の少し内側に入ったところに棺の内法に合わせた小口板を設け、その外側に粘土を嵌入することで小口板を支えていたとみられる。

第2主体の構造 第2主体は、第1主体のように粘土槨形式をとらず、組合式木棺を墓壙内に直葬する方式を採用する。

木棺の構築は、外部で箱形に組み上げた木棺を据え置くのではなく、墓壙底に棺材を設置し、周囲を裏込め状に埋め戻すことで棺を構成し、合わせて各辺の棺材を固定している。

つまり、墓壙底は平坦に整形され、そこに直接棺の底板を据え置く。そして、この底板の縁(長側辺)に板の外側を合致させるように長側板を載せる。この際、底板の長側辺に長側板を受けるための段状の仕口を施したかどうかは、棺材が完全に腐朽しているため確認できない。次に、棺の小口側には棺端から少し内側に入った位置に小口板を嵌めこむ。小口板を設置する際、長側板の内壁や側板の上面に小口板を受けるための柄状の溝を切った形跡は確認できなかった。さらに棺内は、2枚の仕切り板で3つの空間に分割する。仕切り板も小口板同様、底板の上に直接載っていると思われるが、底板や長側板に柄を切ったかはわからない。そして、棺身側の棺材を設置するのと併行して、棺の外周の墓壙内を側板の下半部まで土で埋め戻して、四辺の側板が外側に倒れるのを防ぐとともに、その上面を水平に均して遺物床を形成する。以上のような構築過程が土質の違いや赤色顔料の残り方から復原できる。

ところで、古墳時代の組合式木棺の実例として、大阪府土保山古墳^(注58)や奈良県三倉堂古墳^(注59)、茨城県七廻り鏡塚古墳^(注60)から出土したものが著名な資料である。これらの木棺は、棺を構成する部材の形態や組合せ方法の細部を知ることができる貴重な例であるが、いずれも古墳時代中期以降のもので、棺の長さが2～3mと短くなっている。

これに対して、古墳時代前期にさかのぼる長大な組合式木棺の全体の形状ををうかがうことの可能な実例は、今のところない。三重県石山古墳^(注61)や大阪府和泉黄金塚古墳^(注62)などで組合式木棺と報告されているものは、棺床粘土に残された痕跡が箱形を呈することを根拠としており、棺材が良好に遺存していたわけではない。

したがって、前期における組合式木棺の実態については不明な点が多く、瓦谷1号墳第2主体の木棺と比較検討できる資料がないのが実状である。

ただ、前期のこのような全長5mを越える長大な組合式木棺の構造が中期以降の遺骸を納めるに足る規模の組合式木棺とどの程度共通するのであろうか。この点に関しては、瓦谷1号墳第2主体例は、弥生時代以来の構造を踏襲するかたちで、長軸方向に規模を拡大している。しかし、実例をとまなう5世紀以降の組合式木棺が、長持形石棺に代表される組合式石棺の系譜をひいて、外部で組み上げられた後に墓壙内に納める棺である点を比較すると、両者は系統を異にすると捉えざるを得ない。したがって、中期以降の組合式木棺は、前期の長大な組合式木棺の構造を検討していく上であまり参考にならないと考えられる。

さて、本文でも触れたが、正円を描く墳頂平坦部の中心は、第1主体と第2主体のほぼ中間に位置する。先に、両主体間には重複関係があり、構築における時間差を指摘した。しかし、後出する第2主体が造られる際、第1主体の粘土槨を破壊しないように墓壙の掘形を接する側で修正している。そのため、木棺長側側で第1主体に接する側の遺物床が極端に狭く、左右非対称に造られている。このことは、第2主体が営まれる段階でも、第1主体の位置が何らかのかたちで記憶されていた可能性を示唆しており、第1主体が墳頂中心からずれた位置に設定されたことも含

めて考えると、古墳築造当初からあらかじめ2棺並葬を予定していたとみることができる。

ところで、昭和61年度に瓦谷古墳群が立地する丘陵の南側にある比較的大きな谷を発掘調査した際に、谷水田下に埋没した古墳時代前期の自然河道を検出し、河道内堆積土中から多量の土器や木製品が出土した。その中に、木棺小口板とみられる蒲鉾形の平面形を呈する板材が2点含まれていた。いずれも、高野槓をていねいに加工した完成品とみられる。これらは、年輪年代測定によると339年を上限としており、古墳時代前期の木棺小口板の実例として重要な資料となった。ここで注意されるのは、この小口板の形状と法量が、瓦谷1号墳第1主体の棺床粘土に残されたラインと規模がほぼ一致する点である。この実物の小口板は、結果としては使用されることなく投棄されたものであるが、1号墳の棺痕跡と同形同寸であることは、この種の木棺材に一定の規格が存在したことを暗示するといえよう。

3. 副葬遺物について

瓦谷1号墳の内部主体からは、多種多様の副葬遺物が出土している。

しかし、第1主体は、その中央部(遺骸埋葬部分)を中心に盗掘を受けており、銅鏡・装身具といった威信財的な色彩の濃い遺物が失われている可能性が高い。ここでは、現有の資料に若干の検討を加えて、その年代的位置付けやそれを保有した被葬者像に迫ってみる。

小札革綴冑 小札革綴冑は、現在までに10例の出土が知られ、その出土古墳は畿内とその周辺地域(近畿地方)に集中する。しかし、その出土状態をみると、大半が原形を失い、冑を構成する小札が単体で、あるいは数個体が旧状を残して銹着した状態で出土するのが通例である。そうした中で、わずかに京都府椿井大塚山古墳出土例^(注63)・滋賀県雪野山古墳出土例^(注64)・三重県石山古墳出土例^(注65)の3例が比較的冑として残存状態がよく、前2例については完形としての復原図が提示されている。

瓦谷1号墳出土例は、これら3例よりは遺存状態が悪く、小札が単体として遊離した状態で出土した部類に入るが、X線写真やわずかに残る小札の重なりがわかる例などを参考に検討を重ね、さらに既存の復原案も参照にして復原を試みた。そのモデルとして活用したのは、当時唯一の復原案をもっていた椿井大塚山古墳例の実測図で、いくらかの根拠をもとに、上方に内向する半球形の鉢形を呈する形に復原した(第26図、図版第120)。

その後、雪野山古墳例の復原図が提示され、椿井大塚山古墳例とはまた異なった形状を示す小札綴系の冑の存在が明らかとなった。このように、近年になって頭円下直截形(魚鱗形)を呈する小札で、冑の鉢部の大半を構成する小札革綴冑については、冑の形態のみならず、個々の部材の形態や規模の多様性があり、また製作技法にもさまざまな方法が存在することが看取されるようになった(付表7参照)。

そこで、付表7を参考に瓦谷1号墳出土例の小札革綴冑の中での位置づけについて、若干検討を加える。

まず、鉢部を構成する段数であるが、石山古墳例が14段と最も多く、椿井大塚山古墳例9段、

付表7 小札革綴胃一覧表

古墳名	腰巻板		小札					
	段数	覆輪	枚数	段数	種類	重ね(上下)	重ね(左右)	綴じの方向
石山古墳 後円部中央石室	(無し?)	革包	310+ α	14	1	右	上	—
雪野山古墳 後円部主体部	1段	無し	137	7	5+ α	左	上	横?
椿井大塚山古墳 後円部主体部	1段分割	無し	527+ α	8	1	左・右	上	縦・横
瓦谷1号墳 第1主体	2段	布包	72	3	3	右	上	斜
黄金塚2号墳 後円部主体部	1段	無し	50+ α	—	1	左	上	(横)
妙見山古墳 後円部主体部	(無し?)	—	190+ α	—	4	左・右	上	—
忍岡古墳 後円部主体部	—	—	7+ α	—	1	左	上	—
玉手山6号墳 主体部	—	—	166+ α	—	1	右	—	—
西求女塚古墳 主体部	—	—	1	—	1?	右?	—	—
石塚山古墳 後円部主体部	(無し?)	布包	?	—	3	右	上	—

この表は、小林謙一・橋本清一氏指導のもと、伊賀が作成した。

雪野山古墳例8段と続く。瓦谷1号墳例の場合、5段と復原案が示されている中では最も少ない。小札の大きさは、椿井大塚山古墳例と石山古墳例が小形で、各段とも同じ大きさのものを用いるのに対し、雪野山古墳例と瓦谷1号墳例の小札は前者に比べ大形で、段ごとに大きさを違える。腰巻板は、椿井大塚山古墳例と雪野山古墳例が1段であるのに対し、瓦谷1号墳例は2段構成である。頭頂部については、小札綴技法を採るがゆえに小札では集束しきれず、構造的に空間が残されるが、椿井大塚山古墳例と瓦谷1号墳例は、この空間が大きく、有機質を素材とした伏板様の閉塞装置を想定せざるをえない。これに対し、石山古墳例・雪野山古墳例は、小札のみで頭頂部が十分塞がれており、伏板状のものを必要としない。さらに、小札の革綴技法は、瓦谷1号墳例では、上の段の小札へと綴じ紐が内面からみて鋸歯状に斜行する(斜綴)技法を用いるのに対し、椿井大塚山古墳例と石山古墳例では、左右の小札を内面鋸歯状に綴じた後、上下方向への綴じへと進む(横綴)方法を採用している。

このように、全体の形状が復原されているわずかな例のみを比較しても、そこにはさまざまな製作上の技法や多様な部材の形態・規模をうかがうことができる。

そこで、瓦谷1号墳出土の胃の属性について、解釈を加えると、小札の規模が大きいことと、腰巻板が2段構成であることは、小札の枚数を減らすための工夫と考えられ、そこに小札どうしの綴じ工程の省力化を読みとることができる。したがって、瓦谷1号墳例は、製作技術の省力化という観点でみた場合、小札革綴胃の中では相対的に新しく位置付けられると思われる。

方形板革綴短甲 次に、方形板革綴短甲であるが、現在までに16基の古墳から17例確認されている。その分布は、やはり近畿を中心とするが、関東・北陸・東海・中国・九州と前記の小札革綴冑に比べて広範囲に広がる。

この種の短甲は、古墳時代中期以降普遍的に増加する長方板あるいは三角板革綴短甲のように、押付板・帯金・裾板から構成される枠組みと、地板を組み合わせる方式の斉一的な内容を備えた短甲とは構造的に全く異なり、いわゆる地板だけの単層構造で全体を形作る地板綴系の短甲である。そして、この種の短甲も小札革綴冑と同様に、細部の構造や地板の形状、製作技法などに多様性が認められ、長方板革綴短甲以降の短甲に比べ、定型化していない段階の短甲と捉えられている。その形態は、東アジア、特に中国中原地域の戦国時代以来の皮革あるいは鉄製の甲(特に前漢代の札甲と呼ばれる身甲)の地板の形態に類似点を見いだせるが、直接の祖型は、日本の弥生時代から存在した有機質製短甲に求めるべきとする見解が提唱されている^(注66)。

それはともかく、多様性があるとされるこの方形板革綴短甲にも、いくつかの共通点を見いだすことができる(附表8参照)。たとえば、方形板の地板の段構成であるが、奈良県上殿古墳北棺出土例^(注67)が5段構成をとる以外は、ほとんどが縦長長方形の方形板を上下3段で構成するのを基本とする。また、後胴の上位に押付板を配するが、京都府園部垣内古墳出土例^(注68)・福岡県若八幡宮古墳出土例^(注69)・岐阜県船来山98号墳出土例^(注70)が上下2枚で構成される以外は、1枚構成である。その平面形は、上殿古墳北棺出土例が襟を作り出すのを除くと、いずれの場合も半月形を呈する。また、方形板の横方向の重なりについては、後胴中央を中心に順次左右に上重ねする例が大半を占める。なお、方形板の上下の重なり方は、上から順次下重ねにするものと、第2段の方形板を上下段の方形板の上に重ねる場合の2通りがあるが、前者の方が多い。このように、方形板革綴短甲には、定式化した属性がすでに確立しつつあったことが上記の各要素から証明できる。

しかし、一方で多様性も認められる。その最も顕著な要素は、各段を構成する方形板の左右方向の枚数と引合板の有無である。方形板の枚数については、各段とも同じ枚数で縦横に目地が通るものと、段を違えてその枚数が異なるものがある。また、前胴の方形板にも、左右が同数のものと、異なるものがある。引合板は、左右に付くものが5例と最も多く、左前胴のみに付くもの4例、引合板が付かないもの3例と多様である。綴紐の進行方向は、瓦谷1号墳の小札革綴冑のように、綴じの方向が斜めに進むものはなく、横方向に綴じた後、縦方向の縫合に進むものと、その逆が存在するようで、後者の方が多い傾向にある。

以上のような方形板革綴短甲にみられる一般的な諸属性をふまえた上で、瓦谷1号墳出土の方形板革綴短甲の特徴を比較検討してみよう。

瓦谷1号墳出土例の備える要素をみると、方形板の段構成は3段で、後胴に1枚からなる半月形の押付板を備える。方形板の横の重なりは、後胴中央を中心に左右方向に向かって順次上重ねとなり、上下方向は押付板も含めて上から順次下重ねにする。ここまでは、この種の短甲の多くにみられる定型化しつつある属性に則っている。方形板の各段の枚数は同じで13枚を数える。その内訳は、各段とも後胴5枚・左前胴4枚・右前胴4枚となり、前胴は左右対称となる。引合板

付表8 方形板葺短甲一覧表

古墳名	押付板	引合板	地板						
			段数	重ね (上下)	重ね (左右)	綴紐の進行方向	左右方向の枚数		
							左	背	右
常陸狐塚古墳 後円部主体部	1または2	左右	2 + α	上	脇上?	—	—	—	—
松林山古墳 後円部主体部	1?	?	?	?	?	横→縦	—	—	—
雨の宮1号墳	1	?	—	—	—	—	—	—	—
船来山98号墳 前方部主体部	2	無し	3	?	?	—	4 3 3	5 5 5	4 4 4
安土瓢箪山古墳 後円部中央石槨	1	無し	3	上?	脇上	—	3 4 4	5 5 5	4 4 5
瓦谷1号墳 後円部第1主体	1	左右	3	上	脇上	横→縦	4 4 4	5 5 5	4 4 4
上殿古墳 南棺 主体部	1	左	3	上	脇上	—	4 4 4	6 6 6	4 4 4
上殿古墳 北棺 主体部	襟付	左(右)	5	上	脇上	—	— — 2	— — 5	— — —
新沢千塚500号墳 後円部副槨	1	左	3	上	脇上	縦→横	3 3 3	7 7 7	4 4 4
タニグチ1号墳 主体部	1	—	3?	上?	脇上?	—	— — —	5 5 5	— — —
大墓古墳	2 (方形板の 集合)	—	3?	上?	脇上?	縦→横	— — —	— — —	— — —
將軍山古墳 後円部主体部	?	?	?	?	?	—	— — —	— — —	— — —
園部垣内古墳 後円部主体部	2	左右	3	中上	脇上	縦→横	3 3 3	7 7 7	3 3 3
中山B-1号墳 後円部中央石槨	1	左	3?	上	脇上?	—	4 (4) (5)	5 (6) (6)	4 (4) (4)
稲童15号墳 主体部	1	左	3	?	—	—	4 5 5	1 1 1	5 6 6
若八幡宮古墳 後円部主体部	2(刳)	無し	3	中上	脇上	—	(4) 5 5	(7) 9 9	? 4 4
熊本山古墳 主体部	1	左右	3	中上	特殊	縦→横?	3 4 4	5 6 6	4 4 4

この表は、小林謙一・橋本清一氏指導のもと、伊賀が作成した。
 地板の重ね(上下)の「上」とは、下から順次上重ねするもの。
 地板の重ね(左右)の「脇上」とは、後胴中央を中心に順次左右に上重ねするもの。

は、左右両側に備える。革綴じは、脇から引合板の方向に向かって横方向に進み、その後下から上へと段間を接合するべく縦方向に綴じが進む。前胴左右の豎上板の下にくる第1段の2枚の方形板は、上下に分割されており、引合板に接するワタガミ緒孔をもつ方形板は正方形を呈する。

引合板が両側につく例は、園部垣内古墳例をはじめ、茨城県常陸狐塚古墳出土例^(注71)・佐賀県熊本山古墳出土例^(注72)にもみられ、後の長方形革綴短甲に普遍的にみられることから、熊本山古墳の年代観(5世紀前半)も加味して考えると、新しい要素とみることができる。

また、前胴第1段の方形板を正方形にして前胴の高さを下げたものに、奈良県新沢500号墳出土例^(注73)があるが、これは脇削り加工を施す方形板の数を減らす工夫ともみられるが、瓦谷1号墳の場合、正方形の板を使用しながらも、その上にさらに長方形の板を追加して一般の方形板と同寸にしており、結果として脇削りの手間を省くことにはなっていない。

方形板の横方向の枚数が各段とも同じで、なおかつ左右対称の前胴構成をとるものは、段ごとに枚数を違えるもの(熊本山古墳例・福岡県稲童15号墳出土例^(注74)など)よりも、相対的に古い時期の古墳に出土例が多いようである。

このようにみると、瓦谷1号墳例は現在知られている他の方形板革綴短甲と比較した場合、古い要素と新しい要素が混在していることに気づく。

鏃形石製品 3点を数える鏃形石製品は、多少のプロポーションの違いはあるが、いずれも同形式で、平根腸扶式あるいは無茎式三角形として分類されたものに属する。

瓦谷1号墳出土例は、これらの形式の中では腸扶が比較的浅い部類で(泉森 皎分類の第2形式第2類^(注75))、これと近い形態をもつものは、奈良県東大寺山古墳^(注76)で数多く出土している。このほかにも、同池ノ内7号墳^(注77)や長野県社軍神遺跡^(注78)、朝鮮半島の金海大成洞13号墓^(注79)などで認められる。

この形式の模倣原体は、京都府妙見山古墳・同向山古墳出土の銅鏃や椿井大塚山古墳・和泉黄金塚古墳東榔出土の鉄鏃の中に形態の類似するものがみられ、それらを碧玉や緑色凝灰岩で模倣した一種の模造品である。また、瓦谷1号墳出土の鉄鏃の中で広根短頸腸扶長三角形鉄鏃として報告したRM-39も、その形態の類似から原体の候補になりえよう。

出土古墳の築造年代を総覧すると、古墳時代前期でも後半の4世紀後半から末に限定され、当該期に集中して製作配布されたものである。

その製作地については、現在までに国内で4遺跡が知られているが、瓦谷1号墳と同形式のものは、上記の社軍神遺跡で仕上げ段階の未製品が出土していることから、ここを製作地の1つに当てることができる。

鏃形石製品の出土地点は、現在までに25例余りが知られているが、その分布は畿内とその周辺地域であり、中でも奈良盆地に集中する傾向がある。したがって、瓦谷1号墳が奈良盆地に近接する立地条件にあることから、比較的容易にそれらの品を受容することができたのではなかろうか。鏃形石製品が他の碧玉製品、たとえば腕輪形石製品などと同様に、ヤマト王権主導のもとに少数の製作地で集中的に生産され、ヤマト王権の意志で各地に配布された一種の威信財であることが想定される。

そうした儀杖色の濃い鍔形石製品が瓦谷1号墳の場合、46点を数える鉄鍔に混じって1つの盛矢具に納められていた。実際、少数の儀杖用(中世に「上差矢」「野矢」として制度化されるもの)と多数の実戦用(中世の「征矢」)から「一組の矢」とする習慣が、少なくとも古墳時代中期までさかのぼることが指摘されている^(注80)。そうした矢鍔の組合せの祖型がすでに古墳時代前期に成立していたとする見解に立てば、瓦谷1号墳の鍔形石製品の使用のあり方は、中世の「上差矢」に相当するとみることもできよう。

鉄鍔 鉄鍔は、第1主体から木製盛矢具かと思われる容器状のものに収納された状態で46点、第2主体では革製漆塗り鞆に納められた状態で41点、合計87点を数え、1古墳の出土量としては多い部類に入る。瓦谷1号墳の場合、いずれの主体部も盛矢具に納められた状態であり、鉄鍔(矢)が容器を伴わずに単体で棺内外に副葬する形態はとらない。

出土した鉄鍔の形式と点数は、第1主体では圭頭斧箭式32点・小形の腸袂柳葉式5点・広根短頭長三角形式4点・鍔身が比較的長い柳葉式4点である。また、第2主体では、圭頭斧箭式12点、広義の柳葉式の範疇で捉えられる鉄鍔29点がある。

両主体に共通にみられ、最も点数の多い圭頭斧箭式鉄鍔は、一般的には弥生時代に祖型が求められ、古墳時代の全期間を通じてみられる実用鍔である。古墳時代を通しての形態の変化は、鍔身幅が狭く小形のものから徐々に鍔身幅を広げるとともに全体の規模を増加させる変化をたどり、6世紀後半以降、篋代が挿入される部分の段(関)を有するものが出現するという形態変化を示す。その出土した地域的特性は、大半が西日本に限定され、特に古墳時代後期には九州地域で多量の出土をみる^(注82)。

瓦谷1号墳出土例は、杉山秀宏分類の圭頭鍔群B形式(従来の圭頭斧箭式)のI型式(無関)第2型式(鍔身長6~8cm)に属し^(注83)、方形板革綴短甲を伴う時期から須恵器TK47型式に至るまで比較的長期間にわたって同一形式が存続すると考えられる。ただ、この種の鉄鍔の分布を古墳時代前期に限定すると、仿製鏡と石製腕飾類(腕輪形石製品)が配布される前期でもその中段階に一端途切れるものの、その出土地域は、ほぼ畿内に限定される。たとえば、京都府元稲荷古墳出土例がその最も古い例で、その後、一定期間において4世紀後半に位置付けられる同石不動古墳・同ヒル塚古墳^(注86)・奈良県富雄丸山古墳^(注87)などで多量の出土をみる。瓦谷1号墳出土例は、前期後半にみられるこの種の鉄鍔の復活という現象の中でとらえるべき資料ということが出来る。

次に、第1主体との間にこの種の鉄鍔に形態上の差を見い出せるかという点については、全体的な傾向として第1主体出土例の方が、第2主体に比べて規模の大きなものが含まれ、法量の面で多様性に富むということが指摘できる。

第1主体出土の腸袂柳葉式鉄鍔(RM-33~RM-37)は、小形で茎・逆刺とも未発達である。鍔身は、厚いが鎬を造らず、両丸造りであることから、いわゆる類銅鍔鉄鍔とはいえない。鍔身部だけをみると、京都府妙見山古墳出土例と近似するが、妙見山の場合、茎部が発達し、篋被を有するという相異点がある。現在のところ、これと等しい類例は乏しいが、茎断面が円形に近い点や鍔身の造りの特徴は、初源期(庄内期)の腸袂を有する柳葉式鉄鍔の系譜上にあるとみられる。

第1主体の広根短頸長三角形式鉄鏃(RM-39~RM-42)は、地理的に近接する京都府椿井大塚山古墳に類例がみられる^(注89)。また、大阪府紫金山古墳^(注90)・福岡県石塚山古墳^(注91)からも類似する形態の鉄鏃が出土しており、古墳時代前期前半期に編年されている古墳からの出土が目立つ。瓦谷1号墳出土例は、これらの最古式の前方後円墳出土の鉄鏃に比べると、茎の長さや逆刺端部の形態に若干の差異が見いだされ、特にRM-41・42などで形態の変化が著しく、これらの退化形態とみることができる。

第1主体出土の柳葉式鉄鏃のうち、RM-43は、鏃身が比較的長身化したもので、大阪府黄金塚古墳東柳出土例^(注92)を古いものとして、古墳時代中期前半に盛行する鏃の形態に近い。したがって、第1主体出土の鉄鏃組成の中では比較的新しい要素をもった鉄鏃といえる。

第2主体で出土した鏃のうち、本文中で第2及び第3類型として扱った柳葉式鉄鏃(RM-105~RM-120)は、その規模に差異がみられるが、両者とも鋒からふくらをもった後、内湾してゆるやかな円弧状を呈して関部が不明瞭なまま茎に至る形態(杉山分類の柳葉鏃群I形式第1型式)を呈している^(注93)。その祖型は弥生時代にあり、古墳時代前期に盛行した後、中期初頭には消長するものである。特に、瓦谷1号墳で出土した小形の一群は、たとえば小札革綴甲(札甲)が出土した奈良県城山2号墳出土鏃^(注94)の中に類品が見いだされる。

同じく、第2主体出土の柳葉式鉄鏃の範疇で整理したRM-121~RM-123の3点は、先の第2類型と類似した形態を示すが、鏃身側線が「S」字形にくびれ、比較的明瞭な関を有することから、これと区別して第4類型としてまとめた。この鏃群は、篋被をもたない柳葉系銅鏃と共通した平面形を有することから、類銅鏃形鉄鏃と捉えるべきであるが、鏃身は扁平化し、鏃を造らない両丸造りとなることから、類銅鏃のなかでは新しく位置付けられる。瓦谷1号墳と同じ方形板革綴短甲が出土した奈良県上殿古墳^(注95)・福岡県若八幡宮古墳^(注96)に同形態の鉄鏃が含まれている。

このように、瓦谷1号墳から出土した鉄鏃は、両主体出土のものを通してみると、圭頭斧箭式といわれる広義の柳葉式の2型式で大半を占め、これに若干の腸袂柳葉鏃・広根短頸長三角形式鉄鏃・類銅鏃鉄鏃が加わるという組成を示す。

その形態や規模からその大半が実用鏃とみられるが、広根系の短頸鏃は古式の要素をもつ。先の鏃形石製品との形態的類似性を含めて解釈すると、威信財的な性格をもった儀仗用の矢鏃として、ヤマト王権から直接配布されたとすることもできる。

そのほかの鉄器 長柄の武器として鉄槍と鉄矛がある。その内訳は、第1主体からは鉄槍のみが7口、第2主体には鉄槍4口と鉄矛2口がある。

両主体にみられる槍は、第1主体と第2主体でかなり形態・法量の差が認められる。つまり、第1主体の鉄槍は刃部有効長20cm前後のものと、同15cmの2種類があり、概して小形で細身のものが多い。しかし、第2主体では、全国的にみれば、標準サイズの範囲で捉えられるが、第1主体の槍身と比べると、相対的に規模が大きく、刃部有効長(16.5~31.5cm)や刃部幅(2.4~4.8cm)が多様であるという違いが容易に読みとれる。また、保存環境の違いにもよるが、第2主体の槍には、木柄の痕跡が認められるものが多く、槍身との着柄状態がわかる資料が少なくない。

木柄との着柄部にみられる拵には、直截式3と呑口式1の2種類が確認できる。ただし、その違いは木柄の先端の形状の違いだけで、いずれの場合も、断面が厚みのある杏仁形に形成された木柄に槍身の茎を挿入した後、糸巻きと黒漆掛けを数回繰り返して着柄部を固定している。拵は、古墳時代前期前半に位置づけられる京都府椿井大塚山古墳出土例^(注97)や兵庫県権現山51号墳出土例^(注98)では呑口式が多いのに対し、前期後半の静岡県松林山古墳出土例^(注99)や奈良県上殿古墳出土例^(注100)などでは直截式が卓越し、呑口式から直截式へと推移する傾向があるようである。瓦谷1号墳出土例の場合、直截式が圧倒的に優勢で、新しい要素といえる。

一方、鉄矛は、第2主体から2口出土している。いずれも同形態を示す。つまり、矛身部のくびれが非常に浅く、矛身部より少し短い袋部をもつ特異な形状を示す。一見袋穂式の鑿に近似するが、長柄を伴うので矛とすべきである。矛身の造りは偏平な鑄造りで、身幅は狭鋒の部類に入ろう。臼杵 勲の分類から名称を与えれば、「直截円筒袋普通形有関狭鋒鑄造り銚」^(注101)となる。

一般に鉄矛は、鉄槍より遅れて4世紀後葉に広鋒鑄造りのタイプとして出現し、長身化・狭鋒化の変化を示しつつ、5世紀後半以降、茎式の槍に代わって盛行する長柄の武器と考えられている。瓦谷1号墳出土例は、一般的な初源期の矛に比べるとやや形態が異なるが、古手の矛の一形態として捉えられる。

4. 埴輪(形象埴輪)について

瓦谷1号墳の埴輪には、樹立された状態で原位置を保つ個体は全くなく、すべて墳丘流土などから細片となって出土した。その出土位置は、相当広範囲にわたり、中には墳丘周辺に営まれた埴輪棺や小方墳群の埴輪と区別できないものもある。ただ、墳丘に近接して営まれた埴輪棺は、ほかの埴輪棺より古い様相をもつ埴輪が使用されており、本来は瓦谷1号墳の墳丘に樹立されていた埴輪が転用されていた可能性が指摘できる。

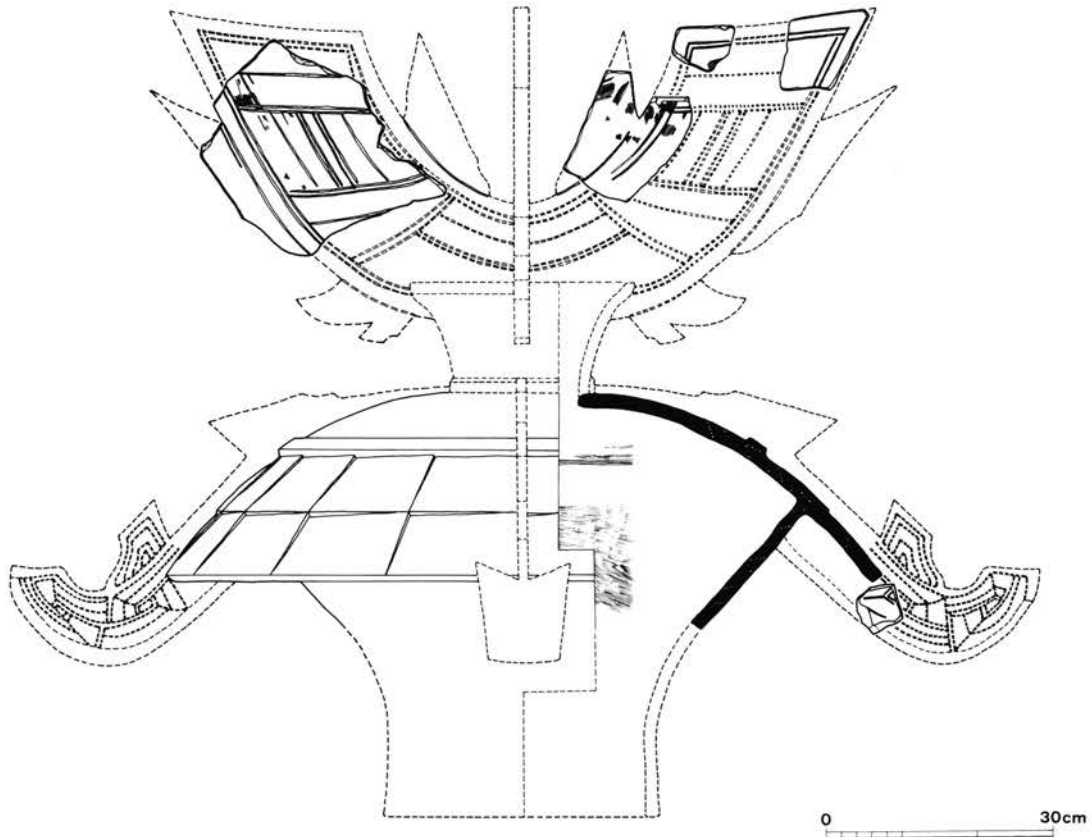
ここでは、こうした埴輪棺の資料も含めて検討したいが、円筒埴輪は第5章第4節で扱うので、本項では形象埴輪、とりわけその全形が復原可能な蓋形埴輪と盾形埴輪について若干の検討を加える。

蓋形埴輪について 蓋形埴輪は、6号埴輪棺には比較的大きな笠部の破片が用いられ(図版第36-101)、前方部東側の周溝からは笠部・立ち飾り部などの破片資料がややまとまって出土した。さらに、後円部墳丘斜面やその周辺部、墳頂部盗掘坑などからも小片が散乱した状態で出土しており、出土埴輪の中では目立って多い傾向が看取される。

こうした埴輪片のうち、6号埴輪棺に転用された笠部を基礎として、墳丘各所から出土した資料を図上で操作して復原したのが第52図である。

笠部の形態の特徴や製作技法については、本文の101の資料の事実報告でその形態や製作技法について詳述したので(96頁)、ここでは再度触れない。

軸受け部は、図示資料に組み合う良好な資料がなく、推定の域をでない。そこで、口径の上で直接接合しない同部の破片(図版第28-44)をみると、軸受け部下端突帯は、幅広い台形断面を呈



第52図 蓋形埴輪復原図(はめ込んだ破片は、同一個体とは限らない。)

し、軸受け部の下端(笠部との屈折点)より数cm上に貼り付ける。また、この軸受け部片には、その内面に円周に対して直交して円の中心に向かう板状粘土が取り付く。これは、立ち飾り部が軸受け部に直接取り付いて、笠部から分割されずに連続的に製作されたことを示すとみられる。

次に、1991年度の概報^(注102)では、その存在を否定していた笠部外面に蕨手状に四方に張り出す造形(いわゆる「ろくぼく 肋木」)については、その後の調査で、鍵手文を表裏に線刻した板状の小破片を見いだした(図版第28-39・40)。それが奈良市佐紀陵山古墳(伝日葉酢媛陵古墳)出土の蓋形埴輪^(注103)にみられる肋木先端部の側面に表現された文様と類似することから、その存在を想定した。もっとも、笠部外面に肋木が取り付いていた痕跡は、現存する資料にはその剥離痕さえ認められない。ただ、笠部の残存率が全円周の1/4以下の個体で占められる点や、器表面の磨滅がひどく、剥離痕が残らない条件にあるのも事実である。そういう意味で肋木の存在を先の小破片のみで断定することは問題を残すが、その存在の可能性を否定することもできないであろう。

立ち飾り部は、幅の広い「U」字形に成形した粘土板を直交させて四方に張り出させている。先述のように、笠部と一体に成形される。一枚の飾り板の特徴をみると、上辺は直線的で、その内外の側面に鱗を付加している。外側上段鱗は、下縁を「S」字状に造形しているが、ほかの鱗も同様に造ったと思われる。なお、鱗の内部は素文で線刻は加えない。飾り板本体は、線刻で装飾を加える。文様構図は、下半部に不明な点を残すものの、いわゆる「五線帯」の交互配列を基本とする。すなわち、飾り板本体の外形に沿った2本の複線からなる縁取線を入れ、その上端と

中位に複線縁と中心線からなる「五線帯」を配する。この内外を橋渡しする2本の「五線帯」に挟まれた空間には、飾り板本体の輪郭に沿った縦方向の「五線帯」を横に並べている(縦位並列五線帯)。

以上がこの埴輪の客観的な属性である。

次に、この蓋形埴輪について、型式学的な編年観を中心に検討を加える。

蓋形埴輪の型式学的研究は、形象埴輪の中では最も進展している分野であり、いくつかの優れた研究が存在する。^(注104)ここでその研究動向に深入りする余裕はないが、最も研究史的に新しく、かつ変遷の政治史的背景にまで踏み込まれて総括的な研究を近年相次いで発表されている松木武彦の研究成果に注目したい。^(注105)

同氏はまず、先学諸氏の蓋形埴輪の形態上の分類を再整理して、立ち飾りの有無で二分し、立ち飾りを有するもの(第I形式)は、さらに肋木の有無を指標に、それをもつもの(a類)ともたないもの(b類)に細別し、それぞれの型式の変遷過程をいくつかのタイプに分類して、その編年序列を構成して整理された。そして、蓋形埴輪の変遷は、いくつかの型式または型式群の交替の過程と捉え、その交替の時期は、大きく3つの画期として現われ、その画期の社会的・政治的背景にも考察を深められた。

この松木の編年(型式序列)に、ここで取り上げた蓋形埴輪を照合させる。細部の異同は後述するが、瓦谷1号埴出土の例(瓦谷例)は、I型式-a類の最古相に位置付けられる「伝日葉酢媛陵タイプ」に最も近い型式といえることができる。

それでは次に、その根拠となる属性を考察する。

瓦谷例が「伝日葉酢媛陵タイプ」に帰属する要素を拾い上げると、以下が挙げられる。①全体に規模が大形で、他と傑出する佐紀陵山古墳(伝日葉酢媛陵古墳)出土例と比べれば、一周り小さいものの、それ以外と比較すれば規模の上で他を圧倒している点。②笠下半部(笠縁部)外面の施文は、段差を造り出すことによって立体的に表現する点。③笠部本体と立ち飾り部が別体でなく、一連のものとして製作されている点。④立ち飾りの飾り板は、幅広く上辺は直線的な「J」字形を呈する。飾り板に取り付く鱗は大振りで、各辺は幾分曲線的で、下辺は「S」字状のカーブを呈する。さらに、飾り板本体の線刻表現は、均整のとれた「五線帯」の交互配列で内部を充填するなどの諸点。⑤側面に「鍵手文」を線刻する肋木が存在する可能性がある点。このように瓦谷例は、「伝日葉酢媛陵タイプ」の中でも佐紀陵山古墳出土の一例^(注106)(陵山例)とかなり共通すると指摘できる。

一方、瓦谷例は、典型的な「伝日葉酢媛陵タイプ」(陵山例)とは異なる形態上の要素を見出すこともできる。たとえば、a)中位で屈曲する円筒形基台の特異な形状(他の円筒埴輪を基台として組み合わせて樹立した可能性をうかがわせる形状)。b)笠上半部の直弧文などの線刻文様の欠如。c)笠部の断面形が、円筒形基台との接合点で屈曲せず、ほぼ同じように曲がる深い菅笠状を呈する点。d)立ち飾り部の飾り板を充填する線刻文様の細部の変異。すなわち、飾り板の外形に沿った縁取り線が内外二辺ともに2本の複線となり、縦方向の並列五線帯の外縁線が飾り

板の縁取り線と融合して共有されている点。さらに飾り板の軸線に沿った縦方向の「五線帯」の表現、特に横方向に並列する「五線帯」の接するところが、陵山例では左右の「五線帯」が接する部分で交わり、それぞれの外縁の1本を共有して、この部分を3本線で現わすのに対し、瓦谷例では、並列する「五線帯」は分離して独立している点(第43図参照)。

以上に挙げたように相違点も少なからず指摘できる。

それでは、松木が指摘するように、瓦谷例を「伝日葉酢媛陵タイプ」とは別型式の「瓦谷タイプ」^(注107)として独立させてよいであろうか。松木の「瓦谷タイプ」想定の根拠に、「伝日葉酢媛陵タイプ」の要素は多分に見えるが、肋木の欠如と菅笠状の笠部形態を挙げることができる。このうち、肋木は、概報の段階ではその存在に気付かなかったが、その後の整理で肋木の存在が不十分ながらも肯定された。肋木の有無は、松木の大型式区分の重要な要素であるため、瓦谷例に対して新たな型式を設定するよりは、従来の「伝日葉酢媛陵タイプ」の範疇に含めて考える方が適切と思われる。

以上、瓦谷1号墳の蓋形埴輪をみて、その型式学的な位置付けなど、松木の研究に導かれながら若干の検討を加えた。その結果、瓦谷例は、同氏が最も初源的な蓋形埴輪の型式と位置付けた「伝日葉酢媛陵タイプ」の範疇で捉えるべきであるという結論を得た。

盾形埴輪について 瓦谷古墳群からは大きく3種類の系統の盾形埴輪が出土している。このうち、外枠と横棧に直弧文を施した直弧文系盾形埴輪が1号墳周辺から集中して出土しており、鋸歯文系などの他の盾形埴輪を圧倒している。このため、この直弧文系の盾形埴輪が1号墳に伴うと考え、先の蓋形埴輪と同様、佐紀陵山古墳出土の直弧文系盾形埴輪^(注108)を手本にして、復原図を作成した(第53図)。

ただ、瓦谷1号墳の盾形埴輪は、蓋形埴輪ほど残存率が高くなく、全体の一部を残すにすぎない。したがって、全体を復元的に考察するにはやや問題があるので、ここでは、その断片的な特徴のみ検討してみたい。

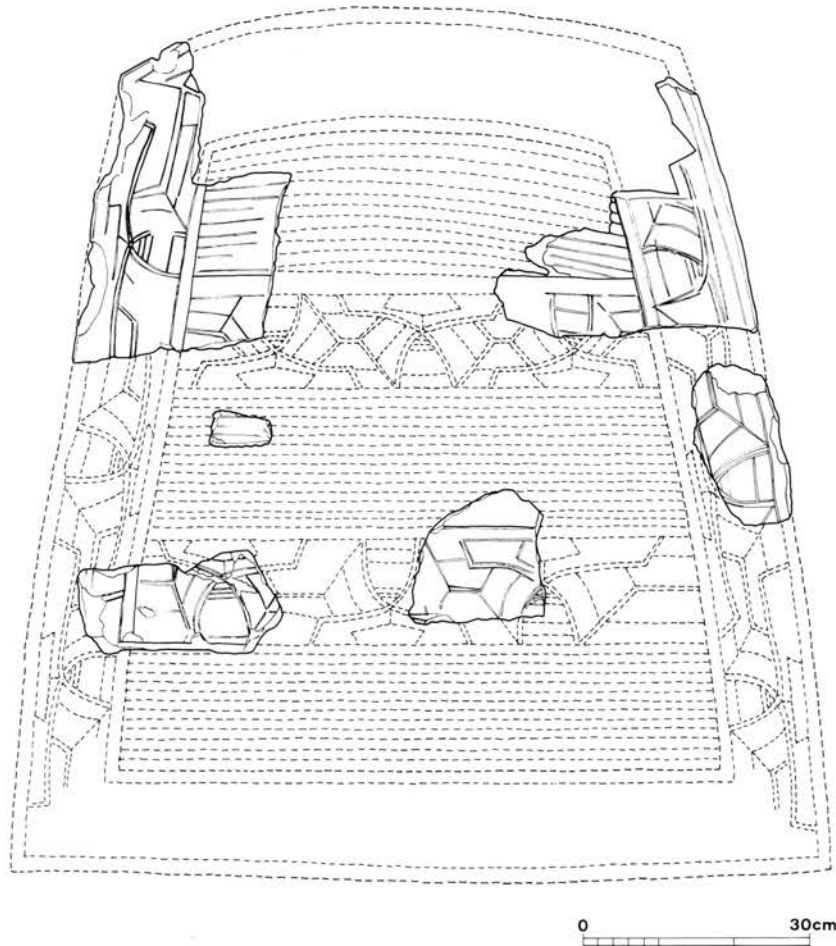
盾面の平面形は、その上半部分のみ形状がわかる。上位に向かって内向する側辺ラインが隅部で鈍角に折れて、上辺は斜め上方に浅い角度で立ち上がる。上辺の形状は、復原図のように、ゆるい円弧を呈すると思われる。側辺の下半と底辺は、不明である。

盾面の文様は、段差と線刻で表現される。すなわち、盾面の外形に沿った形の直弧文施文帯を周囲に配して外枠とし、外枠の内部には、外枠と同じ意匠の直弧文を施した横方向の帯(横棧)を渡す。これら直弧文帯を除く空間は素文ではなく、細かい横方向の平行線が施される(地板部)。

それぞれの施文部は、同一面で表現されるのではなく、段差で表わされる。すなわち、断面的にみると、外周の直弧文施文帯(外枠)が最も高く、内部の直弧文施文帯(横棧)・内部の平行沈線帯(地板)の順に階段状に低くなるように造形する。ただ、この段差は見かけ状のもので、断面的には文様面を構成する辺が長く、段差の直立する辺が短い鋸歯状を呈する。このため、実は外周から地板に向かい階段状に薄く削るのではなく、段差部分のみ文様面がだんだんと傾くように作っているのである。

外周区(少なくとも側辺側)と横棧区に施された直弧文は、忍岡系対称文の連続反転図形であって、単線からなる縁取り線を伴っている。

内部の平行線部分(平行沈線帯)は、最上段の個体が残存しているが、そこに施された平行線は、中軸方向に向かって上の方へと偏るように傾いている。これらの状況は、盾面上辺の円弧ラインに規制されたためとみられる。



第53図 盾形埴輪(直弧文タイプ)復原図
(はめ込んだ破片は、同一個体とは限らない。)

盾面の横断面形は、外周区より内側では、

裏面側にカーブするが、外周区は、逆に表面側に反り返っており、全体としてゆるやかな「S」字状を呈する。縦方向の断面は、上部の側辺付近しかわからないが、その部分を見ると、左右両側とも同じ形状を示し、残存部の下半は直線状を呈するが、上半(上辺の外周区)になると表面側に反り返る。

裏側の円筒形基台と盾面との製作上の関係は、偏平な長円形断面に加工した円筒部の平坦な面を正面にして、その外側に盾面外縁部を鱗状に付加することで形成する。つまり、円筒部と別に製作した盾面を合体させるのではなく、円筒部の一側面も盾面として利用し、その外縁部のみその側面に付加する。このため、盾面の側縁部と盾中軸寄りの部分との器壁の厚みはほとんど変わらない。以上がこの盾形埴輪の断片資料からうかがえる。

ところで、盾形埴輪は、高橋克壽が、盾面の文様区分の要素(文様の分割の仕方)を指標にして、大きく二つに分類している。つまり、「盾面が「目」字形ないしそれに準ずる形に分割されているもの」を一類、「盾面がⅡ字形の区画によって分割されているもの」を二類と分けた。そして実物の盾と比較して、二類は類例の多い革製盾をモデルにしたもの、一類は実例はないが、そこにみられる文様構成から木製盾を模倣原体としたものと想定し、全体としては一類が二類に先行するという編年的位置付けを考察された。^(注109)

瓦谷1号墳に伴うものと想定した直弧文系の盾形埴輪は、高橋の分類の一類に属し、その最も古い盾形埴輪と捉えられた佐紀陵山古墳出土例と基本的には同型式である。

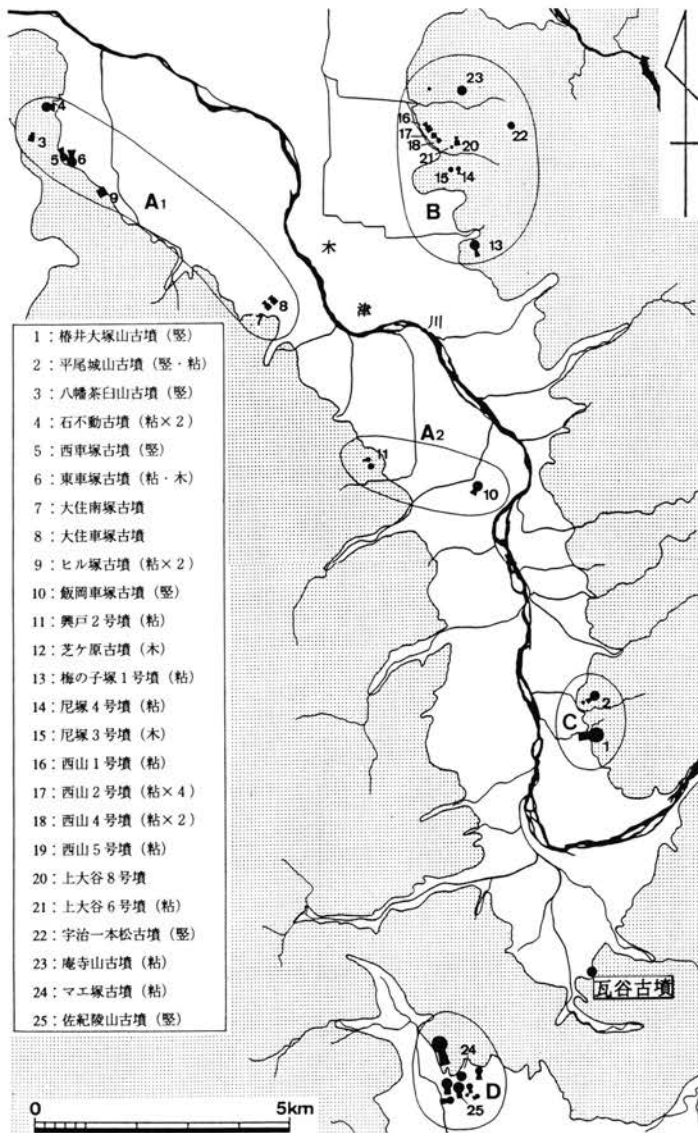
断片資料のため厳密な比較はできないが、佐紀陵山古墳出土例と異なる点を挙げると、外周区(外枠)の直弧文の配置に相違点が見いだせる程度である。その他の属性は、佐紀陵山古墳出土例と変わらず、基本的には同型式とみて誤りない。

なお、瓦谷1号墳出土例には、盾面に赤色顔料(ベンガラ)が塗られている。

5. 瓦谷1号墳の位置付け

ここまで、瓦谷1号墳の墳丘形態やそれに伴う外部施設、中心埋葬施設(内部主体)の構造、副葬品・埴輪などの出土遺物を検討して、この古墳が持つさまざまな点を明らかにした。

その1つの成果として、築造時期の問題がある程度具体化できるようになった。すなわち、上



第54図 木津川流域前期古墳分布図

古墳名の後の () は、中心主体部の構造を示す。

(竪). 竪穴式石槨 (粘). 粘土槨 (木). 木棺直葬

記の検討を通じて、古墳時代前期後半、和田晴吾編年の三期ないし四期に相当する。^(注10) 実年代でいうならば、前期の一期を3世紀後葉に始まるとする立場に立てば、4世紀の後半でも後葉に近い時期(第4四半期)にその築造時期が求められるよう。

次に、周辺地域の中での瓦谷1号墳のあり方を検討する。ここで対象とする地域は、山城盆地の中でも旧巨椋池以南の南山城と呼ばれる木津川流域を中心に、大和盆地北辺部も含めた地域とする。この地域の古墳時代前期の古墳の分布を第54図に示した。

その分布のあり方には、古墳が集中する地域と、ほとんど前期古墳が営まれない地域が認められ、この地域の全体をみた場合、全地域に均一に分布する形態をとらない。そこで、古墳の分布の偏りを指標に、自然地形や後の令制下の郡域も参照に古墳のグルーピング

を試みた。

木津川左岸では、現在の八幡市から綴喜郡田辺町にかけて古墳の集中域があり、これをA群とした。A群は、男山・志水・大住・興戸・飯岡の5支群から構成され、八幡茶臼山古墳・八幡西車塚古墳・大住南塚古墳・飯岡車塚古墳などは竪穴式石槨を内部構造とする。

木津川右岸では、令制久世郡の領域に古墳が集中する(B群)。広野・上大谷・西山・尼塚・梅ノ子塚の5支群が比較的限られた小地域に展開する。A群に比べて墳丘規模が小さく、内部主体も粘土槨を中心とする。

同じく、木津川右岸で現在の相楽郡山城町に相当する地区に、椿井大塚山古墳・平尾城山古墳が近接して営まれており、古墳の数は少ないがこれをC群として捉えておく。

一方、木津川流域ではないが、瓦谷1号墳から直線距離で約3kmと近接する奈良盆地の北方、いわゆる曾布の地に営まれた佐紀盾列古墳群をD群としておく。佐紀盾列古墳群は、大形の前方後円墳と中規模の前方後円墳・円墳から構成され、前者の多くはヤマト王権の盟主墳と考えられている。この古墳群のうち、西半に位置する五社神・陵山・石塚山・マエ塚・瓢箪山古墳などは、前期後半期に属する。

このように、瓦谷1号墳周辺の前期古墳を概観すると、その分布には一定の偏りがあり、王陵を含むD群は別として、それぞれの群は、特定の小地域社会の基盤の上に相対的な独自性を保ちながら営まれていたとみられる。

ただし、C群の椿井大塚山古墳は、他の群に比べ唯一前期前半の早い時期にさかのぼり、広く山城盆地全域の中で最初に出現する大規模な前方後円墳として他と区別すべきである。つまり、A・B群は、それが営まれた地域に肥沃な生産基盤をもち、在地勢力の自立的発展によってその勢力基盤を拡大していったと考えられるのに対し、C群が営まれた地域は可耕地が乏しく、在地勢力が発展する背景がない。椿井大塚山古墳から出土した多量の三角縁神獸鏡の同範鏡が全国各地の古墳に分有されている側面を重視すると、その被葬者は初期ヤマト王権内にあつて極めて重要な地位を占めていたことが予想される。そして、その古墳の出現はヤマト王権中枢からの政治的進出と位置付けられ、対外進出の門戸ともいべき交通の要衝であるこの地に王権主導のもとに古墳が造営されたと認識することができる。同じ地区に続いて営まれた平尾城山古墳も同様の性格をもつとみられ、在地勢力の台頭をそこに読み取ることはできない。

一方、他の群(A・B群)は、全国的に古墳の築造が急増する古墳時代前期でも、後半に築造を開始し、C群とは区別しなければならない。そして、この地域の首長層は、自らの在地における権益を保証されるかたちでヤマト王権のもとに服属し、共通の葬送儀礼を受け入れることで擬制的同族関係、すなわち血縁原理にもとづく祖霊世界の重層的編成を媒介とした政治秩序に組み込まれる。

このような周辺古墳の歴史的環境から瓦谷1号墳をみた場合、木津川流域という限られた地域にあつて、単独で営まれた感が強い。つまり、木津川左岸でもその上流域にあたる現在の相楽郡精華町・木津町の地域は前期古墳の空白地域で、瓦谷1号墳のみが唯一前期に営まれた古墳とし

て存在する。瓦谷1号墳の前面には、広大とはいえないまでも生産基盤たる平野があり、弥生時代以降在地勢力が形成される基盤が用意されていた^(注111)。そういう意味で、瓦谷1号墳を営んだ集団は、内在的に発展を遂げた在地勢力と捉えることができる。

ただ、ここで注意しなければならないのは、先に前期古墳の分布で示した奈良盆地北辺のD群のあり方である。すなわち、その実態の解明が比較的進んでいるマエ塚古墳^(注112)や佐紀陵山古墳で用いられた埴輪と同形態の埴輪が瓦谷1号墳で出土している点である。高橋克壽は、この奈良盆地北部を中心に古墳時代前期後半に出現する斉一的な内容をもつ埴輪群を抽出して整理し、それを生み出した勢力を「大和北部勢力」と呼んだ。そして、初期ヤマト王権の東方への進出過程を時期的に二つに分け、その前半は王権の所在地である奈良盆地南東部の勢力による初瀬谷を通り南伊勢方面への進出を考え、これに対して前期後半に王陵が盆地北部に移動するのを契機に「大和北部勢力」が台頭し、奈良山を越えて木津川をさかのぼり、北伊勢を通過し美濃に至る新しいルートが開拓された^(注113)と解いた。

この見解にしたがうと、瓦谷1号墳は「大和北部勢力」が新たに開拓した東方への進出ルート上に位置し、大和から山城へ抜け出た木津川流域を見渡せる地に営まれている点は見逃せない。

初期の鉄製甲冑が出土する古墳が当時の交通路の要衝に望む丘陵上、または低台地上に位置する前方後円墳であるとする指摘^(注114)も含めて考えると、瓦谷1号墳の位置はまさにこうした交通路に面しており、在地勢力ではあるが、椿井大塚山古墳と同様に外交ルートに係わりを持つヤマト王権に直結した政治勢力の進出という側面も一方では認めないわけにはいかないであろう。

(伊賀高弘)

第3節 古墳祭祀における靫の役割と性格について

1. はじめに

瓦谷1号墳第2主体から革製漆塗り靫1点が出土した。古墳に副葬された靫は、管見による限り、26例を数える(付表9)。近年は、遺存状態の良好な靫の出土が続いたり、古い資料が再報告されるなど、靫に関する資料は増えつつある。いくつかの資料については、製作技術を中心とした詳しい検討も行われている。

しかし、これまで靫に関する研究は個別の資料を対象とする形態的な研究が多かったため、靫の機能や性格について論じたものはほとんどみられなかった。ここではこの点について検討を行い、特に靫の祭祀的な性格^(注115)について考察することにしたい。

2. これまでの研究と問題点

これまでの靫に関する研究について簡単にまとめ、本稿で検討すべき問題点を明らかにする。

靫は、1948～51年に調査された三重県石山古墳^(注116)ではじめて発掘調査で確認された。石山古墳出土の靫は、赤と黒で直弧文風の文様に塗り分けたもので、その後の出土例と比べてもかなり特異な文様をしている。1960年代には、福井県鼓山古墳(1963年調査)や福島県会津大塚山古墳(1964

付表9 出土鞆一覧表

番号	出土古墳名	個別名称	材質	文様	鏃の本数		備考
					銅鏃	鉄鏃	
1	山形・下小松98号墳		木製漆塗り				
2	福島・会津大塚山古墳	南棺鞆	織物製漆塗り	市松文様	29	20	
3	福島・会津大塚山古墳	北棺鞆	織物製漆塗り	市松文様	—	41	断片資料
4	栃木・山王寺大塚山古墳		革製か	直弧文か	28	—	
5	石川・国分尼塚1号墳		織物製漆塗り	山形文様	57	—	
6	福井・鼓山古墳	1号鞆	織物製漆塗り	綾杉文様	—	約45	
7	福井・鼓山古墳	2号鞆	織物製漆塗り	綾杉文様	—	約45	
8	三重・石山古墳		革製か	直弧文か	12	87	
9	滋賀・雪野山古墳	棺内鞆	革製漆塗り	菱形文様	29	—	
10	滋賀・雪野山古墳	棺外鞆	織物製漆塗り	市松文様	—	21	
11	京都・波路古墳		織物製漆塗り	綾杉文様	—	不明	
13	京都・瓦谷1号墳		革製漆塗り	菱形文様	1	40	
14	京都・西山塚古墳	東側鞆	不明	—	—	23	
15	京都・西山塚古墳	西側鞆	不明	—	—	30	
16	大阪・土保山古墳		革製漆塗り	不明	—		
17	大阪・土保山古墳		革製漆塗り	不明	—		
18	大阪・土保山古墳		革製漆塗り	不明	—		
19	大阪・土保山古墳		革製漆塗り	不明	—		
20	大阪・亀井古墳		不明	—	—	9	
21	兵庫・森尾古墳		革製漆塗り	菱形文様	不明	不明	断片資料
22	広島・大迫山1号墳		革製漆塗り	菱形文様	—	28	
23	広島・大迫山1号墳		不明	鋸歯文様	不明	不明	
24	福岡・琵琶隈古墳		織物製漆塗り		—	10数	
25	福岡・阿志岐B-26号墳		織物製漆塗り		25	13	
26	韓国・大成洞14号墳		革製漆塗り	菱形文様	—	16	

上記のほか、群馬・前橋天神山古墳、岡山・備前車塚古墳などでも鞆が出土しているという。また、鞆と思われる断片資料が、京都・長法寺南原古墳、福岡・石塚山古墳で出土している。

年調査)で織物製の鞆が相次いで出土し、詳細な報告が行われた^(註117)。その後、鞆に関する研究は、観察に耐えるような良好な資料に恵まれなかったこともあり、一時期、停滞を余儀なくされた。

1990年代になると、瓦谷1号墳や滋賀県雪野山古墳で遺存状態の良好な資料が出土したことで、鞆に関する研究は、大きく前進することになった^(註118)。まず、1991年に杉井 健が雪野山古墳出土の鞆について概要を報告し、1992年に筒井が瓦谷1号墳出土の鞆について報告を行った。1994年には菊池芳朗によって会津大塚山古墳出土の鞆が再調査され、詳細な報告が行われた。また、1996年に雪野山古墳の報告書『雪野山古墳の研究』が刊行された。その中で、杉井は鞆の構造について詳細な報告を行うとともに、各地出土資料を細かく検討して鞆の分類を行っている^(註119)。

一方、1993年には、上記のような個別資料の報告だけでなく、鞆の編年を試みた論考が栗林誠治によって発表されている。この論考は、杉井が指摘しているように型式設定の方法に問題があり、ただちに承認することはできない。この点を指摘した上で、杉井は「現在の鞆の研究にもっとも必要とされていることは」「個々の遺物についての詳細な研究と検討である」と述べる。

杉井をはじめ筒井や菊池が、それぞれの報告の中で重点をおいたのは、まさにこの点であった。

すなわち、鞞の構造を明らかにし、その製作技法を復原することで、鞞の実態を解明しようとしたのである。そのような観点から見た場合、杉井が行った構造や表面の文様による分類は、資料的になお制約のある現時点では一応の到達点にあると評価できる。

以上のように、これまでの鞞に関する研究は、その構造や製作技法の解明に重点をおいたものであり、鞞の性格については十分に議論されていなかった。

この点について、これまでに詳細な検討を行ったのは杉井である。杉井は、「古墳時代になって鏃を大量に副葬するという行為が開始された際」「表面を飾る鞞が大量の鏃(矢)を納めるためのものとして創出された」と述べ、鞞の出現は鏃の大量副葬と不可分な関係にあると考えた。この大量に副葬された鏃の多くは有稜系の^(注120)鏃で、これを「見せる」ための鏃であったと推測し、「鏃側を上にして矢を鞞に納めることが必然である」と述べる。また、鞞の表面を菱形文様などで飾ることについても「見せる」ための鏃同様、視覚的・呪術的效果を狙ったものと考えた。以上のことから、杉井は鞞が葬送儀礼の場で用いられたと考えた。

筆者も鏃の大量副葬と鞞の出現は、強い関連性があると考えており、基本的には杉井の考えを支持したい。以下では、この点を前提に、古墳に副葬された鞞や鏃の呪術的な性格について検討するとともに、古墳時代前期の葬送儀礼での鞞の位置づけについても明らかにしたい。

3. 鞞の性格についての検討

鞞の機能について 鞞とは本来、矢を入れておく容器(=盛矢具)の1つであるが、古墳に副葬された鞞が機能面で実用的であるかどうか検討する。

これまでに出土している鞞は、紐通し穴の存在から背負って使用したのではないかという考え方と、形や大きさから使用する時には地面に置いたのではないかという考え方の2つがある。しかし、背負って使用するには大きすぎる鞞が多く、後者の方が鞞の使用状態としては適当と考えられる。紐通し穴が存在しても、鞞を移動させる場合に限り背負ったと考えればよいと思われる。鞞がいわゆる「置き鞞」であったとすれば、古墳に副葬された鞞が鏃側を上になっている点は注意を要する。

例えば、もっとも一般的な使用方法である矢を収納するか、あるいは運搬するといった機能を考えた場合、使用時の便利さから鏃側を下に向けていたと思われる。また、実戦の場で用いられた可能性も鏃側を上に向けて収納するような鞞の場合、矢を取り出す際の不便さから適しているとはいいがたい。

以上のように、運搬用あるいは実戦用とするには鏃側が下を向いている方がより実用的であり、古墳に副葬された鞞については、鏃の持つ呪術的な性格とともに、葬送儀礼の中で考えていく必要があるようである。この点については、杉井のいう「見せる」ための鏃の大量副葬によって、鏃(=矢)を収納する本来的な盛矢具としての機能を発展的に変質させて、葬送儀礼の場で用いられるような呪術的な容器になっていくと考えるのが妥当と思われる。つまり、鞞の機能に実用性を認めることはできない。

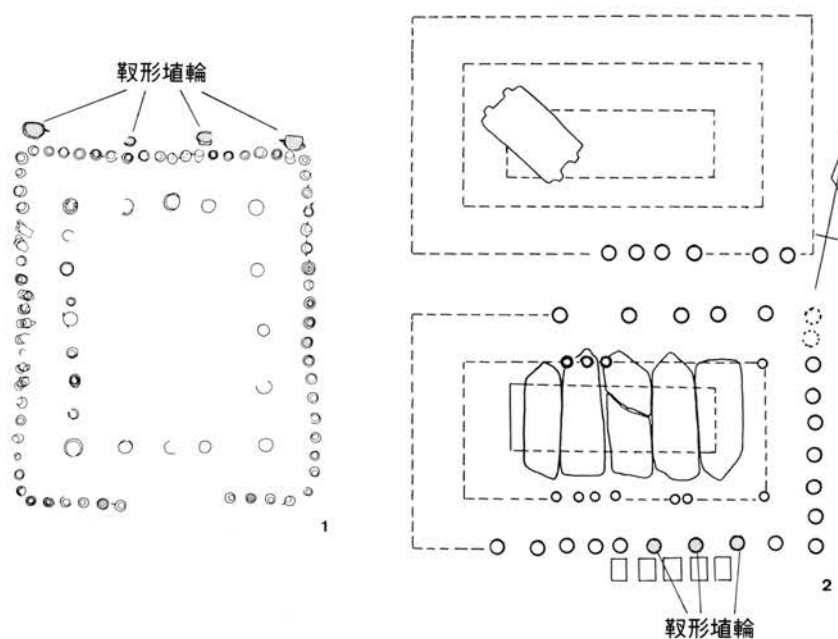
葬送儀礼における实用鞞の役割 鞞は葬送のような儀礼の場で用いられたと考えられるが、それはどのような役割を担っていたのだろうか。鞞は、副葬された状況以外では出土しないので、鞞を模倣した鞞形埴輪が古墳でどのように配置されているのか、つまり古墳に配置された鞞形埴輪がどのような役割を期待されていたのかという点から、鞞の役割について復元的に考えることにしたい。これは、別に検討したように^(注121)、最古型式の鞞形埴輪が雪野山古墳や瓦谷1号墳から出土した鞞を直接の祖型としていることから、鞞形埴輪のもつ役割と鞞のもつ役割には、特に祭祀面で密接な関連があるのではないかと考えられるからである。

以下、鞞形埴輪の使用状況がわかる代表的な2例を取り上げる。

三重県上野市に所在する石山古墳^(注122)は、比自岐盆地北縁の丘陵上に立地する全長120mを測る前方後円墳である。同古墳では筆者が第Ⅰ群とした鞞形埴輪が後円部墳頂の方形埴輪列から出土している(第55図1)。この方形埴輪列は、3基ある主体部のすべてを囲むように二重の埴輪列からなっていた。鞞形埴輪は、東辺外側埴輪列のさらに東側に4個体が外側を向いて置かれていた。また、内側の埴輪列には盾形・蓋形・甲冑形などの器財埴輪がみられ、いずれも外側を向いていたと推定される。各主体部の副葬品から石山古墳は、古墳時代前期末から中期初頭に位置づけられる。なお、主体部の東柳からは鞞1点が出土している。

奈良県御所市に所在する室宮山古墳^(注123)は、全長235mを測る前方後円墳で、第Ⅱ群に分類した鞞形埴輪が後円部墳頂の方形埴輪列から出土している(第55図2)。調査は1950年に行われ、2つある方形埴輪列のうち南側で、鞞形埴輪をはじめ、甲冑形・盾形・蓋形などの器財埴輪が確認された。鞞形埴輪がどちらを向いていたか不明であるが、盾形埴輪がいずれも外側を向いていたことから、鞞形埴輪も同様に外側を向いていたと推定される。室宮山古墳は、副葬品から中期前半に位置づけられる。

代表的な2例から鞞形埴輪をはじめとする器財埴輪は、主体部を方形に囲み、かつ外側を向いて配置されていたことがわかる。これは、器財埴輪に、区画の中心に位置する被葬者を守護するという役割があったことを意味していると思われる。背景



第55図 鞞形埴輪配置状況図(注46・61文献による。一部改変)

には邪悪なものを追い払うという「辟邪の思想」が存在していたことも想像に難くない。

器財埴輪に首長の眠る聖域を守護するという役割が認められるならば、靱形埴輪の役割を具体的に示すと、矢(すなわち鏃)によって邪悪なものの侵入を防ぐ、あるいは追い払うといったものであると考えられる。

靱形埴輪の役割を以上のように想定できるとすれば、靱の持つ役割、すなわち靱の性格も「辟邪」であったと考えられる。

4. 靱の変遷

靱に収納される鏃は、当初銅鏃であったものが時期が下がるにつれて鉄鏃の割合が増えていくことが明らかになっている。また、瓦谷1号墳出土の靱と雪野山古墳出土の靱とは技法上の違いから時間的に先後関係にあると考えられる。以下では、この2点について若干の検討を行い、靱と靱形埴輪の変遷について簡単に整理しておく。

収納される鏃の変化 第I群の靱形埴輪は、大阪府萱振1号墳や三重県石山古墳で出土しているが、共伴する円筒埴輪は、後述するように瓦谷古墳群出土円筒埴輪の第3群に相当するものである。これら3古墳は、埴輪や副葬品の内容から古墳時代前期後半から前期末に位置づけられる(埴輪や副葬品からみると、瓦谷1号墳→萱振1号墳→石山古墳と築造されたと考えられる。ただし、時間差はそれほど大きくないと思われる)。ここで注意しなければならないことは、第I群の靱形埴輪に銅鏃が描かれるのに対して、同時期あるいはやや先行する瓦谷1号墳出土の靱に鉄鏃が主体的に収納される点である。同様に、石山古墳出土の靱でも、銅鏃12本に対して鉄鏃87本が収納されていたという。このことから、少なくとも古墳時代前期後半には鉄鏃が主体と考えられる。

一方、滋賀県雪野山古墳出土の靱には銅鏃のみ29本が収納される。雪野山古墳では埴輪は全く出土していないが、副葬品の内容から前期前半に位置づけられ、この段階では靱形埴輪はまだ成立していない。別に検討したように、第I群の靱形埴輪が銅鏃を描くのは、祖型となった靱に銅鏃が収納されていたためと思われる。つまり、靱形埴輪が未成立の段階では、靱は銅鏃を主体的に収納し、第I群の靱形埴輪が成立した時点では、すでに靱は鉄鏃を主体的に収納する段階に移っていったと考えることができる。

菱形文様の変遷 瓦谷1号墳出土の靱と雪野山古墳出土の靱は、すでに筒井や杉井が検討しているように、糸を一本ずつ組み上げて文様を作っており、糸の組み方など共通する部分が多くみられる。技法という技術的な観点からみれば、両者を同一のグループとして捉えることができる。

しかし、両者の最大の特徴である菱形文様の作り方は、報告したように大きく異なる。すなわち、雪野山古墳出土の靱では糸を組み上げていく際に8~11本おきに一回り太い糸を組み込んで菱形文様を強調するのに対して、瓦谷1号墳出土の靱では糸を組み上げた後に幅5mm程度の帯状品を配置して菱形文様を強調する。菱形文様を糸の組み上げと同時にせず、後から別のものによって強調している点は雪野山古墳出土の靱よりも後出的な要素と考えられる。

靫と靫形埴輪の関連性について 収納する鍬や菱形文様の強調方法の違いから、瓦谷1号墳出土の靫は、雪野山古墳出土の靫よりも新しく位置づけられる。また、瓦谷1号墳に靫が副葬された頃、あるいはその直後に第I群の靫形埴輪が出現している。各地で出土している靫すべてを検討できないものの、菱形文様を主たる文様とする靫と、靫形埴輪の関連及び変遷を図示すると、第56図のように整理することができよう。

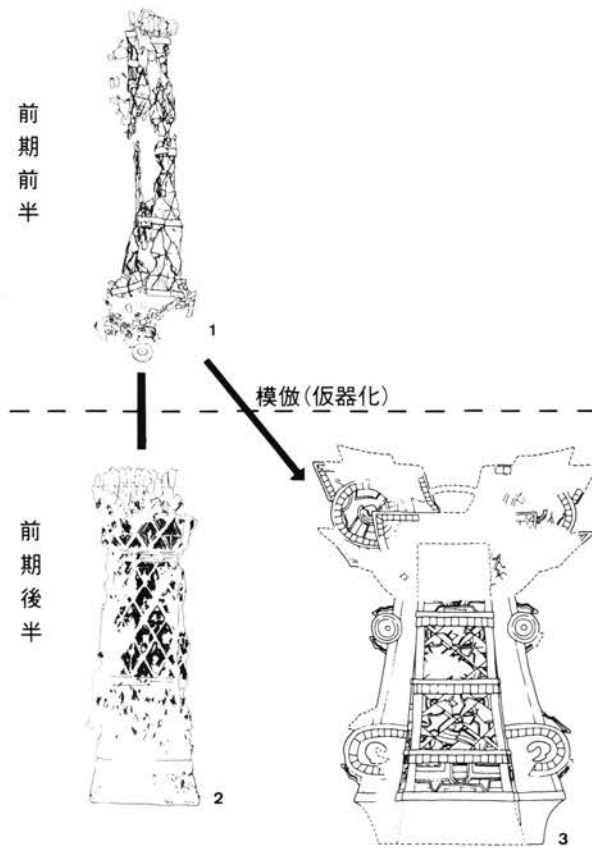
5. まとめ

靫の呪術的な性格を明らかにするために、靫の役割やその変遷について検討してきた。その結果、古墳時代前期における靫の性格は、靫形埴輪との比較検討から鍬=矢で邪悪なものを追い払うという「辟邪」と考えることができた。ただ、「追い払う」という概念が矢によって象徴されるならば、初期の靫や第I群の靫形埴輪に銅鍬が多くみられることから、靫よりも銅鍬に「辟邪」の念が強くこめられていた可能性は高い。

また、雪野山古墳の年代や、靫と靫形埴輪の関係から、靫の出現時期が少なくとも前期前半にさかのぼることは確実である。しかし、資料不足のため古墳時代前期初頭あるいは弥生時代にまでさかのぼるかどうかは不明である。ただ、靫の出現契機として、鍬(おそらく銅鍬)の大量副葬との関連性は否定できないから、弥生時代までさかのぼる可能性は少ないと思われる。

以上のような性格が靫に認められるならば、かつて筒井が指摘した「靫の配布行為」についても新たな理解を得ることができる。すなわち、靫が「辟邪」の象徴として、葬送儀礼の中に組み込まれていたならば、「類似した靫が遠く離れた古墳から出土する」ことは、三角縁神獸鏡や腕輪形石製品と同様に、宝器的・呪術的な威信材としての性格を靫に求めることができよう。このことは菱形文様を有するような靫だけでなく、織物製や木製のような靫についても同様の性格と考えられる。ただ、靫の場合は、所有することに意義のある威信材ではなく、むしろ葬送儀礼において、より重要な役割を有していた威信材ではないかと考えられる。

このような配布行為を行うためには、靫を専門的に製作するような集団をヤマト政権が保持していた可能性は高い。また、技法的に異なった靫が存在することから、靫を製作する集団は複数



第56図 靫及び靫形埴輪相関図

1. 雪野山古墳棺内出土靫
2. 瓦谷1号墳第2主体出土靫
3. 萱振1号墳出土靫形埴輪(第I群)

存在したと考えられる。^(注125)これらの製作集団は、ヤマト政権のもとで靫の製作を行い、完成された靫は必要に応じて各地の首長に配布されたと考えられる。

以上のことから、「靫」とは、古墳祭祀、特に葬送儀礼においては、重要な威信材の一つと考えられ、その役割・性格は、被葬者を守護する「辟邪」であったと考えられる。したがって、鏃側を上に向けて収納するような盛矢具に対してのみ、「靫」という呼称を使用すべきであろう。そこにはもはや、盛矢具としての本来的な機能は認められず、「辟邪」の象徴として祭祀的・呪術的な側面のみが強調された威信材としての姿のみ認めることができる。

(筒井崇史)

第4節 瓦谷古墳群出土の円筒埴輪について

1. はじめに

瓦谷古墳群では、墳丘に樹立されたままの埴輪は検出されなかったが、埴輪棺に転用されたものや古墳の周溝から多数の円筒埴輪・形象埴輪が出土した。これらの埴輪には、普通円筒埴輪や鱗付円筒埴輪、蓋形・盾形埴輪などの器財埴輪、壺形埴輪などがみられる。

しかし、須恵質の埴輪や、特殊器台形埴輪に準ずるような古い様相を示す埴輪は含まれていないため、これらの埴輪は、既存の編年観に当てはめるならば、おおよそ古墳時代前期後半～中期前半に位置づけられると考えられる。ただ、遺存状態の良好な埴輪の大半が、埴輪棺に転用されたものであるため、編年の基準資料とするには注意が必要である。

本節では、出土した埴輪のうち、特に円筒埴輪について型式学的な検討を行って、その変遷を明らかにしたい。また、古墳時代前期～中期前半における畿内各地出土の円筒埴輪との比較も試みることにしたい。

2. 円筒埴輪研究の現状

円筒埴輪の祖型が、吉備地方に起源を持つ特殊器台形土器であることは、1967年に近藤義郎・春成秀爾によって明らかにされた。^(注126)1970年代後半には円筒埴輪の変遷に関する論考がいくつか発表された。^(注127)中でも川西宏幸は、突帯やスカシ穴の形状、調整や焼成の違いなど、製作技法の変遷によって円筒埴輪の編年を明らかにすることを目的とした論考を発表した。特に、円筒埴輪の外面調整が時間の推移とともに変化するとの指摘は、円筒埴輪によって古墳の築造時期を知ることができる可能性を意味していた。しかし、近年は、川西が提示した編年案に対して、同一時期における外面調整の多様性が明らかにされており、外面調整だけで古墳の時期を決定することはできないという意見が多くなっている。しかし、従来不明確だった円筒埴輪の編年の枠組みを確立したことは、高く評価されるべきである。

1980年代後半以降、川西の示した編年案を基本としながらも、円筒埴輪の持つ属性をさらに細分して、より細かな編年を構築しようとする研究が多くなりつつある。これは、同じ古墳から出土する円筒埴輪であっても、ハケ調整や形態に多様性があるためである。

円筒埴輪の持つ属性の細分とそれによる編年作業は、一瀬和夫をはじめとして多くの研究者によって行われている^(注128)。一瀬は、大阪府古市古墳群から出土した円筒埴輪について、「B種ヨコハケというものは多様性のあるA種ヨコハケの一部から成立し、そして、斉一化し、退化、簡略化していくという発展序列的な変化を明らかとすることによって」、川西が「B種」ヨコハケ調整としてまとめた技法の細分を行った。そして、「B種」ヨコハケ調整の変遷を通じて古市古墳群における大型前方後円墳の編年を行った。

また、200基以上の小型方形墳を含む大阪府長原古墳群の調査報告者の一人である積山 洋は、「時期が近接した複数の古墳の埴輪には類似点と相違点・新旧の属性が錯綜するため、一・二の属性だけで比較するのは危険である」と述べて、同古墳群出土の円筒埴輪を、それを構成するいくつかの属性に分解した上で、円筒埴輪の変遷を明らかにしようとした。

奈良県内出土の円筒埴輪については、坂 靖が、積山同様、「円筒埴輪の諸様相のうち」「編年の指標となるものを抽出する」として、形態(口縁・スカシ穴・突帯など)や調整技法などの要素の変化にもとづいて円筒埴輪の分類と編年を行った。

京都府内でも、乙訓地域出土の円筒埴輪を中心に梅本康広が同様の方法で円筒埴輪の分類を行っている。梅本は、「各古墳の円筒埴輪に認められる特徴的な属性を抽出し、古墳相互において共通点の、多い属性をもとに再構成する方法をとった」と述べて、円筒埴輪を特殊器台形埴輪・普通円筒埴輪など6形式に分けて、各形式を口縁部・突帯・スカシ穴の形状などによって細分した。分類された円筒埴輪は、1基の古墳に共存することも考慮した上で、円筒埴輪の編年を行っている。

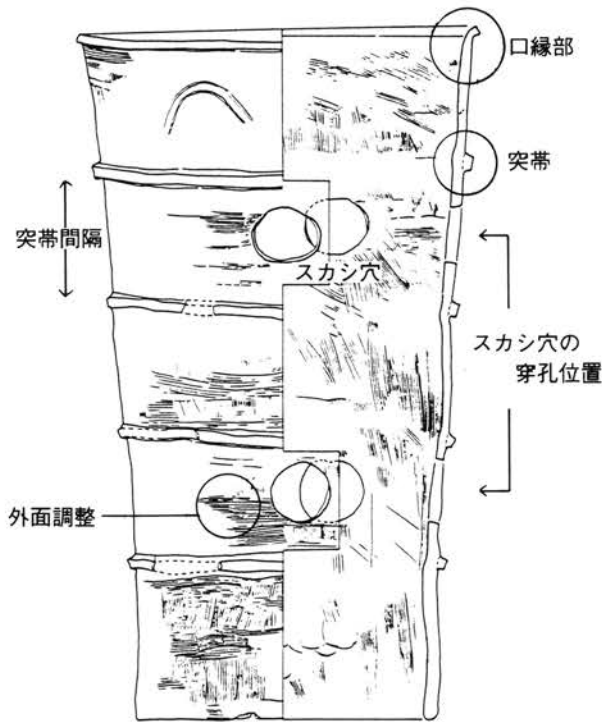
以上のように、近年は円筒埴輪の分類にあたっては、その形態的特徴を示す属性を抽出するという方法が多く行われている。これらは、すでに川西によって注目されていた点であり、現時点では抽出される属性項目が増えたり、その細分がさらに進んだ段階にあるといえる。

瓦谷古墳群で出土した円筒埴輪は、すでに報告したように、かなりの多様性を示す。以下の検討では、近年の研究成果を参考にしつつ、瓦谷古墳群出土の円筒埴輪を、それを構成する属性に分解して検討することにしたい。

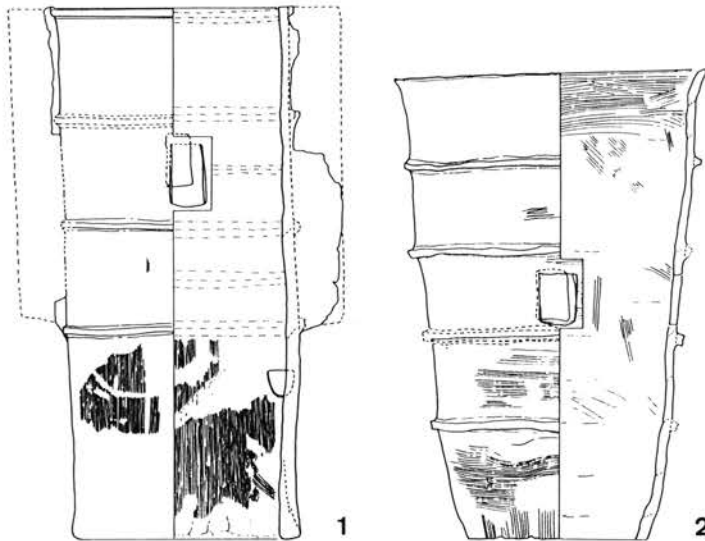
3. 出土円筒埴輪の検討

まず、出土した円筒埴輪について、それを構成する属性に分解した上で、個別に型式学的な分類作業を行う。次に、分類した属性の有無や変化によって円筒埴輪の型式学的な変遷を明らかにする。

ここでは、円筒埴輪を構成する属性のうち、形態(プロポーション)、口縁部・突帯・スカシ穴の形状、突帯・鱗の接合方法、突帯の間隔、スカシ穴の穿孔位置、外面の調整の9つの属性を抽出して検討の対象とする(第57図)。また、瓦谷古墳群に続いて形成された上人ヶ平古墳群(古墳時代中期後半～後期前半)出土の円筒埴輪との比較も必要に応じて行う^(注129)。なお、検討の対象とした円筒埴輪における属性の分類を付表10にまとめた^(注130)。



第57図 円筒埴輪属性分類図



第58図 形態分類図(番号は、本文に一致)

①形態(第58図) 円筒埴輪の形態(プロポーション)は、大きく2つに分類できる(朝顔形円筒埴輪の場合、体部の形態を示す)。

1. 正円筒形を呈するもの
2. 逆円錐台形を呈するもの

出土した円筒埴輪には、判別しにくいものもあるが、すべてをこのどちらかに分類することができる。数量的には正円筒形を呈するものが多く、特に鱗付円筒埴輪は、いずれも正円筒形を呈する。逆円錐台形を呈するものは、上人ヶ平古墳群で数量的に増加しており、正円筒形を呈するものにくらべて後出的な属性と思われる。

この2つは、法量によって、さらに細分できる。正円筒形を呈するものは、(a)全高が100cmを超える大型品と、(b)全高が70~80cm程度の中型品に分けることができる。全体の大きさがわかるものは少ないが、31点中、(a)は5点、(b)は13点を確認することができる。全体の形状がわかる朝顔形円筒埴輪はないものの、112・113は体部の復原高が100cmを越えるものと思われる。正円筒形を呈する

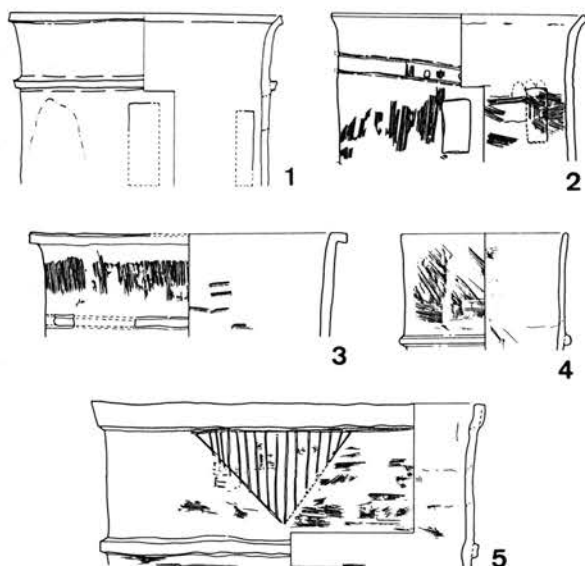
ものに、60cm以下の小形品はみられない。

逆円錐台形を呈するものは、(a)全高が60~70cm程度の中型品と、(b)全高が50cm程度の小型品に分けられる。全高が100cmに達するような大型品はみられないが、126・168の2点が口径や底径からみて該当する可能性はある。

(a)は、3点を数える。(b)は、15号埴輪棺に転用された普通円筒埴輪1点(147)が該当する。朝顔形円筒埴輪では、22号埴輪棺に転用された155・156~158の2個体でその大きさを知ることができ、体部の大きさが(a)に相当する。

付表10 円筒埴輪属性分類表

出土遺構	番号	種類	円筒埴輪属性分類									群	備 考
			形態	口縁部	突帯	突帯 接合	突帯 間隔	スカシ 穴	スカシ 穴位置	鱗 接合	外面 調整		
2号埴	89	普通	/	/	2	/	/	/	/	-	2	第4群	楕円筒形埴輪
S D03	90	鱗付普通	1	/	2	1	/	3	/	1	1	第3群	
1号埴輪棺	91	普通	1	1	1	/	2*	2	(3孔)	-	2	第1群	
1号埴輪棺	93	普通	1	4	2*	/	3	2	1	-	1	第3群	
2号埴輪棺	94	普通	1	2	2	/	3	2	1	-	2	第3群	
2号埴輪棺	95	普通	/	4	3	/	1	/	/	-	1	第4群	楕円筒形埴輪
3号埴輪棺	96	普通	1*	2	2	/	1	1	1	-	/	第2群	
3号埴輪棺	97	普通	1	4	3	/	1*	/	/	-	2	第4群	
4号埴輪棺	98	普通	1*	2	3	/	1	/	/	-	1	第4群	
5号埴輪棺	99	鱗付普通	1	3	2	1	2	2・3	その他	/	1	第3群	
5号埴輪棺	103	普通	1*	2	/	1・3	1	2・3	(3孔)	/	1	第2群	
8号埴輪棺	104	鱗付普通	1	3	2	/	2*	2	1	1	1	第3群	
8号埴輪棺	107	鱗付普通	1	3	2	/	1	2	1	/	1	第3群	
8号埴輪棺	108	鱗付朝顔形	1	-	2	2	1	2	1	/	1	第3群	
9号埴輪棺	105	普通	1*	2	/	3	1	2・3	その他	-	1	第2群	
9号埴輪棺	106	普通	1*	1	1*	/	/	/	/	-	1	第1群	
10号埴輪棺	112	鱗付朝顔形	1	-	2	1	1	2・3	1	/	/	第3群	
11号埴輪棺	110	普通	1*	2	2	/	1	4	1	-	/	第4群	
11号埴輪棺	111	鱗付普通	1	3	2	1	3	2	1	/	2	第3群	
12号埴輪棺	113	鱗付朝顔形	1	-	2	/	1	2・4	その他	/	1	第3群	
12号埴輪棺	119	鱗付朝顔形	1	-	2	/	1	2	(3孔)	/	/	第3群	
13号埴輪棺	117	鱗付普通	1	3	2	/	/	/	/	/	/	第3群	
13号埴輪棺	118	普通	1	3	3	/	/	/	/	/	1	第4群	
14号埴輪棺	120	普通	1	/	2	/	/	2	2	-	/	第5群	
15号埴輪棺	146	普通	1	4	2	/	3	4	/	-	2	第4群	
15号埴輪棺	147	普通	2	4	2	/	3	4	/	-	2	第4群	
16号埴輪棺	124	普通	1*	2	2	/	3	4	2	-	2	第5群	
16号埴輪棺	125	普通	1	5	3	/	3	4	2	-	2	第5群	
17号埴輪棺	148	普通	1	3	2	/	2	4	/	-	2	第4群	
17号埴輪棺	149	普通	2	4	2	/	3	/	/	-	2	第4群	
19号埴輪棺	150 151	普通	1	3	2	/	1*	2	1	-	2	第3群	
19号埴輪棺	152	鱗付普通	1	3	2	/	1*	/	/	1	1	第3群	
20号埴輪棺	159	普通	1*	4	2	/	3	4	/	-	2	第4群	
21号埴輪棺	160	鱗付普通	1*	3	2	/	2	3	/	1	1	第3群	
22号埴輪棺	153	普通	2	2	2	/	3	4	1	-	2	第4群	
22号埴輪棺	154	普通	2	2	2	/	3	4	1	-	2	第4群	
22号埴輪棺	155	朝顔形普通	2	-	2	/	1	4	1	-	2	第4群	
22号埴輪棺	156 157 158	朝顔形普通	2	-	2	/	/	4	1	-	2	第4群	
23号埴輪棺	162	普通	2	4	2	2	2	2	/	-	2	第4群	
24号埴輪棺	168	普通	2	/	2	2	/	4	2	-	2	第5群	
24号埴輪棺	169	鱗付普通	1	3	2	/	3	/	/	/	2	第3群	



第59図 口縁部分類図(番号は、本文に一致)

②口縁部(第59図) 口縁部を確認できた普通円筒埴輪について形態分類を行うと、大きく5つに分類できる(この属性については、朝顔形円筒埴輪を対象としない)。

1. 口縁端部をつまみ上げるもの
2. 口縁部が外反するもの
3. 口縁端部を外側に折り曲げ、断面「L」字形に仕上げるもの
4. 口縁部が直口するもの
5. 口縁部外面に突帯がみられるもの

1は、口縁端部をつまみ上げるもので、91・106の2点が該当する。

2は、口縁端部のみ外反するものが大半

を占め、最上段が全体的に外反するものは2点(103・105)のみである。外反の度合いは、110のように「L」字状を呈するものや、162のようにわずかに外反しているものなど、多様性がある。端部に面を有するものが多い。

3は、口縁部を屈曲させて突帯状に仕上げ、断面形は「L」字形を呈する。粘土紐を付加して突帯状に仕上げるものもある。鱗付円筒埴輪に多くみられる。

4は、体部から口縁部にかけて直線的な形状を呈する。端部は、面をなすものや丸くおさめるものがみられる。逆円錐台形を呈するものに多くみられる。3で触れた粘土紐を付加して突帯状に仕上げるものは、突帯の偏平度や突出度が、126とは大きく異なることから3として扱う。

③突帯 突帯の断面形から大きく3つに分類できる。

1. 側面がくぼんで断面形が「M」字形を呈するもの
2. 断面形が台形を呈するもの
3. 断面形は台形であるが、幅が1cmを越え、やや偏平気味のもの。

出土した円筒埴輪の大半は、全体の形態や口縁の形態に関係なく、2の形態を呈するものが多く、1・3はごく少量しかみられない。したがって、突帯の断面形で瓦谷古墳群出土の円筒埴輪を分類することは困難である。なお、1・2の中には突出度の高いものも含まれる。

④突帯の接合方法 突帯を接合する際には、突帯の接合位置を明示するために何らかの目印が器面に施されていることが知られている。この目印をここでは割り付け線と呼称する。今回、出土した円筒埴輪のうち、16点で割り付け線を確認することができた。割り付け線は、3種類が確認できた。

1. 方形の刺突を施す
2. 沈線1条をめぐらす
3. 沈線2条をめぐらす

1は、断面形が方形を呈する棒状工具によって施されたと考えられる。

2は、幅0.4~0.6cm・深さ0.2cmを測る沈線で、先端が丸い棒状工具で施されたとと思われる。

1・2は、多くの円筒埴輪で主体となる技法であるが、瓦谷古墳群ではどちらがより主体的かは明らかにできなかった。なお、場合によっては割り付け線を施さない個体もあるようである。

3は、2と同様、先端の丸い棒状工具によって施されたと考えられる。非常に珍しい方法で、確認できた2点(103・105)が同じ形態の円筒埴輪である点も注意される。なお、103は2条の沈線の間に方形の刺突が施されており、両者を併用したと考えられる。周辺地域を含めて、同様の技法によって割り付けが行われている例は確認できない。

⑤突帯の間隔(第60図) 出土した円筒埴輪の多くは、割り付け線を施している。その目的は、突帯の接合位置を明示するほか、突帯の間隔を一定にそろえるためという意見もある。しかし、出土した円筒埴輪の突帯間隔には、かなりのばらつきが認められたため、一概に突帯の間隔をそろえるためとはいえないようである。突帯間隔で注意されるのは、口縁部と1条目の突帯の間隔、すなわち最上段の間隔が著しく狭いものがみられる点である。そこで、最上段と最下段を除く段の突帯間隔の平均値を求め、最上段の長さと比較して次の3つに分類した。

1. 最上段の間隔が著しく狭いもの(平均値の半分以下のもの)

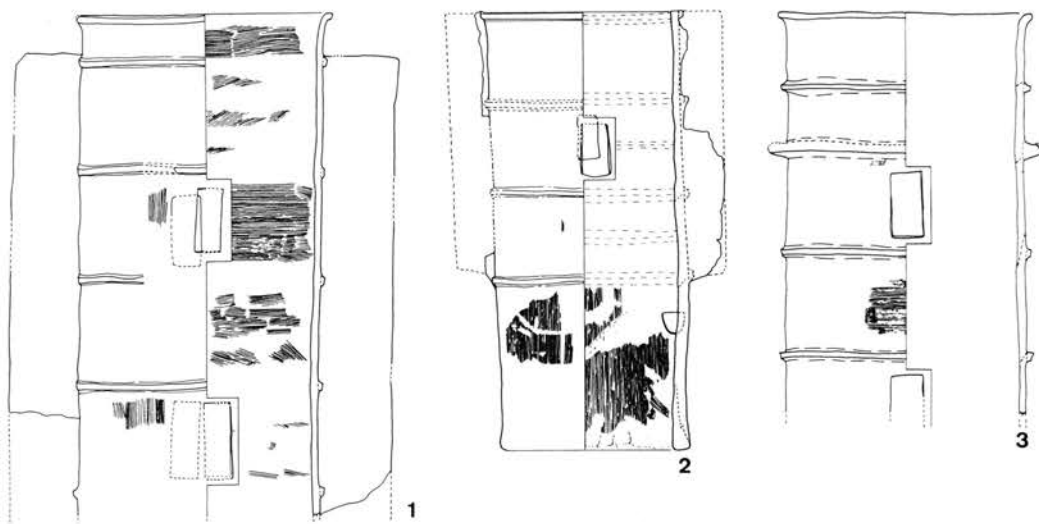
2. 最上段の間隔が他の間隔と同じもの

3. 1と2のどちらでもないもの

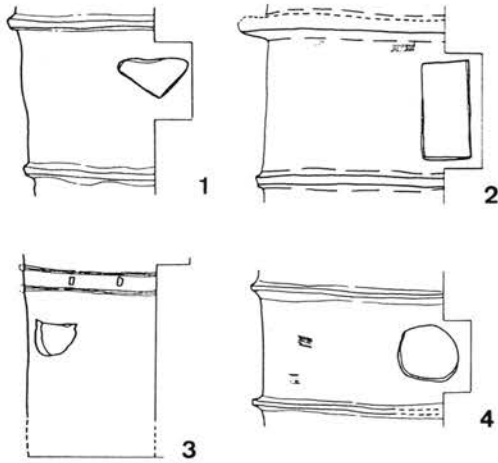
1は、15点を数え、その多くが鱗付円筒埴輪である。なお、最上段が著しく狭い円筒埴輪は、上人ヶ平古墳群にはほとんどみられない。

2は、突帯間隔の平均値と最上段の長さが一致し、6点を数える。1と2の比率は、2.5:1で、瓦谷古墳群では1の方が多い。

3に相当するものも、11点を数え、突帯間隔に共通の決まりがあったとは思われない。ただし、個々の個体においては突帯間隔に関して一定の決まりがあるようである。



第60図 突帯間隔分類図(番号は、本文に一致)



第61図 スカシ穴分類図(番号は、本文に一致)

⑥スカシ穴(第61図) 瓦谷古墳群で確認されているスカシ穴の形状には、次の4種類がある。

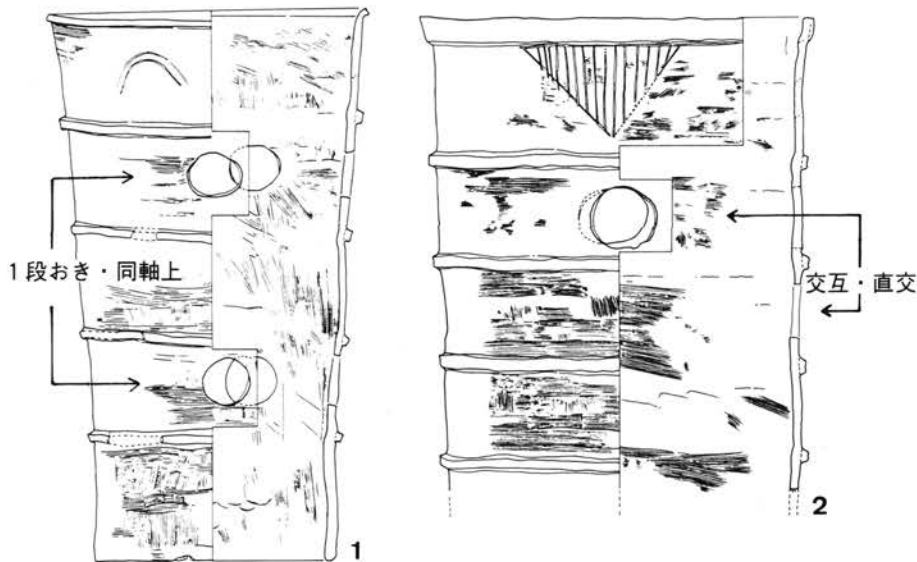
1. 隅丸三角形
2. 長方形(縦長)
3. 半円形
4. 円形

このうち半円形スカシ穴は、いずれも長方形スカシ穴を有する円筒埴輪の最下段に多くみられ、単独の属性として取り上げる必要はないと思われる。

長方形や円形のスカシ穴は、円筒埴輪に主体的に穿たれるスカシ穴である。瓦谷古墳群では、長方形のスカシ穴が主体となる。これまでの研究成果によれば、長方形スカシ穴を主体とする円筒埴輪から、円形スカシ穴を主体とする円筒埴輪へと移行していくことが明らかにされている。上人ヶ平古墳群では、大半の円筒埴輪が円形スカシ穴であることを考えると、瓦谷古墳群の円筒埴輪は、この移行期にあたる一群と位置づけられる。

⑦スカシ穴の穿孔位置(第62図) スカシ穴は、同一段に互いに向かい合う位置に穿孔されるのを通例とする(つまり1段に2つ穿孔される)。一方、特殊器台形埴輪など古い様相を示す円筒埴輪には、1段に3つ以上穿孔するのが通例である。スカシ穴を確認できなかった円筒埴輪を除くと、1段に3つ以上穿孔するものは3点しかなく、1段に2つ穿孔するものが大半を占める。そこで、複数の段にスカシ穴が穿孔される場合、各段におけるスカシ穴の穿孔方向がどのようなのかという点に注目すると、大きく2つに分類できる。

1. 同じ軸線上に穿孔される(1段おきが基本形)
2. 互いに直交する位置に穿孔される(各段ごとが基本形)



第62図 スカシ穴穿孔位置分類図

1は、出土した円筒埴輪の大半を占める。スカシ穴の形状にかかわらず、瓦谷古墳群では同じ軸線上に穿孔される場合が多い。スカシ穴が同じ軸線上に穿孔されるようになった要因の1つとして、鱗付円筒埴輪の場合は、鱗の接合によってスカシ穴の穿孔可能な範囲が制限されたため、鱗に対して直交するような穿孔方法が採用されたと考えられる。その結果、スカシ穴が円形となり、円筒部に鱗を接合しなくなった普通円筒埴輪でも、同様の穿孔方法が存続したのであろう(例えば、153・155など)。

2は、4点(120・124・125・168)確認できるが、瓦谷古墳群の中では一般化するまでに至っていない。上人ヶ平古墳群では、出土した円筒埴輪の大半は互いに直交する位置に穿孔される。この点から、スカシ穴の穿孔方法が、同じ軸線上に穿孔されるものから互いに直交する位置に穿孔されるものへ移行していくと考えられる。

⑧鱗の接合方法 近年、鱗付円筒埴輪の鱗の接合方法に注目した研究が杉井 健・伊藤 純らによって行われている。^(注131)これは、鱗を円筒部に接合する際に突帯と円筒部の器壁に対してどのような加工が行われているかという点について検討したものである。出土した鱗付円筒埴輪では、鱗の接合方法に対する認識が不十分だったため、多くの個体が接合を終えており、十分な観察を行うことはできなかった。観察できたものについては個々の埴輪の報告の中で触れた。確認できた方法は次の1例に限られる。

1. 上下方向に1～3条のヘラキズを施すもの

伊藤は、約30基の古墳から出土した鱗付円筒埴輪を取り上げて検討を加え、「タガを除外して、円筒に鱗の接合を強化するヘラキズを施すといった技法が圧倒的多数を占める」と述べている。瓦谷古墳群で確認できた技法はいずれも、伊藤のいう「多数派」に属する技法であるが、未確認の個体も多く、詳細は不明である。

⑨外面調整 円筒埴輪における外面調整の研究は、川西宏幸の成果によるところが大きい。出土した円筒埴輪も、川西が示した1次調整・2次調整という概念や「A種」あるいは「B種」といったハケ調整の種類から検討を行う。ただ、磨滅の著しいものが多いため、1次調整・2次調整の区別や1次調整のハケ調整の種類を明らかにできなかったものがみられ、外面調整のみで出土した円筒埴輪全体を論じることはできない。

出土した円筒埴輪のうち、完全に外面調整を把握できたものは少ない。外面調整は、大きく次の2つに分類することができる。

1. 2次調整にいわゆる「A種」ヨコハケ調整を施さないもの(2次調整にタテハケ調整あるいはナデ調整が施される)

2. 2次調整にいわゆる「A種」ヨコハケ調整を施すもの

1は、99・103など、15点を数える。川西は、2次調整にいわゆる「A種」ヨコハケ調整を施さないものは、より古い様相と考えられているが、ほかの属性の特徴から、一概に古いとはいえないようである。

2は、146・153など、20点を数えるが、施されている「A種」ヨコハケ調整には多様性を認め

ることができる。

なお、いわゆる「B種」ヨコハケ調整は全く認められない。したがって、出土した円筒埴輪は、いわゆる「B種」ヨコハケ調整の成立以前と捉えることができる。この点について、一瀬は、いわゆる「B種」ヨコハケ調整の成立を多様な「A種」ヨコハケ調整から発展的に出現したと考えている。

4. 瓦谷古墳群における円筒埴輪の変遷

瓦谷古墳群出土の円筒埴輪について、それを構成する属性に分解した結果、各属性を2つないし5つに細分することができた。これは、属性を単に細分しただけでなく、各項で述べたように、型式学的な変化の単位を示すと考えられる。上記の属性のうち、型式学的な変化が大きく現れる属性として、形態・口縁部・スカシ穴、及びスカシ穴の穿孔位置の4属性をあげることができる。また、他の属性も、瓦谷古墳群出土の円筒埴輪の分類を考える上で重要な指標となる。

瓦谷古墳群の円筒埴輪を、細分した属性の有無にもとづいて分類すると、大きく5群に分けることができる(第63図)。朝顔形円筒埴輪も、主として体部の属性の特徴から同様に分類する。各群の概要は次の通りである。

第1群 正円筒形を呈し、口縁端部をつまみ上げる。長方形スカシ穴で1段あたり3つ穿孔されるようである。これに該当する円筒埴輪は少なく2点のみである(91・106)。

第2群 正円筒形を呈し、最上段の間隔は狭く、最上段全体(=口縁部)が外反する。突帯の間隔が均等に割り付けられている。最下段に半円形スカシ穴、偶数段に長方形スカシ穴が施されるが、3つ穿孔されるようである。これに該当する円筒埴輪は2点にすぎない(103・105)。

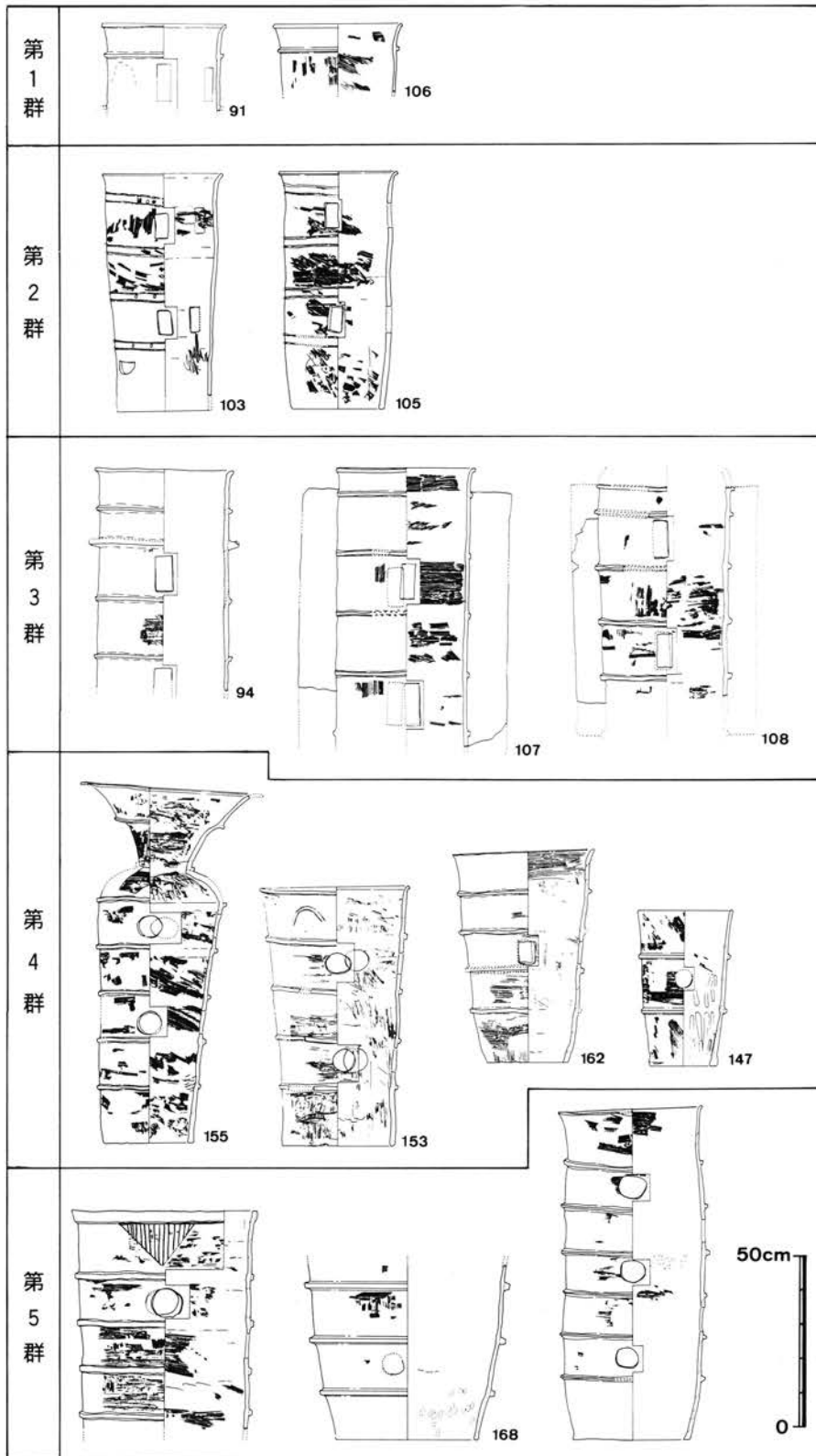
第3群 正円筒形を呈し、口縁部が外反もしくは「L」字形の突帯状を呈する。最下段に半円形スカシ穴、その他の段に長方形スカシ穴が施される。突帯の間隔は、比較的均等に割り付けられるものが多い。鱗付円筒埴輪は、すべて第3群に該当する(90・93・94・96・99・104・107・108・111～113・117～119・150～152・160・169)。

第4群 正円筒形もしくは逆円錐台形を呈し、口縁部がわずかに外反するか、直口する。円形スカシ穴を有し、同じ軸線上に穿孔される。突帯の間隔は、比較的均等に割り付けられるものが多い。一部に方形スカシ穴や口縁部が「L」字状に近い断面形を呈するものがみられる。また、楕円筒形埴輪もここに含まれる(97・98・110・146～149・153～159・162)。

第5群 正円筒形もしくは逆円錐台形を呈し、口縁部外面に突帯を有するもの。円形または長方形スカシ穴で、互いに直交する方向に穿孔される。これに該当する円筒埴輪は4点ある(120・124・125・168)。126・168は、全体の大きさを知ることはできないが、かなりの大型品のようなものである。また、120も器高の高い円筒埴輪である。

瓦谷古墳群出土の円筒埴輪は、以上のように大きく5群に分けることができた。これらは、口縁形態の型式学的な変化やスカシ穴の推移などから、おおむね第1群→第2群→第3群→第4群→第5群という変遷を想定することができる。第3群と第4群は、数量的にも多く、瓦谷古墳群

では主体となるが、さらに細分することも可能である。例えば、第3群の鱗付円筒埴輪の中には鱗が口縁ではなく、1条目あるいは2条目の突帯から始まるものが含まれ、時間的な先後関係が想定できる。第4群でも、正円筒形を呈したり方形スカシ穴を有する円筒埴輪は、第3群と強い



第63図 瓦谷古墳群出土円筒埴輪分類図

関連性があるといえる。したがって、各群は、時間的にある程度併行した関係にあり、漸次推移していったと考えられる。

以上のことから、第3群・第4群とした円筒埴輪が集中して存在するが、瓦谷古墳群が造られた期間にはある程度幅があったと理解すべきであろう。さらに、瓦谷古墳群の盟主墳である1号墳に樹立された円筒埴輪がどの群であるのかは、資料的な制約のため明らかでない。若干の想像を加えて述べるならば、数量的に多い第3群が1号墳の築造時期に近いと考えられ、これら第3群とともにやや古相を示す第1群・第2群が1号墳に供給されたと考えられる。2号墳以下の小規模な古墳には、第3群以降の円筒埴輪が供給されたと考えられる。

5. 周辺地域との比較

瓦谷古墳群出土の円筒埴輪は、大きく5群に分けることができた。これについて、瓦谷古墳群の所在する山城地域や、近接する大和・河内両地域で出土している円筒埴輪と比較を行い、既存の埴輪編年の中でどのように位置づけられるか検討する^(註132)。

山城地域 山城地域は、地形的に旧巨椋池が所在していた京都盆地中央付近を境に南北に分けることができる。まず、南山城地域では、瓦谷古墳群の北約6kmに位置する山城町平尾城山古墳出土の円筒埴輪がある(第64図1～3)。この円筒埴輪の特徴として、最上段の間隔が狭く、口縁部が強く外反していること、内面の調整にケズリ調整が用いられていることなどがあげられる。瓦谷古墳群で第2群とした103・105は、突帯がすべて剥離しているものの、最上段の間隔が狭いこと、最上段全体が外反することなど、平尾城山古墳出土の円筒埴輪に類似している。しかし、瓦谷古墳群出土円筒埴輪の第2群は、外反の度合いがゆるいことやケズリ調整が認められないことから、平尾城山古墳出土円筒埴輪よりも後出すると思われる。

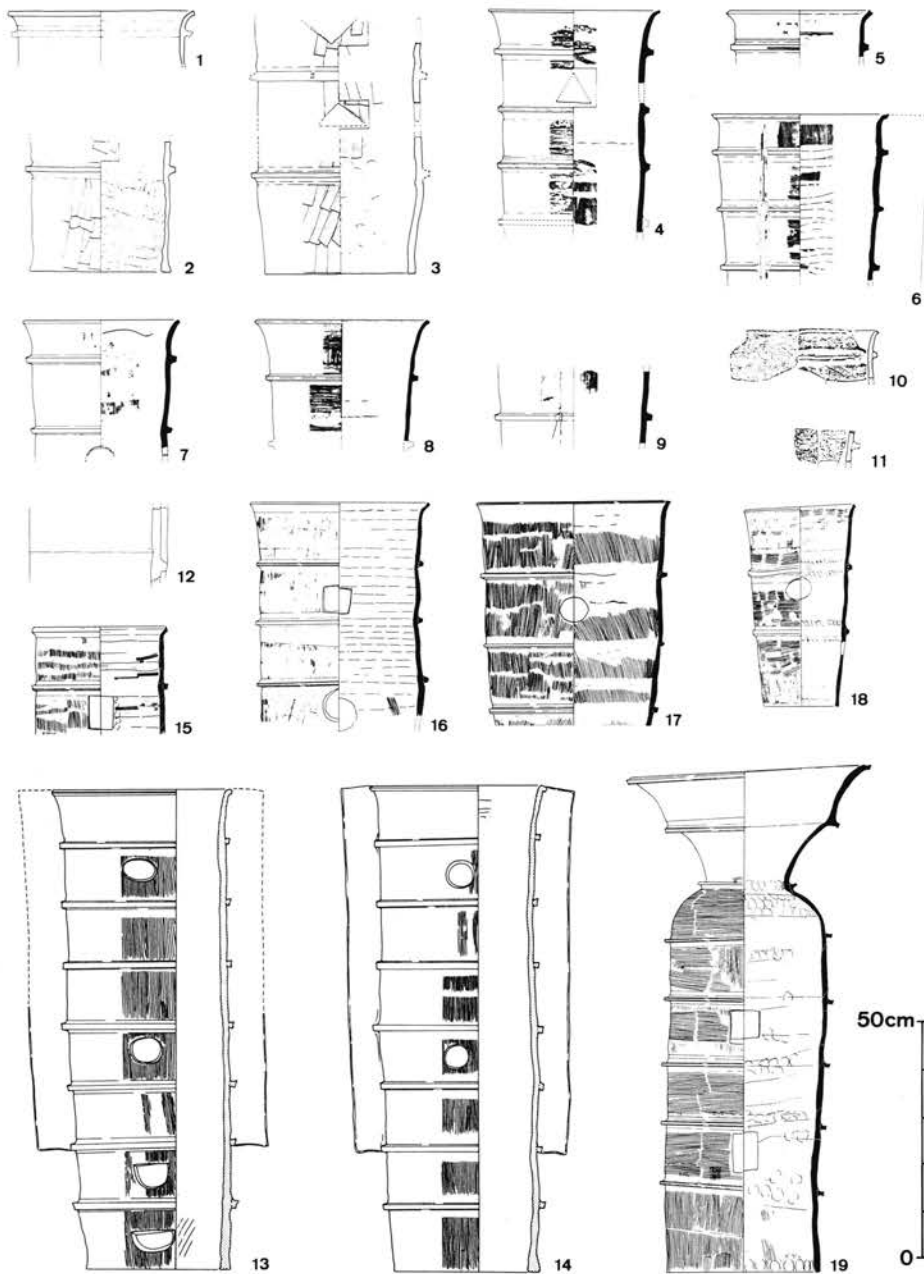
また、八幡市ヒル塚古墳出土の円筒埴輪にも、鱈付円筒埴輪が含まれる。突帯の位置を示す方形の刺突がみられ、突帯間隔は等間隔にそろえている。スカシ穴は最下段に半円形のものが、それ以外の段に方形のものが認められる。鱈の接合には縦方向のヘラキズ調整を施す。以上の特徴から、瓦谷古墳群出土円筒埴輪の第3群に対応すると思われる。

北山城地域では、桂川西岸の乙訓地域で古墳時代前期の早い段階から大型の前方後円(方)墳が多く築造されている。瓦谷古墳群(特に盟主墳の1号墳)よりも数世代前に位置づけられる向日市元稲荷古墳では、特殊器台形円筒埴輪が出土している。瓦谷古墳群と同時期の円筒埴輪が出土している古墳として、長岡京市長法寺南原古墳・大山崎町鳥居前古墳があげられる。長法寺南原古墳では、鱈付円筒埴輪も確認されている(第64図4～6)。口縁部が強く外反するものが主体となり、口縁部の断面形に「L」字形を呈するものがないことや、三角形スカシ穴がみられることなどから、やや古い様相を示すと思われる。瓦谷古墳群出土円筒埴輪の第1群あるいは第2群に近いものは認められないので、第3群に対応すると思われるが、全体的に長法寺南原古墳の方がやや古い様相を示す。

鳥居前古墳で出土した円筒埴輪(第64図7～9)は、ゆるく外反する口縁もしくは直口縁のもの

が多くみられる。スカシ穴も円形のものが多い。外面調整では、ヨコハケ調整を静止させるもの
がみられるが、静止状態は任意で、いわゆる「B種」ヨコハケ調整として確立していない。以上
の特徴から、瓦谷古墳群出土土筒埴輪の第4群に類似すると思われる。なお、鱗付円筒埴輪が少
量含まれる。

大和地域 大和地域は、最古の大型前方後円墳とされる箸墓古墳に代表されるように、古墳時
代前期には大王墓と思われる大型の古墳が多数築造された地域である。主要な古墳が分布する奈
良盆地は、水系によっていくつかの小地域に分けることができ、それらを母体として古墳群が形
成される。主要な古墳群としては、東南部の大和・柳本古墳群、北部の佐紀盾列古墳群、西部の
馬見古墳群などがある。



第64図 各地出土土筒埴輪実測図(1) 出典は、注132参照

大和・柳本古墳群の1つである天理市行灯山古墳(伝崇神天皇陵古墳)で円筒埴輪の破片が数例出土している(第64図10・11)。これらには、最上段が著しく狭く大きく外反する口縁や、長方形(三角形か)スカシ穴を有するもの、突帯接合部に方形の刺突がみられるものなどがある。口縁部の形態からだけではあるが、瓦谷古墳群出土円筒埴輪の第2群に近い形状を呈すると思われる。

佐紀盾列古墳群は、先に述べたように、瓦谷古墳群出土の円筒埴輪や器財埴輪と強い関わりがある。佐紀盾列古墳群の1つである、奈良市佐紀陵山古墳(伝日葉酢媛陵古墳)は、いわゆる「佐紀陵山タイプ」と呼ばれる蓋形埴輪・盾形埴輪が出土した古墳で、高橋克壽の研究によれば、蓋形埴輪・盾形埴輪ともに最古の器財埴輪に位置づけられる。円筒埴輪では、良好な資料に乏しいが、鱗付円筒埴輪の存在が確認できる(第64図12)。瓦谷古墳群出土円筒埴輪の第3群に対応すると推測されるが、破片のため、詳細は不明である。

同じく佐紀盾列古墳群の1つで、佐紀陵山古墳の北方60mに位置する奈良市マエ塚古墳で出土した円筒埴輪には、墳丘や墳頂に樹立されたもののほかに、埴輪棺に転用されたものがある(第64図13・14)。今回、取り上げるのは埴輪棺に転用されていたもので、普通円筒埴輪や鱗付円筒埴輪などがある。形態は正円筒形を呈し、方形スカシ穴が若干含まれるものの、多くは円形スカシ穴である。スカシ穴は同じ軸線上に穿孔される。外面調整は、タテハケ調整が主体となるようである。以上の特徴から、瓦谷古墳群出土円筒埴輪の第3群と第4群の両方の特徴がみられる。

河内地域 河内地域は、古墳時代は河内潟と呼ばれる内陸湖が存在し、現在の大阪市域の大半が陸地化していなかった。このような地理的特徴によって、弥生時代から古墳時代にかけての河内地域は、北河内・中河内・南河内の3地域に分けることができる。ここで取り上げる古墳は、中河内あるいは南河内に分布するもので、その地域は大和地域と河内地域つなぐ大和川の存在によって交通の要衝であったと考えられる。

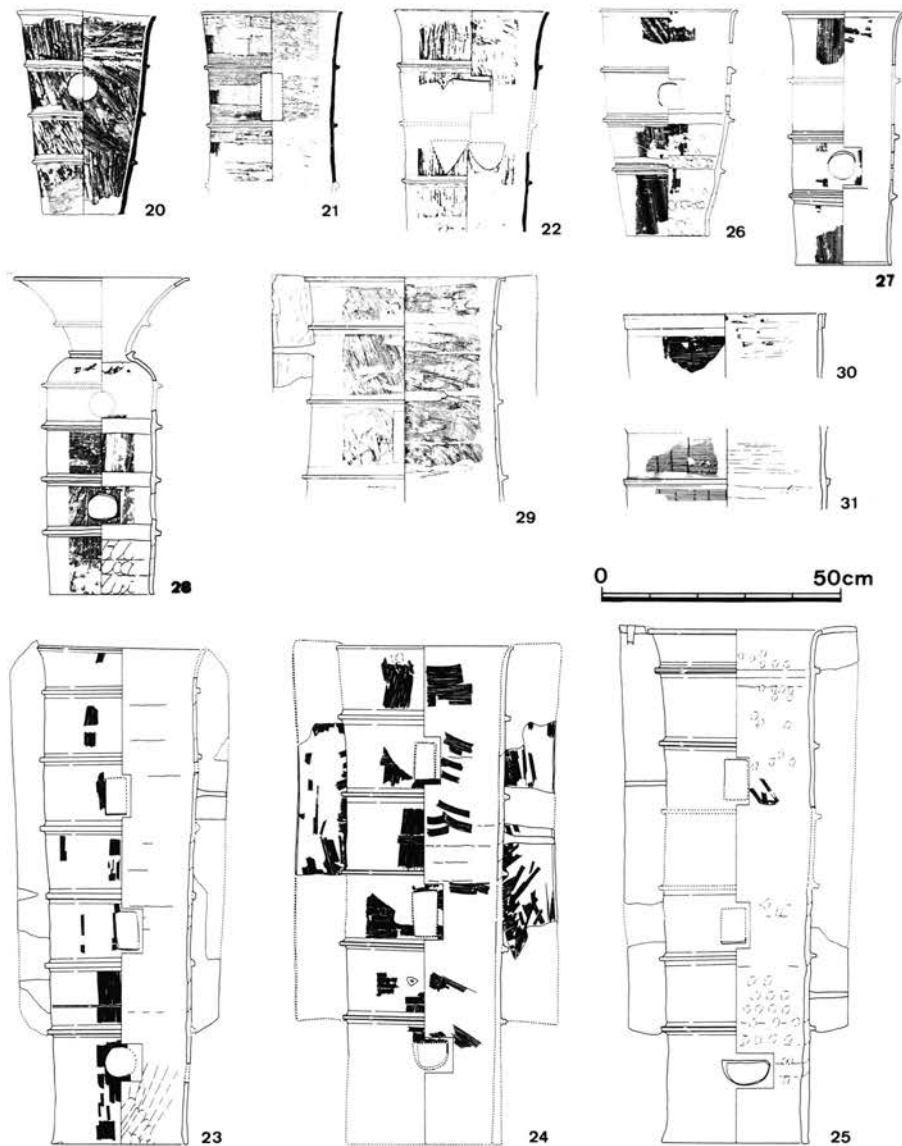
大阪市長原古墳群の塚ノ本古墳や一ヶ塚古墳で、瓦谷古墳群と同形態の円筒埴輪が出土している。塚ノ本古墳出土の円筒埴輪と、塚ノ本古墳近傍で検出された埴輪棺群に転用された円筒埴輪は、類似した特徴を有するので、ここではまとめて述べる(第64図15～19)。形態は、正円筒形のものとともに逆円錐台形のものが含まれる。口縁部が外反し、端部をややつまみ上げたものが多い。長方形スカシ穴をわずかに含むが、円形スカシ穴が多い。外面調整はタテハケ調整、あるいはタテハケ調整の後にナデ調整を主体とし、最終調整にヨコハケ調整を施すものはほとんどみられない。以上の特徴から、瓦谷古墳群出土円筒埴輪の第3群と第4群の両方の特徴がみられる。なお、鱗付円筒埴輪が少量出土している。

一ヶ塚古墳で出土した円筒埴輪(第65図20～22)は、形態が逆円錐台形が若干みられるものの、正円筒形を呈するものが多くみられる。口縁部は、直口縁もしくは「L」字形に近い突帯状を呈する。スカシ穴は、長方形・三角形のものと円形のものほぼ1:1の比率となり、円形の占める率が高い。外面調整はタテハケ調整の後、いわゆる「A種」ヨコハケ調整が施されるものが2/3を占める。以上の特徴から、瓦谷古墳群出土円筒埴輪の第3群と第4群の両方の特徴がみられる。また、一ヶ塚古墳では、いわゆる「佐紀陵山タイプ」と呼ばれる文様構成をもつ盾形埴輪

片が出土している。一ヶ塚古墳出土例は、佐紀陵山古墳出土例や瓦谷古墳群出土例にくらべると、外周区と横棧区、地板区の区別が段差による立体的な表現ではなく、線刻によって行われており、この点から一ヶ塚古墳出土例は、瓦谷古墳群出土例よりも後出すると思われる。

中河内地域に位置する八尾市萱振1号墳は、出土した円筒埴輪の大半が鱗付円筒埴輪で占められる(第65図23~25)。形態は正円筒形を呈し、方形スカシ穴を有するものが大半を占める。口縁部は、外反または「L」字形に屈曲する。外面調整は、ナデ調整・タテハケ調整・ヨコハケ調整などがあり、統一されていない。以上の特徴から、瓦谷古墳群出土円筒埴輪の第3群に位置づけられる。なお、器財埴輪も比較的まとまって出土しており、特に靱形埴輪は、別に検討したように、最古型式に位置づけられる。^(注134)

藤井寺市岡古墳は、古市古墳群内の小規模な方墳ではあるが、津堂城山古墳とともに、古市古墳群では最初期に築造された古墳である。同古墳出土の円筒埴輪の大半(第65図26~28)は、形態



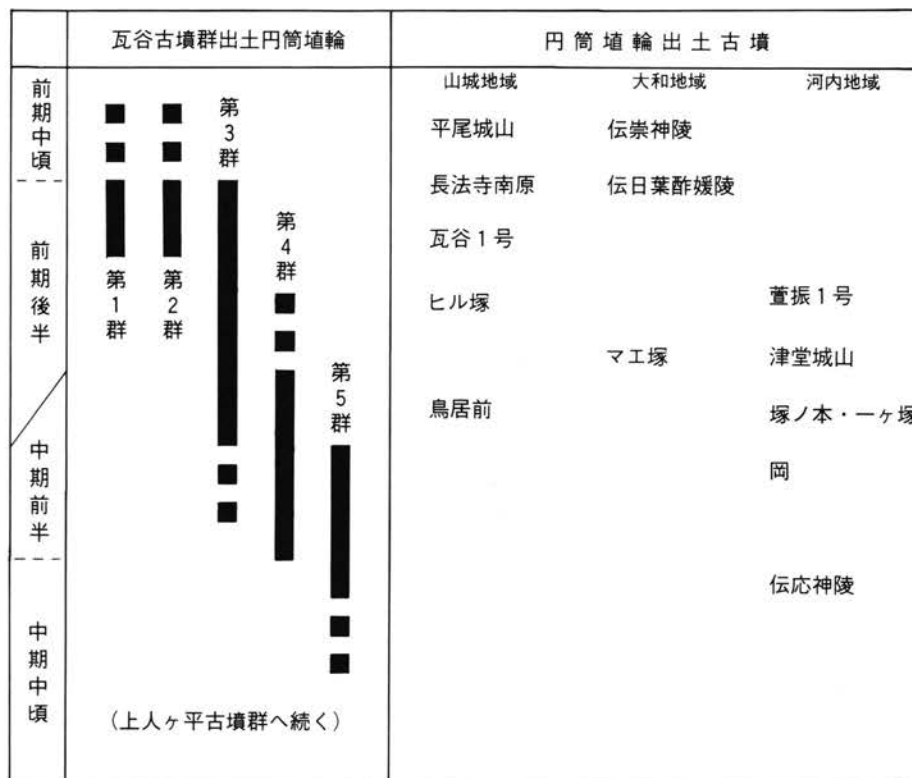
第65図 各地出土円筒埴輪実測図(2) 出典は、注132参照

が逆円錐台形を呈する。外反ぎみ、または「L」字状に外反する口縁を有し、やや突出度の高い突帯を有する。スカシ穴はほとんど円形で、1例のみ長方形スカシ穴を確認できる。以上の特徴から、瓦谷古墳群出土円筒埴輪の第4群に対応すると考えられる。

羽曳野市津堂城山古墳出土の円筒埴輪(第65図29)には、鱗付円筒埴輪が含まれ、瓦谷古墳群出土円筒埴輪の第3群に対応する。また、誉田御廟山古墳(伝応神天皇陵古墳)出土の円筒埴輪(第65図30・31)は、瓦谷古墳群出土円筒埴輪の第5群よりもやや新しく位置づけられる。

瓦谷古墳群出土円筒埴輪の時期 以上、周辺地域出土の円筒埴輪と比較検討を行った。ここで取り上げた古墳のうち、副葬品の内容から、その築造時期がわかるものとして、前期後半の長法寺南原古墳、中期初頭の津堂城山古墳・鳥居前古墳があげられる。また、円筒埴輪の特徴から、平尾城山古墳が長法寺南原古墳に先行し、最も古く位置づけられる。

したがって、瓦谷古墳群出土円筒埴輪の第1・2群が古墳時代前期後半でも中頃に近い時期に、第3群が前期後半から末にかけての時期に、第4・5群が前期末から中期前半にかけての時期に位置づけられると思われる。ただ、前項で述べたように、少なくとも瓦谷1号墳の築造にあたっては、第1～3群の円筒埴輪が供給されていた可能性がある。そういう意味では、第1・2群は第3群に比べ、より古い様相を残しつつも、第3群と同時期に供給されていた時期があり、さらに第3群のみが供給されていた時期があるのではないだろうか。以上のことをまとめて、変遷図としたのが第66図である。



第66図 瓦谷古墳群・各地出土円筒埴輪変遷図(概念図)
(各古墳の位置付けは、相対的なものである。)

6. まとめ

瓦谷古墳群で出土した円筒埴輪について、その形態的特徴から円筒埴輪を構成するいくつかの属性を抽出し、それらを型式学的に組列化することによって、大きく5群に分けた。これらは、すでに述べたように、時間的にある程度併行した関係にあり、順次新しい群が出現していったと考えられる。

円筒埴輪がこのような変遷をたどることについては、瓦谷古墳群の資料的制約にもよるだろうが、この時期には1基の古墳から多様な形態・特徴を持った円筒埴輪が出土することの方が、むしろ一般的な状況であったのかもしれない。

瓦谷古墳群出土の円筒埴輪を山城・大和・河内の各地域で出土した円筒埴輪と検討することで、同古墳群の造営が古墳時代前期後半から中期前半にかけて行われたことを明らかにした。特に、瓦谷古墳群の盟主墳である1号墳は、古墳群における占地や円筒埴輪などから、瓦谷古墳群では最初に築造された古墳であり、南山城地域では平尾城山古墳に続いて築造された前方後円墳と考えられる。また、ここではふれなかった器財埴輪や鱗付円筒埴輪からみる限り、瓦谷1号墳の築造(すなわち瓦谷古墳群の造墓開始)と佐紀盾列古墳群の造墓開始はほぼ同時期と考えられる。さらに、瓦谷古墳群でも後半期に位置づけられる第4・5群の円筒埴輪は、古市古墳群で出土した円筒埴輪と共通する属性を多く持つ。

以上のような円筒埴輪の特徴から、瓦谷古墳群は、大和地域北部の佐紀古墳群と同時に造墓が開始される。その後、小型方形墳を中心に順次築造されていくが、河内地域で古市古墳群が成立した後も、同古墳群の円筒埴輪と類似した円筒埴輪を使用しつつ、中期前半には造墓活動を停止する。ここでは、古市古墳群の成立によって古墳の造墓活動に対して何らかの制約があったことがうかがえるような変化はみられない。

瓦谷古墳群の造墓活動停止後は、南約300mに位置する上人ヶ平古墳群へと継続される。木津町市坂地区では、盟主墳と小型方形墳からなる古墳群を形成するという点で、一貫した古墳造営が行われていたと考えることができる。^(注135)

第5節 古墳群と埴輪棺について

瓦谷古墳群が立地する丘陵部は、奈良時代には建物跡によって、中世には堀状遺構によって、そして明治以降には新田開発により大きく改変された。その結果、古墳の中心埋葬施設の大半が削り取られており、埴輪棺もその多くが削り取られていた可能性が高い。このため、各古墳の周辺にはさらに多くの埴輪棺が配列されていた可能性が考えられるが、ここでは検出された埴輪棺26基と古墳の関連について、若干の検討を行う。

古墳と埴輪棺の位置 埴輪棺は、その位置関係により、①・②・③の3グループに大別できる。すなわち、①グループは、瓦谷古墳群の中でも中心的な古墳である1号墳の墳丘及びその周辺に近接し、瓦谷1号墳の墳丘に樹立していた埴輪を抜き取り、棺に使用した可能性が高いグループである。①グループには瓦谷1号墳の墳丘内にある①-1グループ(5・8・9・11号埴輪棺)と、

付表11 埴輪棺一覧表

遺構名	棺位置	棺構造	棺長	頭位(推定)	棺使用の埴輪
1号埴輪棺	②-2a	単棺A-b	0.70m	Ⅲ；南西方向	円筒第1群・第3群
2号埴輪棺	②-2a	複棺B-b	1.25m	Ⅲ；南西方向	円筒第3群
3号埴輪棺	②-2a	複棺B-a	1.35m	Ⅲ；南西方向	円筒第4群
4号埴輪棺	②-2a	単棺A-b	0.65m	Ⅲ；南西方向	円筒第4群
5号埴輪棺	①-1	その他	1.30m以上	I；北西方向	円筒第2群・第3群
6号埴輪棺	①-2	その他	0.76m	不明	蓋形埴輪
7号埴輪棺	①-2	その他	不明	不明	壺形埴輪あるいは土師器壺
8号埴輪棺	①-1	複棺B-a	1.63m	I；北方向	円筒第3群
9号埴輪棺	①-1	単棺A-b	0.70m	I；北東方向	円筒第1群・第2群
10号埴輪棺	①-2	単棺A-b	1.15m	I；北東方向	円筒第3群
11号埴輪棺	①-1	複棺B-a	1.50m	Ⅱ；西方向	円筒第3群・第4群
12号埴輪棺	②-2a	複棺B-a	1.44m	Ⅱ；西方向	円筒第3群
13号埴輪棺	②-2a	不明	不明	I；北東方向	円筒第3群・第4群
14号埴輪棺	②-2b	単棺A-b	1.05m以上	I；北方向	円筒第5群
15号埴輪棺	②-2a	複棺C-b	0.90m	Ⅳ；東方向	円筒第4群
16号埴輪棺	②-2b	単棺B-a	1.40m	I；北方向	円筒第5群
17号埴輪棺	②-2a	複棺C-b	0.71m	Ⅳ；東方向	円筒第4群
18号埴輪棺	②-2a	複棺B-a	1.05m	Ⅳ；東方向	盾形埴輪
19号埴輪棺	②-2b	複棺B不明	0.75m以上	Ⅳ；東方向	円筒第3群
20号埴輪棺	②-1	単棺A-b	0.67m	Ⅳ；北東方向	円筒第4群
21号埴輪棺	②-2a	単棺A-b	0.74m	Ⅳ；北東方向	円筒第3群
22号埴輪棺	②-2b	複棺B-c	1.20m	I；北西方向	円筒第4群
23号埴輪棺	②-1	単棺A-b	0.63m	Ⅲ；南方向	円筒第4群
24号埴輪棺	③	複棺B-a	1.85m	Ⅳ；東方向	円筒第3群・第5群・盾形埴輪
25号埴輪棺	③	不明	不明	不明	蓋形埴輪
26号埴輪棺	③	複棺B-a	2.10m	Ⅳ；北東方向	特製埴輪

墳丘外にある①-2グループ(6・7・10号埴輪棺)に分けることができる。①-1グループは、付表11のように墳丘主軸にほぼ並行(あるいは直交)するように配列されており、埴輪棺のなかでは1号墳と特に密接な関係にある被葬者の墓の可能性が高い。①-2グループは、墳丘外の周辺部に前方後円墳の基定線とほぼ並行する位置関係にあり、瓦谷1号墳との関連が指摘できる。

②グループは、瓦谷1号墳の盟主墳に対して従属した関係にある方墳の墳丘及びその周辺にある埴輪棺である。②グループは付表11のとおり、墳丘内にある②-1グループ(20・23号埴輪棺)と、墳丘外に配された②-2グループがあり、②-2グループにも古墳の主軸(主に周溝の主軸)に並行(あるいは直交)する②-2aグループと、古墳の主軸にとらわれない②-2bグループがある。ただ、2号墳の中心埋葬施設は木棺直葬であり、他の方墳(あるいは円墳)の中心埋葬施設も木棺直葬の可能性が高く、方墳の墳丘内にある埴輪棺(20・23号埴輪棺)は、方墳の中心埋葬とはいいがたい。②-2グループは、その配された位置関係から、②-2bグループに比べて②-2aグループのものが、より小規模方墳との関連が密であるか、あるいは小規模方墳の造営により近接した時期に②-2aグループが造営された可能性が考えられる。

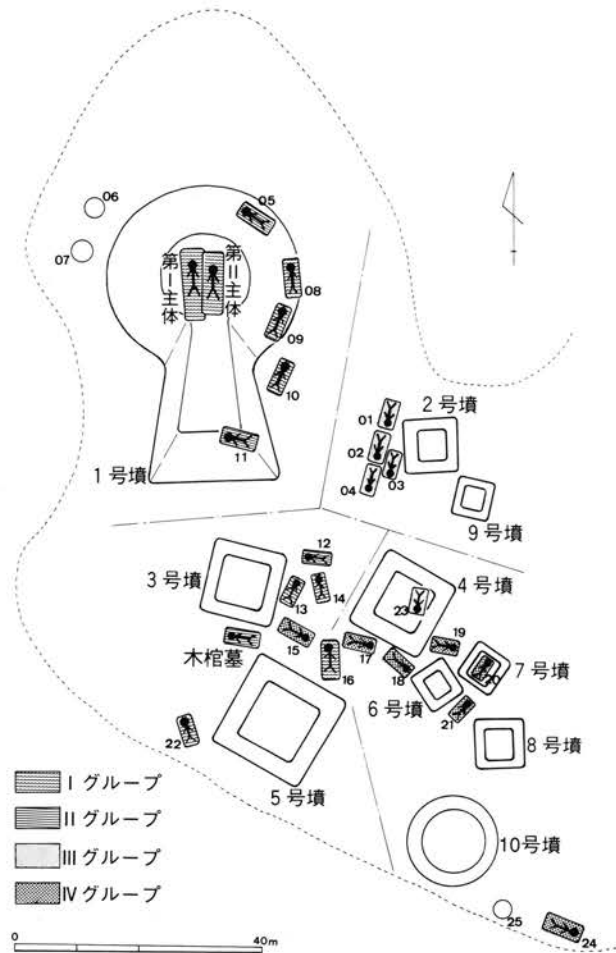
③グループは、古墳からやや離れた位置にあり、古墳に従属することなく独立したかのような

位置にある埴輪棺である。瓦谷1号墳や小規模方墳(あるいは円墳)からやや離れた位置にある③グループ(24~26号埴輪棺)は、後述するように25号埴輪棺を除いて他の埴輪棺よりも規模が大きく、よりていねいなつくりの埴輪棺である。なお、③グループには後述するように16・22号埴輪棺も含まれる可能性がある。

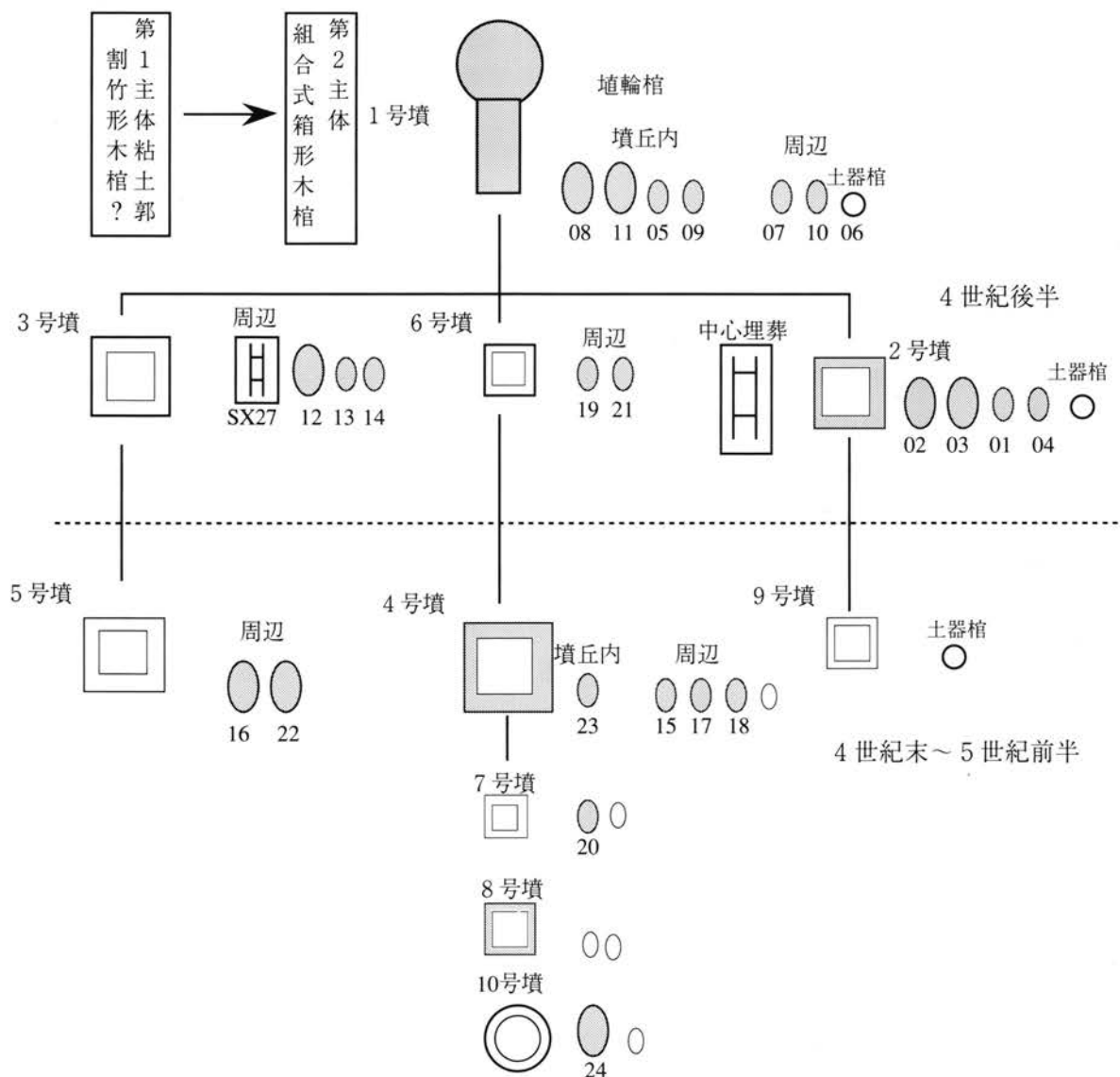
古墳との関係から、埴輪棺は、①・②・③グループに大別できるが、それに関連した古墳については、埴輪の有無などに相違がみられる。すなわち、各古墳の周溝内には、埴輪片を含むものが2・4・5・8号墳のみで、他の3・6・7・9・10号墳の周溝内からは埴輪片が出土しておらず、土師器片を少量含むのみであった。

棺構造 検出した埴輪棺は単棺構造のもの9基(1・4・9・10・13・14・20・21・23号埴輪棺)・複棺構造のもの12基(2・3・8・11・12・15~18・21・24・26号埴輪棺)で、他に被葬者の上面に埴輪片を置いたもの(19号埴輪棺)、棺蓋として使用したもの(5号埴輪棺)、形象埴輪を使用したもの(6・25号埴輪棺)がある。これらの埴輪棺の棺構造を分類すると、単棺構造のもの^(注136)と複棺構造のものに分類できる。単棺構造のものは、本来は古墳に樹立されていたものか、あるいは古墳に樹立するためにつくられた埴輪を利用したもの(A-bタイプ)で、特製埴輪を使用したもの(A-aタイプ)のものはない。複棺構造のものは12基あり、一方の埴輪に他方の埴輪を入れ口状に挿入したもの(Bタイプ)と、合わせ口状にしたもの(Cタイプとする)がある。Bタイプには、棺の長さを調整するために打ち欠いた埴輪を頭位部分に使用するもの(B-aタイプ)と、足元部分の埴輪で調整するもの(B-bタイプ)、完形の埴輪を使用し合わせ目の重なり具合によって調整したもの(B-cタイプ)が考えられる。Cタイプでは、それぞれの埴輪の底部を合わせたもの(C-aタイプ)と口縁部を合わせたもの(C-bタイプ)が考えられる。

これらの分類試案をもとに瓦谷古墳群の埴輪棺をみても、単棺構造のものは9基でA-aタイプの特製埴輪を使用したものではなく、いずれもがA-bタイプである。Bタイプは、B-aタイプとB-bタイプの分類をあてはめることに若干の無理があるが、想像を含めて分類すると、B-aタイプには3・8・11・12・16号埴輪棺が、B-bタイプには2号埴輪棺がある。ただ、



第67図 埴輪棺頭位推定模式図



第68図 瓦谷古墳群の古墳及び埴輪棺模式図

各埴輪棺とも遺骸の遺存する例がなく、B-a・B-bとも厳密には再検討を要する。また、18・24号埴輪棺は、盾形埴輪を使用しているが、基本的にはB-aタイプに属し、瓦谷古墳群の埴輪棺はB-aタイプが主体となる可能性が高い。Cタイプには15・17号埴輪棺があり、いずれも口縁部を重ねたC-bタイプである。

埴輪棺の規模 瓦谷古墳群で検出した埴輪棺では、単棺構造のものは棺本体の底部から口縁部までの長さ、複棺構造のものは組み合わせた埴輪の両端を棺の長さとした。この場合、18号埴輪棺のように頭位に石枕を置いたと考えられるもの、16・24号埴輪棺のように埴輪片を枕に使用したものもあり、厳密には被葬者の身長は明示した棺の長さより小さくなると思われる。また、単棺のものでは、特に死者を別の場所で埋葬した後、骨を新たに埋葬することも考えられるが、他の遺跡で出土する埴輪棺で明らかに再葬したのち埴輪棺内に入れる例を知らないため、埴輪棺では再葬はなかったと考える。

瓦谷古墳群での埴輪棺の規模(棺の長さ)は、蓋形埴輪を転用した6号埴輪棺で60cm、円筒埴輪を転用した21号埴輪棺(単棺構造)の74cmがもっとも短く、最も長いものは円筒埴輪と盾形埴輪を組み合わせた24号埴輪棺で長さ1.84mを測る。棺の長さでは約1mを境に1m未満のもので単棺構造のものが多く、1m以上では複棺構造のものが多いが、1m以上でも単棺構造のもの(10号埴輪棺の1.75m・14号埴輪棺の1.05m)がある。棺の長さが被葬者の身長を反映していると考えれば、瓦谷古墳群では、1.5m以上のものが2基(体)で、1m以上1.5m未満のものが10基(体)、1m未満のものが9基(体)となり、身長1.5m未満の被葬者が大半である。そして、瓦谷古墳群のなかでも新しい埴輪を棺に転用した埴輪棺が1.5m以上となる。

埴輪棺からみら古墳の分布 瓦谷古墳群の埴輪棺内には被葬者の遺骸が遺存せず、その頭位については断定できるものはない。ただ、棺内にみられた埴輪片や石材を利用した転用枕の存在から11・16・18・24号埴輪棺の被葬者の頭位が推定できる。また、棺身に使用された埴輪(特に主となる長い埴輪)の口縁部側に頭を据える傾向にあることから、瓦谷埴輪棺の頭位を推定したものが第67図である。

第67図によると、頭位を北方向に置くⅠグループ(8～10・13・14・16・22号埴輪棺)、西側の平野部に置くⅡグループ(11・12号埴輪棺)、南の谷部に置くⅢグループ(1～4・23号埴輪棺)、平野部とは反対側の丘陵部上位に置くⅣグループ(15・17～19・21・24号埴輪棺)に大別できる。Ⅰグループの埴輪棺は、1号墳の墳丘及びその周辺と3・5号墳の周辺にあり、Ⅱグループの埴輪棺も同じ傾向にある。Ⅲグループの埴輪棺は、4号墳墳丘内の23号埴輪棺を除いて2号墳の周溝の西側に遍在している。Ⅳグループの埴輪棺は、4・6・7号墳の周辺とやや離れた24～26号埴輪棺がある。このように、古墳と古墳を取りまく埴輪棺が何か関係があるとすれば、埴輪棺の頭位を元に古墳のグルーピングも可能であると考えられる。また、筒井が記すように、埴輪棺の棺身に使用された埴輪のうち、円筒第1・2群の埴輪は1・2号墳の周辺の埴輪棺で使用されている。円筒第3・4群の埴輪は、16・24号埴輪棺を除く各埴輪棺で、円筒第5群の埴輪は、16・24号埴輪棺で使用されている。そして、円筒第1～4群の埴輪が円筒第5群の埴輪に先行することから、第68図のような系譜及び時期が考えられる。この第68図をもとに、古墳群の性格を検討すると、瓦谷古墳群の墓域設定の契機となった瓦谷1号墳(前方後円墳)は3グループの首長一族か、同族的な集団のまとまりをもち、5世紀前半まで小型古墳を造り続けたことが考えられる。

(石井清司)

おわりに

瓦谷古墳群の調査は、対象面積約10,000㎡以上を、一部中断の期間をもちながら7か年をかけて試掘及び発掘調査を実施した。この調査地では、円墳(瓦谷古墳)1基と古墳時代あるいは奈良時代の集落跡が丘陵先端に広がることを予想して試掘調査を進めたが、調査が進むにつれ円墳と考えていた瓦谷古墳が前方後円墳であること、その背後には小規模古墳と埴輪棺・土壙墓群が広がり、前方後円墳である1号墳を頂点として、小規模古墳・埴輪棺・土壙墓群を同一丘陵で検出した。このことは、瓦谷古墳群が墓制からみた階層分化を如実に表す遺跡であることが明らかとなった。

調査期間中、数多くの方々からの見学とそれらの方々の御教示のもと、発掘調査を進めた結果、本書のような発掘調査報告書が刊行できた。本書では、埴輪の胎土分析・埋葬施設と埴輪棺の脂肪酸分析など科学的な調査方法も一部試みたが、都合により掲載には至らなかった。

長期にわたる調査期間中、あたたかく見守っていただいた住宅・都市整備公団関西支社・関西文化学術研究都市整備公団・木津町教育委員会・地元の方々には末筆ながら厚く御礼申し上げます。また、各年度ごとに変わる調査担当者のもとで、調査に参加された作業員・調査補助員・整理員の方々にも厚く御礼申し上げます。

なお、調査に参加していただいた補助員・整理員の方々は以下のとおりである(敬称略 順不同)

青木 卓・青山ひろみ・浅野真紀・池田晃仁・石井伸卓・石田真一・石崎陽子・泉 晶子・五百磐頭一・犬伏正樹・井上直樹・岩前忠英・岩前良幸・植村滋人・岩本 貴・植田佳代子・遠藤美帆・遠藤七都子・大倉伸也・大谷健二・大西 都・小関菜都子・小野紀男・香川知子・鹿島昌也・檜原清美・勝見直子・鎌田敏文・川本由香・木村絹子・木村晶子・小林万須美・小村 勉・河野一臣・河野千春・兼定信和・北埜善史・木下年史・木村和彦・日下隆春・久保田琢磨・小泉裕司・佐々木達也・坂田千晶・滋井秀明・滋井雅明・島原みどり・下之あゆみ・白石純吾・正寿敦・新谷二三代・杉原美智久・高田優子・高橋立彦・武石匡司・竹内理恵・武田一郎・武田久美子・武田宏美・多田誠一・辰巳龍郎・田中達也・田中康夫・谷口ゆかり・谷後恒美・谷本美和・塚田 力・辻谷真夕・辻 道子・筒井崇史・筒井由香・豊福 孝・永尾幸江・中井英策・中川吾郎・中野行真・中西 修・中村久登・仁科幸子・服部直美・花井万里子・早川和子・林 恵子・林 益美・浜谷亜紀子・菱田直美・平野麻子・平松久和・平松弘孝・平井千香子・藤内朱實・藤沢地恵・藤野洋大・福永美知代・古川良子・細川貴久・堀 純子・堀 優子・松田嘉之・松岡邦祐・水野哲郎・宮本純二・宮本浩行・三好 愛・村田和弘・森 光重・森武千恵・森本祐一・八瀬正雄・山田哲也・山田三喜子・山本幸彦・吉川啓太・芳谷興子・吉田悦子・吉永清美・吉村優子・若松美智子・渡辺康子・和村裕紀子

(石井清司)

- 注1 瓦谷古墳群が立地する丘陵の地質構造については、橋本清一氏からご教示いただいた。
- 注2 吉田東伍『大日本地名辞書 第二巻 上方』富山房 1900
- 注3 近年における墳丘部の土地利用については、地元在住の才治栄一氏(故人)のご教示による。
- 注4 1914年から1916年にかけて、南山城から北大和の古墳が大規模に盗掘された記録が残されている。
- 注5 都出比呂志「前方後円墳出現期の社会」(『考古学研究』第26巻第3号 考古学研究会) 1979
- 注6 山本三郎「畿内における古墳時代の政治的動向についての一視点—埋葬施設の構造を中心として—」(『ヒストリア』第87号 大阪歴史学会) 1980、山本三郎「竪穴系の埋葬施設」(『古墳時代の研究』第7巻 古墳I 墳丘と内部構造 雄山閣出版) 1992
- 注7 このような形式の木棺は、福永伸哉分類のⅡ型木棺(底板の上に小口板を立てることを特徴とするタイプ。墓壇底はフラット。)に相当し、同氏の棺材組み合せ方の分類のA型(長側板が小口板を挟んで、さらに棺長軸方向に突出するもの)に属する(福永伸哉「木棺墓」『弥生文化の研究』第8巻 祭と墓と装い 雄山閣出版 1987)。
- 注8 古墳時代前期に属する有機質製の草摺としては、革製と考えられるものが奈良県東大寺山古墳・同上殿古墳から出土している。
- 注9 古墳時代前期に属する有機質製の短甲としては、木製のものが滋賀県松原内湖遺跡・奈良県平城宮下層遺跡・大阪府下田遺跡などから出土しており、皮革製としては奈良県東大寺山古墳、繊維質製短甲と報告されているものが兵庫県西野山3号墳から出土している。
- 注10 赤色顔料の分析は、橋本清一に依頼した。
- 注11 銅鏡の名称については、概報では「仿製変形四獣鏡」としていたが、樋口隆康理事長のご教示により「獣首形鏡」と改める(樋口隆康「京都府下近年出土の鏡に就いて(2)」(『京都府埋蔵文化財論集』第2集—創立十周年記念誌— (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 1991)。
- 注12 ヤリ・ホコの用字については、中世以来さまざまな漢字が当てられてきて、一部に混乱が生じている。このため、この混乱を避けるためカタカナで表記する方法が採られている。しかし、本報告では現代の国語として定着している漢字を当てることとし、茎式の「やり」を「槍」、袋穂式の「ほこ」を「矛」と表記することにする。
- 注13 明治時代以降の刀剣分類で、刃長2尺(60.6cm)以上を「大刀」、1尺以上2尺未満を「刀」、1尺未満を「刀子」とする分類があり、本報告でもこれを援用する。
- 注14 鉄製甲冑の復原にあたっては、小林謙一・橋本清一の指導のもとに検討を重ねて行った。また、その過程と考察を論文にまとめた(橋本清一・小林謙一・伊賀高弘「古墳時代前期の鉄製甲冑の復原—京都府木津町瓦谷古墳出土の小札革綴冑・方形板革綴短甲—」『考古学と自然科学』第27号 日本文化財科学会 1994)。
- 注15 たとえば、前漢代に属する例として、山東省淄博市齊王墓第5号器物随葬坑・広東省広州南越王墓・河北省滿城中山王劉勝墓出土例、後漢代に属する例として、吉林省榆樹老河深遺跡M67号墓出土例などが知られている。
- 注16 京都大学文学部考古学研究室編『椿井大塚山古墳と三角縁神獣鏡』 思文閣 1989
- 注17 伊賀高弘「木津地区所在遺跡平成2年度発掘調査概要 (1)瓦谷古墳」(『京都府遺跡調査概報』第46冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1991 60頁
- 注18 注14文献。
- 注19 鍔形石製品の呼称については、石製鍔、磨製鍔、鍔形碧玉製品などさまざまな表記があるが、本報告では泉森 皎氏の「鍔形石製品」を用いることにする(泉森 皎「鍔形石製品」『磐余・池ノ内古

- 墳群』 奈良県史跡名勝天然記念物調査報告 第28冊 奈良県教育委員会 1973)。
- 注20 石材の鑑定は、以下の石製品も含めて橋本清一に依頼した。
- 注21 後藤守一は、このような形態の鉄鏃を『東大寺献物帳』にみえる「斧箭」に相当するものとみなし、頭部の形態から、これを圓頭・方頭・圭頭に分けて、「圭頭斧箭式」の形式名を提唱した(後藤守一「上古時代鉄鏃の年代研究」『人類学雑誌』第54巻第4号 東京人類学会 1939)。
- 注22 杉山秀宏「古墳時代の鉄鏃について」(『橿原考古学研究所論集』第8号 奈良県立橿原考古学研究所) 1988
- 注23 「椿葉形」の名称は、後藤守一の命名による(注21文献)。
- 注24 「直截式」拵の名称を最初に用いたのは菅谷文則である(菅谷文則「前期古墳の鉄製ヤリとその社会」『橿原考古学研究所論集』創立35周年記念 奈良県立橿原考古学研究所 1975)。
- 注25 和田晴吾「ヤス・モリ」(『弥生時代の研究』第5巻 道具と技術Ⅰ 雄山閣出版) 1985
- 注26 野島 永の教示による。
- 注27 銅鏃の分類名称については、後藤守一の分類にしたがう(後藤守一「銅鏃に就て」(一)『考古学雑誌』第10巻第1号 日本考古学会 1919)。
- 注28 「類銅鏃式鉄鏃」の名称を最初に用いたのは後藤守一である(注21文献)。
- 注29 鉄斧の分類に関しては、古瀬清秀・野島 永による分類案を参考にした(古瀬清秀「農工具」副葬品の種類と編年『古墳時代の研究』第8巻 古墳Ⅱ 副葬品 雄山閣出版 1991、野島 永「古墳時代の有肩鉄斧をめぐって」『考古学研究』第41巻第4号 考古学研究会 1995)。
- 注30 ここでの観察は、1990～92年にかけて行ったもので、その成果についてはすでに報告している(筒井崇史「瓦谷古墳出土の靱について」『京都府埋蔵文化財情報』第45号 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 1992)。今回の報告は、その後、明らかになった点を補足して、まとめたものである。以前の報告と異なる点があれば、本報告をもって正式なものとした。
- 注31 雪野山古墳出土の靱の復原案が正式報告書の中で示されている(雪野山古墳発掘調査団編『雪野山古墳の研究』考察編 八日市市教育委員会 1996 140頁)。
- 注32 断面写真の撮影は、奈良国立文化財研究所の工業普通に依頼した。また、漆の混ぜ物についてもご教示を得た。
- 注33 注29野島 永文献。
- 注34 「五線帯」の名称は、齊藤和夫・宇佐晋一の命名による(齊藤和夫・宇佐晋一「直弧文の研究(一)」『古代学研究』第6号 古代学研究会 1952)。
- 注35 「用形文」の名称は、齊藤和夫・宇佐晋一の命名による(齊藤和夫・宇佐晋一「直弧文の研究(二)」『古代学研究』第7号 古代学研究会 1952)。
- 注36 「鍵手文」の名称は、小林行雄の命名による(小林行雄「直弧文」『古墳文化論考』平凡社 1976)。
- 注37 『考古学』第1巻第9号図版 1930、石田茂輔「日葉酢媛命御陵の資料について」(『書陵部紀要』第19号 宮内庁書陵部) 1967
- 注38 伊賀高弘「上人ヶ平古墳群の蓋形埴輪—14号墳の蓋形埴輪を中心に—」(『京都府埋蔵文化財情報』第32号 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 1989)にて用語を規定した。蓋形埴輪の笠部の製作技法については、これ以前に市橋房則「能田旭古墳—第1次発掘調査報告—」(『人類学博物館紀要』第8号 南山大学人類学博物館 1986)や、高橋克壽「器財埴輪の編年と古墳祭祀」(『史林』第71巻第2号 史学研究会 1988)で指摘されている。
- 注39 高橋克壽は、盾形埴輪をその盾面の文様の分割の仕方によって、「目字形」(一類)と「Ⅱ字形」(二

- 類)に二分した(注38 高橋克壽文献)。
- 注40 櫻井久之は、高橋克壽分類の『「目」字形』分割の盾形埴輪の盾面の文様を「外区」「内区の枠組み」「平行線帯」と呼称して、この種の盾形埴輪の変遷を論じている(櫻井久之「形象埴輪からみた長原40号墳の編年的位置」(『長原遺跡発掘調査報告』Ⅳ (財)大阪市文化財協会 1991)。
- 注41 「忍岡系対称文」の名称は、斎藤和夫・宇佐晋一の命名による(注35文献)。
- 注42 高橋克壽は、この最下段の平行沈線の表現を板材の木目をあらわしているとみて、この種の盾形埴輪の模倣原体を木製盾と考えた(注38 高橋克壽文献)。
- 注43 楠元哲夫は、奈良県出土の盾形埴輪の分析を行い、その形態や文様の違いを指標に高橋克壽とは異なった視点で大きく直弧文系のものと鋸歯文系の二者に分類した(楠元哲夫「大和における盾形埴輪の系譜」『岩室池古墳 平等坊・岩室遺跡』天理市教育委員会 1985)。
- 注44 注38 伊賀高弘文献。
- 注45 注38 伊賀高弘文献。
- 注46 秋山日出雄・網干善教『室大墓』(『奈良県史跡名称天然記念物調査報告』第18冊 奈良県教育委員会) 1959
- 注47 東 潮・坂 靖「佐味田・別所下古墳発掘調査報告」(『奈良県遺跡調査概報 1986年度』第1分冊 奈良県立橿原考古学研究所) 1989
- 注48 笠井敏光・川村紀子「古市遺跡群Ⅴ」(『羽曳野市埋蔵文化財調査報告書』9 羽曳野市教育委員会) 1984
- 注49 『長原遺跡発掘調査報告』Ⅲ (財)大阪市文化財協会 1983
- 注50 伊賀高弘「上人ヶ平古墳群における小規模な方墳について」(『京都府埋蔵文化財論集』第2集 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1991 307頁
- 注51 筒井崇史「小型方形墳の再検討」(『文化財学論集』文化財学論集刊行会) 1994
- 注52 注2文献。
- 注53 注5文献。
- 注54 注6文献。
- 注55 注5文献。
- 注56 注6文献。
- 注57 吉留秀敏「九州の割竹形木棺」(『古文化談叢』20集(中) 九州古文化研究会) 1989
- 注58 陳 顕明『土保山古墳発掘調査概報』高槻市教育委員会 1960
- 注59 岸 熊吉「木棺出土の三倉堂遺蹟及遺物調査報告」(『奈良県史跡名勝天然記念物調査報告』第12冊 奈良県教育委員会) 1934
- 注60 大和久震平『七廻り鏡塚古墳』帝国地方行政学会 1974
- 注61 小林行雄「三重県名賀郡石山古墳」(『日本考古学年報』1～3 日本考古学協会) 1948～1950、京都大学文学部考古学研究室編『紫金山古墳と石山古墳』(『京都大学文学部博物館図録』第6冊 京都大学文学部博物館) 1993
- 注62 末永雅雄・嶋田 暁・森 浩一『和泉黄金塚古墳』(『日本考古学協会調査報告』第5冊 綜芸社) 1954
- 注63 野上丈助「日韓古墳出土甲冑の系譜について」(『論集武具』学生社) 1991
- 注64 注31文献。
- 注65 注61 京都大学文学部考古学研究室編文献。

- 注66 高橋 工「東アジアにおける甲冑の系譜と日本一特に5世紀までの甲冑制作技術と設計思想を中心に」(『日本考古学』第2号 日本考古学会) 1995
- 注67 伊達宗泰「和爾上殿古墳」(『奈良県史跡名勝天然記念物調査報告』第22冊 奈良県教育委員会) 1966
- 注68 森 浩一編「園部垣内古墳」(『同志社大学文学部考古学調査報告』第6冊) 1990
- 注69 柳田康雄「若八幡宮古墳」(『今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告』第2集 福岡県教育委員会) 1971
- 注70 船来山古墳群発掘調査団『船来山古墳群』 現地説明会資料 1996
- 注71 西宮一男『常陸狐塚』 1969、滝沢 誠「狐塚古墳出土の短甲」(『茨城県史研究』第64号 茨城県史編纂委員会) 1990
- 注72 木下之治・小田富士雄「熊本山船型石棺墓」(『佐賀県文化財調査報告書』第16冊 佐賀県教育委員会) 1967
- 注73 伊達宗泰ほか「新沢千塚古墳群」(『奈良県史跡名勝天然記念物調査報告』第39冊 奈良県教育委員会) 1981
- 注74 小田富士雄「福岡県行橋市海岸の弥生式墳墓」(『九州考古学』11・12号) 1961、小田富士雄・石松好雄「九州古墳発見甲冑地名表」(『九州考古学』23号) 1966
- 注75 注19文献。
- 注76 末永雅雄「東大寺山古墳群の調査」(『奈良県観光』154 奈良県観光新聞社) 1969、奈良県立橿原考古学研究所附属博物館編「東大寺山古墳出土遺物」(『大和出土の国宝・重要文化財』) 1980
- 注77 注19文献。
- 注78 塩入秀敏「社軍神遺跡」(『長野県史』考古資料編) 1982
- 注79 申 敬澈「大成洞古墳の概要」(『東アジアの古代文化』68号 大和書房)、申 敬澈「伽耶成立前後の諸問題—最近の発掘調査成果から—」(『伽耶と古代東アジア』 新人物往来社) 1993、河村好光「海を渡った鍔形碧玉製品」(『展望 考古学』考古学研究会40周年記念論集 考古学研究会) 1995
- 注80 関 義則「古墳時代後期鉄鍔の分類と編年」(『日本古代文化研究』第3号) 1986
- 注81 松木武彦「前期古墳副葬鍔の成立と展開」(『考古学研究』第37巻第4号 考古学研究会) 1991
- 注82 高木恭二「圭頭斧箭式鉄鍔について」(『城二号墳』 宇土市上綱町宇城所在城二号墳調査報告 宇土市埋蔵文化財調査報告書 第3集 宇土市教育委員会) 1981
- 注83 注22文献。
- 注84 西谷真治『元稲荷古墳』 西谷真治先生還暦祝賀会 1985
- 注85 梅原末治「八幡石不動古墳」(『京都府文化財調査報告』第22冊 京都府教育委員会) 1955
- 注86 榊井豊成ほか『ヒル塚古墳発掘調査概報』 八幡市教育委員会 1990
- 注87 久野邦雄・泉森 皎「富雄丸山古墳」(『奈良県文化財調査報告書』第19集 奈良県教育委員会) 1973、今尾文昭『大和考古資料目録 第11集 前期古墳資料(1)』 奈良県橿原考古学研究所附属博物館 1984
- 注88 梅原末治「向日町妙見山古墳」(『京都府文化財調査報告』第21冊 京都府教育委員会) 1955
- 注89 注16文献。
- 注90 小林行雄「紫金山古墳の調査」(『大阪府の文化財』 大阪府教育委員会) 1962年、注61 京都大学文学部考古学研究室文献、小林行雄・近藤義郎「古墳の変遷」(『世界考古学大系』日本Ⅲ 古墳

時代 平凡社) 1959

- 注91 長嶺正秀・高橋 章「石塚山古墳発掘調査概報—福岡県京都郡苅田町所在古墳の調査報告—」(『苅田町文化財調査報告書』第9集 苅田町教育委員会) 1988
- 注92 注62文献。
- 注93 注22文献。
- 注94 白石太一郎「城山第2号墳(第21地点)・城山第2号墳出土の札甲」(『馬見丘陵における古墳の調査』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告 第29冊 奈良県教育委員会) 1974
- 注95 注67文献。
- 注96 注69文献。
- 注97 注16文献。
- 注98 権現山51号墳発掘調査団(団長 近藤義郎)編『権現山51号墳』 1991
- 注99 後藤守一・内藤政光・高橋 勇『静岡県磐田郡松林山古墳発掘調査報告』 御厨村郷土教育研究会 1939
- 注100 注67文献。
- 注101 白杵 勲「古墳出土銚の分類と編年」(『日本古文化研究』第2号) 1985
- 注102 石井清司・伊賀高弘 注17文献。
- 注103 注37 石田茂輔文献の123頁 第4図に示された蓋形埴輪。
- 注104 田中秀和「畿内における蓋形埴輪の検討」(『ヒストリア』第118号 大阪歴史学会) 1988、注38 高橋克壽文献。
- 注105 松木武彦「蓋形埴輪の変遷と画期—畿内を中心に—」(『鳥居前古墳—総括編—』 大阪大学文学部考古学研究報告第1冊 大阪大学考古学研究室) 1991、松木武彦「蓋形埴輪の型式と範型」(『究班—埋蔵文化財研究会15周年記念論文集—』 埋蔵文化財研究会) 1992、松木武彦「吉備の蓋形埴輪—器財埴輪の地域性研究に関する予察—」(『古代吉備』第16号 古代吉備研究会) 1994
- 注106 注37 石田茂輔文献。
- 注107 注105 松木武彦1994年文献。
- 注108 注37 石田茂輔文献 124頁 第5図。
- 注109 注38 高橋克壽文献。
- 注110 和田晴吾「古墳時代の時期区分をめぐって」(『考古学研究』第34巻第2号 考古学研究会) 1987
- 注111 たとえば、弥生時代の集落・墓地遺跡として大島遺跡が知られている(木津町教育委員会『相楽山銅鐸出土地・大島遺跡—発掘調査の記録—』 木津町教育委員会 1982)。
- 注112 小島俊次「マエ塚古墳」(『奈良県史跡名勝天然記念物調査報告』第24冊 奈良県教育委員会) 1969、中井一夫「(1)マエ塚古墳外堤」(『奈良県古墳発掘集報』I 奈良県文化財調査報告書 第28集 奈良県立橿原考古学研究所) 1976
- 注113 高橋克壽「埴輪生産の展開」(『考古学研究』第41巻第2号 考古学研究会) 1994
- 注114 野上丈助「古墳時代における甲冑の変遷とその技術史的意義」(『考古学研究』第14巻第4号 考古学研究会) 1968
- 注115 筆者はかつて「靱」に対して「実用靱」という用語を使用したことがある(筒井崇史「靱形埴輪の変遷について」)が、ここで検討するように、古墳に副葬された靱については、実用性に乏しいことから、ここでは単に「靱」と呼称することにした。なお、靱については用字が何種類かあるが、ここでは「靱」の字を使用し、「ゆき」と清音で読むことにする。

注116 注61文献。

注117 <鼓山古墳>

鼓山古墳発掘調査団編『鼓山古墳発掘調査報告』 福井市教育委員会 1965、沼 弘「福井市鼓山古墳出土土甎についての考察」(『福井考古』第1号 福井考古学研究会) 1968

<会津大塚山古墳>

伊東信雄・伊藤玄三『会津大塚山古墳』(『会津若松市史』別巻1 会津若松市史出版委員会) 1965

注118 <雪野山古墳>

杉井 健「巻頭カラー図版解説 滋賀県雪野山古墳管内出土の靫」(『考古学研究』第38巻第2号 考古学研究会) 1991、注31 雪野山古墳発掘調査団編文献。

<瓦谷1号墳>

筒井崇史「瓦谷古墳出土の靫について」(『京都府埋蔵文化財情報』第45号 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1992

<会津大塚山古墳>

菊池芳朗「会津大塚山古墳南棺出土の靫」(『福島県立博物館紀要』第8号 福島県立博物館) 1994
<その他>

栗林誠治「古墳時代・靫の分類と変遷」(『徳島県埋蔵文化財センター紀要真珠』第2号 (財)徳島県埋蔵文化財センター) 1993

注119 杉井 健「靫の構造とその成立背景」(注31 雪野山古墳発掘調査団編文献)

注120 松木武彦は、有稜系の鍬を儀礼用の鍬と考え、「光線の反射などを意識した視覚的あるいは呪術的な効果」を狙っていると述べた(注81文献)。

注121 筒井崇史「靫形埴輪の変遷について—実用靫との比較検討を通じて—」(『京都府埋蔵文化財論集』第3集 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1996、なお、以下の論述で「別稿」と述べている場合は、すべて本稿を指す。

注122 注61文献。

注123 注46文献。

注124 かつて「類似した靫が遠く離れた古墳から出土するということは、「靫」を配布するような行為が行われていたことを示すのではないか」という指摘を行ったことがある(注118 筒井文献)。

注125 製作集団の存在について『新撰姓氏録』に河内国の未定雑姓として「靫編首」という氏族名がみえている。直接、古墳時代の氏族名を示すわけではないだろうが、このような職能集団がいたことは、靫の製作集団を考える上で参考になると思われる。

注126 近藤義郎・春成秀爾「埴輪の起源」(『考古学研究』第12巻第3号 考古学研究会) 1967

注127 置田雅昭「初期の朝顔形埴輪」(『考古学雑誌』第63巻第3号 日本考古学会) 1977

川西宏幸「円筒埴輪総論」(『考古学雑誌』第64巻第2号 日本考古学会) 1978

赤塚次郎「円筒埴輪製作覚書」(『古代学研究』第90号 古代学研究会) 1979

注128 一瀬和夫「古市古墳群における大型古墳埴輪集成」(『大水川改修にともなう発掘調査概要』V 大阪府教育委員会) 1988

積山 洋「一ヶ塚古墳(長原85号墳)の埴輪編年」(『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』II (財)大阪府文化財協会) 1990

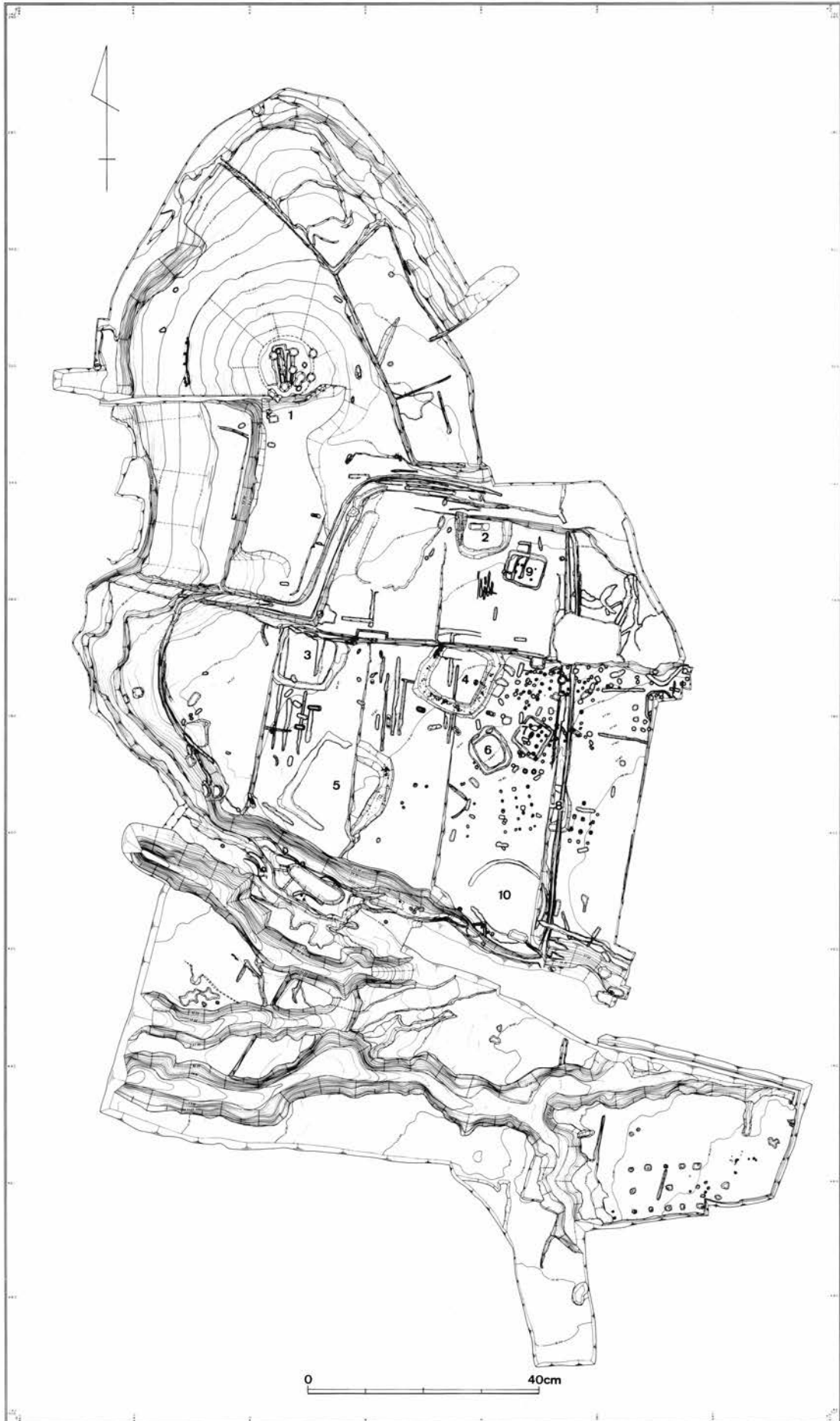
坂 靖「奈良県の円筒埴輪」(『橿原考古学研究所論集』第11 奈良県立橿原考古学研究所) 1994

- 梅本康広「桂川流域の埴輪編年と地域性」(『年報 都城』第6号 (財)向日市埋蔵文化財センター) 1994
- 注129 石井清司・伊賀高弘ほか『上人ヶ平遺跡』(『京都府遺跡調査報告書』第15冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1992
- 注130 主に埴輪棺に転用されたもので、報告書に図面を掲載した41点を対象とした。したがって、未報告の小片などについては未検討である。
- 注131 杉井 健「長法寺南原古墳におけるヒレ付円筒埴輪の製作技法」(『長法寺南原古墳の研究』長岡京市教育委員会) 1992
伊藤 純「鱗付埴輪の製作技法」(『古代文化』第46巻第6号 (財)古代学協会) 1994
- 注132 各地出土円筒埴輪の実測図の出典は以下の通りである。
第64図1～3 『京都府平尾城山古墳』(古代学研究所研究報告 第1輯 (財)古代学協会) 1990
第64図4～6 『長法寺南原古墳の研究』(『大阪大学考古学研究報告』第2冊 大阪大学考古学研究室) 1992
第64図7～9 『鳥居前古墳—総括編一』(『大阪大学考古学研究報告』第1冊 大阪大学考古学研究室) 1990
第64図10・11 笠野 毅「崇神天皇陵外堤及び墳丘護岸区域の事前調査」(『書陵部紀要』第28号 宮内庁書陵部) 1977
第64図12 福尾正彦「狭木寺間陵整備工事区域の調査」(『書陵部紀要』第43号 宮内庁書陵部) 1992
第64図13・14 関川尚功「大和における大型古墳の変遷」(『橿原考古学研究所紀要 考古学論攷』第11冊 奈良県立橿原考古学研究所) 1985
第64図15～19 永島暉臣慎ほか『長原遺跡発掘調査報告』(財)大阪市文化財協会 1978
第65図20～22 積山 洋ほか『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅱ (財)大阪市文化財協会 1990
第65図23～25 廣瀬雅信ほか『萱振遺跡』大阪府教育委員会 1992
第65図26～28 天野末喜ほか『岡古墳』(『藤井寺市文化財報告』第5集 藤井寺市教育委員会) 1989
第65図29～31 注128 一瀬和夫文献。
- 注133 注38 高橋克壽文献。
- 注134 注121文献。
- 注135 注51文献。
- 注136 石井清司「瓦谷遺跡の埴輪棺再考」(『京都府埋蔵文化財情報』第56号 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1995

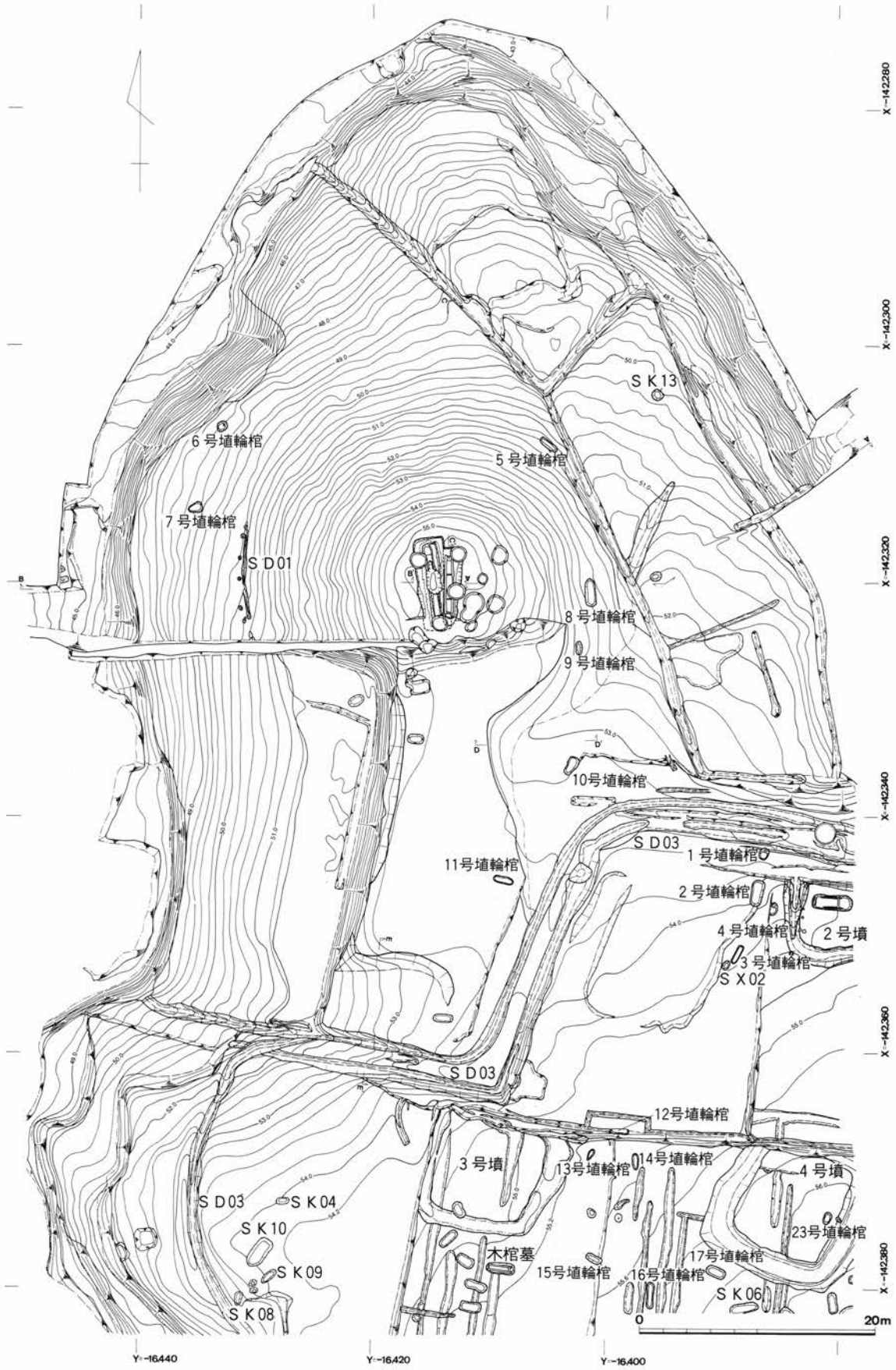
新旧遺構名対照表

新規遺構名	旧遺構名	京都府遺跡調査概報報告年度
1号墳	瓦谷古墳	第46冊 (1991年)
2号墳	S X 2001	第26冊 (1987年)
1号埴輪棺	S X 2002	第26冊 (1987年)
2号埴輪棺	S X 2004	第26冊 (1987年)
3号埴輪棺	S X 2005	第26冊 (1987年)
4号埴輪棺	S X 2007	第26冊 (1987年)
5号埴輪棺	埴輪棺 5	第46冊 (1991年)
6号埴輪棺	埴輪棺 6	第46冊 (1991年)
7号埴輪棺	埴輪棺 7	第46冊 (1991年)
8号埴輪棺	埴輪棺 8 (S X 51)	第56冊 (1994年)
9号埴輪棺	埴輪棺 9 (S X 50)	第56冊 (1994年)
10号埴輪棺	埴輪棺10 (S X 62)	第56冊 (1994年)
11号埴輪棺	埴輪棺11 (S X 25)	第56冊 (1994年)
12号埴輪棺	埴輪棺12 (S X 18)	第56冊 (1994年)
13号埴輪棺	埴輪棺13 (S X 21)	第56冊 (1994年)
14号埴輪棺	埴輪棺14 (S X 13)	第56冊 (1994年)
15号埴輪棺	埴輪棺15 (S X 20)	第56冊 (1994年)
16号埴輪棺	埴輪棺16 (S X 14)	第56冊 (1994年)
17号埴輪棺	埴輪棺17 (S X 15)	第56冊 (1994年)
18号埴輪棺	埴輪棺18 (S X 24)	第56冊 (1994年)
19号埴輪棺	埴輪棺19 (S X 26)	第56冊 (1994年)
20号埴輪棺	埴輪棺20 (S X 11)	第56冊 (1994年)
21号埴輪棺	埴輪棺21 (S X 12)	第56冊 (1994年)
22号埴輪棺	埴輪棺22 (S X 22)	第56冊 (1994年)
23号埴輪棺	埴輪棺23 (S X 23)	第56冊 (1994年)
24号埴輪棺	埴輪棺24 (S X 19)	第56冊 (1994年)
25号埴輪棺	埴輪棺25 (S X 66)	第56冊 (1994年)
26号埴輪棺	埴輪棺26 (S X 01)	第61冊 (1995年)
S X 02	S X 2006	第26冊 (1987年)
S X 06	S X 47	第56冊 (1994年)
S D 03	S D 01	第56冊 (1994年)
S B 01	S B 86	第56冊 (1994年)
S B 02	S B 83	第56冊 (1994年)
S B 03	S B 130	第56冊 (1994年)

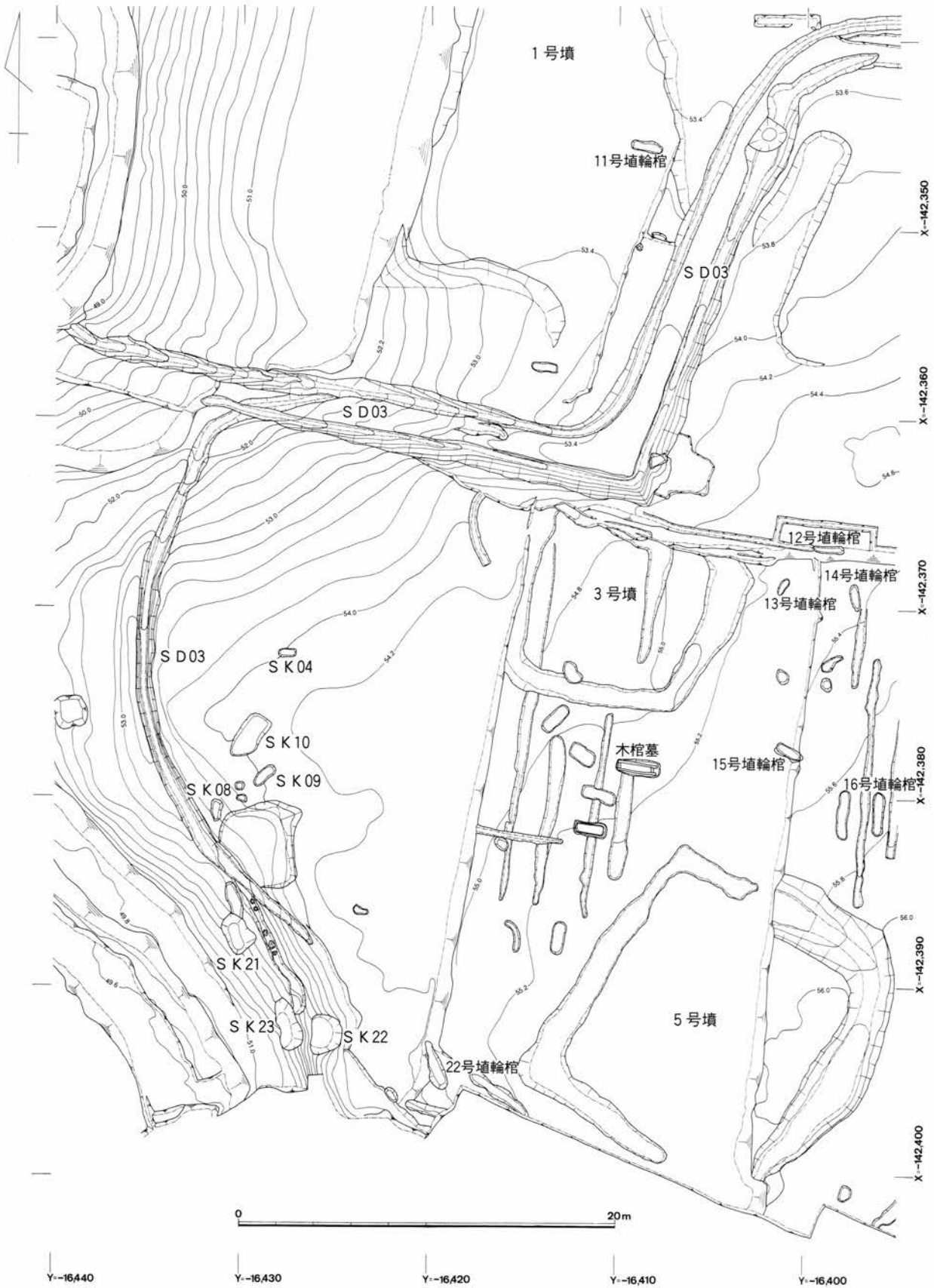
圖 版



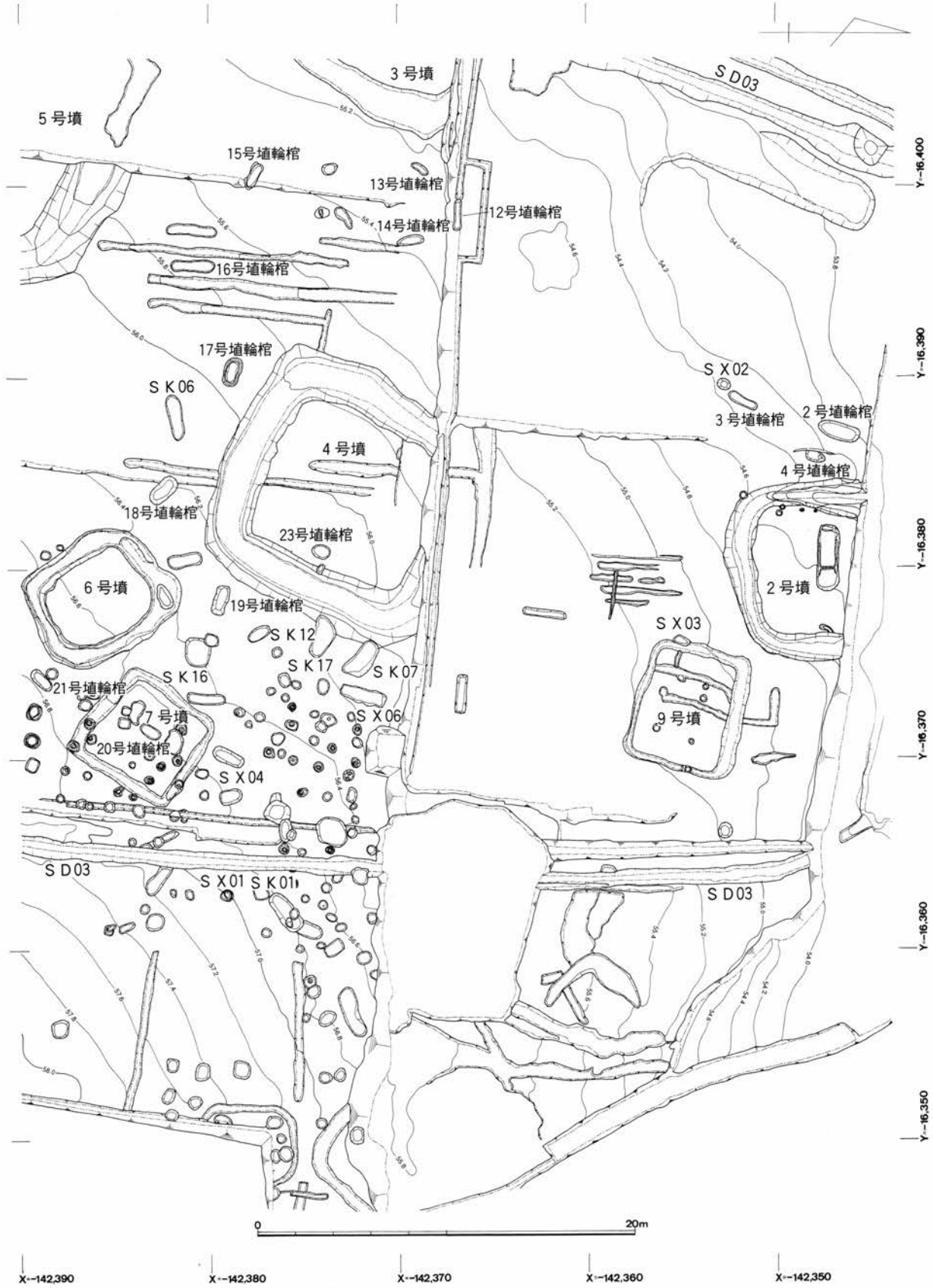
瓦谷古墳群・瓦谷遺跡全体図



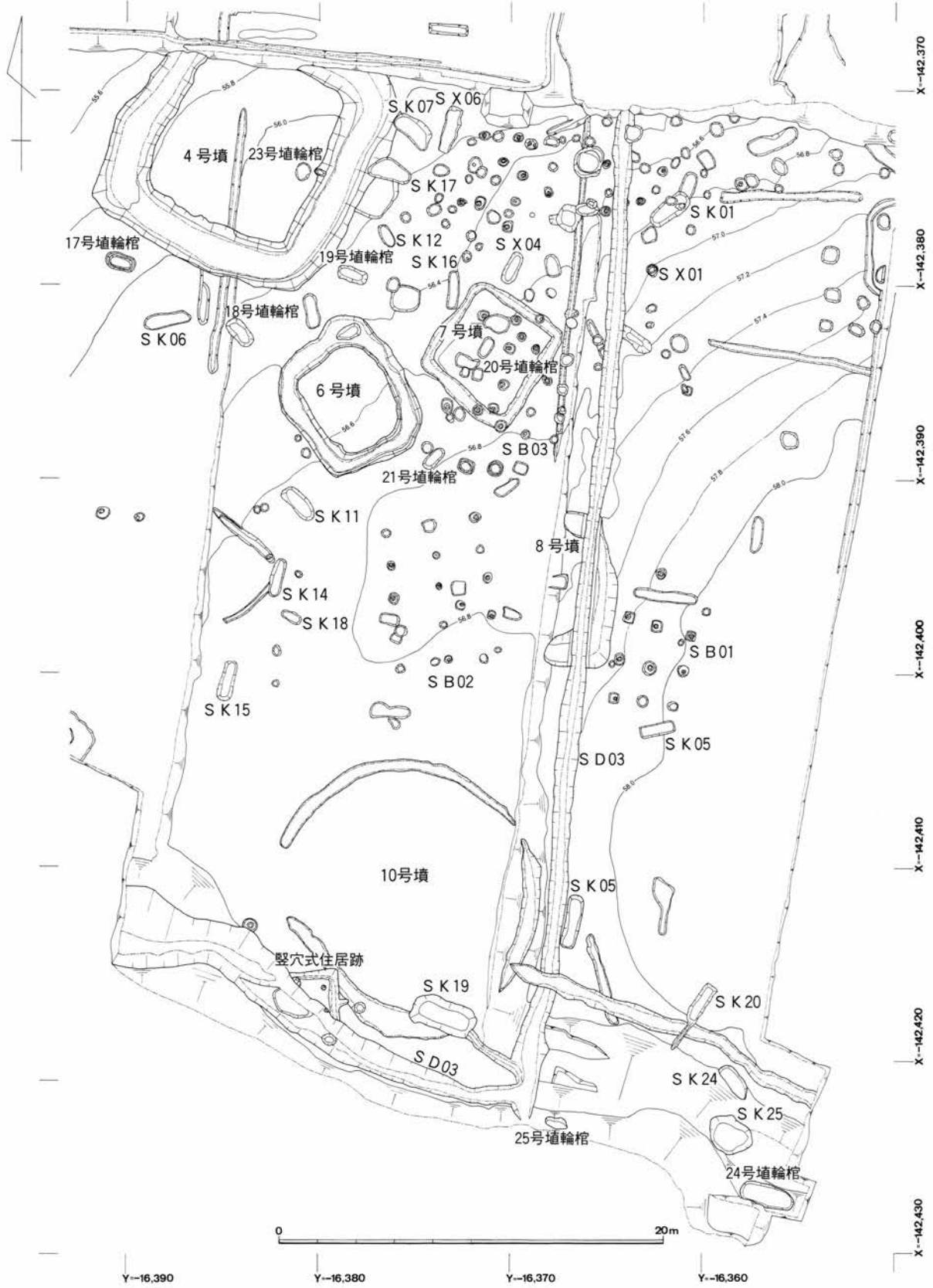
瓦谷古墳群遺構配置図(分割図)(1)



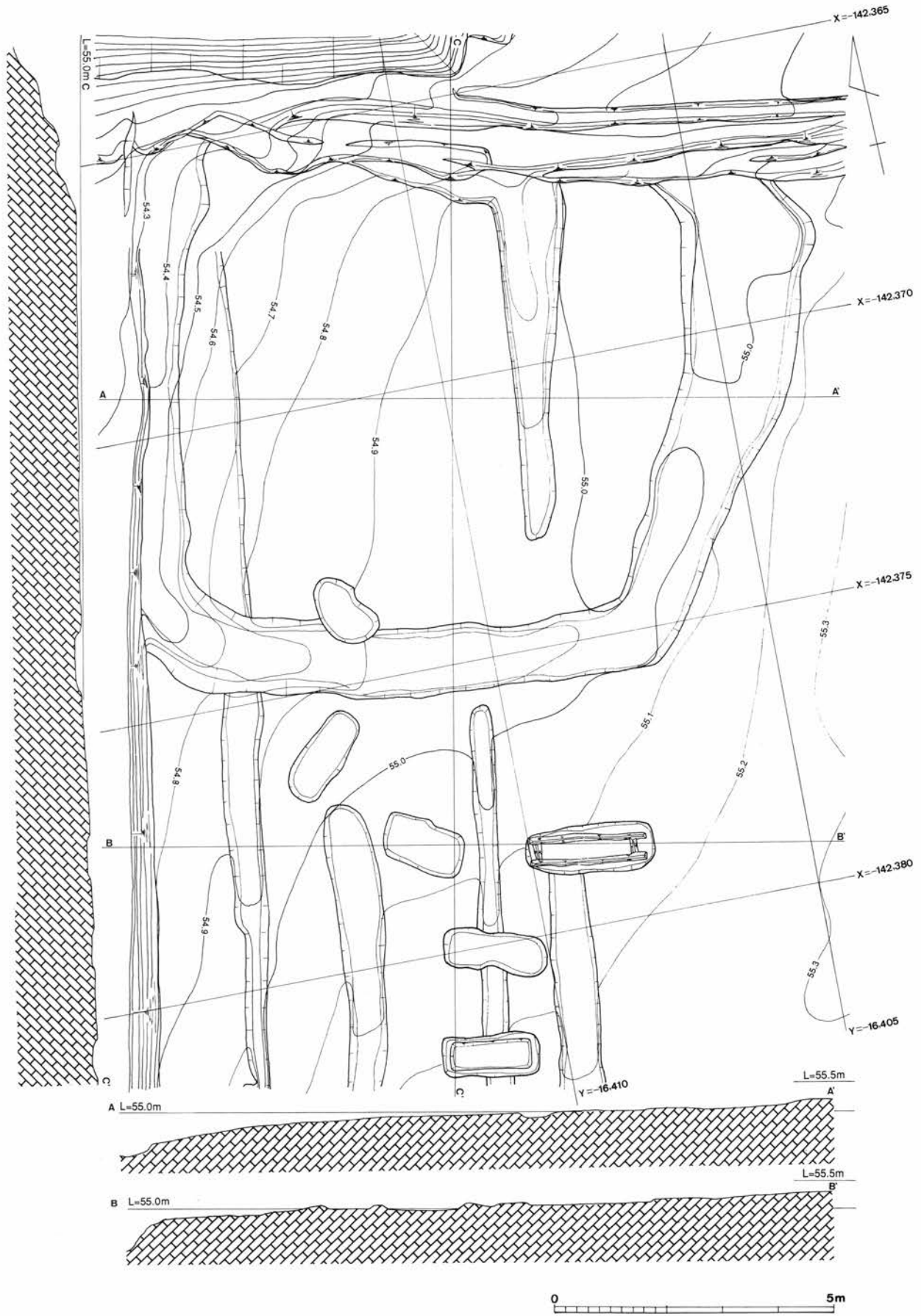
瓦谷古墳群遺構配置図(分割図)(2)



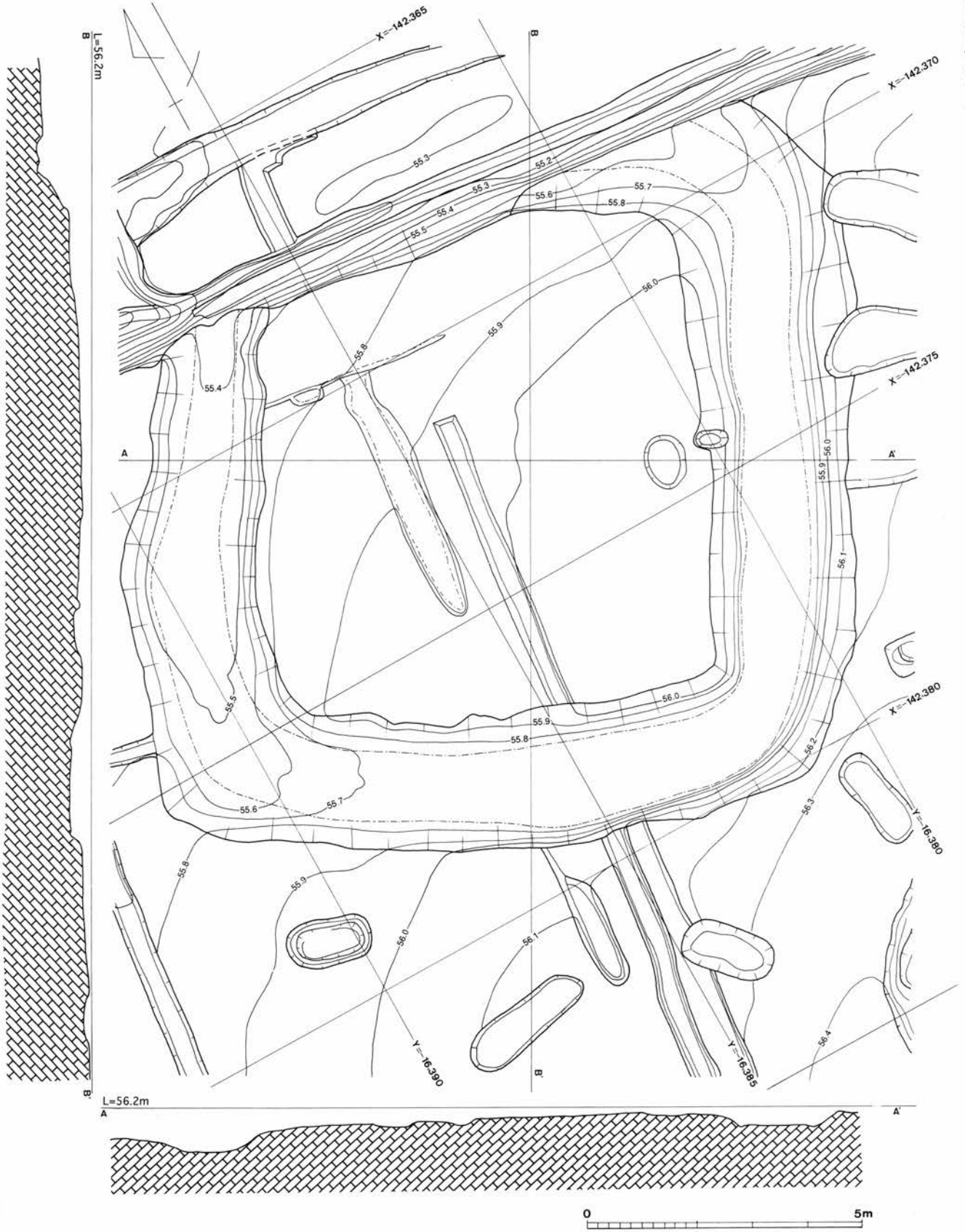
瓦谷古墳群遺構配置図(分割図)(3)



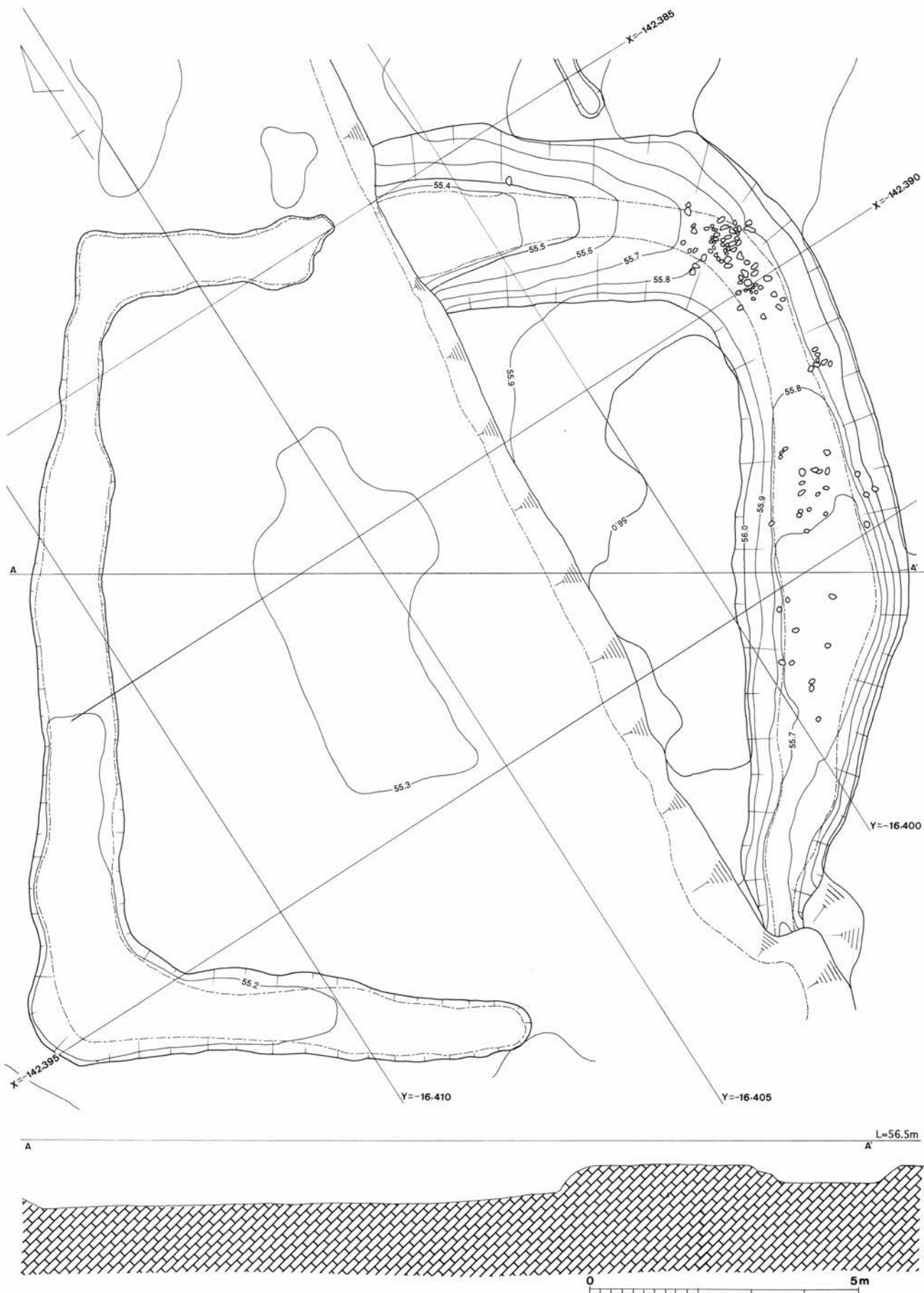
瓦谷古墳群遺構配置図(分割図)(4)



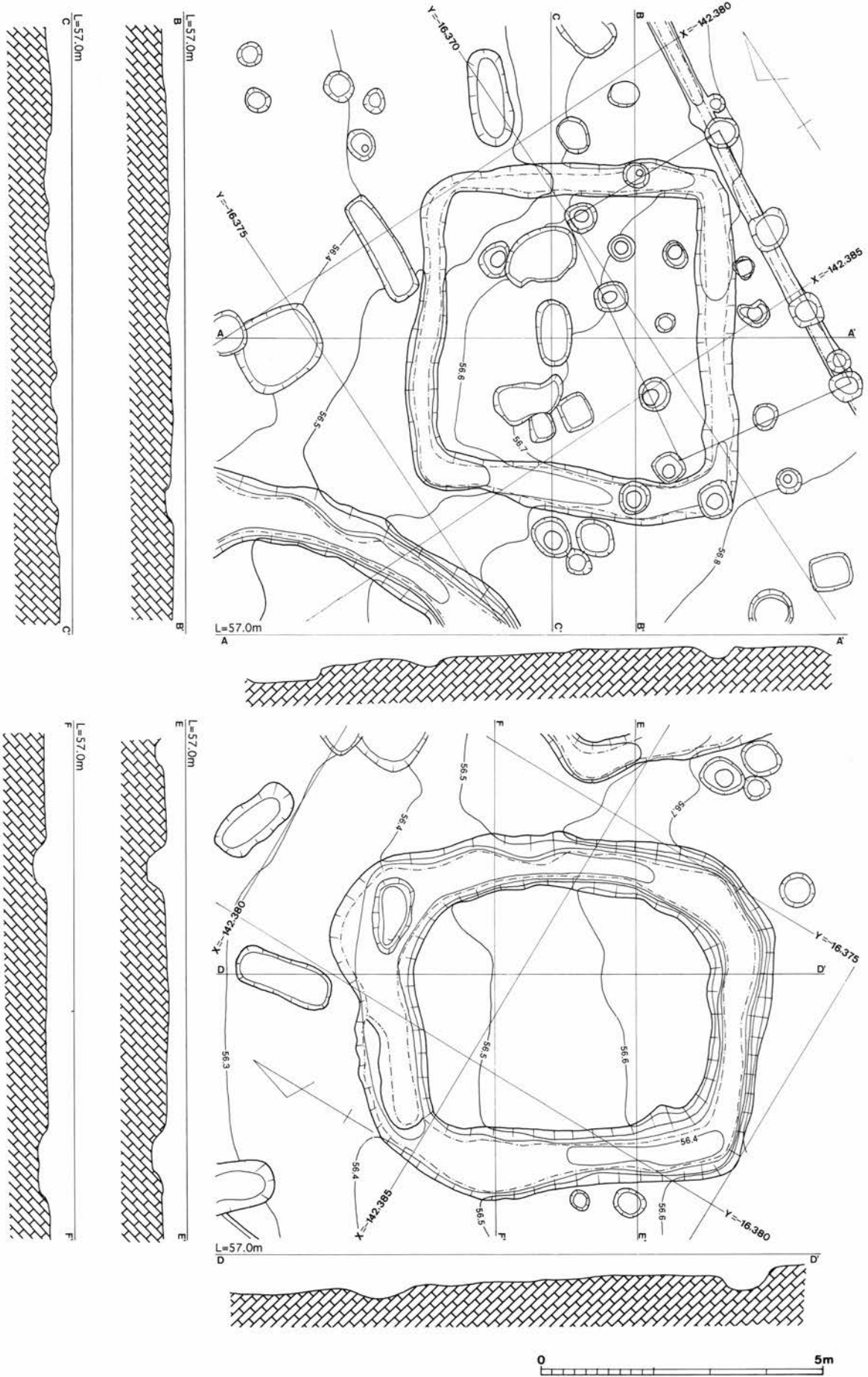
瓦谷3号墳実測図



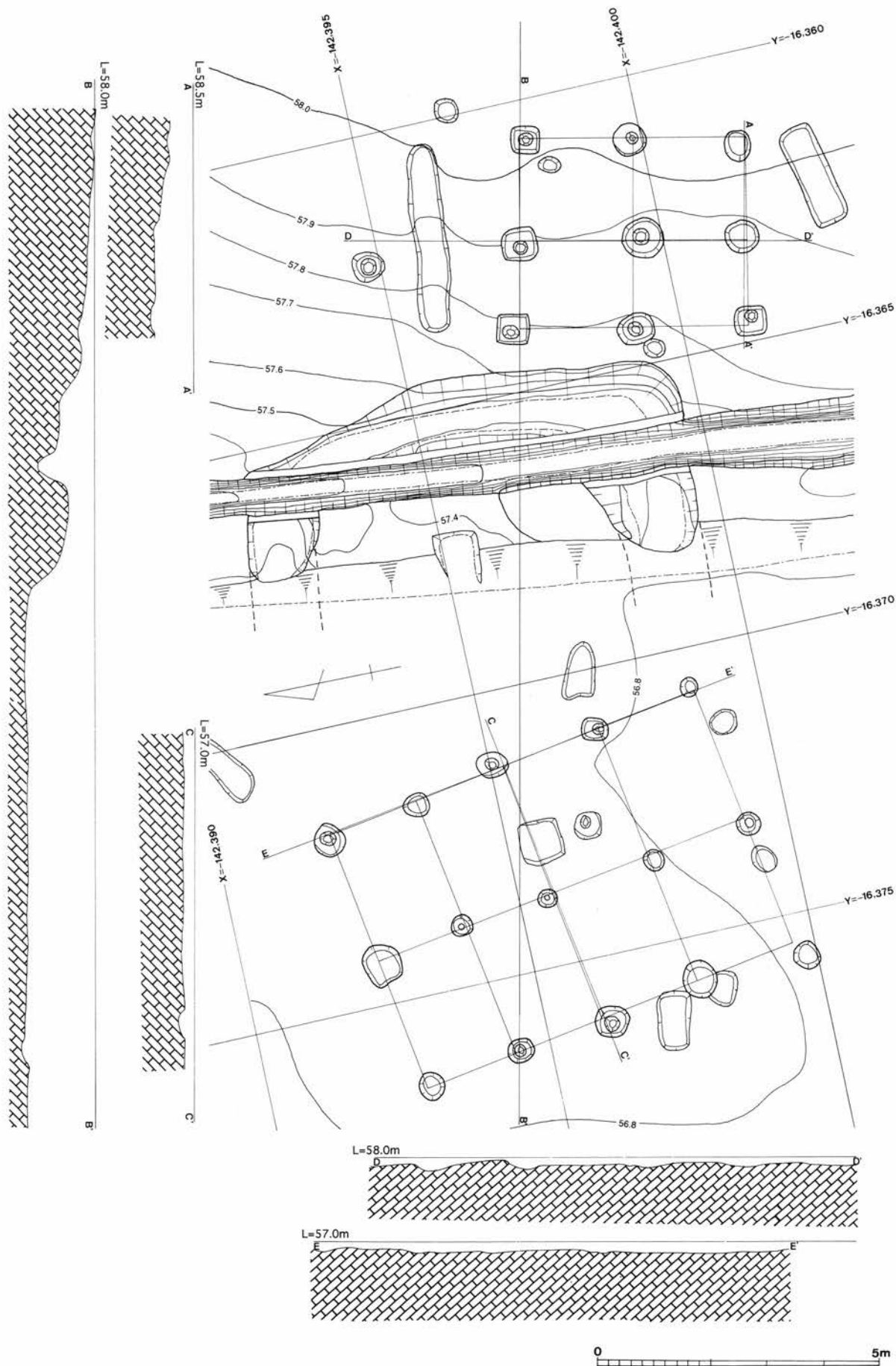
瓦谷4号墳実測図



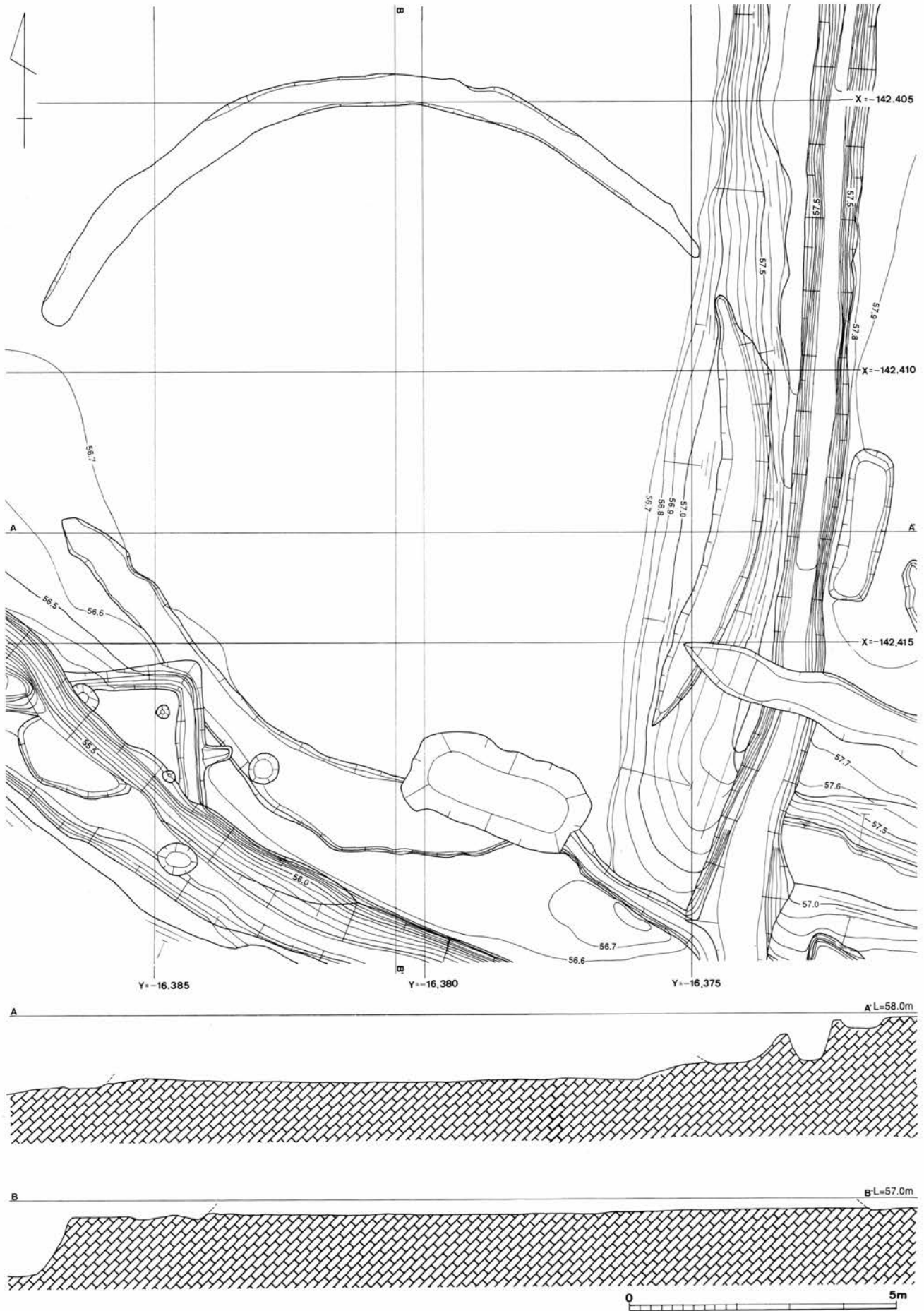
瓦谷 5 号墳実測図



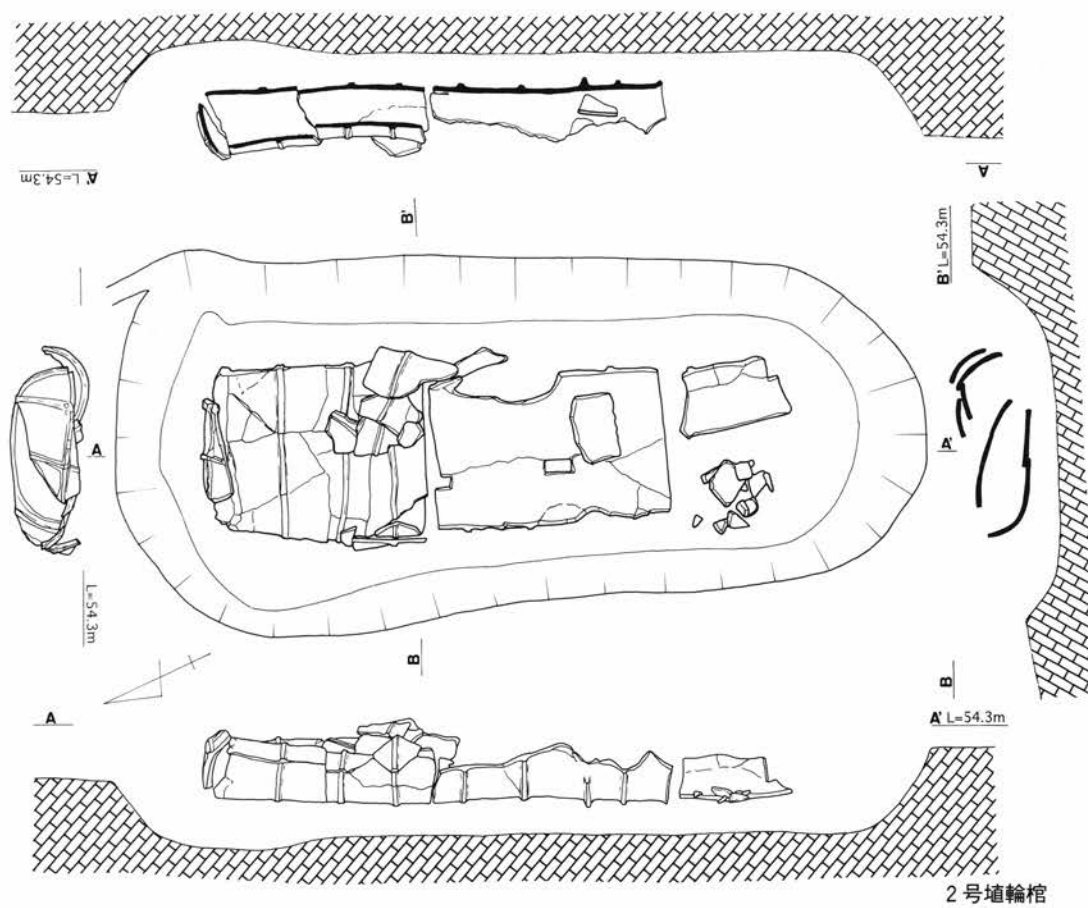
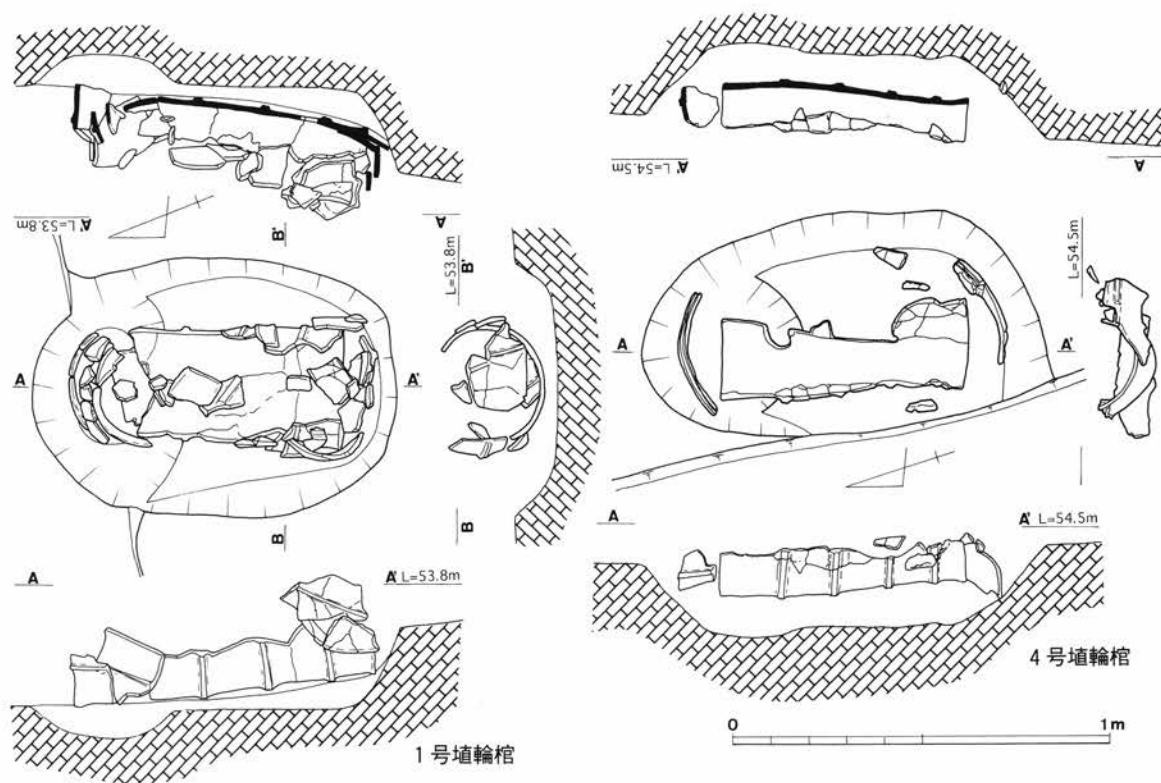
瓦谷6·7号墳・SB03実測図



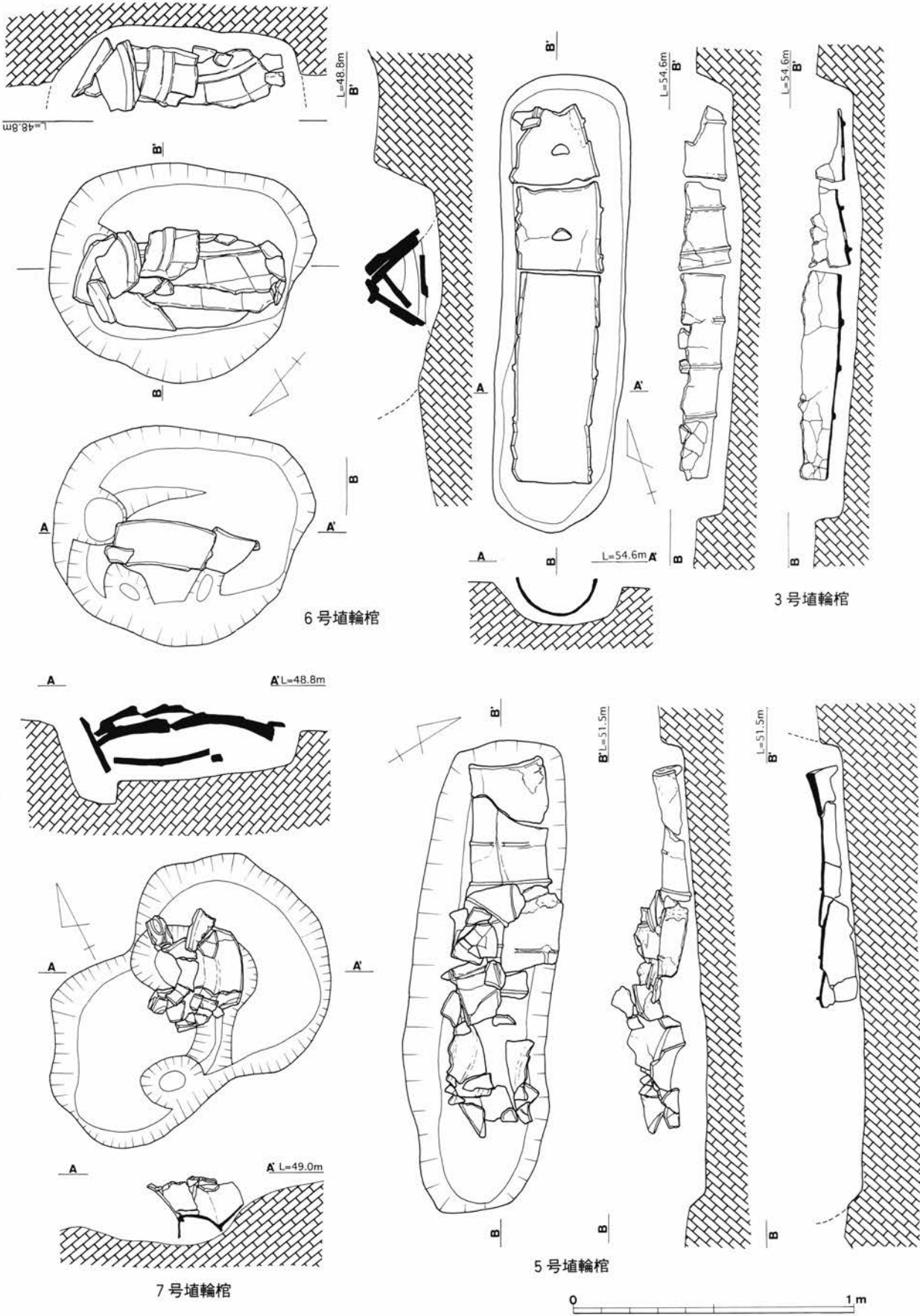
瓦谷8号墳実測図、S B01・02実測図



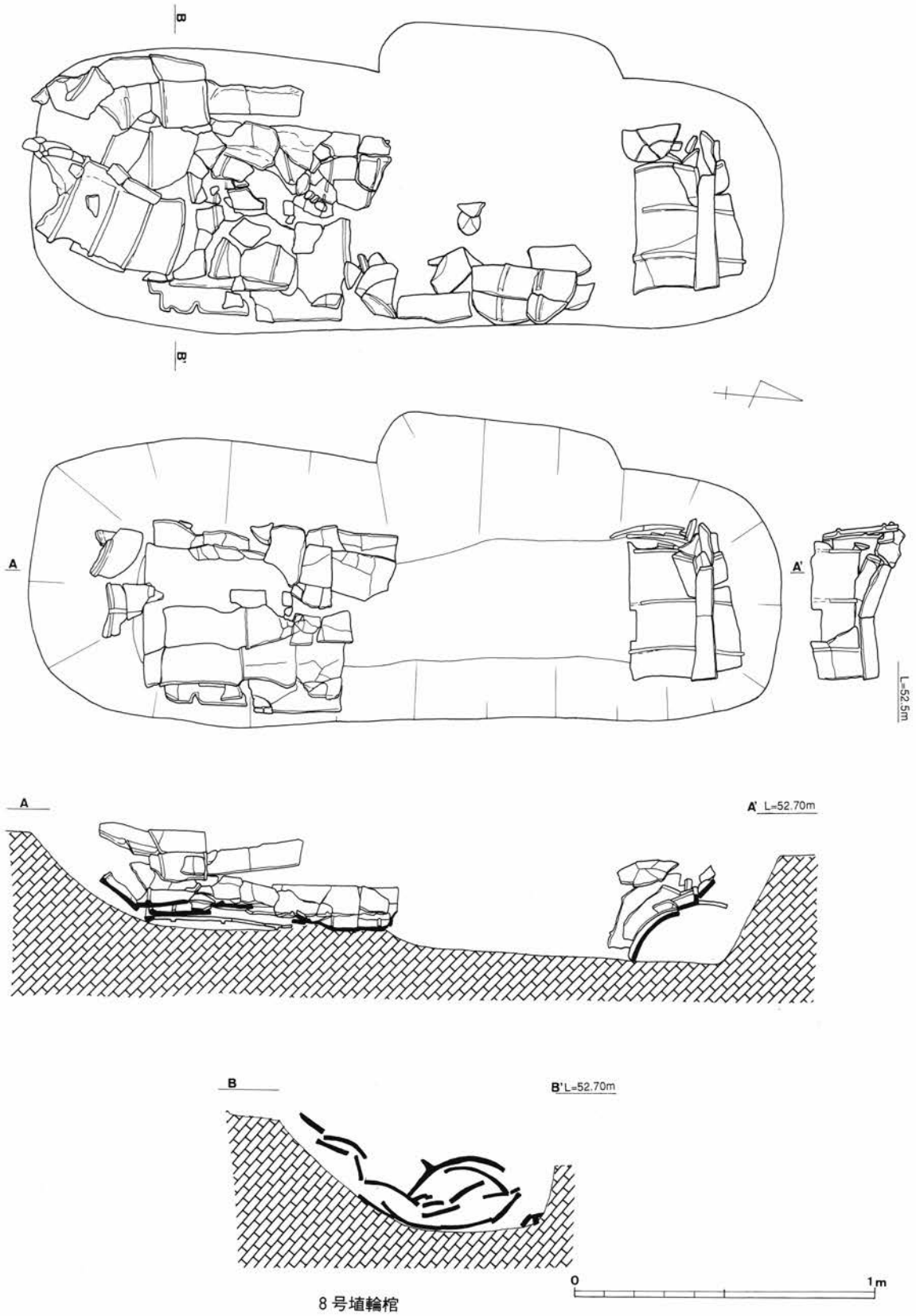
瓦谷10号墳実測図



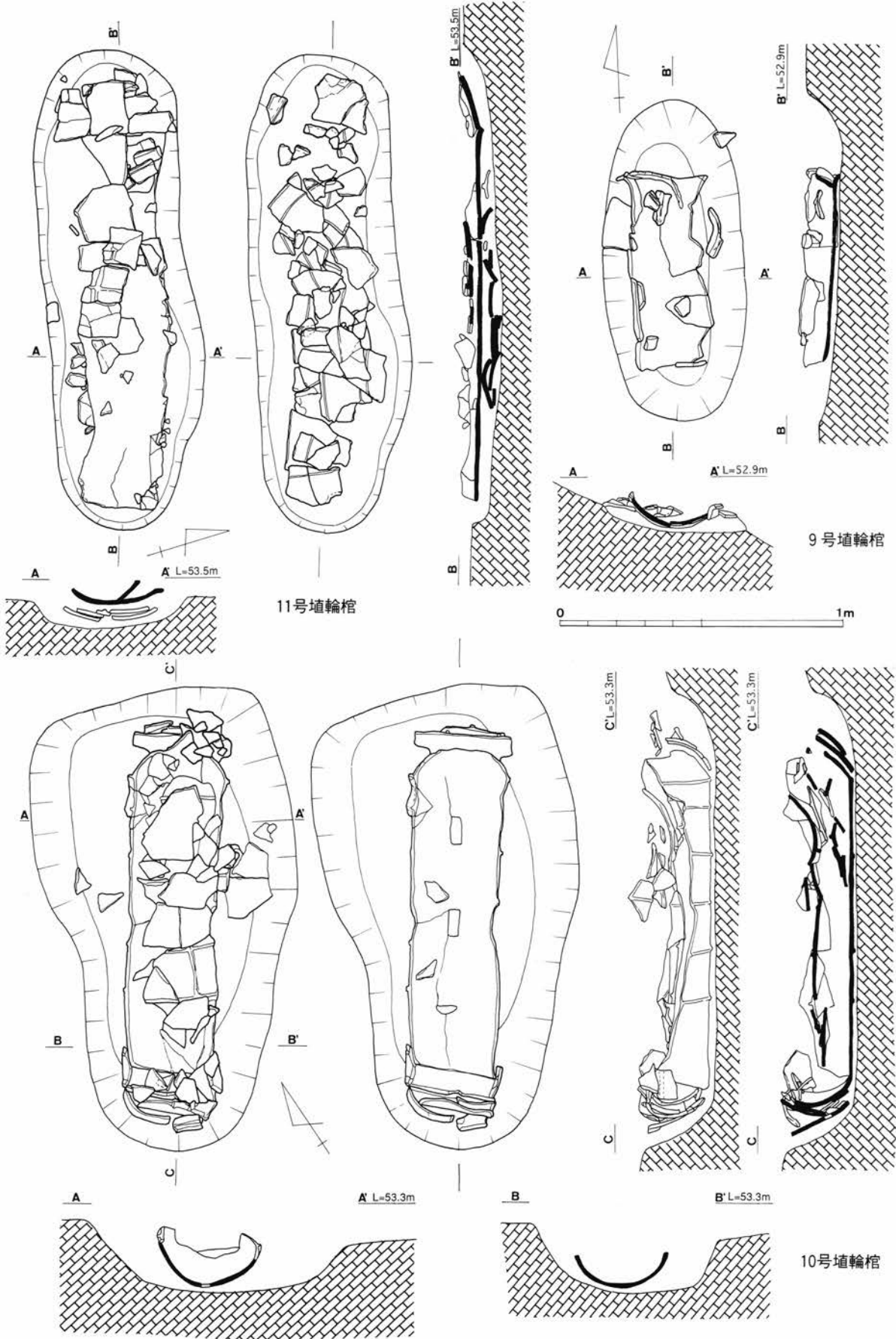
埴輪棺実測図(1) 1・2・4号埴輪棺



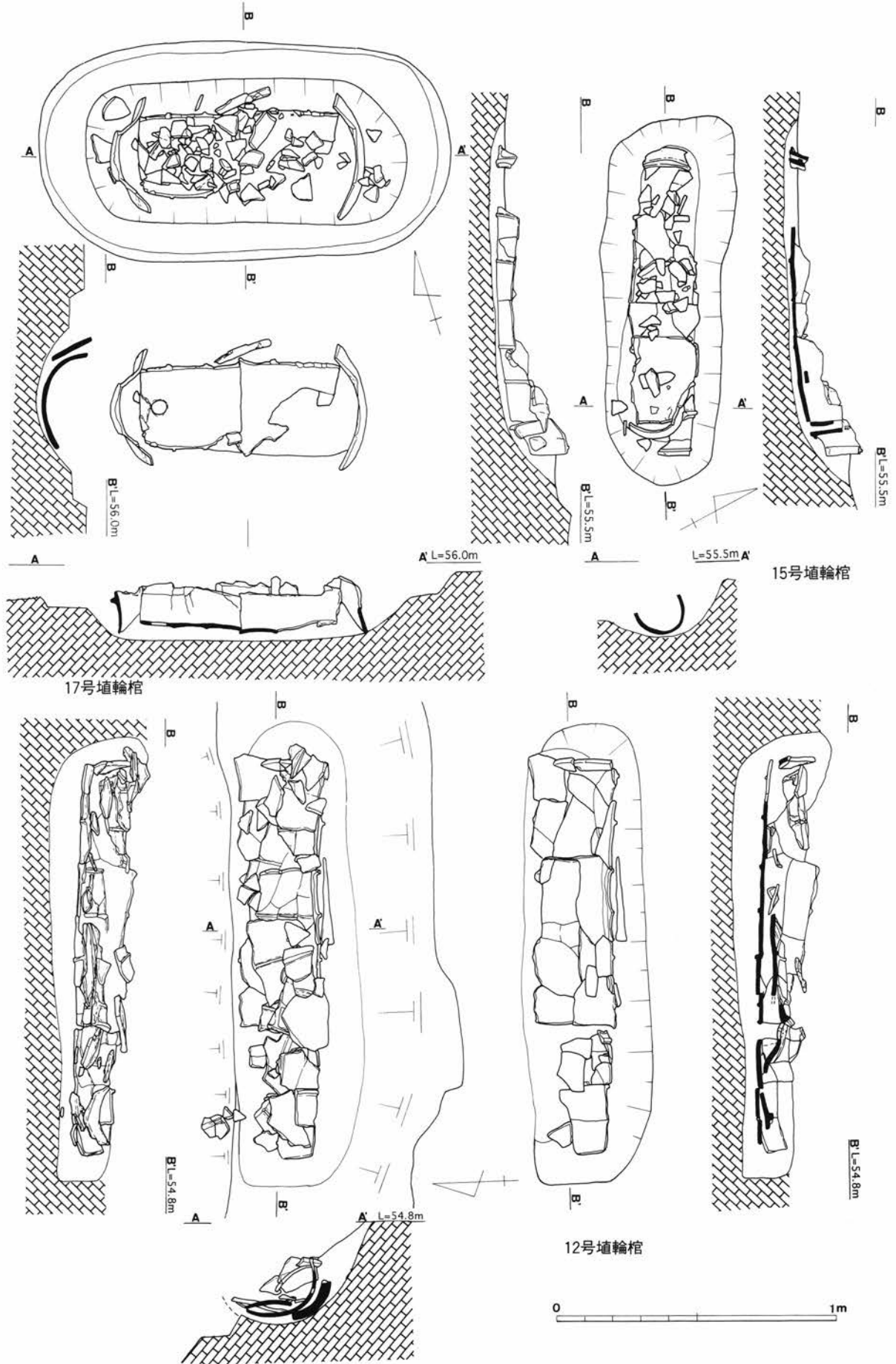
埴輪棺実測図(2) 3・5・6号埴輪棺



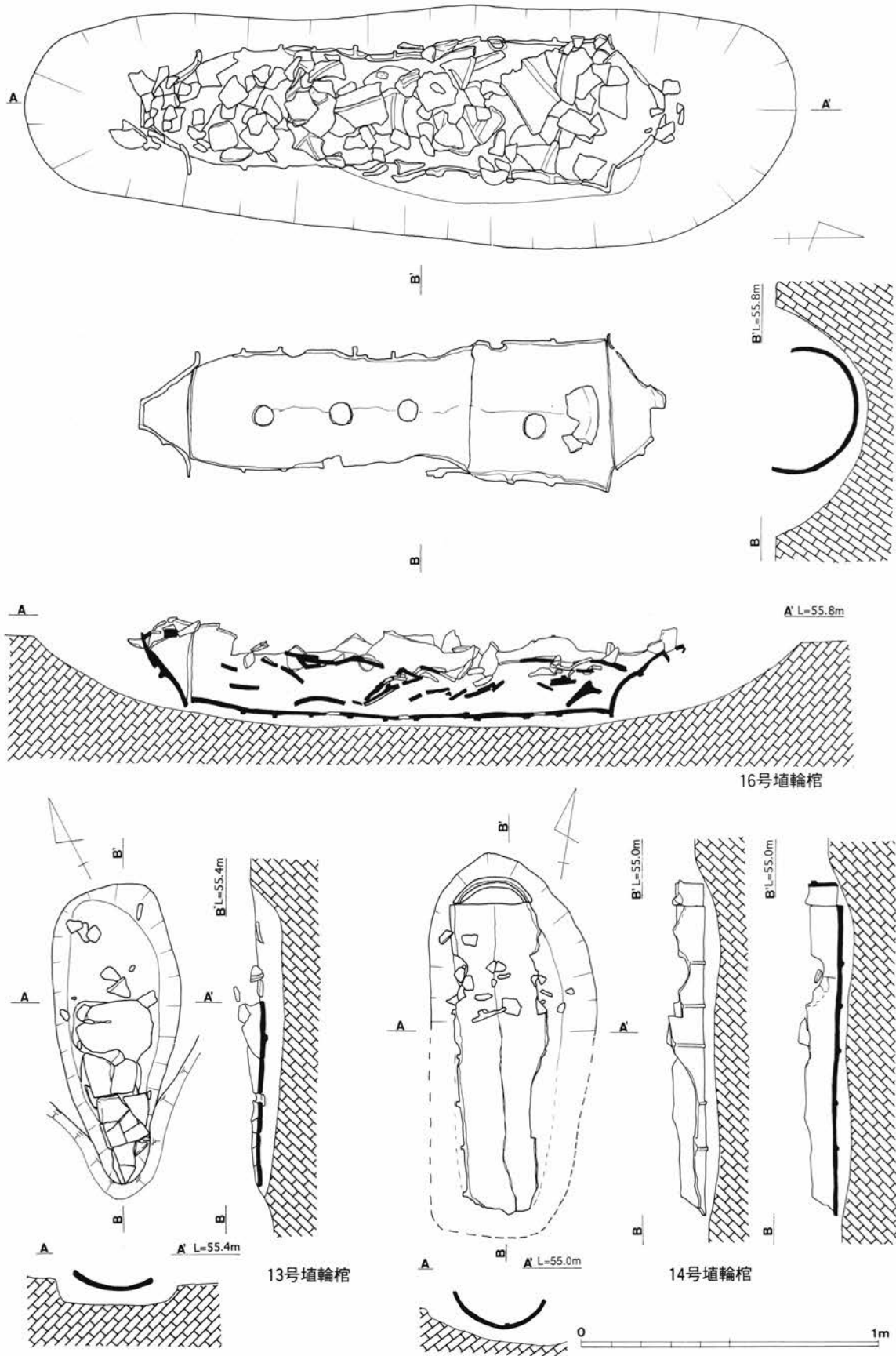
埴輪棺実測図(3) 8号埴輪棺



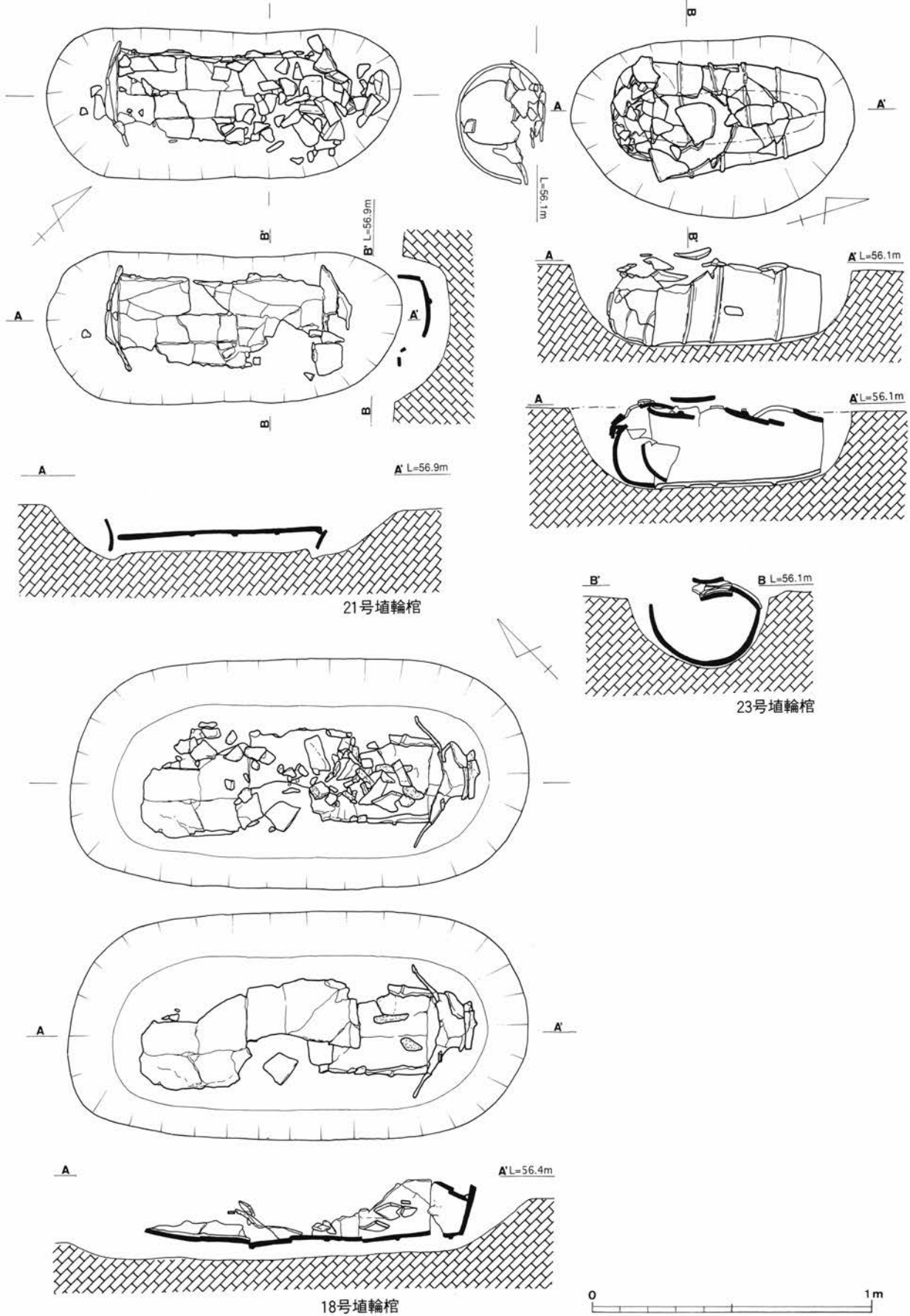
埴輪棺実測図(4) 9・10・11号埴輪棺



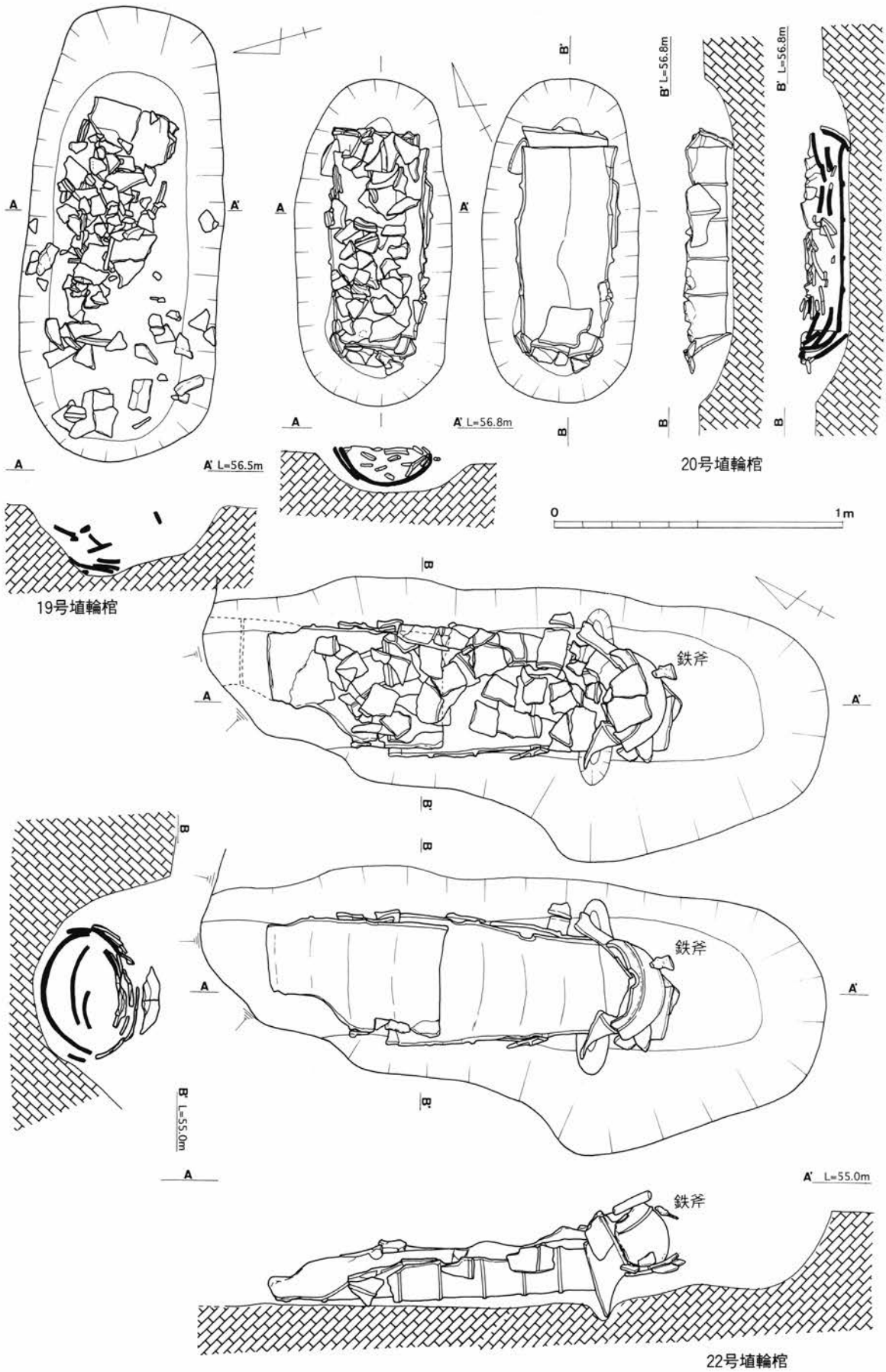
埴輪棺実測図(5) 12・15・17号埴輪棺



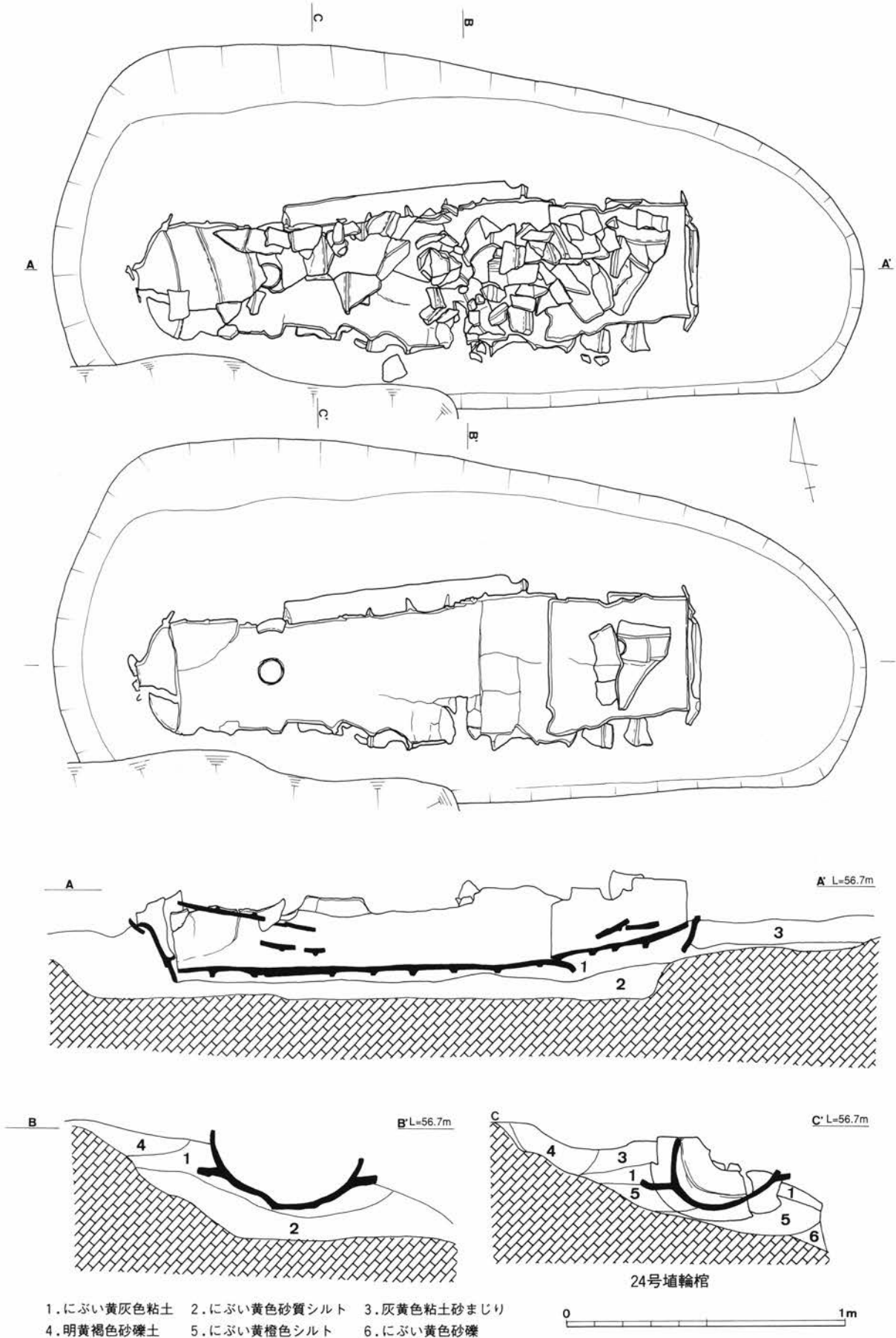
埴輪棺実測図(6) 13・14・16号埴輪棺



埴輪棺実測図(7) 18・21・23号埴輪棺



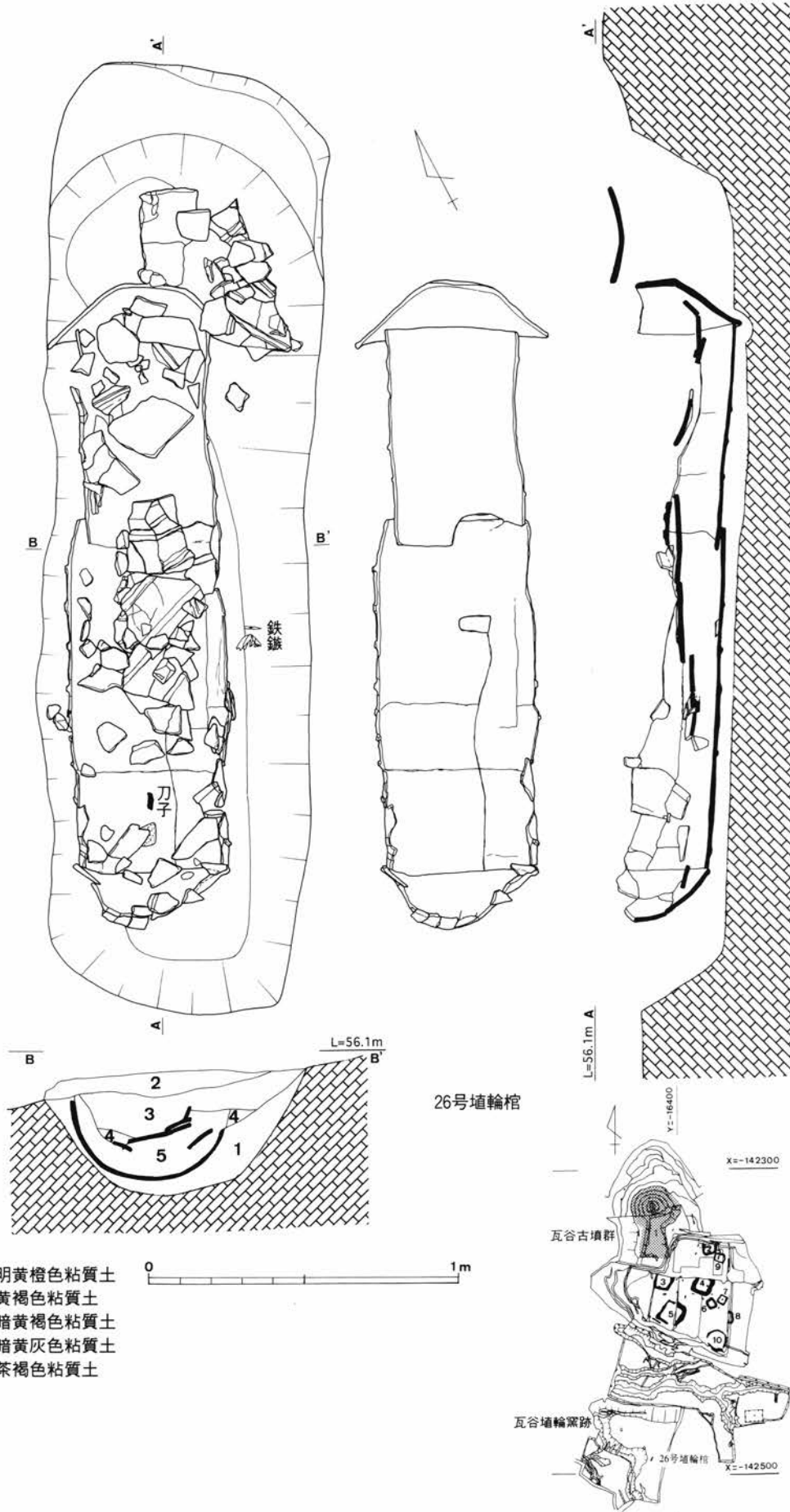
埴輪棺実測図(8) 19・20・22号埴輪棺



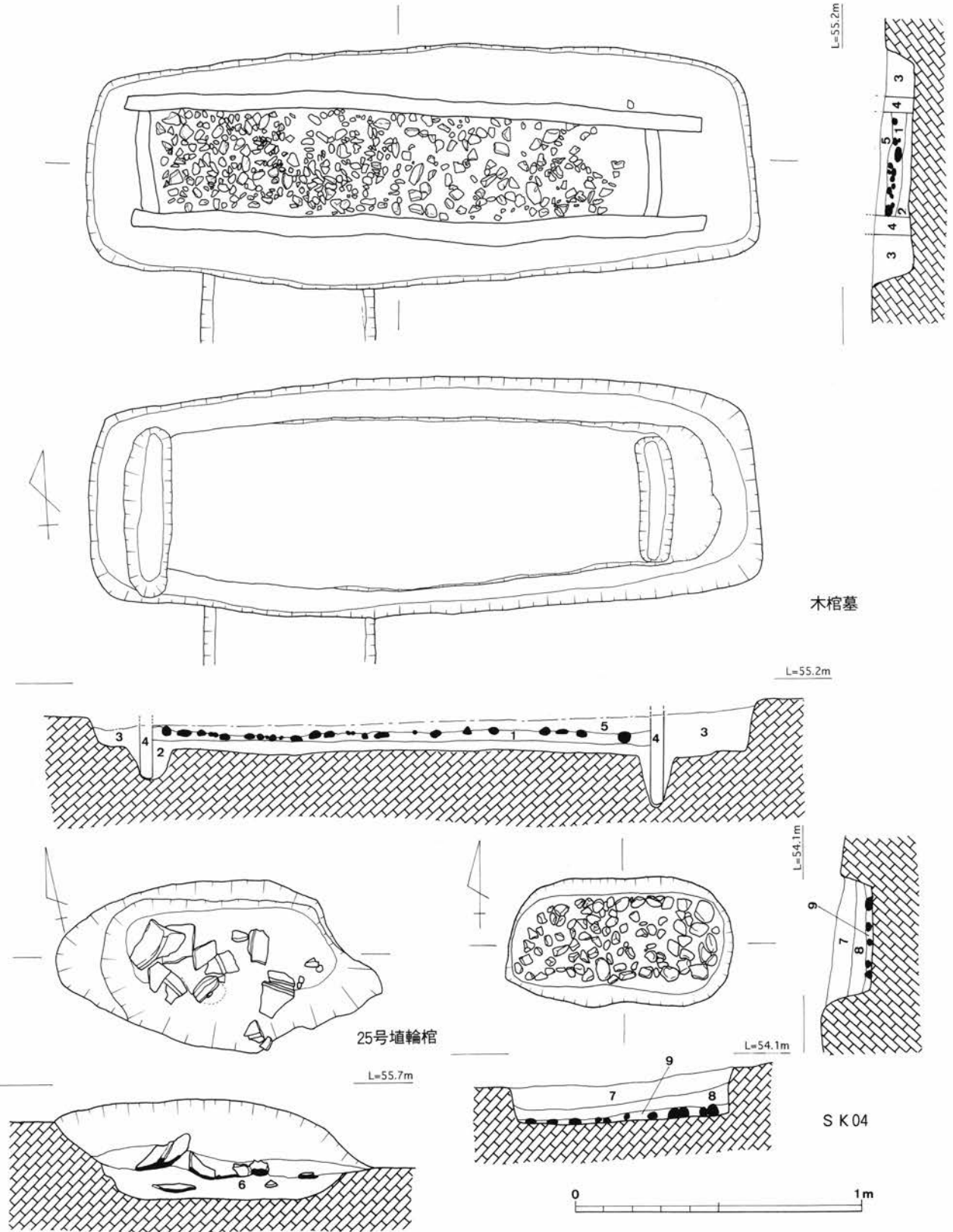
1. 灰黄色粘土 2. 黄色砂質シルト 3. 灰黄色粘土砂まじり
 4. 黄褐色砂礫土 5. 黄橙色シルト 6. 黄色砂礫

24号埴輪棺

埴輪棺実測図(9) 24号埴輪棺

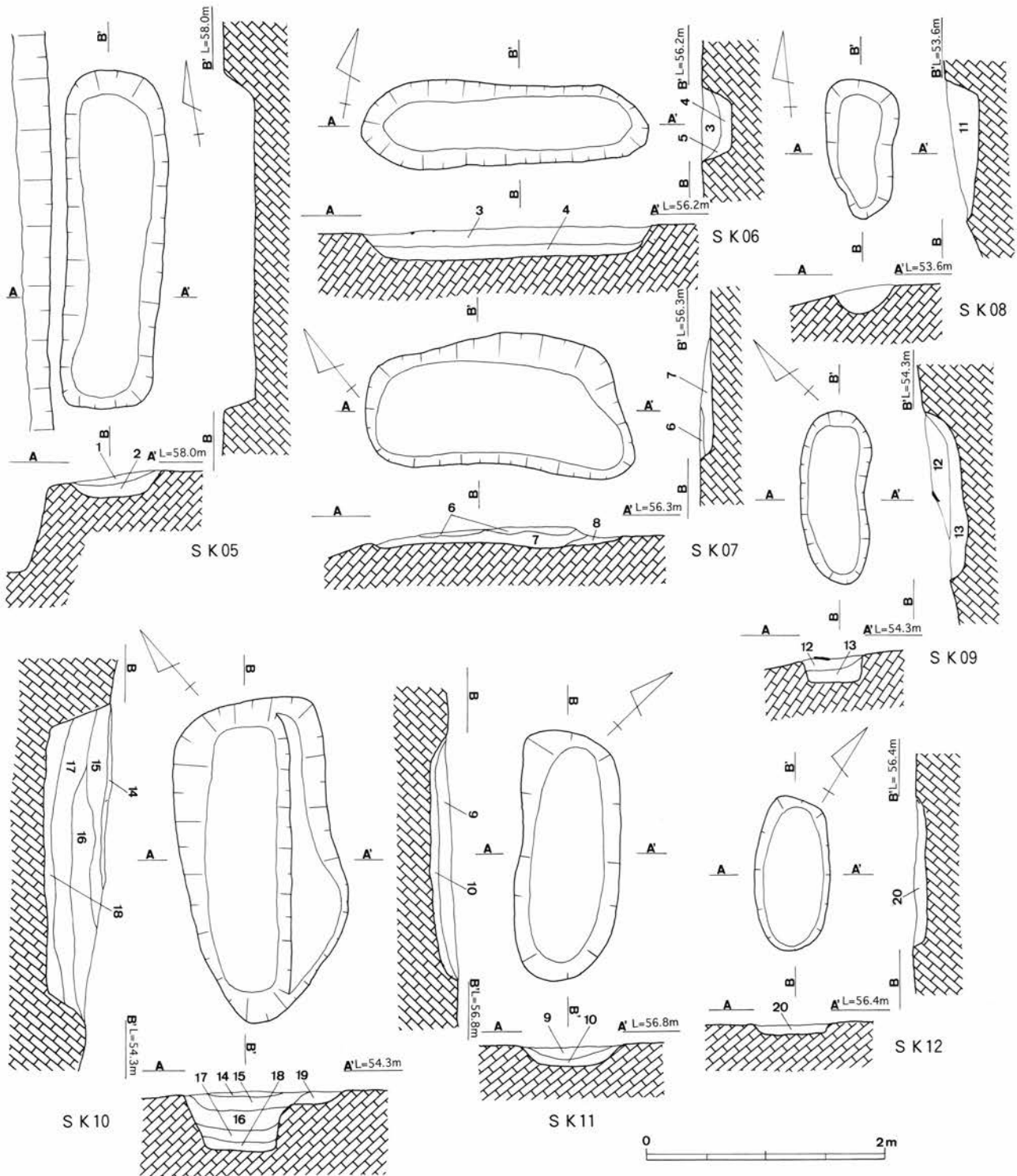


埴輪棺実測図(10) 26号埴輪棺



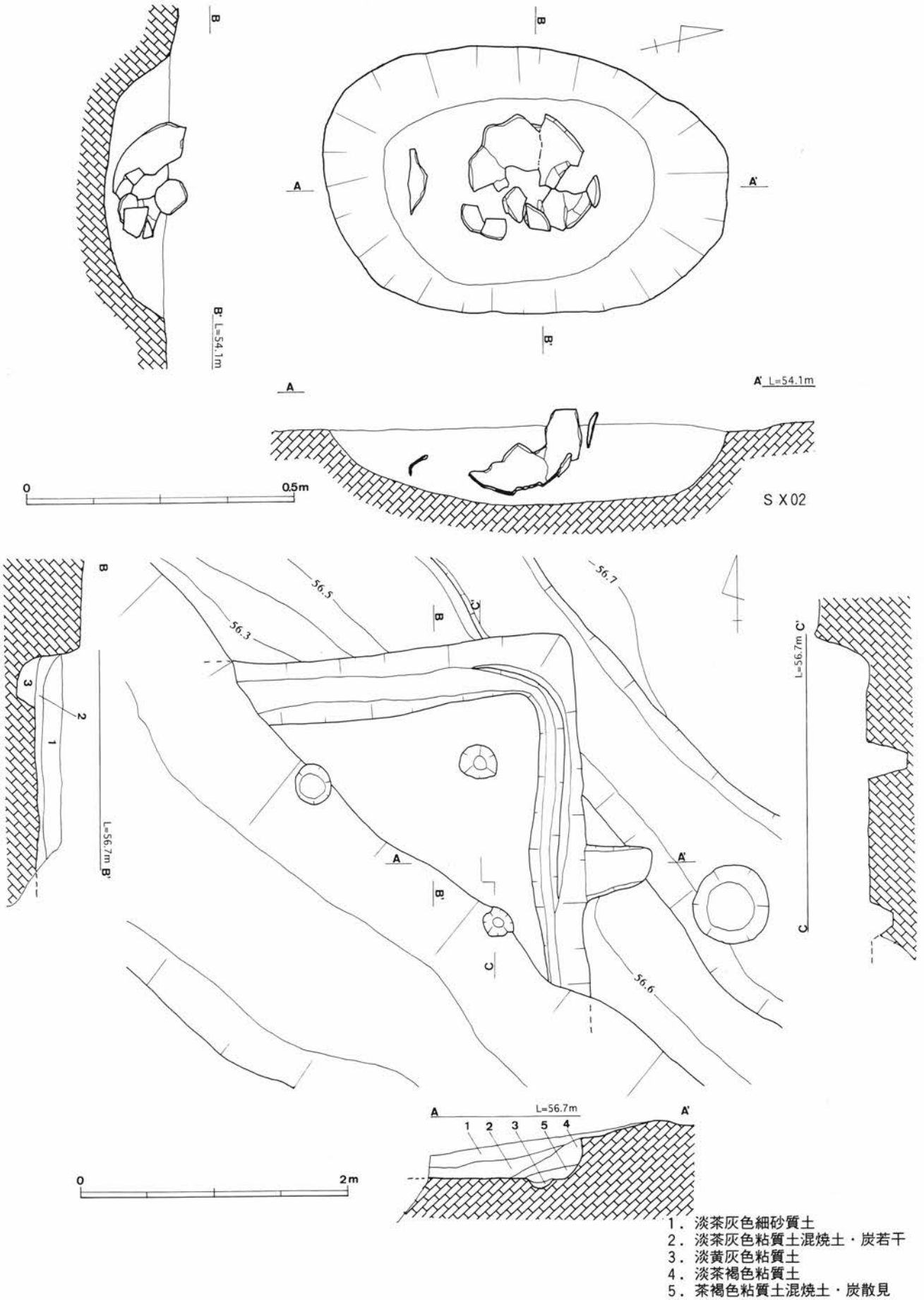
木棺墓・25号埴輪棺・S K04実測図

1. 暗灰色粘質土混礫多数 2. 暗黄褐色粘質土 3. 暗黄褐色細砂質土 4. 灰茶褐色粘質土
 5. にぶい黄褐色粘質土 6. 青灰色粘質土混礫 7. にぶい黄褐色細砂質土
 8. にぶい黄褐色粘質土 9. にぶい黄灰色粘質土混礫多数

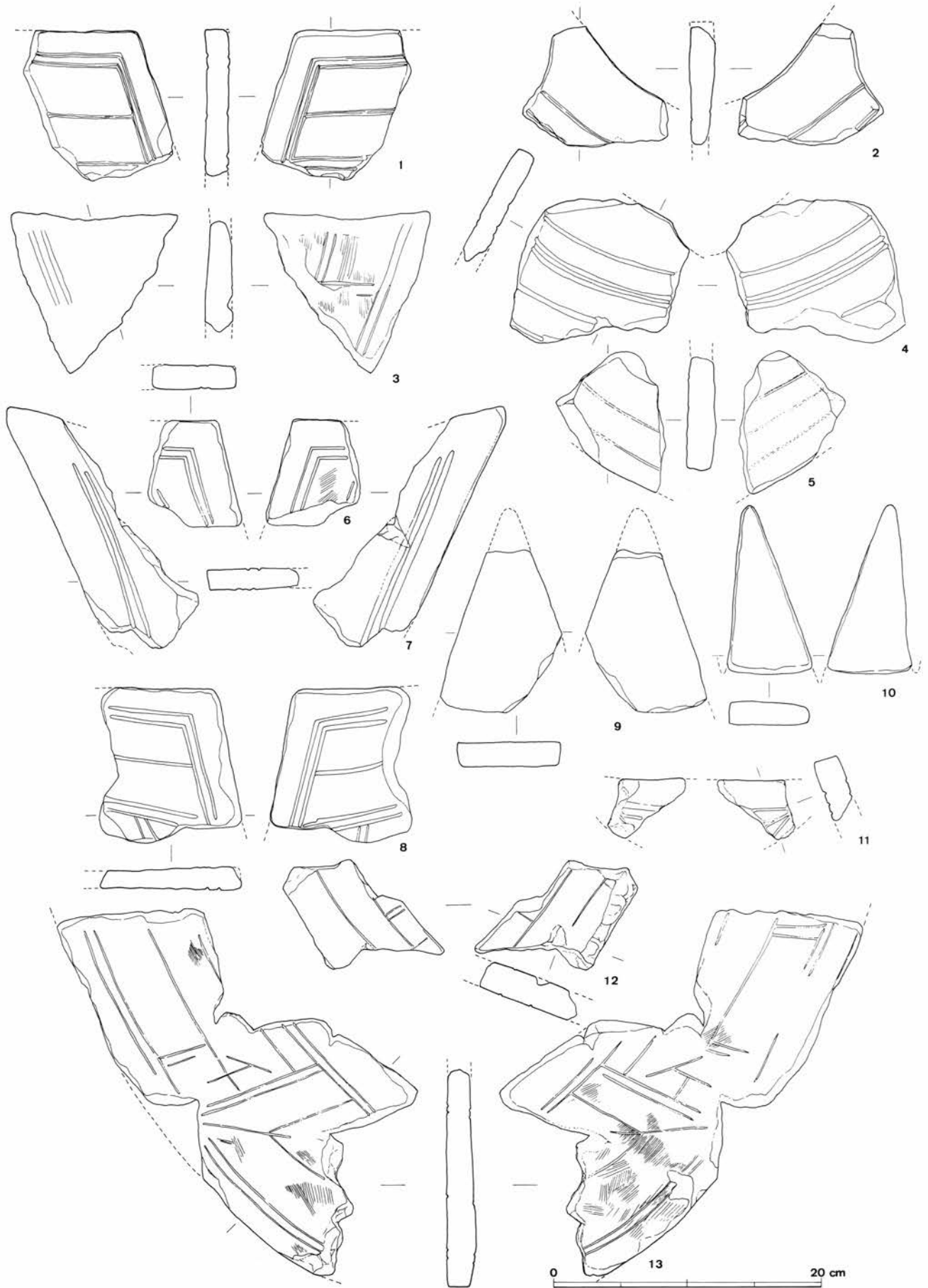


S K 05~12実測図

1. 黒褐色粘質土 2. 暗茶褐色細砂質土 3. 暗灰黄色粘質土混礫 4. 黄褐色細砂質土
 5. 黄褐色粘質土 6. 暗茶褐色細砂質土混炭 7. にぶい黄褐色細砂質土 8. 黄褐色粘質土
 9. にぶい茶褐色細砂質土 10. にぶい灰黄褐色粘質土 11. 暗褐色細砂質土混細礫
 12. 暗褐色細砂質土 13. 暗灰黄色砂質土 14. 暗灰黄色細砂質土 15. にぶい黄褐色細砂質土
 16. 暗黄褐色細砂質土 17. 茶褐色細砂質土 18. にぶい黄灰色細砂質土 19. 暗灰色細砂質土
 20. にぶい褐色細砂質土

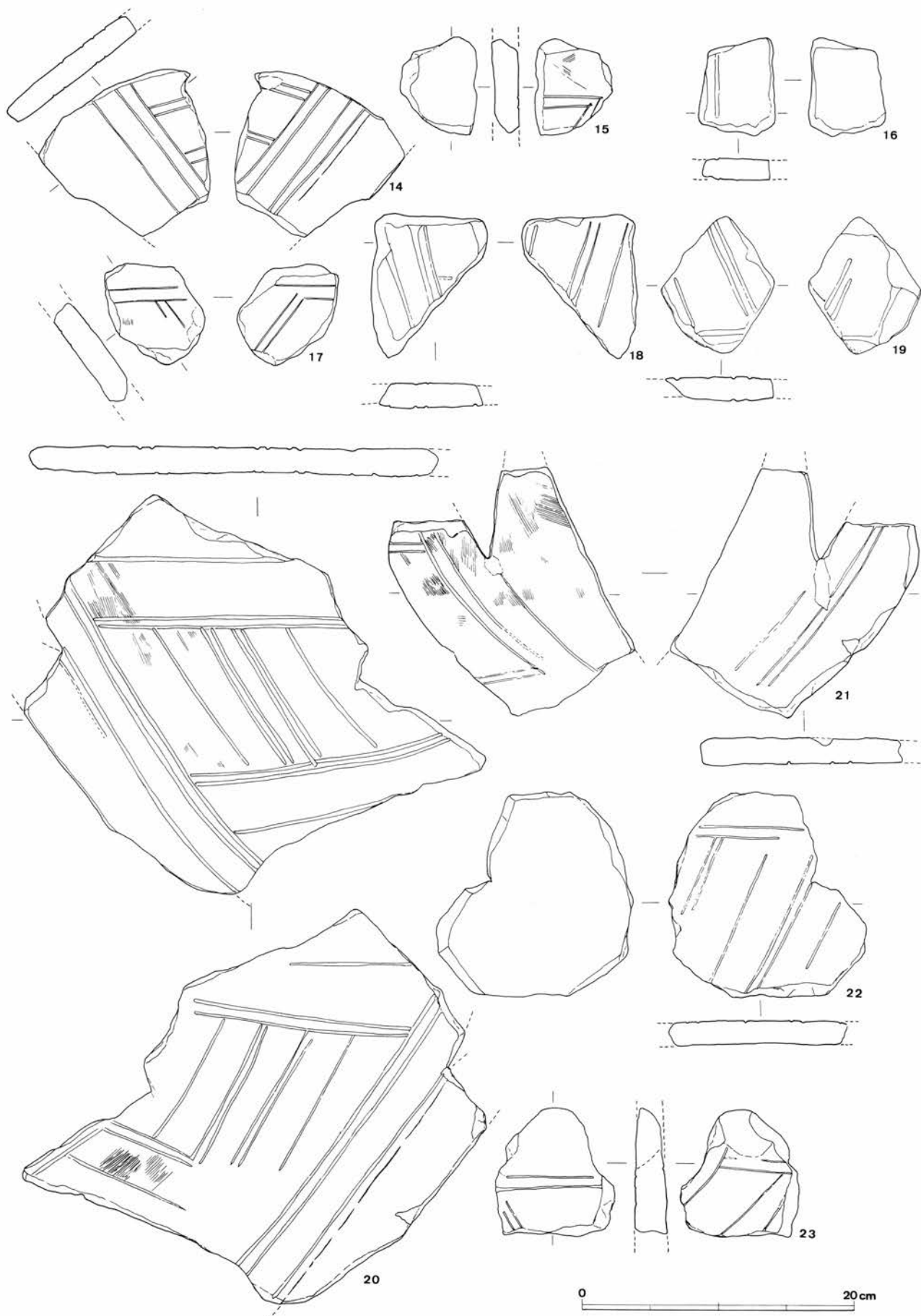


S X 02 · 竖穴式住居跡実測图



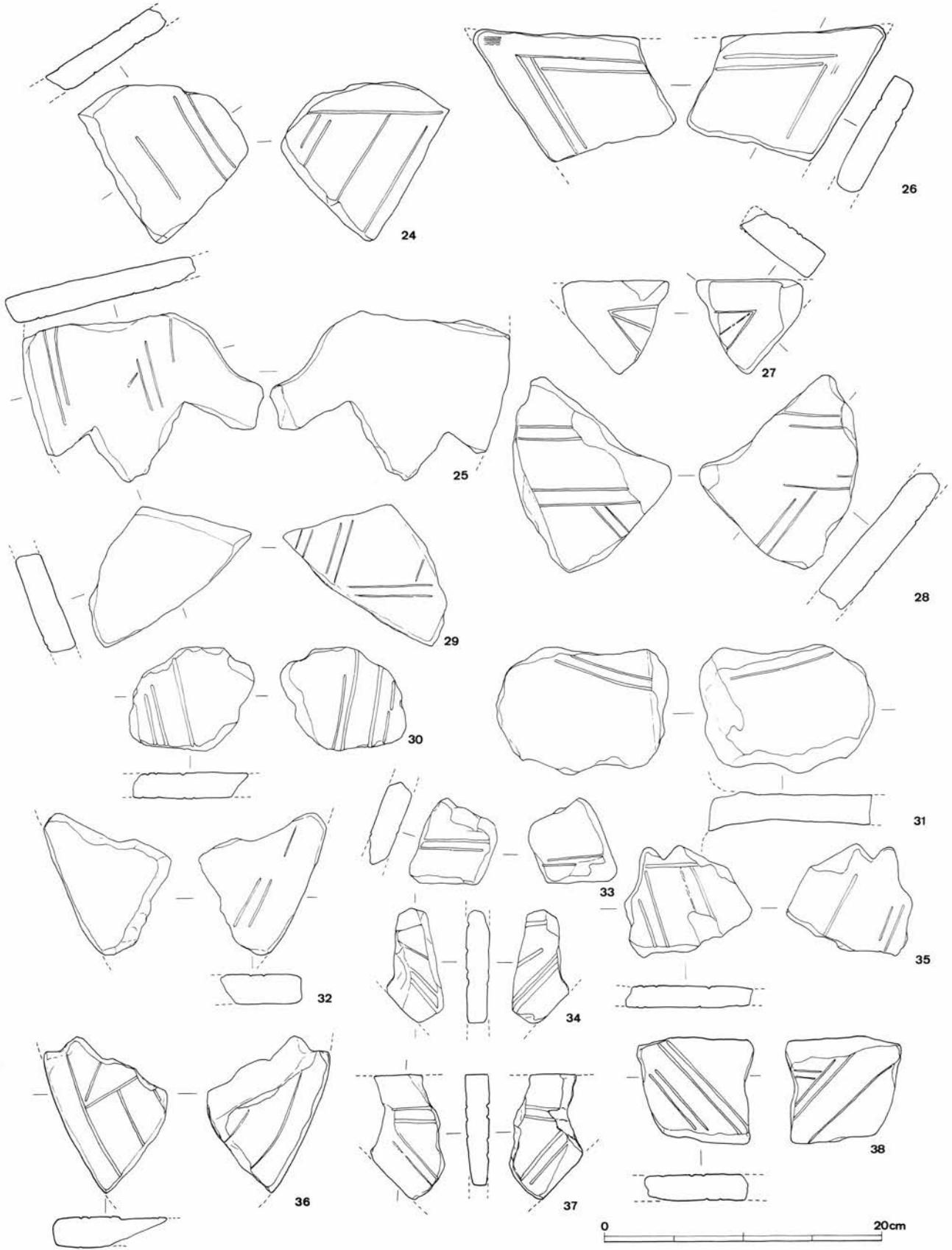
形象埴輪実測図(1) 蓋形埴輪

1 ~ 5. 1号墳墳丘 6 ~ 13. 1号墳東周溝



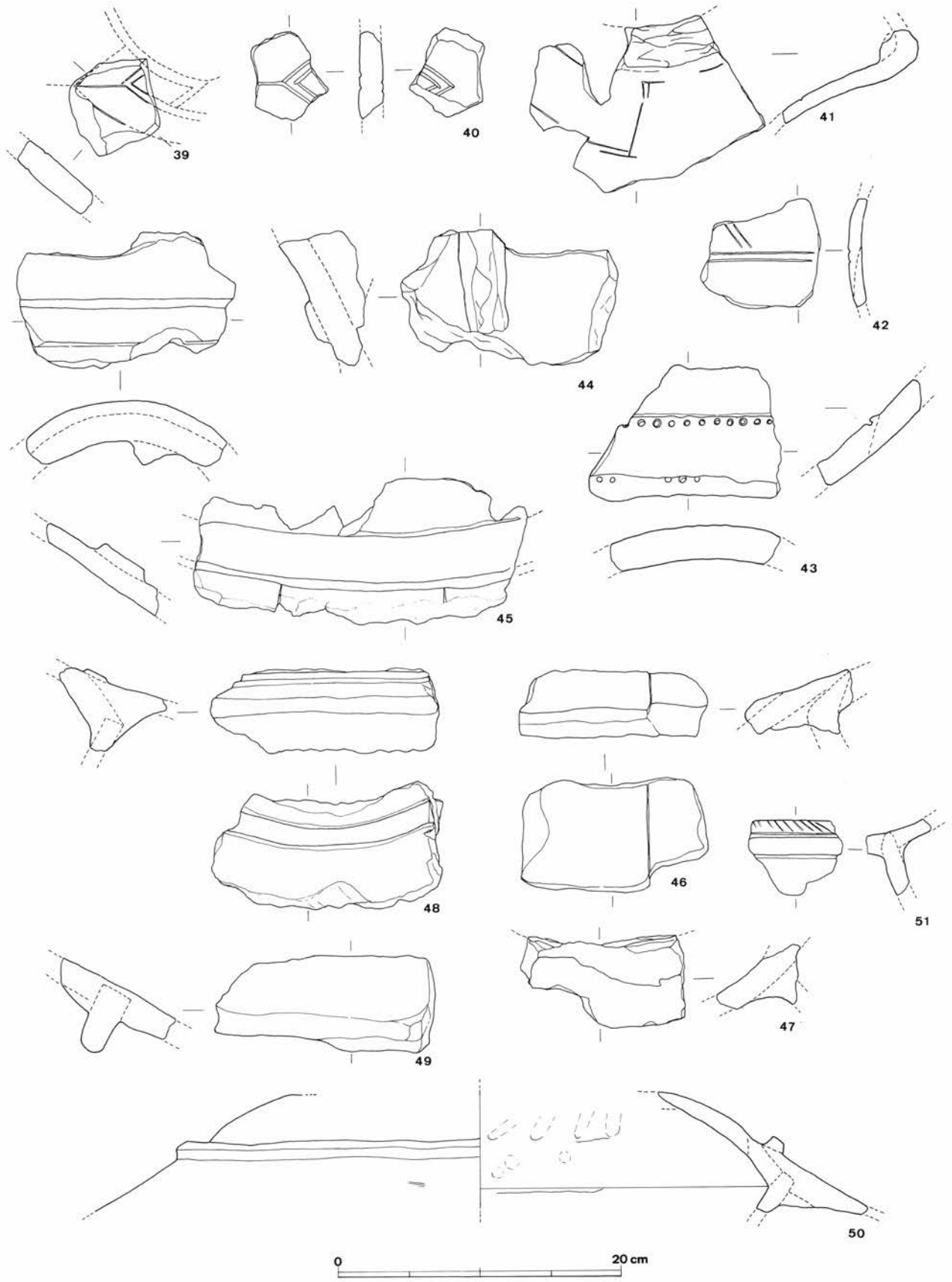
形象埴輪実測図(2) 蓋形埴輪

14~19. 1号墳東周溝 20~23. 1号墳東側包含層



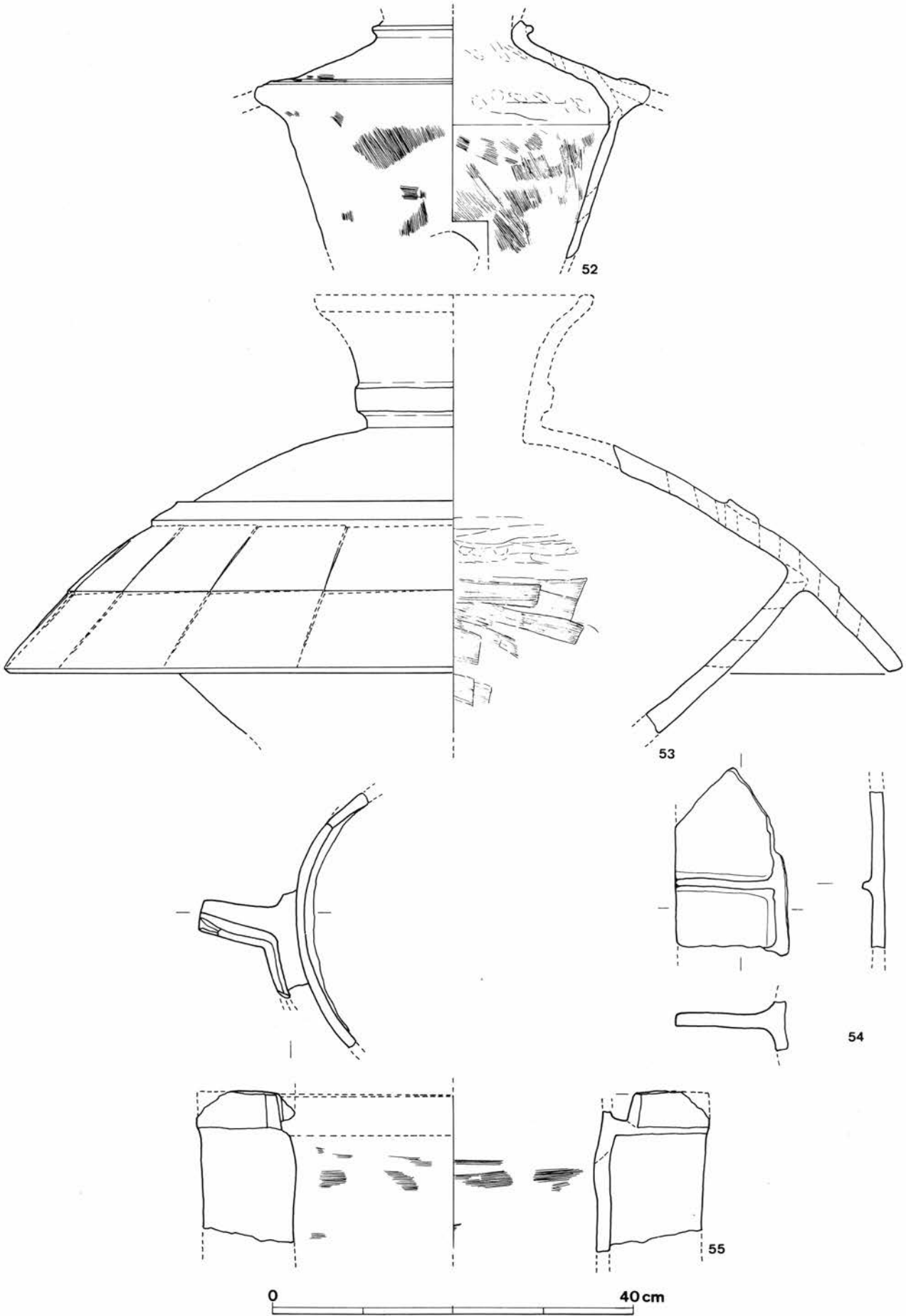
形象埴輪実測図(3) 蓋形埴輪

24・25. 1号墳東側包含層 26～31. 1号墳前方部西側斜面
 32～34・38. S D 01 35. 24号埴輪棺 36・37. 包含層



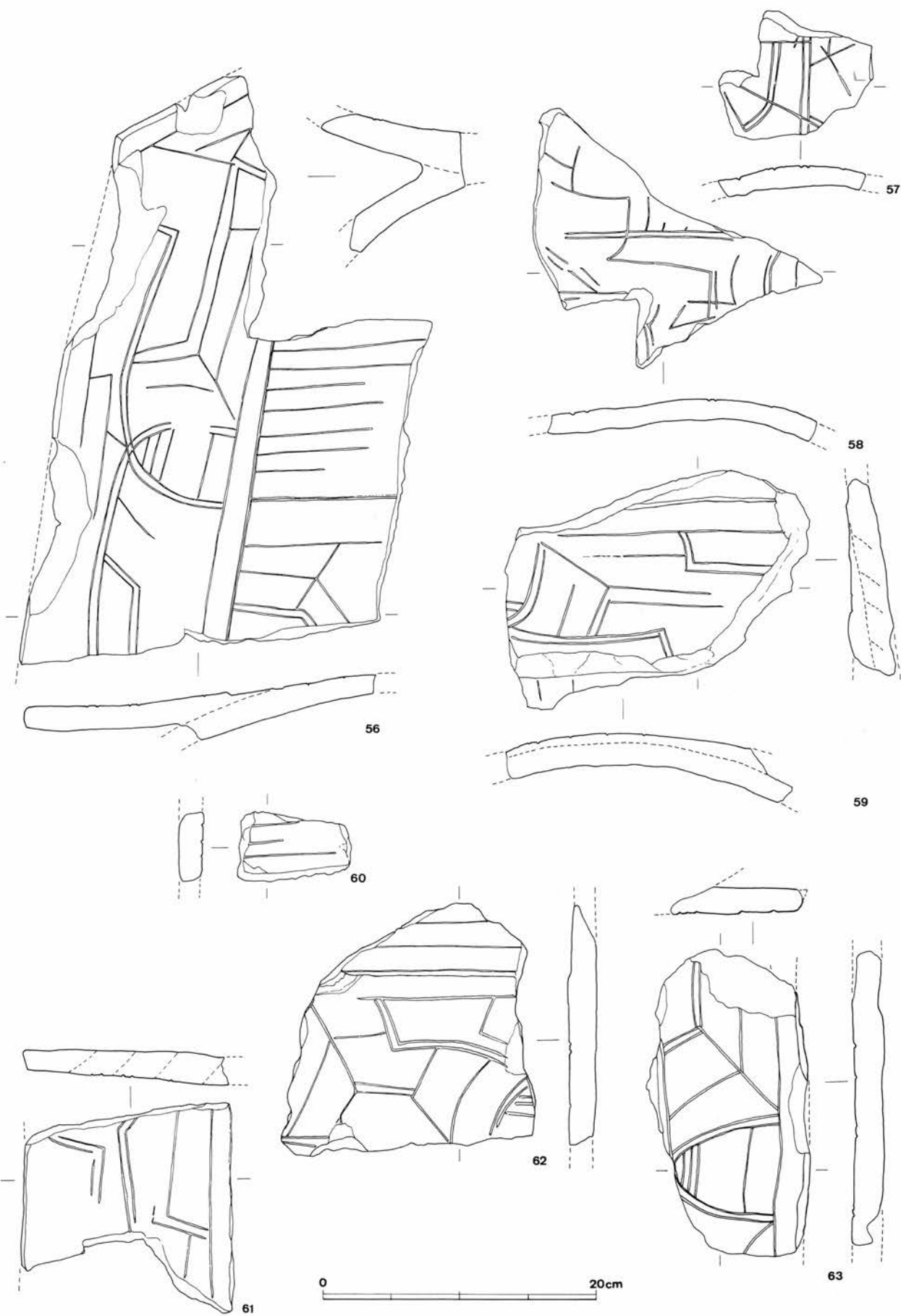
形象埴輪実測図(4) 蓋形埴輪

39・43・44・46・51. 1号墳墳丘 50. 1号墳東周溝 40~42・45・47~49. 包含層



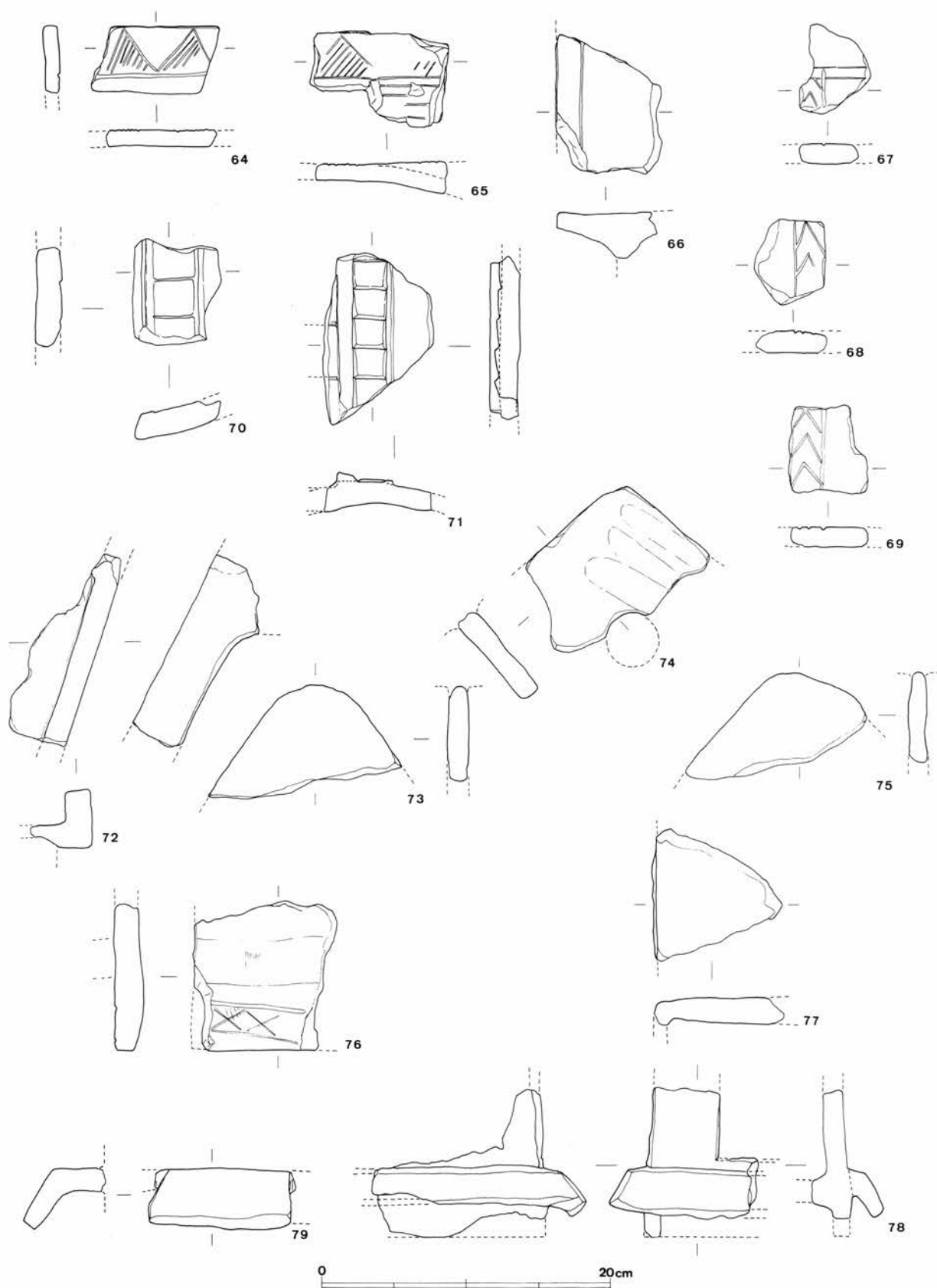
形象埴輪実測図(5) 蓋形埴輪ほか

52. 4号墳 53. 4号墳・17号埴輪棺 54. 1号墳東周溝 55. 包含層



形象埴輪実測図(6) 盾形埴輪

56~59・63. 包含層 60. 1号埴輪棺 61・62. S D 03



形象埴輪実測図(7) 家形埴輪ほか

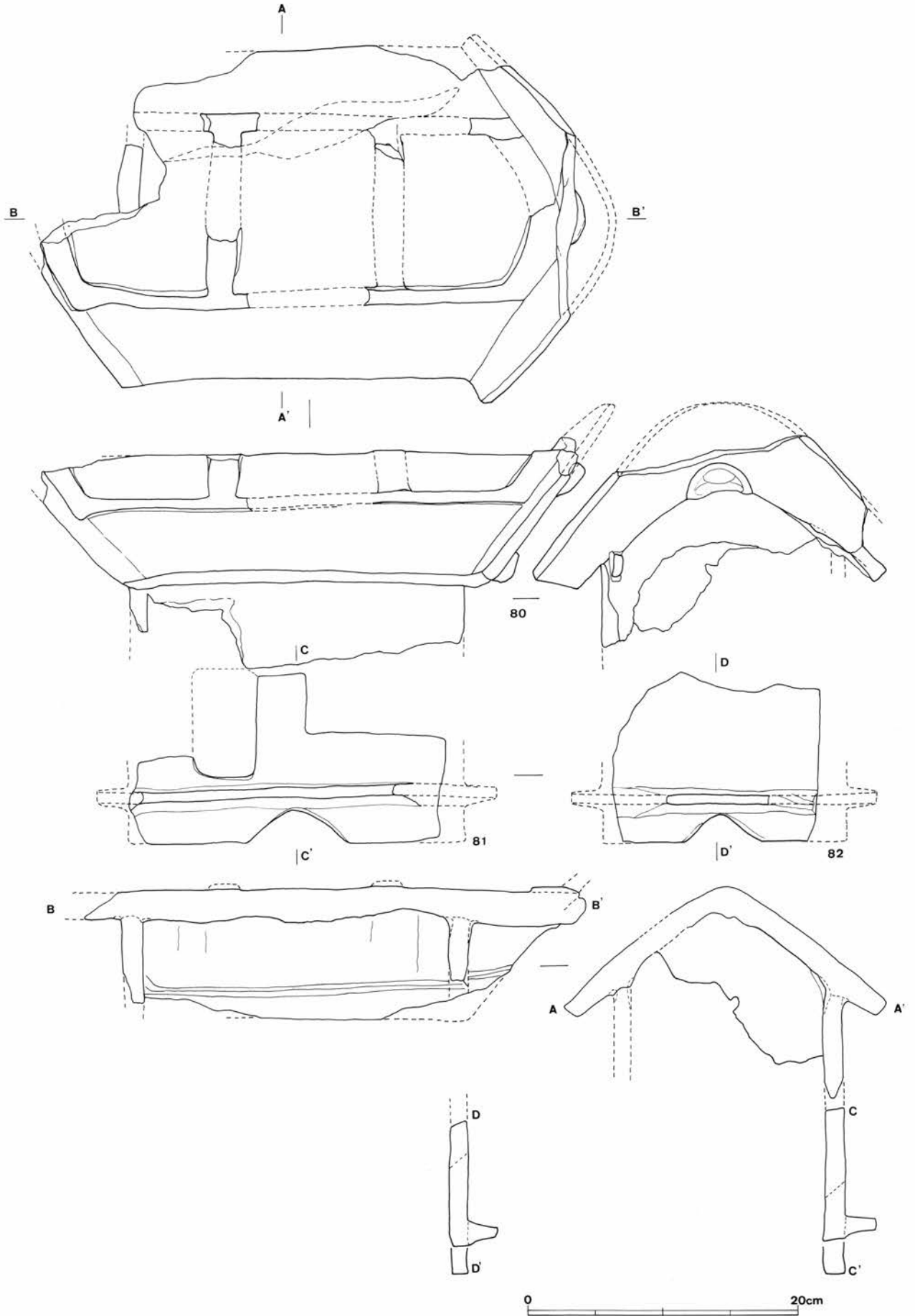
64・67・69・70～72・79. 包含層

65・68・73～75. S D03

66. S D02

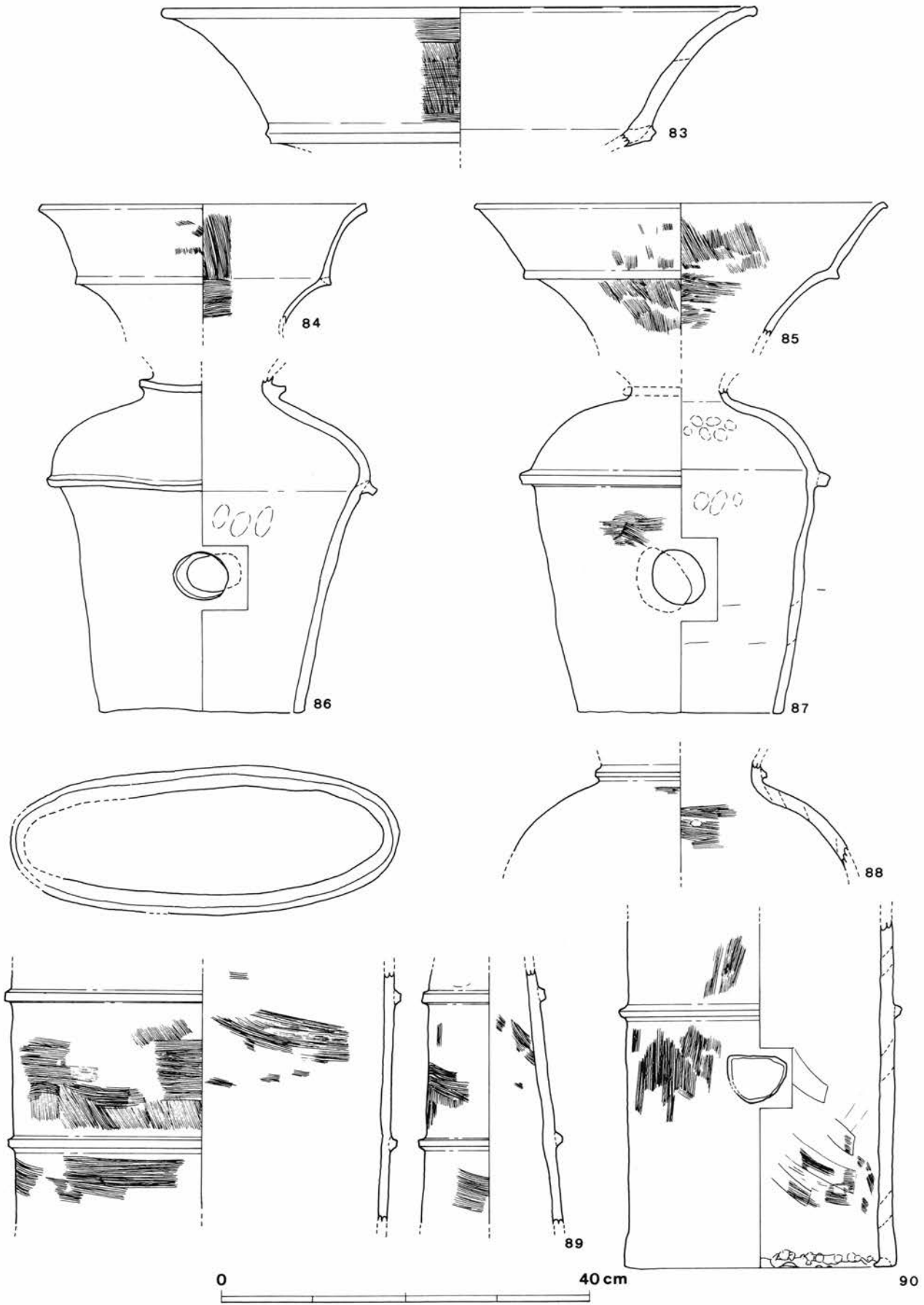
76・77. 2号墳

78. 4号墳



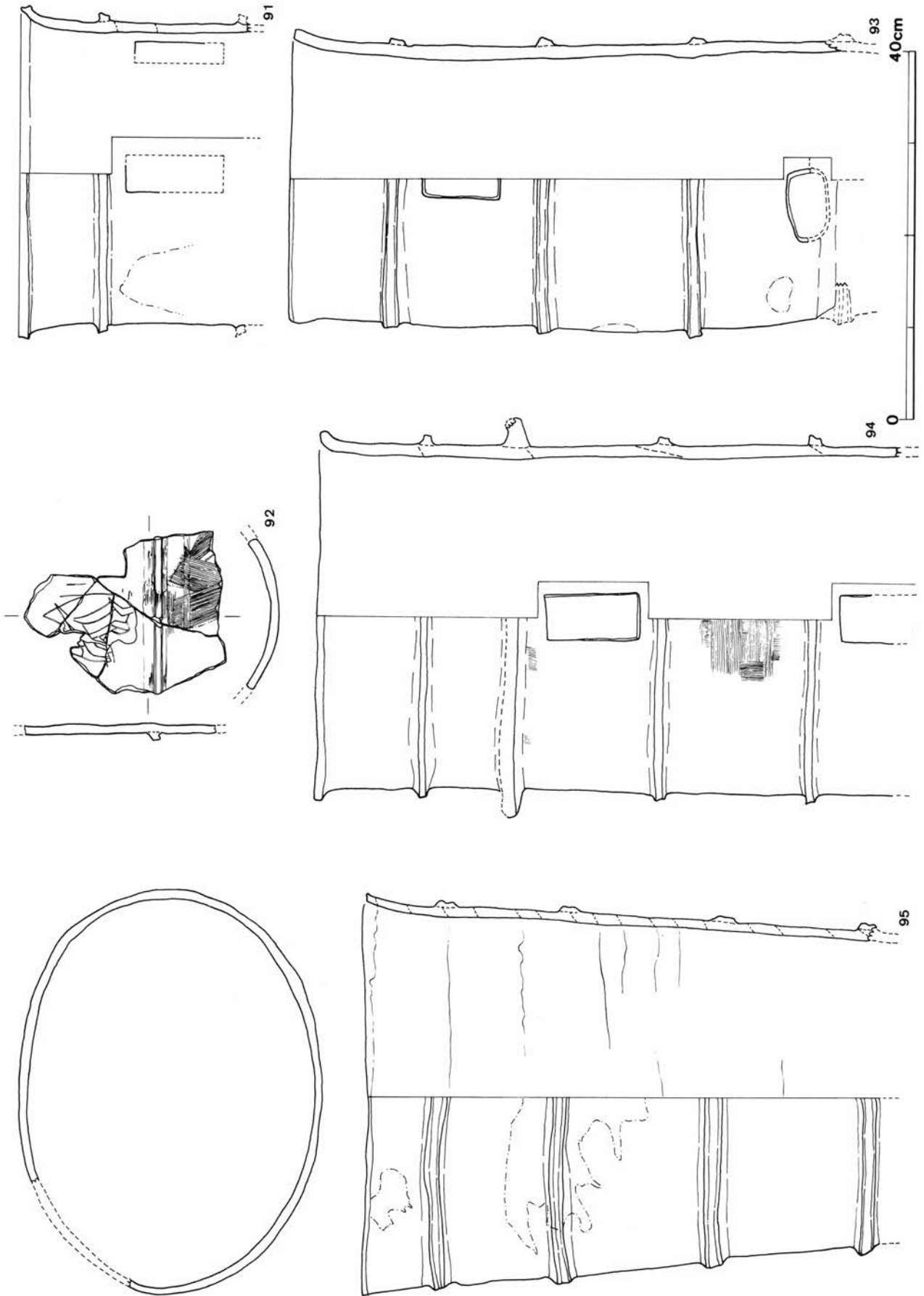
形象埴輪実測図(8) 家形埴輪

80. 8号埴 81・82. S D03



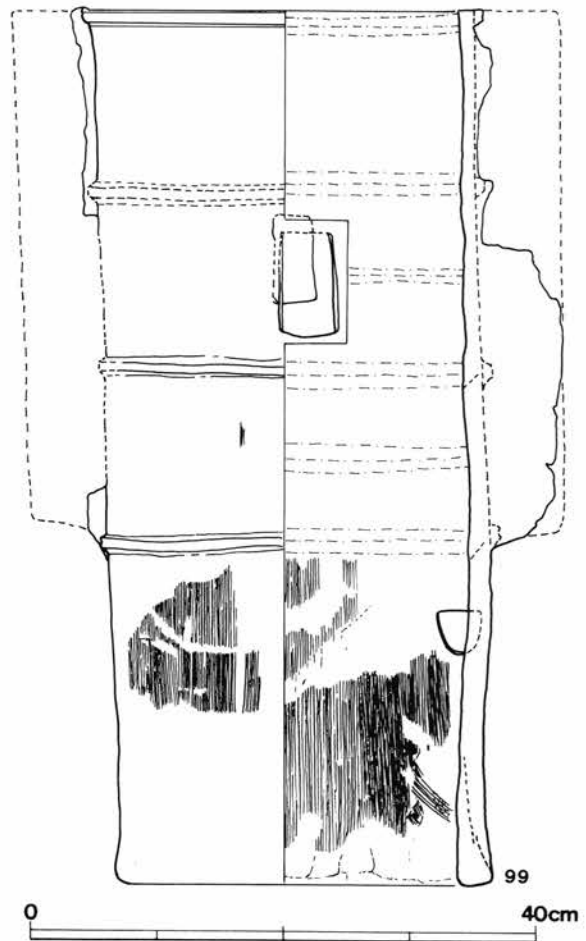
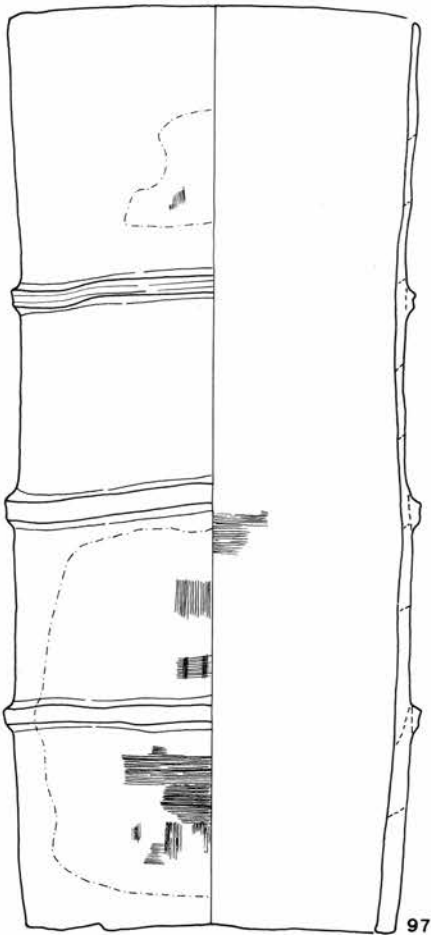
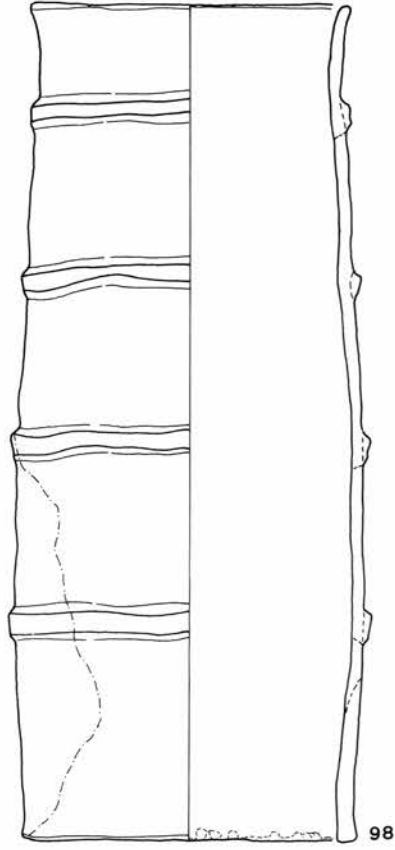
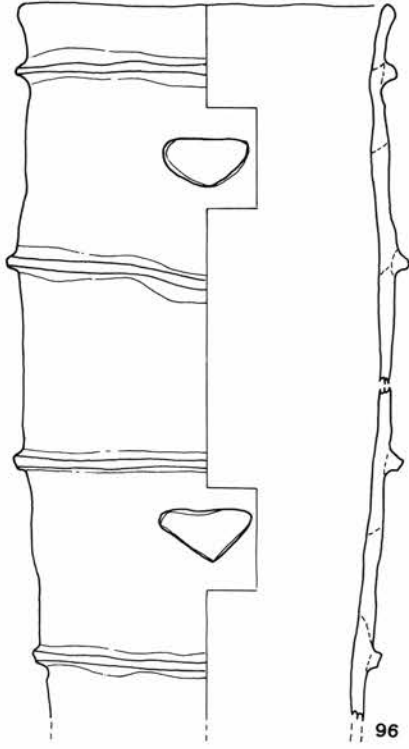
埴輪実測図(1) 円筒埴輪・壺形埴輪ほか

85. 1号墳墳丘 83・84・89. 2号墳 86・87. 4号墳 88. 5号墳 90. S D 03



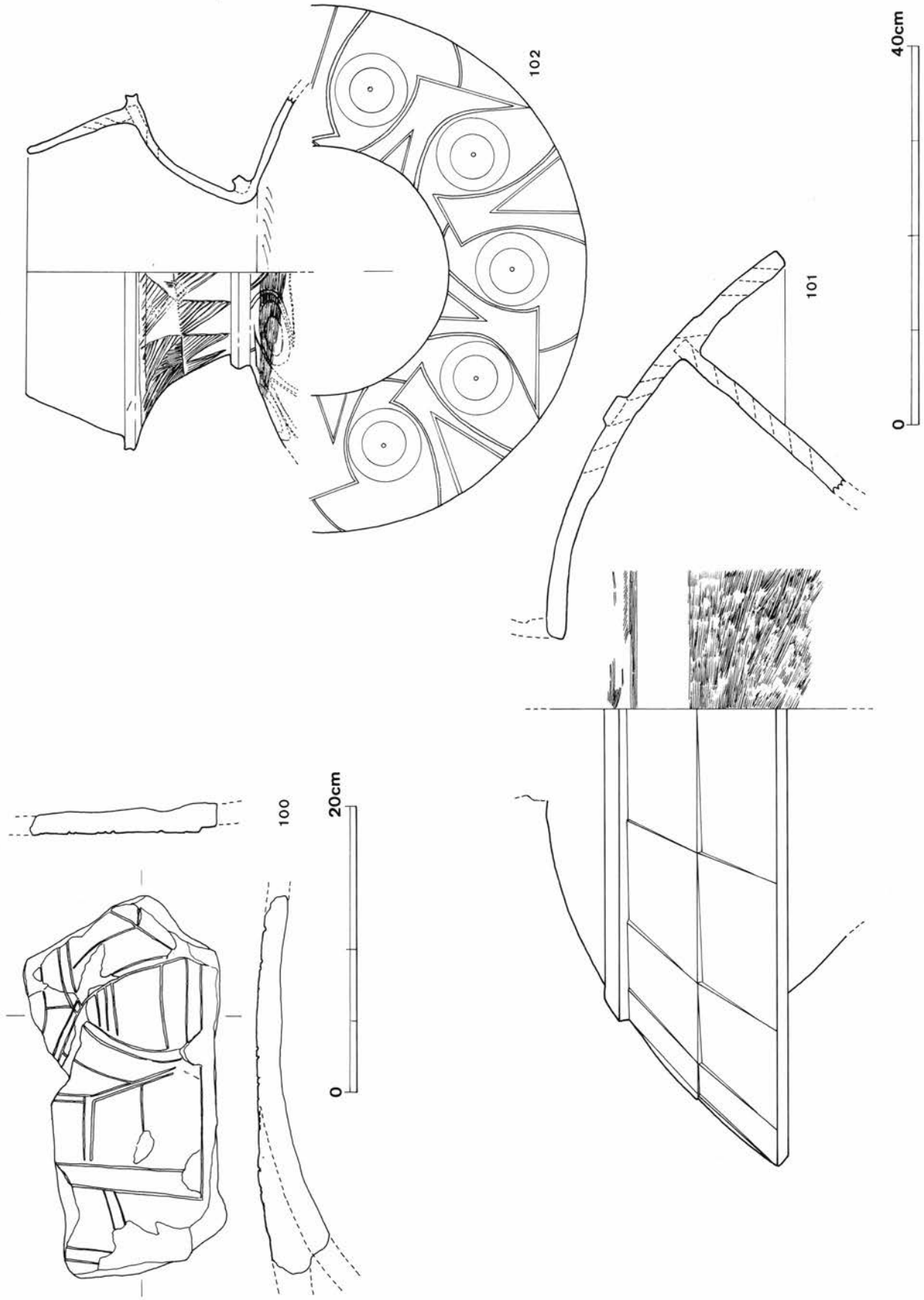
埴輪実測図(2) 1・2号埴輪棺

91~93. 1号埴輪棺 94・95. 2号埴輪棺



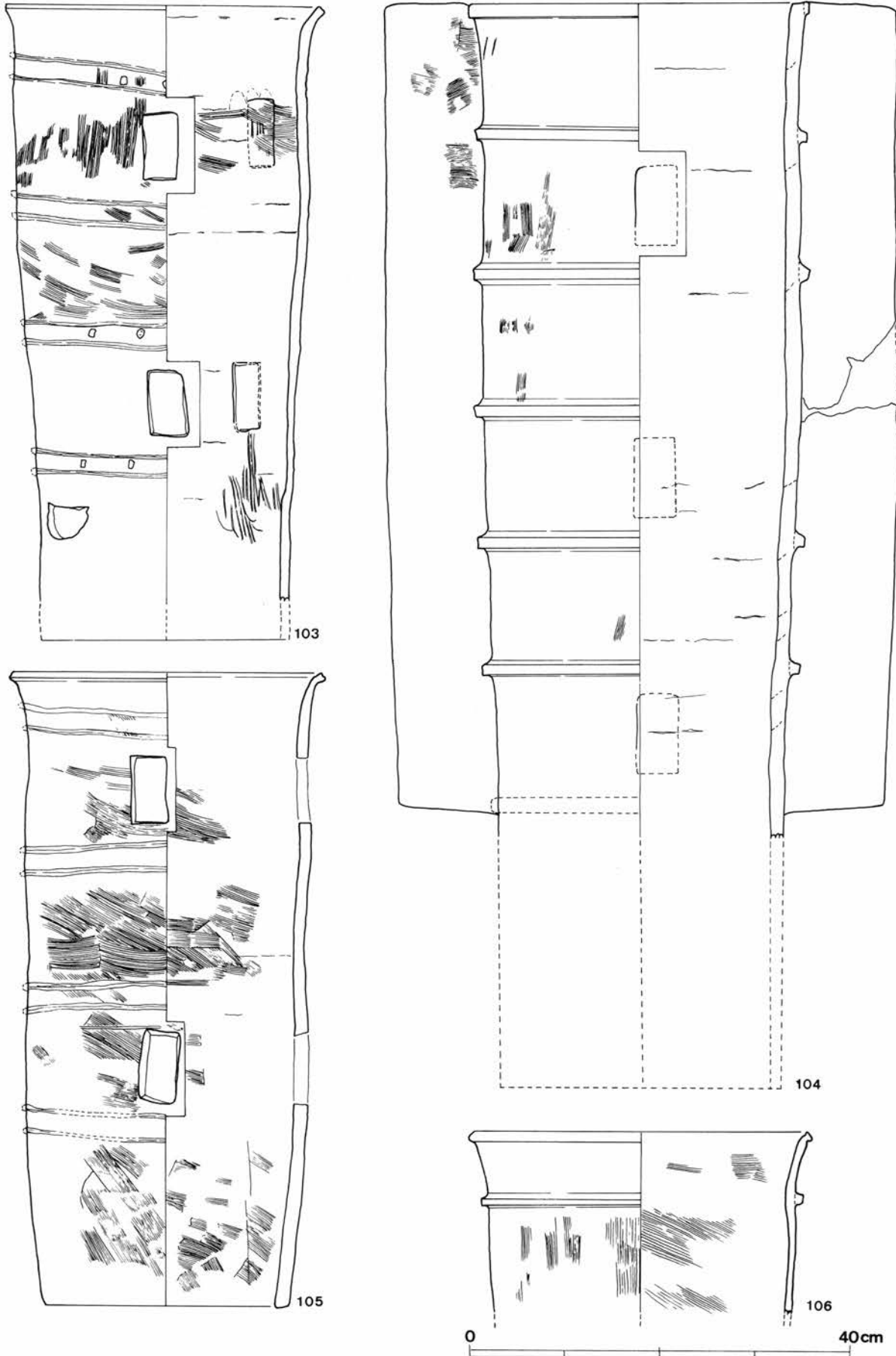
埴輪実測図(3) 3・4・5号埴輪棺

96・97. 3号埴輪棺 98. 4号埴輪棺 99. 5号埴輪棺



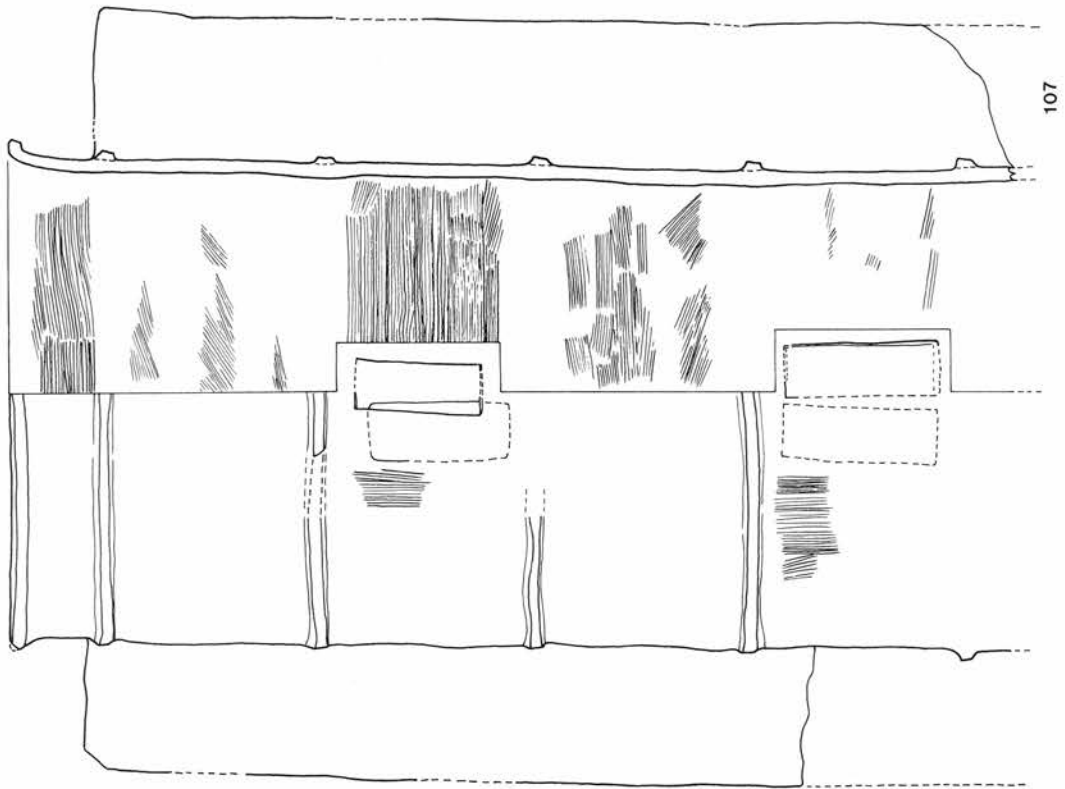
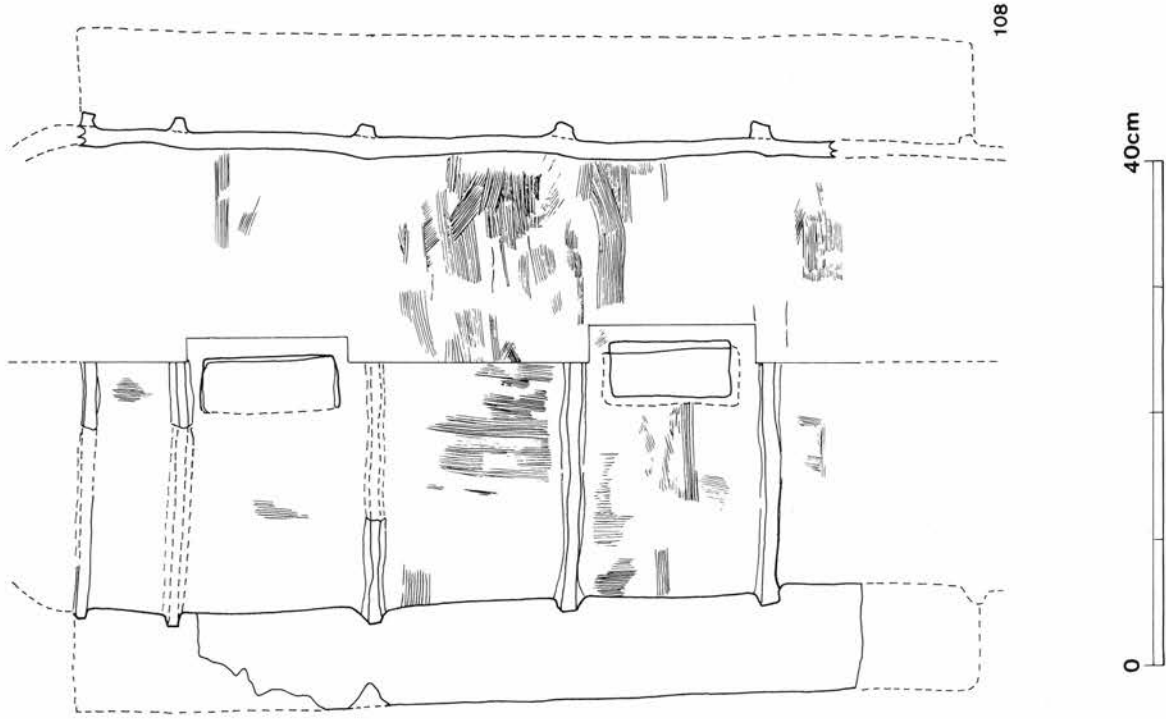
埴輪実測図(4) 5・6・7号埴輪棺

100. 5号埴輪棺 101. 6号埴輪棺 102. 7号埴輪棺

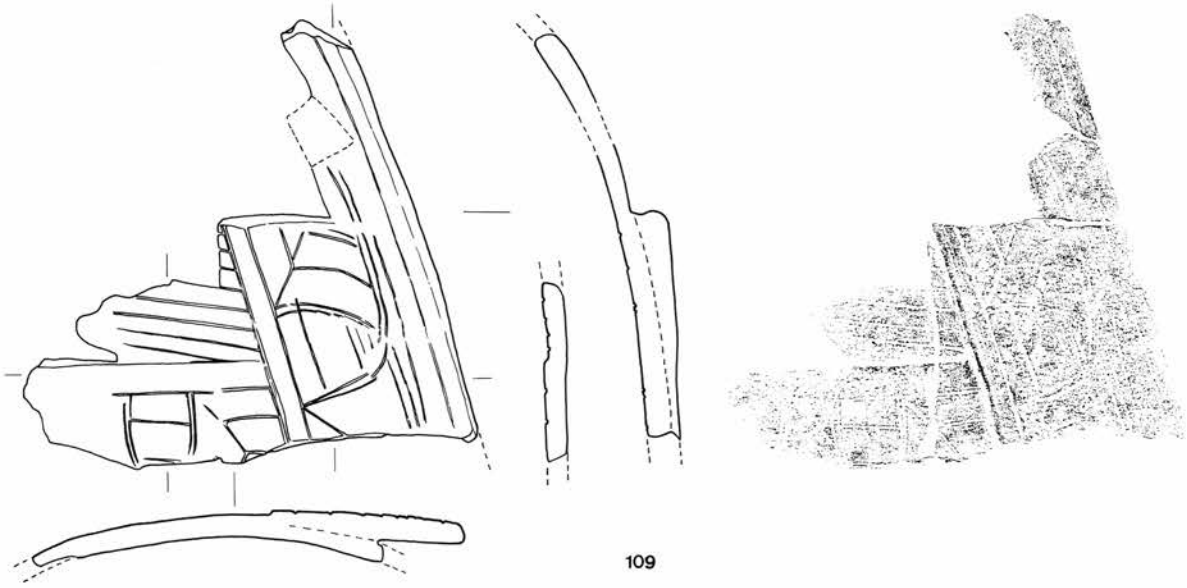


埴輪実測図(5) 5・8・9号埴輪棺

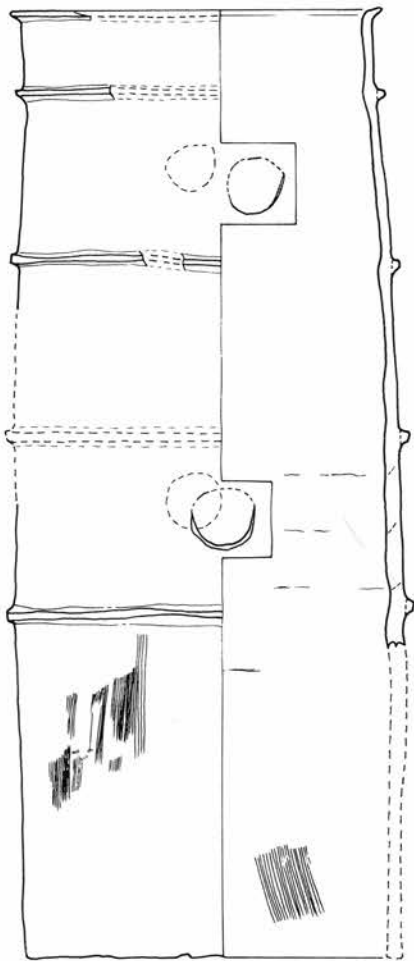
103. 5号埴輪棺 104. 8号埴輪棺 105・106. 9号埴輪棺



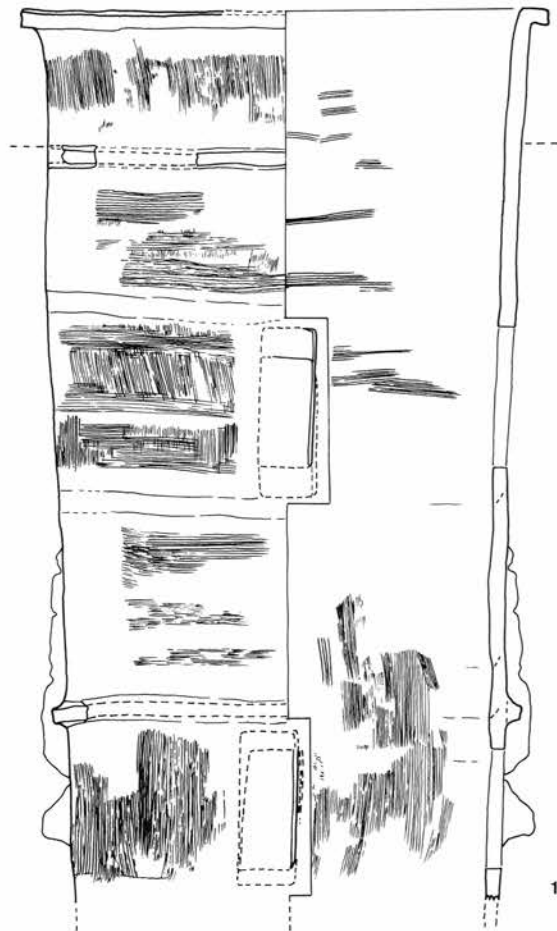
埴輪実測図(6) 8号埴輪棺



109



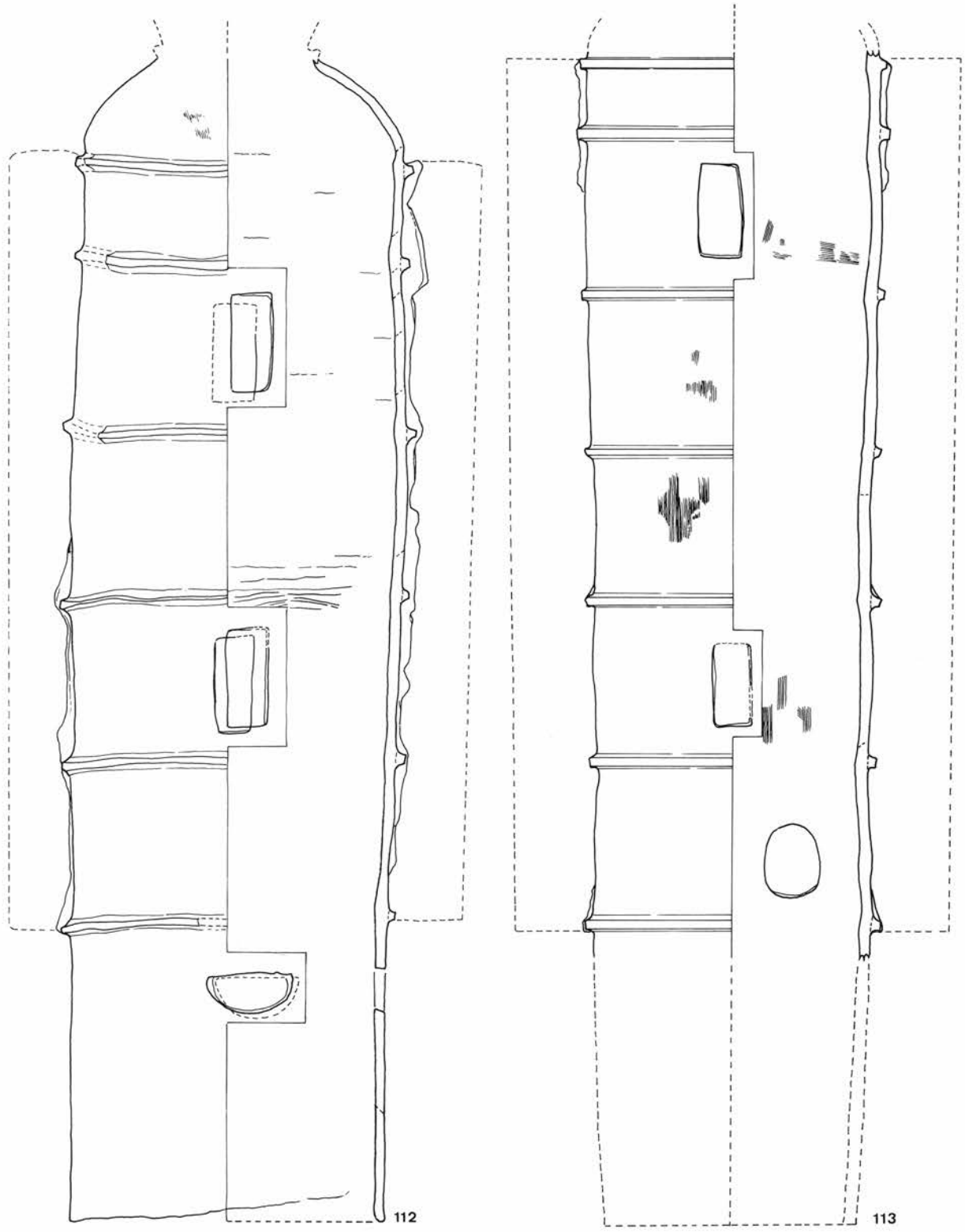
110



111

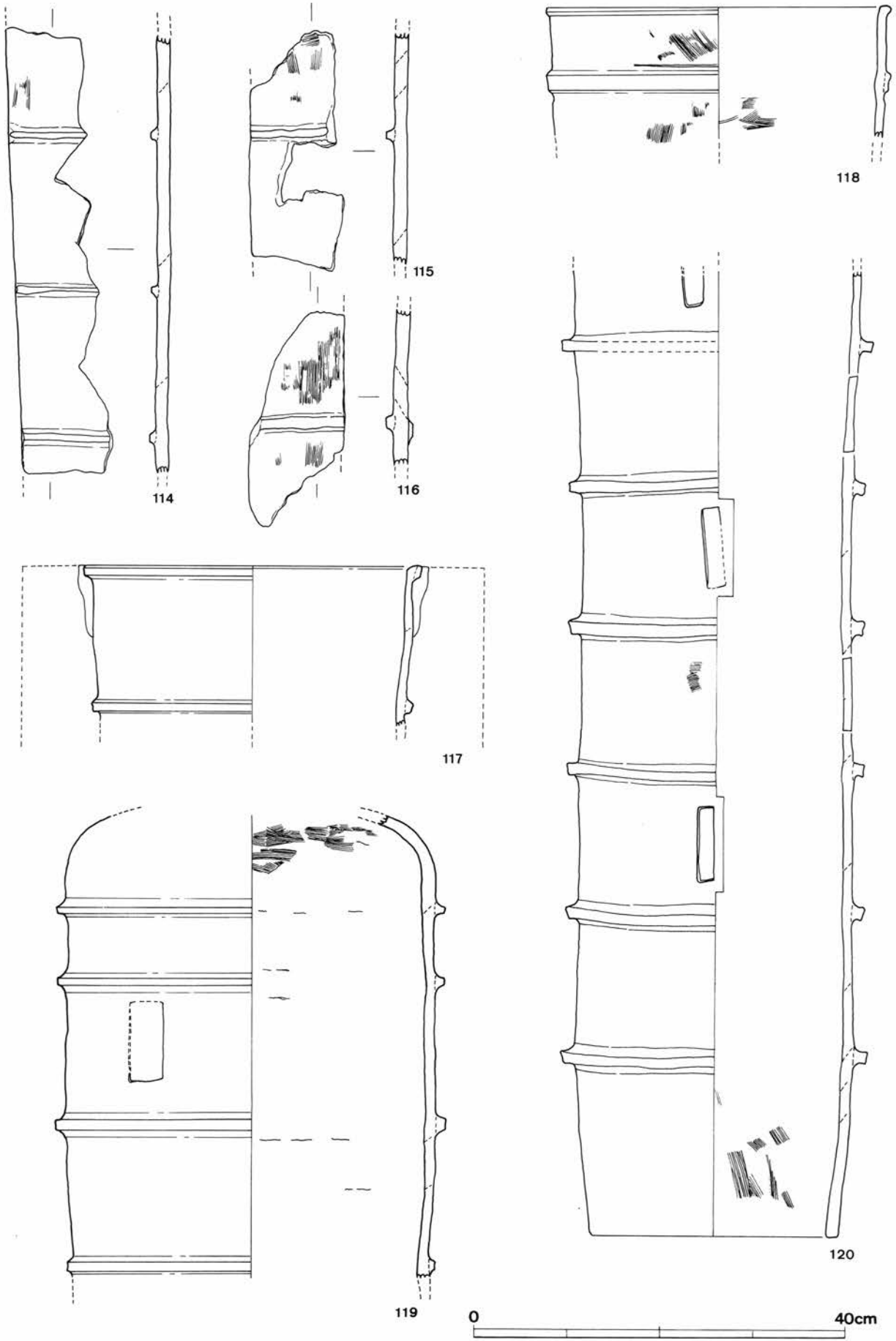


埴輪実測図(7) 11号埴輪棺



0 40cm

埴輪実測図(8) 10・12号埴輪棺
112.10号埴輪棺 113.12号埴輪棺



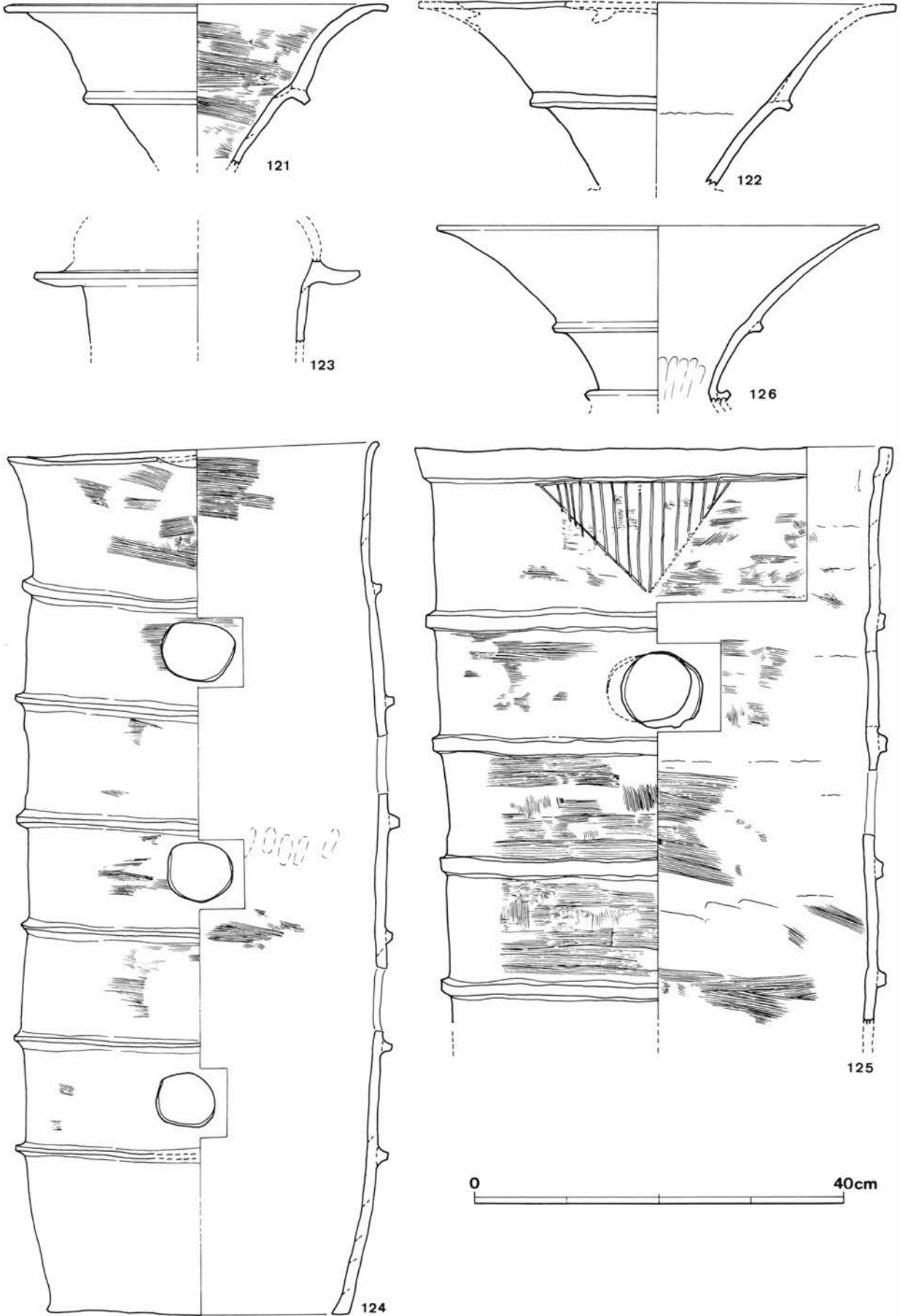
埴輪実測図(9) 10・12~14号埴輪棺

114~116.10号埴輪棺

117・118.13号埴輪棺

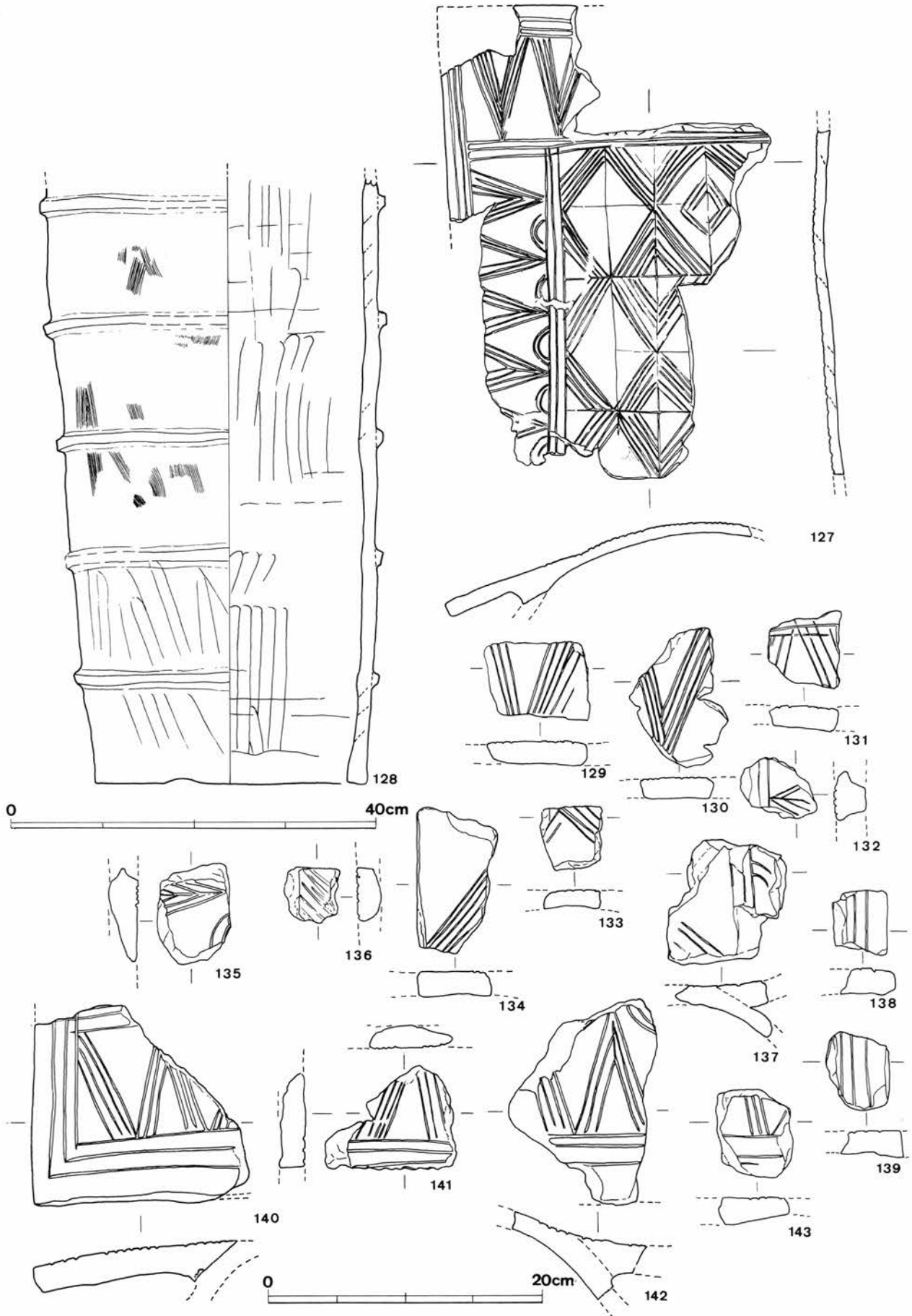
119.12号埴輪棺

120.14号埴輪棺

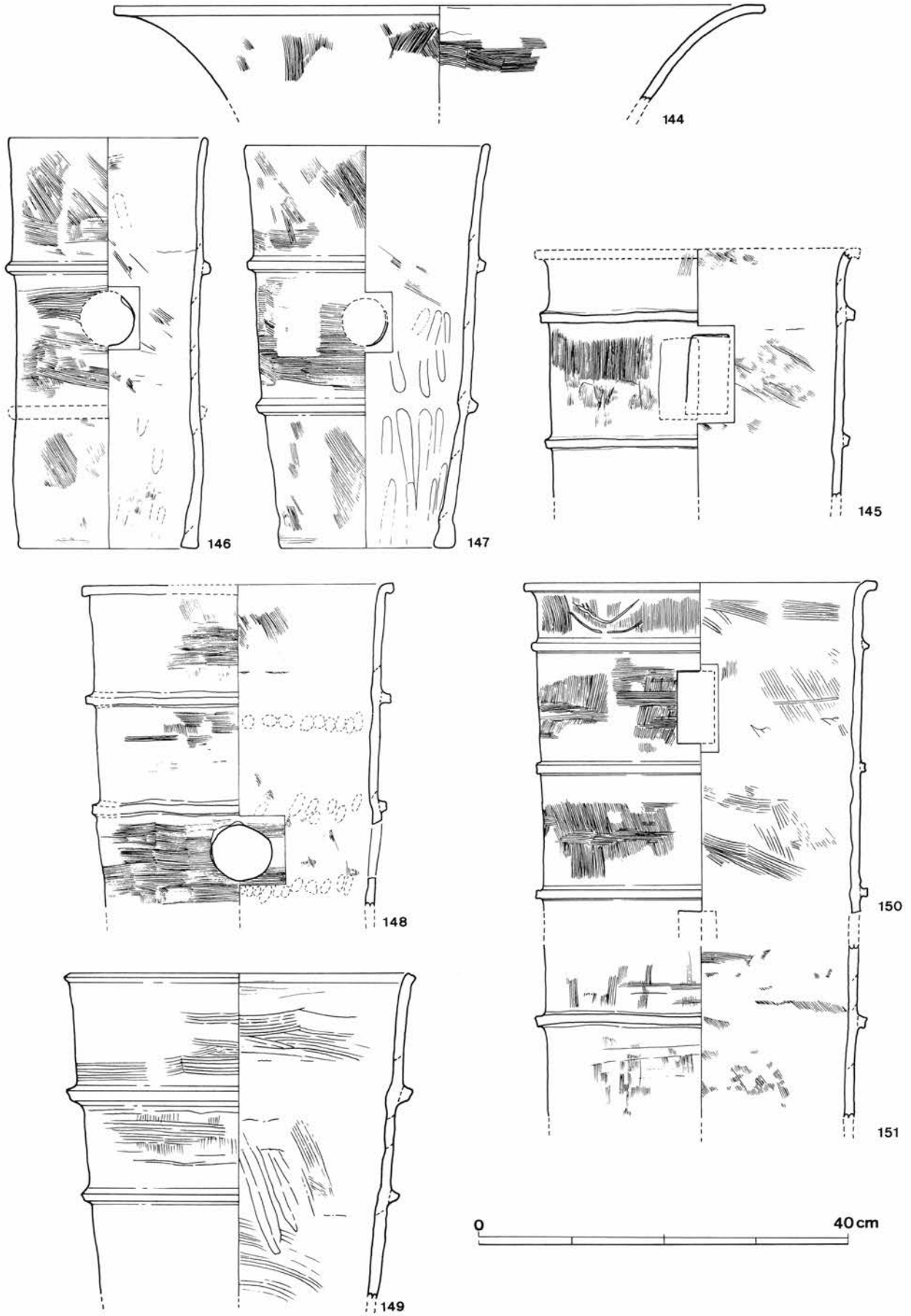


埴輪実測図(10) 16・18号埴輪棺

121~125.16号埴輪棺 126.18号埴輪棺



埴輪実測図(1) 18号埴輪棺

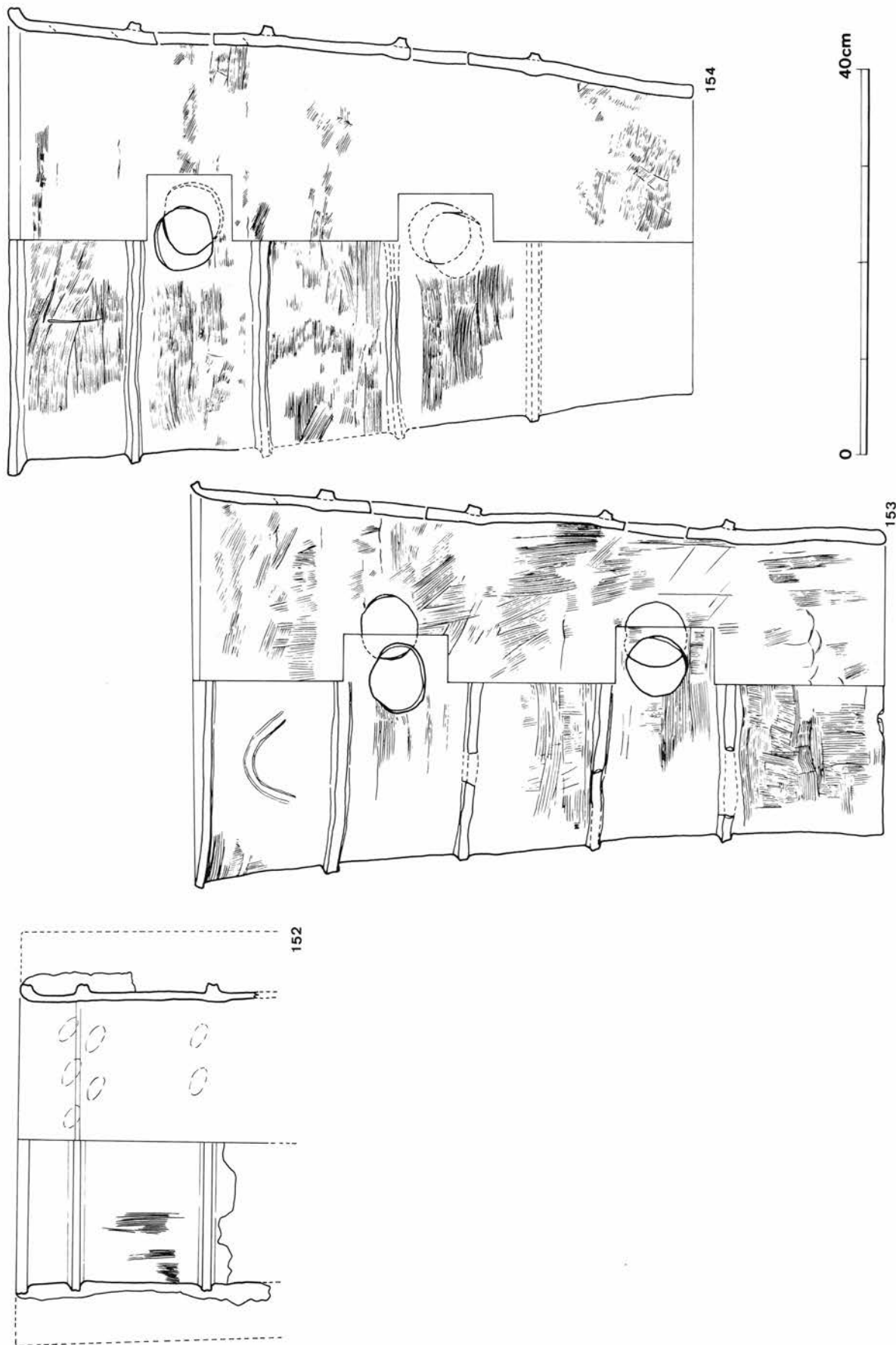


埴輪実測図(12) 15・17・19号埴輪棺

144・145・150・151.19号埴輪棺

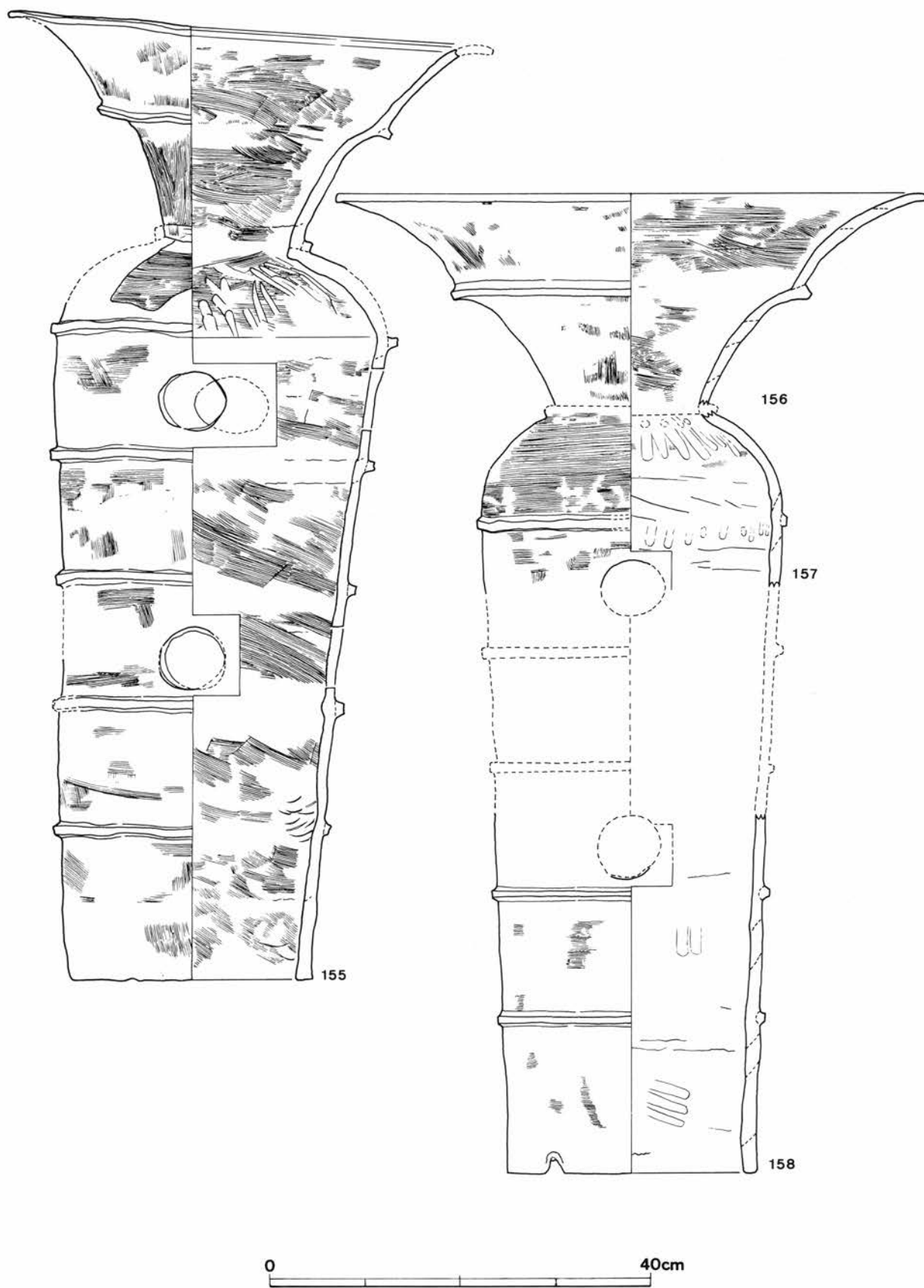
146・147.15号埴輪棺

148・149.17号埴輪棺

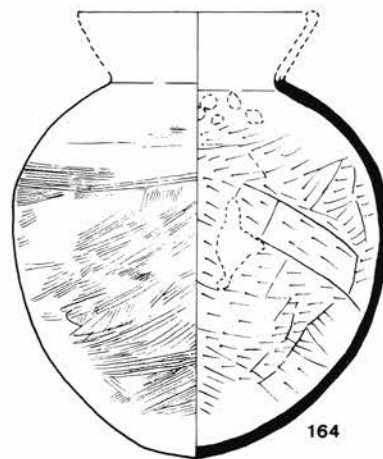
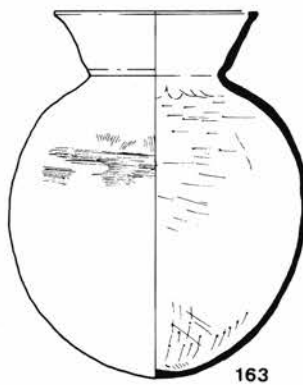
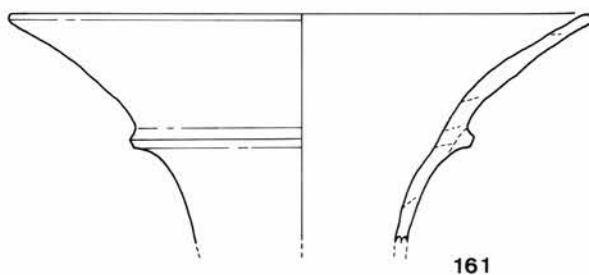
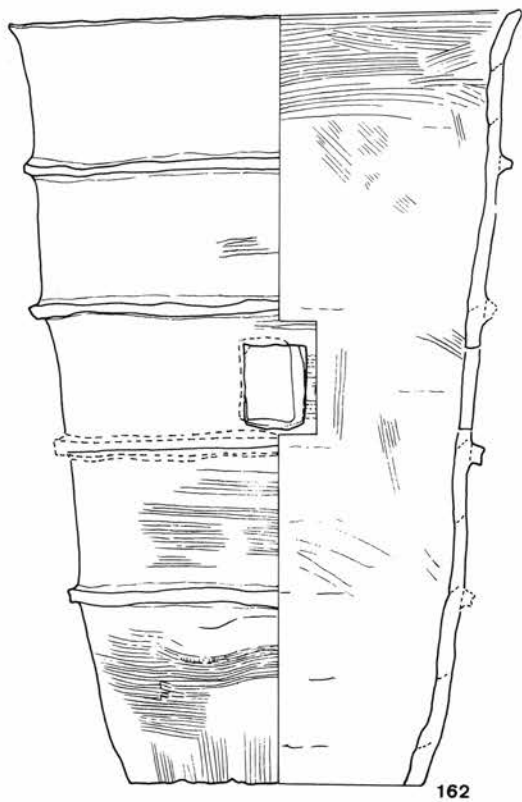
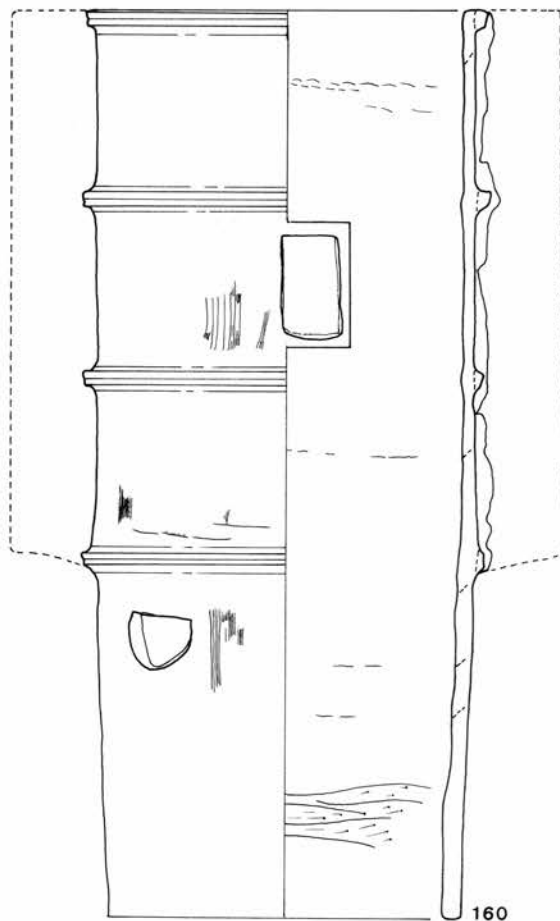
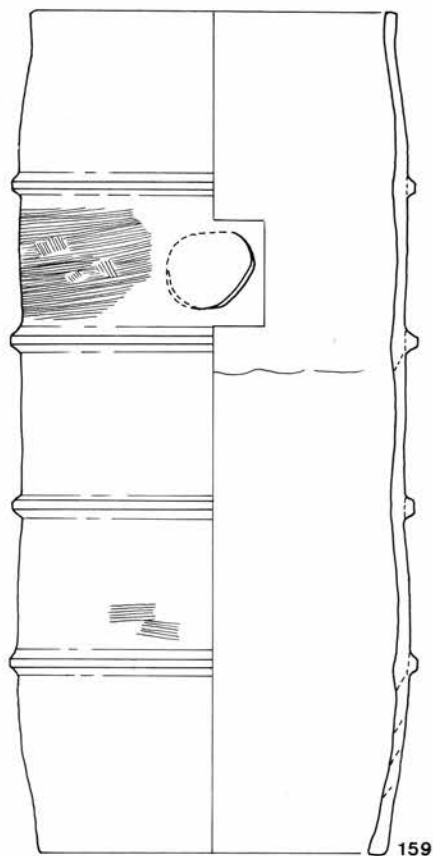


埴輪実測図(13) 19・22号埴輪棺

152. 19号埴輪棺 153・154. 22号埴輪棺

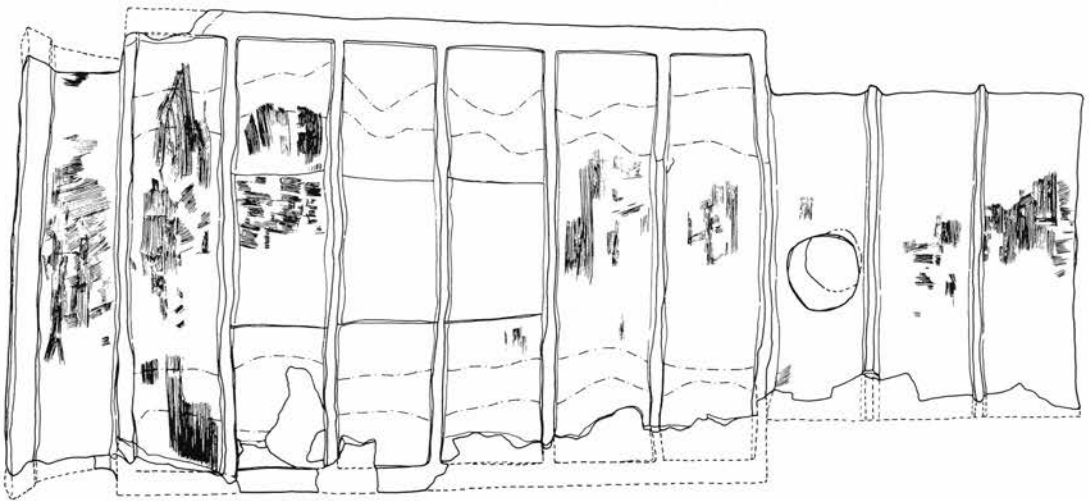
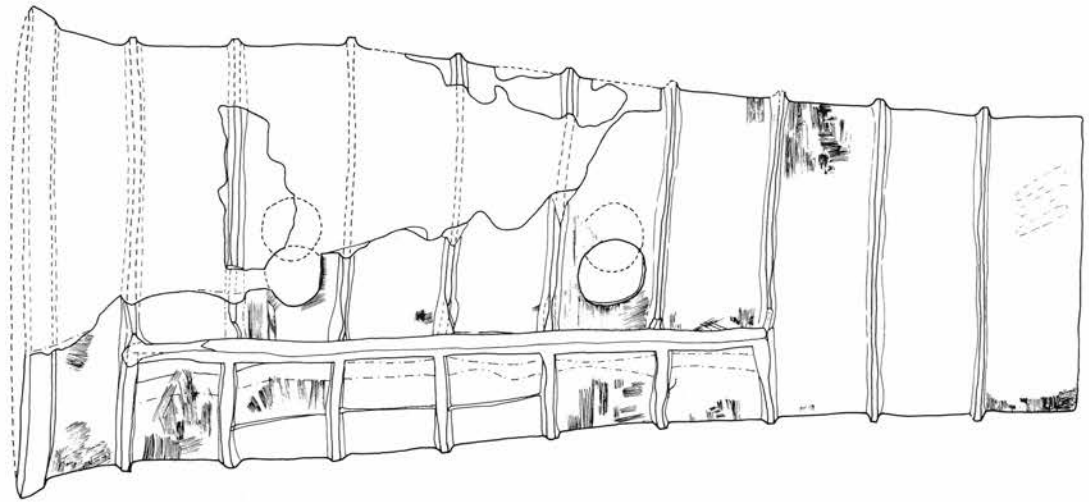
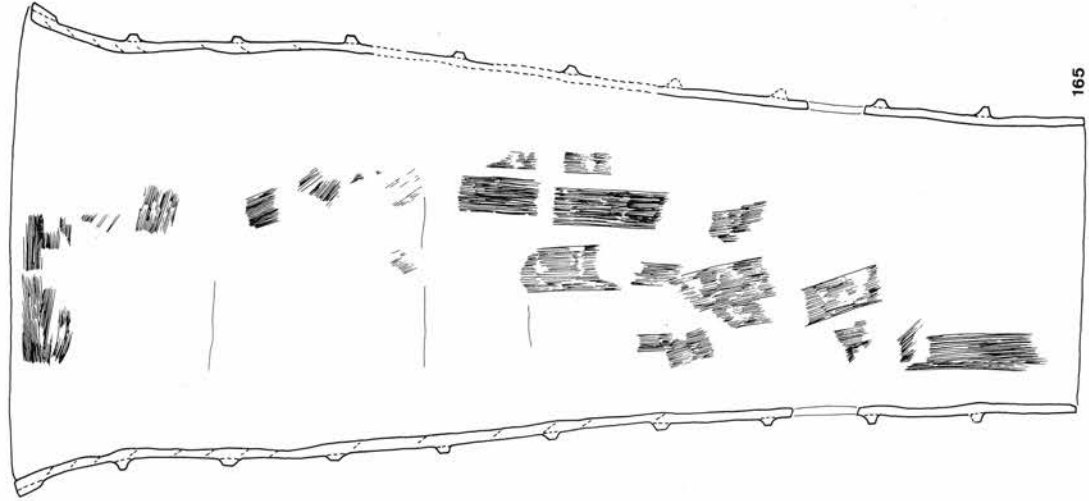


埴輪実測図(14) 22号埴輪棺

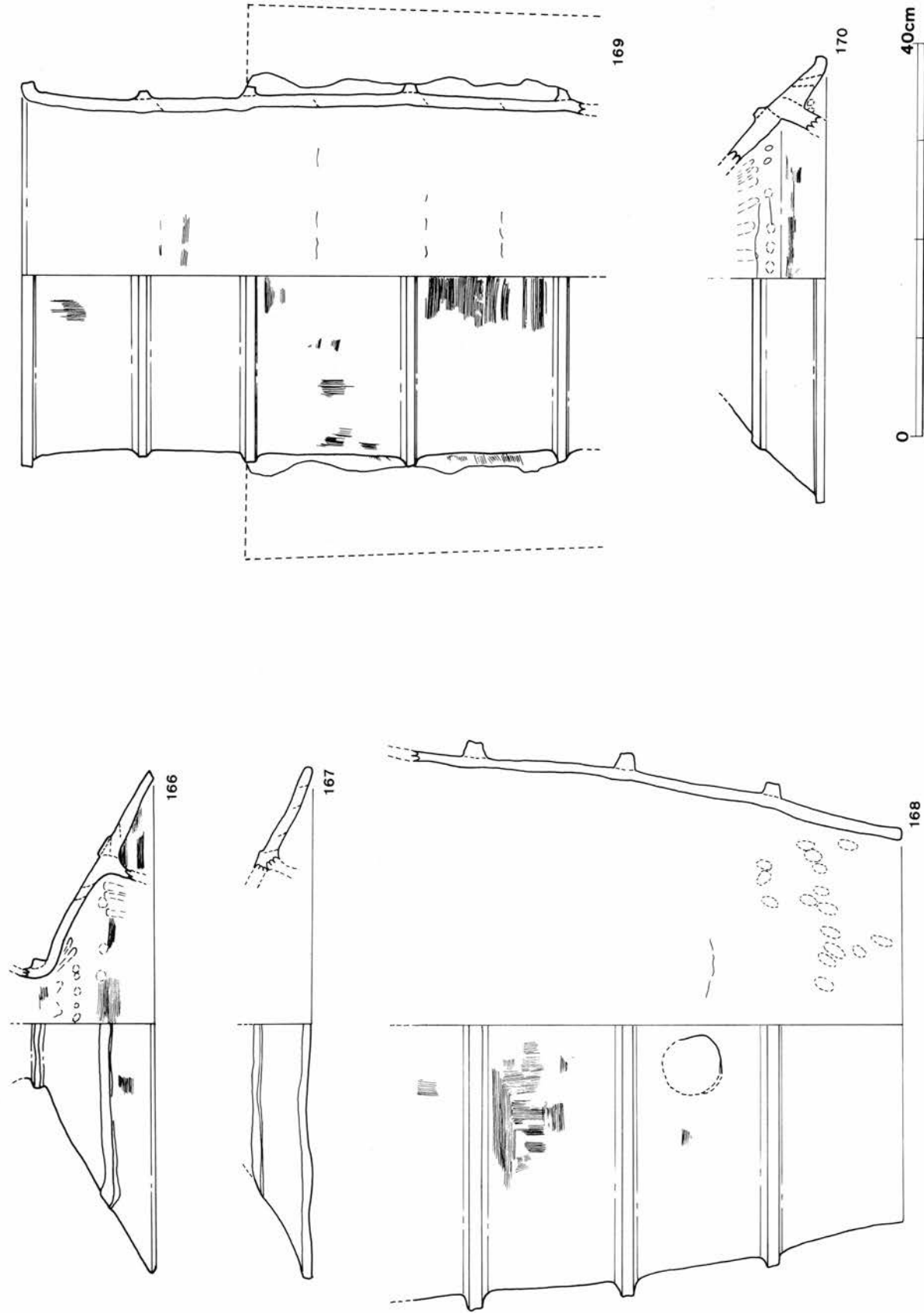


埴輪実測図(15) 20・21・23号埴輪棺

159.20号埴輪棺 160・161.21号埴輪棺 162~164.23号埴輪棺

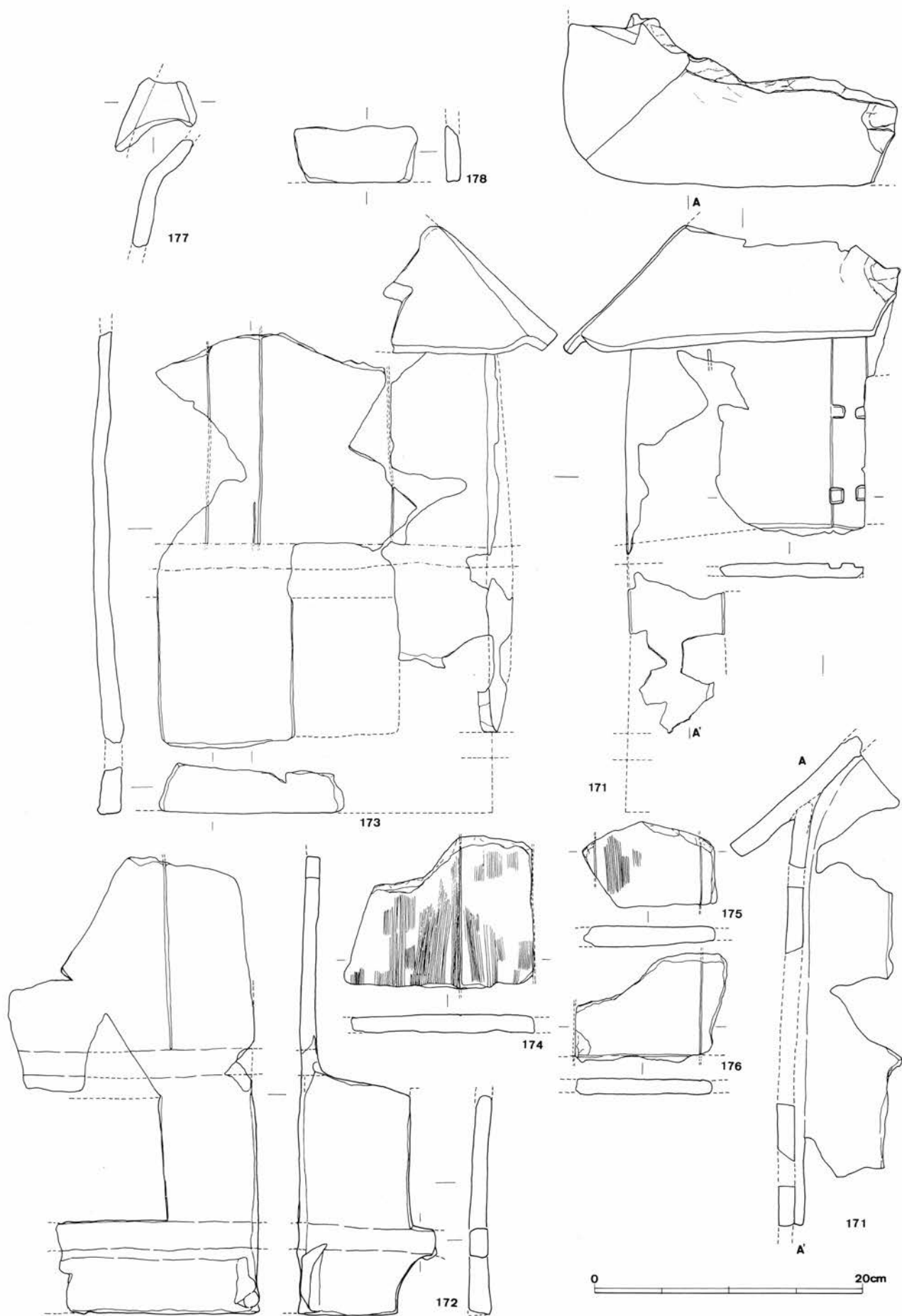


埴輪実測図(16) 24号埴輪棺

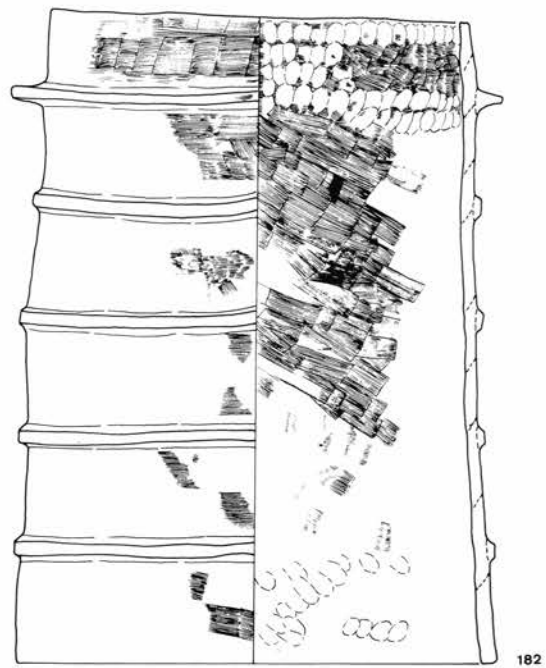
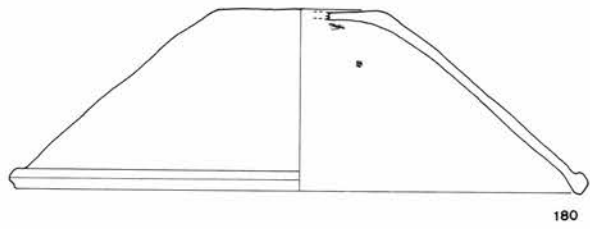
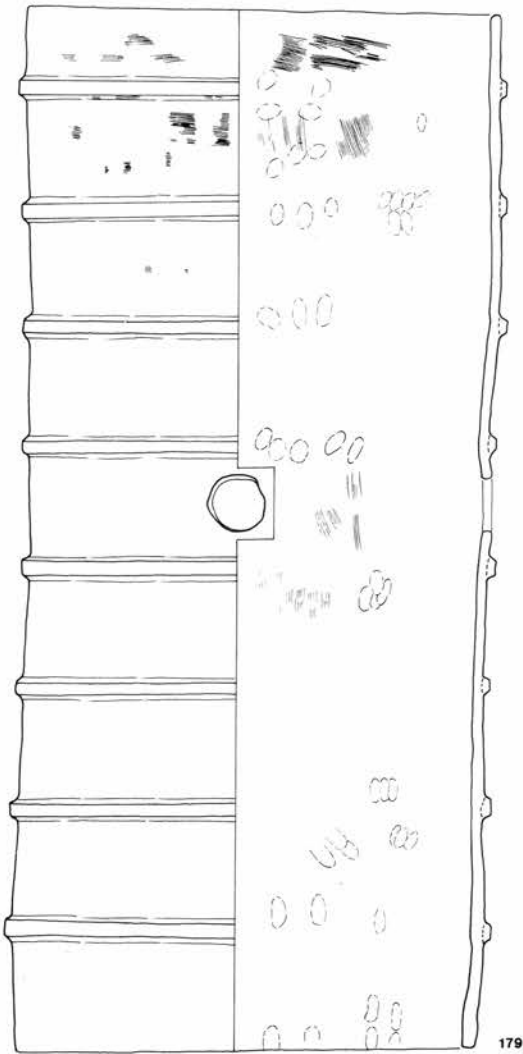
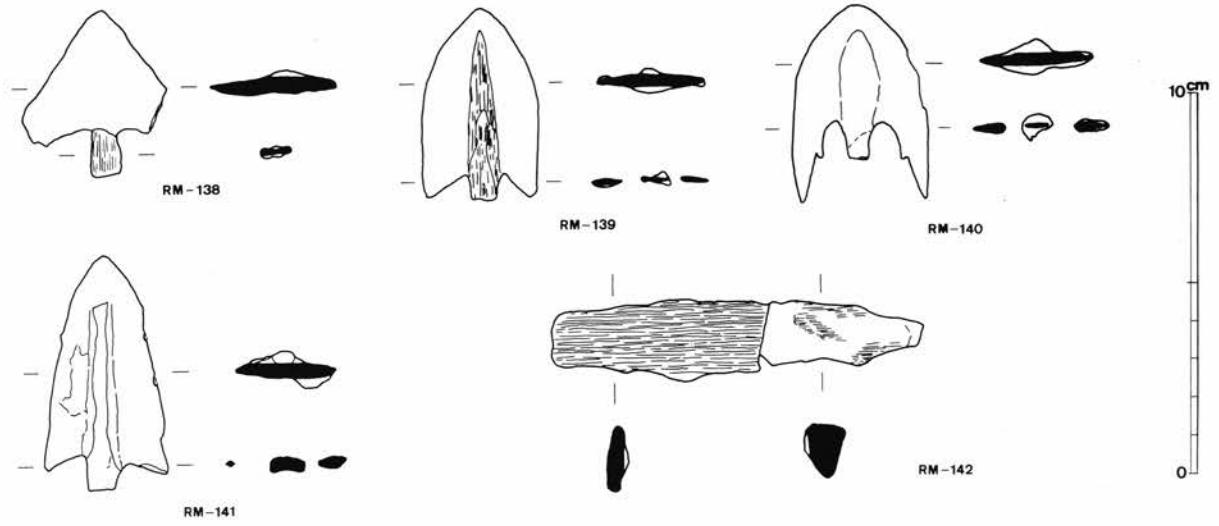


埴輪実測図(17) 24・25号埴輪棺

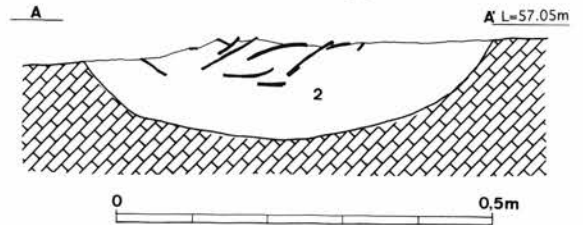
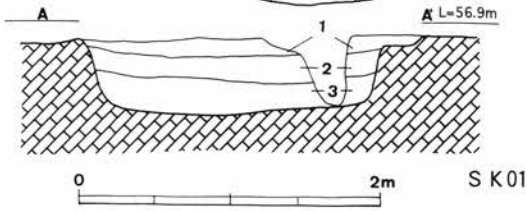
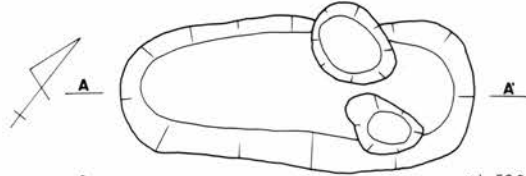
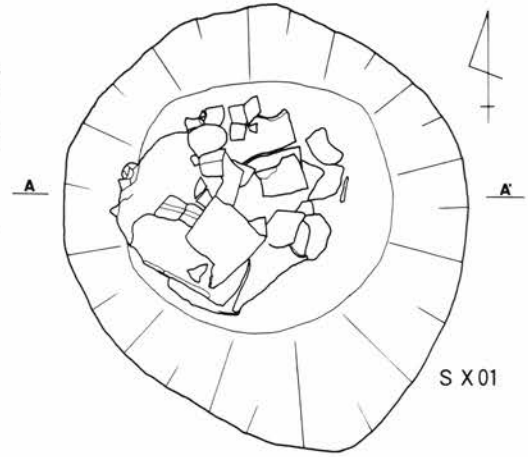
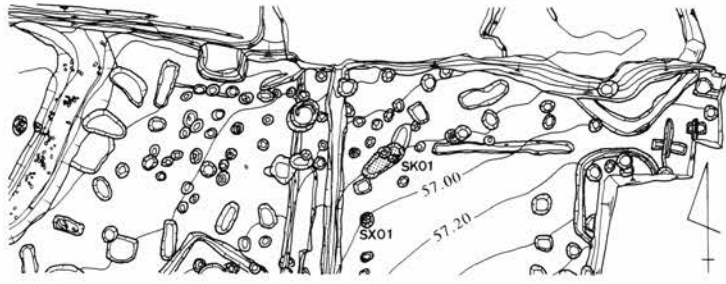
166~168.24号埴輪棺 169.24・25号埴輪棺 170.25号埴輪棺



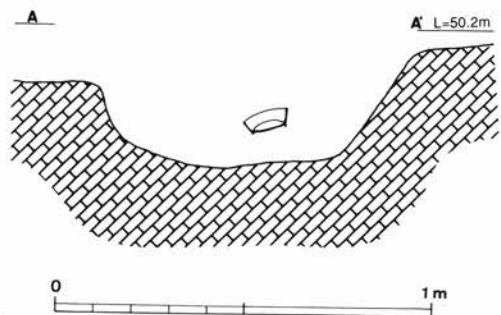
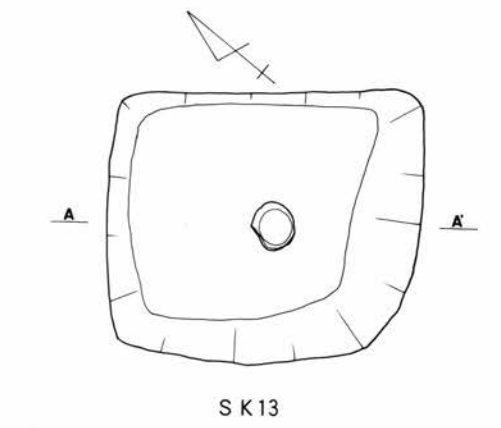
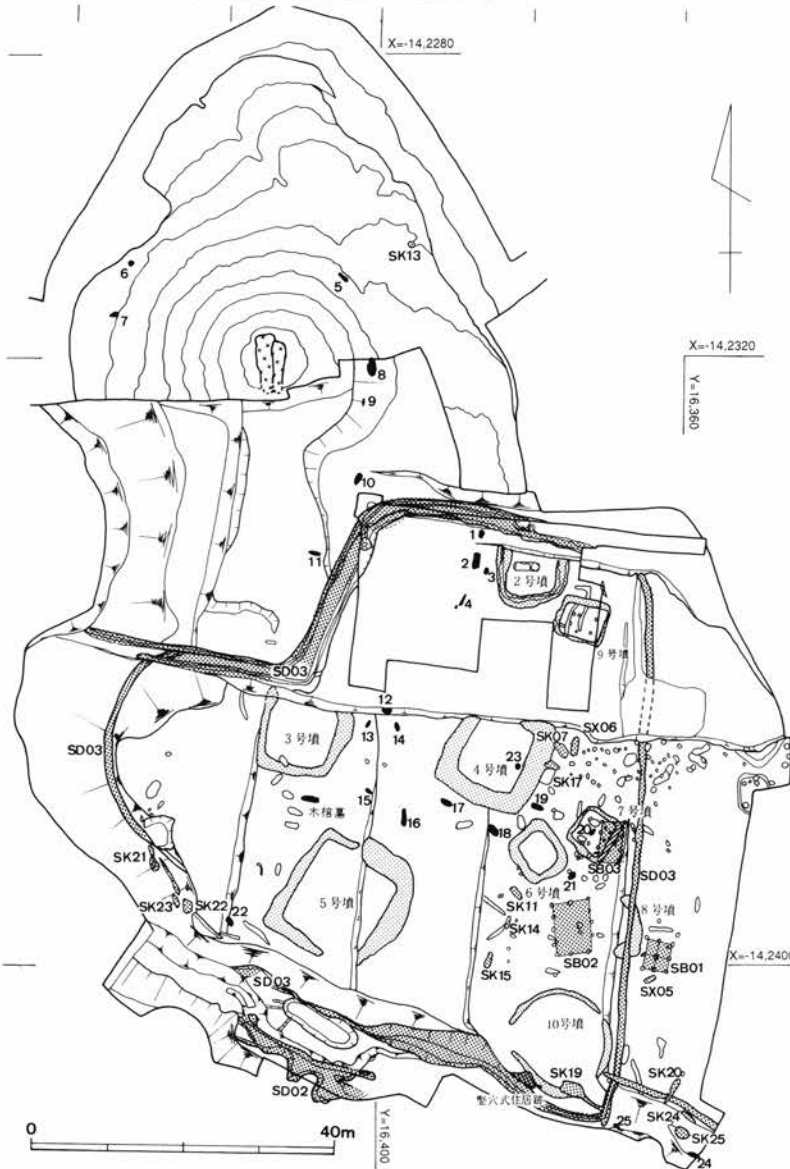
埴輪実測図(18) 24号埴輪棺



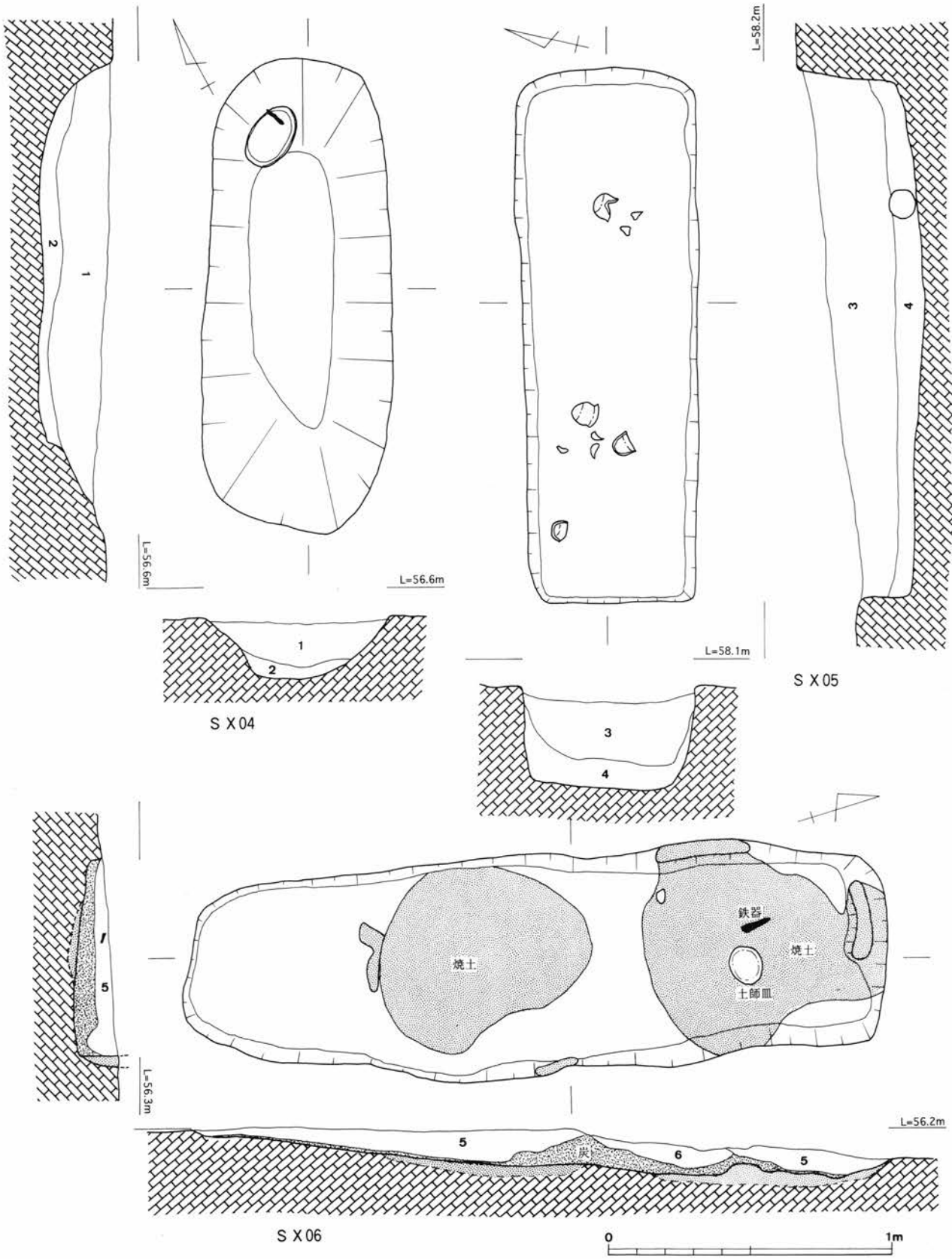
瓦谷遺跡26号埴輪棺埴輪実測図・出土遺物実測図



- 1. 暗灰黄色細砂質土
- 2. にぶい黄褐色細砂質土
- 3. にぶい黄褐色砂質土

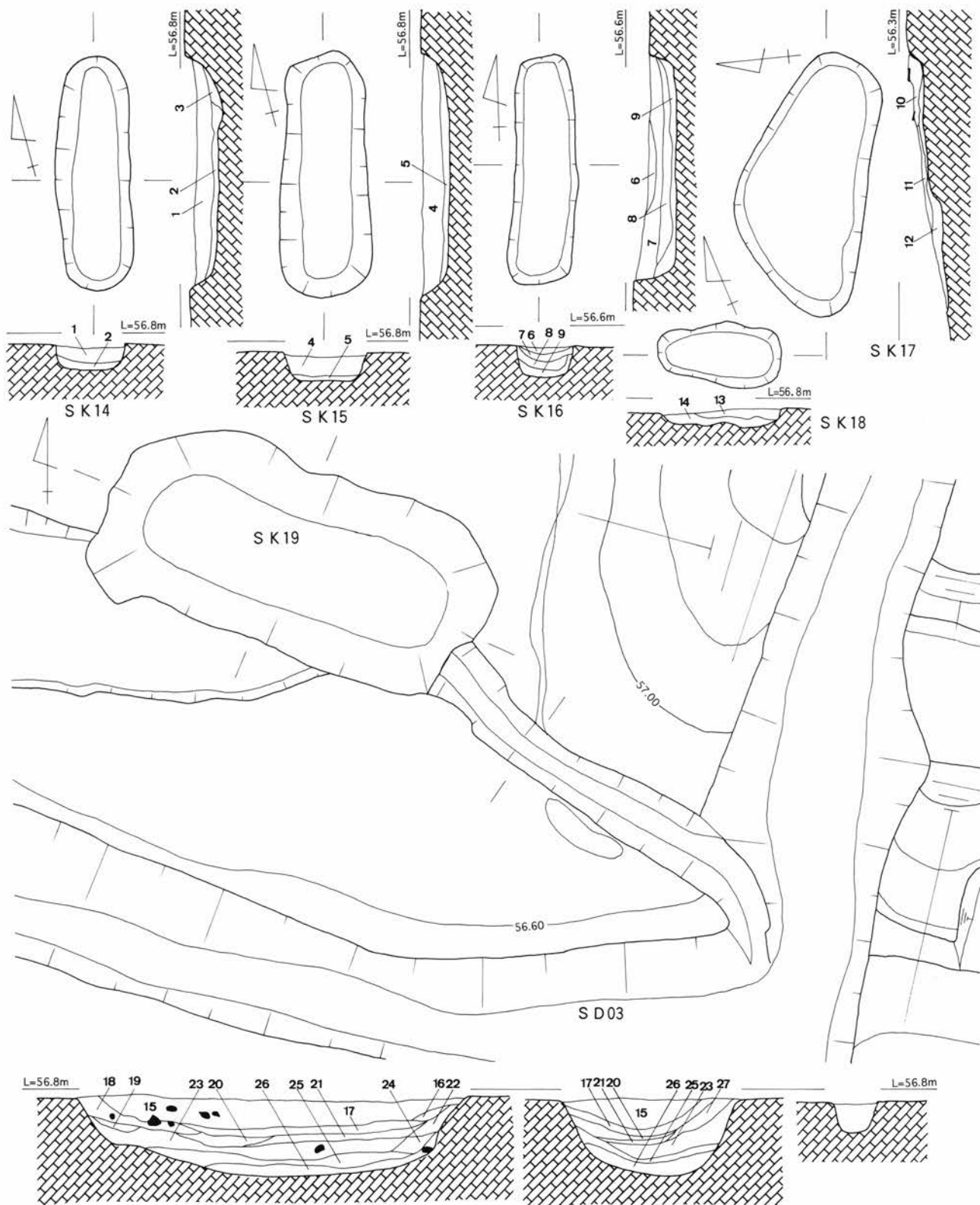


古墳時代以外の遺構配置図、SK01・13、SX01実測図



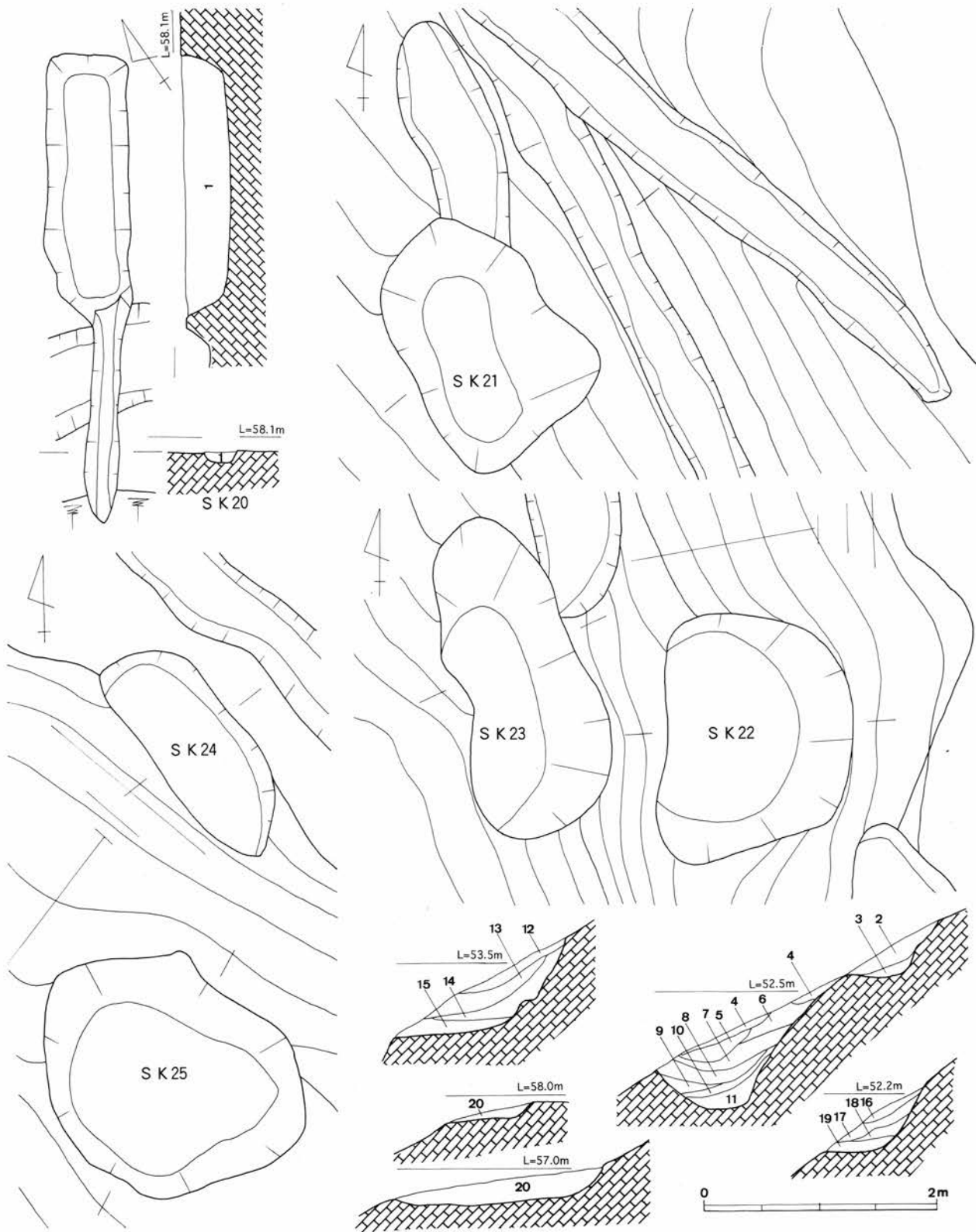
S X 04~06実測図

1. 暗黄褐色砂質土 2. にぶい黄褐色細砂質土混砂礫 3. にぶい灰黄色細砂質土混礫
 4. 黄褐色粘質土 5. 灰黄色粘質土 6. 灰黄色粘質土混炭 7. 炭



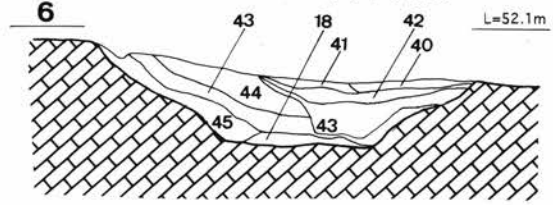
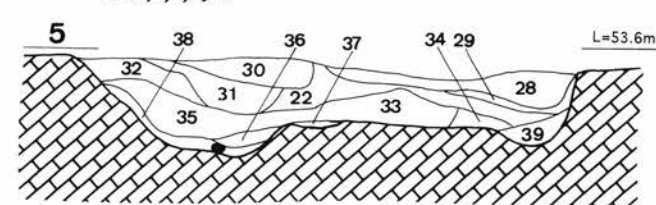
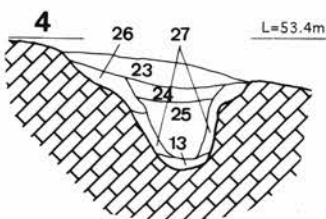
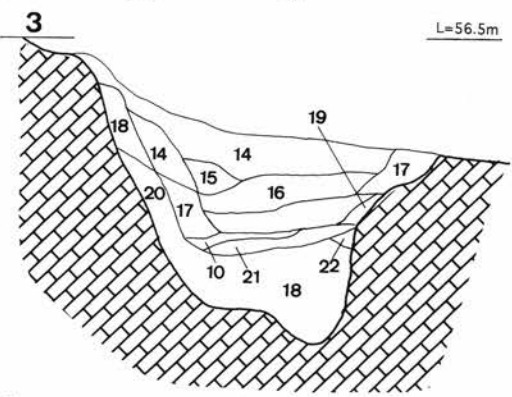
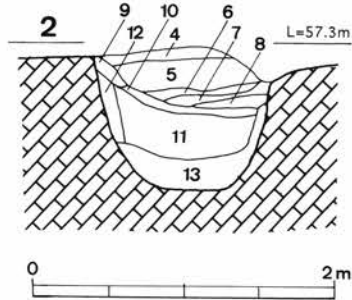
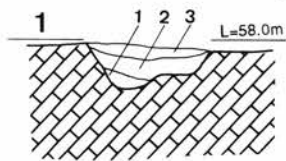
S K 14~19実測図

- | | | | |
|----------------|-------------------|-----------------------|------------------|
| 1. 暗灰黄色細砂質土 | 2. 暗灰色粘質土 | 3. にぶい黄褐色粘質土 | 4. 暗灰黄色細砂質土 |
| 5. 暗灰色粘質土 | 6. 暗黄褐色粘質土 | 7. にぶい黄褐色細砂質土 | 8. 暗黄褐色細砂質土 |
| 9. 暗灰色砂質土 | 10. 黒灰色細砂質土混炭多量 | 11. 灰褐色細砂質土 | 12. 明黄褐色シルト混11の土 |
| 13. 暗灰黄色粘質土 | 14. 暗灰色粘質土 | 15. 黄灰色細砂質土混礫(5 cm以下) | 16. 暗灰色細砂質土 |
| 17. 灰色粗砂(Fe沈着) | 18. 暗灰色細砂質土 | 19. 暗灰色粗砂 | 20. 灰色粘質土 |
| 21. 暗灰色粘質土混粗砂 | 22. 灰黄色細砂質土(Fe沈着) | 23. 暗灰色粘質土混礫(8 cm以下) | 24. 灰色砂礫(8 cm以下) |
| 25. 灰色シルト | 26. 暗灰色粗砂 | 27. 暗灰黄色細砂質土 | |



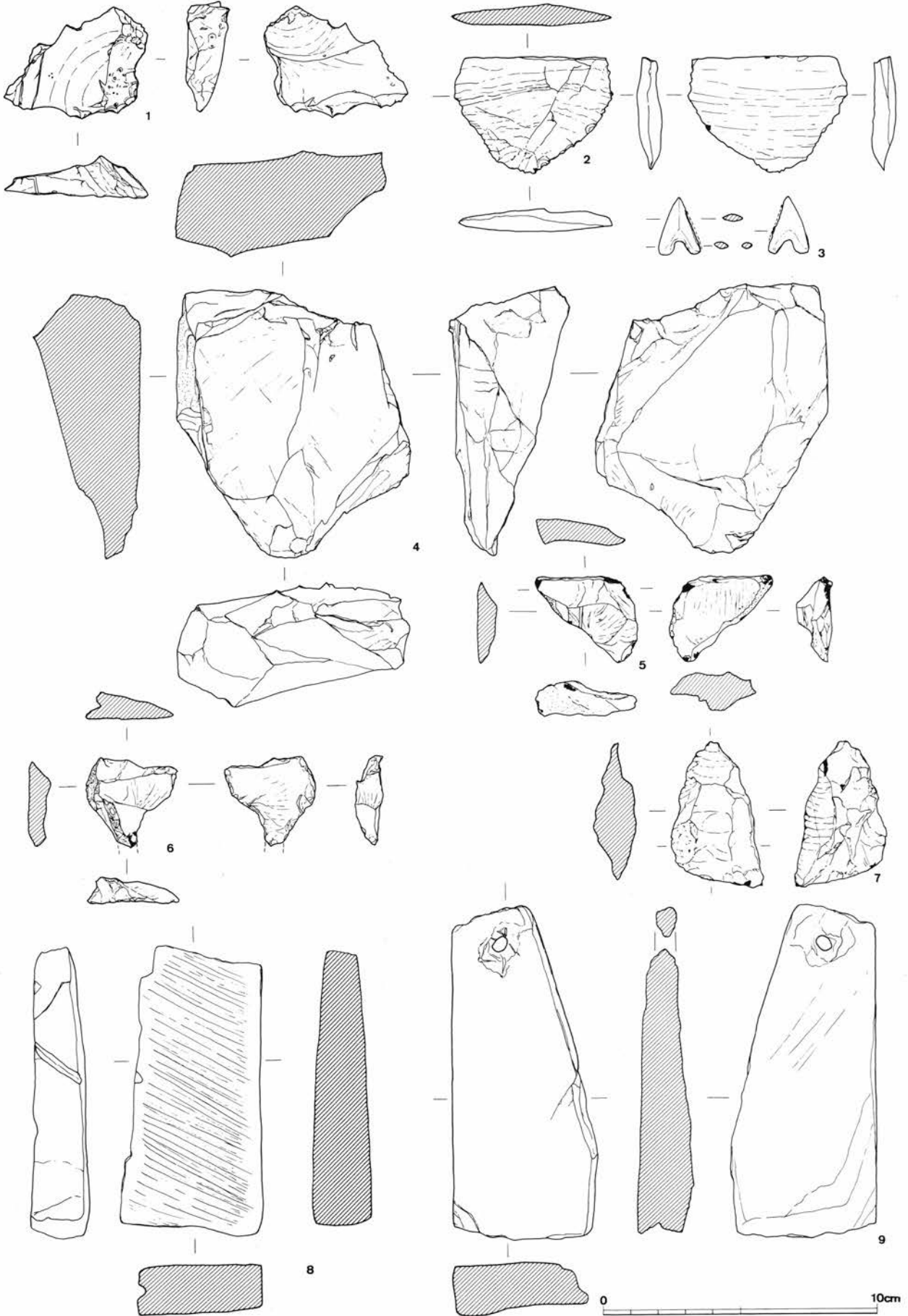
S K 20~25実測図

1. 暗灰黄色細砂質土 2. 暗灰黄色細砂質土 3. 暗灰黄色細砂質土混細礫 4. 暗灰黄色細砂質土
 5. 暗灰色粘土 (Fe沈着) 6. 暗灰色細砂質土 (Fe沈着) 7. 暗灰色砂礫 8. 灰色粘質土 9. 暗灰色粘質土
 10. 暗灰色砂礫 11. 灰色シルト混礫多量 12. 黄褐色細砂質土 13. 暗灰黄色細砂質土 14. 暗灰黄色粗砂
 15. 暗灰色砂礫 16. 灰色砂質土 (Fe沈着) 17. 灰色砂質土混灰色シルトブロック 18. 灰色砂質土混礫
 19. 灰色細砂質土 20. 暗灰色細砂質土



S D 02・03実測図

- 1. 灰褐色細砂質土 2. 黄褐色粗砂 3. 黄褐色砂礫 4. 明黄灰色細砂質土 5. 淡黄色粗砂
- 6. 淡褐色微砂 7. 明黄灰色粗砂 8. 明黄灰色微砂 9. 灰黄色微砂 10. 灰黄色シルト
- 11. 黄灰色粘質粗砂 12. 暗黄灰色砂礫 13. 黄灰色粗砂 14. 灰色細砂質土(鉄分) 15. 灰色砂質シルト
- 16. 灰色微砂 17. 灰色砂礫 18. 灰黄色細砂質土 19. 暗灰色細砂質土 20. 灰黄色粗砂混シルト
- 21. 灰色粗砂 22. 灰黄色粗砂 23. 暗黄褐色細砂質土 24. 暗黄褐色微砂 25. にぶい黄褐色粘質粗砂
- 26. 暗黄褐色砂質土 27. にぶい黄褐色粘質土 28. 整地土 29. 暗灰色砂質土 30. 暗灰色砂礫土
- 31. 35と37の混入 32. 暗黄灰色細砂質土 33. 灰褐色粘質土(Mn斑多い) 34. 灰色細砂質土混砂礫
- 35. 暗灰色粘質土(Fe沈着)砂礫混入 36. 暗灰色粘土 37. 灰色粘質土 38. 明灰色粘質土混砂礫
- 39. 灰色砂質土混砂礫 40. 淡灰色粗砂 41. 灰黒色粘土 42. 黒褐色粘土 43. 黒色粘土
- 44. 暗灰色粘土混粗砂 45. 緑青色粘土混黒斑粗砂



石製品実測図

1. S K07 2. 19号埴輪棺 3. 6号墳 4. S K01 5・6・7. 包含層
8. S D03 9. S K19



(1)調査地遠景（北西から）



(2)調査地遠景（北東から）

(1)瓦谷古墳群遠景
(南西から)



(2)瓦谷1号墳後円部
調査前全景(西南西から)



(3)瓦谷1号墳後円部
調査前風景(北東から)





調査地全景（空撮写真、上が北）



瓦谷1号墳全景（空撮写真、上が北）



調査地全景（空撮写真、上が西）



(1)瓦谷1号墳全景(南から)



(2)瓦谷1号墳全景(西から)



(3)瓦谷1号墳後円部全景(北から)



(1)瓦谷1号墳後円部
南北墳丘セクション断面
(北西から)



(2)瓦谷1号墳後円部
東西墳丘セクション断面
(西半部、南西から)

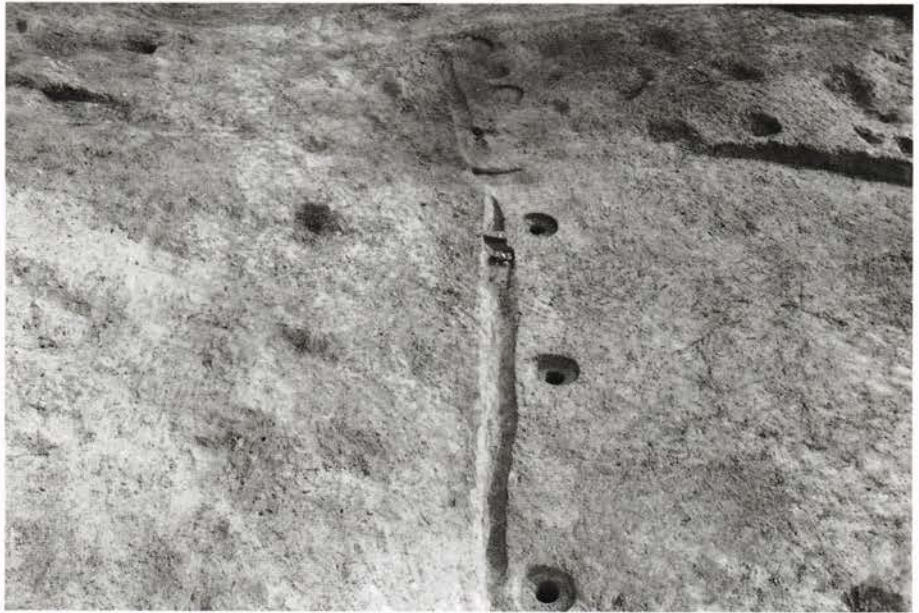


(3)瓦谷1号墳後円部
東西墳丘セクション断面
(東半部、北東から)

(1)瓦谷1号墳後円部
墳丘裾ピット列・溝
(西から)



(2)瓦谷1号墳後円部
墳丘裾ピット列・溝
(北から)



(3)瓦谷1号墳後円部
墳丘裾ピット (Pit-1)・溝
(東から)





(1)瓦谷1号墳主体部調査状況
(盗掘坑掘削段階、南から)



(2)瓦谷1号墳主体部調査状況
(第1主体被覆粘土上面掘削段階、南から)

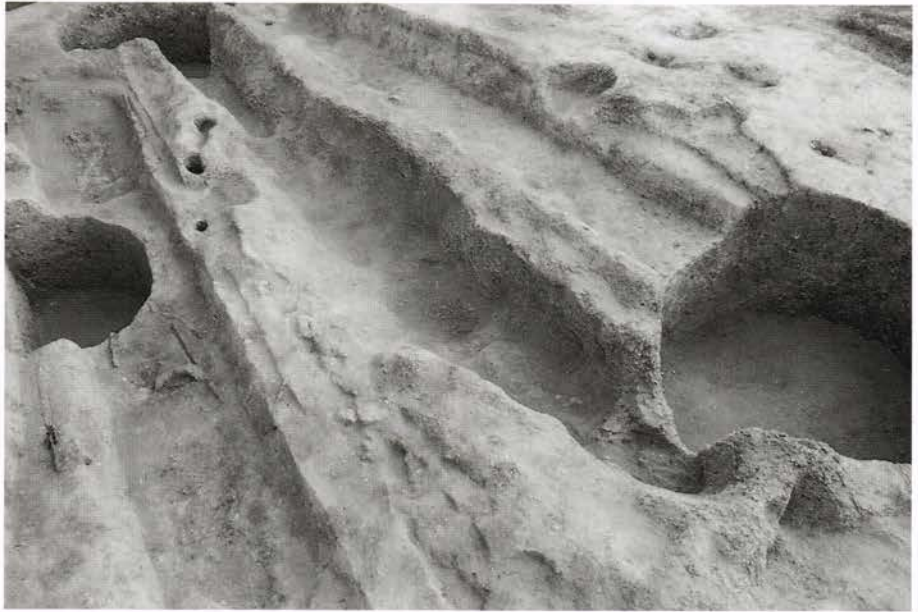


(3)瓦谷1号墳主体部調査状況
(第1主体被覆粘土上面1
段下げ段階、南西から)

(1)瓦谷1号墳主体部調査状況
(第1主体北小口部被覆粘土
土検出状況、東北東から)



(2)瓦谷1号墳主体部調査状況
(第1主体被覆粘土検出状
況、北北東から)



(3)瓦谷1号墳主体部調査状況
(第1主体棺内陥没土除去
段階、南から)





(1)瓦谷1号墳主体部調査状況
(第1主体棺内陥没土除去
段階、南から)



(2)瓦谷1号墳主体部調査状況
(第1主体・第2主体完掘
段階、南から)



(3)瓦谷1号墳主体部調査状況
(第1主体・第2主体完掘
段階、西から)

(1)瓦谷1号墳第1主体
北小口部半掘状況
(南西から)



(2)瓦谷1号墳第1主体
北小口部縦断面
(小口板の状況、西から)



(3)瓦谷1号墳第1主体
北小口部棺床部分断ち割り
状況(南西から)





(1)瓦谷1号墳第1主体
断ち割り横断面（北から）



(2)瓦谷1号墳墳丘
断ち割り断面
（主体部より東側の墳丘盛り土部分、北西から）



(3)瓦谷1号墳墳丘断ち割り
断面
（主体部より西側の墳丘盛り土部分、北東から）

(1)瓦谷1号墳第1主体
北小口部完掘状況(南から)



(2)瓦谷1号墳第1主体
棺内北端の鉄製甲冑ほか
出土状況(上が東)



(3)瓦谷1号墳第1主体
棺内北端の鉄製甲冑ほか
出土状況(上が東)





(1)瓦谷1号墳第1主体
棺内南半部の遺物出土状況
(北から)

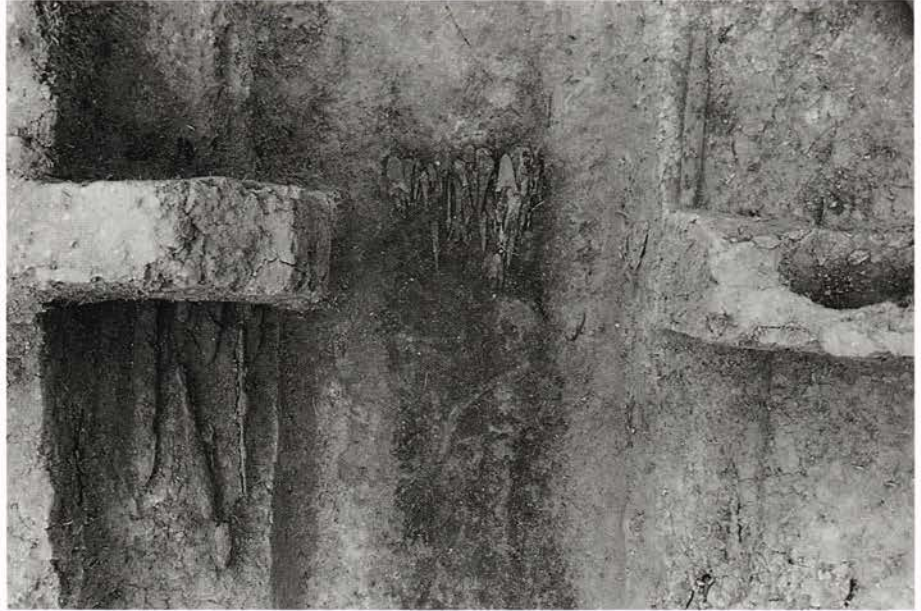


(2)瓦谷1号墳
第1主体・第2主体南半部
の遺物出土状況(南から)



(3)瓦谷1号墳第1主体
棺内南半部の鏃群出土状況
(上が北)

(1)瓦谷1号墳第1主体
南半部の遺物出土状況
(上が北)



(2)瓦谷1号墳第1主体
南半部の遺物出土状況
(上が西)



(3)瓦谷1号墳第1主体
西長側側鉄槍出土状況
(上が西)





(1)瓦谷1号墳第2主体全景
(棺底面まで掘削した段階、
南から)



(2)瓦谷1号墳第2主体
遺物出土状況
(北半部、南から)



(3)瓦谷1号墳第2主体
遺物出土状況
(南半部、南から)

(1)瓦谷1号墳第2主体全景
(完掘段階、南から)



(2)瓦谷1号墳第2主体
南小口の状況(南から)



(3)瓦谷1号墳第2主体
棺内陥没土断面
(横断面、北から)





(1)瓦谷1号墳第2主体北副室
遺物出土状況(東から)



(2)瓦谷1号墳第2主体
主室銅鏡出土状況(東から)



(3)瓦谷1号墳第2主体
主室人骨(頭骨の一部)
出土状況(上が北)

(1)瓦谷1号墳第2主体南半部
遺物出土状況(西から)



(2)瓦谷1号墳第2主体南副室
鞞口縁部付近出土状況
(上が南)



(3)瓦谷1号墳第2主体南副室
鞞内収納の鏃類出土状況
(銅鏃が出土する面、上が南)





(1)瓦谷1号墳第2主体
棺外遺物出土状況
(鉄槍の穂先と柄、上が西)



(2)瓦谷1号墳第2主体
棺外遺物出土状況
(鉄槍・鉄矛、上が西)



(3)瓦谷1号墳第2主体
棺外遺物出土状況
(奥が鉄矛、手前が鉄槍、
上が西)



(1)瓦谷2号墳・2～4号
埴輪棺検出状況（北から）



(2)瓦谷2号墳全景・1～4号
埴輪棺検出状況（東から）



(3)瓦谷2号墳・1～4号
埴輪棺検出状況（南東から）



(1)瓦谷2号墳全景・1～4号
埴輪棺検出状況
(東南東から)

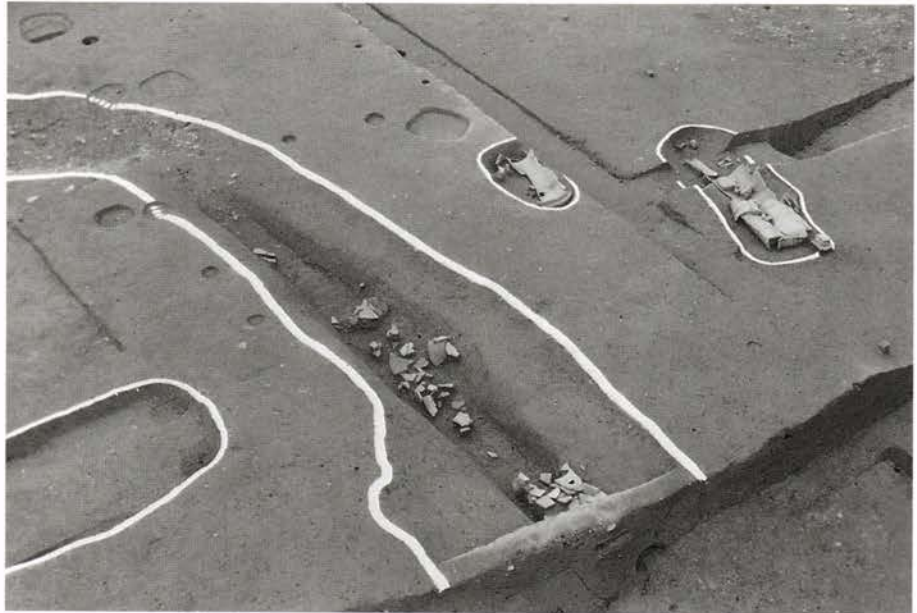


(2)瓦谷2号墳全景・1～3号
埴輪棺検出状況(西から)



(3)瓦谷2号墳全景(北から)

(1)瓦谷2号墳西辺周溝・2～
3号墳輪棺検出状況
(北東から)

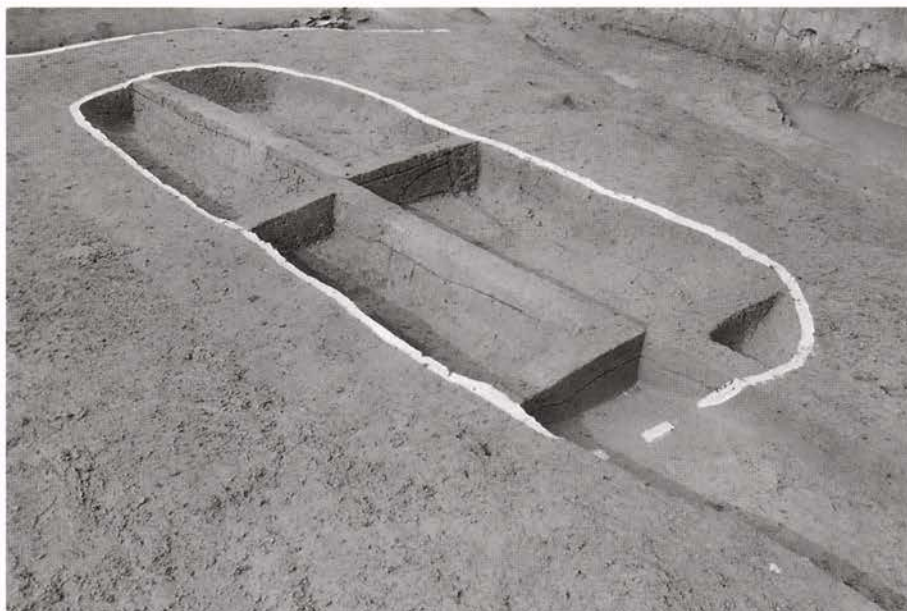


(2)瓦谷2号墳西辺周溝
深掘り部遺物出土状況
(東から)

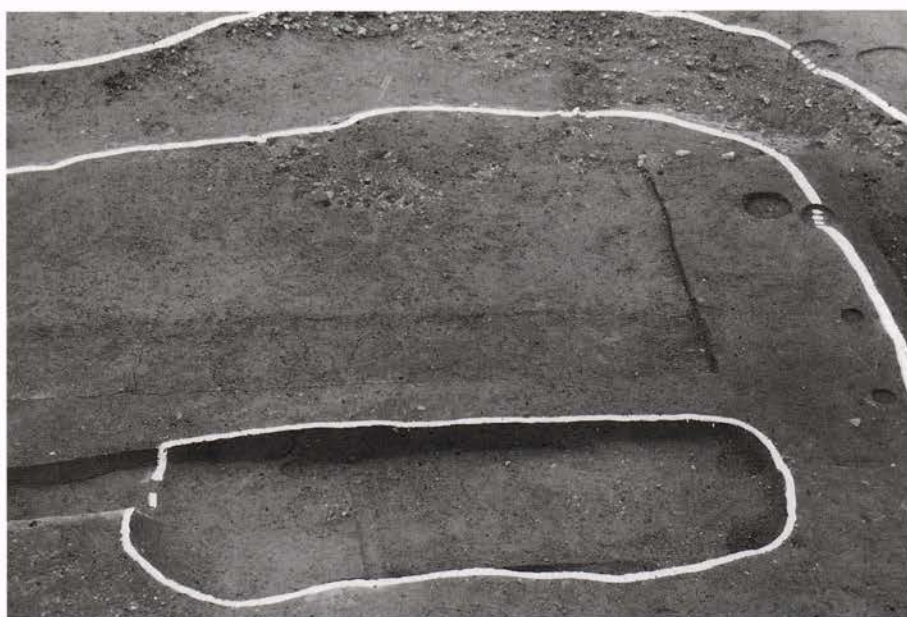


(3)瓦谷2号墳西辺周溝
完掘状況(南から)





(1)瓦谷 2 号墳中心埋葬施設
墓壇内埋土の状況
(南東から)

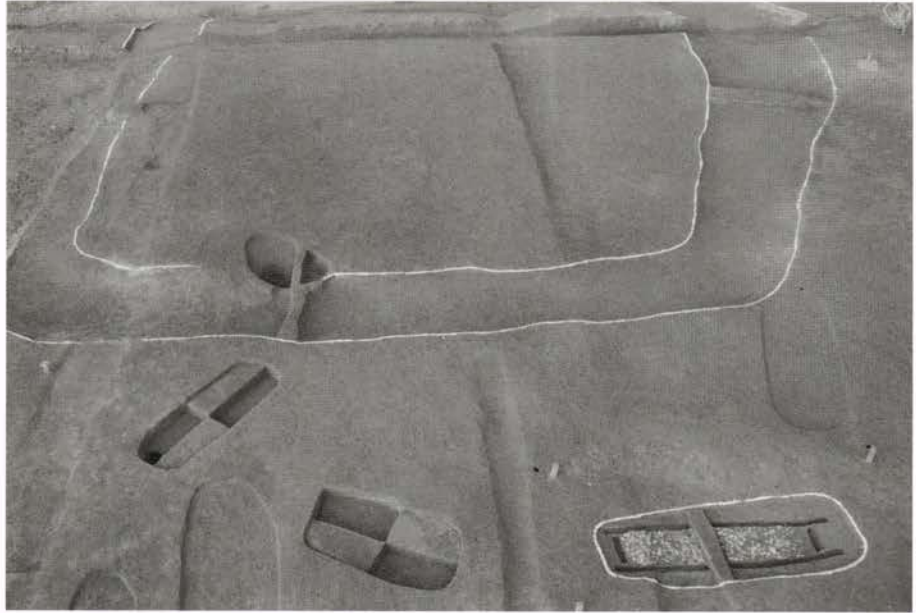


(2)瓦谷 2 号墳
中心埋葬施設全景 (北から)

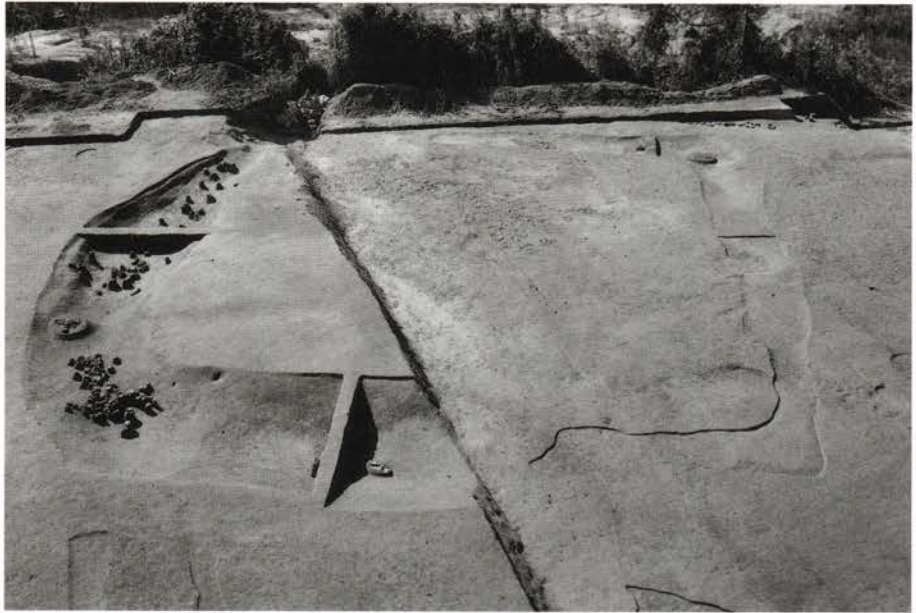


(3)瓦谷 2 号墳
中心埋葬施設全景 (東から)

(1)瓦谷 3 号墳完掘状況
(南から)



(2)瓦谷 5 号墳完掘状況
(北から)



(3)瓦谷 5 号墳北東コーナー
遺物出土状況 (西から)





(1)瓦谷4・6・7号墳
完掘状況(西から)



(2)瓦谷4号墳全景(西から)



(3)瓦谷4号墳西辺周溝内
遺物出土状況(東から)

(1)瓦谷 4 号墳東辺周溝内
遺物出土状況（西から）



(2)瓦谷 6 号墳完掘状況
（北東から）

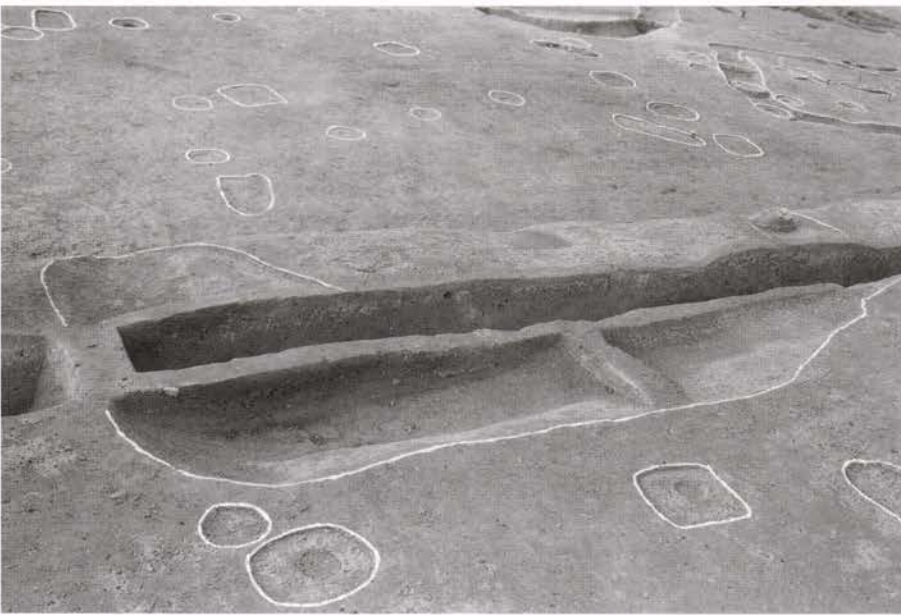


(3)瓦谷 6 号墳南東辺周溝内
遺物出土状況（北東から）





(1)瓦谷6・7・8号墳
完掘状況(上が西)



(2)瓦谷8号墳完掘状況
(東から)

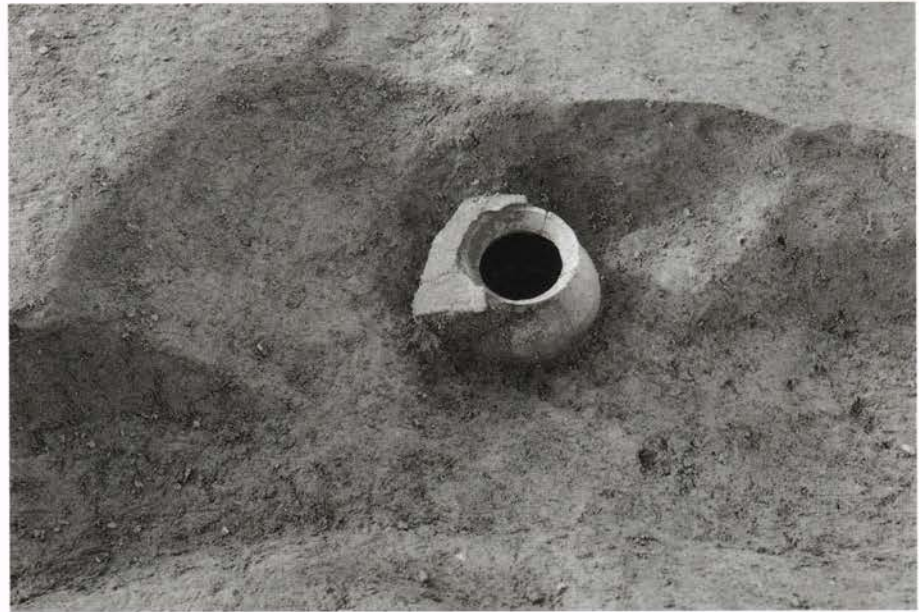


(3)瓦谷8号墳周溝内
遺物出土状況(北から)

(1)瓦谷9号墳完掘状況
(東から)



(2)瓦谷9号墳西辺周溝内
SX03出土状況(東から)



(3)瓦谷10号墳完掘状況
(上が北)





(1) 1号埴輪棺検出状況
(南小口閉塞埴輪を残した
段階、東から)



(2) 1号埴輪棺全景 (東から)



(3) 1号埴輪棺全景 (北から)



(1) 2号埴輪棺検出状況
(北半部、東から)



(2) 2号埴輪棺全景 (北から)



(3) 2号埴輪棺検出状況
(被覆破片・閉塞埴輪を除去した段階、北から)



(1) 3号埴輪棺全景（東から）



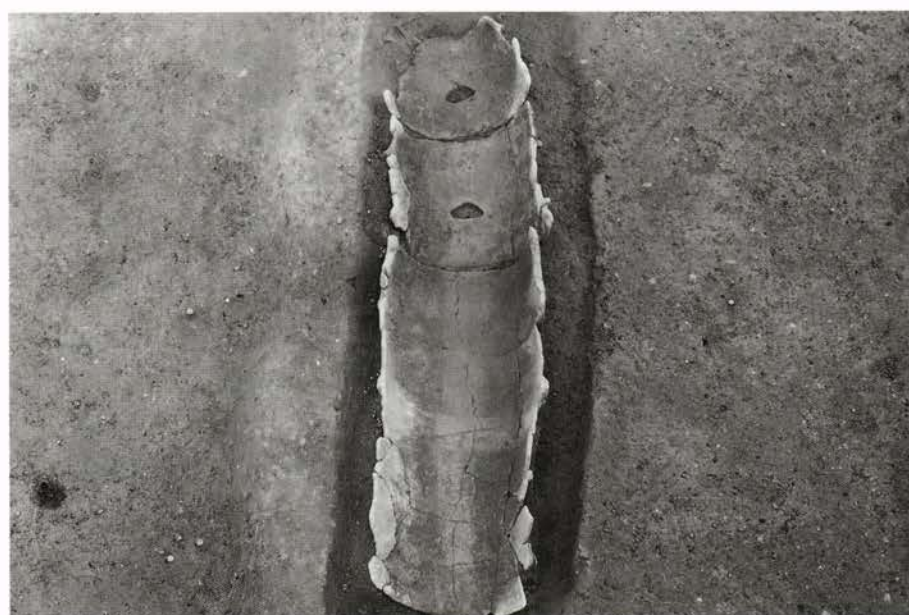
(2) 3号埴輪棺全景（北から）



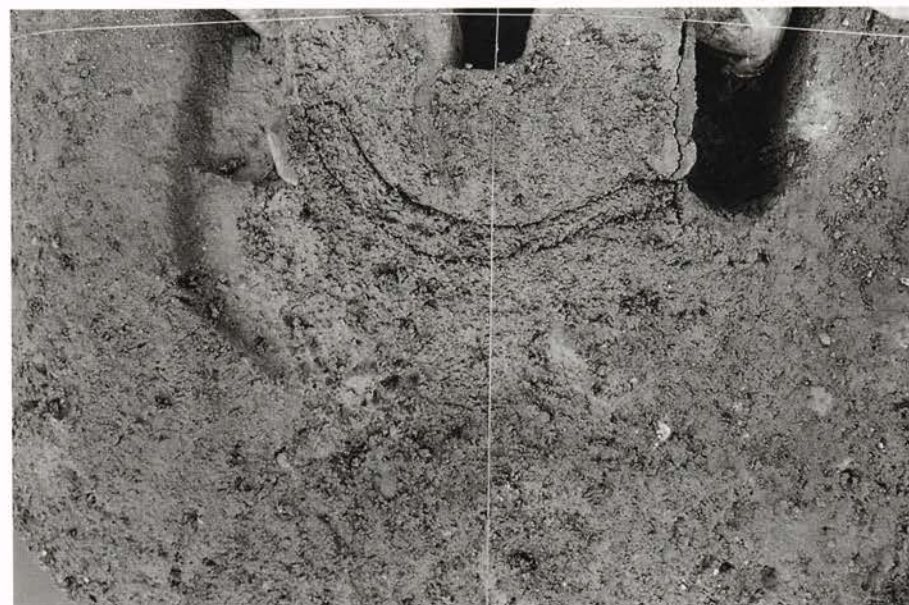
(3) 3号埴輪棺全景（南から）



(1) 4号埴輪棺全景 (東から)



(2) 4号埴輪棺全景 (南から)



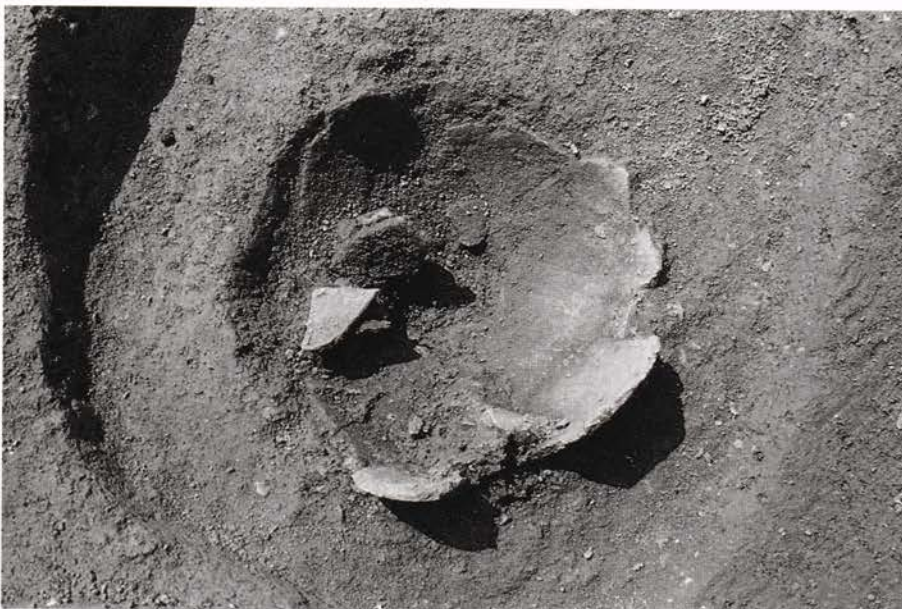
(3) 4号埴輪棺
南小口の閉塞痕跡
(線で明示してある土色
の変化、上が北)



(1) S X02・4号埴輪棺
検出状況（北西から）



(2) S X02全景（西北西から）



(3) S X02検出状況
（北北東から）



(1) 5号埴輪棺全景（北東から）



(2) 5号埴輪棺検出状況
（南半部の攪乱埴輪除去段階、北東から）



(3) 5号埴輪棺検出状況
（南半部の埴輪を除去した段階、北西から）



(1) 6号埴輪棺全景（南東から）



(2) 6号埴輪棺全景（南西から）



(3) 6号埴輪棺棺本体全景
（上が南東）



(1) 7号埴輪棺全景（北西から）



(2) 7号埴輪棺側面状況
（北東から）



(3) 7号埴輪棺墓境内
埋土堆積状況（北西から）



(1) 8号埴輪棺検出状況
(北から)



(2) 8号埴輪棺南半部
埴輪出土状況 (東から)

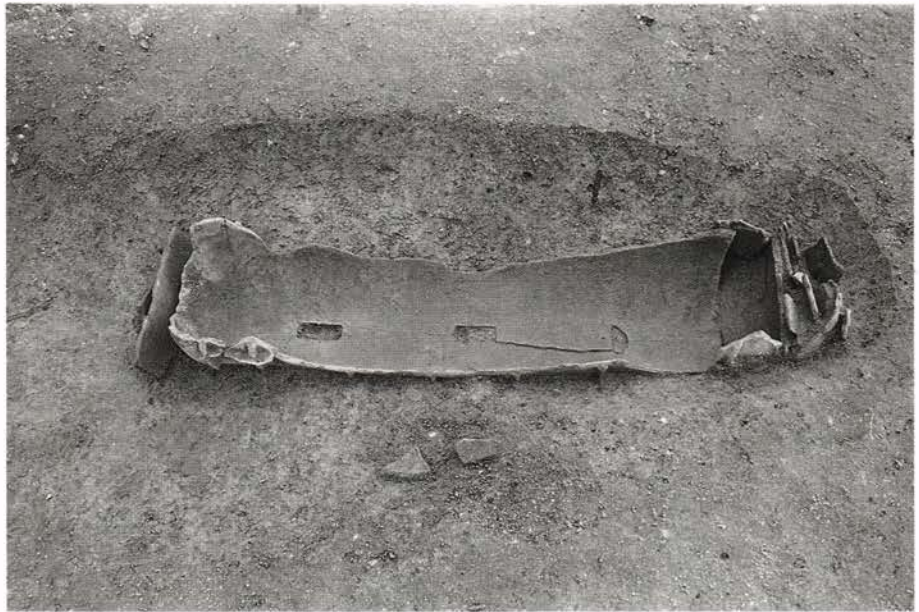


(3) 8号埴輪棺棺底検出状況
(東から)

(1)10号埴輪棺検出状況
(西から)



(2)10号埴輪棺完掘状況
(西から)



(3)10号埴輪棺北小口状況
(北から)





(1) 9号埴輪棺検出状況
(北から)



(2) 11号埴輪棺完掘状況
(北から)



(3) 13号埴輪棺完掘状況
(北から)

(1)12号埴輪棺検出状況
(北から)



(2)12号埴輪棺完掘状況
(北から)



(3)14号埴輪棺検出状況
(東から)





(1)16号埴輪棺検出状況
(東から)



(2)16号埴輪棺完掘状況
(東から)



(3)16号埴輪棺北小口完掘状況
(東から)



(1)15号埴輪棺検出状況
(南から)



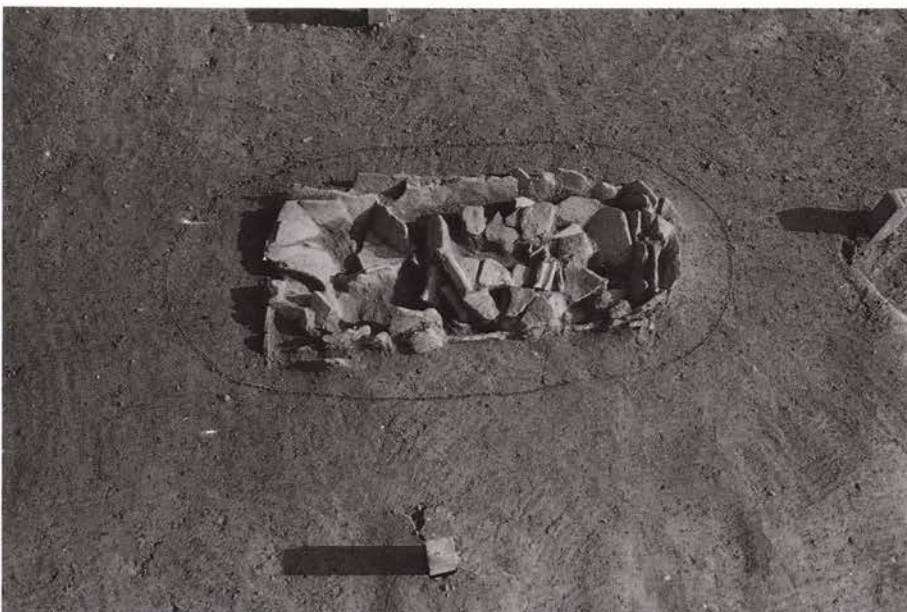
(2)17号埴輪棺検出状況
(北から)



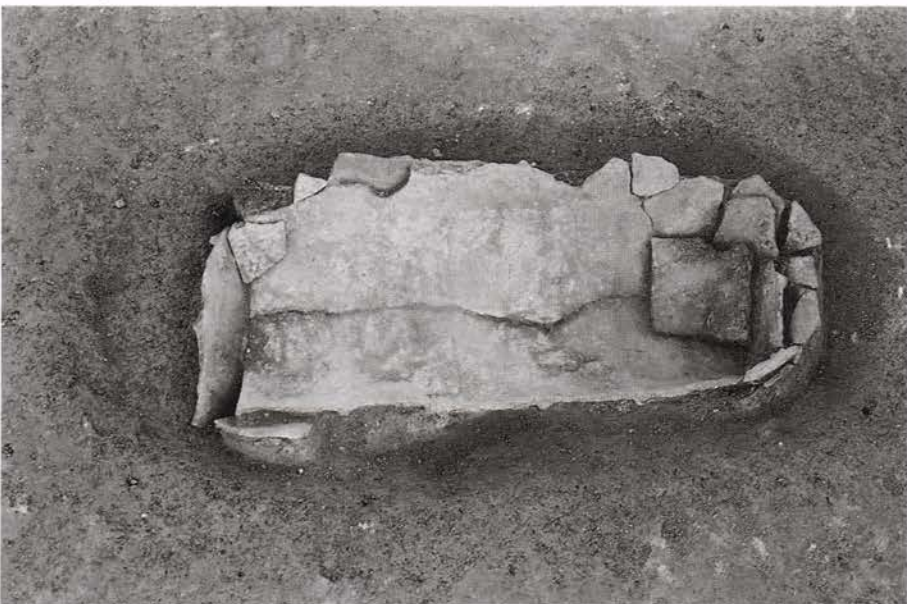
(3)17号埴輪棺完掘状況
(西から)



(1)18号埴輪棺検出状況
(北から)



(2)20号埴輪棺検出状況
(西から)

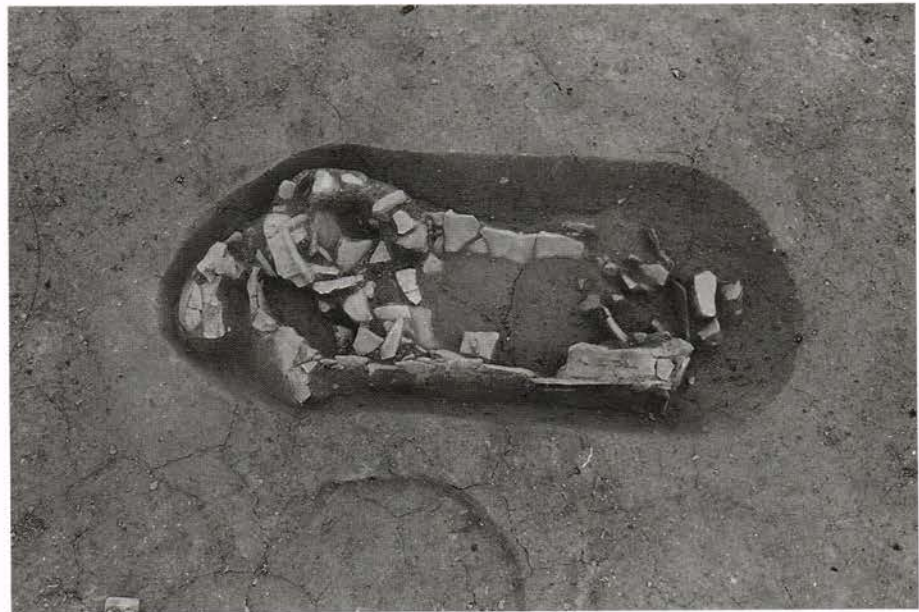


(3)20号埴輪棺完掘状況
(西から)

(1)19号埴輪棺検出状況
(北から)



(2)21号埴輪棺検出状況
(北西から)

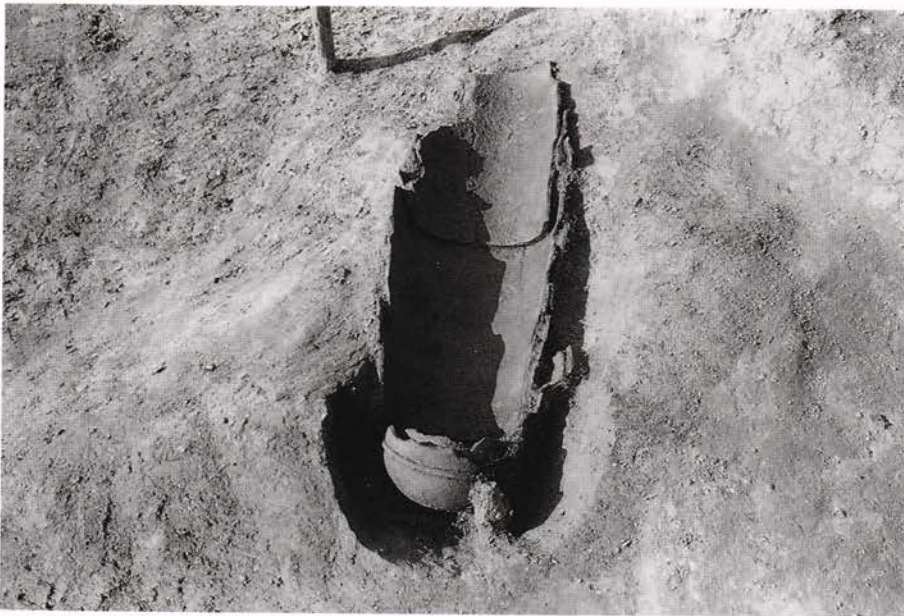


(3)21号埴輪棺完掘状況
(南東から)





(1)22号埴輪棺検出状況
(北東から)



(2)22号埴輪棺完掘状況
(東から)

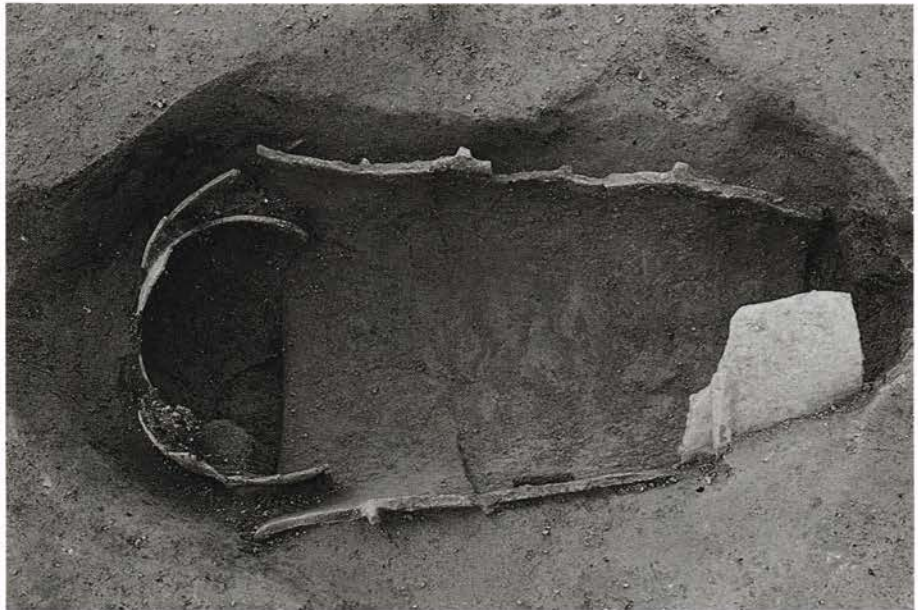


(3)22号埴輪棺鉄斧出土状況
(東から)

(1)23号埴輪棺検出状況
(北から)



(2)23号埴輪棺完掘状況
(東から)



(3)25号埴輪棺完掘状況
(南から)





(1)24号埴輪棺検出状況
(北から)



(2)24号埴輪棺掘削状況
(東から)



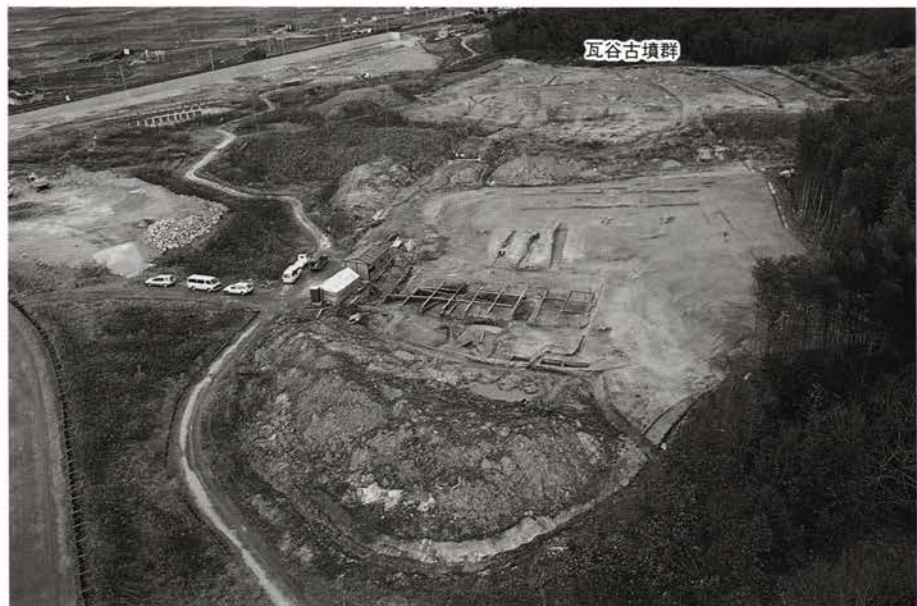
(3)24号埴輪棺完掘状況
(北から)



(1)南調査区遠景
(空撮写真、上が北)



(2)南調査区全景
(空撮写真、上が北)



(3)南調査区遠景
(空撮写真、南から)



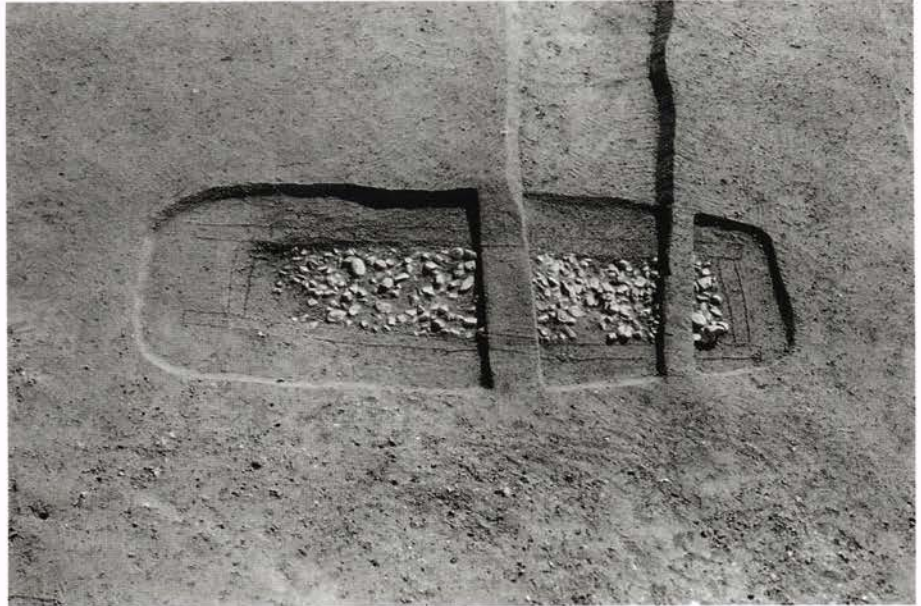
(1)26号埴輪棺検出状況
(南東から)



(2)26号埴輪棺完掘状況
(南東から)



(3)26号埴輪棺墓壙内出土鉄鍬
(東から)



(1)木棺墓検出状況（北から）



(2)木棺墓内土層堆積状況
（東から）



(3)木棺墓棺底検出状況
（北から）



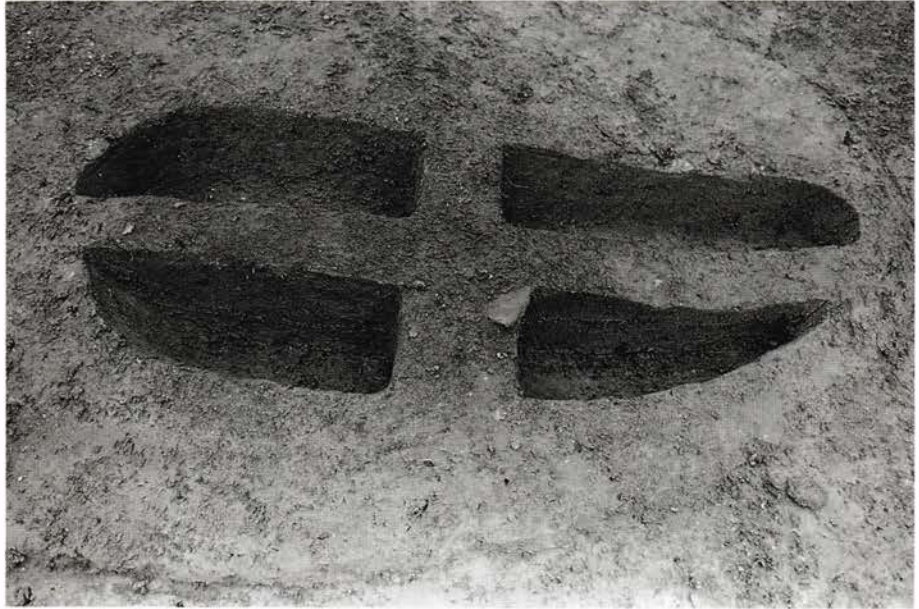
(1) S K04完掘状況 (北から)



(2) S K06掘削状況 (北から)



(3) S K10完掘状況 (南から)



(1) S K09掘削状況 (西から)



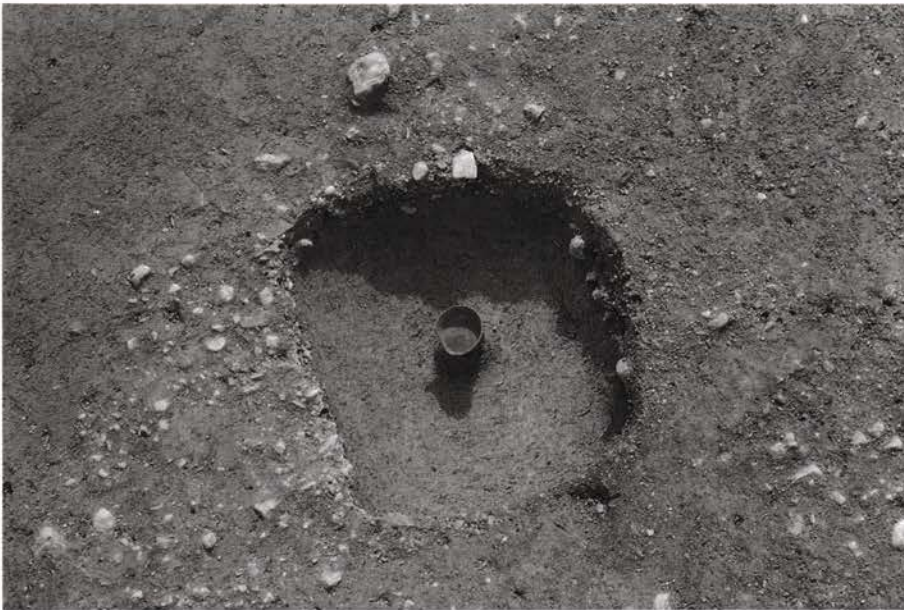
(2) 竪穴式住居跡掘削状況
(北から)



(3) 竪穴式住居跡完掘状況
(南から)



(1) S K13全景 (東から)



(2) S K13完掘状況 (北から)



(3) S K13遺物出土状況
(南東から)

(1) S B 01・02・03全景
(上が西)

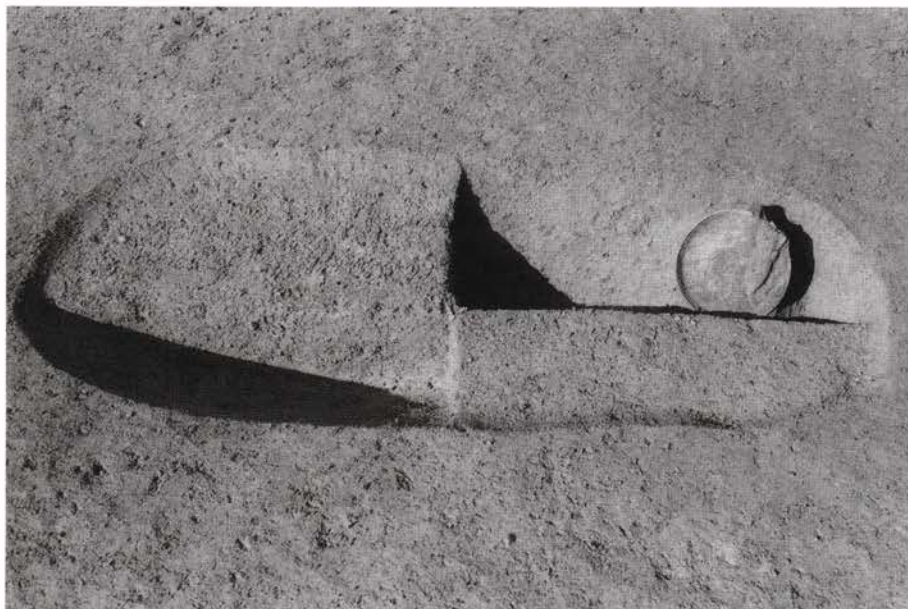


(2) S X 05掘削状況 (北西から)



(3) S X 05遺物出土状況
(北西から)





(1) S X 04掘削状況 (東から)



(2) S X 04遺物出土状況
(東から)



(3) S X 04完掘状況 (東から)



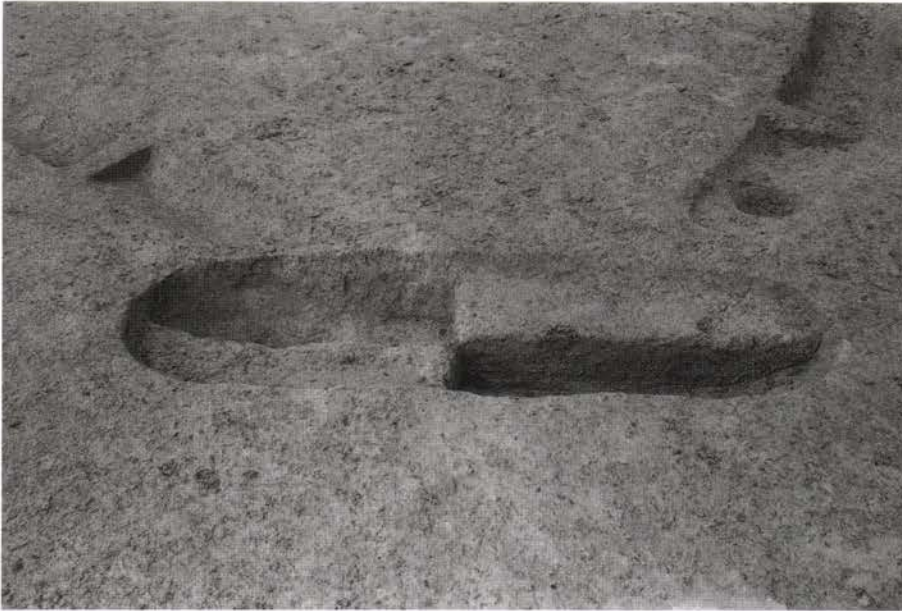
(1) S X06掘削状況 (東から)



(2) S X06遺物出土状況
(東から)



(3) S X06完掘状況 (東から)



(1) S K14掘削状況 (東から)



(2) S K16完掘状況 (東から)

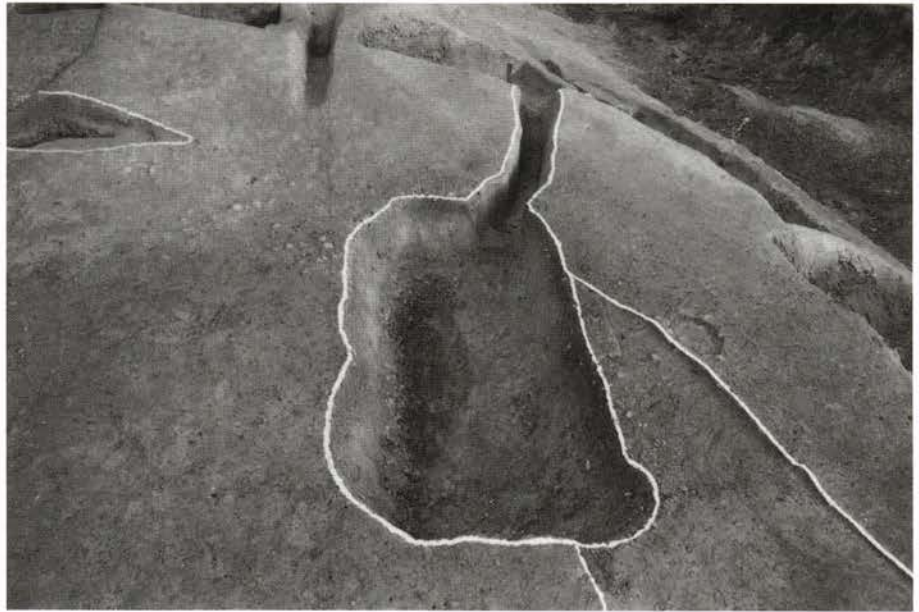


(3) S K17掘削状況 (北から)

(1) S K19掘削状況
(南東から)



(2) S K19完掘状況 (西から)



(3) S K21掘削状況 (西から)





(1) S D03東辺北部掘削状況
(北から)



(2) S D03北辺中央部
土層断面 (北から)



(3) S D03西辺掘削作業風景
(南東から)

(1) S D03南辺中央部
土層堆積状況（東から）

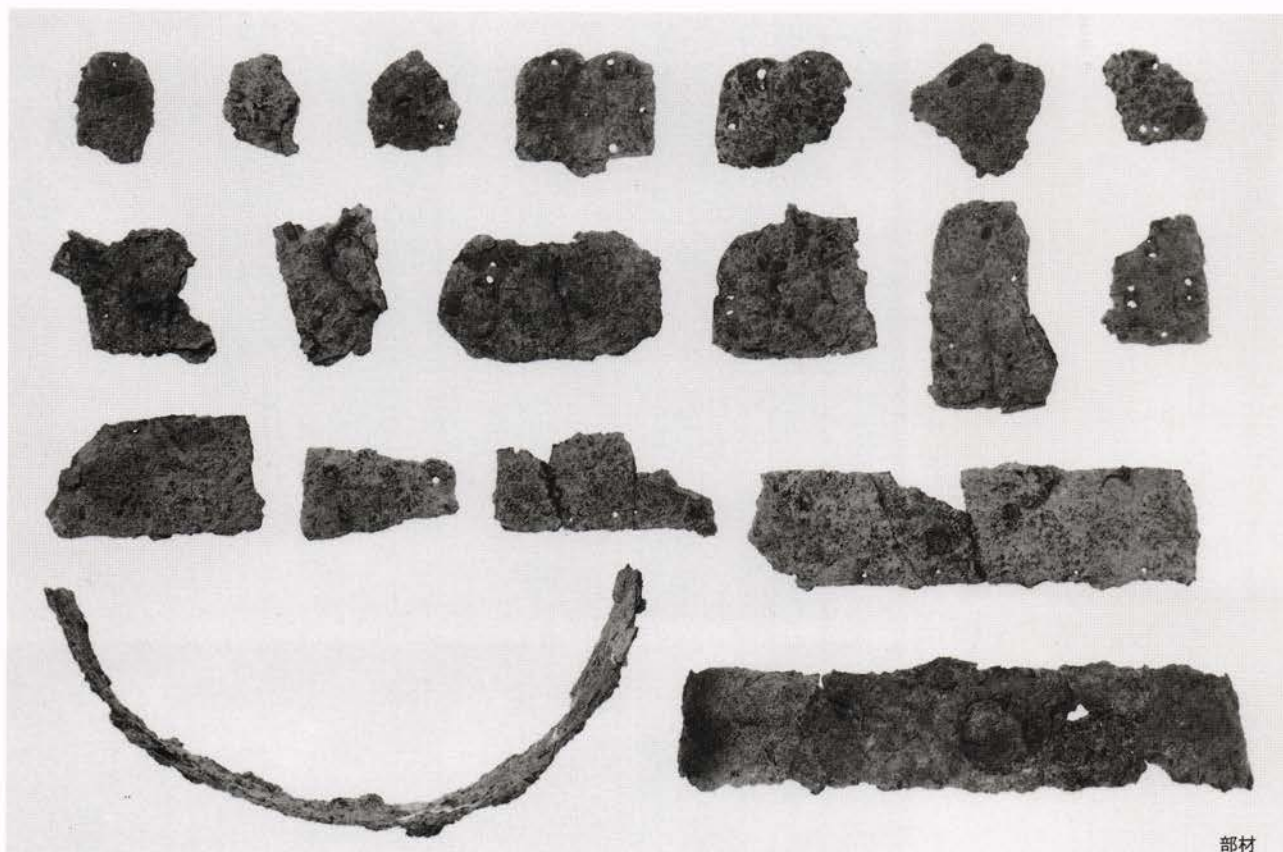


(2) S D03南辺中央部
土層堆積状況（西から）



(3) S D02・03全景（東から）





部材



上面



前面

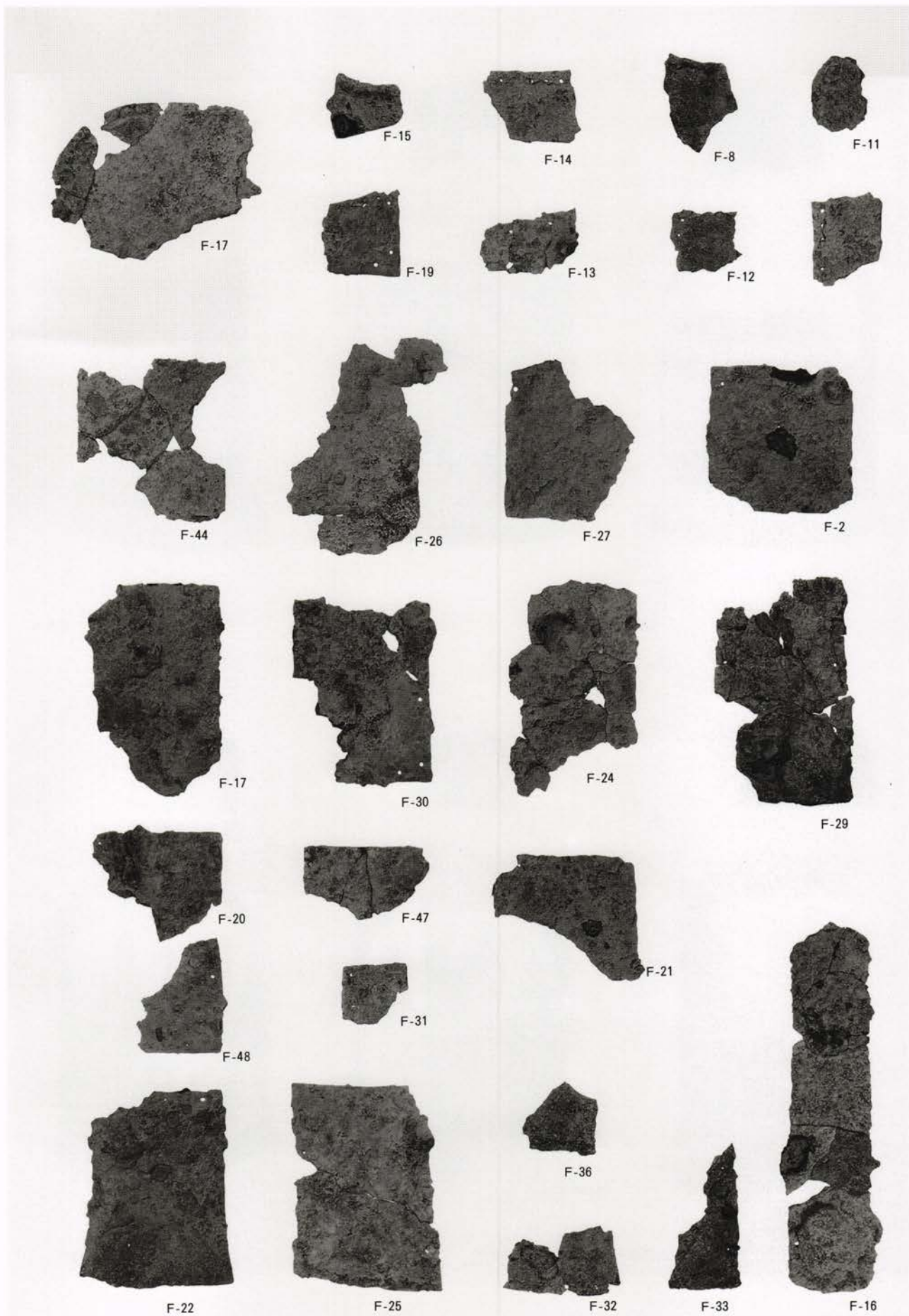


左側面



後面

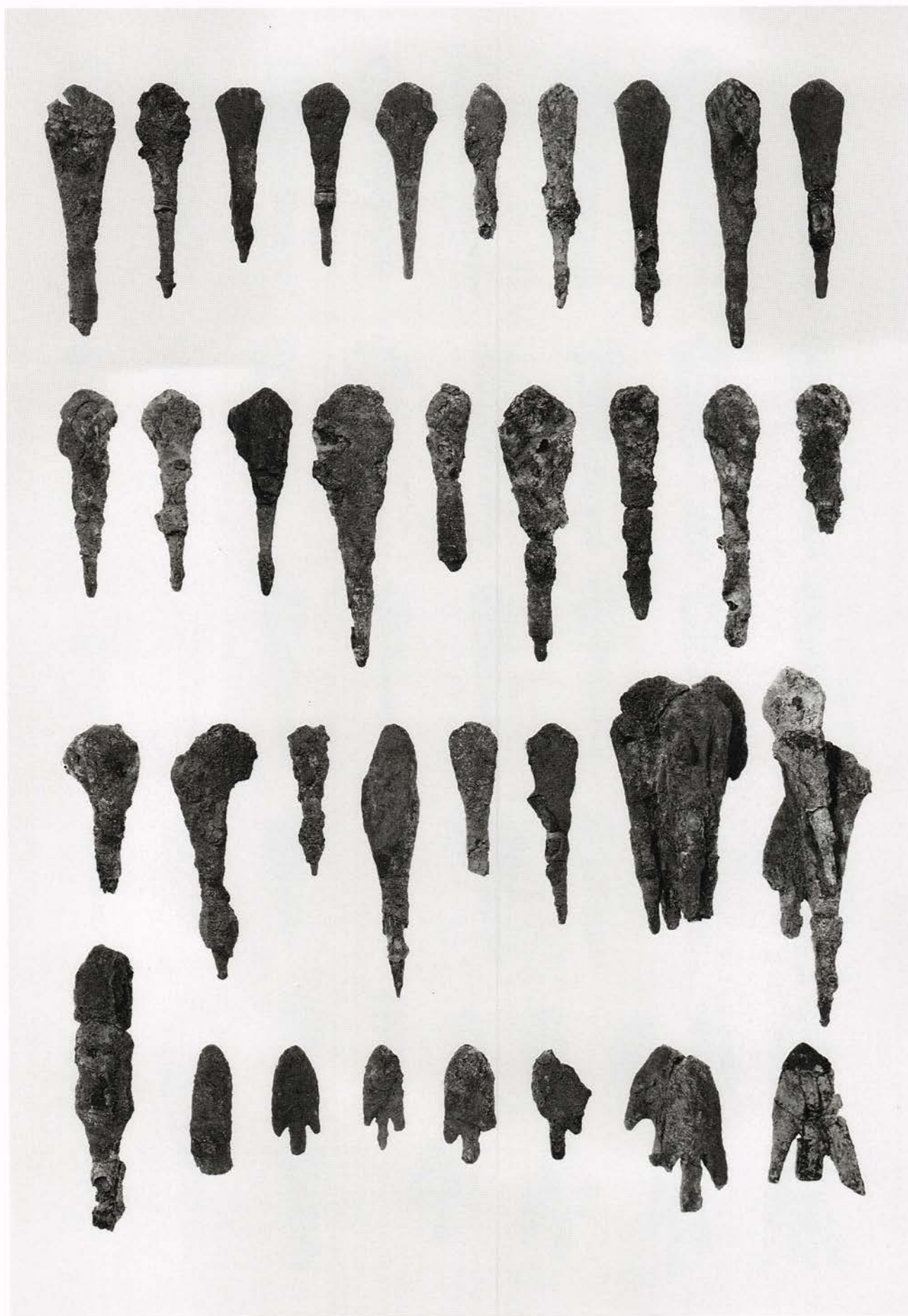
瓦谷1号墳出土遺物(1) 第1主体 小札革綴青



瓦谷1号墳出土遺物(2) 第1主体 方形板革綴短甲
(縮尺はおおよそ $\frac{1}{3}$ 。F-12・16・19・27は実測図に対して表裏が逆である。)



瓦谷1号墳出土遺物(3) 第1主体 方形板革綴短甲

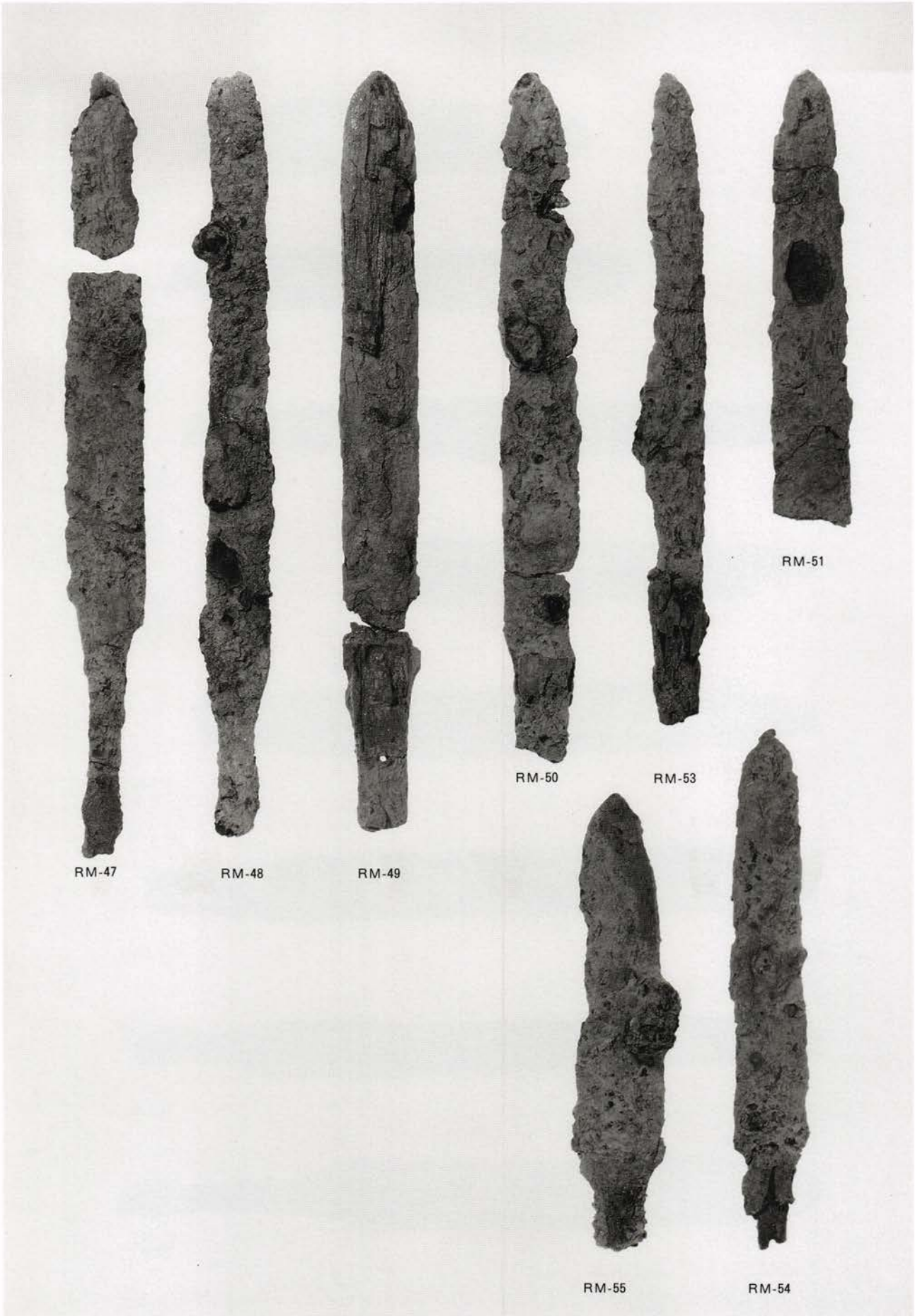


瓦谷1号墳出土遺物(4) 第1主体 鉄鏃(処理前)

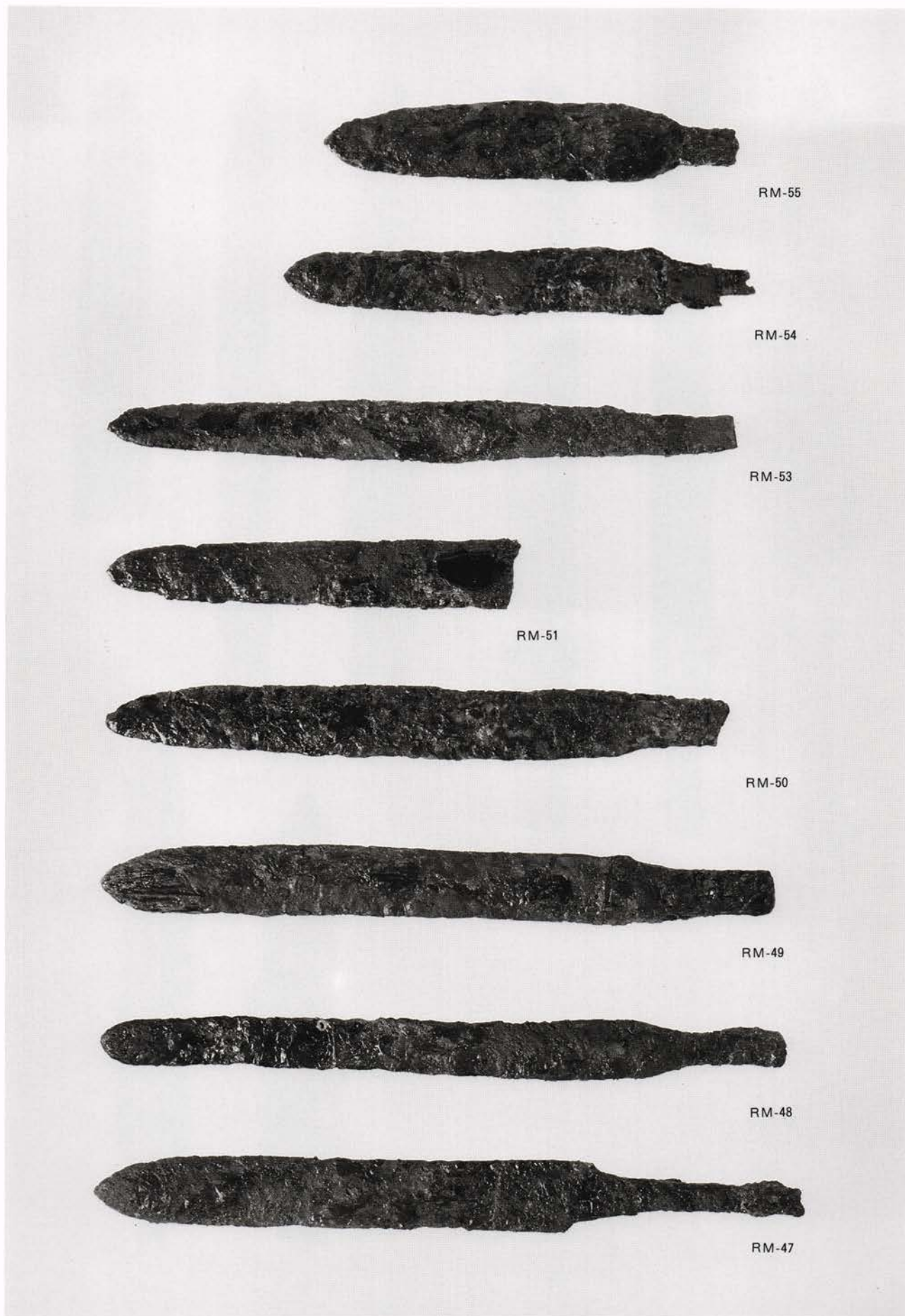


瓦谷1号墳出土遺物(5) 第1主体 鉄鏃(処理後)

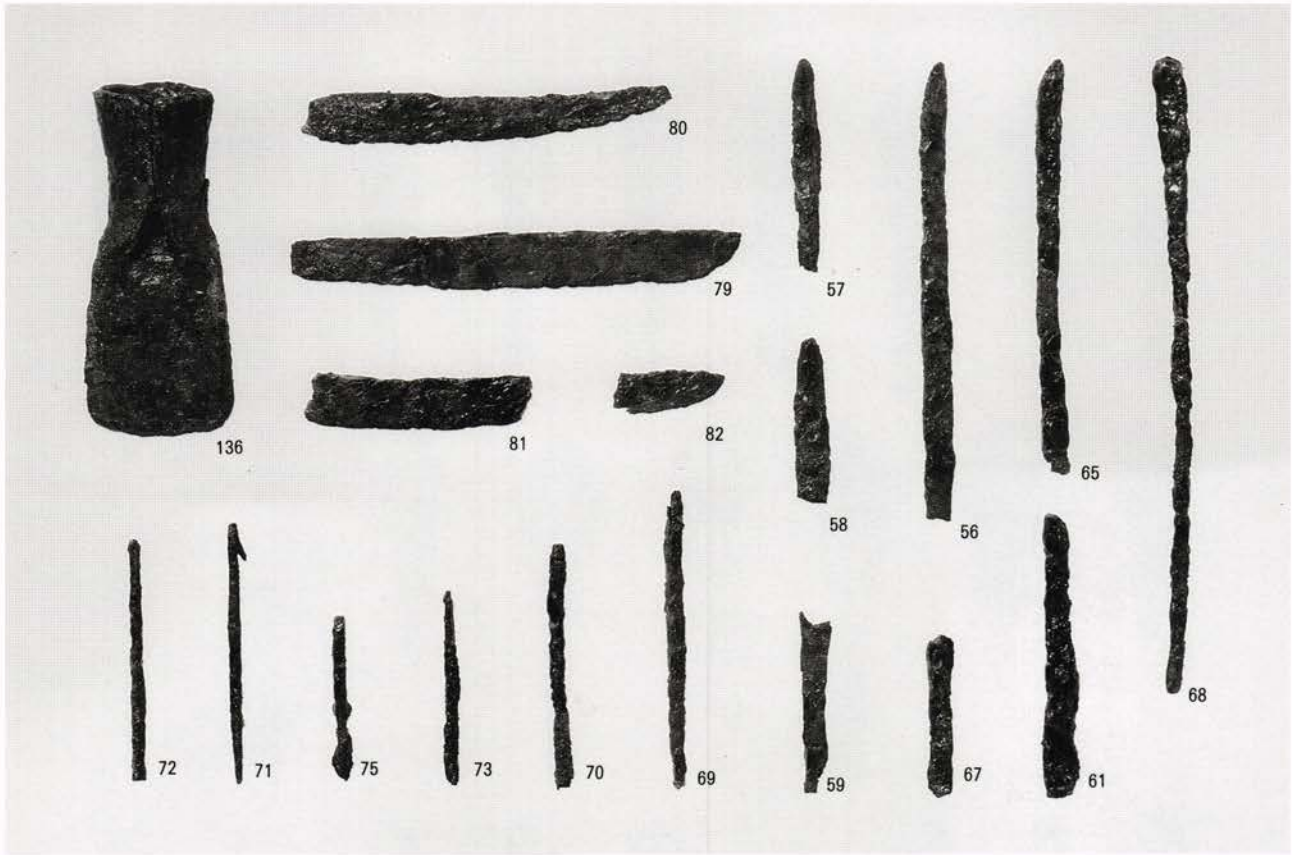
(番号は実測図のRM番号に対応)



瓦谷1号墳出土遺物(6) 第1主体 鉄槍・鉄剣(処理前)



瓦谷1号墳出土遺物(7) 第1主体 鉄槍・鉄剣(処理後)

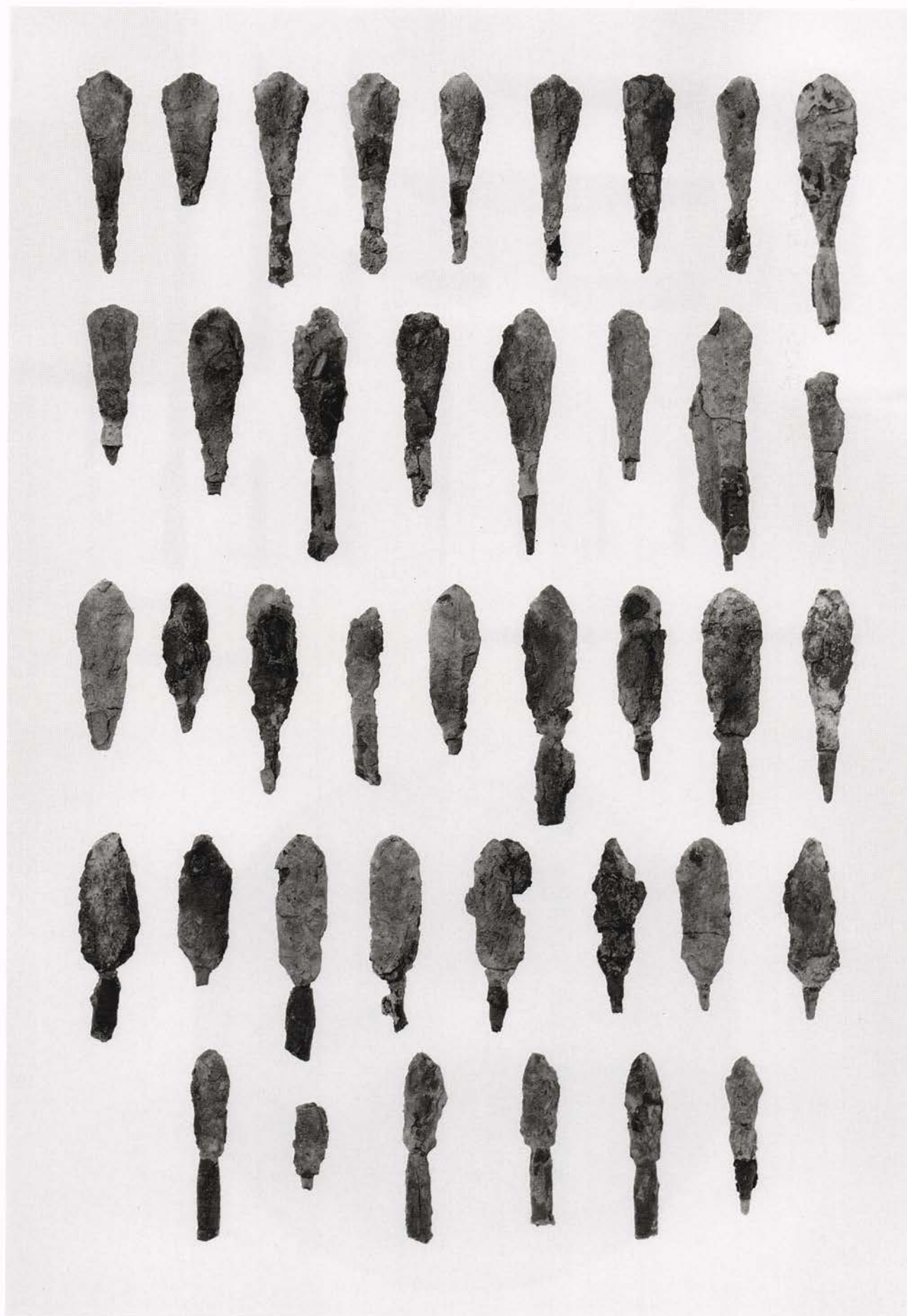


(1)瓦谷1号墳出土遺物(8) 主体部 鉄製工具・鉄製漁具

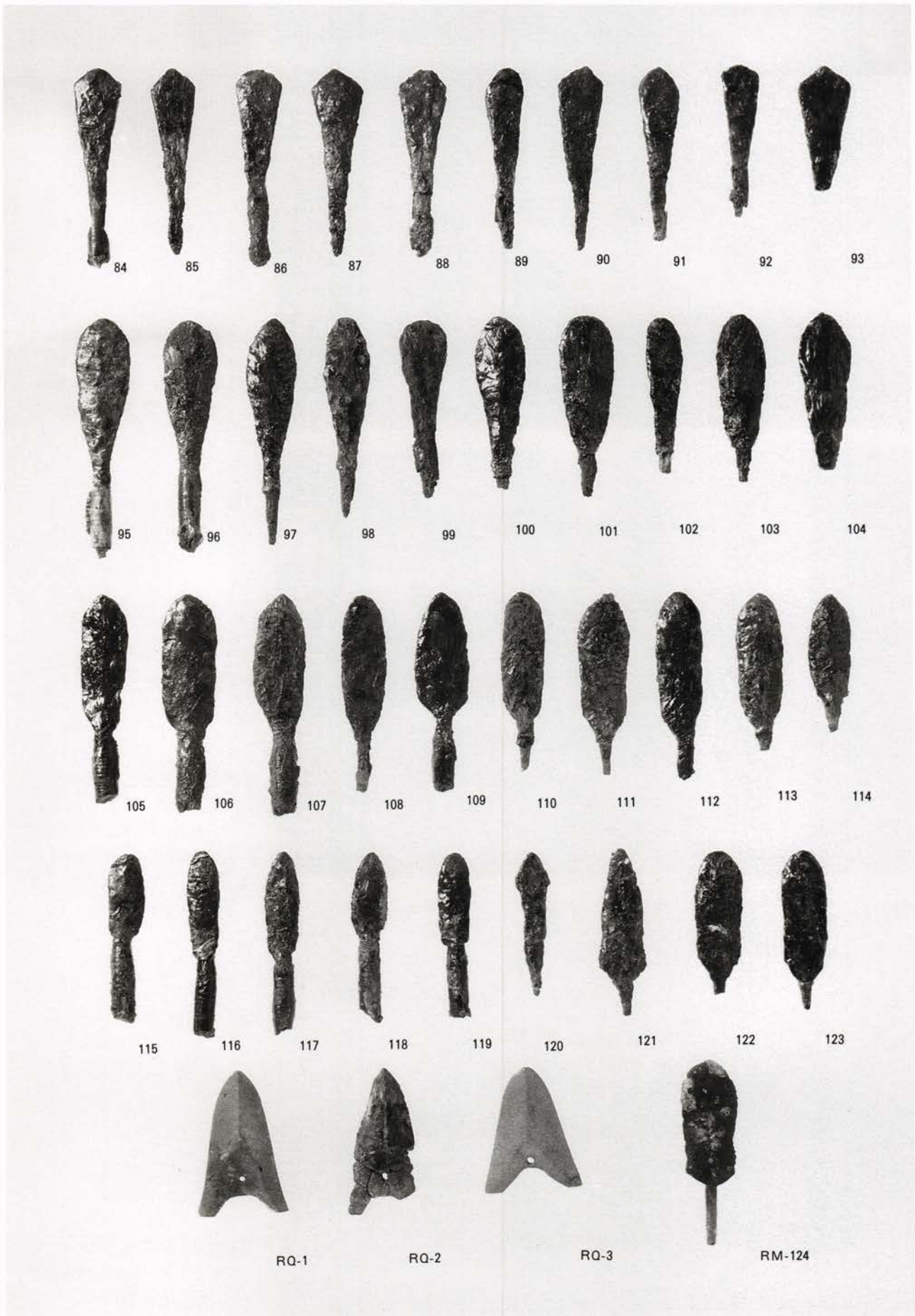
(番号は実測図のRM番号に対応)



(2)瓦谷1号墳出土遺物(9) 第2主体 銅鏡(獣首形鏡)



瓦谷1号墳出土遺物(10) 第2主体 鐵鏃(処理前)

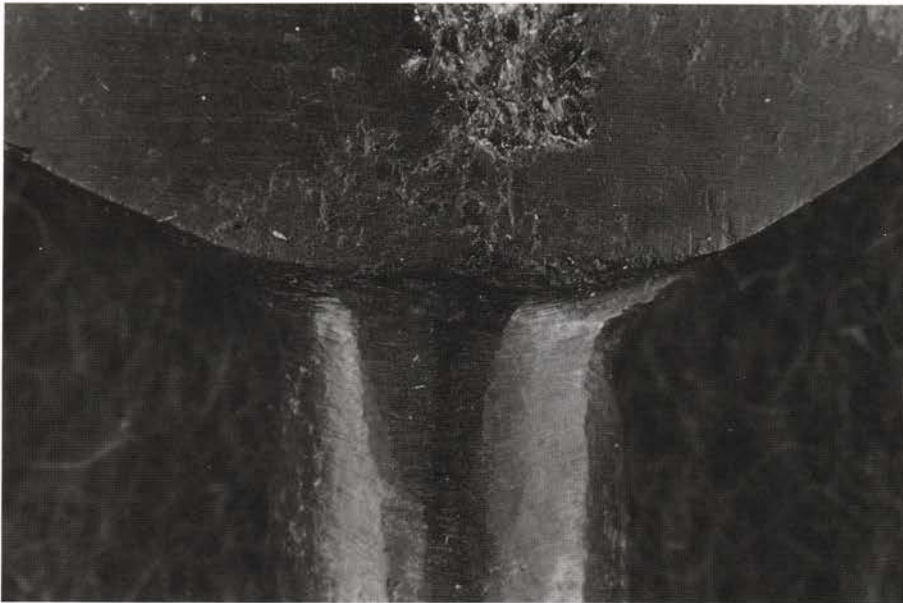


瓦谷1号墳出土遺物(11) 第2主体 鉄鏃・鏃形石製品・銅鏃(処理後)

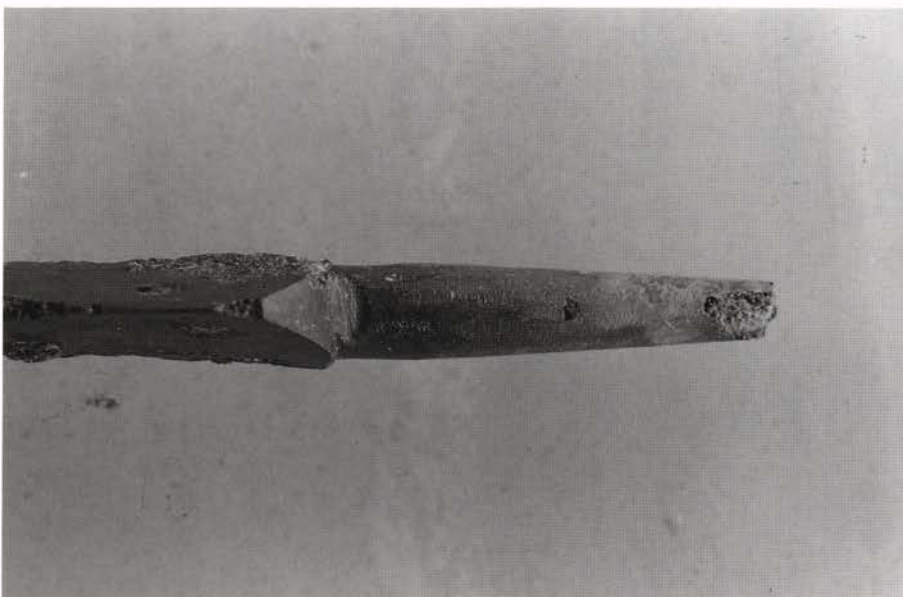
(鉄鏃の番号は実測図のRM番号に対応)



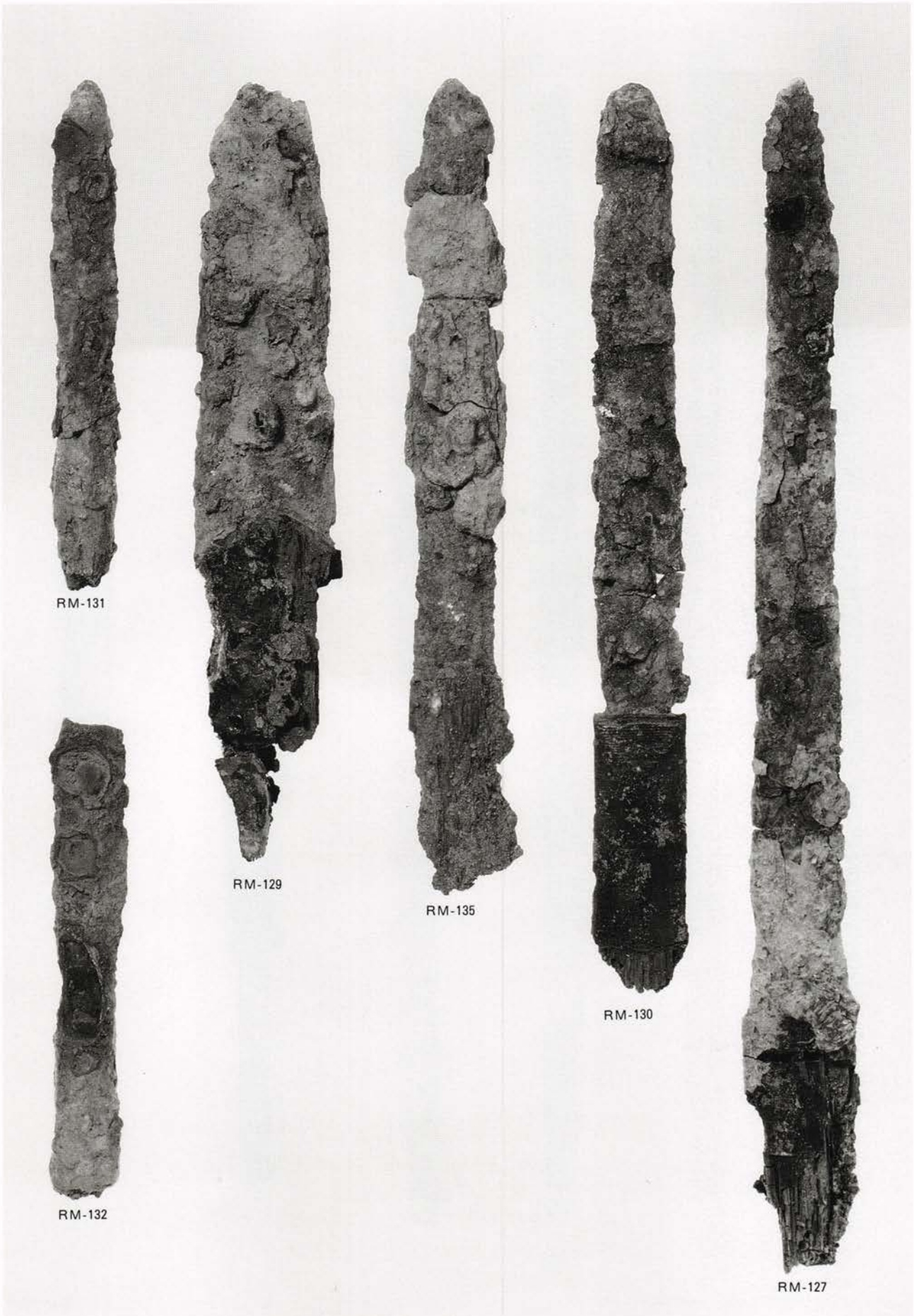
(1)瓦谷1号墳出土遺物(12)
第2主体 銅鍔拡大写真
(正面、茎部の状況)



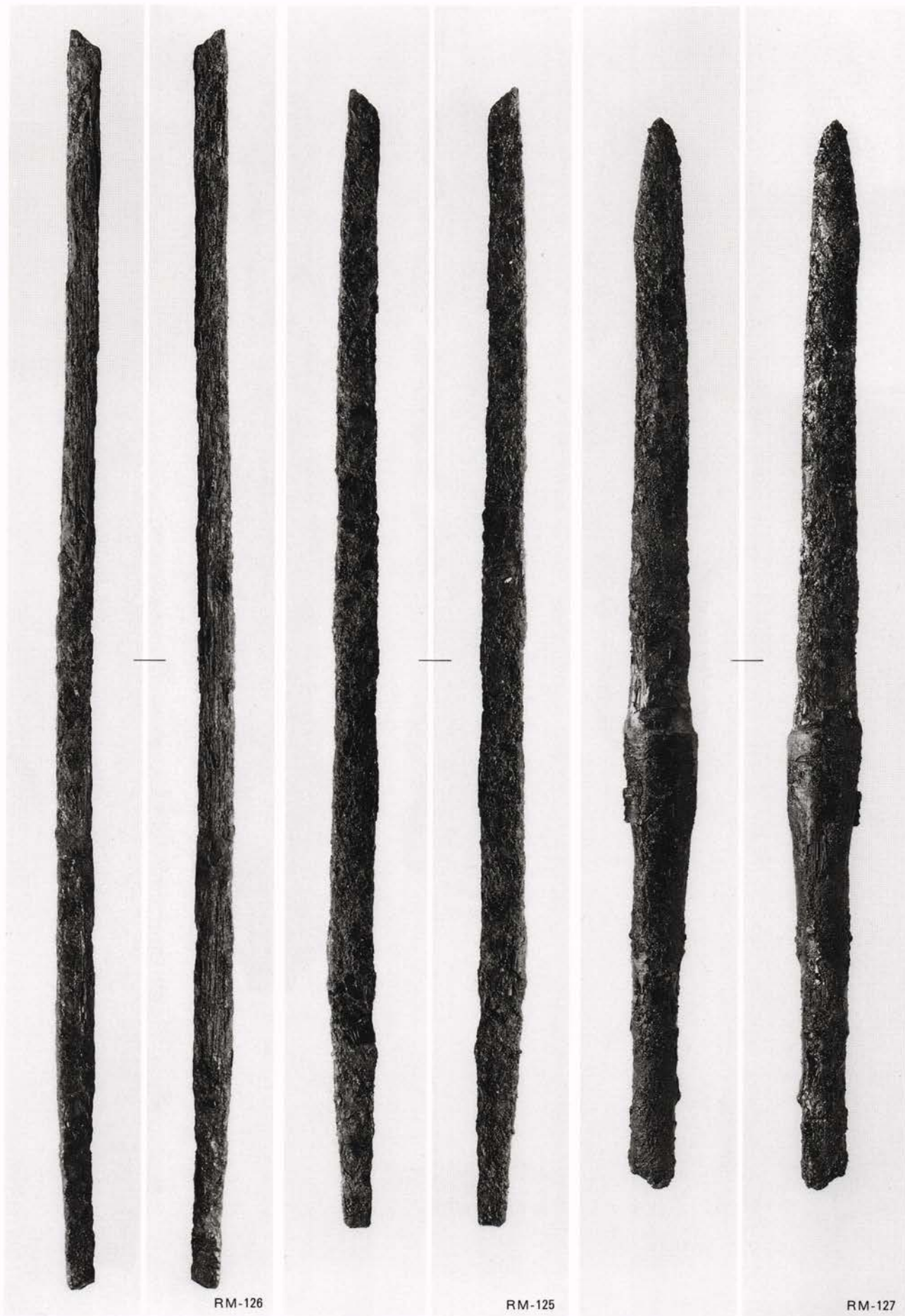
(2)瓦谷1号墳出土遺物(13)
第2主体 銅鍔拡大写真
(正面、鍔身基部と茎部の境の状況)



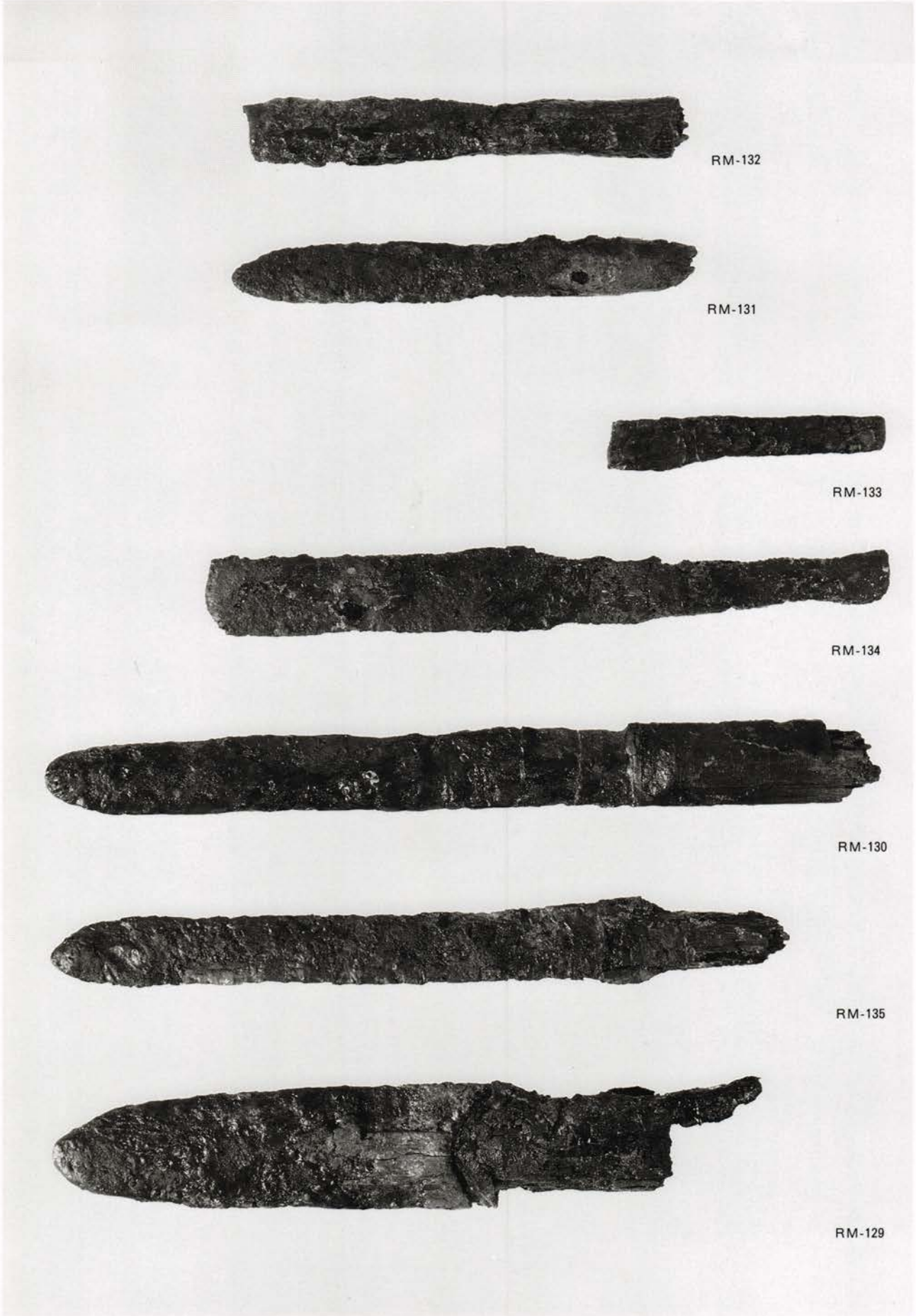
(3)瓦谷1号墳出土遺物(14)
第2主体 銅鍔拡大写真
(側面、茎部の状況)



瓦谷1号墳出土遺物(15) 第2主体 鉄矛・鉄劍・鉄槍(処理前)



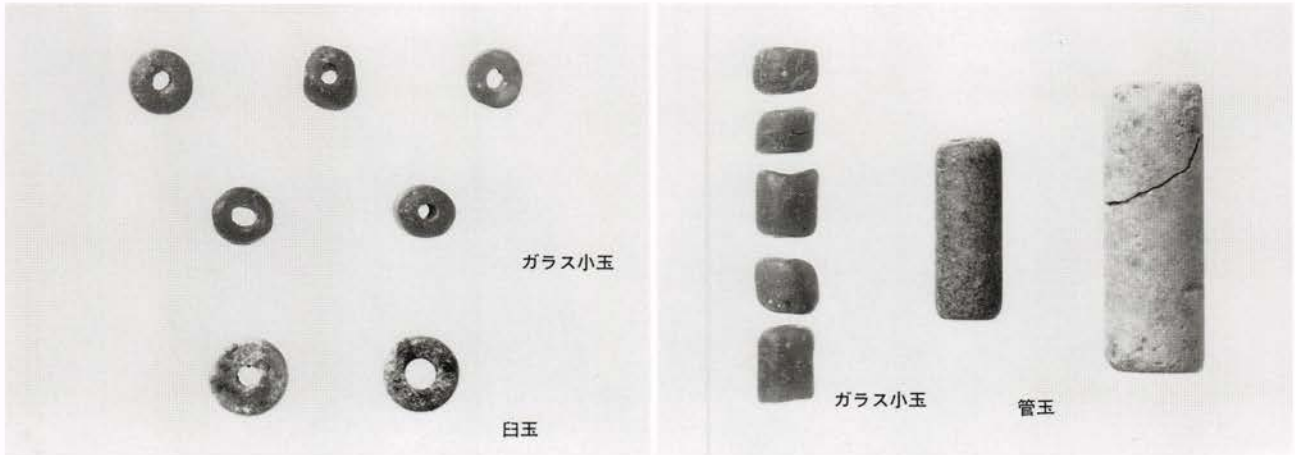
瓦谷1号墳出土遺物(16) 第2主体 鉄刀・鉄槍(処理後)



瓦谷1号墳出土遺物(17) 第2主体 鉄刀・鉄劍・鉄矛・鉄槍(処理後)



瓦谷1号墳出土遺物(18) 第2主体 革製漆塗り靱



瓦谷1号墳出土遺物(19) 玉類・竖櫛・有機質地漆塗り短甲・有機質地漆塗り草摺



101

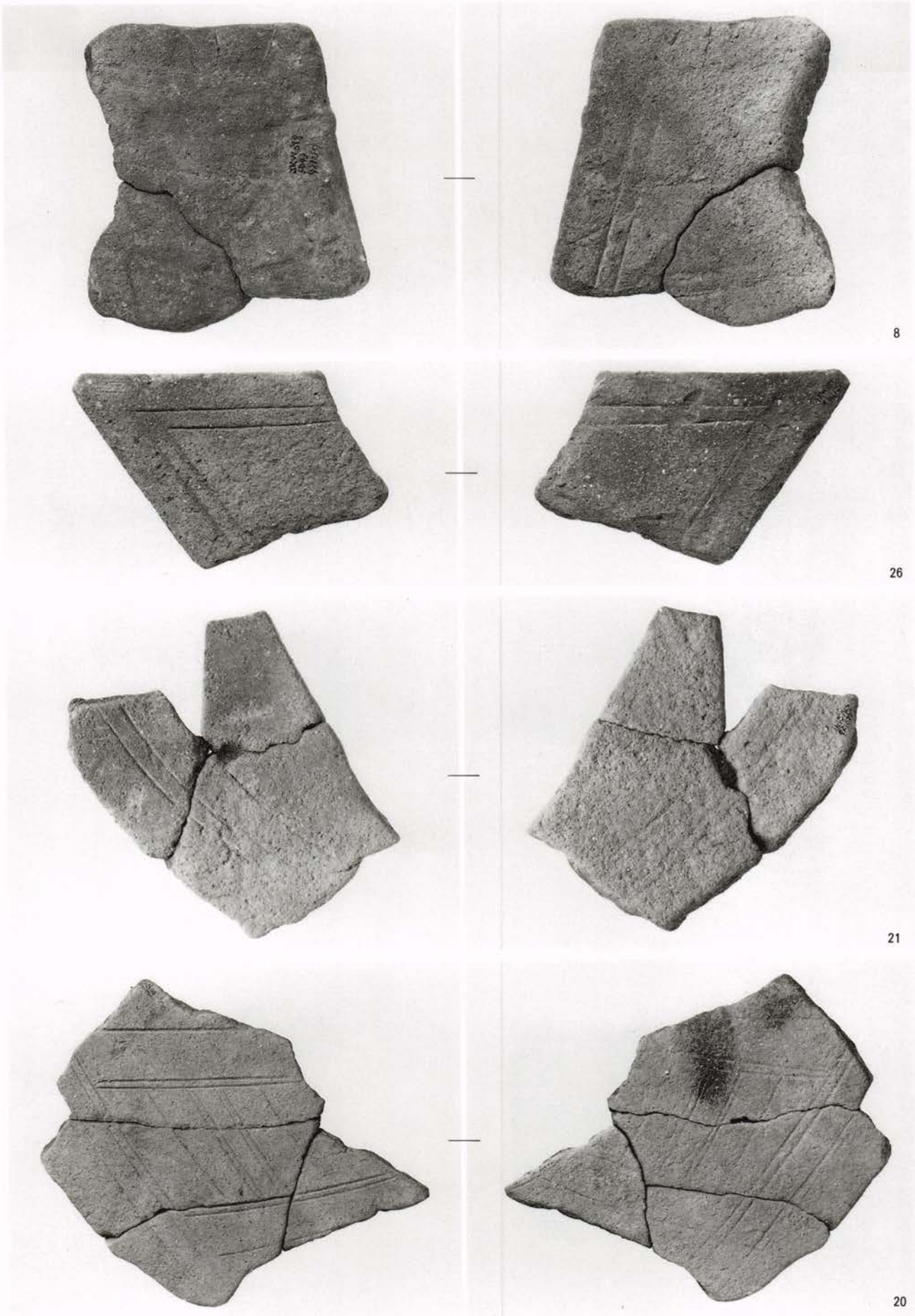


笠部・基部接合状況

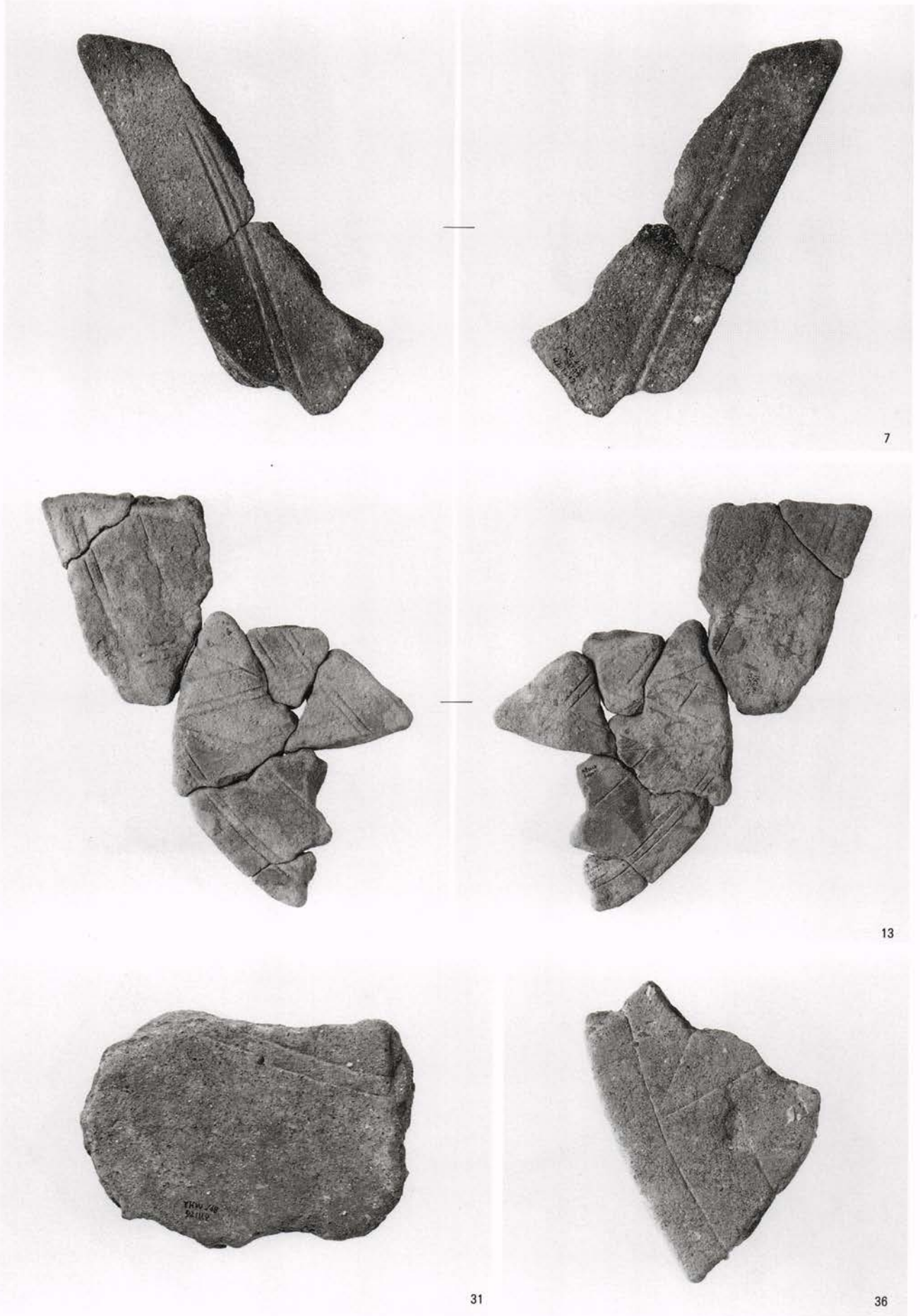


笠部・基部接合状況

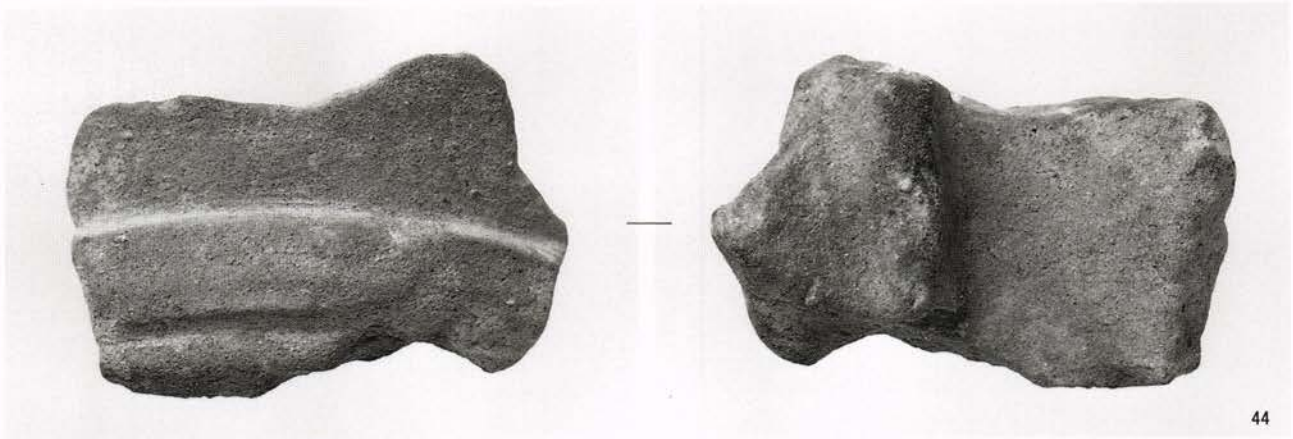
古墳・埴輪棺出土遺物 埴輪(1) 蓋形埴輪



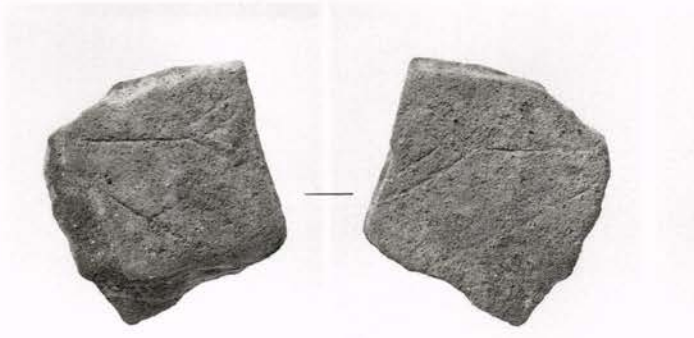
古墳・埴輪棺出土遺物 埴輪(2) 蓋形埴輪



古墳・埴輪棺出土遺物 埴輪(3) 蓋形埴輪



44



39



41



52



55

古墳・埴輪棺出土遺物 埴輪(4) 蓋形埴輪・特殊鱗付埴輪



56



63



59



62



61



57



58



80~82

71



80~82

67

68

69



70



89



86



87

古墳・埴輪棺出土遺物 埴輪(6) 家形埴輪・楕円筒埴輪・壺形埴輪



92



93



96



97

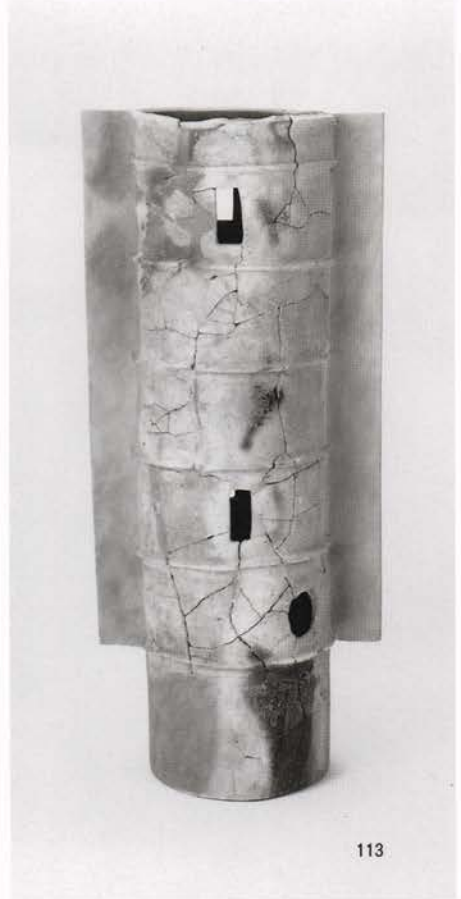
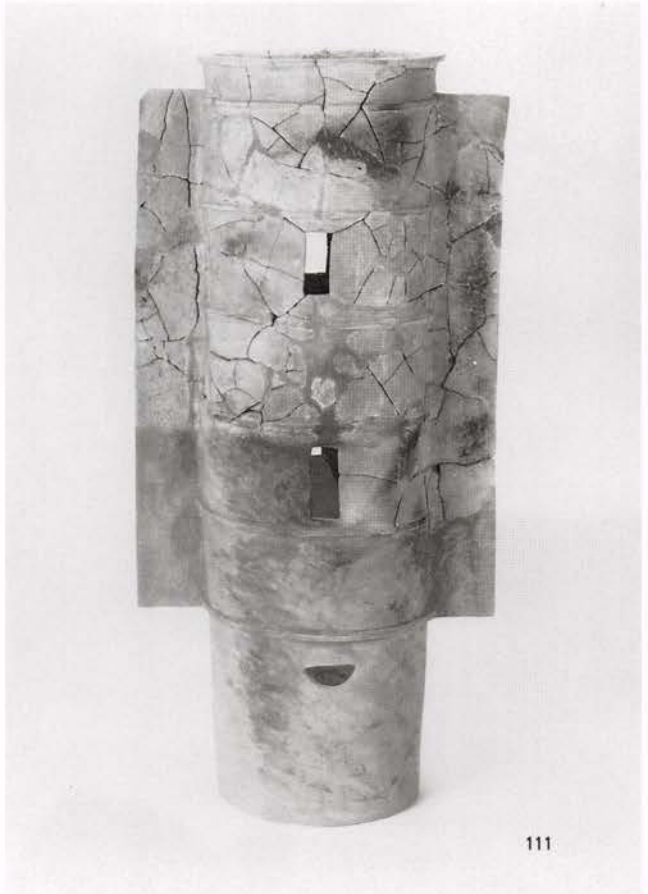


98

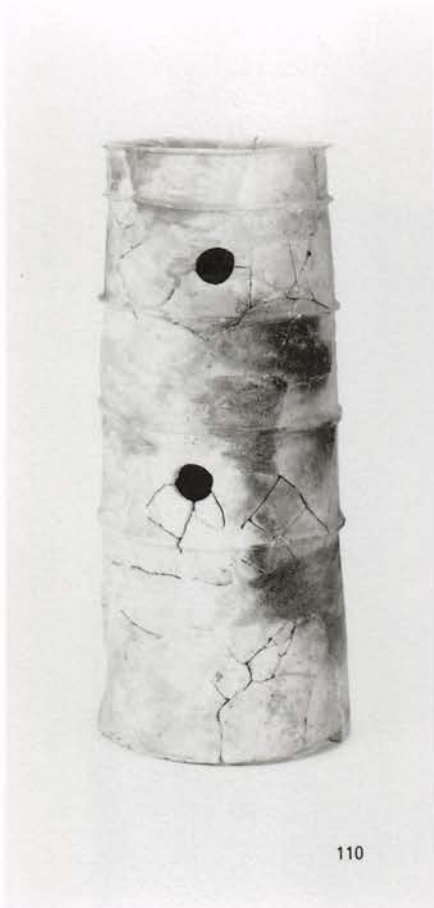
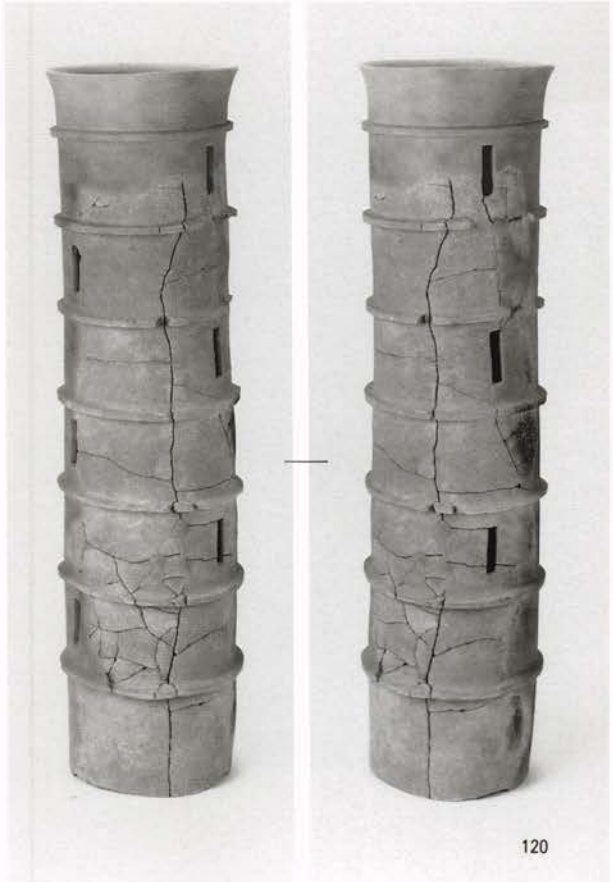
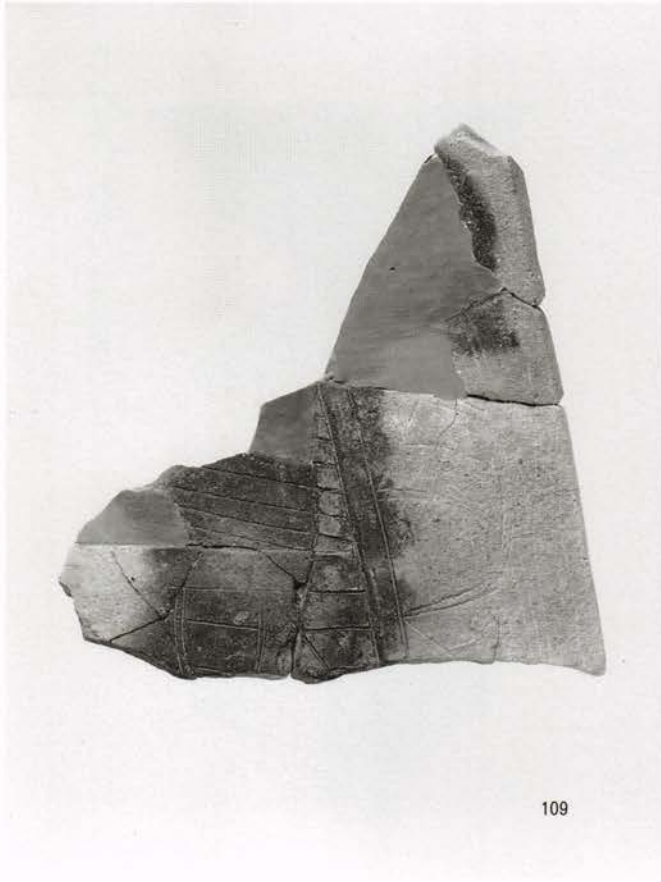
古墳・埴輪棺出土遺物 埴輪(7) 円筒埴輪



古墳・埴輪棺出土遺物 埴輪(8) 盾形・円筒埴輪・特殊二重口縁壺



古墳・埴輪棺出土遺物 埴輪(9) 朝顔形・円筒埴輪



古墳・埴輪棺出土遺物 埴輪(10) 盾形・円筒埴輪



古墳・埴輪棺出土遺物 埴輪(11) 朝顔形・円筒埴輪



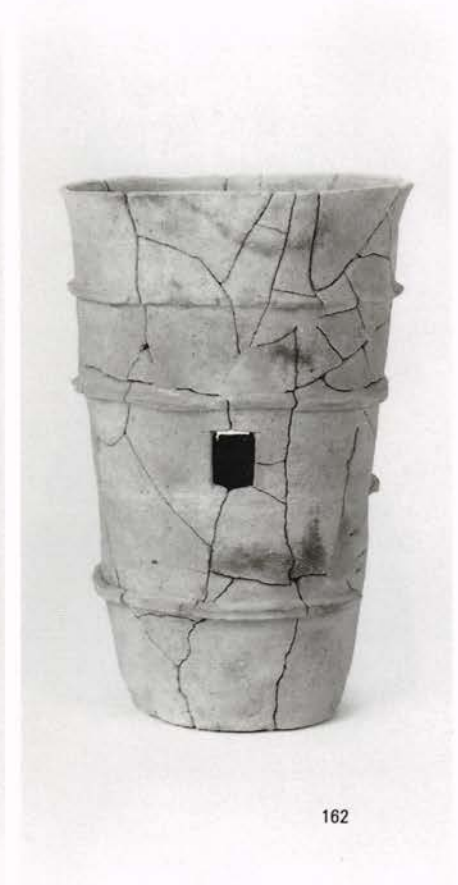
127・128



159

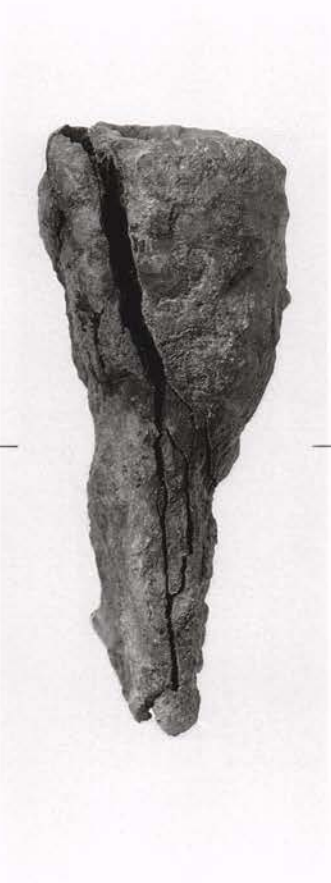
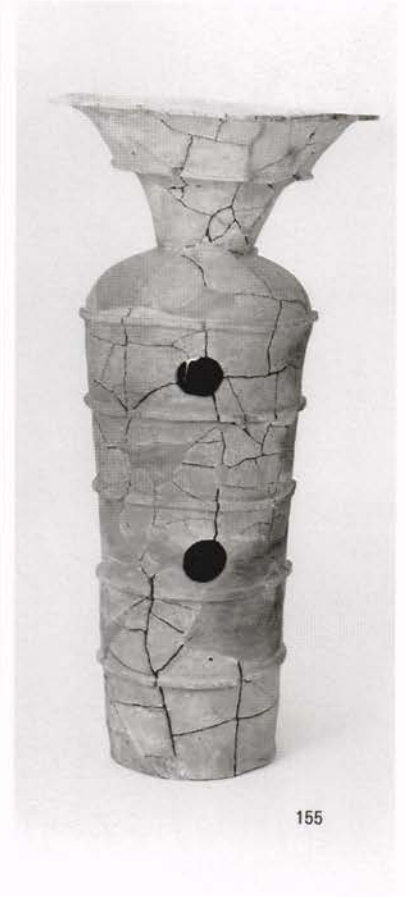


160



162

古墳・埴輪棺出土遺物 埴輪(12) 盾形・円筒埴輪



古墳・埴輪棺出土遺物 埴輪(13) 朝顔形・円筒埴輪、鉄斧

普通円筒埴輪 (125)
口縁付近ヘラ記号

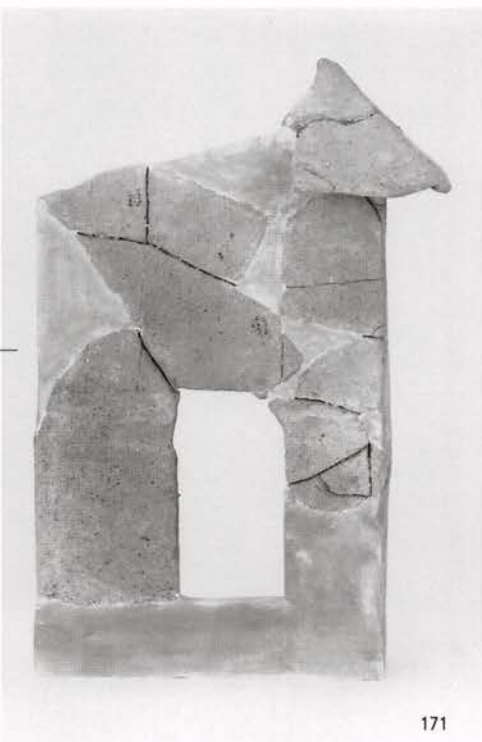


普通円筒埴輪 (153)
口縁付近ヘラ記号

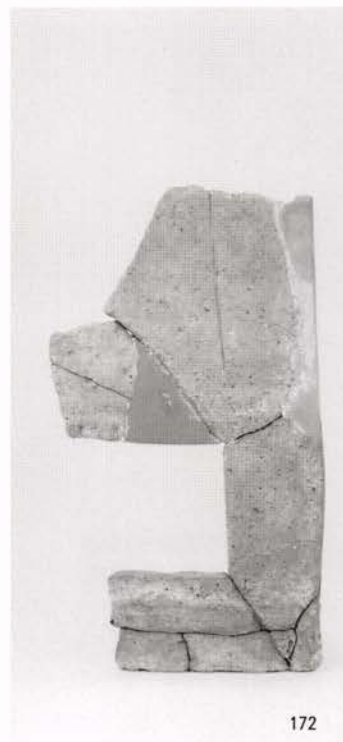


普通円筒埴輪 (154)
口縁付近ヘラ記号

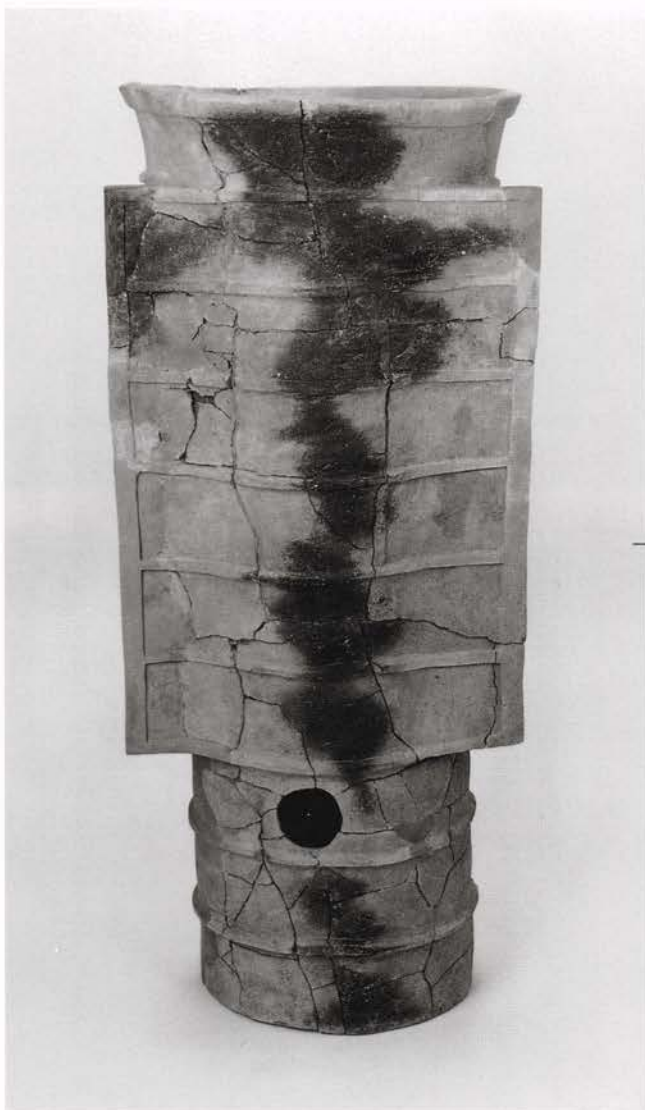




171

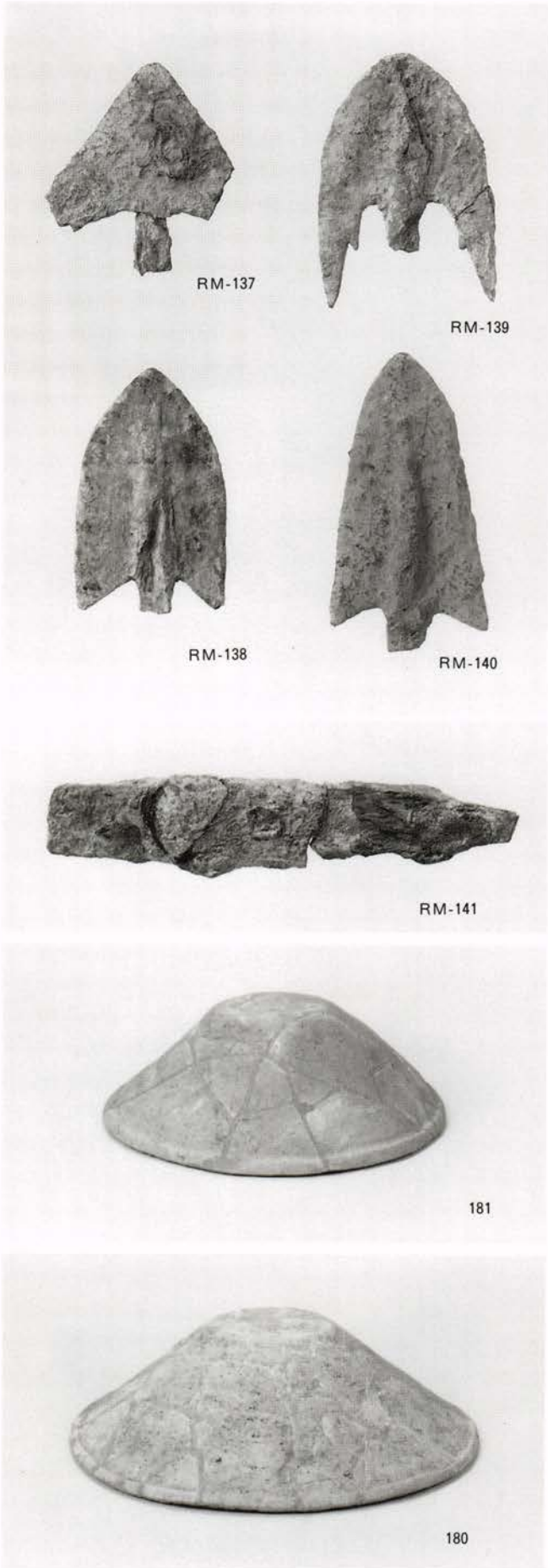


172



165

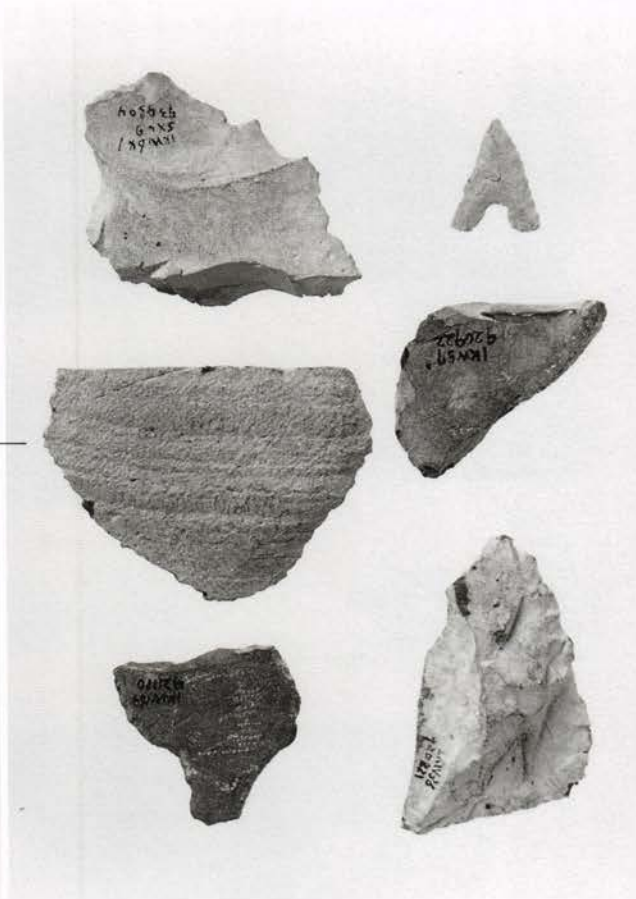
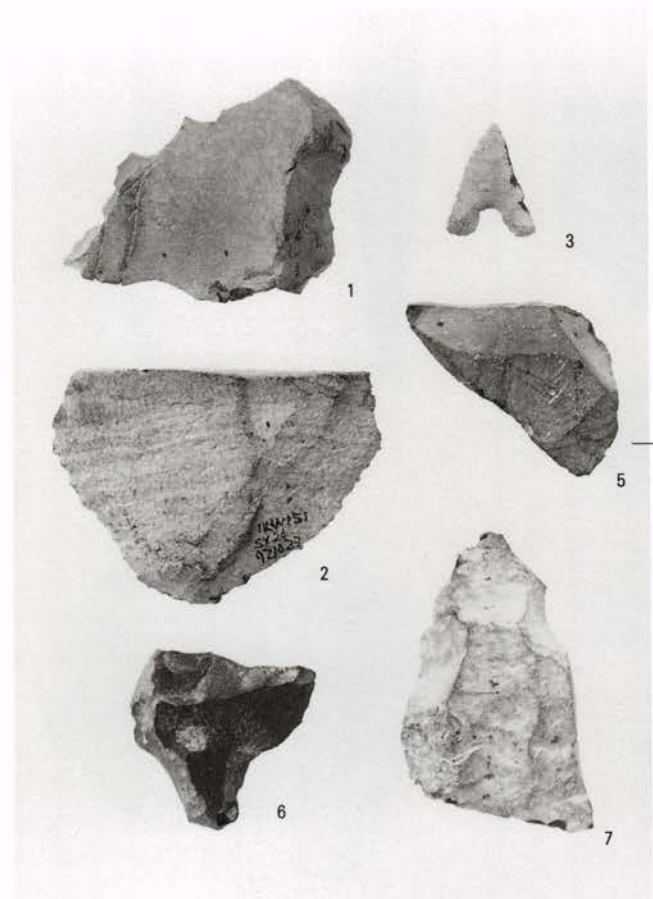
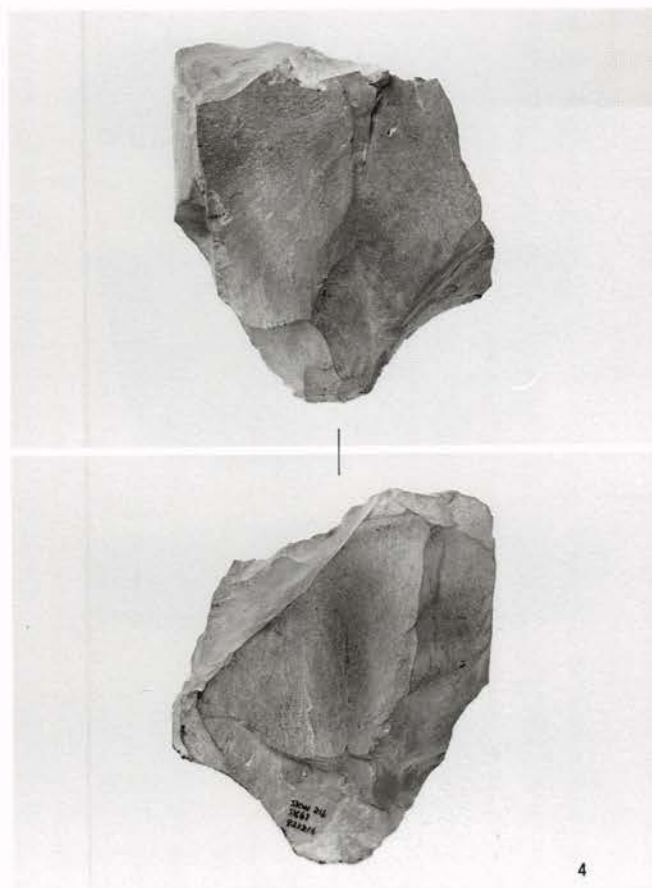
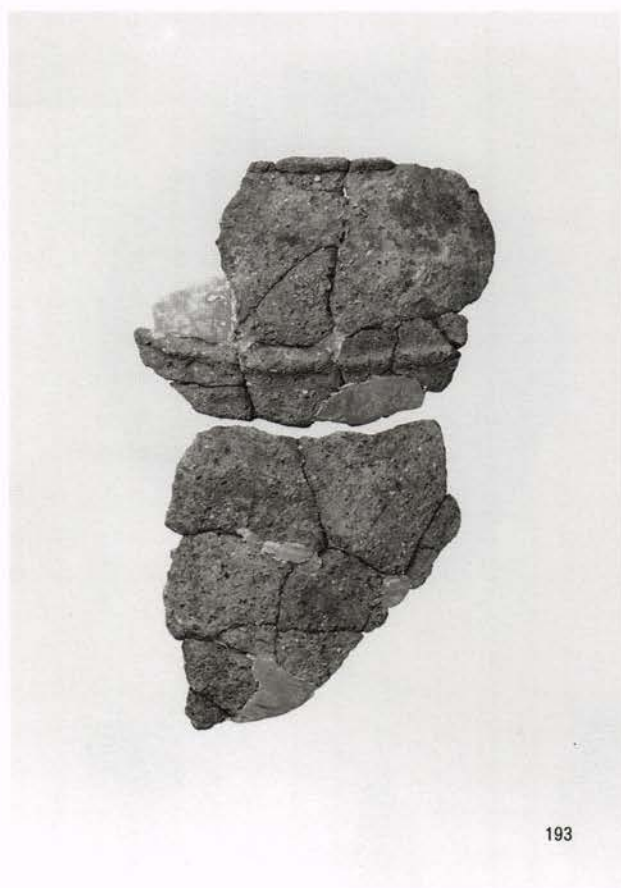
古墳・埴輪棺出土遺物 埴輪(15) 家形・盾形埴輪



古墳・埴輪棺出土遺物 埴輪(16) 円筒・鉢形状の特製埴輪、鉄鏃・刀子



古墳・埴輪棺出土遺物 土器

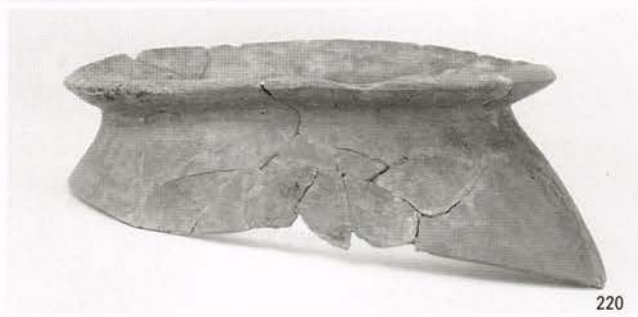
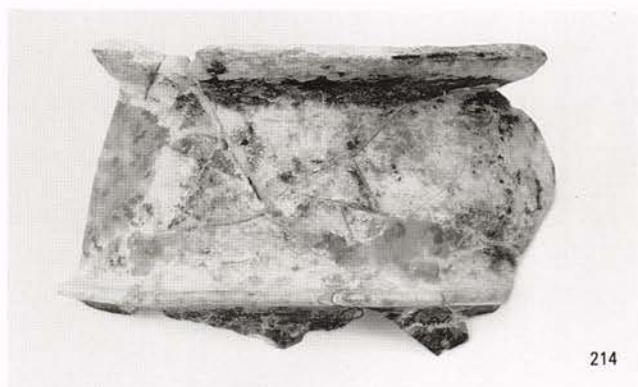


縄文時代出土遺物 土器・石製品

(石製品の番号は図版第57と同じ)



奈良時代・中世出土遺物 土器・鉄釘・鉄滓



中世・包含層出土遺物 土器・砥石

(砥石の番号は図版第57と同じ)

報告書抄録

ふりがな	かわらだにこふんぐん							
書名	瓦谷古墳群							
副書名								
巻次								
シリーズ名	京都府遺跡調査報告書							
シリーズ番号	第23冊							
編著者名	石井清司・伊賀高弘・森島康雄・有井広幸・筒井崇史							
編集機関	(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター							
所在地	〒617 京都府向日市寺戸町南垣内40-3			Phone	075(933)3877			
発行年月日	西暦 1997 年 3 月 26 日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
かわらだに こふんぐん	そうらくぐんきづ ちょうおおざい ちさかこあざかわ らだに							
瓦谷古墳群	相楽郡木津町大字 市坂小字瓦谷	362	8・65	35° 42' 55"	135° 49' 15"	19860602 ～ 19930305	10,000	関西文化学 術研究都市 整備事業
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
瓦谷古墳群	古墳	縄文 古墳		土器棺墓 前方後円墳、方墳、円墳、木 棺墓、埴輪棺、土器棺墓、土 壙墓		縄文土器、石器 土師器、銅鏡、銅鏃 鉄鏃、鉄槍、鉄矛、 鉄刀、甲冑、鉄製工 具、鉄製漁具、鏃形 石製品、ガラス小玉 管玉、白玉、革製漆 塗り鞍、有機質地漆 塗り短甲・草摺、埴 輪、堅櫛		前方後円墳 1基、方墳 8基、円墳 1基、埴輪 棺26基、土 器棺2基、 木棺墓、土 壙墓8基か らなる古墳 群の全貌が 明らかとな る。
	集落			竪穴住居		土師器、須恵器、鉄 釘 土師器、瓦質土器 砥石		
	集落	奈良 室町		掘立柱建物、土壙墓、焼土坑 ピット群 溝、土坑				

京都府遺跡調査報告書 第23冊

平成9年3月26日

発行 (財)京都府埋蔵文化財調査研究
センター

〒617 向日市寺戸町南垣内40番の3
Phone (075)933-3877 (代)

印刷 三星商事印刷株式会社

〒604 京都市中京区新町通竹屋町下ル
Phone (075)256-0961 (代)